

Radia を使用する HP OpenView Application Manager

Radia Application Manager ガイド

バージョン: 4.0i

Windows オペレーティング システム用



製造パート番号: T3420-90023

2005 年 7 月

© Copyright 2004 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

ご注意

1. 本書に記載した内容は、予告なしに変更することがあります。
2. 当社は、本書に関して特定目的の市場性と適合性に対する保証を含む一切の保証をいたしかねます。
3. 当社は、本書の記載事項の誤り、またはマテリアルの提供、性能、使用により発生した直接損害、間接損害、特別損害、付随的損害または結果損害については責任を負いかねますのでご了承ください。
4. 本製品パッケージとして提供した本書、**CD-ROM** などの媒体は本製品用だけにお使いください。プログラムをコピーする場合はバックアップ用だけにしてください。プログラムをそのままの形で、あるいは変更を加えて第三者に販売することは固く禁じられています。

本書には著作権によって保護される内容が含まれています。本書の内容の一部または全部を著作者の許諾なしに複製、改変、および翻訳することは、著作権法下での許可事項を除き、禁止されています。

権利の制限

合衆国政府が使用、複製、または開示を行う場合、国防総省については **DFARS 252.227-7013** の "Rights in Technical Data and Computer Software" の (c) (1) (ii) に記載されている制限が適用されます。

Hewlett-Packard Company
United States of America

その他の機関については **FAR 52.227-19** の (c) (1) および (c) (2) に記載されている制限が適用されます。

著作権

© Copyright 2004 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Linux は、Linus Torvalds の登録商標です。

OpenLDAP は、OpenLDAP Foundation の登録商標です。

謝辞

PREBOOT EXECUTION ENVIRONMENT (PXE) SERVER
Copyright © 1996-1999 Intel Corporation.

TFTP SERVER
Copyright © 1983, 1993
The Regents of the University of California.

OpenLDAP

Copyright ©1999-2001 The OpenLDAP Foundation, Redwood City, California, USA.
Portions Copyright © 1992-1996 Regents of the University of Michigan.

OpenSSL License

Copyright © 1998-2001 The OpenSSLProject.

Original SSLeay License

Copyright © 1995-1998 Eric Young (eay@cryptsoft.com)

DHTML Calendar

Copyright © Mihai Bazon, 2002, 2003

テクニカル サポート

<http://www.hp.com/managementsoftware/services> のサイトをご覧ください。

ここでは、HP OpenView の製品、サービス、サポートに関するお問い合わせ情報が掲載されています。

サポート専用サイトから、次の内容が参照できます。

- ドキュメントのダウンロード
- 不具合修正情報
- パッチと更新情報
- 不具合のレポートイング
- トレーニングの情報
- サポート プログラムの情報

このマニュアルについて

対象読者

このマニュアルは、**Radia Application Manager for Windows** をインストールおよび使用する **Radia システム管理者**を対象にしています。

このマニュアルの内容

このマニュアルでは、**Radia Application Manager 4.0** について解説します。以下のトピックについて詳しく説明します。

- **Radia Client** および **Radia Administrator Workstation** をインストールする方法。
- アプリケーションをパブリッシュする方法。
- **Radia クライアント オペレーション プロファイル**を使用する方法。
- エンタイトルメント ポリシーを実装する方法。
- サービスを準備する方法。
- アプリケーションを配布する方法。
- **Radia Client** オブジェクトとは何か。

注意

Radia Application Manager 4.0 の新機能を使用するには、**Radia データベース 4.0** 以降が必要です。

新しい機能の要約

この版の『Radia Application Manager 4.0 ガイド』では、以下の章で以下の新機能について説明しています。

第 2 章:

Radia Client をインストールする

- 4.0** 38 ページの「*INSTALL.INI* の [PROPERTIES] セクション」: *install.ini* ファイルのプロパティ セクションに *NVDSTARTWMICFGMGR*、*NVDRAMSHORTCUT*、*NVDRAMSTARTMENUSHORTCUT*、*NVDRAMCONNECT*、*NVDMaintDir*、*NVDNOTIFYINTERACT*、*NVDREDIRECTORINTERACT*、*NVDSCHEDULERINTERACT* が追加されました。
- 4.0** 49 ページの「インストールする *Radia Client* の機能を指定する」: *Radia Client* のインストールに、*Radia Patch Manager* クライアントおよび *Radia OS Manager* クライアントが追加されました。ライセンスを保有しているクライアントのみをインストールしてください。

第 4 章:

アプリケーションとコンテンツをパッケージ化する

- 4.0** 114 ページ: *Radia Publisher for Radia 3.x* の名称が *Radia Packager for Radia 4.x* に変更されました。

第 6 章:

クライアント オペレーション プロファイルを設定する

- 4.0** 251 ページの「クライアント オペレーション プロファイルを設定する」は、*Radia Application Manager* クライアントのバージョン 4.0 の新機能です。クライアント オペレーション プロファイルを使用すると、*Radia Configuration Server* および *Radia Proxy Server* において冗長性とフェールオーバー機能を実現し、ハードウェア スキャン、診断設定、およびユーザー インターフェイス オプションを制御することができます。

第 7 章: サービスを準備する

- 4.0** 299 ページの「*Radia Software Manager* の拡張マシン/ユーザー サービス」: *Radia 4.0* では、マシン/ユーザー サービスが強化されました。

第 8 章: サービスを配布する

- 4.0** 348 ページの「表 8.3 ~ *Radskman* マシン/ユーザー パラメータ」: *radskman* にパラメータが追加されました。アプリケーションのフィルタリングに使用する *catexp*、シン クライアント用の *machfreq*、および *Radia* セルフ メンテナンス の適用タイミングの制御に使用する *mnt* の 3 つです。
- 4.0** 351 ページの「表 8.4 ~ *Radskman* クライアント オペレーション プロファイル パラメータ」: *radskman* に、クライアント オペレーション プロファイルで使用するパラメータが追加されました。 *cop*、*datauri*、*product*、および *rcsuri* の 4 つです。
- 4.0** 353 ページの「表 8.5 ~ *Radskman* プロセス パラメータ」: *upd* パラメータが追加されました。クライアント接続セッションにおいてアプリケーションが更新されないようにするために使用します。
- 4.0** 362 ページの「表 8.6 ~ *Scheduling (TIMER)* の属性」: *TIMER* クラスに、*NETAVAIL*、*RETRYRC*、*RETRYFLG*、*RETRYINT*、*RETRYLMT* の各属性が追加されました。タイマー イベントが失敗したときの再試行に使用します。
- 4.0** 367 ページの「表 8.7 ~ *ZSCHDEF* 属性の構文」: *Scheduler (TIMER)* クラスの *ZSCHDEF* 属性に、*MONTHLY*、*MONTHDAY*、および *STARTUP* の各値が追加されました。
- 4.0** 408 ページの「*Radia* セルフ メンテナンス: エクスポート デッキ形式で提供されるようになりました」: *Radia 4.0* クライアントは、*PRDMAINT* ドメインを使用します。
- 4.0** 420 ページの「*Radia MSI* リダイレクタのローカル *AIP* のサポート」: ローカル ファイル システム レベルで、別のレベルのリダイレクトが追加できます。このメソッドを使用する場合は、*AIP* がローカルであることを *MSI* に伝え、ファイル システムから直接ファイルを要求します。

第 9 章: Radia Client のディレクトリとオブジェクト

- 4.0** 439 ページの「*radskman Execution (PREFACE)*」: このマニュアルで、**ZCONFIG**、**SAPSTATS**、**SYNOPSIS**、および **PREFACE** の各クライアント オブジェクトについて説明しています。*radskman Execution (PREFACE)* はバージョン **3.1** で導入されました。**SAPSTATS** および **SYNOPSIS** は、クライアント オペレーション プロファイルで使われます。

付録 B: Radia のシン クライアント サポート

- 4.0** 453 ページの「付録 B: *Radia* のシン クライアント サポート」: シン クライアント コンピュータがサポートされるようになりました。

表記について

このマニュアルは、以下の表記に従って記述されています。

表 P.1 ~ スタイル

構成要素	スタイル	例
参照先	斜体	このマニュアルの「 <i>Publishing Applications and Content</i> 」の章を参照してください。
ダイアログ ボックス、ウィンドウ	太字	[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログボックスが表示されます。
コード	Andale Mono	radia_am.exe
選択する対象	太字	インストール CD-ROM の ¥Admin ディレクトリを開きます。

表 P.2 ~ 用法

構成要素	スタイル	例
ドライブ (システムドライブ、マップされたドライブ、CDドライブ)	斜体のプレースホルダ	<i>SystemDrive:¥Program Files¥Novadigm</i> は、使用しているコンピュータのシステム ドライブが C: であれば C:¥Program Files¥Novadigm を意味します。 <i>CDDrive:¥client¥radia_am.exe</i> は、使用しているコンピュータの CD ドライブが D: であれば D:¥client¥radia_am.exe を意味します。
ファイル (Radia データベース内)	すべて大文字	PRIMARY
ドメイン (Radia データベース内)	すべて大文字	PRIMARY.SOFTWARE PRIMARY ファイル内の SOFTWARE ドメイン、と表現する場合があります。
クラス (Radia データベース内)	すべて大文字	PRIMARY.SOFTWARE.ZSERVICE PRIMARY ファイル内の SOFTWARE ドメインの ZSERVICE クラス、と表現する場合があります。

次の表に、このマニュアル全体を通して同じ意味で使用される用語を示します。

表 P.3 ~ 用語 *

* 文脈によっては、同義にならない場合もあります。

用語	別の呼称
アプリケーション	ソフトウェア、サービス
クライアント	Radia Application Manager、Radia Software Manager
コンピュータ	ワークステーション、サーバー
NOVADIGM ドメイン	PRDMAINT ドメイン 注意: データベースのリリース 4.0 からは、NOVADIGM ドメインから PRDMAINT ドメインに名称変更されています。以前のバージョンを使用している場合は、データベースに NOVADIGM ドメインが存在します。
Radia Configuration Server	マネージャ、アクティブ コンポーネント サーバー
Radia データベース	Radia Configuration Server データベース

目次

まえがき	5
このマニュアルについて	5
対象読者	5
このマニュアルの内容	5
新しい機能の要約	6
表記について	9
1 はじめに	19
Radia テクノロジーについて	20
配布モデル.....	21
Radia データベース	23
Radia インフラストラクチャ	25
Radia Configuration Server	25
Radia Management Portal.....	26
Radia Proxy Server	26
Radia Administrator Workstation	26
管理アプリケーション	27
このマニュアルについて	28
まとめ	29
2 Radia Client をインストールする	31
システム要件	32
インストール プロセスについて	33
INSTALL.INI を準備する	36
INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション	38
INSTALL.INI の [ARGS] セクション	42
INSTALL.INI の [OBJECTS] セクション	46

Radia 4.x クライアントをインストールする	48
コマンド ラインから Radia Client のインストールを開始する	48
インストールする Radia Client の機能を指定する	49
追加のコマンド ライン引数	50
ログオン スクリプトから Radia Client のインストールを開始する	51
Radia Client インストール ウィザードを使用する	52
Radia Client を削除する	64
インストール ウィザードを使用して Radia Client を削除する	64
コマンド ラインを使用して Radia Client を削除する	68
Radia Client を修復する	69
インストール ウィザードを使用して Radia Client を修復する	69
コマンド ラインを使用して Radia Client を修復する	73
Radia Client のインストールを変更する	73
インストール ウィザードを使用して Radia Client のインストールを変更する	73
コマンド ラインを使用して Radia Client のインストールを変更する	78
プレインストール スクリプトを使用する	79
ポストインストール スクリプトを使用する	80
まとめ	82
3 Radia Administrator Workstation をインストールする	83
システム要件	84
インストール ファイルについて	84
setup.exe	84
RADADMIN40.MSI	85
Radia Administrator Workstation をインストールする	85
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation をインストールする	85
コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation をインストールする	94
インストールする機能を指定する	94
追加のコマンド ライン引数	95
Radia Administrator Workstation を削除する	96
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を削除する	96
コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を削除する	100
Radia Administrator Workstation を修復する	101
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を修復する	101
コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を修復する	105

Radia Administrator Workstation のインストールを変更する.....	105
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを変更する	105
コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを変更する....	110
まとめ	111
4 アプリケーションとコンテンツをパッケージ化する	113
Radia を使用したパッケージ化およびパブリッシュについて	114
Radia Packager について	116
パッケージ化の際の考慮項目のチェックリスト.....	118
インストール モニタ モードを使用する	122
インストール モニタ モードを使用する際の推奨事項	122
インストール モニタ モードでパッケージ化する	124
手順 1: Radia Packager にログオンする	124
手順 2: [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウで必要な情報を指定する	125
手順 3: パッケージ プロパティを入力する	127
手順 4: 必須のシステム設定を設定する	130
手順 5: 日付と時刻の制約を設定する	132
手順 6: スキャン対象を特定する.....	134
手順 7: ファイル システム内のスキャン対象を特定する	136
手順 8: インストール前のスキャンを開始する	138
手順 9: ソフトウェアをインストールする	139
手順 10: インストール後のスキャンを開始する	141
手順 11: ファイル システムの変更内容を確認する	143
手順 12: ファイルのプロパティとロケーションを表示する	144
手順 13: ファイルのプロパティとロケーションを設定する	145
手順 14: 更新されたファイルを処理する	154
手順 15: デスクトップのプロパティとロケーションを設定する	157
手順 16: レジストリのプロパティと値を設定する	160
手順 17: パッケージを転送させる	163
コンポーネント選択モードを使用する.....	165
コンポーネント選択モードを使用する際の前提条件.....	166
コンポーネント選択モードでパッケージ化する	166
手順 1: Radia Packager にログオンする	167
手順 2: [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウで必要な情報を指定する	168
手順 3: パッケージ プロパティを入力する	170
手順 4: 必須のシステム設定を設定する	173
手順 5: 日付と時刻の制約を設定する	175

手順 6: パッケージ化するファイルを選択する	177
手順 7: ファイルのプロパティとロケーションを表示する	179
手順 8: ファイルのプロパティとロケーションを設定する	181
手順 9: デスクトップのプロパティとロケーションを設定する.....	191
手順 10: レジストリのプロパティと値を設定する	194
手順 11: パッケージを転送させる	197
Radia Publishing Adapter.....	199
サービスを作成する	199
新規アプリケーション ウィザードを使用してサービスを作成する	200
手順 1: Radia System Explorer にアクセスする.....	200
手順 2: パッケージ クラスを検索して指定する.....	201
手順 3: サービスを作成する.....	202
デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する	209
[クライアント管理] タブ	210
[検証オプション]	211
配信オプション.....	213
[データ オプション] タブ.....	214
[クライアントの動作] タブ.....	217
Radia サービス グループ.....	219
サービスの最適化	219
Windows のシステム ファイル保護	220
まとめ.....	221
5 エンタイトルメント ポリシーを実装する.....	223
ポリシー管理と Radia について	224
既存の外部ポリシー情報にアクセスする.....	225
ディレクトリ ベースのエンタイトルメント	228
Radia POLICY ドメインについて	228
POLICY ドメインに含まれるクラス	231
Radia でユーザーやグループを作成する.....	232
ユーザーをグループに割り当てる	236
グループにサービスを割り当てる.....	242
まとめ.....	250

6 クライアント オペレーション プロファイルを設定する.....	251
Radia クライアント オペレーション プロファイル	252
CLIENT ドメイン	253
推奨事項.....	254
クライアント オペレーション プロファイルの実装	254
サーバーのタイプおよびロールについて	255
手順 1: Radia サーバーの設定	256
手順 2: サーバー アクセス プロファイル (SAP) インスタンスの作成	257
URI (Universal Resource Identifier) の作成	261
手順 3: 各 SAP インスタンスの基準の設定.....	262
手順 4: 各 SAP の優先度の設定 (ロケーション別).....	263
手順 5: クライアント オペレーション プロファイルの有効化	267
Radia Configuration Server での有効化.....	267
クライアントでの有効化	268
CLIENT ドメインのその他のクラス.....	270
コア設定 (SETTINGS).....	270
Diagnostics (DIAGS)	276
ハードウェア スキャン オプション (RADHWCFG).....	277
ダイナミック スキャン	280
ユーザー インターフェイス プロパティを設定する (RADUICFG).....	282
クライアント オペレーション プロファイルの例	287
想定環境.....	287
まとめ	290
7 サービスを準備する	291
マシン コンテキストおよびユーザー コンテキストでアプリケーションを設定する	292
コンポーネントのコンテキストを設定する (ZCONTEXT).....	293
サービスのモードを設定する (ZSVCMODE).....	297
Radia Software Manager の拡張マシン/ユーザー サービス	299
マシン/ユーザー サービスを配布する	300
Radia サービス グループ.....	300
システム アカウントでサービスをインストールする (ZSYSACCT)	301
ローカルのカタログ処理.....	304
クライアント コンピュータを再起動する.....	305
リブートのタイプ	306
リポート修飾子: 警告メッセージのタイプ	307
リポート修飾子: マシン オプションとユーザー オプション	307

リポート修飾子: 即時の再起動.....	308
複数のリポート イベントを指定する	308
バージョン化されたアプリケーションを準備する.....	308
バージョン化されたアプリケーションとバージョン化されていないアプリ ケーション	309
バージョン グループ エディタ	311
バージョン グループを作成する	311
バージョン インスタンスを作成する	314
Version インスタンスをバージョン グループに割り当てる	317
バージョン グループの配布の準備をする	319
バージョン グループを編集する	324
Version Group (VGROUP) クラス	325
Versions (VERSION) クラス.....	328
Application (ZSERVICE) の属性	329
ZSERVICE の属性をレポートする.....	337
まとめ.....	339
8 サービスを配布する	341
配布方法について	342
配布をテストする	343
接続パラメータ (Radskman).....	344
コア	345
オペレーション	347
マシン/ユーザー	348
クライアント オペレーション プロファイル.....	351
プロセス	352
radskman の例:.....	353
配布方法	355
配布をスケジュールする	355
スケジュールによる配布戦略	357
タイマーを作成する	357
タイマーを設定する	366
タイマーをサービスに接続する	372
タイマーの配布をテストする	375
タイマーの動作を実験する.....	379
タイマー ログ	379
サブスクリバに通知する	380
通知を使用する際の要件.....	381
ZSERVICE インスタンスから通知を開始する.....	382

ドラッグ アンド ドロップ通知コマンドを作成する	392
通知を再試行する	395
通知の結果を参照する.....	397
Wake-On-LAN クライアントに対するドラッグ アンド ドロップ通知	402
DDN を使用してクライアントを割り当てる.....	402
Radia セルフ メンテナンス	408
使用上の注意	408
Radia システム トレイ	410
アプリケーション警告メッセージと延期	413
警告メッセージまたは延期インスタンスを作成する.....	415
警告メッセージまたは延期を設定する	416
Radia MSI リダイレクタのローカル AIP のサポート	420
インターネット プロキシの検出.....	422
Radia Proxy Server について	422
まとめ	423
9 Radia Client のディレクトリとオブジェクト.....	425
Radia Client のディレクトリ構造	427
Radia Software Manager のディレクトリ	428
Radia Client のオブジェクトについて	429
Radia Client のバージョン	431
Radia Client Explorer を使用してオブジェクトを表示する.....	431
ハードウェアの設定情報 (ZCONFIG)	433
クライアント オペレーション プロファイルの概要 (SYNOPSIS).....	436
サービス アクセス プロファイルのステータス (SAPSTATS).....	438
radskman Execution (PREFACE).....	439
PROFILE ファイル.....	441
Radia Inventory Manager を使用してレポートする	442
クライアント ログ	443
診断モジュール (radstate)	444
まとめ	445

A 命名規則	447
情報を分類する	448
POLICY ドメインの命名規則	450
SOFTWARE ドメインの命名規則	451
B Radia のシン クライアント サポート	453
Radia シン クライアントについて	454
インストール	455
C Radia データベースにクラスおよび属性を追加する	457
ドメインにクラスを追加する	458
クラスに属性を追加する	461
リスト	479
図	479
表	486
手順	488
索引	491



はじめに

この章は以下を目的としています。

- Radia のコンポーネントについて理解する。
- Radia データベースの構造に理解する。
- 推奨される配布戦略を理解する。

注意

Radia Application Manager 4.0 の新機能を使用するには、Radia データベース バージョン 3.12 以降が必要です。

Radia テクノロジーについて

Radia テクノロジーは、高いレベルの適応性、柔軟性、および自動化を提供します。適応性は、プラットフォームに依存しないオブジェクト指向テクノロジーに組み込まれたインテリジェンスによって実現しています。柔軟性は、メディアに依存しない Radia テクノロジーによって提供されます。メディアに依存しないことで、コンテンツを容易に改訂したりカスタマイズしたりすることができます。また、Radia テクノロジーによるソリューションでは、ほぼすべてのネットワーク環境においてデジタル資産の管理が自動化できます。以下では、Radia テクノロジーの本質をなすこれらの特徴的な機能について説明します。

■ オブジェクト指向テクノロジーに組み込まれたインテリジェンス。

オブジェクト指向テクノロジーは、ファイル ベースのソフトウェアやコンテンツを、プラットフォームに依存しない自己認識型のインテリジェントなオブジェクトに変換します。これらのオブジェクトは、配布された環境を自動的に評価し、その環境に合わせて自分自身を個別化、インストール、更新、修復します。つまり、このインテリジェントなオブジェクトは、特定のデバイスやユーザーが何を必要としているか、それがどこで入手できるか、自分自身をいつ、どのように変化させ、どうやって修復するかを理解しているということです。

■ 改訂可能なコンテンツの改訂可能なパッケージ。

Radia テクノロジーを使用すると、パブリッシャからサブスクライバへの配布プロセスの間、どの時点でもソフトウェアやコンテンツを改訂したりカスタマイズしたりすることができます。Radia テクノロジーでは、ソフトウェアやコンテンツをオブジェクトに変換します。これらのオブジェクトは、他のオブジェクトや新しい設定情報と共にパッケージ化することで、配布プロセスの途中でも容易に修正(除去、追加、再設定)することができます。付加価値サービス プロバイダや IT 管理者は、この改訂可能なパッケージ機能を使用することで、特定のユーザーのニーズに合わせて標準のソフトウェアパッケージをカスタマイズすることができます。カスタマイズのたびに、すべてのコンテンツをパッケージ化し直す必要はありません。

■ 自己管理インフラストラクチャ。

Radia テクノロジーのオブジェクト指向インテリジェンスは、自己管理インフラストラクチャを実現します。Radia テクノロジーがあらゆる配布環境を柔軟にサポートするように、この自己管理インフラストラクチャも、クライアント/サーバー ネットワーク、LAN、WAN、仮想エリア ネットワーク (VAN)、イントラネット、エクストラネット、インターネットなど、あらゆるネットワークに対応しています。また、オーディエンスおよびプロバイダが認識可能なすべての配布メディアがサポートされています(プロバイダとしては、ソフトウェア パブリッシャ、アプリケーション サービス プロバイダ (ASP)、インターネット サービス プロバイダ (ISP)、エンタープライズ アプリケーション インテグレーション (EAI) サービスのプロバイダ、e ビジネス インテグレータ、e コマース コンポーネント プロバイダ、社内の IT 管理者などが考えられます)。

インターネット時代に入り、ビジネスの競争力を高める上でソフトウェアが不可欠なものとなった今、変化し続けることが当たり前になっています。ますます多様化する利用者を古いテクノロジーで管理することは難しくなってきました。Radia テクノロジーは、ソフトウェア管理の課題を解決するために必要な自動化、適応性、柔軟性を提供します。

配布モデル

Radia では、*配布モデル*に基づいてデジタル資産の配布を管理します。配布モデルは、Radia で設定を管理するデスクトップ コンピュータを特定するための情報と、そのコンピュータの目標とすべき設定を記録したものです。配布モデルを要求ステートと呼ぶこともあります。配布モデルは、用途に合わせて単純にも複雑にもすることができます。

Radia 配布モデルには、少なくとも以下の 5 つの要素が含まれます。

- **ユーザー**
管理するコンピュータを特定するための ID。コンピュータ名でもユーザー名でもかまいません。

注意

ここで言うコンピュータとは、ワークステーションまたはサーバーのことです。

- **アプリケーション**
管理するソフトウェア。
- **アプリケーション リソース**
アプリケーションを構成するコンポーネント。
- **配布元**
アプリケーション コンポーネントを格納するロケーション (Radia Proxy Server、Radia Configuration Server など)。アプリケーション コンポーネントは、このロケーションから配布されます。
- **配布先**
アプリケーションおよびそのファイルの配布先となるロケーション (デスクトップ コンピュータ、サーバー、PDA、ラップトップなど)。

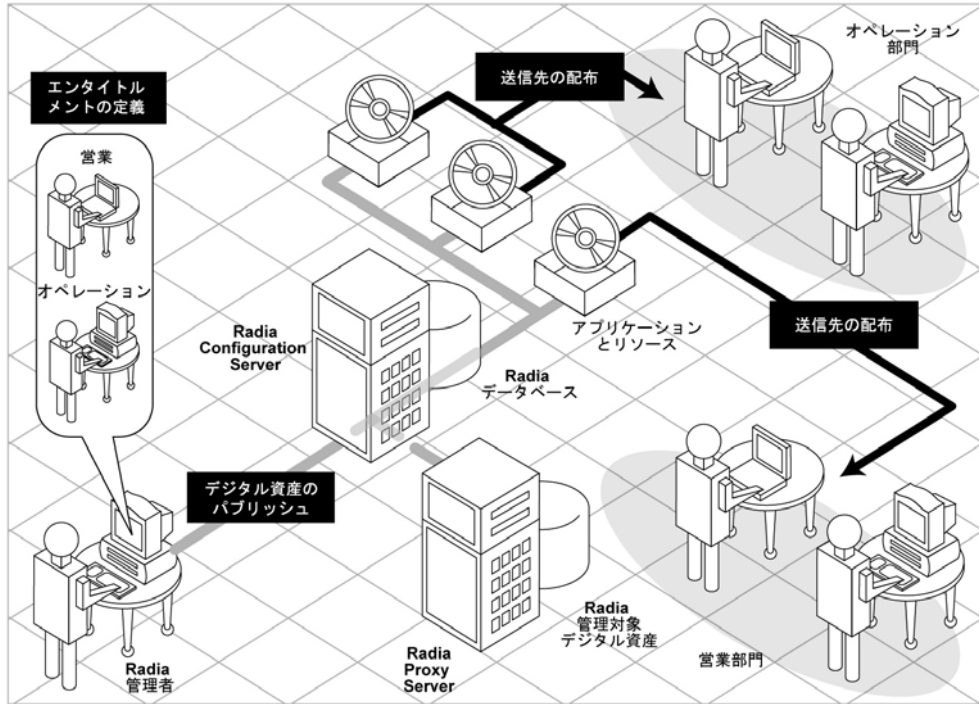


図 1.1 ~ 配布モデルの構成要素

これらすべてのコンポーネントを **Radia** で管理します。**Radia** 管理者は、デジタル資産のパッケージをパブリッシュし、エンタイトルメント ポリシーを決定して、パッケージを配布する方法を定義します。

注意

パッケージは、配布可能なソフトウェアやデータのユニットです。

Radia データベース

Radia Configuration Server 上にある Radia データベースには、配布モデルを作成するために必要なすべての情報が格納されます。これには、クライアント コンピュータのアプリケーションを管理するために Radia で使用する、以下のような情報が含まれています。

- Radia によって配布されるソフトウェアまたはデータ。
- 各サブスクリバをどのパッケージに割り当てるかを決定するポリシー。
- Radia 管理者のセキュリティおよびアクセス規則

Radia データベースの表示と操作には Radia System Explorer を使用します。Radia データベースは階層構造になっており、ファイル、ドメイン、クラス、インスタンス、および属性で構成されます。

表 1.1 ~ Radia データベースの構造

用語	説明
ファイル	Radia データベースの階層内で最上位のレベル。類似するドメインをグループ化します。 例: PRIMARY ファイルは、配布モデルの定義やメンテナンスに使用します。このファイルは、Radia にあらかじめ設定されているファイルの 1 つです。
ドメイン	Radia ファイルの論理パーティション。類似するクラスをグループ化します。 例: POLICY ドメインには、ユーザーおよびグループの作成に必要なクラスが含まれます。
クラス	配布モデルのカテゴリ。クラスは、クラスのインスタンスの作成に必要な属性のテンプレートです。Radia クラスの構造および使用方法については、『Radia Database Reference』を参照してください。 例: POLICY ドメインの USER クラスは、Radia 管理対象アプリケーションのサブスクリバを定義します。このクラスでは、Radia が管理するクライアント コンピュータを識別するために必要なすべての属性を定義します。
クラス インスタンスまたはインスタンス	クラスの特定のオカレンスを保持するオブジェクト。リレーショナル データベース テーブルの行、または従来のフラット ファイルのレコードに相当します。クラス インスタンス オブジェクトの属性は、そのクラスの特定のエンティティを記述するデータを保持します。 例: USER インスタンスは USER クラスから作成されたオブジェクトで、サブスクリバのクライアント コンピュータを識別するために必要な情報を保持します。
属性 属性値	属性は、クラスの詳細要素です。クラスには、そのクラスを構成する各属性の定義(名前、データ タイプ、説明、長さなど)が含まれます。クラスから生成された各クラス インスタンスは、クラス内で定義される各属性の値を保持します。 例: USER クラスの NAME 属性にはサブスクリバの名前、USER ID 属性にはユーザー ID が格納されます。これらは Radia 管理者が指定します。

Radia Configuration Server のインストール時に使用可能なファイルは、LICENSE と PRIMARY の 2 つのみです。Radia を使用すると、Radia データベースが変更される可能性があります。

- LICENSE ファイルは読み取り専用で、Radia Configuration Server 処理で使用します。このファイルは HP が使用するものですので、変更しないでください。
- PRIMARY ファイルには、ソフトウェア管理に関する大部分の情報が含まれます。PRIMARY ファイル内には、デフォルトで以下の 8 つのドメインがあります。
 - ADMIN ドメイン: クラスを接続するための規則および管理権限を定義します。
 - AUDIT ドメイン: クライアント コンピュータのアセットのインベントリを作成するタスクを設定します。詳細については、『Radia Inventory Manager Guide』を参照してください。
 - CLIENT ドメイン: クライアント オペレーション プロファイルを設定します。クライアント コンピュータが使用できる Radia Configuration Server、Radia Proxy Server、Radia Staging Server の定義が含まれます。詳細については、「クライアント オペレーション プロファイルを設定する」の章を参照してください。
 - PRDMAINT ドメイン: HP 提供のセルフメンテナンス用のパッケージを格納します。このドメインは、Radia Client メンテナンス パッケージの配布にのみ使用してください。詳細については、このマニュアルの「サービスを配布する」にある「Radia セルフ メンテナンス」を参照してください。

注意

この製品の以前のバージョンでは、メンテナンス機能は NOVADIGM ドメインに含まれていました。

- PATCH ドメイン: サービスの最適化に関連付けられたファイルのバイナリ パッチの情報を格納します。『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

注意

Radia Patch Manager では、セキュリティ パッチの管理に PATCHMGR という別のドメインを使用します。

- POLICY ドメイン: ユーザーとグループを作成し、ユーザーをグループに割り当てます。詳細については、このマニュアルの「エンタイトルメント ポリシーを実装する」の章を参照してください。
- SOFTWARE ドメイン: 管理対象のソフトウェアや、ソフトウェアの配布に使用するメソッドについての情報が含まれます。このマニュアルの「サービスを準備する」および「サービスを配布する」を参照してください。
- SYSTEM ドメイン: 管理制御およびプロセス制御の定義が含まれます。

- Radia の使用を開始すると、PROFILE ファイルが作成されます。このファイルには、クライアント コンピュータから収集される情報が含まれます。PROFILE ファイルは、最初のクライアント コンピュータが Radia Configuration Server に登録された後に作成されます。この情報は、Radia 管理対象ソフトウェアを配布するためにコンピュータに接続する際、およびクライアント コンピュータの設定を確認する際に使用します。PROFILE ファイルについては、このマニュアルの「*Radia Client* のディレクトリとオブジェクト」の章で説明します。
- NOTIFY ファイルには、サブスクリバの更新や削除、またはサブスクリバへのメール送信を、通知機能を使用して試行した際の情報が含まれます。このファイルは、最初に通知を試行した後に作成されます。通知の詳細については、このマニュアルの「サービスを配布する」の章を参照してください。

Radia インフラストラクチャ

Radia インフラストラクチャ コンポーネントを使用すると、その機能をフル活用してエンタープライズ コンピューティング環境を管理することができます。さまざまなコンポーネントを組み合わせることで、実際の設定に応じてインフラストラクチャを拡張することができます。Radia コンポーネントは、以下の 4 つのカテゴリに分類することができます。

- Radia 管理アプリケーション
- Radia 管理インフラストラクチャ
- Radia 拡張インフラストラクチャ
- Radia 管理拡張

以下では、基本的な Radia インフラストラクチャ コンポーネントについて説明します。すべての Radia 製品の詳細については、HP OpenView Web サイトの『Radia Getting Started Guide』を参照してください。

Radia Configuration Server

Radia Configuration Server は Radia 管理インフラストラクチャの一部です。サーバーのネットワーク内で 1 つのサーバーにのみ常駐させます。アプリケーション、およびサブスクリバやクライアントコンピュータについての情報は、Radia データベースに格納されます。Radia Configuration Server は、Radia 管理者が設定したポリシーに基づいてパッケージを配布します。詳細については、『Radia Configuration Server Guide』（『Manager Guide』）を参照してください。

Radia Management Portal

Radia Management Portal は、インフラストラクチャの管理に使用する Web ベースのインターフェイスです。Radia Management Portal は、Radia 拡張インフラストラクチャの一部です。Radia を初めてお使いになる場合でも、このポータルを使用してインフラストラクチャをグラフィカルに表現した図を作成することができます。詳細については、『Radia Management Portal ガイド』を参照してください。

Radia Proxy Server

Radia Configuration Server への負荷を軽減したい場合や、デジタル資産をクライアント デバイスにより近いロケーションに格納したい場合には、Radia Proxy Server の使用を検討してください。Radia Proxy Server は、Radia Proxy Server に割り当てられたサブスクリバが使用できるデジタル資産のコピーを格納します。Radia Proxy Server も、Radia 拡張インフラストラクチャの一部です。各サーバーの潜在的な利益と、アタッチされているサブスクリバの潜在的な利益を個別に評価します。詳細については、『Radia Proxy Server Guide』を参照してください。

注意

Radia Management Portal および Radia Proxy Server の詳細については、当社の担当にお問い合わせください。

Radia Administrator Workstation

Radia には、ソフトウェア管理機能を実行するためのさまざまなツールが用意されています。これらのツールに理解することをお勧めします。ツールは、Radia 管理インフラストラクチャの一部です。以下のツールが用意されています。

■ Radia Packager

Radia Packager を使用すると、パッケージ (コンポーネントのグループ) を作成したり、作成したパッケージを Radia Configuration Server に転送させたりすることができます。詳細については、このマニュアルの「アプリケーションとコンテンツをパッケージ化する」を参照してください。

■ Radia System Explorer

Radia System Explorer を使用すると、Radia データベースを表示したり操作したりすることができます。詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

■ Radia Client Explorer

Radia Client Explorer を使用すると、クライアント コンピュータ上の Radia オブジェクトを表示したり操作したりすることができます。

■ Radia Screen Painter

Radia Screen Painter を使用すると、カスタム ダイアログ ボックスを作成することができます。

■ Radia Publisher

Radia Publisher を使用すると、Windows インストーラ ファイルをパブリッシュすることができます。詳細については、『Radia Publisher ガイド』を参照してください。

管理アプリケーション

管理アプリケーション (クライアント) を使用すると、配布、更新、修復、削除が自動化でき、ハードウェアやソフトウェアが検査できます。Radia 管理アプリケーションは、サブスクリバのコンピュータにインストールします。

Radia Configuration Server との通信に使用できる管理アプリケーションは 3 タイプあります。このうち、ライセンスを保有しているクライアントのみをインストールしてください。クライアントソフトウェアは、管理アプリケーションの CD-ROM に収録されています。

■ Radia Application Manager

このクライアントを使用すると、企業全体に必須アプリケーションを配布することができます。このクライアントについては、このマニュアルで説明します。

■ Radia Software Manager

サブスクリバは、サービス リストで使用可能になっているオプション アプリケーションをインストール、削除、更新します。詳細については、『Radia Software Manager ガイド』を参照してください。

■ Radia Inventory Manager

このクライアントを使用すると、ハードウェア情報を収集し、収集およびレポート用に Radia Inventory Manager に送信することができます。詳細については、『Radia Inventory Manager Guide』を参照してください。

■ Radia Patch Manager

Radia Patch Manager を使用すると、セキュリティ パッチを分析、管理することができます。詳細については、『Radia Patch Manager Guide』を参照してください。

■ Radia OS Manager

Radia OS Manager を使用すると、オペレーティング システムの供給を制御することができます。詳細については、『Radia OS Manager Guide』を参照してください。

Radia Software Manager と Radia Application Manager の両方の機能セットをインストールする場合は、アプリケーションを必須にするかオプションにするかを決定し、アプリケーションのインストールをだれが制御するかを指定します。Radia Inventory Manager を追加すると、クライアントコンピュータのハードウェアとソフトウェアの設定を検索することができます。

このマニュアルについて

このマニュアルでは、**Radia Application Manager** の推奨される実装を解説します。方法は組織のニーズに合わせて調整することになりますが、**Radia Application Manager** を包括的に理解するためにこのマニュアルに目を通しておくことをお勧めします。各章の冒頭には、実装のどの段階にあるかを示す次のような図が記載されています。各章の図では、現在どの段階にあるかが網掛けで示されます。ソフトウェアを管理するには、その前に **Radia Client** と **Radia Administrator Workstation** をインストールする必要があります。

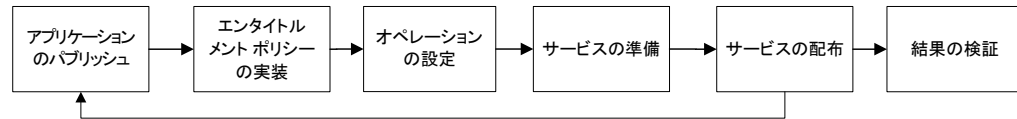


図 1.2 ~ このマニュアルで遂行するタスク

『**Radia Application Manager ガイド**』では、以下のトピックについて解説します。

- 「**Radia Client** をインストールする」
この章では、**Radia Client** をインストールする方法について説明します。
- 「**Radia Administrator Workstation** をインストールする」
この章では、**Radia Administrator Workstation** をインストールする方法について説明します。
- 「**Publishing Applications and Content**」
この章では、コンポーネント選択モードとインストール モニタ モードを使用してアプリケーションをパブリッシュする方法について説明します。
- 「**エンタイトルメント ポリシーを実装する**」
この章では、ユーザーやグループを定義する方法、およびこれらを適切なアプリケーションに接続する方法について説明します。
- 「**クライアント オペレーション プロファイルを設定する**」
この章では、最も適切な複数の **Radia Configuration Server** および **Radia Proxy Server** を使用してクライアントを設定し、フェールオーバー機能を活用する方法について説明します。また、**Radia Client** を設定する方法についても説明します。
- 「**サービスを準備する**」
この章では、クライアント コンピュータの再起動、マシンおよびユーザーに固有のコンポーネントを含んだアプリケーションの実装など、さまざまなサービス オプションについて説明します。
- 「**サービスを配布する**」
この章では、アプリケーションをクライアント コンピュータに配布する方法について説明します。
- 「**Radia Client** のディレクトリとオブジェクト」
この章では、**Radia** 実装の結果を表示して検証する方法について説明します。

まとめ

- Radia は、デスクトップ ソフトウェアを効率的に管理するための柔軟性と制御性を提供します。
- Radia データベースには、ソフトウェアの管理に必要なすべての情報が格納されます。
- このマニュアルでは、推奨される配布戦略を示します。この戦略を、組織のニーズに合わせて調整することができます。

はじめに

Radia Client をインストールする

この章は以下を目的としています。

- Radia Client をインストールするためのシステム要件について理解する。
- インストール プロセスをカスタマイズする方法を習得する。
- インストール プロセスの動作をカスタマイズするために、INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクションを変更できるようになる。
- Radia Software Manager の動作をカスタマイズするために、INSTALL.INI の [ARGS] セクションを変更できるようになる。
- クライアント コンピュータで作成する Radia オブジェクトを指定するために、INSTALL.INI の [OBJECTS] セクションを変更できるようになる。
- インストール ウィザードを使用する方法を習得する。
- インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Client を削除および修復する方法を習得する。
- インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Client のインストールを変更する方法を習得する。
- インストールに影響する MSI プロパティをカスタマイズするために、プレインストール スクリプトを使用する方法を習得する。
- Radia Client のインストール後にプロセスを実行するために、ポストインストール スクリプトを使用する方法を習得する。

Radia Client インストール プログラムでは、Microsoft Windows インストーラを使用します。このプログラムは、3 つの機能セット (Radia Application Manager、Radia Software Manager、および Radia Inventory Manager) を含む 1 つの MSI パッケージで構成されます。

警告

ライセンスを保有している Radia Client のみをインストールしてください。ライセンスを保有していない場合、その Radia Client は Radia Configuration Server で認証されません。

システム要件

- Windows 95、98、NT 4 (Service Pack 6a)、2000、Server 2003、または XP。

注意

Radia Software Manager 4.x クライアントは Microsoft .NET ランタイムを必要とするため、Windows 95 が動作するコンピュータでは使用することができません。

- Microsoft .NET ランタイム (*Radia Software Manager* でのみ必須)。
.NET インストール プログラムは、Radia Client CD-ROM の **¥DotNet** フォルダにあります。.NET がクライアント コンピュータにない場合、.NET インストール プログラムが自動的に実行されます。Microsoft .NET を使用するには、Microsoft Internet Explorer 5.01 以上が必要です。
- MS Windows インストーラ 2.0 以上。
MSI 2.0 インストール プログラムは、Radia Client CD-ROM の **¥MSI** フォルダにあります。Windows インストーラが存在しない場合、またはクライアント コンピュータで旧バージョンの Windows インストーラが検出された場合、MSI 2.0 インストール プログラムが自動的に実行されます。
- Radia Configuration Server が動作しているコンピュータへの TCP/IP 接続。
- WMI (*Radia Inventory Manager* でのみ必須)。
WMI インストール プログラムは、Radia Client CD-ROM の **¥WMI** フォルダにあります。WMI がクライアント コンピュータにない場合、WMI インストール プログラムが自動的に実行されます。
- Windows NT、2000、Server 2003、または XP の場合、Radia Client をインストールするには、コンピュータの管理者権限が必要です。

インストール プロセスについて

Radia Client インストール プログラムが実行可能ファイル (setup.exe) として配布される場合でも、管理インストール ポイント (AIP: Administrative Installation Point) として配布される場合でも、インストール プロセスは同じです。インストールする Radia Client、インストール ファイルのコピー先ディレクトリなど、インストールのさまざまな側面をカスタマイズすることができます。インストール プロセスをカスタマイズする場合は、次のファイルについて理解しておく必要があります。

■ setup.exe

setup.exe は、Radia Client CD-ROM の **Ywin32** ディレクトリに格納されています。このファイルは、標準の Windows インストーラのコマンド ライン パラメータを受け付け、Windows インストーラ サービスに渡します。

ネットワーク インストール用に AIP を作成することもできます。

注意

Windows インストーラの管理インストール ポイント (AIP) は、管理制御ポイント (ACP: Administrative Control Point) とも呼ばれます。

指定のターゲット ディレクトリに Windows インストーラの AIP を作成するには、次のように入力します。

```
SETUP.EXE /a TARGETDIR=drive:¥targetdirectory /qb
```

ターゲット ディレクトリには、RADIA40.MSI、インストール フォルダ、setup.exe、および setup.exe と同じディレクトリに格納される INSTALL.INI や Visual Basic スクリプトなどのファイルがあります。次に、**YDotNet** フォルダおよび **YMSI** フォルダをターゲット ディレクトリにコピーします。

注意

Windows インストーラ 2.0 をインストールしていない場合は、標準の MSI インストール プログラム (INSTMSI.EXE または INSTMSIW.EXE) がカレント ディレクトリまたは MSI サブディレクトリに存在するかどうかチェックされます。見つかった場合は、適切な MSI がインストールされてから、Radia Client がインストールされます。

■ **RADIA40.MSI**

RADIA40.MSI は、インストールのデフォルト設定情報が格納されている MSI データベースファイルです。このファイルは、Radia Client CD-ROM の **¥win32** ディレクトリにあります。

■ **INSTALL.INI**

INSTALL.INI を使用すると、インストールまたは Radia Client 引数ファイルをカスタマイズしたり、Radia オブジェクトの属性を作成または設定したりすることができます。

RADIA40.MSI に格納されているデフォルトの設定情報は、INSTALL.INI の設定情報によって上書きされます。

INSTALL.INI のサンプルは、Radia Client CD-ROM の **¥win32¥samples** ディレクトリにあります。

■ **args.xml**

args.xml は、INSTALL.INI の [ARGS] セクションに格納されている情報を基に作成される Radia Software Manager が参照するファイルです。このファイルは、クライアント コンピュータの IDMLIB に格納され、Radia Software Manager の動作を制御します。IDMLIB のデフォルトのディレクトリは、*SystemDrive:¥Program Files¥Novadigm¥Lib¥* です。

■ **プレインストール スクリプト**

(経験のあるユーザーのみを対象)

Visual Basic のカスタム スクリプトを使用して、インストールに影響する MSI プロパティをカスタマイズします。簡単なスクリプトの例については、79 ページの「プレインストール スクリプトを使用する」を参照してください。このスクリプトは、Radia Client CD-ROM の **¥win32¥samples** ディレクトリにあります。

■ **ポストインストール スクリプト**

(経験のあるユーザーのみを対象)

Visual Basic、REXX、または Tcl のカスタム スクリプトを使用して、最初のクライアント接続などのプロセスを実行します。例については、80 ページの「ポストインストール スクリプトを使用する」を参照してください。このスクリプトの完全なバージョンは、Radia Client CD-ROM の **¥win32¥samples** ディレクトリにあります。

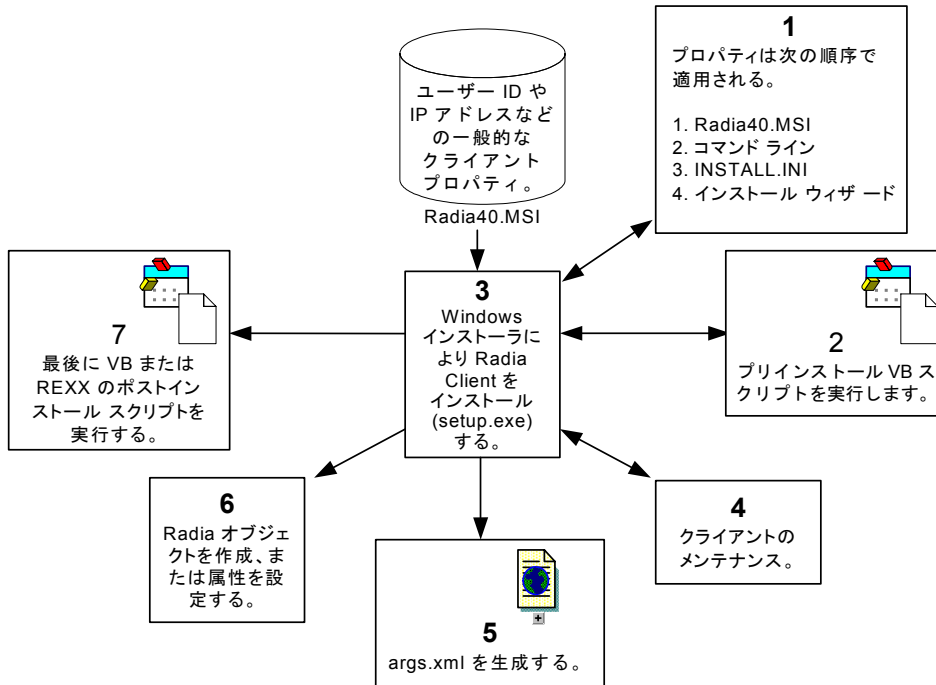


図 2.1 ~ Radia Client のインストール プロセス

INSTALL.INI を準備する

インストール ファイル INSTALL.INI を作成します。このファイルは次の用途で使用します。

- インストールをカスタマイズする。
- Radia Software Manager をカスタマイズする。
- Radia オブジェクトの属性を作成または設定する。

以下に、INSTALL.INI のサンプルを示します。この後に、3 つのセクション、および各セクションの属性について説明します。

注意

属性、プロパティ、およびオブジェクト名の先頭にあるセミコロン (;) は、対象のアイテムがコメントであり、無視されることを示します。これらのアイテムの値を指定するには、セミコロン (;) を削除して、適切な値を入力します。

表 2.1 ~ INSTALL.INI のサンプル

```
[Properties]
;.MSI Property overrides (Novadigm properties have the "nvd" prefix)

;.Uncomment and specify the installation directory to replace the default directory
;INSTALLDIR=

;.Uncomment to prevent subscribers from using Add/Remove Programs in the Control Panel to
remove the Radia Client
;ARNOREMOVE=1

;.Uncomment and specify the features that you want to install
;ADDLOCAL=NVDINSTALLRAM,NVDINSTALLRSM,NVDINSTALLRIM,NVDINSTALLROM,NVDINSTALLPATCH,
NVDINSTALLRLAE

;.Uncomment to show/hide panels in the installation wizard (defaults shown below)
;NVDENABLEUSER=Y
;NVDENABLEIP=Y
;NVDENABLEPROXY=N
;NVDENABLESHORTCUT=Y
;NVDSHORTCUT=Y
;NVDSTARTMENUICON=Y
;NVDSTARTWMICFGMGR=Y

;.Uncomment and specify the location of maintenance files
;NVDMAINTDIR=

;.Uncomment to allow notifies only from the local host.
;NVDLOCALNOTIFYONLY=Y

;.Uncomment to start the System Tray automatically if RAM is selected during the client
install process.
;NVDRADTRAYSTART=Y

;.Uncomment to disable "Allow service to interact with desktop" flag for Radia Services
;NVDNOTIFYINTERACT=N
;NVDREDIRECTORINTERACT=N
```

表 2.1 ~ INSTALL.INI のサンプル

```

;NVDSCHEDULERINTERACT=N

; Uncomment and specify the file names of pre- and post-install custom action scripts
;NVDPRECAPATH=
;NVDPOSTCAPATH=

[Args]
; Tags to be placed into the Radia Software Manager ARGS.XML file
; A value of _NONE_ removes the tag from the file
;
;askconfirm=
;channelname=software
;dataurl=
;enterprisemanagement=
;identification=$USER
;log=connect.log
;logsize=
;logonpanel=
;managerurl=
;providername=Radia
;redirect=
;resolutionmanager=
;resolutionport=
;sslmanager=
;sslport=
;startdir=
;uioption=

[Objects]
; Set Radia object attribute values
; A value of _NONE_ will set the attribute to blank
;
;ZMASTER_ZDSTSOCK=3464
;ZMASTER_ZIPADDR=xxx.xxx.xxx.xxx
;ZMASTER_ZNTFPORT=3465
;ZMASTER_ZNTFYSEC=Y
;ZMASTER_ZTIMEO=240
;ZMASTER_ZTRACE=N
;ZMASTER_ZTRACEL=_NONE_
;ZMASTER_ZUSERID=
;ZMASTER_ZVRFYUID=N
;
;PROXYINF_USEPROXY=
;PROXYINF_DISCOVER=
;PROXYINF_PROXADDR=
;
; Uncomment to enable Client Operations Profile (COP)
;RADSETUP_COP=Y
; Uncomment to disable collection of AD information
;RADSETUP_ADINFO=N
; Uncomment to disable collection of NT Group information
;RADSETUP_ZGRPINFO=N

```

INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション

[PROPERTIES] セクションでは、Windows インストーラのプロパティまたは HP 固有のプロパティを変更して、インストール プログラムの動作をカスタマイズすることができます。このセクションで設定した値は、RADIA40.MSI データベース ファイルに格納されているデフォルト値を上書きします。

注意

INSTALLDIR などのプロパティは、すべて大文字で入力する必要があります。

表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション

引数	説明	デフォルト値 *
* これらの値は、プロパティがコメント化されている場合でも使用されません。		
ADDLOCAL	<p>ローカル ハード ドライブにインストールする機能を指定します。これらの製品を使用するには、適切なライセンスを取得する必要があります。インストールできる機能には次のものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • NVDINSTALLRAM = Radia Application Manager • NVDINSTALLRSM = Radia Software Manager • NVDINSTALLRIM = Radia Inventory Manager • NVDINSTALLROM = Radia OS Manager • NVDINSTALLPATCH = Radia Patch Manager • NVDINSTALLRLAE = Radia ローカル API 拡張 <p>注意: 420 ページで説明されている Radia MSI リダイレクタのローカル AIP のサポート機能を使用するには、これをインストールする必要があります。</p>	なし

表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション

引数	説明	デフォルト値 *
* これらの値は、プロパティがコメント化されている場合でも使用されます。		
ARNOREMOVE	<p>コントロール パネルの [プログラムの追加と削除] を使用して、コンピュータから Radia Client を削除する機能を無効にするには、ARNOREMOVE を 1 に設定します。</p> <p>注意: ARNOREMOVE を 0 に設定すると、Windows インストーラの問題により、このオプションは無効になりません。サブスクリバがコントロール パネルの [プログラムの追加と削除] (Windows 2000 では [アプリケーションの追加と削除]) を使用して、コンピュータから Radia Client が削除できるようにするには、INSTALL.INI の ARNOREMOVE 引数の前にセミコロン (;) を挿入してください。</p> <p>Windows 2000 または XP の場合は、[削除] ボタンが無効になります。</p> <p>Windows 2000 より前のバージョンのオペレーティング システムの場合は、コントロール パネルの [アプリケーションの追加と削除] の一覧に Radia Client は表示されません。</p>	<p>サブスクリバは、コントロール パネルの [プログラムの追加と削除] (Windows 2000 では [アプリケーションの追加と削除]) を使用して、コンピュータから Radia Client を削除することができます。</p>
INSTALLDIR	<p>Radia Client のインストール先ディレクトリを指定します。</p> <p>Radia 4.x クライアント インストール ウィザードの [保存先フォルダ] ウィンドウで新しいディレクトリを指定した場合、この値は上書きされます。</p>	<p><i>SystemDrive:\Program Files\Novadigm</i></p>
NVDENABLEUSER	<p>インストール ウィザードで [ユーザーの設定] ウィンドウを表示するかどうかを指定します。</p> <p>Y: ウィンドウを表示します。</p> <p>N: ウィンドウを表示しません。</p> <p>注意: ウィンドウを表示しない場合、サブスクリバは [Radia Software Manager のアイコンをデスクトップに作成します] チェック ボックスが使用できなくなります。</p> <p>D: ウィンドウは表示しますが、「ユーザー名」フィールドを無効にします。この場合、[Radia Software Manager のアイコンをデスクトップに作成します] チェック ボックスは使用することができます。</p>	Y
NVDENABLEIP	<p>インストール ウィザードで [Radia Configuration Server] ウィンドウを表示するかどうかを指定します。</p>	Y

表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション

引数	説明	デフォルト値 *
* これらの値は、プロパティがコメント化されている場合でも使用されます。		
NVDENABLEPROXY	<p>インストール ウィザードで [プロキシ情報] ウィンドウを表示するかどうかを指定します。</p> <p>Radia Client 接続の実行時に Radia Proxy Server を使用するには、このウィンドウを表示します。</p> <p>デフォルトでは、[プロキシ情報] ウィンドウで入力した情報は、クライアント コンピュータの IDMLIB ディレクトリの PROXYINF オブジェクトに格納されます。</p>	N
NVDENABLESHORTCUT	<p>[ユーザーの設定] ウィンドウに [Radia Software Manager のアイコンをデスクトップに作成します] チェック ボックスを表示するかどうかを指定します。</p> <p>このチェック ボックスをオンにすると、サブスクライバのデスクトップに Radia Software Manager のデスクトップ ショートカットが作成されます。</p> <p>メモ: このプロパティは、Windows 95 が動作するコンピュータには適用されません。これは、Radia Software Manager 4.x クライアントが、Microsoft の .NET ランタイムが必要であるため、Windows 95 が動作するコンピュータでは使用できないことによります。</p>	Y
NVDSHORTCUT	<p>サブスクライバのコンピュータに Radia Software Manager のデスクトップ ショートカットを作成するかどうかを指定します。</p> <p>メモ: このプロパティは、Windows 95 が動作するコンピュータには適用されません。これは、Radia Software Manager 4.x クライアントが、Microsoft の .NET ランタイムが必要であるため、Windows 95 が動作するコンピュータでは使用できないことによります。</p>	Y
NVDSTARTMENUICON	<p>サブスクライバのコンピュータの [スタート] メニューに Radia Software Manager のアイコンを作成するかどうかを指定します。</p> <p>メモ: このプロパティは、Windows 95 が動作するコンピュータには適用されません。これは、Radia Software Manager 4.x クライアントが、Microsoft の .NET ランタイムが必要であるため、Windows 95 が動作するコンピュータでは使用できないことによります。</p>	Y

表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション

引数	説明	デフォルト値 *
* これらの値は、プロパティがコメント化されている場合でも使用されます。		
NVDSTARTWMICFGMGR	Windows NT および 9x システムに WMI のショートカットを作成するかどうかを指定します。	Y
NVDRAMSHORTCUT	サブスライバのコンピュータに Radia Application Manager のデスクトップ ショートカットを作成するかどうかを指定します。	N
NVDRAMSTARTMENUSHORTCUT	サブスライバのコンピュータの [スタート] メニューに Radia Application Manager のアイコンを作成するかどうかを指定します。	N
NVDRAMCONNECT	デスクトップまたは [スタート] メニューに Radia Application Manager のショートカットを作成した場合に、ショートカットから実行するコマンド ラインを指定します。	空白
NVDMAINTDIR	Radia Client メンテナンス ファイルを格納するディレクトリを指定します。 注意: setup.exe が格納されているフォルダの MAINT サブディレクトリ以外のディレクトリに、メンテナンス ファイルを格納する場合にのみ値を入力します。 このディレクトリにインストール ファイルより新しいファイルがある場合、既存のファイルは Radia Client の IDMSYS ディレクトリにコピーされます。	setup.exe が格納されているフォルダの MAINT サブディレクトリ
NVDLOCALNOTIFYONLY	Y に設定すると、Radia Client は Radia Notify の発信元をローカル ホストに限定することができます。	N
NVDRADTRAYSTART	Y に設定すると、Radia Client のインストール プロセスで Radia Application Manager を選択した場合に、システム トレイが自動的に起動します。	N
NVDNOTIFYINTERACT	Y に設定すると、Radia Notify デーモンが有効になり、デスクトップと対話できるようになります。	N
NVDREDIRECTORINTERACT	Y に設定すると、Radia MSI リダイレクタが有効になり、デスクトップと対話できるようになります。	N
NVDSCHEDULERINTERACT	Y に設定すると、Radia スケジューラが有効になり、デスクトップと対話できるようになります。	N

表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション

引数	説明	デフォルト値 *
* これらの値は、プロパティがコメント化されている場合でも使用されます。		
NVDPRECAPATH	Visual Basic のプレインストール カスタム スクリプトのフルパスおよびファイル名を指定します。 注意: 新しいオブジェクトまたはプロパティは、INSTALL.INI で定義する必要があります。 プレインストール スクリプトを使用して、オブジェクトまたはプロパティの値を上書きすることができます。ただし、プレインストール スクリプトで新しいオブジェクトまたはプロパティを指定しても無視されます。 簡単なスクリプトの例については、79 ページの「プレインストール スクリプトを使用する」を参照してください。	なし
NVDPOSTCAPATH	Visual Basic または REXX のポストインストール カスタム スクリプトのフルパスおよびファイル名を指定します。 例については、80 ページの「ポストインストール スクリプトを使用する」を参照してください。	なし

INSTALL.INI の [ARGS] セクション

[ARGS] セクションでは、Radia Software Manager の動作を制御することができます。このセクションの情報は、Radia Software Manager 引数ファイルの args.xml の作成に使用されます。args.xml は、クライアント コンピュータの IDMLIB に格納されます。IDMLIB のデフォルトのディレクトリは、*SystemDrive*:¥Program Files¥Novadigm¥Lib¥ です。

以下に、args.xml の例を示します。

```
<?xml version="1.0" ?>
<RADIO_ARGUMENTS>
<ARGUMENTS><CHANNELNAME>software</CHANNELNAME>
<IDENTIFICATION>jsmith</IDENTIFICATION>
<PROVIDERNAME>radia</PROVIDERNAME>
<RESOLUTIONMANAGER>10.10.10.1</RESOLUTIONMANAGER>
<LOG>connect.log</LOG>
<RESOLUTIONPORT>3464</RESOLUTIONPORT>
</ARGUMENTS>
</RADIO_ARGUMENTS>
```

図 2.2 ~ args.xml のサンプル

注意

ここで説明する XML タグ (引数) を INSTALL.INI に入力する際は、大文字と小文字が区別されません。ただし、args.xml では、引数はすべて自動的に大文字に変換されます。

Radia Application Manager を使用している場合は、[ARGS] セクションの任意のパラメータを **radskman** コマンド ラインに追加することができます。

表 2.3 ~ INSTALL.INI の [ARGS] セクション

引数	必須/ オプション	説明	デフォルト値
askconfirm	オプション	サブスクリバに確認メッセージを表示するかどうかを指定します。たとえば、インスタンスの表示される確認メッセージの内容としては次のようなものがあります。 <ul style="list-style-type: none"> リポートが必要です。 配布でディスク容量が不足しています。 データのダウンロードが中断されました。 	Y
channelname	必須	アプリケーションの取得先となる Radia Configuration Server データベースのドメイン。	SOFTWARE
enterprisemanagement	オプション	<i>Radia Software Manager</i> でのみ使用。 Radia Software Manager から必須アプリケーションを配布します。 必須アプリケーションを配布するには、Enterprisemanagement=auto に設定します。 必須アプリケーションを配布しない場合は、Enterprisemanagement タグを削除します。	なし

表 2.3 ~ INSTALL.INI の [ARGS] セクション

引数	必須/ オプション	説明	デフォルト 値
identification	オプション	<p>ZMASTER オブジェクトの ZUSERID 変数の値を定義することにより、Radia Configuration Server のクライアントを識別します。</p> <p>Radia 4.x クライアント インストール ウィザードの [ユーザーの設定] ウィンドウで異なるユーザー名を指定した場合、この値は上書きされず。この値を変更しない場合は、INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクションで NVDENABLEUSER = N と設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • \$MACHINE: Radia ユーザー ID は、サブスクリバのコンピュータ名になります。 • \$USER: Radia ユーザー ID は、現在ログオンしているサブスクリバのログオン ID になります。 • CUSTOM: リテラルのカスタム指定。 	\$USER
log	オプション	<p>IDMLOG に格納されるログの名前を指定します。IDMLOG は、NVD.INI で指定します。</p> <p>デフォルトでは、NVD.INI は、<i>SystemDrive:\Program Files\Novadigm\LIB</i> に格納されます。</p>	Connect.log
logsize	オプション	<p>ログ ファイルのサイズをバイト単位で指定します。</p> <p>logsize の値に達すると、バックアップ ファイル (.BAK) が作成されます。デフォルトでは、このファイルは connect.bak です。バックアップ ファイルが既に存在する場合は上書きされます。</p>	1000000
logonpanel	オプション	<p>ログオン パネルを表示するかどうかを指定します。</p>	Y
managerurl	オプション	<p>HTTP オブジェクト転送に使用する Radia Configuration Server のアドレスを指定します。</p> <p>managerurl は、<code>http://hostname:port/nvdurl</code> の形式で指定します。</p>	なし
providername	必須	<p>標準インストール時に設定する Radia Configuration Server の名前。</p> <p>クライアント コンピュータの STARTDIR のサブフォルダの名前を付けるのに使用されず。詳細については、46 ページの「Startdir」を参照してください。</p>	Radia

表 2.3 ~ INSTALL.INI の [ARGS] セクション

引数	必須/ オプション	説明	デフォルト値
redirect	オプション	<p><i>Radia Software Manager</i> でのみ使用。</p> <p>代替の起動ファイル (<i>filename.xml</i>) を指定します。このファイルには、ネットワークパスまたは URL でアクセスすることができます。</p> <p>redirect タグを <i>args.xml</i> で設定した場合は、代替ファイルに指定したプロパティが <i>Radia Software Manager</i> で使用されます。</p> <p>たとえば、全ユーザーが共有するネットワークの起動ファイルを参照するように redirect を設定することができます。</p>	なし
resolutionmanager	必須	<p><i>Radia Configuration Server</i> の IP アドレスを識別します。サーバー名も使用することができます。</p> <p><i>Radia 4.x</i> クライアント インストール ウィザードの [Radia Configuration Server] ウィンドウで異なる IP アドレスを指定した場合、この値は上書きされます。この値を変更しない場合は、INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクションで NVDENABLEIP = N と設定します。</p>	なし
resolutionport	必須	<p><i>Radia Configuration Server</i> のポートを識別します。</p> <p><i>Radia 4.x</i> クライアント インストール ウィザードの [Radia Configuration Server] ウィンドウで異なるポートを指定した場合、この値は上書きされます。この値を変更しない場合は、INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクションで NVDENABLEIP = N と設定します。</p>	なし
sslmanager	オプション	<p>SSL 通信に使用する <i>Radia Configuration Server</i> のアドレスを指定します。</p> <p>セルフメンテナンスで SSL 通信を使用する場合は、指定の IP アドレスまたはホスト名の末尾に ::SM を付加します (たとえば、<i>sslmanager=hostname::SM</i>)。</p> <p>警告: ::SM スイッチを使用する場合、CA ルート証明書を保持するファイル (<i>cacert.pem</i>) はメンテナンスできないことに注意してください。<i>Radia Configuration Server</i> で使用している証明書に対応する CA ルート証明書が期限切れまたは取り消しになっていたり、破損したりした場合、<i>Radia Configuration Server</i> への SSL 通信は無効になります。</p>	なし
sslport	オプション	<p>SSL マネージャがリスニングしている TCP/IP ポートを指定します。通常は 443 です。sslport は、<i>sslport=port</i> の形式で指定します。</p>	なし

表 2.3 ~ INSTALL.INI の [ARGS] セクション

引数	必須/ オプション	説明	デフォルト値
startdir	オプション	<p>開始 IDMLIB ディレクトリを指定します (デフォルトでは、<i>SystemDrive: %Program Files%Novadigm%Lib%</i>)。</p> <ul style="list-style-type: none"> • \$MACHINE: 現在のコンピュータ名を使用します。 • \$USER: ログオンしているサブスクライバを使用します。 • CUSTOM: リテラルのカスタム指定。startdir=<i>foldername</i> の形式で入力します。フォルダ名にスペースが含まれている場合は、名前全体を二重引用符で囲みます。 <p>注意: この引数を設定すると、一連の共通のアプリケーションを配布して、これらをマルチユーザー コンピュータの全サブスクライバで共有することもできます。</p>	\$USER
uioption	オプション	ステータス ウィンドウを表示するかどうかを指定します。	N

INSTALL.INI の [OBJECTS] セクション

[OBJECTS] セクションでは、クライアント コンピュータで作成する Radia オブジェクトを指定したり、Radia オブジェクトのデフォルト値を設定したりすることができます。このセクションは、*clientobject_attrbriute* の形式になっています。たとえば、Radia Configuration Server の IP アドレスを設定する場合は、ZMASTER_ZIPADDR を設定します。

表 2.4 ~ INSTALL.INI の [OBJECTS] セクション

引数	説明	デフォルト値
ZMASTER_ZDSTSOCK	Radia Configuration Server のポート設定。	3464
ZMASTER_ZIPADDR	Radia Configuration Server の IP アドレス。	なし
ZMASTER_ZNTFPORT	Radia Client の通知デーモンがリスンしているポート。	3465
ZMASTER_ZNTFYSEC	この属性では、通知処理で実行するプログラムのディレクトリを IDMSYS ディレクトリに限定することができます。これは、通知処理でのセキュリティのために使用されます。	Y

表 2.4 ~ INSTALL.INI の [OBJECTS] セクション

引数	説明	デフォルト値
ZMASTER_ZTIMEO	Radia Client プログラムが非アクティブ (タイムアウト) になる前に、Radia Client が Radia Configuration Server からの応答を待機する時間。 0 ~ 3200 の数値 (秒単位)。	240
ZMASTER_ZTRACE	通信バッファの情報がログに記録できるようにします。 また、作成メソッドの一意のログを生成します。 Y 通信およびクライアント メソッドのトレースを有効にします。 S 通信の要約情報を有効にしますが、クライアント メソッドのトレースは無効になります。 N 通信のトレースおよびクライアント メソッドのトレースを無効にします。	N
ZMASTER_ZTRACEL	Radia Client ログ ファイルに生成されるトレースのレベル。 0 ~ 999 の値を指定します。値 0 は最小限のトレースのレベル、値 40 はほとんどのアクティビティに対応できるレベル、値 999 は最大のトレースのレベルです。	040
ZMASTER_ZUSERID	サブスクリバのユーザー ID。	コンピュータに現在ログオンしているユーザーの名前。
ZMASTER_ZVRFYUID	Radia Configuration Server の通知コマンドによって送信されたユーザー ID を、Radia Client の ZMASTER オブジェクトの ZUSERID フィールドと照合して検証します。	N
PROXYINF_USEPROXY	プロキシ サーバーを使用して Radia Configuration Server に接続するかどうかを指定します。	N
PROXYINF_DISCOVER	<i>Microsoft Internet Explorer</i> でのみ使用。 Web ブラウザで使用しているプロキシ アドレスおよびポートに設定します。	N
PROXYINF_PROXADDR	プロキシ サーバーの IP アドレスおよびポート番号。	xxx.xxx.xxx.xxx:1080
RADSETUP_COP	Y に設定すると、Radia クライアント オペレーション プロファイル が有効になります。	N

Radia 4.x クライアントをインストールする

Radia Client をインストールする前に、次の方法でインストールを開始するかどうかを決定する必要があります。

- コマンド ライン。Web ページ、FTP サイト、マップされたドライブ、CD-ROM、または電子メールからインストールを開始します。下の「コマンド ラインから Radia Client のインストールを開始する」を参照してください。
- ログオン スクリプト。51 ページの「ログオン スクリプトから Radia Client のインストールを開始する」を参照してください。
- Radia Management Portal。この方法は、Windows NT、2000、または XP の環境で大規模な導入を行う場合にお勧めします。詳細については、『Radia Management Portal ガイド』を参照してください。

インストールの開始後、Radia Client 4.x インストール ウィザードが実行されます。ここでは、Radia Client のインストールを開始する方法、および標準の Radia Client 4.x インストール ウィザードについて説明します。

コマンド ラインから Radia Client のインストールを開始する

コマンド ラインからインストールを実行する前に、次の事項について決定しておく必要があります。

- サブスクリバに Radia Client のインストール プログラムを配布する方法。Web ページ、FTP サイト、マップされたドライブ、CD-ROM、または電子メールを使用することができます。
- インストールする Radia Client の機能 (Radia Application Manager、Radia Software Manager、および Radia Inventory Manager)、およびコマンド ラインに渡す追加の引数。

例

次のコマンド ラインの例では、Radia Software Manager をサイレント インストールし、詳細な Windows インストーラのログを作成します。

```
SETUP.EXE ADDLOCAL=NVDINSTALLRSM /qn /L*v C:\Novadigm\install.log
```

このコマンド ラインの引数およびその他の引数については、49 ページの「表 2.5」および 50 ページの「表 2.6」で説明します。

インストールする Radia Client の機能を指定する

インストールする機能を指定するには、適切な機能状態引数 (ADDLOCAL など) を使用して、インストールする機能を指定します。

表 2.5 ~ Radia Client の機能状態引数

指定可能な引数	機能の状態の設定
ADDLOCAL	[ローカル ハード ドライブにインストールします] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。
REMOVE	[機能全体が使用できなくなります] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。 この場合、削除されるのは機能のみであり、製品全体ではありません。したがって、REMOVE プロパティを使用して各機能名を入力しても、コアの製品はコンピュータにインストールされたままとなります。 製品全体を削除するには、「REMOVE=ALL」と入力します。

コマンド ラインで機能を指定する際、Radia Client の各機能は次のように指定します。

- NVDINSTALLRAM
Radia Application Manager をインストールします。
- NVDINSTALLRSM
Radia Software Manager をインストールします。
- NVDINSTALLRIM
Radia Inventory Manager をインストールします。
- NVDINSTALLROM
Radia OS Manager をインストールします。
- NVDINSTALLPATCH
Radia Patch Manager をインストールします。

たとえば、コンピュータに Radia Application Manager と Radia Software Manager をインストールする場合は、コマンド ラインで次のように指定します。

```
SETUP.EXE ADDLOCAL= NVDINSTALLRAM,NVDINSTALLRSM
```

追加のコマンド ライン引数

下の「表 2.6」では、コマンド ラインでインストール プログラムに渡すことができる追加の引数について説明します。

表 2.6 ~ コマンド ライン引数

引数	説明
/qn	サイレント インストールを実行します。 注意: サイレント インストールとは、ユーザー インターフェイスが表示されずに実行されるインストールのことです。マニュアルでは、「サイレント インストール」、「自動実行インストール」、「無人インストール」などの用語が使用されていますが、これらはすべて同じプロセスを指します。
/qb	インストール時に進行状況バーのみを表示します。
/L*v drive:¥install.log	Windows インストーラの詳細なログを作成します。 注意: このオプションを使用すると、インストールのパフォーマンスに影響が生じる可能性があります。
/a TARGETDIR= drive:¥targetdirectory	指定のターゲット ディレクトリに Windows インストーラの AIP を作成します。 注意: Windows インストーラの管理インストール ポイント (AIP) は、管理制御ポイント (ACP) とも呼ばれます。 ターゲット ディレクトリには、RADIA.MSI、インストール フォルダ、setup.exe、および setup.exe と同じディレクトリに格納される INSTALL.INI や Visual Basic スクリプトなどのファイルが格納されます。 AIP の作成後は、setup.exe を実行して、適切なコマンド ラインパラメータを渡すことができます。これにより、Windows インストーラが起動し、指定したパラメータがインストーラに渡されます。
NVDINIFILE=path¥INIfilename	インストール INI ファイルの名前を変更する場合は、このパラメータをコマンド ラインに渡します。パスはフルパスで指定してください。 デフォルトでは、インストール プログラムは、カレント ディレクトリにある INSTALL.INI を参照します。

サイレント インストールの引数 (/qn) を指定せずに、コマンド ラインで Radia Client のインストールを開始すると、Radia Client インストール ウィザードが表示されます。詳細については、52 ページの「Radia Client インストール ウィザードを使用する」を参照してください。

ログオン スクリプトから Radia Client のインストールを開始する

NT、Windows 2000、Windows Server 2003、XP、または Netware クライアントでは、ログオン スクリプトを使用して Radia Client のインストールを自動化することができます。

重要

サブスクリイバの NT 4.0、Windows 2000 Professional、または XP コンピュータで Radia Client を自動インストールするには、サブスクリイバにローカル コンピュータの管理者権限が必要です。また、ドメイン コントローラで各サブスクリイバのログオンを認証する必要があります。

以下に、Radia 4.x クライアントがインストールするログオン スクリプトに追加できるコードの例を示します。サブスクリイバがサーバーにログオンしたときに、Radia Client が事前にインストールされていない場合は、このログオン スクリプトによって Radia 4.x クライアントのインストール プログラムが実行されます。

```
:begin
@echo off
if exist C:\progra~1\Novadigm\LIB\zmaster.edm goto skipinst
start setup.exe /qn
:skipinst
```

図 2.3 ~ ログオン スクリプトのサンプル

```
if exist C:\progra~1\Novadigm\lib\zmaster.edm goto skipinst
```

Radia Client が既に存在するかどうかを判別するために、スクリプトでは ZMASTER オブジェクト (ZMASTER.EDM) がローカル コンピュータのデフォルトのロケーションに存在するかどうかをチェックします。

注意

ZMASTER オブジェクトは、解決プロセスを開始し、クライアント接続プロセスで最初に交換されるオブジェクトです。

ZMASTER.EDM が存在する場合は、インストールがスキップされます。ZMASTER.EDM がクライアント コンピュータに存在しない場合は、Radia 4.x クライアント インストール プログラムが起動します。

```
start setup.exe /qn
```

このコマンド ラインは、Radia Client のサイレント インストールを実行します。

注意

このスクリプトは、組織のニーズに合わせて変更してください。

サイレント インストールの引数を指定せずに、コマンド ラインで Radia Client のインストールを開始すると、Radia Client インストール ウィザードが表示されます。詳細については、52 ページの「Radia Client インストール ウィザードを使用する」を参照してください。

Radia Client インストール ウィザードを使用する

サイレント インストールの引数を指定せずに、Radia Client のインストールを開始すると、Radia Client インストール ウィザードが表示されます。以下では、標準的なインストール手順について説明します。INSTALL.INI の設定内容またはインストールの実行時に渡す引数によっては、ここで説明する手順と異なる場合があります。

インストール ウィザードを使用して Radia Client をインストールするには

1. Radia Client のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** を実行します。

メモ

setup.exe は、コマンド ライン、ログオン スクリプト、または Radia Management Portal から実行することもできます。詳細については、この章の冒頭を参照してください。

Radia Client インストール ウィザードが表示されます。

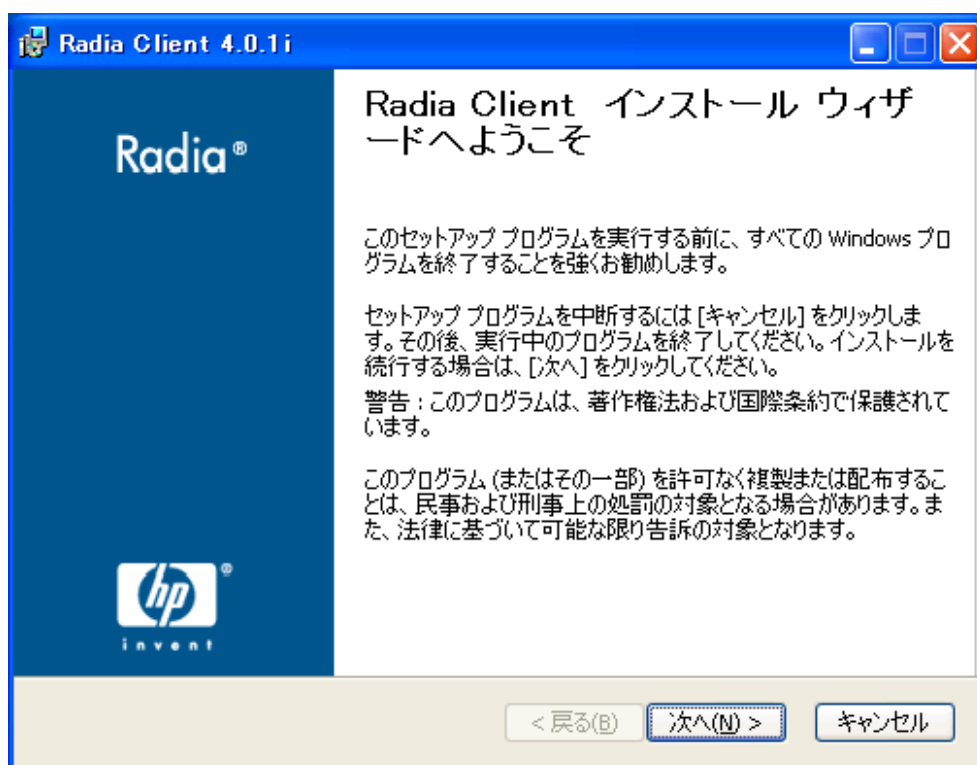


図 2.4 ~ [ようこそ] ウィンドウ

2. [次へ] をクリックします。
[エンドユーザー ライセンス契約] ウィンドウが表示されます。

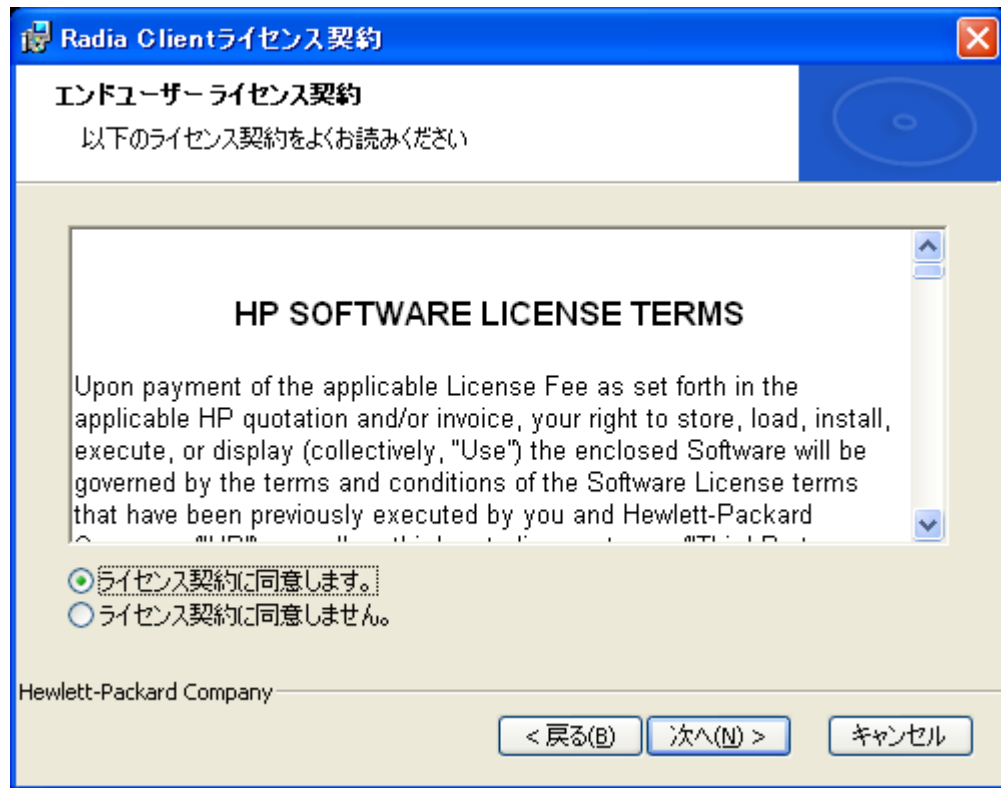


図 2.5 ~ ライセンス契約の表示画面

3. ライセンス契約を読み、ライセンス契約に同意したら、[次へ] をクリックします。
[保存先フォルダ] ウィンドウが表示されます。Radia Client のデフォルトのロケーションは、*SystemDrive:\Program Files\Novadigm* です。

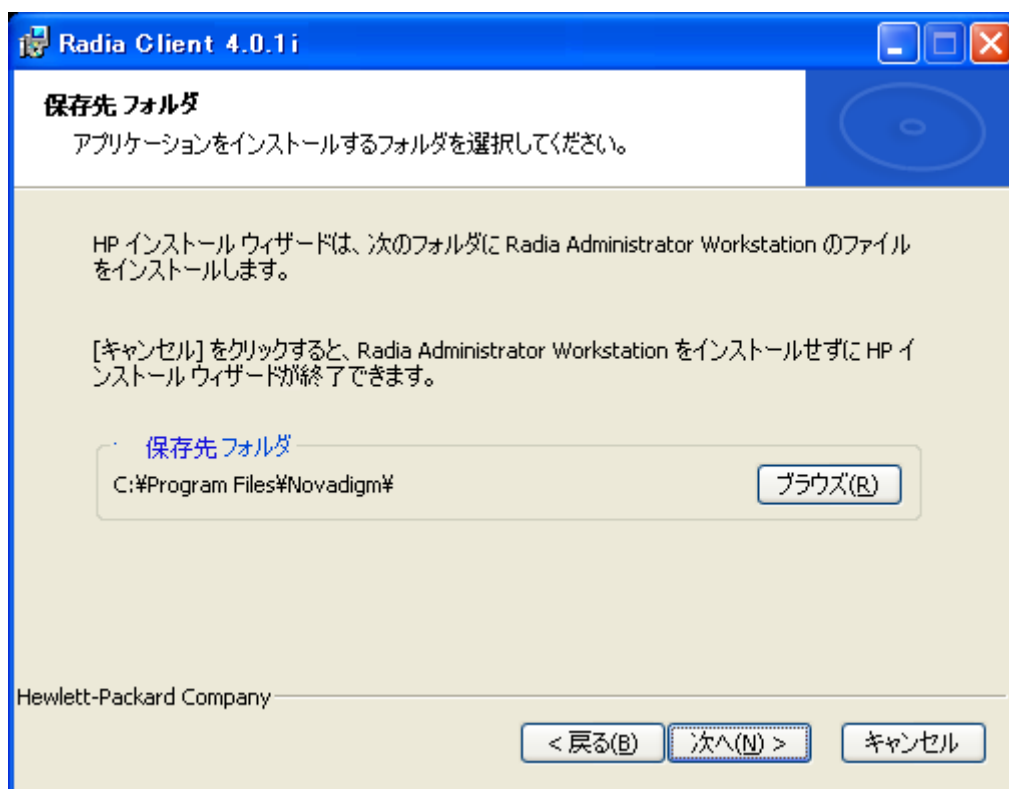


図 2.6 ~ [保存先フォルダ] ウィンドウ

Radia Client の別の保存先を選択する場合は、[ブラウズ] をクリックして適切な保存先フォルダを指定します。この場合、INSTALL.INI の INSTALLDIR に設定されている値は上書きされます。

4. [OK] をクリックして続行します。

5. [次へ] をクリックします。
[ユーザーの設定] ウィンドウが表示されます。

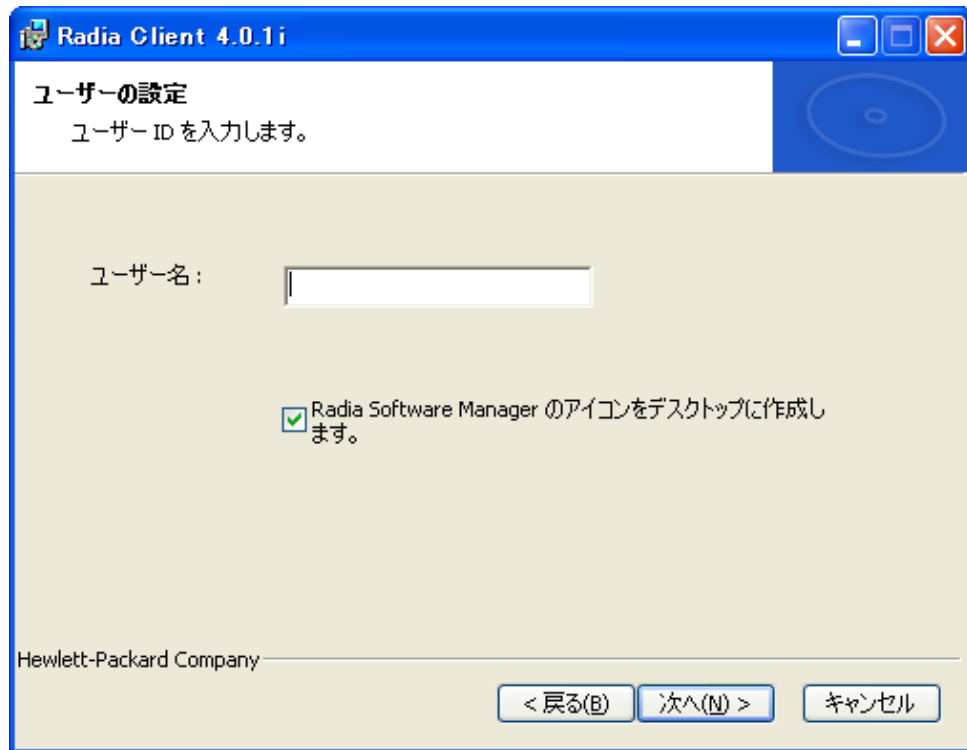


図 2.7 ~ [ユーザーの設定] ウィンドウ

6. [ユーザー名] ボックスに、Radia Client をインストールするサブスクリイバの名前を入力します。
これにより、INSTALL.INI の IDENTIFICATION に設定されている値が書き換えられます。

- 必要に応じて、[Radia Software Manager のアイコンをデスクトップに作成します] チェック ボックスをオンにします。

注意

このチェック ボックスは、Windows 98 では使用できません。デフォルトでは、NVDSHORTCUT=Y の設定になっています。この場合は、サブスクリバのデスクトップにショートカットが表示されます。ショートカットを表示しない場合は、NVDSHORTCUT=N の設定にします。38 ページの「表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション」の「NVDSHORTCUT」の説明を参照してください。

- [次へ] をクリックします。
[Radia Configuration Server] ウィンドウが表示されます。

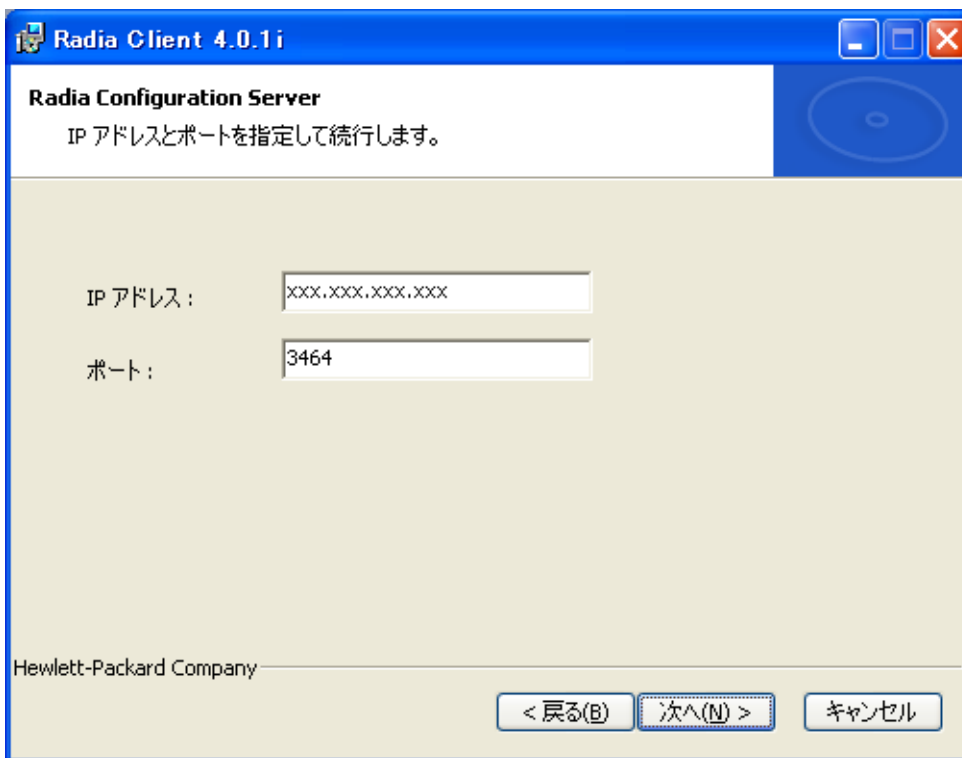


図 2.8 ~ [Radia Configuration Server] ウィンドウ

9. [IP アドレス] ボックスに Radia Configuration Server の IP アドレスを入力します。これにより、INSTALL.INI の RESOLUTIONMANAGER に設定されている値が上書きされます。
10. [ポート] ボックスにポート番号を入力します。これにより、INSTALL.INI の RESOLUTIONPORT に設定されている値が上書きされます。
11. [次へ] をクリックします。
[機能の選択] ウィンドウが表示されます。

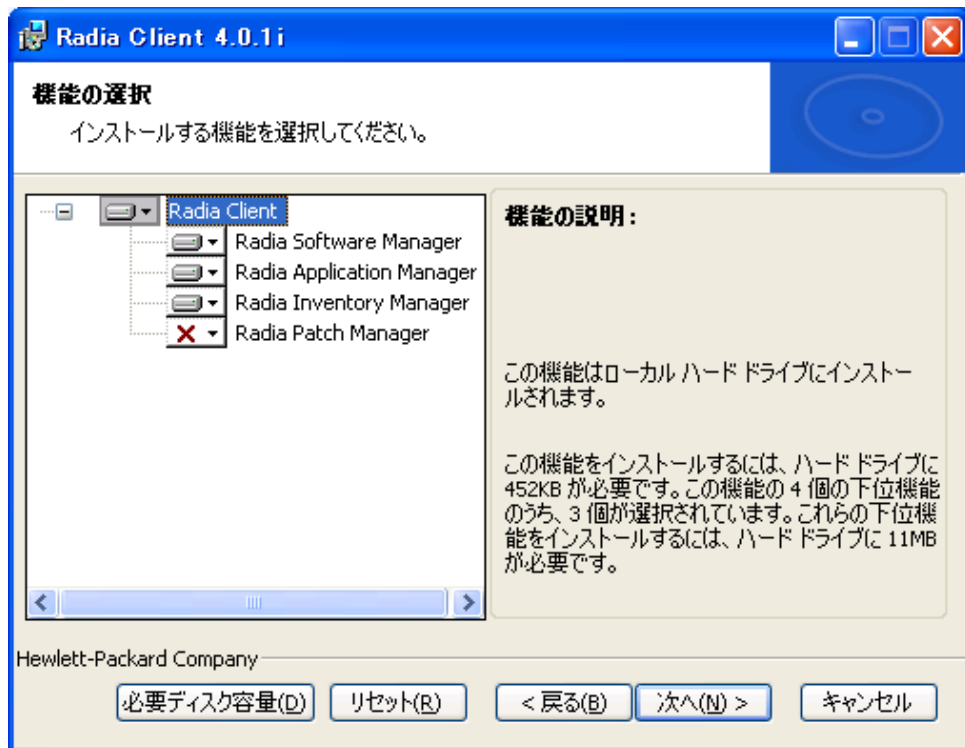




図 2.9 ~ [機能の選択] ウィンドウ

注意

Windows 95 が動作するコンピュータでは、Radia Software Manager クライアントは使用できません。このインストールプログラムを使用する場合、Radia Software Manager はオプションとして表示されません。

12.  をクリックして、インストールする機能を選択します。

 をクリックするたびに、その機能のショートカットメニューが表示されます(下の「[図 2.10 ~ 機能セットのインストール オプション](#)」を参照してください)。

注意

ライセンスを取得している Radia Client のみをインストールしてください。




-  ローカル ハード ドライブにインストールします
-  機能全体をローカル ハード ドライブにインストールします
-  機能全体が使用できなくなります


図 2.10 ~ 機能セットのインストール オプション

13. ショートカットメニューからインストール オプションを選択します。これらのオプションについては、下の「[表 2.7](#)」で説明します。

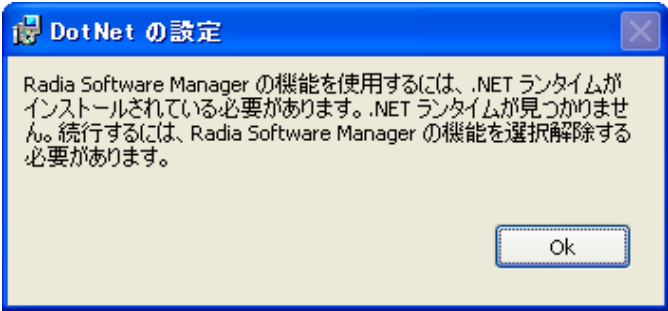
表 2.7 ~ Radia Client の機能の設定

オプション	説明
[ローカル ハード ドライブにインストールします]	最上位に表示される機能をローカル ハード ドライブにインストールします。ただし、下に一覧表示される下位機能はインストールしません。
[機能全体をローカル ハード ドライブにインストールします]	下に一覧表示される下位機能も含め、機能全体をインストールします。 注意: Radia Software Manager、Radia Application Manager、または Radia Inventory Manager の場合、これらの機能には下位機能がないため、このインストール プログラムでこのオプションを選択しても、[ローカル ハード ドライブにインストールします] オプションを選択しても、インストール結果は同じになります。 例: [機能の選択] ウィンドウで Radia Client 機能について、このオプションを選択すると、すべての Radia Client の機能がローカル ハード ドライブにインストールされます。
[機能全体が使用できなくなります]	機能はインストールされません。以前にインストールした機能は削除されます。

ヒント

- すべての機能に同じオプションを設定するには、[ Radia Client] をクリックして適切なオプションを選択し、すべての機能に設定を適用します。
- インストールに必要なディスク容量を確認するには、[必要ディスク容量] をクリックします。

14. [次へ] をクリックします。

クライアント コンピュータに .NET がインストールされていない状態で Radia Software Manager をインストールするよう選択した場合は、Radia Client のインストール時に .NET がインストールされます。ただし、コンピュータにコピーしたインストール プログラムに ¥DotNet フォルダが含まれていない場合は、下の「 2.11」に示す [DotNet の設定] メッセージが表示されます。

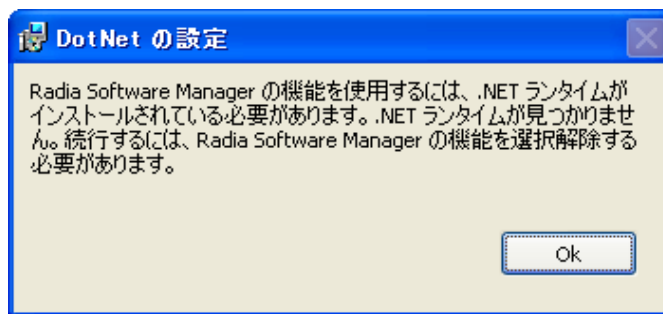


図 2.11 ~ [DotNet の設定] メッセージ

15. [OK] をクリックします。

Radia Software Manager をインストールしない場合は、この機能が使用できないように設定して、インストールが続行できます。Radia Software Manager をインストールする場合は、コンピュータに ¥DotNet フォルダをコピーする必要があります。このフォルダは、setup.exe が格納されているディレクトリと同じディレクトリにコピーしてください。その後、setup.exe を再実行します。

16. 必要な場合は、[インストール] を再度クリックします。

.NET がコンピュータにインストールされていない場合は、[.NET のインストール] ウィンドウが表示されます。

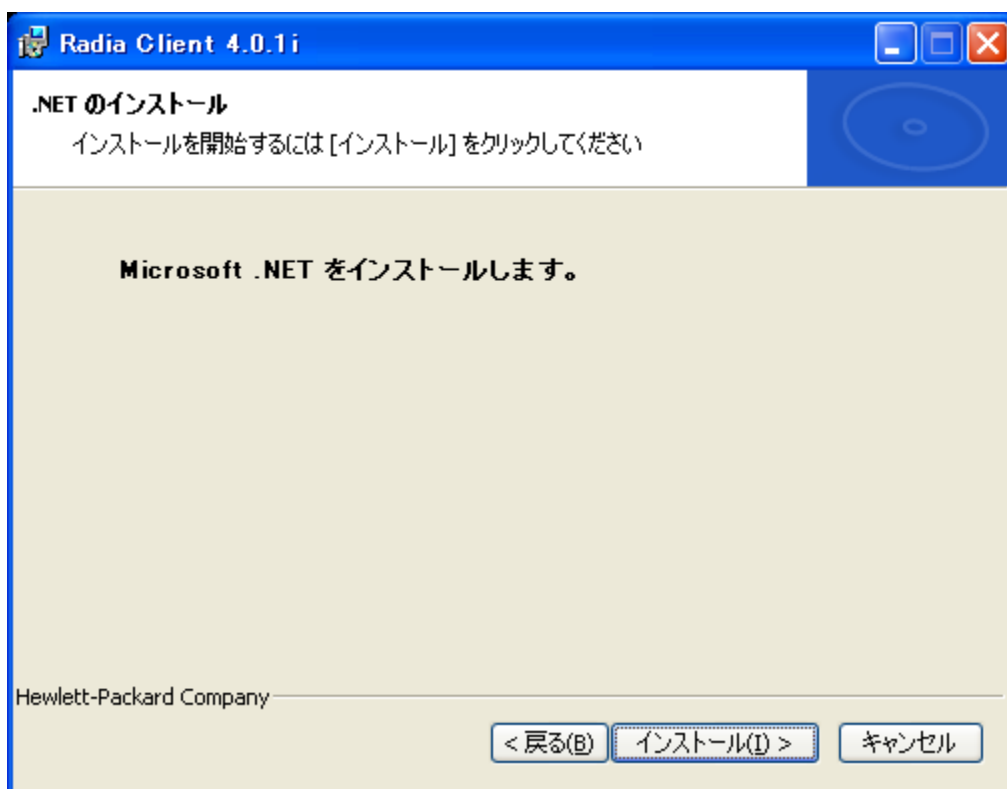
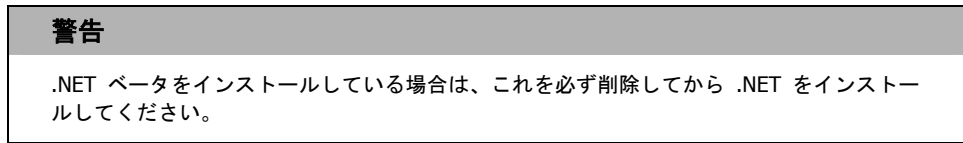


図 2.12 ~ [.NET のインストール] ウィンドウ

17. [インストール] をクリックします。



[アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウが表示されます。

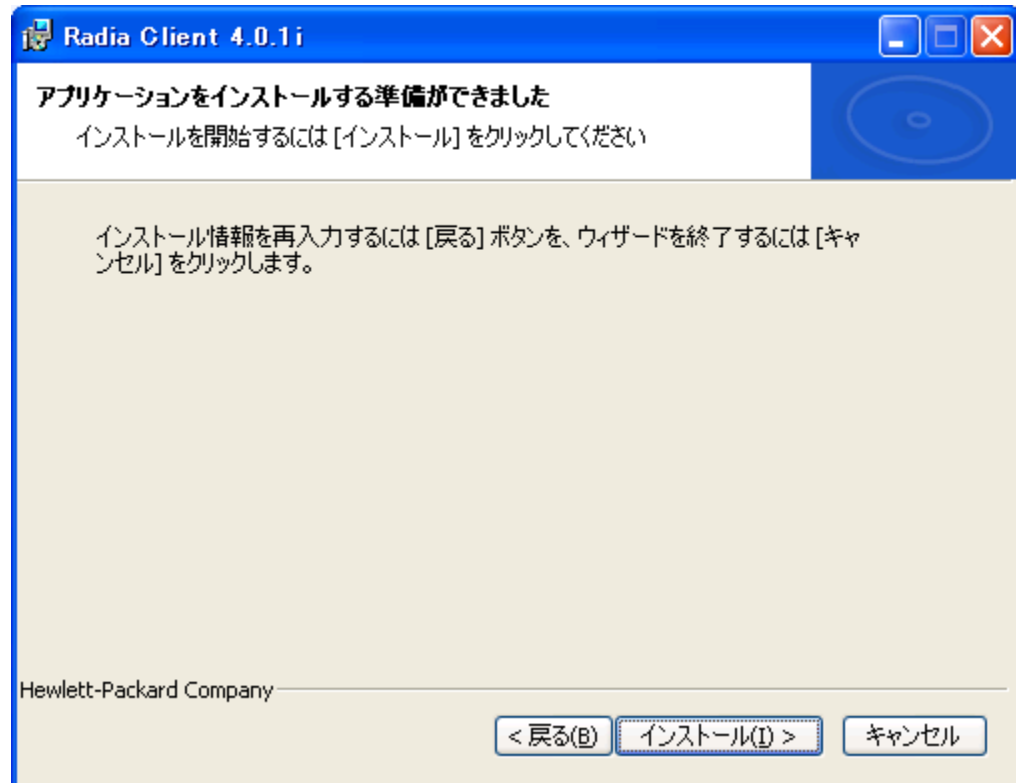


図 2.13 ~ [アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウ

18. [インストール] をクリックしてインストールを開始します。

必要な場合は、**.NET Framework セットアップ** ウィザードが表示されます。表示される指示に従って、クライアント コンピュータに **.NET** をインストールします。**.NET** が正常にインストールされたら、**Radia Client** のインストールが開始されます。

インストールが完了すると、**[Radia Client は正常にインストールされました。]** ウィンドウ (下の「[図 2.14](#)」) が表示されます。

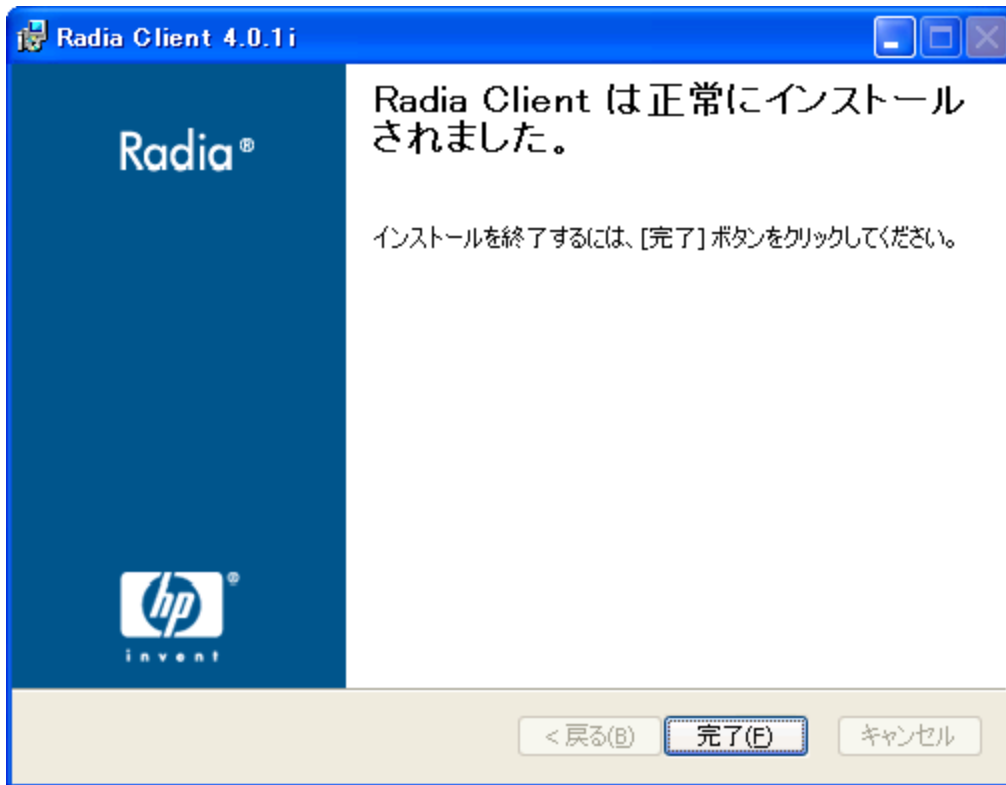


図 2.14 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

19. [完了] をクリックしてインストール ウィザードを閉じます。

Radia Client を削除する

Windows インストーラのインストール プログラムは、Radia 4.x クライアントを削除する機能を備えています。ここでは、インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Client を削除する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Client を削除する

ここでは、インストール ウィザードを使用して、Radia Client を削除する方法について説明します。

注意

Radia Client の特定の機能を削除するには、[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウの [変更] オプションを使用します。これについては、73 ページの「Radia Client のインストールを変更する」で説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Client を削除するには

1. Radia Client のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** をダブルクリックします。[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウが表示されます。

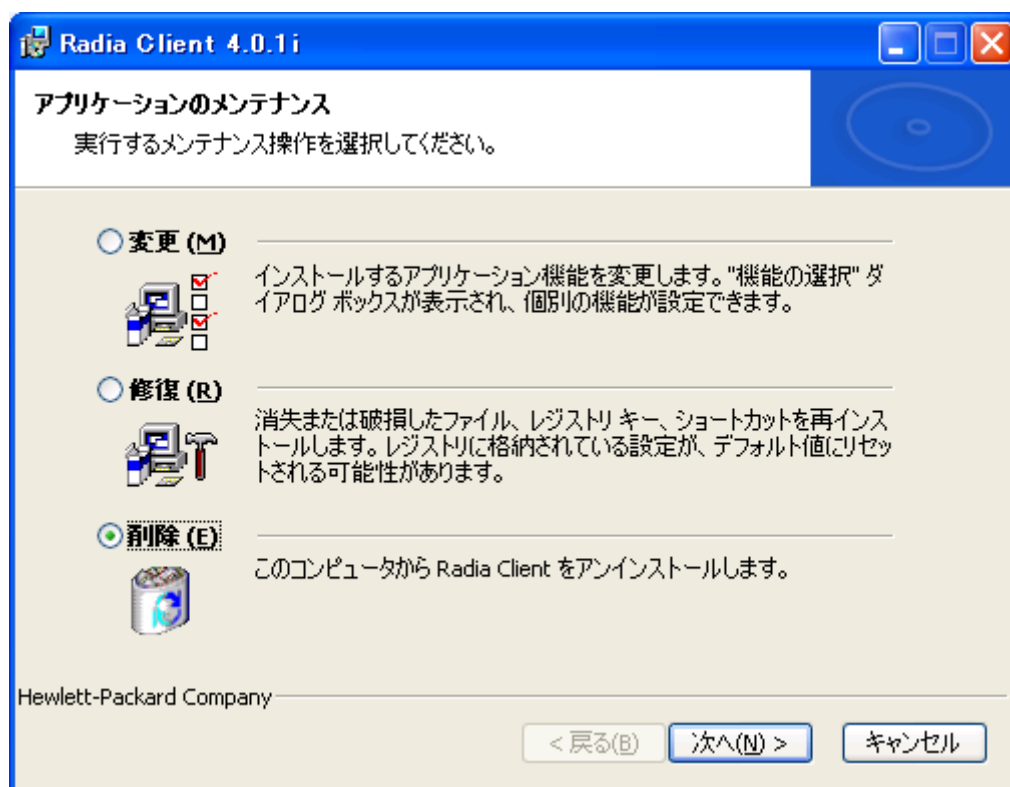


図 2.15 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ

2. [削除] オプションを選択します。

3. [次へ] をクリックします。
[Radia Client のアンインストール] ウィンドウが表示されます。

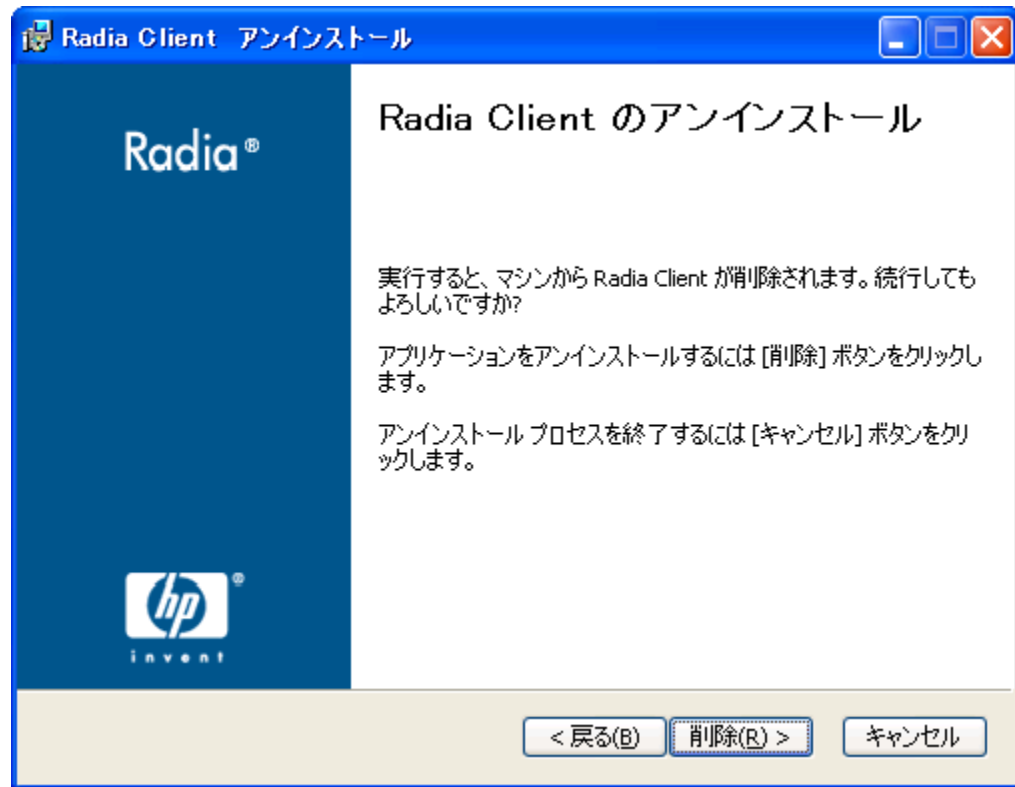


図 2.16 ~ [Radia Client のアンインストール] ウィンドウ

4. [削除] をクリックします。

すべての Radia Client のファイルがコンピュータから削除されます。

[Radia Client は正常にアンインストールされました。] ウィンドウが表示されます。

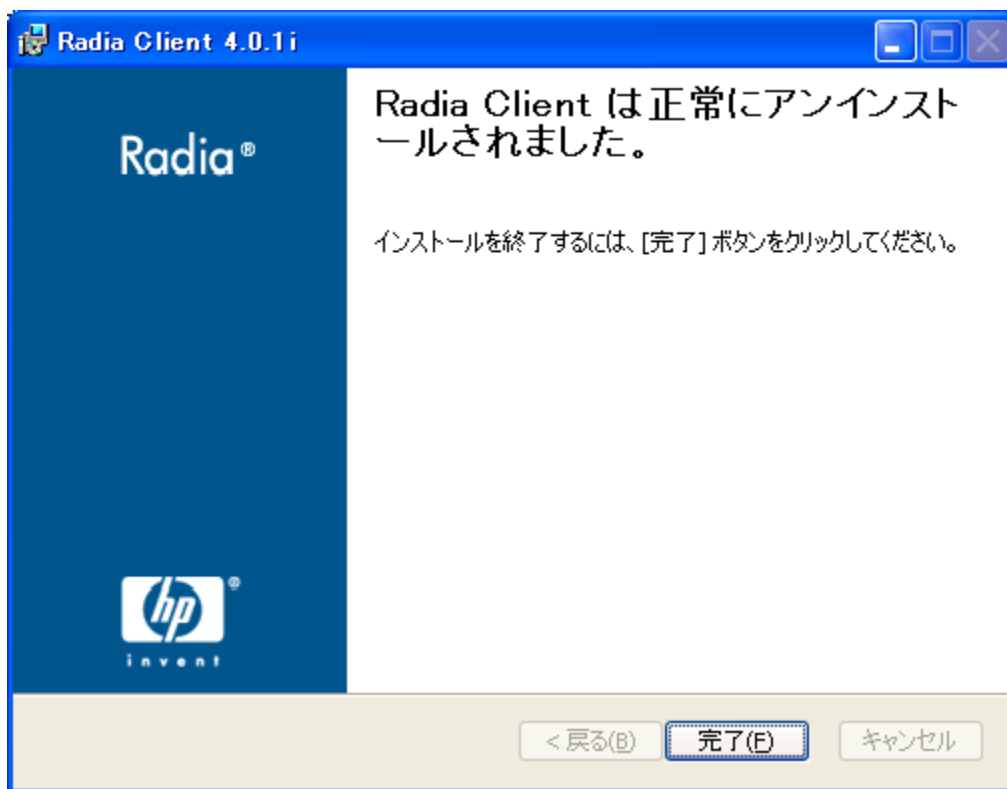


図 2.17 ~ アンインストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

5. [完了] をクリックします。

コマンド ラインを使用して Radia Client を削除する

ここでは、コマンド ラインを使用して、Radia Client を削除する方法について説明します。

コマンド ラインを使用して Radia Client を削除するには

- Radia Client のインストール ファイルが格納されているフォルダから次のコマンド ラインを入力します。

```
SETUP.EXE REMOVE=ALL
```

追加の引数については、48 ページの「コマンド ラインから Radia Client のインストールを開始する」を参照してください。

または

Radia Client の個別の機能を削除する場合は、削除する機能のカンマ区切りのリストをコマンド ラインで入力します。

注意

Radia 4.x クライアントのインストールでは、各機能は次のように指定します。

▪ Radia Application Manager	NVDINSTALLRAM
▪ Radia Software Manager	NVDINSTALLRSM
▪ Radia Inventory Manager	NVDINSTALLRIM
▪ Radia OS Manager	NVDINSTALLROM
▪ Radia Patch Manager	NVDINSTALLPATCH

例

Radia Software Manager および Radia Application Manager をサイレントに削除する場合は、次のように入力します。

```
SETUP.EXE REMOVE=NVDINSTALLRSM,NVDINSTALLRAM /qn
```

注意

この場合、削除されるのは機能のみであり、製品全体ではありません。したがって、REMOVE 引数を使用して各機能名を入力しても、コアの製品はコンピュータにインストールされたままとなります。

Radia Client を修復する

Windows インストーラのインストール プログラムは、Radia 4.x クライアントを修復する機能を備えています。たとえば、消失した Radia Client モジュールがある場合、このツールを使用してインストールを修復することができます。このツールでは、クライアント コンピュータのモジュールの方がインストールで提供されるモジュールより新しい場合、クライアント コンピュータのモジュールは上書きされません。

ここでは、インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Client を修復する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Client を修復する

ここでは、インストール ウィザードを使用して、Radia Client を修復する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Client を修復するには

1. Radia Client のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** をダブルクリックします。

[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウが表示されます。

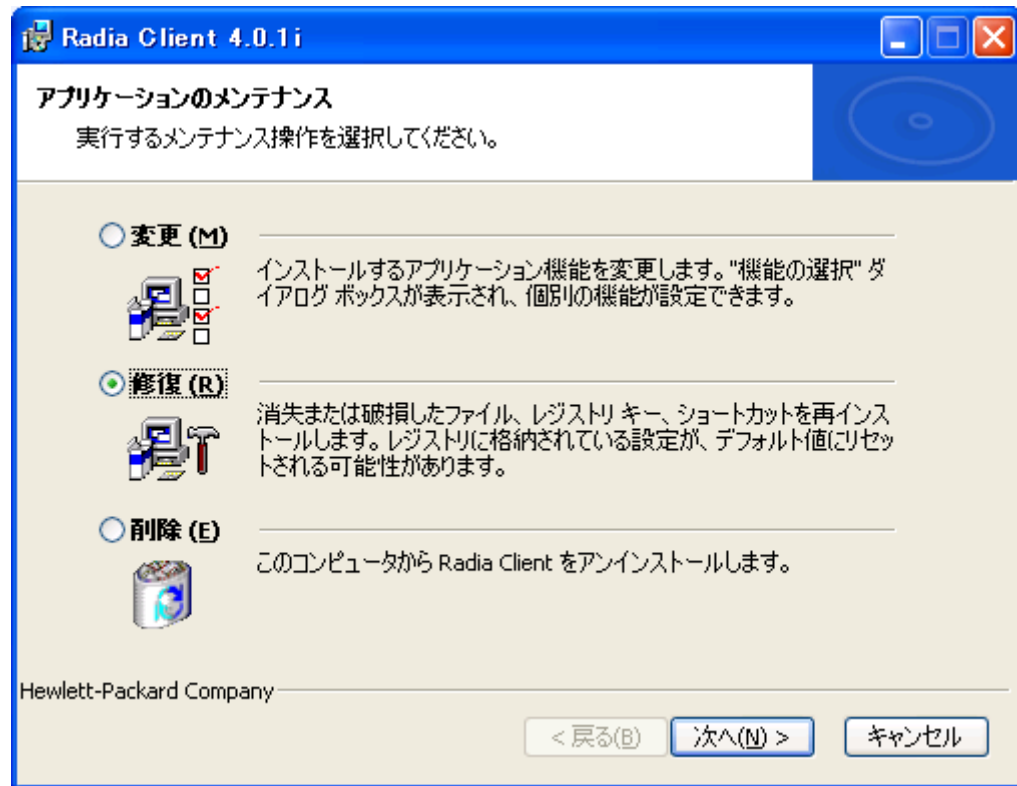


図 2.18 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ

2. [修復] オプションを選択します。

3. [次へ] をクリックします。
[アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウが表示されます。

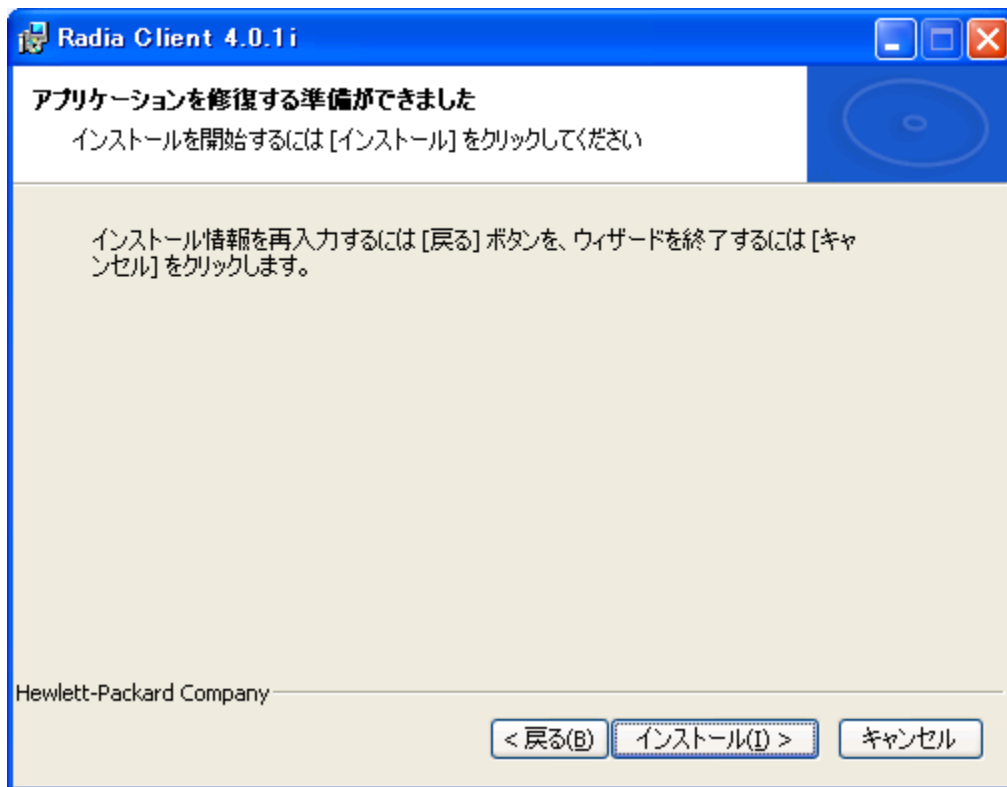


図 2.19 ~ [アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウ

4. [インストール] をクリックします。

修復が完了すると、[Radia Client は正常にインストールされました。] ウィンドウが表示されます。

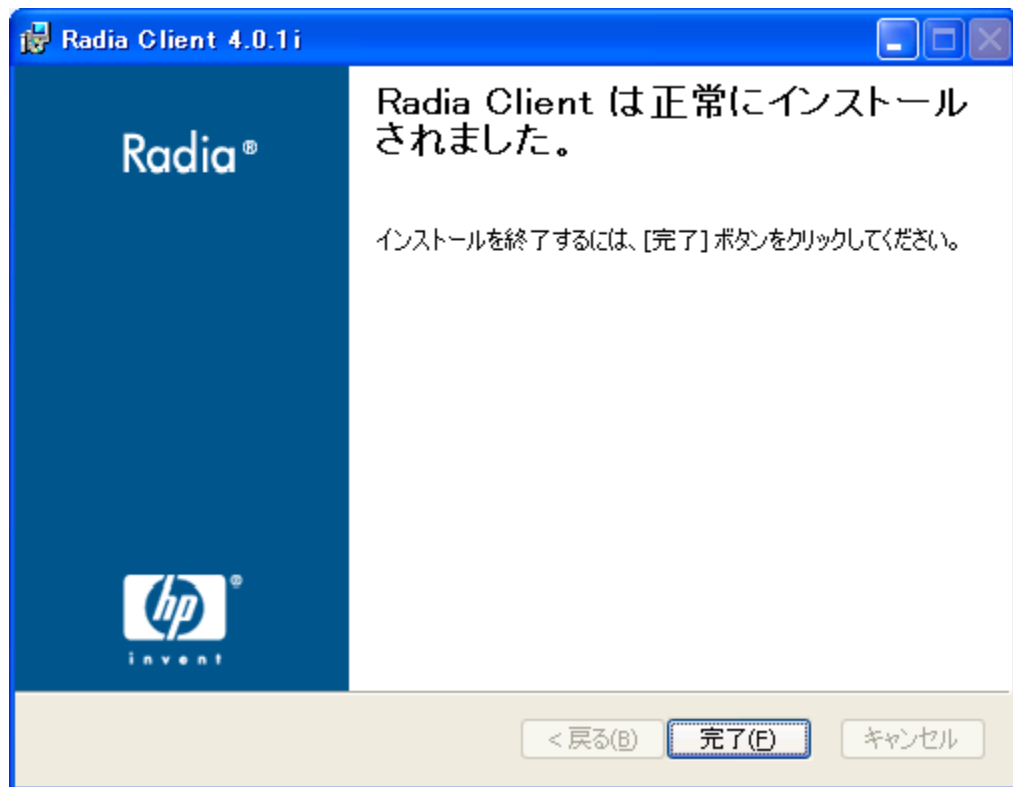


図 2.20 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

5. [完了] をクリックします。

コマンド ラインを使用して Radia Client を修復する

ここでは、コマンド ラインを使用して、Radia Client を修復する方法について説明します。

コマンド ラインを使用して Radia Client を修復するには

- Radia Client のインストール ファイルが格納されているフォルダから次のコマンド ラインを入力します。

```
msiexec /f RADIA40.MSI
```

注意

このコマンド ラインと共に追加のパラメータを使用することができます。詳細については、Windows インストーラのドキュメントを参照してください。

Radia Client のインストールを変更する

Windows インストーラのインストール プログラムは、個別の機能を追加または削除して、Radia 4.x クライアントのインストールを変更する機能を備えています。ここでは、インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Client のインストールを変更する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Client のインストールを変更する

ここでは、インストール ウィザードを使用して、Radia Client のインストールを変更する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Client のインストールを変更するには

1. Radia Client のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** をダブルクリックします。

[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウが表示されます。

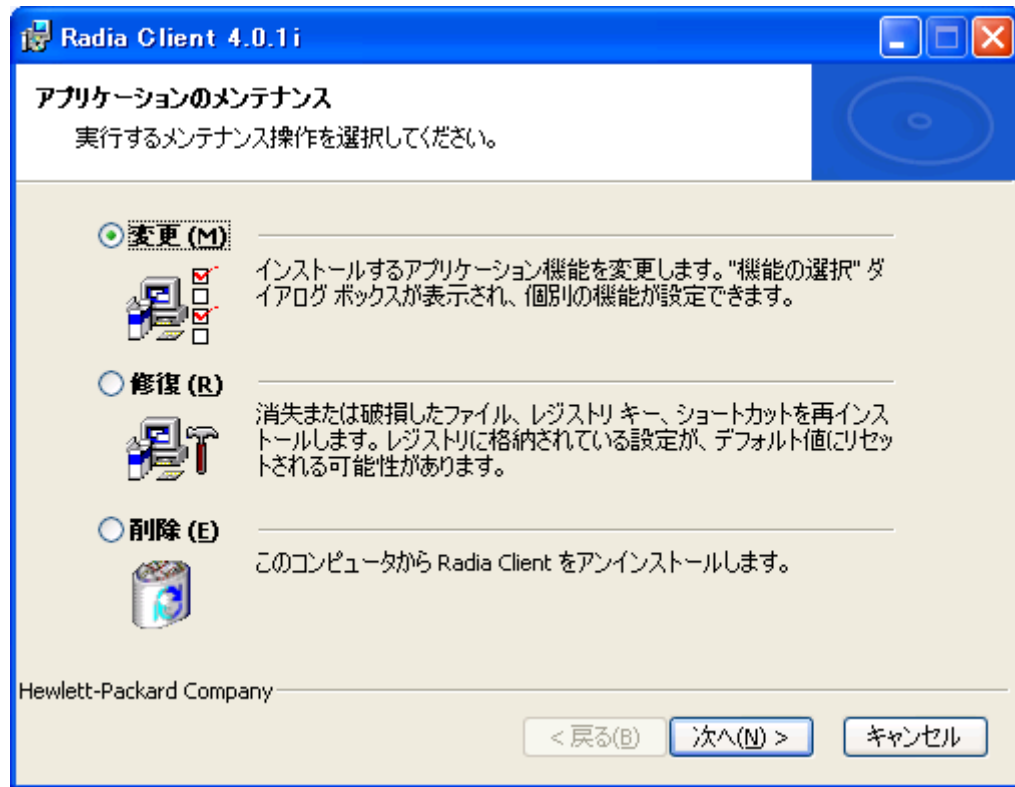


図 2.21 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ

2. [変更] オプションを選択します。

3. [次へ] をクリックします。

[機能の選択] ウィンドウが表示されます。このウィンドウの使用方法については、52 ページの「*Radia Client* インストール ウィザードを使用する」を参照してください。

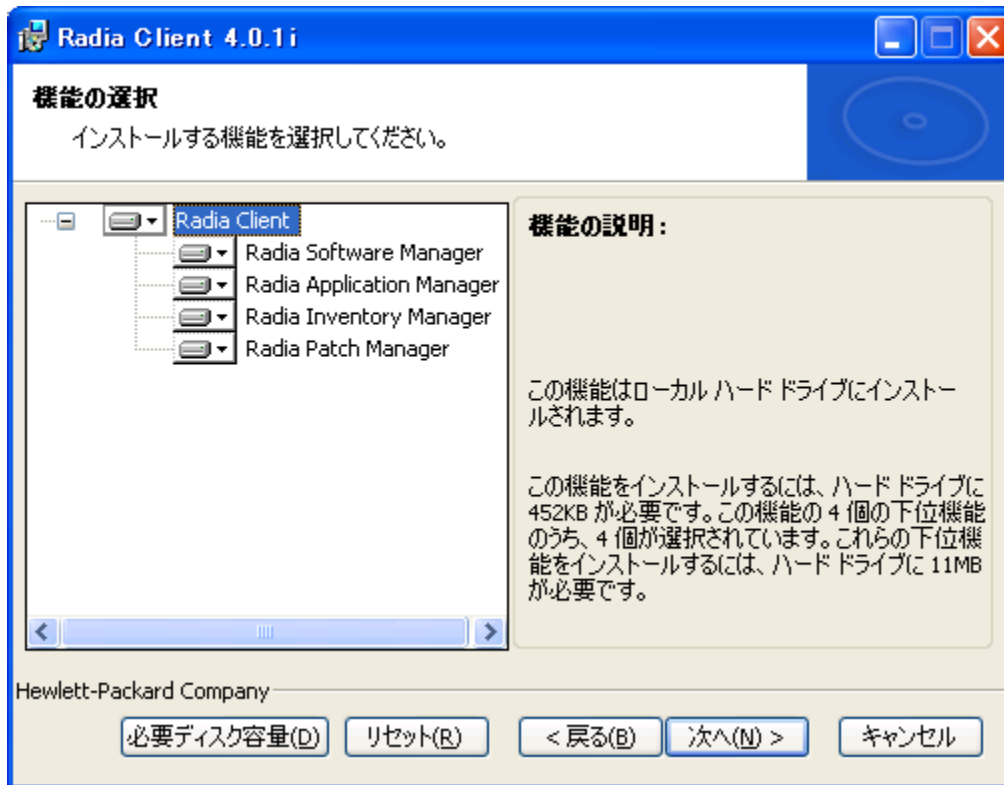


図 2.22 ~ [機能の選択] ウィンドウ

4. [次へ] をクリックします。
[アプリケーションを変更する準備ができました] ウィンドウが表示されます。

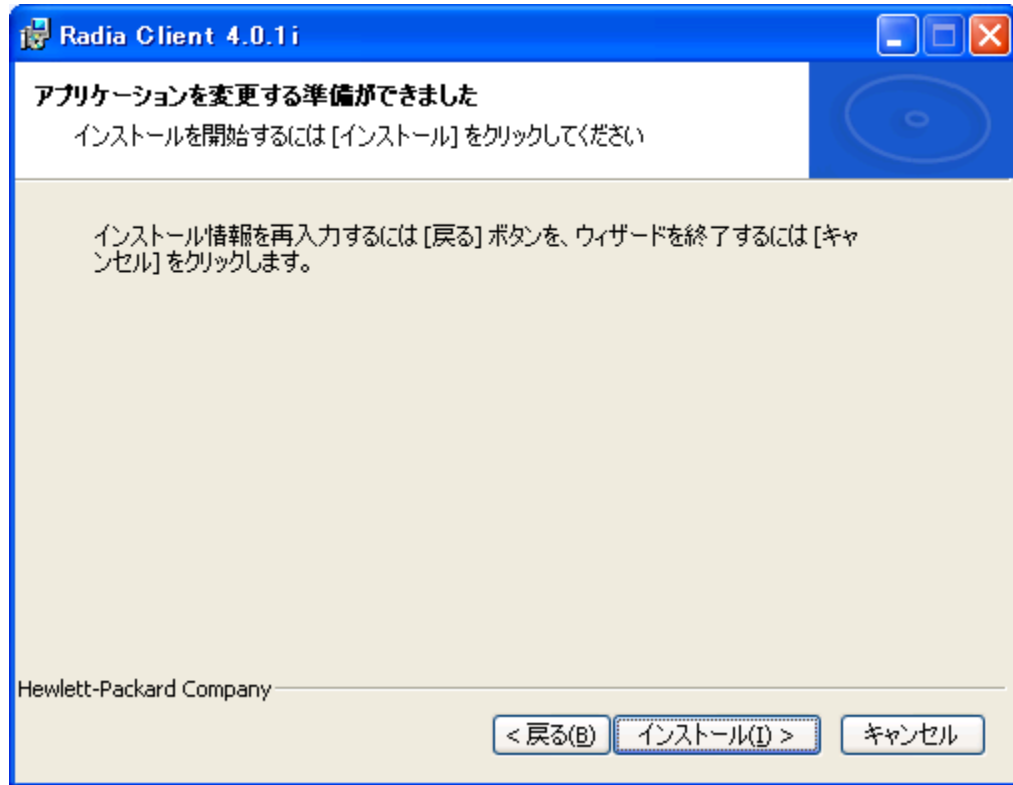


図 2.23 ~ [アプリケーションを変更する準備ができました] ウィンドウ

5. [次へ] をクリックします。
[Radia Client は正常にインストールされました。] ウィンドウが表示されます。

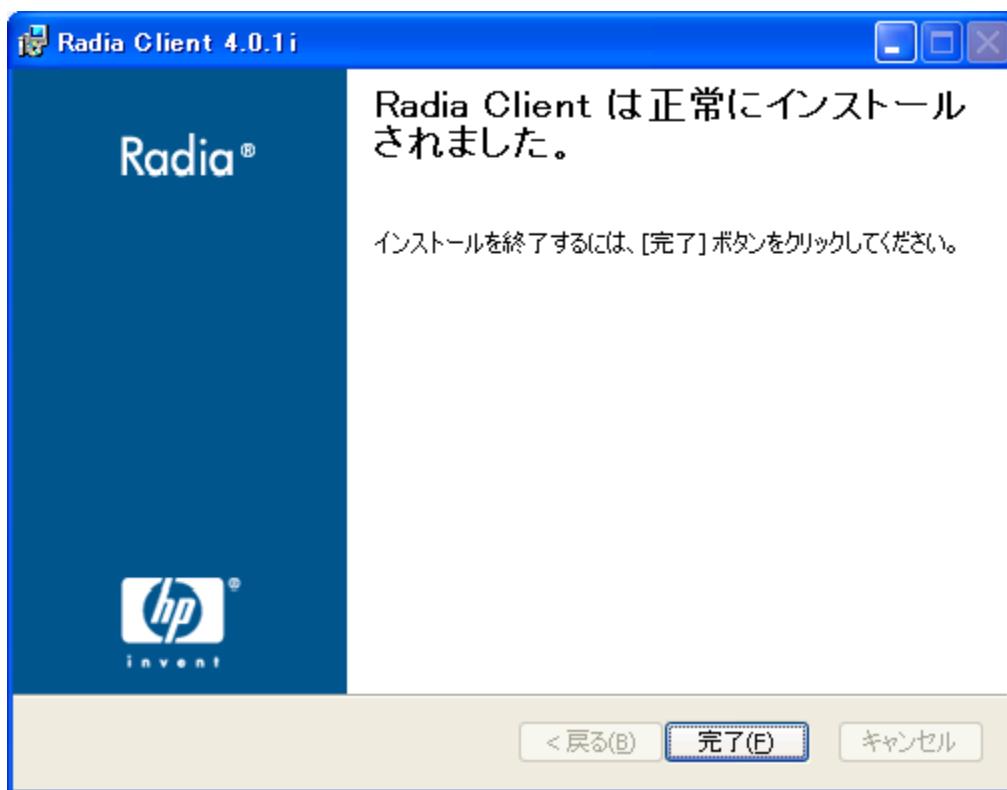


図 2.24 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

6. [完了] をクリックしてインストール プログラムを終了します。

コマンド ラインを使用して Radia Client のインストールを変更する

ここでは、コマンド ラインを使用して、Radia Client のインストールを変更する方法について説明します。

コマンド ラインを使用して Radia Client のインストールを変更するには

- Radia Client のインストール ファイルが格納されているフォルダから次のコマンド ラインを入力します。

```
SETUP.EXE FeatureStateArgument=feature1,feature2
```

表 2.8 ~ Radia Client の機能状態引数

指定可能な引数	機能の状態の設定
ADDLOCAL	[ローカル ハード ドライブにインストールします] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。
REMOVE	[機能全体が使用できなくなります] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。 この場合、削除されるのは機能のみであり、製品全体ではありません。したがって、REMOVE プロパティを使用して各機能名を入力しても、コアの製品はコンピュータにインストールされたままとなります。 製品全体を削除するには、「REMOVE=ALL」と入力します。

注意

Radia 4.x クライアントのインストールでは、各機能は次のように指定します。

- Radia Application Manager NVDINSTALLRAM
- Radia Software Manager NVDINSTALLRSM
- Radia Inventory Manager NVDINSTALLRIM
- Radia OS Manager NVDINSTALLROM
- Radia Patch Manager NVDINSTALLPATCH

例

Radia Software Manager をインストールし、Radia Inventory Manager および Radia Application Manager が使用できないようにする場合は、次のコマンド ラインを使用します。

```
SETUP.EXE ADDLOCAL=NVDINSTALLRSM REMOVE=NVDINSTALLRIM,NVDINSTALLRAM
```

追加の引数については、48 ページの「コマンド ラインから Radia Client のインストールを開始する」を参照してください。

プレインストール スクリプトを使用する

Visual Basic のスクリプトを使用して、インストールに影響する MSI プロパティをカスタマイズすることができます。以下に、ごく簡単な Visual Basic スクリプトの例を示します。これは、あくまで 1 つの例を示す目的で用意されたものです。このスクリプトは、Radia Client CD-ROM の `¥win32¥samples` ディレクトリにあります。

警告

INSTALL.INI またはコマンド ラインでは、必ず NVDPRECAPATH 引数を使用して、Visual Basic のプレインストール カスタム スクリプトのフルパスおよびファイル名を指定してください。38 ページの「表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション」の「NVDPRECAPATH」の説明を参照してください。

```
' The following sample demonstrates fetching an MSI property, then setting the
same property.
' The property values are displayed in message boxes for debugging purposes.
Option Explicit
msgbox Session.Property("ALLUSERS")
Session.Property("ALLUSERS") = "1"
msgbox Session.Property("ALLUSERS")
```

図 2.25 ~ プレインストール スクリプトのサンプル

プレインストール スクリプトを使用すると、Radia Software Manager の動作を制御する引数のプロパティ設定 (INSTALL.INI の [ARGS] セクションで指定した引数のプロパティ設定など)、および Radia オブジェクトの属性値 (INSTALL.INI の [OBJECTS] セクションで指定した属性値など) を上書きすることができます。

警告

新しいオブジェクトまたはプロパティは、INSTALL.INI で定義する必要があります。

プレインストール スクリプトを使用して、オブジェクトまたはプロパティの値を上書きすることができます。ただし、プレインストール スクリプトで新しいオブジェクトまたはプロパティを指定しても無視されます。

オブジェクトのプロパティ設定または属性を上書きするには

警告

プロパティ名またはオブジェクト名、およびオブジェクトの属性は、すべて大文字で入力してください (たとえば、NVD OBJZMASTER_ZDSTSOCK)。

- プロパティ設定を上書きするには、プレフィックス **NVDARG** を使用します。
たとえば、**identification** プロパティ (Radia Configuration Server へのサブスクライバのセッションを識別) に設定されている値を上書きする場合は、次のように入力します。

```
Session.Property("NVDARGIDENTIFICATION")="jenns"
```
- オブジェクトの属性を上書きするには、プレフィックス **NVD OBJ** を使用します。
たとえば、**ZMASTER** オブジェクトの **ZDSTSOCK** 属性 (Radia Configuration Server のポート設定) に設定されている値を上書きする場合は、次のように入力します。

```
Session.Property("NVD OBJZMASTER_ZDSTSOCK")="3462"
```

ポストインストール スクリプトを使用する

Visual Basic、REXX、または Tcl のカスタム スクリプトを使用して、Radia Client のインストール後にプロセスを実行することができます。たとえば、必須アプリケーションを処理するために、ポストインストール スクリプトで Radia Configuration Server への接続を開始することができます。サンプル スクリプトは、Radia Client のインストール CD-ROM の **¥win32¥samples** フォルダにあります。

警告

INSTALL.INI またはコマンド ラインでは、必ず NVDPOSTCAPATH 引数を使用して、Visual Basic または REXX のポストインストール カスタム スクリプトのフルパスおよびファイル名を指定してください。38 ページの「表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション」の「NVDPOSTCAPATH」の説明を参照してください。たとえば、redstart.rex というスクリプトを実行する場合、非コメント化して

```
NVDPOSTCAPATH=C:¥Progra~1¥Novadigm¥radstart.rex
```

 と設定します。

スクリプトは、クライアントのインストール先の **¥maint** フォルダに配置します。配置したスクリプトは、自動的に **IDMSYS** にコピーされます。以下に、スクリプトの例を示します。

```
/* **** */
/** RADSTART.REX                               **/
/**                                           **/
/** DESCRIPTION:                               **/
/** Client Rexx will perform a Radia connection to an RCS defined in the **/
/** install.ini to process all mandatory applications. **/
/**                                           **/
/** AUTHOR:          HP                       **/
/** LANGUAGE:       REXX                      **/
/**                                           **/
/* **** */
/* trace i */

fullcmd = 'HIDE radntfyc localhost wait radskman
context=m,log=connect_initial.log'
call edmcmd fullcmd;
```

図 2.26 ~ ポストインストール スクリプトの REXX コードのサンプル

まとめ

- Radia Client のインストール プログラムは、3 つの機能セット (Radia Application Manager、Radia Inventory Manager、および Radia Software Manager) を含む 1 つのパッケージで構成されます。
- Radia Client は、コマンド ラインまたはインストール ウィザードを使用してインストールすることができます。
- 企業の必要に応じてインストールをカスタマイズすることができます。
- プレインストール スクリプトおよびポストインストール スクリプトを作成すると、クライアントのインストールの前または後にプロセスを実行することができます。

Radia Administrator Workstation をインストールする

この章は以下を目的としています。

- Radia Administrator Workstation をインストールするためのシステム要件について理解する。
- インストール ファイルに理解する。
- インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation をインストールする方法を習得する。
- Radia Administrator Workstation の機能の設定について理解する。
- インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation を削除および修復する方法を習得する。

Radia Administrator Workstation インストール プログラムでは、Microsoft Windows インストーラを使用します。このプログラムは、4 つの機能セット (Radia Packager、Radia System Explorer、Radia Client Explorer、および Radia Screen Painter) を含む 1 つの MSI パッケージで構成されます。

システム要件

- クリーンなコンピュータ (クリーンなコンピュータとは、ターゲット サブスクリバのオペレーティング システムのみがインストールされているコンピュータのことです)。
- Windows 95、98、NT 4.0、2000、または XP。
- Radia Configuration Server への TCP/IP 接続。
- 800 x 600 の最低解像度。
- MS Windows インストーラ 2.0 以上。
MSI 2.0 インストール プログラムは、Radia インフラストラクチャ CD-ROM の **managementinfrastructure¥administratorworkstation¥win32¥msi** フォルダにあります。Windows インストーラが存在しない場合、またはコンピュータで旧バージョンの Windows インストーラが検出された場合、MSI 2.0 インストール プログラムが自動的に実行されます。
- Windows NT、2000、Server 2003、または XP の場合、Radia Administrator Workstation をインストールするには、コンピュータの管理者権限が必要です。

インストール ファイルについて

setup.exe

setup.exe は、Radia インフラストラクチャ CD-ROM の **managementinfrastructure ¥administratorworkstation ¥win32 ¥msi** フォルダに格納されています。これは、任意のコマンドライン パラメータを受け付け、Windows インストーラに渡します。

ネットワーク インストール用に Windows インストーラの管理インストール ポイント (AIP: Administrative Installation Point) を作成することもできます。

注意

Windows インストーラの管理インストール ポイント (AIP) は、管理制御ポイント (ACP: Administrative Control Point) と呼ばれます。

AIP により、Windows インストーラが起動し、任意のコマンド ライン パラメータがインストーラに渡されます。指定のターゲット ディレクトリに Windows インストーラの管理インストールポイント (AIP) を作成するには、次のように入力します。

```
SETUP.EXE /a TARGETDIR=drive:¥targetdirectory /qb
```

ターゲット ディレクトリには、RADADMIN40.MSI、インストール フォルダ、および setup.exe が格納されます。

RADADMIN40.MSI

RADADMIN40.MSI は、インストールのデフォルト設定情報が格納されている MSI データベース ファイルです。このファイルは、Radia インフラストラクチャ CD-ROM の `managementinfrastructure¥administratorworkstation¥win32¥` フォルダに格納されています。

Radia Administrator Workstation をインストールする

ここでは、インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation をインストールする方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation をインストールする

ここでは、インストール ウィザードを使用して、Radia Administrator Workstation for Windows をインストールする方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation をインストールするには

1. Radia Administrator Workstation のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** を実行します。

Radia Administrator Workstation インストール ウィザードが表示されます。

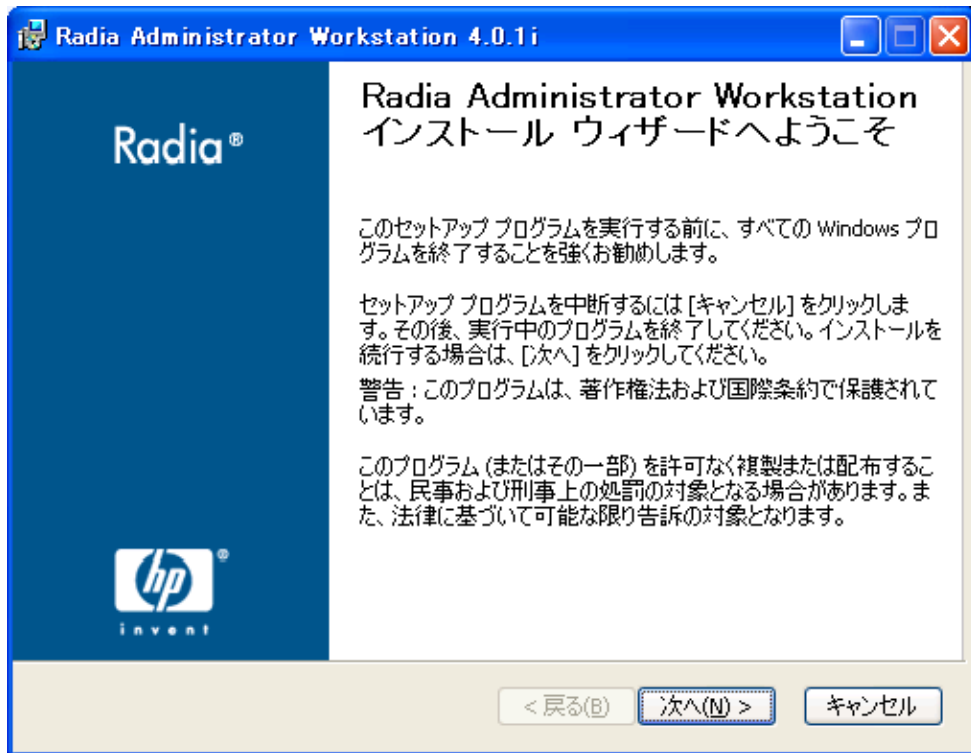


図 3.1 ~ [ようこそ] ウィンドウ

2. [次へ] をクリックします。
[エンドユーザー ライセンス契約] ウィンドウが表示されます。

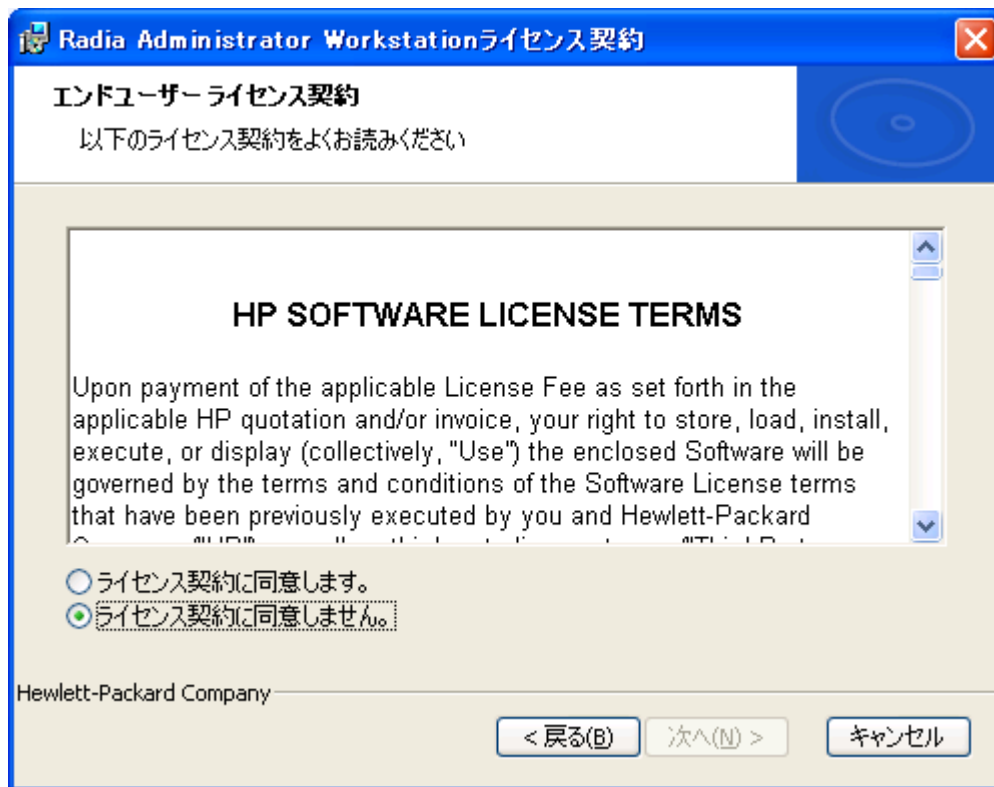


図 3.2 ~ ライセンス契約の表示画面

3. ライセンス契約を読み、ライセンス契約に同意したら、[次へ] をクリックします。
Radia Client がコンピュータにインストールされていない場合は、[保存先フォルダ] ウィンドウが表示されます。

注意

Radia Client がコンピュータにインストールされている場合、このウィンドウは表示されません。その場合、Radia Administrator Workstation は、Radia Client と同じロケーションにインストールされます。

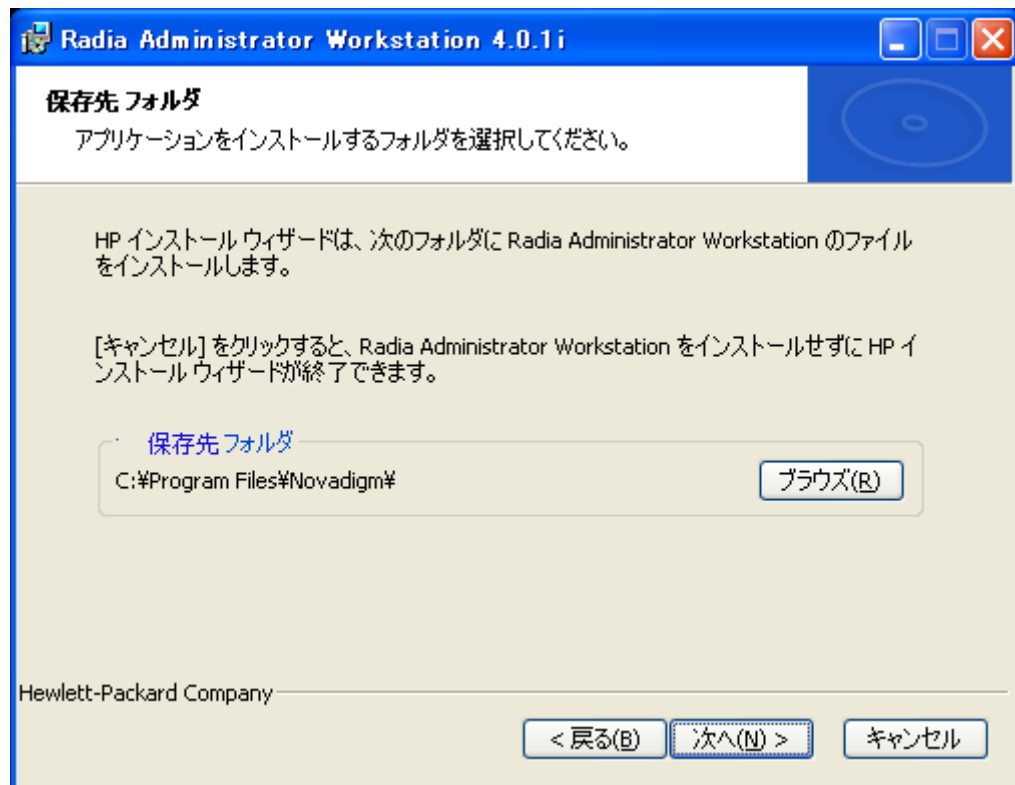


図 3.3 ~ [保存先フォルダ] ウィンドウ

Radia Administrator Workstation の別の保存先を選択する場合は、[ブラウズ] をクリックして適切な保存先フォルダを指定します。

[OK] をクリックして続行します。

4. [次へ] をクリックします。
[Radia Configuration Server] ウィンドウが表示されます。

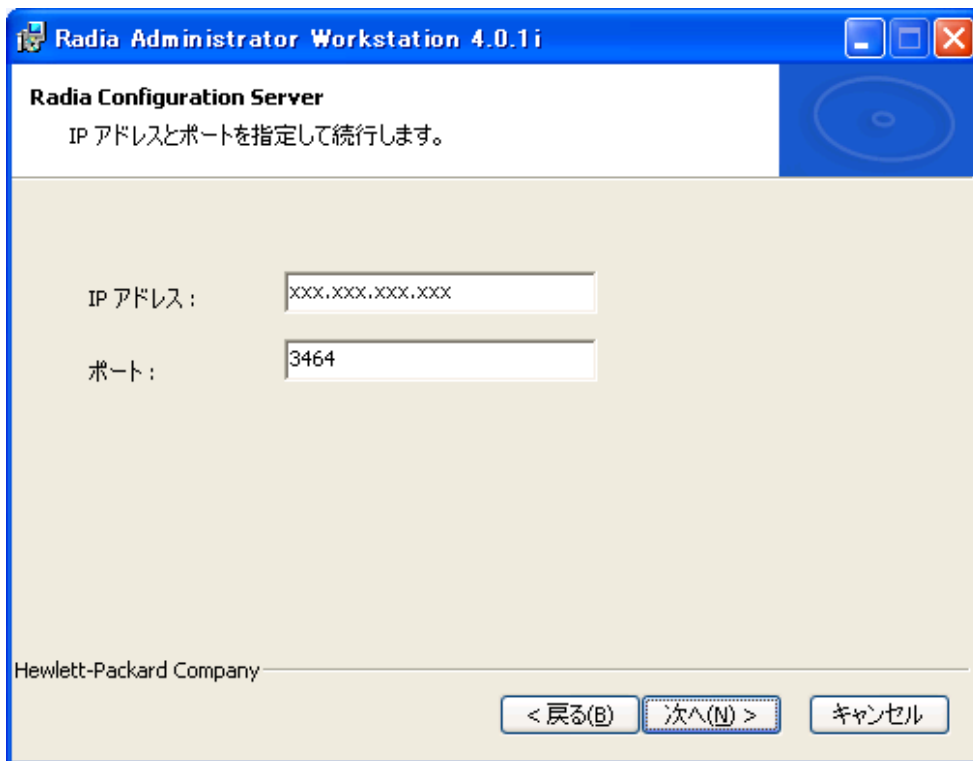



図 3.4 ~ [Radia Configuration Server] ウィンドウ

5. [IP アドレス] ボックスに Radia Configuration Server の IP アドレスを入力します。
6. [ポート] ボックスにポート番号を入力します (デフォルトは 3464 です)。


7. [次へ] をクリックします。
[機能の選択] ウィンドウが表示されます。




図 3.5 ~ [機能の選択] ウィンドウ

8.  をクリックして、インストールする機能を選択します。

ヒント

- すべての機能に同じオプションを設定するには、[Radia Administrator Workstation] の横にある  をクリックして適切なオプションを選択し、すべての機能に設定を適用します。
- インストールに必要なディスク容量を確認するには、[必要ディスク容量] をクリックします。

-  をクリックするたびに、その機能のショートカットメニューが表示されます。

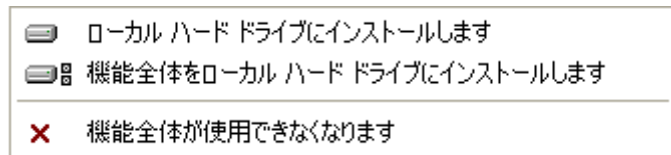


図 3.6 ~ 機能セットのインストール オプション

9. ショートカットメニューからインストール オプションを選択します。これらのオプションについては、下の「表 3.1」で説明します。

表 3.1 ~ Radia Administrator Workstation の機能の設定

オプション	説明
[ローカルハードドライブにインストールします]	最上位に表示される機能をローカルハードドライブにインストールします。ただし、下に一覧表示される下位機能はインストールしません。
[機能全体をローカルハードドライブにインストールします]	下に一覧表示される下位機能も含め、機能全体をインストールします。 注意: このインストールプログラムでは、このオプションまたは [ローカルハードドライブにインストールします] オプションをどの機能に対して選択しても、これらの機能には下位機能がないため、インストール結果は同じになります。
[機能全体が使用できなくなります]	機能はインストールされません。以前にインストールした機能は削除されます。

10. [次へ] をクリックします。

[アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウが表示されます。

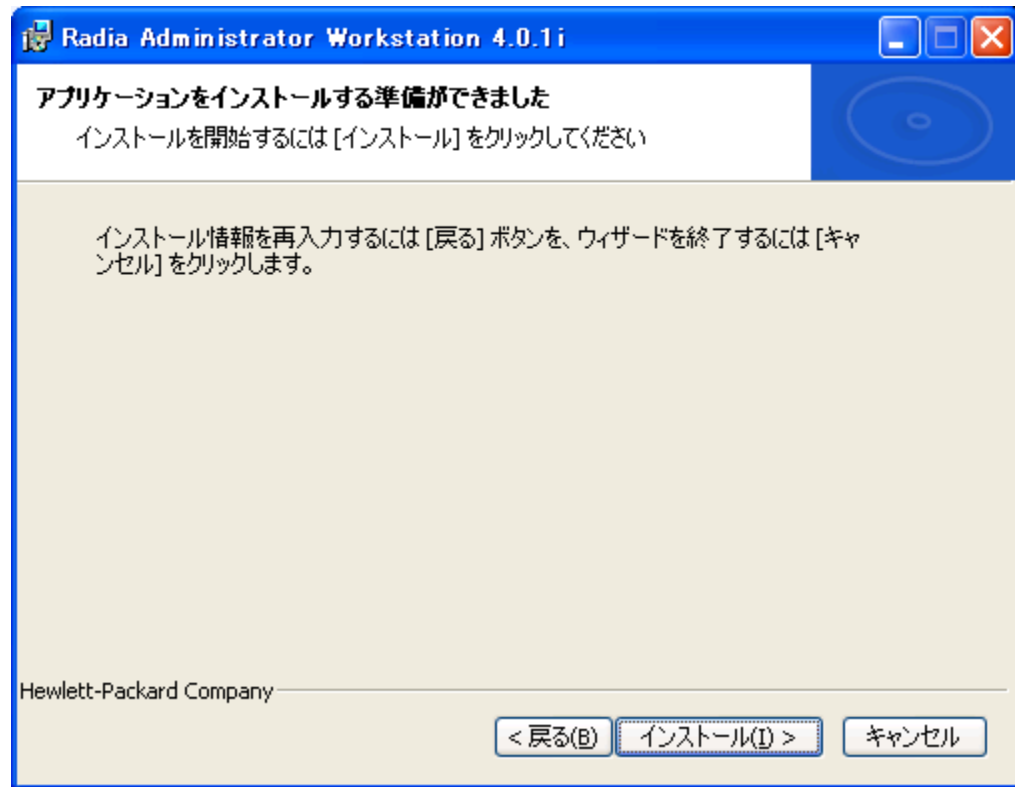


図 3.7 ~ [アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウ

11. [インストール] をクリックしてインストールを開始します。

インストールが完了すると、**Radia Administrator Workstation** が正常にインストールされたことを示すウィンドウが表示されます。

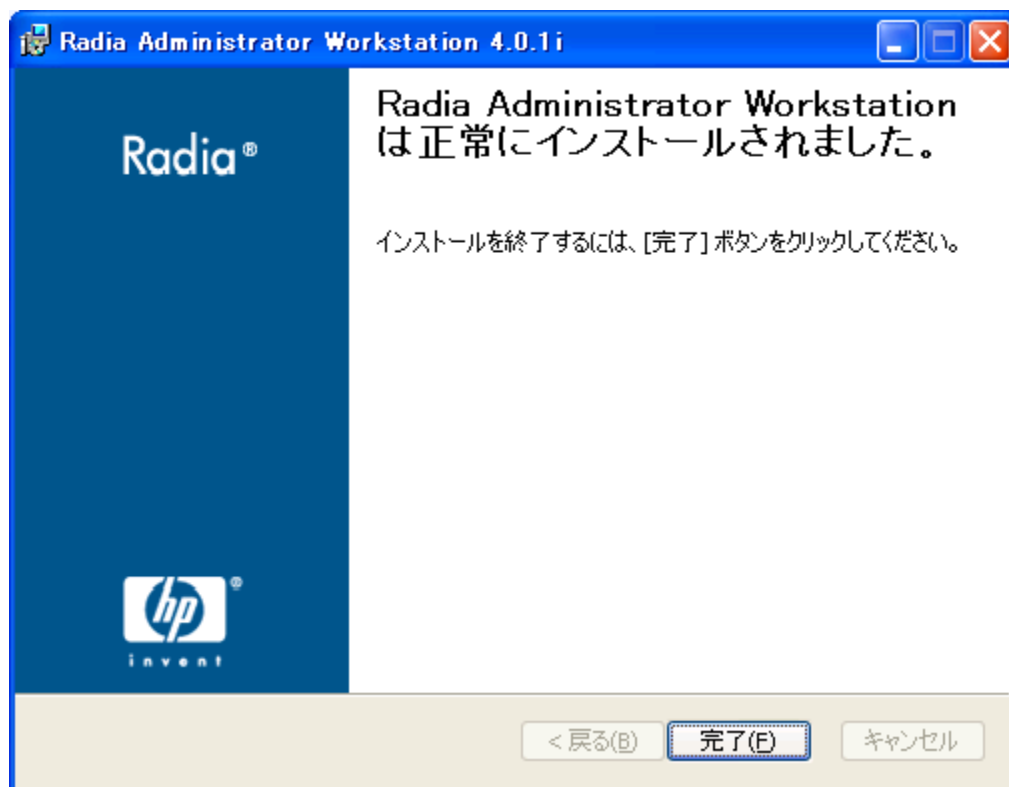


図 3.8 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

12. [完了] をクリックしてインストールを終了します。

コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation をインストールする

Radia Administrator Workstation のインストール プログラムは、コマンド ラインを使用して実行することもできます。たとえば、コンピュータに Radia Packager のみをインストールする場合、Radia Administrator Workstation インストール ファイルが格納されているディレクトリから次のコマンド ラインを実行します。

```
SETUP.EXE ADDLOCAL=NVDINSTALLPACKAGER
```

インストールする機能を指定する

インストールする機能を指定するには、適切な機能状態引数 (ADDLOCAL など) を使用して、インストールする機能を指定します。

表 3.2 ~ Radia Administrator Workstation の機能状態引数

指定可能な引数	機能の状態の設定
ADDLOCAL	[ローカル ハード ドライブにインストールします] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。
ADDSOURCE	[ネットワークから実行する形式でインストールします] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。
ADVERTISE	[機能は必要になったときにインストールできます] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。
REMOVE	[機能全体が使用できなくなります] に設定する機能のカンマ区切りのリストを入力します。 この場合、削除されるのは機能のみであり、製品全体ではありません。したがって、REMOVE プロパティを使用して各機能名を入力しても、コアの製品はコンピュータにインストールされたままとなります。 製品全体を削除するには、「REMOVE=ALL」と入力します。

コマンド ラインで機能を指定する際、Radia Administrator Workstation の各機能は次のように指定します。

- | | |
|----------------------------|-----------------------|
| ■ NVDINSTALLPACKAGER | Radia Packager |
| ■ NVDINSTALLPUBLISHER | Radia Publisher |
| ■ NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER | Radia System Explorer |
| ■ NVDINSTALLCLIENTEXPLORER | Radia Client Explorer |
| ■ NVDINSTALLSCREENPAINTER | Radia Screen Painter |

たとえば、コンピュータに **Radia System Explorer** と **Radia Client Explorer** をインストールする場合は、コマンド ラインで次のように指定します。

```
SETUP.EXE ADDLOCAL= NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER,NVDINSTALLCLIENTEXPLORER
```

警告

コマンド ラインからインストールを実行する場合は、必ず Radia Configuration Server の IP アドレスをインストール プログラムに渡してください。次に例を示します。

```
SETUP.EXE NVD OBJZMASTER_ZIPADDR=10.10.10.1
```

追加のコマンド ライン引数

下の「表 3.3」では、コマンド ラインでインストール プログラムに渡すことができる追加の引数について説明します。

表 3.3 ~ コマンド ライン引数

引数	説明
/qn	サイレント インストールを実行します。
/qb	インストール時に進行状況バーのみを表示します。
/l*v drive:¥install.log	Windows インストーラの詳細なログを作成します。 注意: このオプションを使用すると、インストールのパフォーマンスに影響が生じる可能性があります。
/a TARGETDIR= drive:¥targetdirectory	指定のターゲット ディレクトリに Windows インストーラの AIP を作成します。 注意: Windows インストーラの管理インストール ポイント (AIP) は、管理制御ポイント (ACP) とも呼ばれます。 ターゲット ディレクトリには、RADADMIN40.MSI、インストールフォルダ、および setup.exe が格納されます。 AIP の作成後は、setup.exe を実行して、適切なコマンドラインパラメータを渡すことができます。これにより、Windows インストーラが起動し、指定したパラメータがインストーラに渡されます。

Radia Administrator Workstation を削除する

Windows インストーラのインストール プログラムは、Radia 4.x 管理者を削除する機能を備えています。ここでは、インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation を削除する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を削除する

ここでは、インストール ウィザードを使用して、Radia Administrator Workstation を削除する (アンインストールする) 方法について説明します。

注意

Radia Administrator Workstation の特定の機能を削除するには、[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウの [変更] オプションを使用します。これについては、105 ページの「Radia Administrator Workstation のインストールを変更する」で説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を削除するには

1. Radia Administrator Workstation のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** をダブルクリックします。

[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウが表示されます。

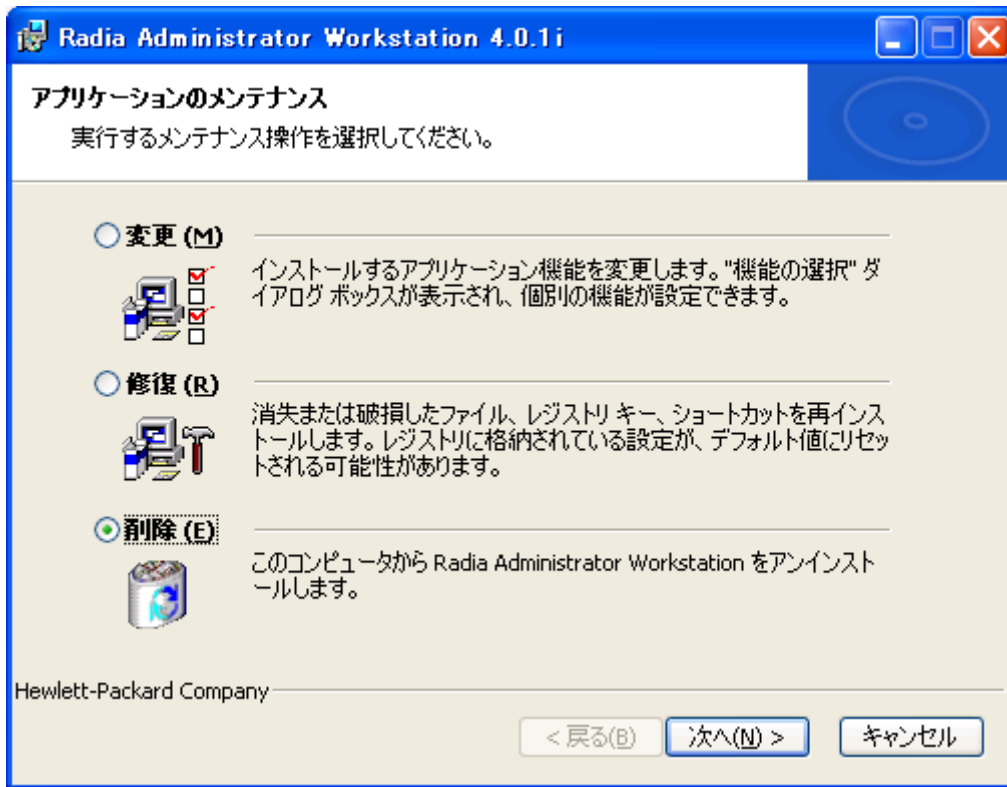


図 3.9 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ

2. [削除] オプションを選択します。

3. [次へ] をクリックします。

Radia Administrator Workstation のアンインストールを確認するウィンドウが表示されます。



図 3.10 ~ [Radia Administrator Workstation のアンインストール] ウィンドウ

4. [次へ] をクリックします。

Radia Administrator Workstation のファイルがコンピュータから削除されます。

[Radia Administrator Workstation は正常にアンインストールされました。] ウィンドウが表示されます。

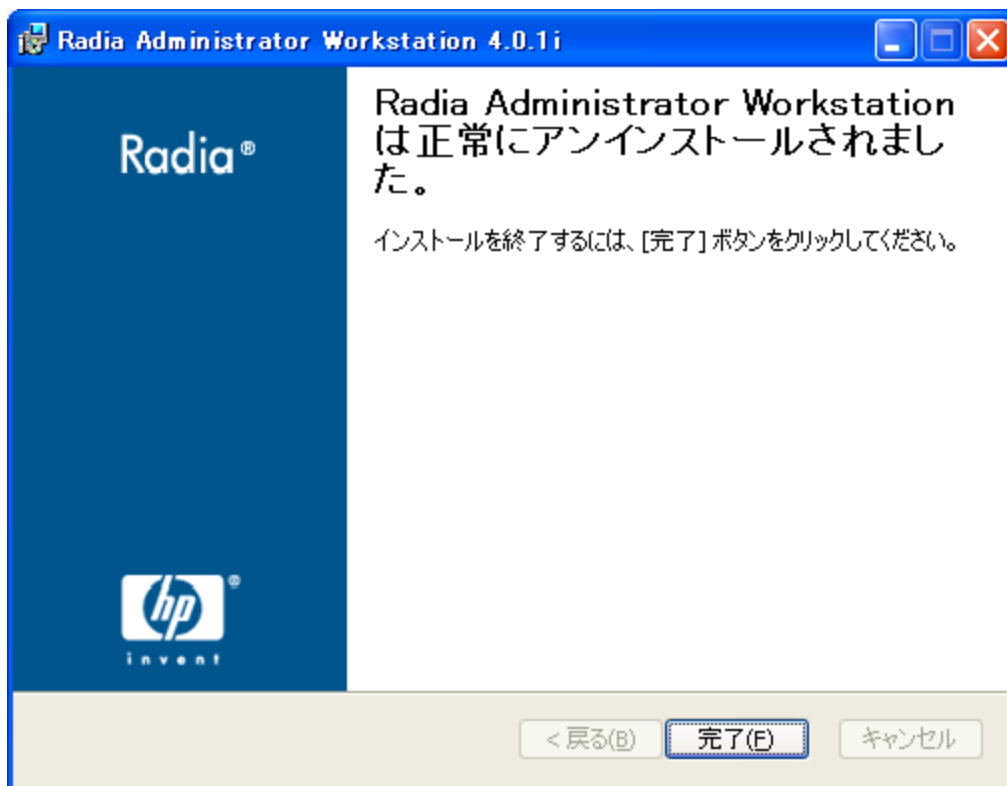


図 3.11 ~ アンインストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

5. [完了] をクリックします。

コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を削除する

ここでは、コマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation を削除する（アンインストールする）方法について説明します。

コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を削除するには

- Radia Administrator Workstation のインストール ファイルが格納されているフォルダから次のコマンド ラインを入力します。

```
SETUP.EXE REMOVE=ALL
```

または

Radia Administrator Workstation の個別の機能を削除する場合は、削除する機能のカンマ区切りのリストをコマンド ラインで入力します。

例

Radia System Explorer および Radia Client Explorer をサイレントに削除する場合は、次のように入力します。

```
SETUP.EXE REMOVE=NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER,NVDINSTALLCLIENTEXPLORER /qn
```

注意

Radia 4.x 管理者ワークステーションの各機能は次のように指定します。

- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| ▪ Radia Packager | NVDINSTALLPACKAGER |
| ▪ Radia Publisher | NVDINSTALLPUBLISHER |
| ▪ Radia System Explorer | NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER |
| ▪ Radia Client Explorer | NVDINSTALLCLIENTEXPLORER |
| ▪ Radia Screen Painter | NVDINSTALLSCREENPAINTER |

警告

この場合、削除されるのは機能のみであり、製品全体ではありません。したがって、REMOVE プロパティを使用して各機能名を入力しても、コアの製品はコンピュータにインストールされたままとなります。

Radia Administrator Workstation を修復する

Windows インストーラのインストール プログラムは、Radia Administrator Workstation を修復する機能を備えています。たとえば、消失した Radia Administrator Workstation モジュールがある場合、このツールを使用してインストールを修復することができます。このツールでは、コンピュータに存在するモジュールの方がインストールで提供されるモジュールより新しい場合、コンピュータのモジュールは上書きされません。

ここでは、インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation を修復する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を修復する

ここでは、インストール ウィザードを使用して、Radia Administrator Workstation を修復する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を修復するには

1. Radia Administrator Workstation のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** をダブルクリックします。

[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウが表示されます。

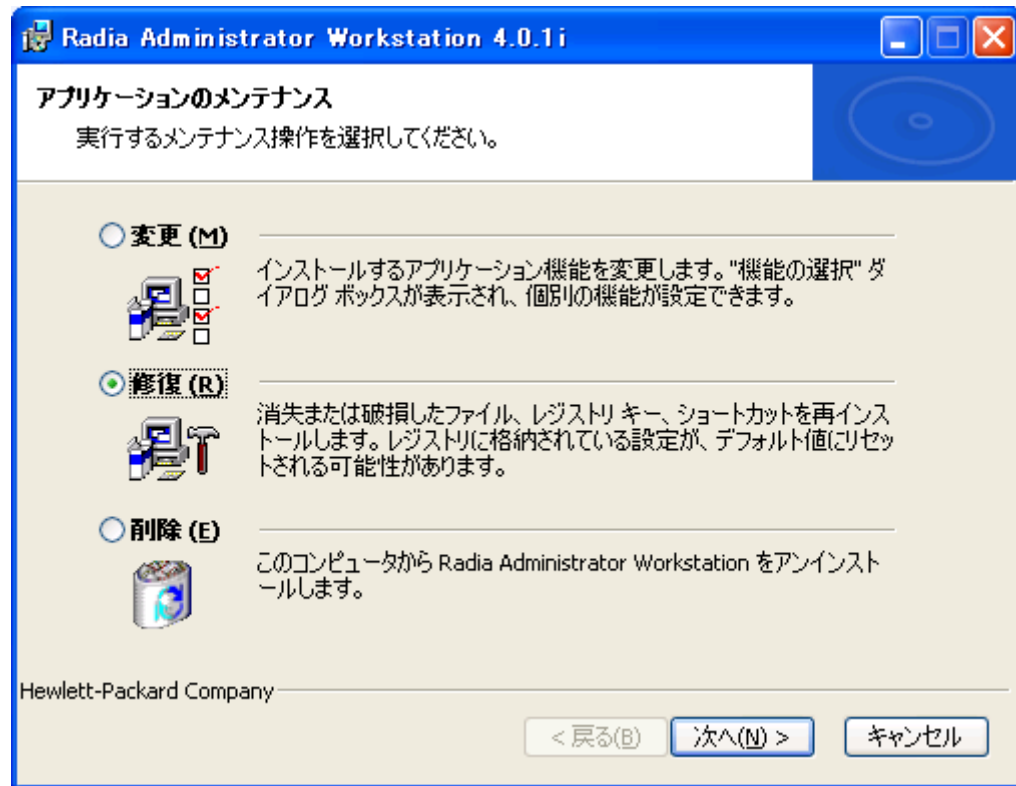


図 3.12 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ

2. [修復] オプションを選択します。

3. [次へ] をクリックします。
[アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウが表示されます。

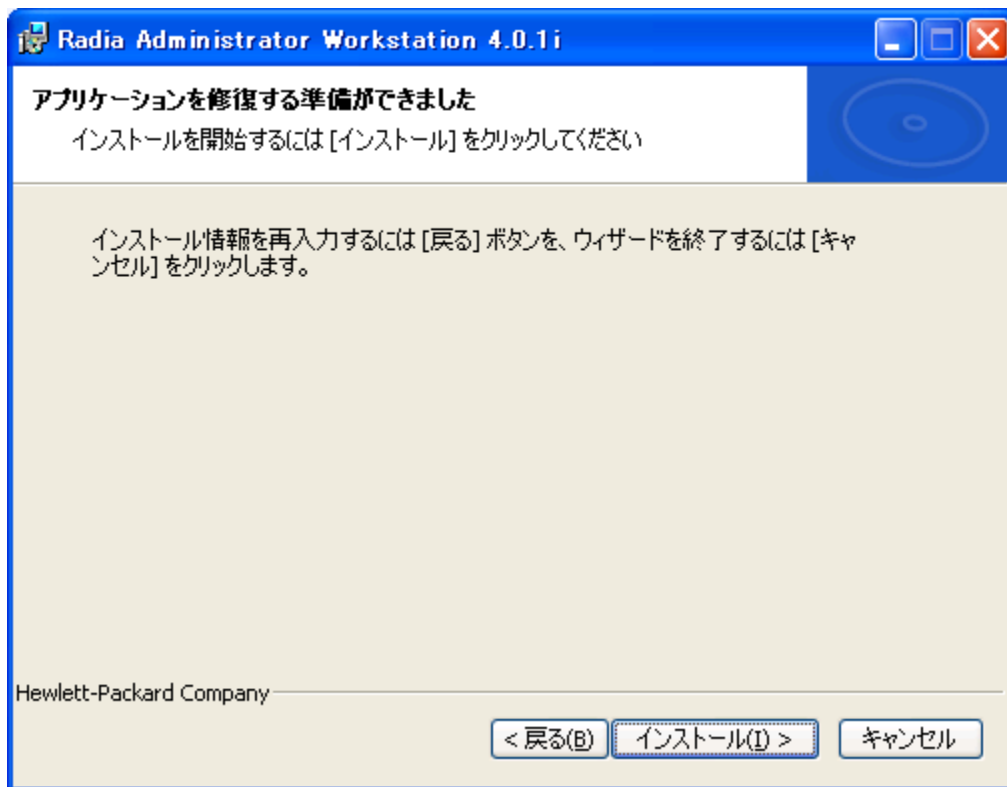


図 3.13 ~ [アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウ

4. [次へ] をクリックします。

修復が完了すると、[Radia Administrator Workstation は正常にインストールされました] ウィンドウが表示されます。

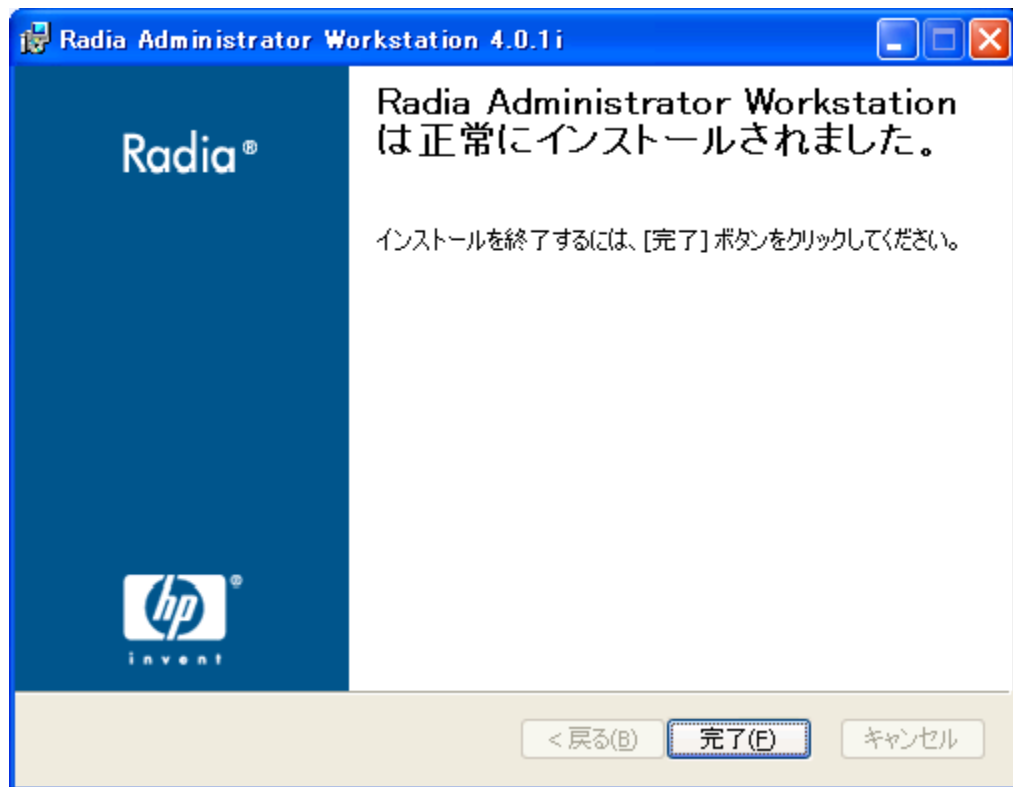


図 3.14 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

5. [完了] をクリックします。

コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を修復する

ここでは、コマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation を修復する方法について説明します。

コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を修復するには

- Radia Administrator Workstation のインストール ファイルが格納されているフォルダから次のコマンド ラインを入力します。

```
msiexec /f radadmin40.msi
```

注意

このコマンド ラインと共に追加のパラメータを使用することができます。詳細については、Windows インストーラのドキュメントを参照してください。

Radia Administrator Workstation のインストールを変更する

Windows インストーラのインストール プログラムは、個別の機能を追加または削除して、Radia 4.x 管理者ワークステーションのインストールを変更する機能を備えています。ここでは、インストール ウィザードおよびコマンド ラインを使用して、Radia Administrator Workstation のインストールを変更する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを変更する

ここでは、インストール ウィザードを使用して、Radia Administrator Workstation のインストールを変更する方法について説明します。

インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを変更するには

1. Radia Administrator Workstation のインストール ファイルが格納されているフォルダの **setup.exe** をダブルクリックします。

[アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウが表示されます。

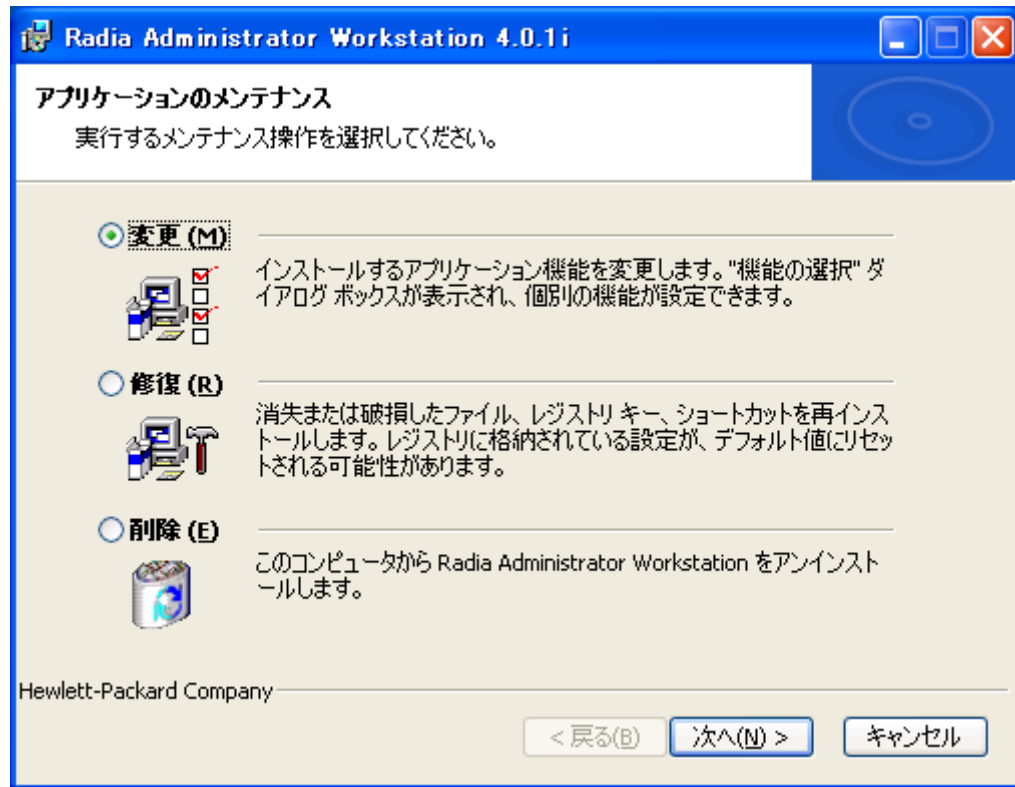


図 3.15 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ

2. [変更] オプションを選択します。

3. [次へ] をクリックします。

[機能の選択] ウィンドウが表示されます。このウィンドウの使用方法については、85 ページの「*Radia Administrator Workstation* をインストールする」を参照してください。



図 3.16 ~ [機能の選択] ウィンドウ

4. [次へ] をクリックします。
[アプリケーションを変更する準備ができました] ウィンドウが表示されます。

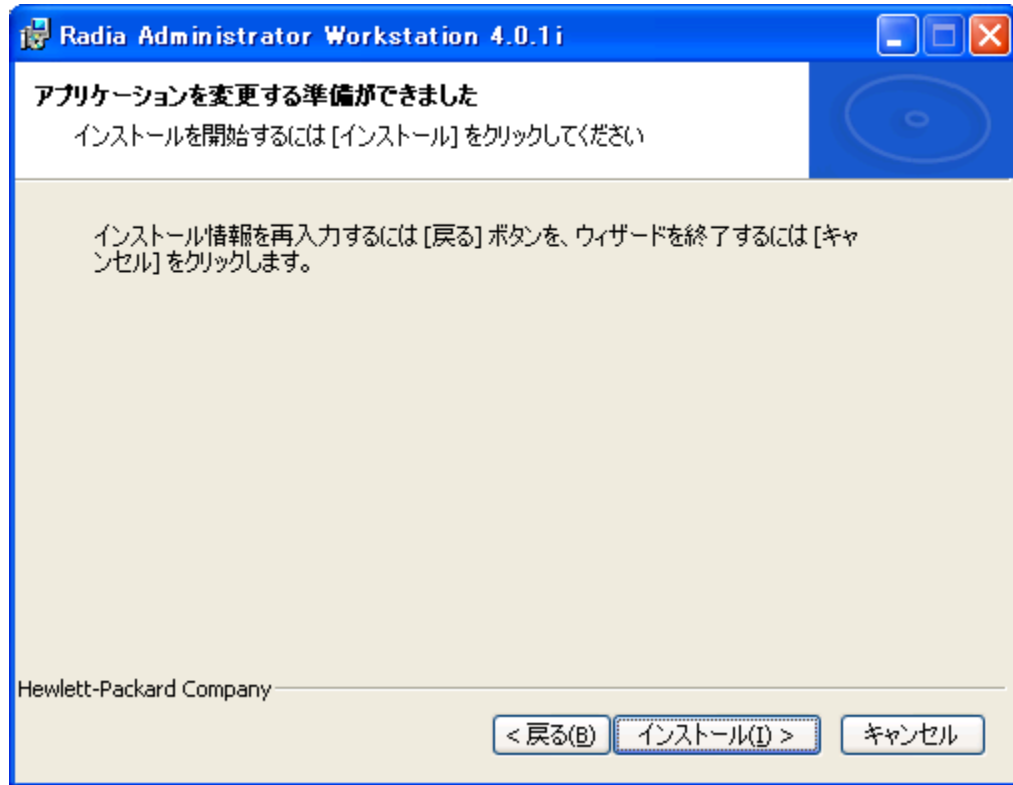


図 3.17 ~ [アプリケーションを変更する準備ができました] ウィンドウ

5. [インストール] をクリックします。

Radia Administrator Workstation が正常にインストールされたことを示すウィンドウが表示されます。

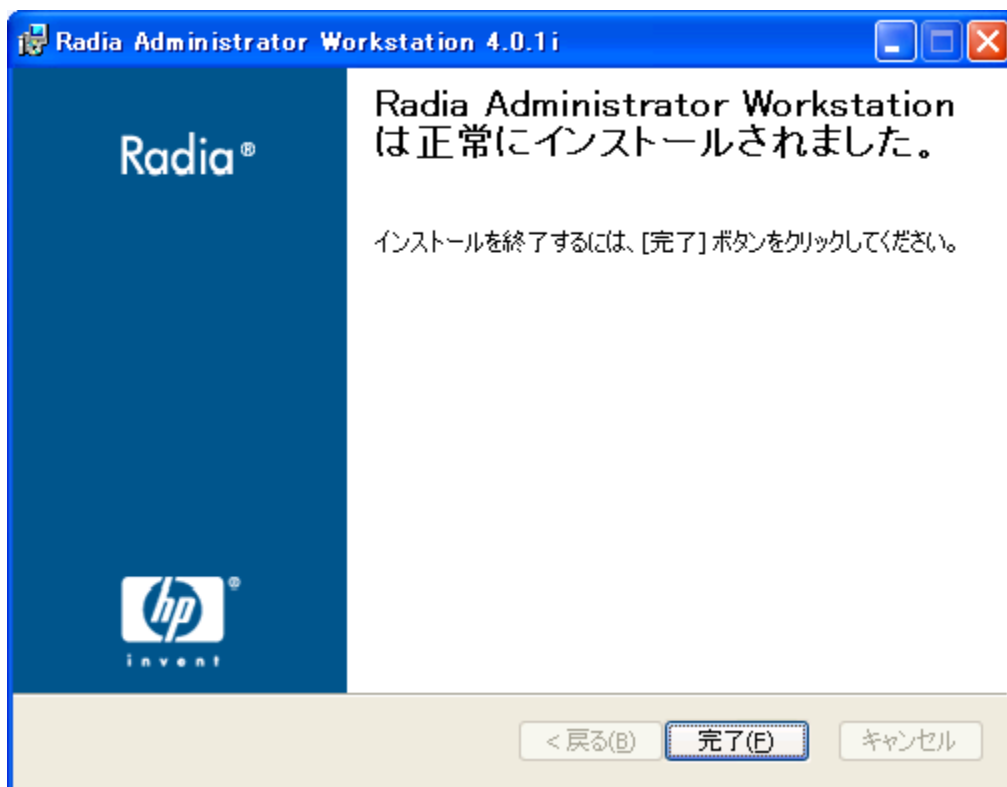


図 3.18 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ

6. [完了] をクリックしてインストール プログラムを終了します。

コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを変更する

コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを変更するには

- Radia Administrator Workstation のインストール ファイルが格納されているフォルダから次のコマンド ラインを入力します。

```
SETUP.EXE FeatureStateArgument=feature1,feature2
```

詳細については、94 ページの「表 3.2」を参照してください。

例

Radia Packager をローカル ハード ドライブにインストールし、Radia System Explorer および Radia Client Explorer が使用できないようにする場合は、次のコマンド ラインを使用します。

```
SETUP.EXE ADDLOCAL=NVDINSTALLPACKAGER REMOVE=NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER,NVDINSTALLCLIENTEXPLORER
```

追加の引数については、95 ページの「追加のコマンド ライン引数」を参照してください。

まとめ

- **Radia Administrator Workstation** は、4 つの機能セット (**Radia Publisher**、**Radia System Explorer**、**Radia Client Explorer**、および **Radia Screen Painter**) を含む 1 つのパッケージで構成されます。
- **Radia Administrator Workstation** は、クリーンなコンピュータにインストールします。
- **Radia Administrator Workstation** は、コマンド ラインまたはインストール ウィザードを使用してインストールすることができます。

アプリケーションとコンテンツ をパッケージ化する

この章は以下を目的としています。

- パッケージ化プロセスについて理解する。
- コンポーネント選択モードまたはインストール モニタ モードでアプリケーションがパッケージ化できるようになる。
- Radia Publishing Adapter、Radia Extensions for Windows Installer、および Radia Publisher について理解する。
- Radia System Explorer の新規アプリケーション ウィザードでサービスが作成できるようになる。

このマニュアルでは、**Radia Software Manager** の推奨される実装を解説します。方法は組織のニーズに合わせて調整することになりますが、**Radia Software Manager** を包括的に理解するためにこのマニュアルに目を通しておくことをお勧めします。この章では、パッケージ化について説明します。

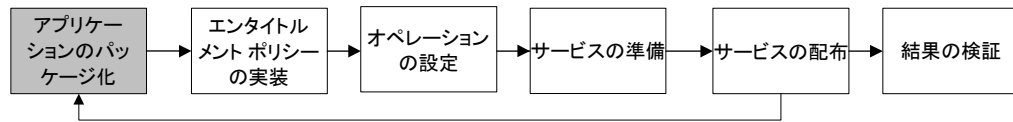


図 4.1 ~ 『Radia Software Manager ガイド』の概要

注意

Radia 3.x の Radia Publisher は、Radia 4.x では Radia Packager という名前に変更されました。Radia Packager は、Radia 3.x の Publisher と似ていますが、コンポーネント選択モードおよびインストール モニタ モードでのみパッケージ化する点が異なります。Windows インストーラでインストールまたは管理されているアプリケーションのパッケージ化プロセスは、Radia Publisher で処理されます。Radia Publisher については、『Radia Publisher ガイド』で説明します。

Radia を使用したパッケージ化およびパブリッシュについて

パッケージ化とは、リソースの識別、リソースのインストール属性の編集、リソースのインストール方法の定義から、リソースとインストール指示をコンピュータが読み取り可能なファイル形式で保存するまでのプロセスを指します。パッケージには、通常 1 つ以上のファイルと設定が含まれます。

パブリッシュとは、パッケージとそこに組み込まれた情報を **Radia** データベース(**Radia Configuration Server** データベースとも呼ぶ) にインポートするプロセスのことです。パッケージのパブリッシュは、パッケージの内容をお使いの環境に分散して配布する前に行わなければなりません。

Radia では、さまざまなパッケージ オプションおよびパブリッシュ オプションを多数のツールで提供しています。作成してパブリッシュするリソース パッケージのタイプを確認してから、**Radia** のパッケージ用製品やパブリッシュ用製品を必要に応じて選択します。

- Windows インストーラ ファイルをパッケージ化する場合、**Radia Packager for Windows Installer** を使用します (『Radia Extensions for Windows Installer Guide』を参照してください)。
- Windows インストーラ ファイルをパブリッシュする場合、**Radia Publisher** を使用します (『Radia Publisher ガイド』を参照してください)。

- その他のタイプのファイルやアプリケーションをパッケージ化およびパブリッシュする場合は、**Radia Packager** を使用します（『**Radia Application Manager ガイド**』または『**Radia Software Manager ガイド**』を参照してください）。

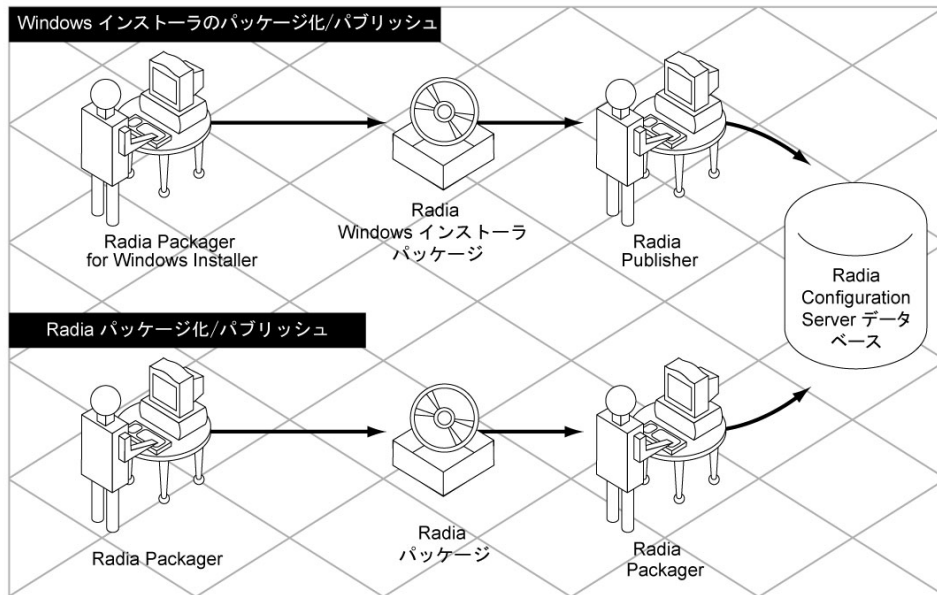


図 4.2 ~ Radia パッケージ/パブリッシュ オプション

Radia Packager について

パッケージ化は、ソフトウェアのコンポーネントを特定し、それらのコンポーネントをパッケージにまとめるプロセスです。パッケージには、ソフトウェアを構成するファイル、ショートカット、リンク、レジストリ エントリが含まれます。配布するソフトウェアには、企業の電話番号リストなどの単一のデータ ファイルから、Microsoft Office 2000 などのアプリケーション スイートまで、さまざまな形態があります。

Radia Packager には、以下の 2 種類のパッケージ モードがあります。

- **コンポーネント選択モード**
コンポーネント選択モードでは、アプリケーションを構成する各コンポーネント (ファイル、ディレクトリ、レジストリ エントリ、リンクなど) を選択します。単純なデータまたはアプリケーションのパッケージ化には、このモードをお勧めします。
- **インストール モニタ モード**
インストール モニタ モードでは、ソフトウェアのインストール前とインストール後にコンピュータをスキャンして、パッケージ対象を決定します。インストール前後のスキャンの差分により、コンピュータにどのような変更が行われたかが判別されます。この差分を基に、Radia データベースに転送させるパッケージを作成します。アプリケーションを構成するコンポーネントの一部が不明な場合に、このモードを使用してパッケージ化することをお勧めします。

注意

ここで言うコンピュータとは、ワークステーションまたはサーバーのことです。

使用するモードを決める際には、アプリケーションがどの程度複雑か、アプリケーションの構造についてユーザーがどの程度知識を持っているか、アプリケーションのネイティブ インストール機能を使用するかどうかなどが考慮の対象になります。2 つのモードの詳細については、この章で後ほど説明します。

作成したパッケージは、Radia データベースに転送させます。パッケージが Radia データベースにコピーされると、以下のインスタンスが作成されます。

- **Application Packages (PACKAGE)** インスタンス。Radia データベースに転送させたパッケージです。
- **File Resources (FILE)** インスタンス。パッケージ内のファイルごとに 1 つずつ作成されます。
- **Desktop (DESKTOP)** インスタンス。パッケージ内のプログラム グループ、リンク、およびショートカットごとに 1 つずつ作成されます。
- **Path (PATH)** インスタンス。ソフトウェアがインストールされる 一意のパスごとに 1 つずつ作成されます。
- **Registry Resources (REGISTRY)** インスタンス。パッケージ内のハイブごとに 1 つずつ作成されます。

注意

上記の各インスタンスは、SOFTWARE ドメインのデフォルト クラスのいずれか 1 つ (PACKAGE クラスまたは FILE クラスなど) に格納されます。DLL クラスなど、独自のクラスを Radia データベースに追加することもできます。クラスの追加については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

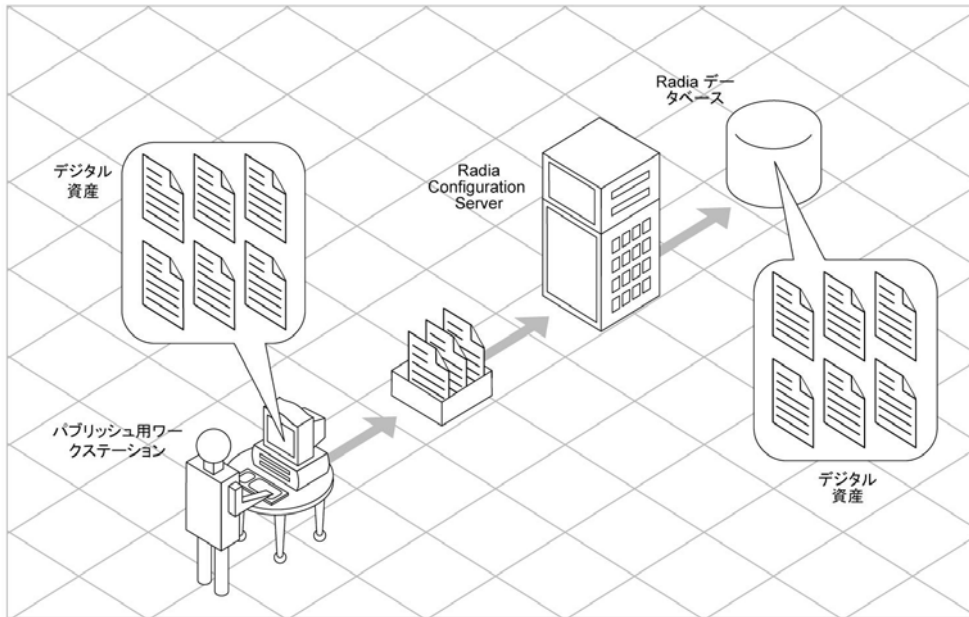


図 4.3 ~ デジタル資産のパッケージ化

パッケージの転送後に、Radia System Explorer を使用してサービスを作成しポリシーを割り当てます。詳細については、223 ページの「第 5 章: エンタイトルメント ポリシーを実装する」を参照してください。

パッケージ化の際の考慮項目のチェックリスト

データをパッケージ化する前に、いくつかの点を考慮する必要があります。

全般

- パッケージ化されるデータの内容をどの程度把握していますか。
 - 単純なパッケージで、データの内容をすべて把握している場合は、コンポーネント選択モードを使用します。
 - 複雑なパッケージで、データの内容がすべて把握できていない場合は、インストール モニタ モードを使用します。
- パッケージ名の命名については、現在の組織の命名規則に従ってください。
- 一意のセッション ID を付けるかどうかについては、現在の組織の慣行に従ってください。

システム設定

詳細については、「手順 4: 必須のシステム設定を設定する」(インストール モニタ モードの場合は 130 ページの、コンポーネント選択モードの場合は 173 ページの) を参照してください。

- ターゲット コンピュータ (ワークステーションまたはサーバー) のオペレーティング システムは何ですか。
- データの処理に必要な RAM は何 MB ですか。
- データの処理に最低限必要なプロセッサ速度は何 MHz ですか。

アクティブ化オプション

- アプリケーションを配布後すぐにアクティブ化しますか、後でアクティブ化しますか。
詳細については、「手順 5: 日付と時刻の制約を設定する」(インストール モニタ モードの場合は 132 ページの、コンポーネント選択モードの場合は 175 ページの)を参照してください。
- 配布するアプリケーションのバージョンは何ですか。また、それをいつアクティブ化しますか。
詳細については、291 ページの「サービスを準備する」を参照してください。

データ オプション

詳細については、「[データ オプション] タブ」の場合は 214 ページの、「デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する」の場合は 149 ページの、「インストール モニタ モード」の場合は 185 ページの「コンポーネント選択モードでパッケージ化する」を参照してください。

- 使用する圧縮のタイプは何ですか。
- データの保存先は Radia データベースですか、Radia Proxy Server ですか。
- NTFS ボリュームに配布中のファイルとフォルダに対して、セキュリティ設定を保持しますか。
- Radia Software Manager クライアントにメンテナンスを提供しますか。
- リソースの転送方法は何ですか。強制ロック メソッドを使用しますか。
- 更新を丸ごと送信しますか、変更部分のみを配布しますか。
- Windows 2000 の場合、ファイルおよびフォルダに対してシステム ファイル保護 (SFP: System File Protection) を強制しますか。

検証オプション

詳細については、「[クライアント管理] タブ」の場合は 210 ページの、「デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する」の場合は 146 ページの、「インストール モニタ モード」の場合は 182 ページの「コンポーネント選択モードでパッケージ化する」を参照してください。

- 標準のデフォルト検証オプションを使用しますか。
- インストールは今回が初めてですか。検証しなければならないものがありますか。
- ファイルの配布時に、日、時刻、サイズのどの統計情報をチェックしますか。
- すべてのファイルを更新しますか、新しいファイルのみを更新しますか。
- ファイルが既に存在する場合、新しいファイルを再配布することで、既存のファイルの変更内容が上書きされても良いですか。
- ファイルを配布するかどうかを判別する基準として内部バージョンを使用しますか。

配信オプション

詳細については、「[クライアント管理] タブ」の場合は 210 ページの、「デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する」の場合は 146 ページの、「インストール モニタ モード」の場合は 182 ページの「コンポーネント選択モードでパッケージ化する」を参照してください。

- ファイルまたはメソッドを配布する順番は決まっていますか。
- データは必須ですか、オプションですか。
注意: Radia Application Manager がインストールされている場合、配信できるのは必須ファイルのみです。
- 必要なのは、ユーザー コンテキストで配布されたファイルですか、マシン コンテキストで配布されたファイルですか。

クライアントの動作

詳細については、「[クライアントの動作] タブ」の場合は 217 ページの、「デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する」の場合は 152 ページの、「インストール モニタ モード」の場合は 187 ページの「コンポーネント選択モードでパッケージ化する」を参照してください。

- ファイルの配布後に実行するメソッドがありますか。ある場合は、どのメソッドを実行しますか。
- 配布されたファイルを有効にしなければならない事態が発生しますか。そのような事態が発生する場合は、配布されたファイルを有効にするために、どのメソッドを実行しますか。
- サブスクライバがソフトウェアにこれ以上サブスクライブされない場合は、ファイルを削除しますか。
- 配布しているファイルの新旧バージョンを比較しますか。比較する場合は、どのメソッドを使用しますか。

インストール モニタ モードを使用する

インストール モニタ モードでは、ソフトウェアのインストール前とインストール後にコンピュータをスキャンして、パッケージ対象を決定します。インストールが完了すると、インストール前後のスキャンの差分が計算され、コンピュータにどのような変更が行われたかが判別されます。この差分を基に、Radia データベースに転送させるパッケージを作成します。

アプリケーションを構成するコンポーネントの一部が不明な場合は、インストール モニタ モードでパッケージ化することをお勧めします。

インストール モニタ モードでは、以下の 5 つの段階でパッケージ化を行います。

1. アプリケーションのハードウェア、ソフトウェア、およびオペレーティング システムの要件を**定義**します。
2. コンピュータ上のハードウェアおよびソフトウェアを**解析** (スキャン) します。
3. パッケージ化するソフトウェアを**インストール**します。
4. コンピュータ上のハードウェアおよびソフトウェアを再び**解析** (スキャン) します。インストール前とインストール後のスキャンの差分が、インストールしたソフトウェアを表します。
5. パッケージを Radia データベースに**転送**させます。

インストール モニタ モードを使用する際の推奨事項

インストール モニタ モードでは、精度の高いスキャンが実行されます。ここでは、留意しておく点と役に立つ細かい点をいくつか挙げておきます。システム管理ソフトウェアに理解しているユーザーであれば、既に認識済みの情報もあるかもしれません。

インストール モニタ モードでアプリケーションをパッケージ化する場合は、以下の点に留意してください。

- **クリーンなコンピュータを用意します。**
クリーンなコンピュータには、ターゲット オーディエンスと同じオペレーティング システムおよび **Radia Administrator Workstation** がインストールされています。コンピュータの設定を変更しないでください。
- **パッケージ化のどの段階でも、ターゲット コンピュータと同じオペレーティング システムと言語バージョンを使用します。**

警告

オペレーティング システムの各言語バージョンには、明らかな違いがあります。レジストリ キー名およびディレクトリ ロケーションが違っている場合は、パッケージ担当者が想定している動作と実際の動作の間に大きな差異が生じる可能性があります。

たとえば、フランス語版の Windows 9x、Windows NT、Windows 2000、または Windows Server 2003 にフランス語版 Office 2000 for Windows をインストールする場合は、配布対象と同じフランス語版オペレーティング システムを実行しているコンピュータでアプリケーションをパッケージ化してください。

- スタティック IP アドレスを持つコンピュータでパッケージ化します。
パッケージ化を実行するコンピュータがダイナミック ホスト設定 プロトコル (DHCP: Dynamic Host Configuration Protocol) を使用してダイナミック IP アドレスを取得している場合は、コンピュータを再起動するたびに、異なる IP アドレスが適用されます。インストール モニタ モードを使用しているときに、パッケージ化対象のソフトウェアによってコンピュータが再起動されると、レジストリ内の IP アドレスが変更されます。そのため、スタティック IP アドレスを持つコンピュータでパッケージ化することをお勧めします。

- Visual Basic アプリケーションをパッケージ化する場合は、Visual Basic 5 のサポート ファイルを含む Radia パッケージを作成してください。

Radia Administrator Workstation と共にインストールされる Radia System Explorer は Visual Basic 5 アプリケーションなので、以下の Visual Basic 5 サポート ファイルがインストールされます。

- | | |
|----------------|----------------|
| • ASYCFILT.DLL | • COMCAT.DLL |
| • COMCTL32.OCX | • COMDLG32.OCX |
| • MSVBVM50.DLL | • OLEAUT32.DLL |
| • OLEPRO32.DLL | • STDOLE2.TLB |

インストール モニタ モードを使用し、Radia System Explorer がインストールされているコンピュータで Visual Basic 5 アプリケーションをパッケージ化する場合、上記のサポート ファイルはパッケージには含まれません。これらのファイルは、インストール前のスキャンを実行する前からコンピュータに存在し、インストール後のスキャンでも、ソフトウェアのインストールでファイルが追加されたと認識されないためです。

必要なサポート ファイルを Visual Basic アプリケーションと共に配布する場合は、コンポーネント選択モードで、Visual Basic 5 サポート ファイルのみを含むパッケージを作成し、Visual Basic 5 用にこのパッケージをアプリケーション パッケージにまとめます。複数のパッケージをまとめる方法については、Radia Packager ヘルプのトピック「*Packaging Strategy for the Radia Administrator*」にある「*Inter-Package Relationships*」を参照してください。

もう 1 つの方法は、Radia System Explorer がインストールされていないコンピュータで Visual Basic 5 アプリケーションをパッケージ化することです。Radia Administrator Workstation をインストールする際に Radia System Explorer をスキップするには、ドライブに CD-ROM を挿入し、コマンド ラインで次のように入力します。

```
CDDrive: ¥radadmin.exe -ne
```

インストール モニタ モードでパッケージ化する

ここでは、インストール モニタ モードによるパッケージ化の手順を示し、各手順で表示される画面の詳細を説明します。

以下の説明では、WinZip 8.0 の評価版を例に挙げてパッケージ化の手順を示します。WinZip 8.0 は、<http://www.winzip.com> でダウンロードできる単純なシェアウェアです。ターゲット プラットフォームは、Windows 95、98、NT、2000、および Windows Server 2003 です。

以下の例は、インストール モニタ モードを理解するためのものです。実際のパッケージ化の手順は、ソフトウェアによって異なりますので注意してください。

手順 1: Radia Packager にログインする

1. [スタート] ボタンをクリックし、[すべてのプログラム] をポイントします。次に、[Radia Administrator] をポイントし、[Radia Packager] をクリックします。
2. [Radia Packager のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスの [ユーザー ID] にユーザー ID、[パスワード] にパスワードを入力します。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

3. [OK] をクリックします。

手順 2: [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウで必要な情報を指定する

[パッケージ セッションを開きます] ウィンドウを使用すると、パッケージ化のモードを選択し、パッケージ化セッションを識別するための情報を入力することができます。

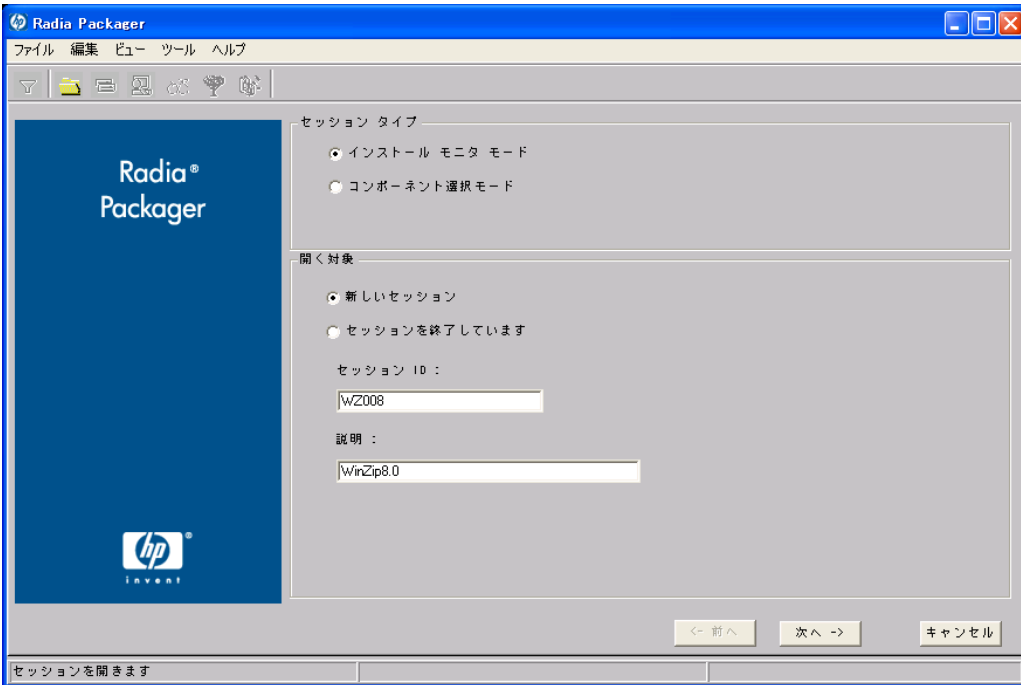


図 4.4 ~ [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

パッケージ化セッションを完了すると、ソフトウェアまたはデータを配布可能な形式にまとめた Radia パッケージが作成されます。この Radia パッケージを後でサービスに接続することになります。ターゲット サブスクリバにソフトウェアまたはデータを配布するためのポリシーを設定します。

次に、上の図 4.4 にある [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウの各オプションについて説明します。

[セッション タイプ] 領域

- **[インストール モニタ モード]**
ソフトウェアまたはデータの構造を把握していない場合は、このモードで **Radia** パッケージを作成します。**Radia Packager** は、コンピュータをスキャンしてから、ネイティブ インストールプログラムでソフトウェアをインストールするように指示します。ソフトウェアがインストールされると、**Radia Packager** はコンピュータを再びスキャンし、その結果を前回のスキャン結果と比較します。検出された差分がパッケージ化され、**Radia** データベースに転送されます。
- **[コンポーネント選択モード]**
配布するファイルを把握しており、インストールがクライアント コンピュータに与える影響を認識している場合は、このモードで **Radia** パッケージを作成します。コンポーネント選択モードでは、パッケージ化して **Radia** データベースに転送させるファイルを特定する必要があります。詳細については、165 ページの「**コンポーネント選択モードを使用する**」を参照してください。

[開く対象] 領域

- **[新しいセッション]**
[新しいセッション] を選択すると、新しいパッケージ化セッションを開始することができます。[セッション ID] ボックスにセッション ID、[説明] ボックスに説明を入力する必要があります。
- **[セッションを終了しています]**
[セッションを終了しています] を選択すると、前回のセッションを再開することができます。
- **[セッション ID]**
半角 1 ～ 6 文字の一意の識別子を入力します。
- **[説明]**
セッションの説明を入力します。

この WinZip の例では、125 ページの図 4.4 に示すとおり、**インストール モニタ モード**で**新しいセッション**を開始します。セッション ID は「**WZ008**」、セッションの説明は「**WinZip 8.0**」です。**[次へ]** をクリックして **[パッケージ プロパティ]** ウィンドウに進みます。

手順 3: パッケージ プロパティを入力する

[パッケージ プロパティ] ウィンドウを使用すると、パッケージ名を指定し、パッケージの補足説明となる情報を入力することができます。

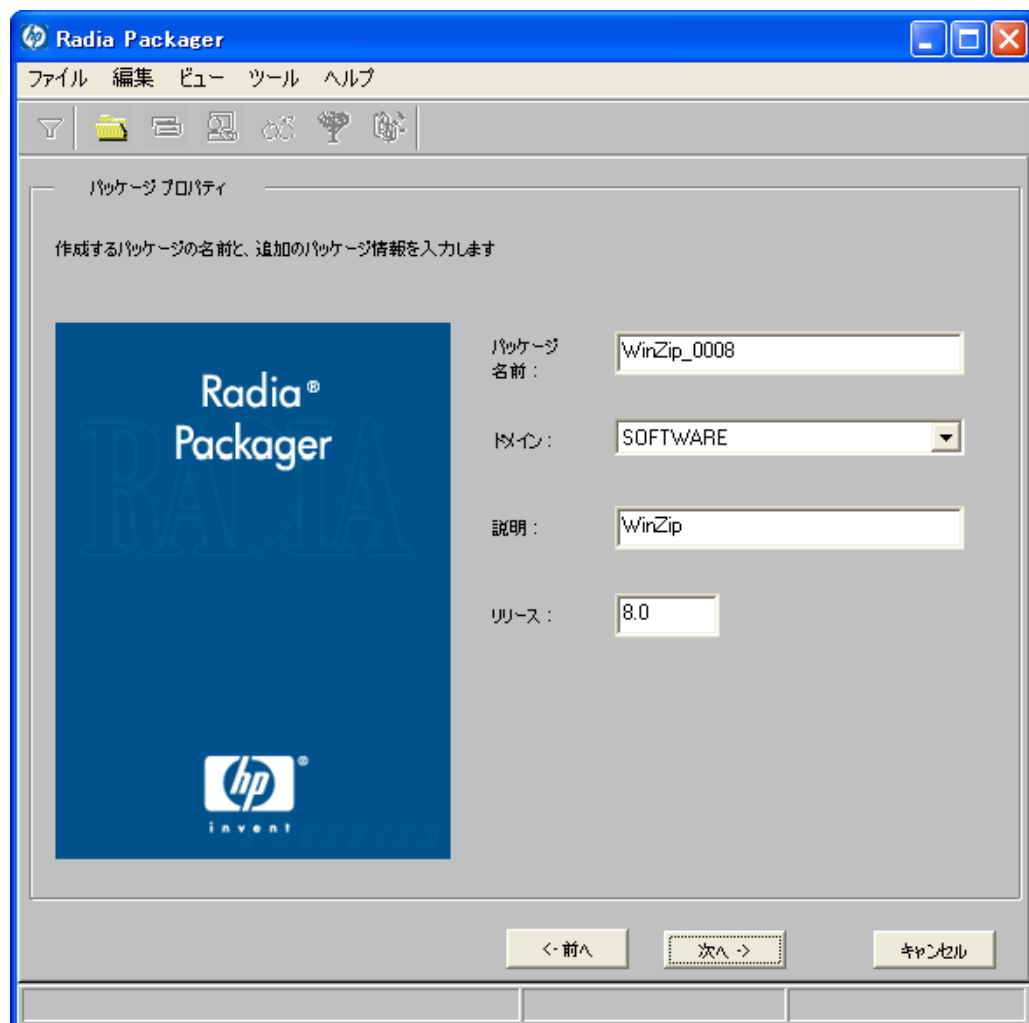


図 4.5 ~ [パッケージ プロパティ] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

■ **【パッケージ名】**

パッケージ名を入力します。これは、Radia データベースで **PACKAGE** クラス インスタンス名となるものです。現在の組織の命名規則に従って命名してください。名前にスペースを入れることはすることができません。

注意

識別子が一意になるように命名規則を策定することができます。Radia Packager は、この識別子を基にデータ オブジェクトとファイル名を生成します。

詳細については、447 の「付録 A: 命名規則」を参照してください。

■ **【ドメイン】**

インスタンスを格納するドメインを選択します。Radia データベースを固有のドメインでカスタマイズした場合を除いて、通常は **SOFTWARE** ドメインです。

■ **【説明】**

パッケージの説明を入力します。

■ **【リリース】**

ソフトウェアのリリース番号を入力します。

この WinZip の例では、127 ページの図 4.5 に示すとおり、パッケージ名に「**WinZip_0008**」、説明に「**WinZip**」、リリース番号に「**8.0**」と指定しています。

注意

現在のセッション情報は、コンピュータ上の **SystemDrive:\Program Files\Novadigm\LIB\ZPAKSESS.EDM** に格納されます。Radia Client Explorer を使用すると、ZPAKSESS.EDM を参照することができます。

129 ページの図 4.6 には、ZPAKSESS.EDM の例が示されています。

現在のパッケージ化セッションを終了して、セッションを再開しない場合は、ZPAKSESS.EDM を削除することができます。Radia System Explorer を使用して、Radia データベースから **PACKAGE** インスタンスを削除することもすることができます。

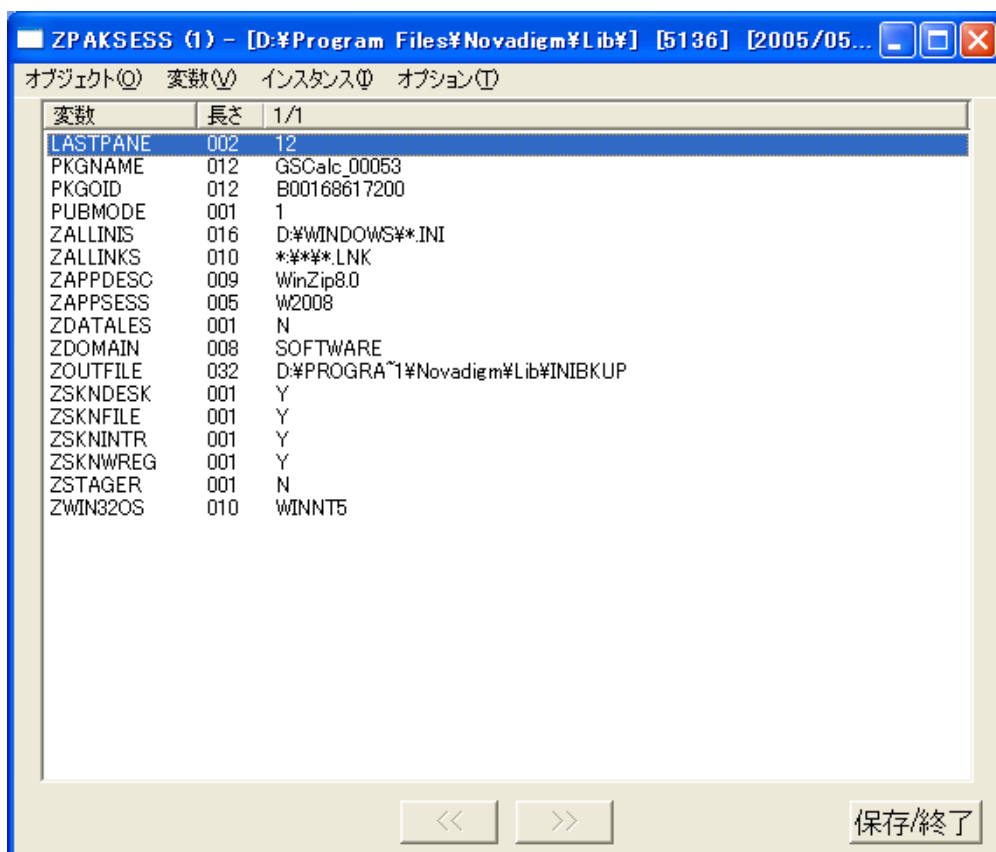


図 4.6 ~ ZPAKSESS.EDM、現在のセッション情報 (インストール モニタ モード)

[次へ] をクリックして [システムの設定] ウィンドウに進みます。

手順 4: 必須のシステム設定を設定する

[システムの設定] ウィンドウを使用すると、特定の条件を満たしたコンピュータにのみパッケージを配布することができます。配布条件は、コンピュータのオペレーティング システム、RAM、およびプロセッサ速度を基に指定します。

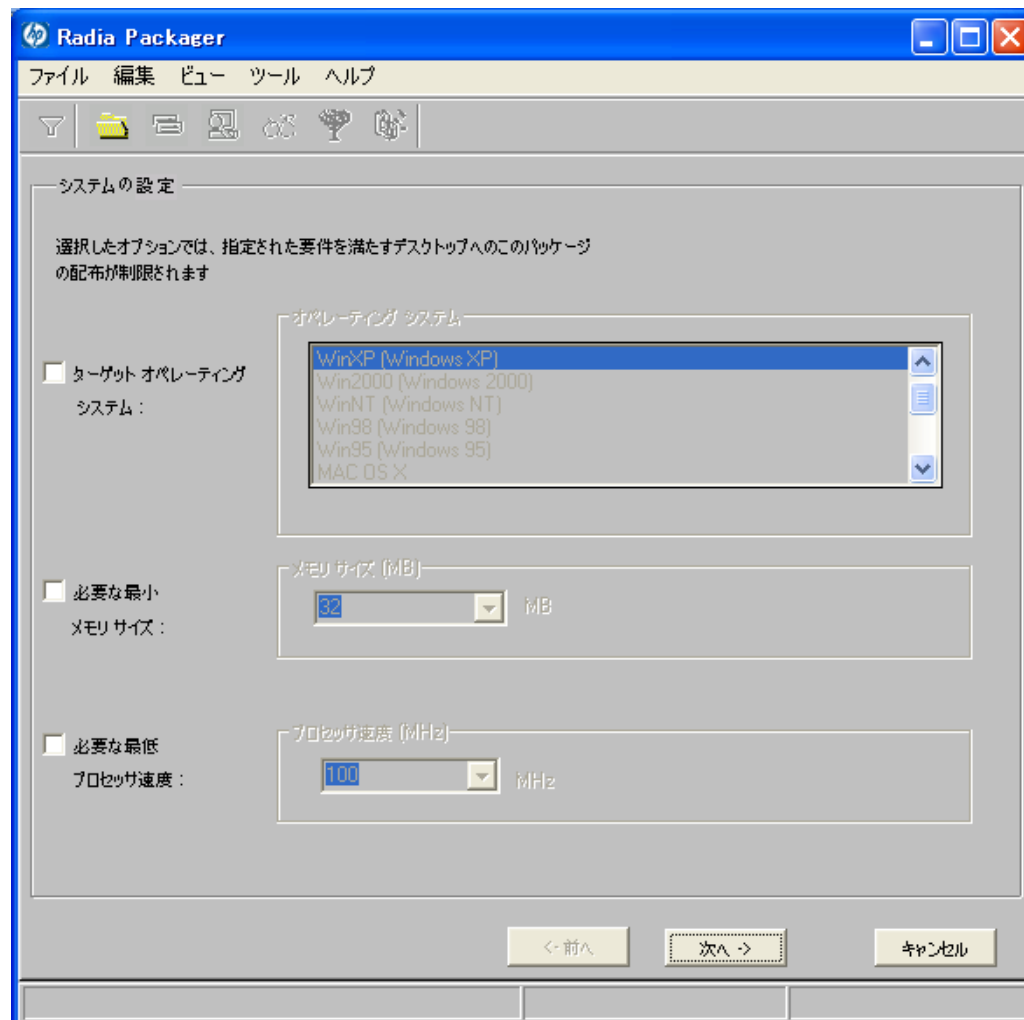


図 4.7 ~ [システムの設定] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

■ [ターゲット オペレーティング システム]

このチェック ボックスをオンにすると、[オペレーティング システム] ボックスが使用可能になります。このパッケージで必要な 1 つまたは複数のオペレーティング システムを選択してください。

- 選択するオペレーティング システムが一覧内で連続している場合は、キーボードの **Shift** キーを押しながらクリックします。
- 選択するオペレーティング システムが一覧内で連続していない場合は、キーボードの **Ctrl** キーを押しながらクリックします。オペレーティング システムを選択しなかった場合は、すべてのオペレーティング システムのサブスクリバがパッケージを利用することができます。

■ [必要な最小メモリ サイズ]

このチェック ボックスをオンにすると、[メモリ サイズ (MB)] ボックスが使用可能になります。このパッケージで最低限必要な RAM サイズを選択してください。RAM サイズを選択しなかった場合、サブスクリバは、どの RAM サイズでもパッケージが利用できるようになります。

■ [必要な最低プロセッサ速度]

このチェック ボックスをオンにすると、[プロセッサ] ボックスが使用可能になります。このパッケージで最低限必要なプロセッサ速度を選択してください。プロセッサ速度を選択しなかった場合、サブスクリバは、どのプロセッサでもパッケージが利用できるようになります。どのオプションも選択しなかった場合は、サービスにアクセス可能なすべてのサブスクリバがパッケージを利用することができます。

この WinZip の例では、130 ページの図 4.7 に示すとおり、デフォルトのまま、制約を指定していません。パッケージは、Windows 95、98、NT、2000、および Windows Server 2003 を実行しているコンピュータに配布することができます。

[次へ] をクリックして [配布可能日時] ウィンドウに進みます。

手順 5: 日付と時刻の制約を設定する

[配布可能日時] ウィンドウを使用すると、パッケージを配布可能にする日付と時刻を指定することができます。日付と時刻は、**Radia Configuration Server** を実行しているコンピュータのシステム クロックを基にします。日付と時刻の制約を指定しない場合、**Radia** データベースに転送させて配布用に設定すると、パッケージはすぐに使用可能になります。

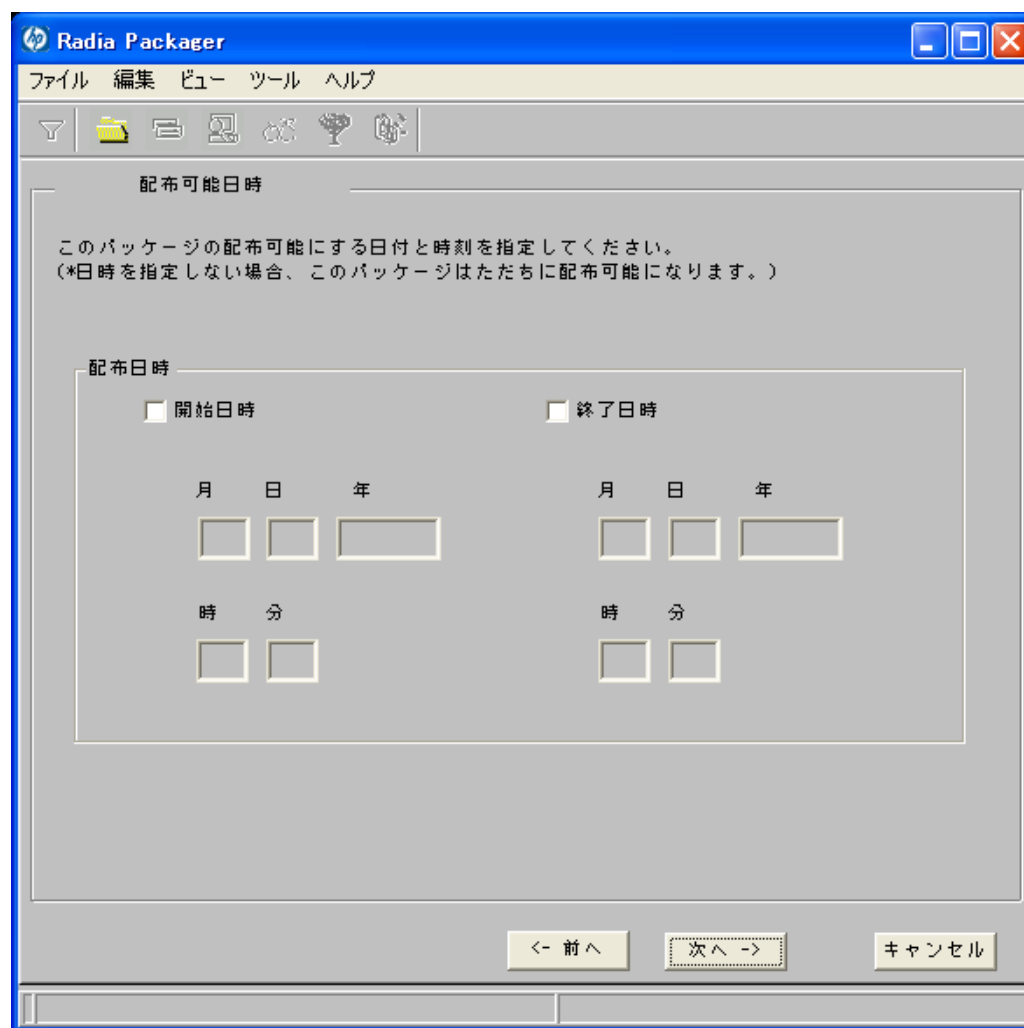


図 4.8 ~ [配布可能日時] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

■ **【開始日時】**

このチェック ボックスをオンにすると、指定した日付と時刻より *前*には配布できなくなります。
[月]、[日]、[年]、[時]、および [分] の各テキスト ボックスで日付と時刻を指定します。

■ **【終了日時】**

このチェック ボックスをオンにすると、指定した日付と時刻より *後*には配布できなくなります。
[月]、[日]、[年]、[時]、および [分] の各テキスト ボックスで日付と時刻を指定します。

この WinZip の例では、132 ページの図 4.8 に示すとおり、デフォルト設定のままにして、パッケージを Radia データベースに転送させたらすぐに配布できるようにしています。

[次へ] をクリックして [パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウの [スキャン対象] に進みます。

手順 6: スキャン対象を特定する

[パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウの [スキャン対象] を使用すると、ソフトウェアによってターゲット コンピュータのどこが変更されたかが特定できます。指定できるオプションは、デスクトップ、レジストリ、またはファイル システムのスキャン、ファイルのコンテンツの比較です。

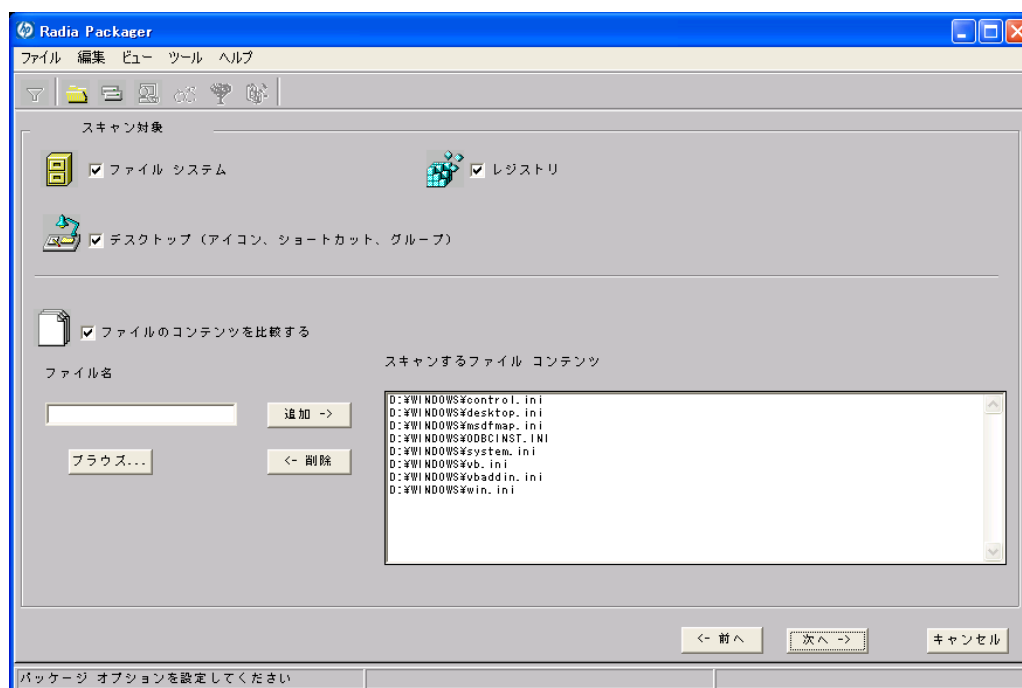


図 4.9 ~ [パッケージ オプションを設定してください: スキャン対象] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

Radia Packager は、アプリケーションをインストールする前に、選択した領域をスキャンし、各領域の現在の状態を記録するスナップショットを作成します。Radia Packager は、アプリケーションをインストールした後で、もう一度スナップショットを作成します。この 2 つのスナップショットが比較され、その結果の差分によってパッケージが構成されます。

アプリケーションのインストールによってターゲット コンピュータがどのように変更されるかを把握していない場合は、全領域をスキャンし、アプリケーションによる変更がすべて記録されるようにします。

パッケージ化するソフトウェアに関して認識する情報が増えるほど、パッケージ化および配布は簡単になります。アプリケーションについて認識することで、スキャン時間が節約できるというメリットが生まれます。次に、その例をいくつか示します。

- アプリケーションがレジストリを変更しないことが明らかな場合は、[レジストリ] チェック ボックスをオフにすると、**Radia Packager** はレジストリをスキャンしません。
- **Internet Explorer** に対してお気に入りの一部をパッケージ化する際、お気に入りが個別の .URL ファイルで **Internet Explorer** に格納されていることが明らかな場合は、**ファイル システム**のみをスキャンすれば、変更内容を取得することができます。
- **Netscape Navigator** に対して複数のブックマークをパッケージ化する際、ブックマークが単一の .HTM ファイルで **Netscape Navigator** に格納されていることが明らかな場合は、そのファイルを [スキャンするファイル コンテンツ] ボックスの一覧に追加し、[ファイルのコンテンツを比較する] チェック ボックスをオンにすると、ブックマーク ファイルに対する変更を取得することができます。

以上の例から、ユーザーが認識している情報が多いほど、スキャンにかかる時間は少なくなることがわかります。

注意

Radia では、IDMSYS、IDMLIB、または IDMLOG ディレクトリにあるファイルのパッケージ化はサポートされていません。

スキャン対象ファイルを追加するには

- [ファイル名] ボックスにファイル名をフルパスで入力して [追加] をクリックするか、[ブラウズ] をクリックして目的のファイルを指定します。

スキャン対象ファイルを削除するには

1. [スキャンするファイル コンテンツ] ボックスから削除するファイルをクリックします。
または
一覧から複数のファイルを削除する場合は、キーボードの **Ctrl** キーを押しながら、削除する各ファイルをクリックします。
2. [削除] をクリックします。
この WinZip の例では、134 ページの図 4.9 に示すとおり、デフォルト設定のままにして、デスクトップ、レジストリ、およびファイル システムをスキャンします。
3. [次へ] をクリックして [スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウに進みます。

手順 7: ファイル システム内のスキャン対象を特定する

[スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウを使用すると、スキャンするファイル システムの領域を選択することができます。コンピュータに接続されているすべての（ローカルおよびネットワーク）ドライブがファイル システムと見なされます。コンピュータのハードウェアおよびソフトウェアなど、さまざまな要素がシステムのスキャン時間に影響します。

注意

このウィンドウは、[パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウの [スキャン対象] の [ファイル システム] チェック ボックスをオンにした場合にのみ表示されます。

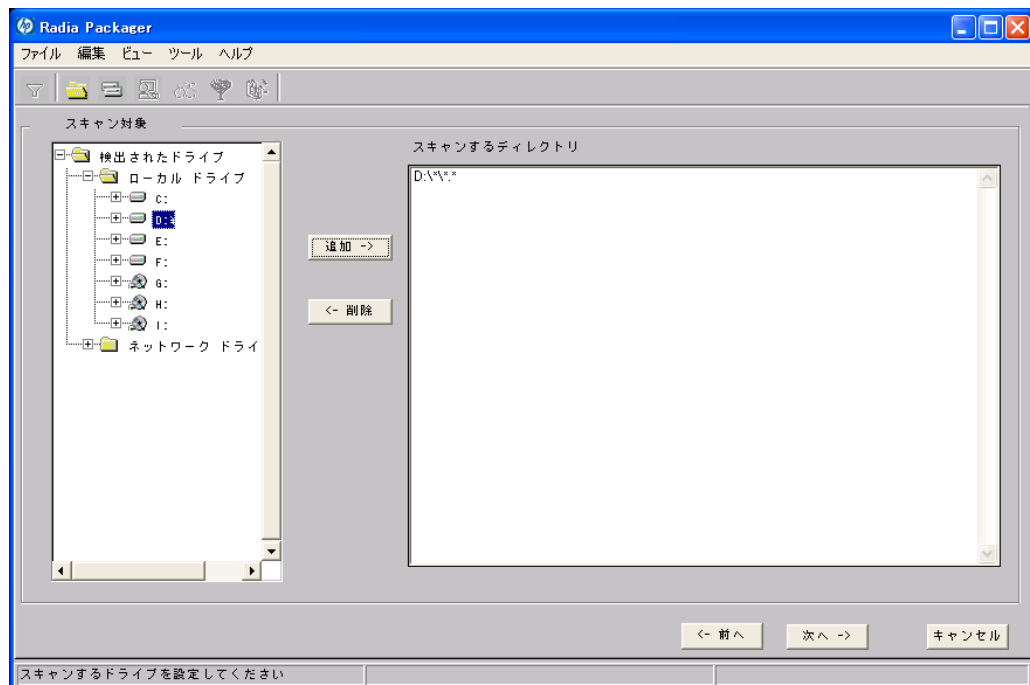


図 4.10 ~ [スキャン対象: スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

スキャンするドライブを設定するには

1. インストールによって変更されるすべてのフォルダまたはドライブを選択します。

警告

ネットワーク ドライブはスキャンしないことをお勧めします。ネットワークの通信オーバーヘッドが原因で、スキャンに時間がかかる場合があります。また、ネットワーク ドライブのマッピングがユーザーごとに異なる可能性もあります。

2. **[追加]** をクリックして、選択したフォルダまたはドライブを **[スキャンするディレクトリ]** リストに移動します。

この WinZip の例では、136 ページの図 4.10 に示すとおり、C ドライブ全体をスキャンし、アプリケーションのインストール時に加えられた変更をチェックします。

[次へ] をクリックして **[インストール前]** ウィンドウに進みます。

手順 8: インストール前のスキャンを開始する

[インストール前] ウィンドウを使用すると、スキャンを開始することができます。スキャンが完了した領域にチェックマークが付きます。スキャンが完了すると、ユーザーに通知されます。

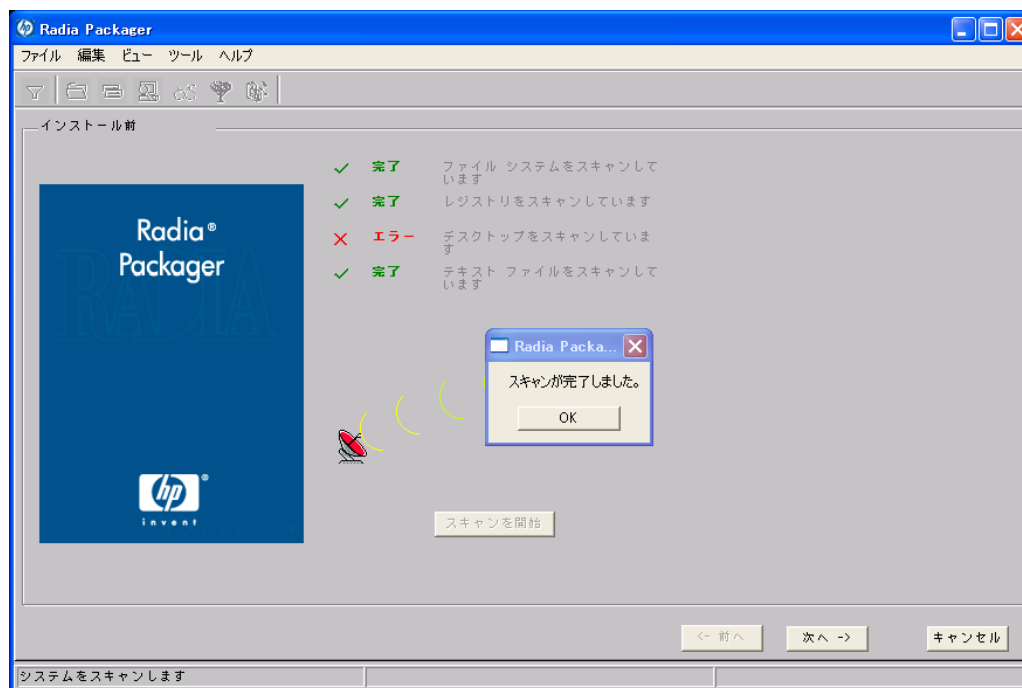


図 4.11 ~ [インストール前] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

インストール前のスキャンを開始するには

1. [スキャンを開始] をクリックします。スキャンが完了すると、メッセージ ボックスが表示されます。
2. [OK] をクリックします。

手順 9: ソフトウェアをインストールする

インストール前のスキャンが完了したら、ソフトウェアをインストールする必要があります。

ソフトウェアをインストールするには

1. [インストール前] ウィンドウの [次へ] をクリックします。次のメッセージが表示されます。

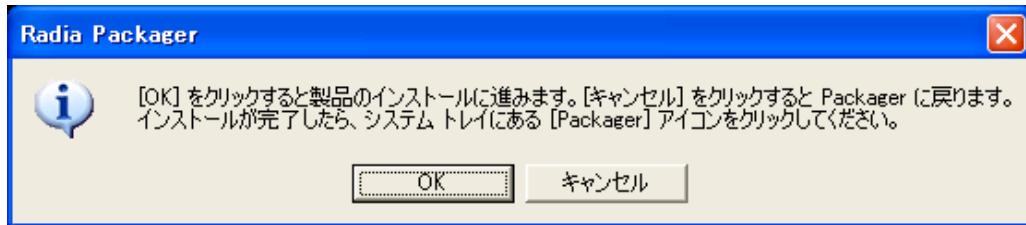


図 4.12 ~ ソフトウェア インストール時のメッセージ (インストール モニタ モード)

2. [OK] をクリックします。Radia Packager が最小化され、システムトレイに黄色と緑の [Packager] アイコンが表示されます。

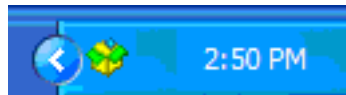


図 4.13 ~ システムトレイ内の [Packager] アイコン (インストール モニタ モード)

3. ネイティブ インストールでアプリケーションをインストールします。

警告

アプリケーションのインストール以外の操作を行わないでください。アプリケーションのインストール以外の操作を行った場合は、ファイル システム、レジストリ、デスクトップなどが変更される可能性があります。インストール後のスキャン時に、これらの (無関係な) 変更が検出され、パッケージに含まれてしまいます。

注意

アプリケーションのインストールでコンピュータの再起動が要求された場合、システムトレイ内の [Packager] アイコンは、再びログオンしたときに有効になります。

4. アプリケーションがインストールされたら、システム トレイ内の [**Packager**] アイコンをダブルクリックします。インストールに成功したかどうかを確認するメッセージが表示されます。
5. [**はい**] をクリックします。ユーザー ID とパスワードの入力を要求される場合もあります。この例では、WinZip 8.0 は **C:¥Program Files¥WinZip** にインストールされました。

手順 10: インストール後のスキャンを開始する

[インストール後] ウィンドウを使用すると、最終スキャンを開始することができます。その後、インストール前とインストール後のスキャン結果が比較され、比較が完了するとユーザーに通知されます。通知の確認後に、ファイル、レジストリ キー、アイコン、リンクがいくつ変更されたかについて詳細が表示されます。

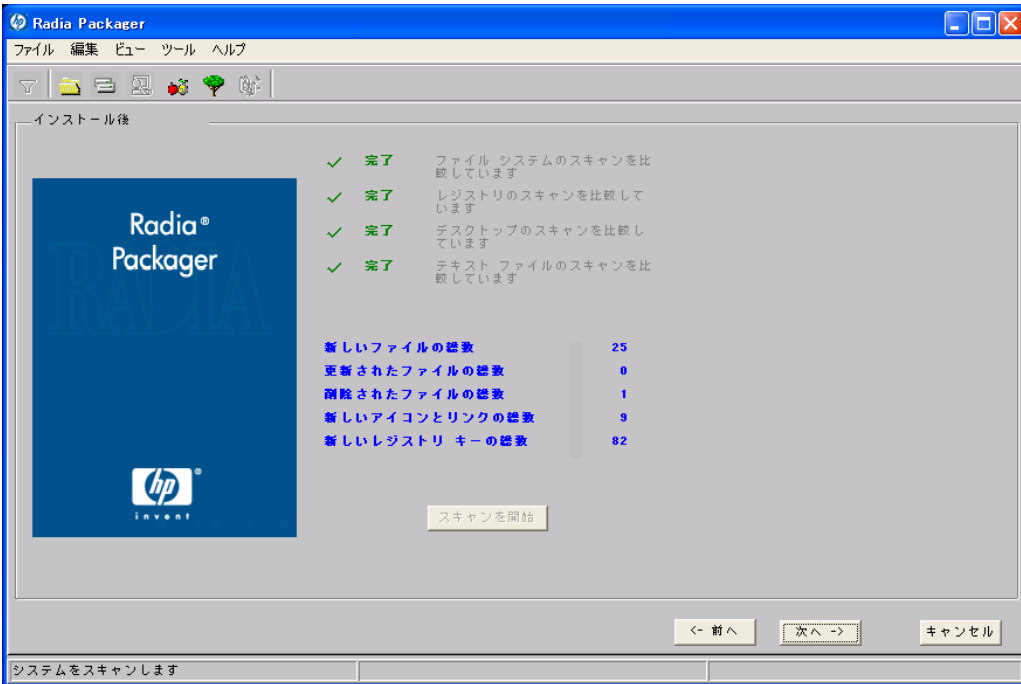


図 4.14 ~ [インストール後] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

注意

レジストリ スキャンの比較には、時間がかかる場合があります。また、ディスク アクティビティが大幅に制限される可能性もあります。この手順では、進行状況にまったく変化がないように見える場合もありますが、しばらく待っていると、レジストリ スキャンの比較は正常に完了します。処理時間をできる限り短縮するために、クリーンなコンピュータを使用してください

インストール後のスキャンを開始するには

1. [スキャンを開始] をクリックします。スキャンが完了すると、メッセージ ボックスが表示されます。
2. [OK] をクリックします。

注意

インストール前とインストール後のスキャンで差異を検出したら、Radia Packager は、REGISTRY クラスに 3 つのレジストリ (.EDR) ファイルを作成します。各ファイルは、Radia Configuration Server に転送されます。

[次へ] をクリックして [要約] ウィンドウに進みます。

手順 11: ファイル システムの変更内容を確認する

下の図 4.15 にある [要約] ウィンドウを使用すると、ソフトウェアをコンピュータにインストールしたときに加えられた変更内容を確認することができます。このウィンドウには、[ファイル]、[デスクトップ]、[レジストリ] の 3 つのタブがあります。

- [ファイル] タブをクリックすると、追加、削除、または更新されたファイルが確認できます。
- [デスクトップ] タブをクリックすると、追加、削除、または更新されたプログラム グループ、リンク、またはショートカットを確認することができます。
- [レジストリ] タブをクリックすると、レジストリで検出された変更内容が確認できます。

[ファイル]、[デスクトップ]、および [レジストリ] タブの詳細については、144 ページの「手順 12: ファイルのプロパティとロケーションを表示する」で説明します。

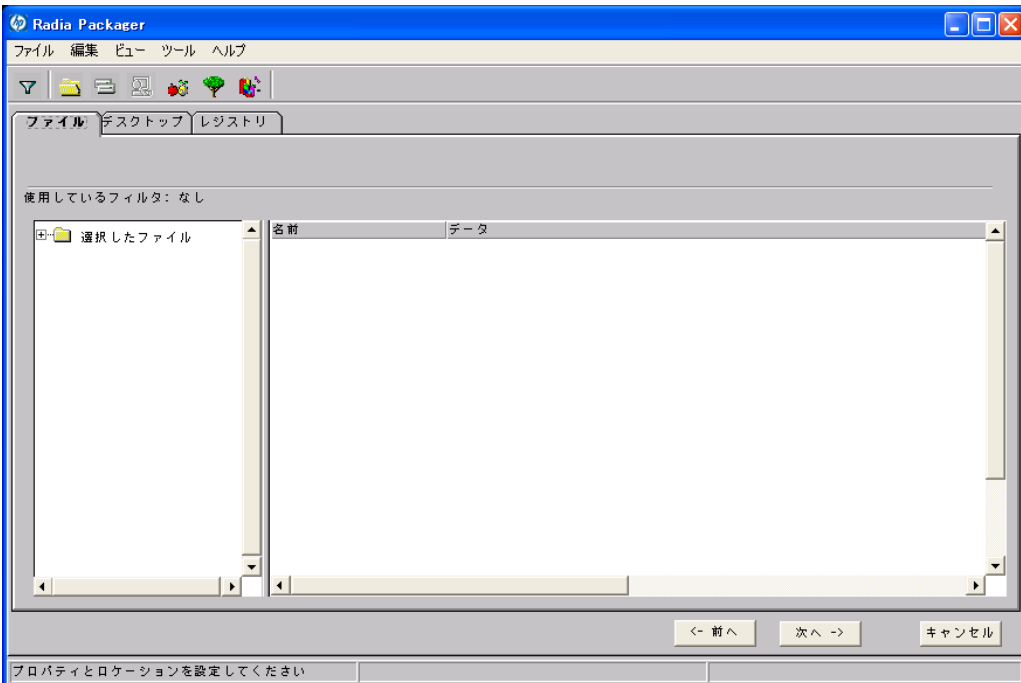


図 4.15 ~ 要約ウィンドウ (インストール モニタ モード)

手順 12: ファイルのプロパティとロケーションを表示する

[要約] ウィンドウの [ファイル] タブを使用すると、パッケージに含まれるファイルとフォルダを参照することができます。

選択したファイルとフォルダを表示するには

1. [選択したファイル] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。チェック マークは、ファイルのプロパティが指定済みで、Radia Packager が転送の準備を完了していることを示します。

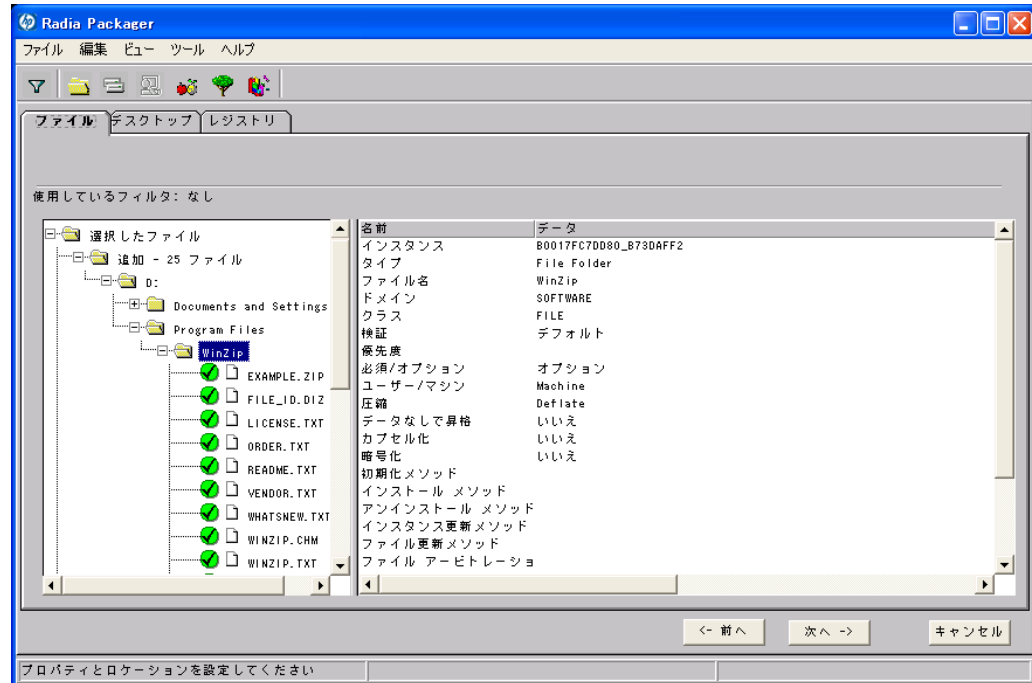


図 4.16 ~ 選択したファイルの表示 (インストール モニタ モード)

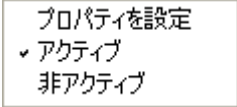
2. ツリー ビューのファイルまたはフォルダをクリックし、リスト ビューにプロパティを表示します。この WinZip の例では、ツリー ビューを展開して、現在パッケージに含まれているすべてのファイルとフォルダを表示しています。

手順 13: ファイルのプロパティとロケーションを設定する

[ファイル] タブに表示されているファイルとフォルダのプロパティを変更することができます。ファイルまたはフォルダをパッケージから除外することもできます。

ファイルのプロパティを編集するには

- ファイルまたはフォルダを右クリックします。ファイルを右クリックすると、次のショートカットメニューが表示されます。



プロパティを設定
 ✓ アクティブ
 非アクティブ

図 4.17 ~ ファイル プロパティの設定 (インストール モニタ モード)

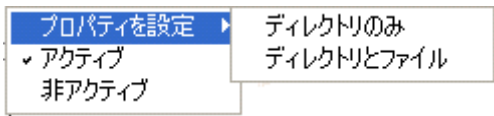
- ファイルをパッケージから除外するには、[非アクティブ] をクリックします。フォルダを選択している場合は、そのフォルダ内のすべてのファイルも非アクティブになります。

または

- ファイルをパッケージに含めるには、[アクティブ] をクリックします。デフォルトは [アクティブ] です。フォルダを選択している場合は、そのフォルダ内のすべてのファイルもアクティブになります。

または

- ファイルのプロパティを変更するには、[プロパティを設定] をクリックします。フォルダを選択している場合は、[ディレクトリのみ] または [ディレクトリとファイル] のいずれかをクリックして、ディレクトリのみを変更するか、ディレクトリとファイルの両方を変更するかを指定する必要があります。



プロパティを設定 ▶ ディレクトリのみ
 ✓ アクティブ ディレクトリとファイル
 非アクティブ

図 4.18 ~ フォルダ プロパティの設定 (インストール モニタ モード)

[インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスで、パッケージ内のファイルの属性を変更します。ファイルのプロパティは、Radia データベースの各インスタンスに格納されます。これらのプロパティのデフォルト値は、[グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスで設定します。詳細については、209 ページの「デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する」を参照してください。

[クライアント管理] タブ

[クライアント管理] タブを使用すると、パッケージ内の選択したファイルまたはフォルダの検証オプションおよび配信オプションを設定することができます。Radia System Explorer を使用すると、このパッケージを Radia データベースに転送させた後でも設定を変更することができます。

- [検証オプション] では、選択したファイルまたはフォルダに対して Radia Software Manager が実行する検証アクションを指定します。
- [配信オプション] では、ファイルが配布される順序など、配信に関するオプションを指定します。

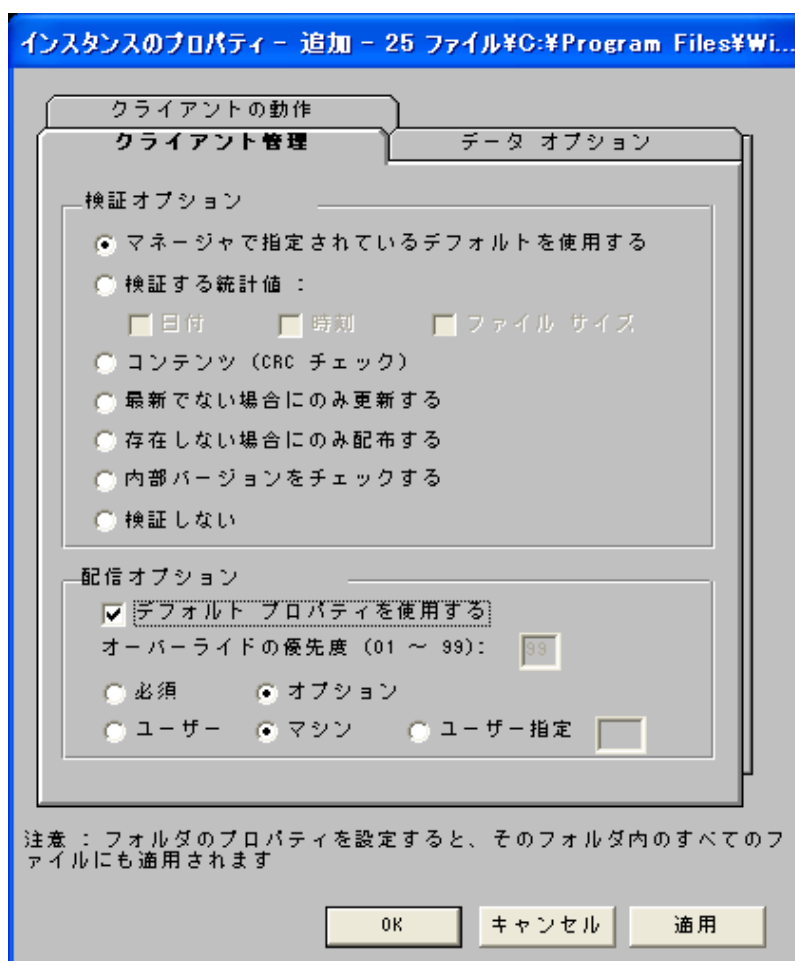


図 4.19 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアント管理] タブ (インストール モニタ モード)

【検証オプション】■ **【マネージャで指定されているデフォルトを使用する】**(デフォルト)

このオプションを選択すると、そのファイルまたはフォルダの検証オプションが、Radia データベースの FILE クラスのベース インスタンスから継承されます。

Radia System Explorer で、FILE クラスのベース インスタンスの ZRSCVRFY 属性を参照すると、デフォルトの検証オプションを確認することができます。

■ **【検証する統計値】**

このオプションを選択すると、クライアントは、自分のコンピュータにあるファイルの統計情報(日付、時刻、ファイル サイズ)をチェックします。ファイルの統計値がクライアント コンピュータのファイルと異なる場合、Radia データベース(または Radia Proxy Server) からファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=D(日付)、ZRSCVRFY=S(ファイル サイズ)、ZRSCVRFY=T(時刻)、または ZRSCVRFY=Y(日付、時刻、およびファイル サイズ)と設定します。

■ **【コンテンツ (CRC チェック)】**

このオプションを選択すると、Radia Software Manager は、クライアント コンピュータにあるファイルの統計値のコンテンツ (CRC) をチェックします。検証する際、ファイルは最初に日付、時刻、およびファイル サイズを基にチェックされます。検証の時間を節約するために、日付、時刻、およびファイル サイズの検証に合格した場合にのみ、CRC がチェックされます。その統計値がクライアント コンピュータの統計値と異なる場合に、Radia Configuration Server (または Radia Proxy Server) はファイルを配布します。このオプションを選択すると、Radia Packager は、CRC を計算し、ZRSCCRC 属性に値を設定します。

■ **【最新でない場合にのみ更新する】**

このオプションを選択すると、そのファイルの日付および時刻のタイムスタンプがクライアント コンピュータのものよりも新しい場合に、Radia データベース(または Radia Proxy Server) からファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=U と設定します。

■ **【存在しない場合にのみ配布する】**

このオプションを選択すると、そのファイルは、クライアント コンピュータに存在しない場合にのみ配布されます。クライアント コンピュータにファイルが既に存在する場合は、統計値が Radia データベースのものと異なっても何も実行されません。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=E と設定します。

■ **【内部バージョンをチェックする】**

このオプションを選択すると、クライアント コンピュータにファイルが存在する場合はそのファイルのバージョンと配布されるファイルのバージョンが比較されます。これにより、複数のバージョンが存在する場合でも、適切なファイルが更新されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=V と設定します。この機能で比較されるファイル タイプは、.DLL、.EXE、.OCX、.SYS、.VBX です。

■ **【検証しない】**

このオプションを選択すると、アプリケーションが初めて配布されるときにファイルが配布されます。それ以降は何も実行されません。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=N と設定します。

【配信オプション】

■ 【デフォルト プロパティを使用する】

このチェック ボックスをオンにすると、配信の優先度がデフォルトの **50** になります。この優先度の高さによって、配布の順序が決まります。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCPRI=50 と設定します。

■ 【上書きの優先度 (01 ~ 99)】

1 ~ **99** の値を入力すると、デフォルトの優先度 **50** が上書きされます。最も高い優先度は **1**、最も低い優先度は **99** です。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCPRI=1 と設定します。

以下のオプションは、アプリケーション全体をインストールするのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合にのみ適用されます。

■ 【必須】

このオプションを選択すると、そのファイルはアプリケーションの必須ファイルになります。

- アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合は、必須ファイルのみが配布されます。
- 必須ファイルを格納するのに十分な容量がない場合、アプリケーションは配布されません。

Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCMO=M と設定します。

■ 【オプション】(デフォルト)

このオプションを選択すると、ファイルはアプリケーションの必須ファイルではなくなります。

- アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合、オプション ファイルは配布されません。

Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCMO=O と設定します。

以下のオプションは、Windows NT 4.0、2000、Windows Server 2003 など、複数のユーザーのサインオンをサポートしているオペレーティング システムに対してのみ適用されます。

■ 【ユーザー】

【ユーザー】を選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクライバにだけファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZCONTEXT=U と設定します。

■ 【マシン】

【マシン】を選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZCONTEXT=M と設定します。

■ 【ユーザー指定】

このオプションは、現時点では利用することができません。

この WinZip の例では、デフォルトの検証設定および配信設定を使用しています。

[データ オプション] タブ

[データ オプション] タブを使用すると、データ圧縮方法など、配布予定のファイルまたはフォルダに関する詳細を指定することができます。

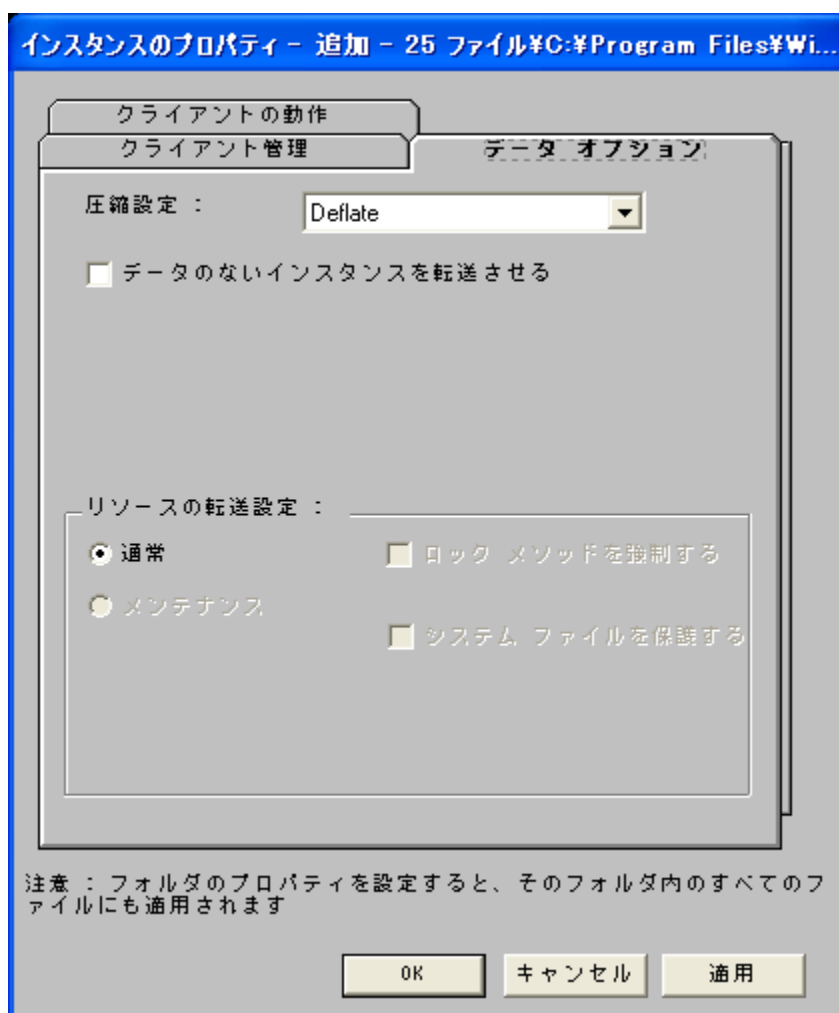


図 4.20 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [データ オプション] タブ (インストール モニタ モード)

■ **[圧縮設定]**

必要に応じて、選択したファイルを **Radia** データベースに格納する際の圧縮設定を選択します。ファイルを圧縮すると、データの転送時間が短縮され、格納に必要なディスク容量が軽減されます。

- **[圧縮]** を選択すると、最も効率的にファイルを圧縮することができます。**[圧縮]** は、データを圧縮してファイル サイズを小さくします。
- ファイルが既に圧縮されている場合は、**[なし]** を選択します。パッケージ化するアプリケーションに圧縮ファイルが含まれている場合は、**Radia Packager** でファイルをさらに圧縮しないでください。圧縮すると、ファイルのサイズが大きくなる可能性があります。

■ **[データの無いインスタンスを転送させる]**

このチェック ボックスをオンにすると、選択したファイルがパッケージの一部として **Radia** データベースに送信されなくなります。ファイルを表すインスタンスのみがパッケージに含まれます。データは、圧縮された状態で、コンピュータの **IDMDATA** 内に保存されたままとなります。

IDMDATA のデフォルト ロケーションは、**SystemDrive:\Program Files\Novadigm\Lib\YDataY** です。**Radia Staging Server** に接続できる環境で、**Radia** データベースにコピーを格納しない場合は、手動で **Radia Staging Server** にファイルを移動することができます。

警告

NT オペレーティング システムのセキュリティについて詳しい知識を持っていない場合は、このプロパティを使用しないことをお勧めします。

[リソースの転送設定]

■ **[普通]**

このオプションを選択すると、そのファイルはアプリケーションの一部として配布されます。

■ **[メンテナンス]**

これは旧バージョンの機能で、バージョン 4.0 では使用されていません。

■ **[ロック メソッドを強制する]**

このチェック ボックスをオンにすると、選択したファイルの配布に対してロック ファイル メソッドが強制的に使用されます。**Radia** がファイルの新しいコピーを配布する際に、クライアント コンピュータでそのファイルが使用中の場合は、通常、ロック ファイル メソッドでファイルが配布されます。必要に応じて、ファイルは解凍され、ローカルのフォルダに格納されます。クライアント接続プロセスが終了すると強制的に再起動され、起動時に適切な場所にファイルが配布されます。

■ [システム ファイルを保護する] (Windows 2000 および Windows Server 2003 のみ)

このチェック ボックスをオンにすると、Windows のシステム ファイル保護 (SFP) が強制されます。最初に、現在の検証オプション (FILE クラスにある ZRSCVRFY 属性で指定されているオプション) に従ってリソースが検証されます。

- 検証に成功した場合、リソースは要求ステートにあり、これ以上の検証は不要になります。
- 検証に失敗した場合、システム ファイル保護によってファイルが保護されているかどうかチェックされます。保護されている場合、ファイルは配布されません。

最後にこの属性がチェックされ、SFP を強制する設定になっているかどうかを確認されます。

- このチェック ボックスをオンにしている場合、ZRSCVRFY 属性は P に設定されており、このリソースとサービスの配布は SFP 処理が原因で失敗したものとして記録されます。
- SFP を強制するように設定していない場合、ファイルは検証に成功したものとして記録されます。SFP ファイルに対して行われたアクションを説明するために、ZERROR インスタンスが作成されます。

この WinZip の例では、デフォルトのデータ オプションを使用しています。

[クライアントの動作] タブ

[クライアントの動作] タブを使用すると、クライアント コンピュータに対して Radia が実行するメソッド (プログラム) を指定することができます。

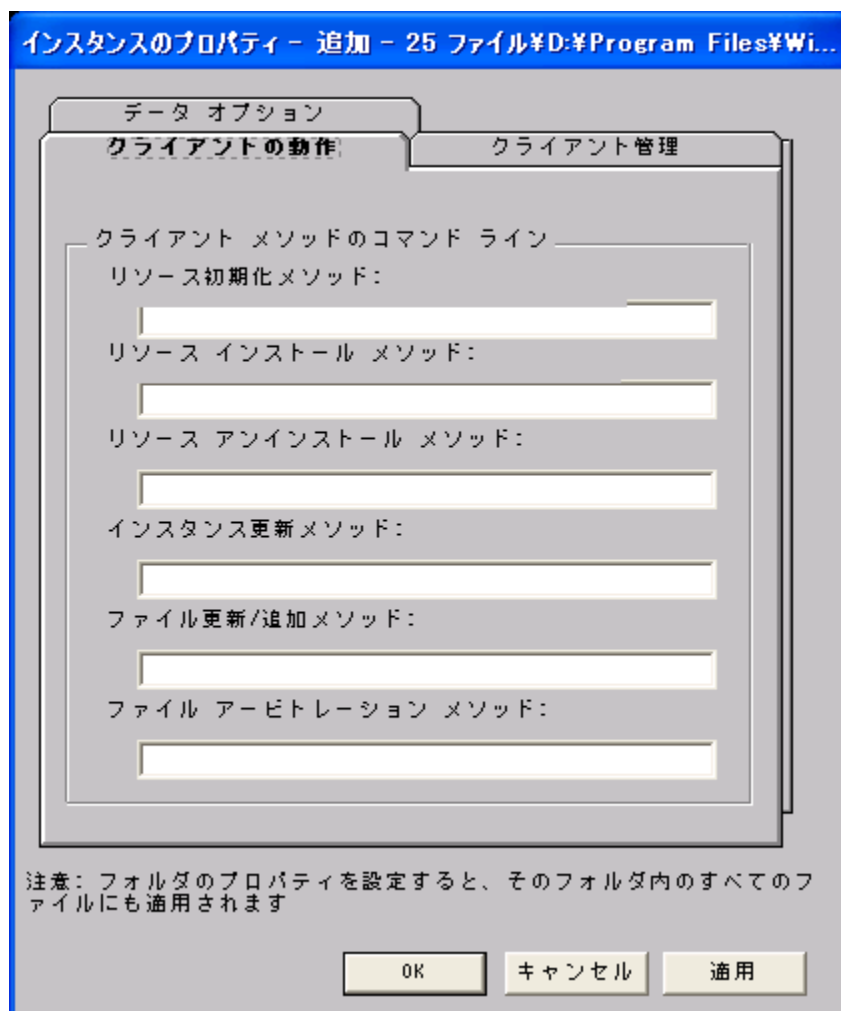


図 4.21 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアントの動作] タブ (インストール モニタ モード)

このダイアログ ボックスに入力したコマンド ラインは、SOFTWARE ドメインの FILE クラスインスタンスの属性に格納されます。

[クライアント メソッドのコマンドライン]

- **[リソース初期化メソッド]** (データベース内の属性: ZINIT)
クライアント コンピュータにファイルが格納されたときに実行するメソッドを入力します。
- **[リソース インストール メソッド]** (データベース内の属性: ZCREATE)
クライアント コンピュータにファイルが格納された後に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、クライアント コンピュータでファイルを使用可能にする処理が要求された場合に使用します。
- **[リソース アンインストール メソッド]** (データベース内の属性: ZDELETE)
通常、ソフトウェアへのサブスクリプションがキャンセルされると、ファイルは削除されます。共有 DLL ファイルなど、クライアント コンピュータから削除できないファイルの場合は、ソフトウェアのサブスクリプションをキャンセルしたときでも、**[リソース アンインストール メソッド]** に「**_NONE_**」(アンダースコア付き) と入力する必要があります。
- **[インスタンス更新メソッド]** (データベース内の属性: ZUPDATE)
ファイルを配布してから、コンピュータでインスタンスが変更されたときに実行するメソッドを入力します。
- **[ファイル更新/追加メソッド]** (データベース内の属性: ZFILEUPD)
新しいファイルが追加されたとき、またはファイルが更新されたときに実行するメソッドを入力します。このメソッドは、クライアント コンピュータにファイルが配布される直前に実行されます。
- **[ファイル アービトレーション メソッド]** (データベース内の属性: ARBITRAT)
ファイルを置き換えようとする場合に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、現在クライアント コンピュータに存在するファイルまたはフォルダのバージョン情報と、置き換えるファイルまたはフォルダのバージョン情報を比較し、どちらを保持するかを判別します。

注意

このフィールドを使用するには、Radia データベースに ARBITRAT メソッドを追加する必要があります。詳細については、HP OpenView Web サイトにある技術文書『About the File Arbitration Method』を参照してください。

この WinZip の例では、どのメソッドも指定していません。

手順 14: 更新されたファイル进行处理する

以下のように、追加されたファイルに加えて、更新されたファイルが存在する場合があります。

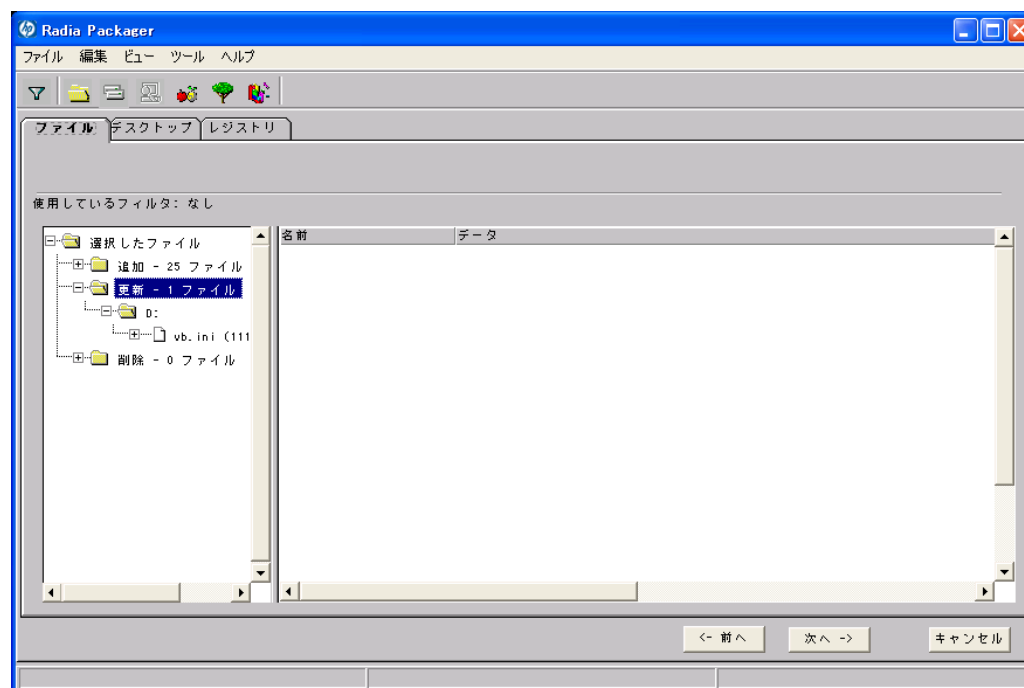


図 4.22 ~ 更新されたファイルの表示 (インストール モニタ モード)

更新されたファイルは、上の図にある Win.ini などの制御ファイルで、ASCII テキストが変更されたものです。標準 ASCII テキスト ファイルのプロパティを設定する方法については、145 ページの「手順 13: ファイルのプロパティとロケーションを設定する」で説明します。

WIN.INI などの制御ファイルが更新された場合、変更された .INI ファイルで、デスクトップ オブジェクトのファイル名がセクションの名前の前に表示されます。セクション名の下に、各行の変更内容が表示されます。各行は個別に表示されているので、必要に応じて編集することができます。

制御ファイル内の行を編集するには

ツリー ビューで、変更する行を右クリックします。

- テキスト ファイルの変更内容をパッケージに含める場合は、[アクティブ] をクリックします。
または
- テキスト ファイルの変更内容をパッケージに含めない場合は、[非アクティブ] をクリックします。
または
- テキスト ファイルの変更内容を編集する場合は、[値を上書き] をクリックします。

[値を上書き] をクリックすると、[テキスト ファイル データの上書き] ダイアログ ボックスが表示されます。

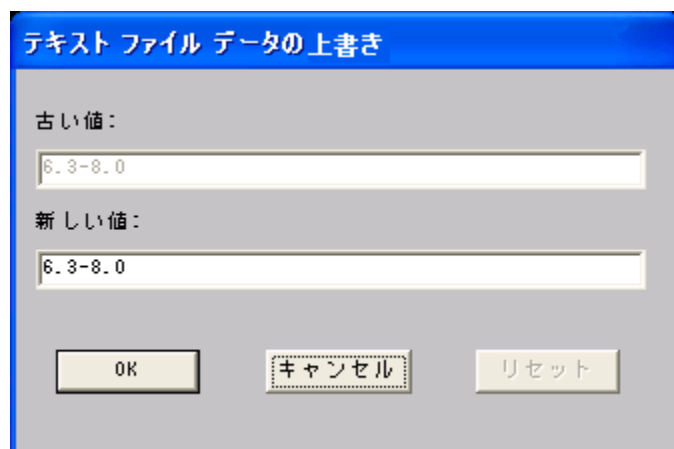


図 4.23 ~ [テキスト ファイル データの上書き] ダイアログ ボックス (インストール モニタ モード)

値を上書き機能を使用するには

1. [値を上書き] をクリックします。
2. [新しい値] ボックスに、行の新しい値を入力します。
3. [OK] をクリックします。

テキスト行を復元するには

1. ツリー ビューで、変更する行を右クリックします。
2. [値を上書き] をクリックします。
3. [リセット] をクリックします。
4. [OK] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

この WinZip の例では、Modem ログの変更内容を非アクティブに設定しています (154 ページの図 4.22 を参照)。ただし、制御ファイルの行には変更を加えていません。

手順 15: デスクトップのプロパティとロケーションを設定する

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウの [デスクトップ] タブを使用すると、パッケージ内の選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示し、それぞれのプロパティを変更することができます。

選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示するには

- [選択したリンク] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。

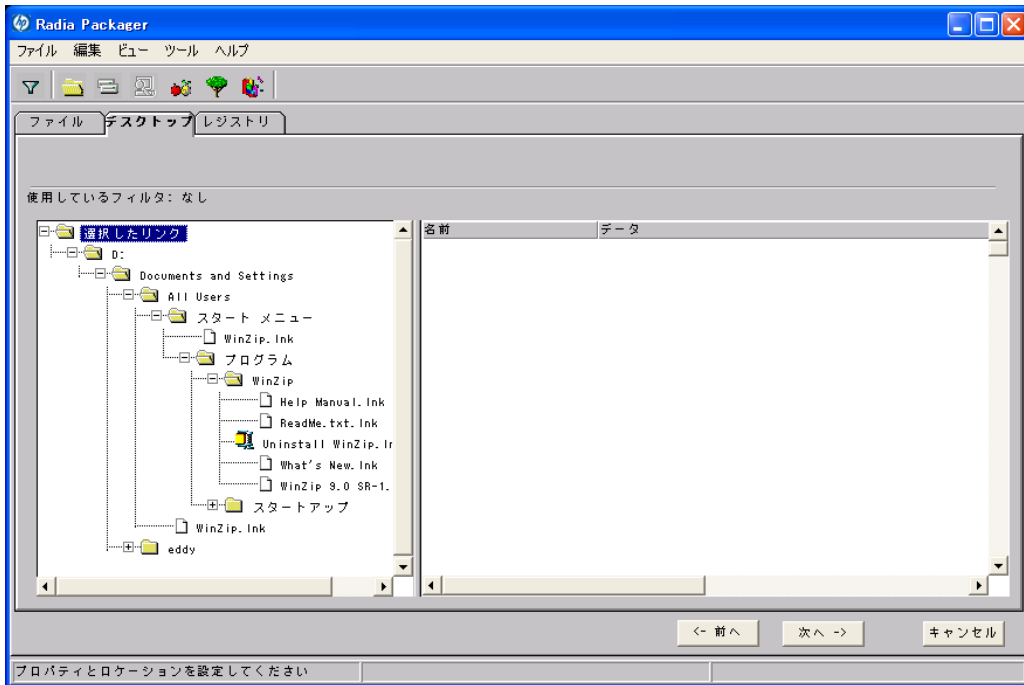


図 4.24 ~ 選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットの表示 (インストール モニタ モード)

プログラム グループ、リンク、およびショートカットのプロパティを設定するには

- ツリー ビューでリンクを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。

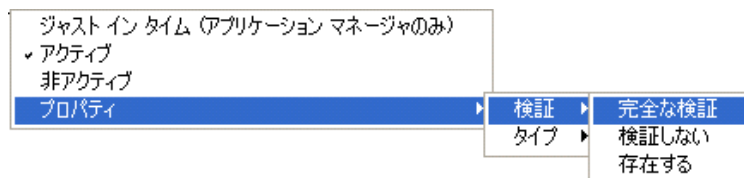


図 4.25 ~ 展開したショートカット メニュー (インストール モニタ モード)

注意

フォルダまたはリンクを右クリックすると、ツリー ビューのフォルダ内またはリンク内のすべてのリンクに変更が適用されます。

- **[ジャスト イン タイム (アプリケーション マネージャのみ)]**
Radia Application Manager (App Mgr) を使用すると、アプリケーションがセルフ メンテナンスを実行するように指定することができます。セルフメンテナンスとは、アプリケーションを起動するたびに、Radia Configuration Server に自動接続してアプリケーションを検証し、必要に応じて更新または修復することです。
- **[プロパティ]**
[プロパティ] をクリックすると、[検証] および [タイプ] サブメニューが表示されます。

[検証] メニュー コマンド

- **[完全な検証]**
このコマンドを選択すると、リンクは、クライアント コンピュータに既に存在する場合でも、サブスクリバが Radia Configuration Server に接続するたびに配布されます。これにより、破損したリンクまたは変更されたリンクが修復されます。
- **[検証しない]**
最初の配布以降、リンクを検証しない場合は、このコマンドを選択します。リンクを変更または削除した場合でも、リンクは修復されません。
- **[存在する]**
このコマンドを選択すると、リンクは最初の配布時に配布されます。それ以降は、接続したときにクライアント コンピュータにリンクが存在しない場合のみ配布されます。リンクが再配布されるのは、削除された場合のみです。このことから、ユーザーはリンクを変更することができます。

[タイプ] メニュー コマンド

以下のオプションは、Windows 95、98、NT 4.0、2000、Windows Server 2003 など、複数のユーザーをサポートしているオペレーティング システムに対してのみ適用されます。

■ [ユーザー]

このコマンドを選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクリバにだけリンクが配布されます。

■ [マシン]

このコマンドを選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。

この WinZip の例では、プログラム グループ、リンク、およびショートカットに対してデフォルト設定を使用しています。

手順 16: レジストリのプロパティと値を設定する

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウの [レジストリ] タブを使用すると、アプリケーションが配布される際に変更されたレジストリの内容を確認することができます。また、レジストリ キーの値を変更し、さまざまな配布 オプションを設定することができます。

選択したレジストリを表示するには

- [選択したレジストリ キー] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。

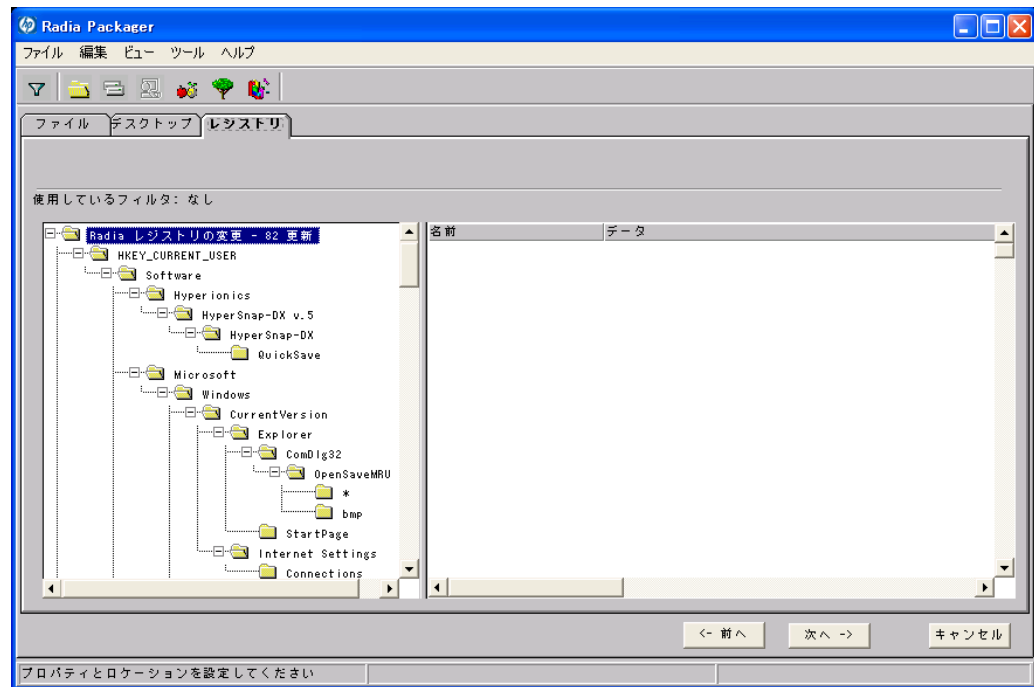


図 4.26 ~ 選択したレジストリ キーの表示 (インストール モニタ モード)

レジストリ キーの値を編集するには

1. ツリー ビューでレジストリ キーをクリックします。
2. リスト ビューでレジストリ キーをダブルクリックします。
3. [新しい値] ボックスでデータを編集します。
4. [OK] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。



図 4.27 ~ [新しい値] ボックス (インストール モニタ モード)

レジストリ キーを元の値に戻すには

1. リスト ビューでレジストリ キーをダブルクリックします。
2. [リセット] をクリックします。
3. [OK] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ キーのプロパティを設定するには

- ツリー ビューでリンクを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。



図 4.28 ~ レジストリ キーのプロパティの設定 (インストール モニタ モード)

注意

レジストリ キーを右クリックすると、ツリー ビューのレジストリ キーのすべてのキーに変更が適用されます。

- **[アクティブ]**
このコマンドを選択すると、レジストリの変更がパッケージに含まれます。
- **[非アクティブ]**
このコマンドを選択すると、レジストリの変更はパッケージに含まれません。
- **[プロパティ]**
 - ◆ **[無条件/強制]**
このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、クライアント コンピュータに既に存在している場合でも配布されます。このレジストリ キーは、クライアント コンピュータで変更されていても、サブスクリバが **Radia Configuration Server** に接続するたびにパッケージ化された値にリセットされます。この設定は、アプリケーションの動作を保証するために変更してはならないレジストリ キーに使用します。
 - ◆ **[無条件/存在] (デフォルト)**
このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、最初の配布の時点か、削除されたときに配布されます。ただし、レジストリ キーの値はリセットされません。
 - ◆ **[存在/存在]**
このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、クライアント コンピュータに存在しない場合にのみ配布されます。この機能では、レジストリ キーを変更してもかまいません。レジストリ キーは削除された場合にのみ再配布されるので、変更内容は書き込まれません。

この WinZip の例では、レジストリ キーを **[無条件/存在]** に設定しています。**[次へ]** をクリックして **[ファイルの転送]** ウィンドウに進みます。

手順 17: パッケージを転送させる

[ファイルの転送] ウィンドウを使用すると、Radia データベースにパッケージのインスタンスを作成することができます。

警告

パッケージを転送させると、セッションのオブジェクトは削除されるので、セッションを再開することはできません。後で再びセッションを開く場合に備えて、セッションを保存した方がよいケースもあります。たとえば、パッケージの配布をテストしているときに問題が見つかり、パッケージを修正しなければならない場合、次の方法でセッションを保存します。

LIB ディレクトリとサブディレクトリを **SystemDrive:\Program Files\Novadigm\LIB** からバックアップ用のロケーションにコピーします。LIB ディレクトリには、パッケージ化セッション中に Radia Packager によって作成されたオブジェクトが格納されています。

LIB ディレクトリを保存すると、パッケージを転送させた後も、LIB ディレクトリを復元することができます。Radia Packager ウィンドウで設定を変更すれば、パッケージを再び転送させることができます。ツールバー ボタンをクリックすると、Radia Packager の各ウィンドウに直接ジャンプすることができます。

以上の方法を用いれば、転送後のパッケージの配布をテストしているときに問題が見つかったも修復することができます。

転送させるファイルを表示するには

- [転送させるファイル] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。

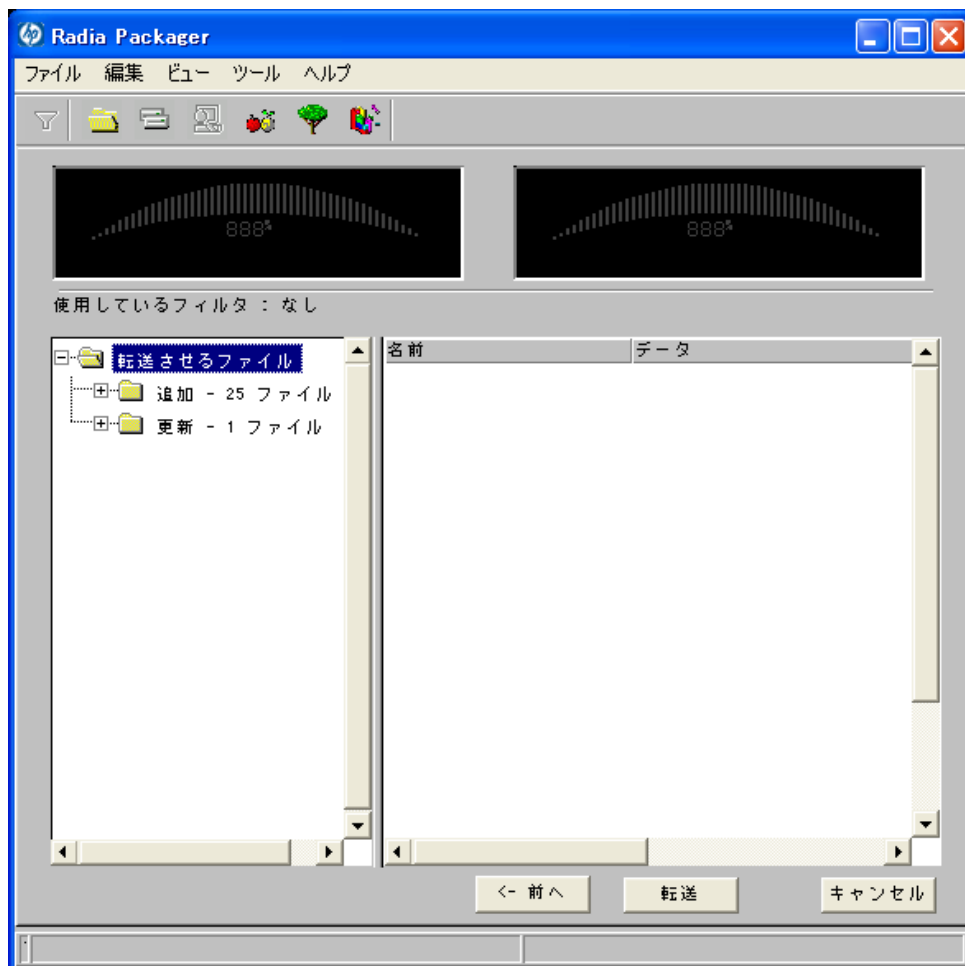


図 4.29 ~ [ファイルの転送] ウィンドウ (インストール モニタ モード)

パッケージを転送させるには

1. [転送] をクリックします。
2. パッケージが正常に転送されたことを示すメッセージが表示されたら [OK] をクリックします。
3. [完了] をクリックして Radia Packager を終了します。
4. Radia Packager の終了を確認するメッセージが表示されたら [はい] をクリックします。

この例では、WinZip 8.0 を Radia データベースに転送させました。次の手順では、Radia System Explorer でサービスを作成します。詳細については、199 ページの「サービスを作成する」を参照してください。

コンポーネント選択モードを使用する

コンポーネント選択モードでは、アプリケーションを構成する各コンポーネント（ファイル、ディレクトリ、レジストリ エントリ、リンクなど）を選択してパッケージを作成します。単純なアプリケーションのパッケージ化には、このモードをお勧めします。

注意

Win.ini など、既存のテキスト ファイルがアプリケーションによって変更される場合は、インストール モニタ モードを使用する必要があります。

また、内容を完全に把握していないアプリケーションの場合も、インストール モニタ モードでパッケージ化してください。

コンポーネント選択モードでは、以下の 3 つの段階でパッケージ化を行います。

1. アプリケーションのハードウェア、ソフトウェア、およびオペレーティング システムの要件を定義します。
2. パッケージ化するファイルを個別に選択します。
3. ファイルを Radia データベースに転送させます。

コンポーネント選択モードを使用する際の前提条件

コンポーネント選択モードでアプリケーションをパッケージ化する場合は、以下の点に留意してください。

- 管理者のコンピュータにターゲット アプリケーションをインストールします。これにより、選択時に必要なファイルが管理者のコンピュータに保存されます。
- アプリケーションによってレジストリが変更される場合は、レジストリ エントリをエクスポートします。

警告

レジストリ エントリをエクスポートする場合は、必要なレジストリ エントリのみがエクスポートされるように、エクスポートの範囲を [選択された部分] に設定してください。

また、Windows 2000 および Windows Server 2003 の場合は、[ファイルの種類] メニューの [Win9x/NT 4 レジストリ ファイル (REGEDIT4)] をクリックしてください。

コンポーネント選択モードでパッケージ化する

ここでは、具体的なアプリケーションを例に挙げて、コンポーネント選択モードによるパッケージ化の手順を示し、各手順で表示される画面の詳細を説明します。

以下の説明では、GS-Calc を例に挙げてパッケージ化の手順を説明します。GS-Calc は、<http://www.jps-development.com/gs-calc.htm> でダウンロードできる単純なシェアウェアです。ターゲット プラットフォームは Windows 2000 です。

以下の例は、コンポーネント選択モードを理解するためのものです。実際のパッケージ化の手順は、アプリケーションによって異なるので注意してください。

メモ

例示された手順どおりに操作を行うために、以下の条件を守ってください。

- ・ 管理者のコンピュータに GS-ALC をインストールします。
- ・ **HKEY_CURRENT_USER\SOFTWARE\JPS Development** のレジストリ エントリをエクスポートします。

手順 1: Radia Packager にログオンする

1. [スタート] ボタンをクリックし、[すべてのプログラム] をポイントします。次に、[Radia Administrator Workstation] をポイントし、[Radia Packager] をクリックします。
2. [Radia Packager のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスの [ユーザー ID] にユーザー ID、[パスワード] にパスワードを入力します。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

3. [OK] をクリックします。
[パッケージ セッションを開きます] ウィンドウが表示されます。

手順 2: [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウで必要な情報を指定する

[パッケージ セッションを開きます] ウィンドウを使用すると、パッケージ化のモードを選択し、パッケージ化セッションを識別するための情報を入力することができます。

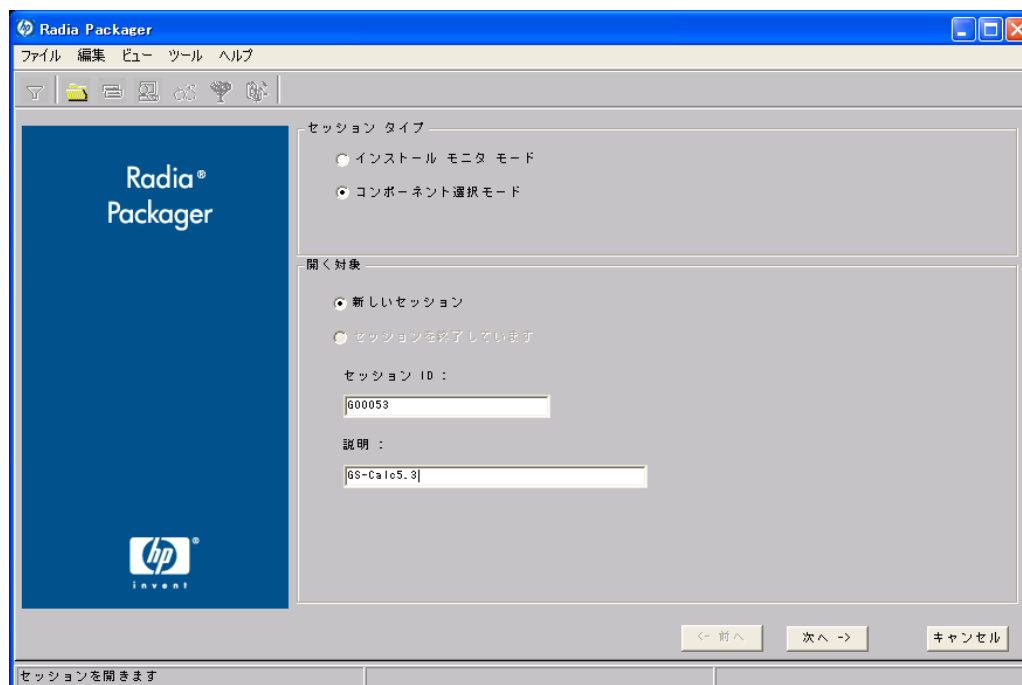


図 4.30 ~ [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ (コンポーネント選択モード)

パッケージ化セッションを完了すると、ソフトウェアおよびデータを配布可能な形式にまとめた **Radia** パッケージが作成されます。この **Radia** パッケージを後でサービスに接続することになります。ターゲット サブスクリバにソフトウェアまたはデータを配布するためのポリシーを設定します。次に、上の図 4.30 にある [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウの各オプションについて説明します。

注意

パッケージ化セッションを開始する前にグローバル デフォルトを確認してください。209 ページの「デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する」を参照してください。

[セッション タイプ] 領域

■ [インストール モニタ モード]

アプリケーションまたはデータの構造を把握していない場合は、このモードで **Radia** パッケージを作成します。**Radia Packager** は、コンピュータをスキャンしてから、ネイティブ インストールプログラムでソフトウェアをインストールするように指示します。ソフトウェアがインストールされると、**Radia Packager** はコンピュータを再びスキャンし、その結果を前回のスキャン結果と比較します。検出された差分がパッケージ化され、**Radia** データベースに転送されます。詳細については、122 ページの「インストール モニタ モードを使用する」を参照してください。

■ [コンポーネント選択モード]

配布するファイルを把握しており、インストールがクライアント コンピュータに与える影響を認識している場合は、このモードで **Radia** パッケージを作成します。コンポーネント選択モードでは、パッケージ化して **Radia** データベースに転送させるファイルを特定する必要があります。

注意

旧バージョンの **Radia Packager** では、Windows インストーラでインストールまたは管理されるアプリケーションに対してインポート モードを使用することができました。これらのアプリケーションのパッケージ化については、『**Radia Extensions for Windows Installer Guide**』を参照してください。**Radia Extensions for Windows Installer** は、個別のライセンスが必要な製品です。

[開く対象] 領域

■ [新しいセッション]

[新しいセッション] を選択すると、新しいパッケージ化セッションを開始することができます。[セッション ID] ボックスにセッション ID、[説明] ボックスに説明を入力する必要があります。

■ [セッションを終了しています]

[セッションを終了しています] を選択すると、前回のセッションを再開することができます。

■ [セッション ID]

半角 1 ～ 6 文字の一意的識別子を入力します。

■ [説明]

セッションの説明を入力します。

この **GS-Calc** の例では、168 ページの図 4.30 に示すとおり、コンポーネント選択モードで新しいセッションを開始します。セッション ID は「**G00053**」、セッションの説明は「**GS-Calc 53**」です。

[次へ] をクリックして [パッケージ プロパティ] ウィンドウに進みます。

手順 3: パッケージ プロパティを入力する

[パッケージ プロパティ] ウィンドウを使用すると、パッケージ名を指定し、パッケージの補足説明となる情報を入力することができます。

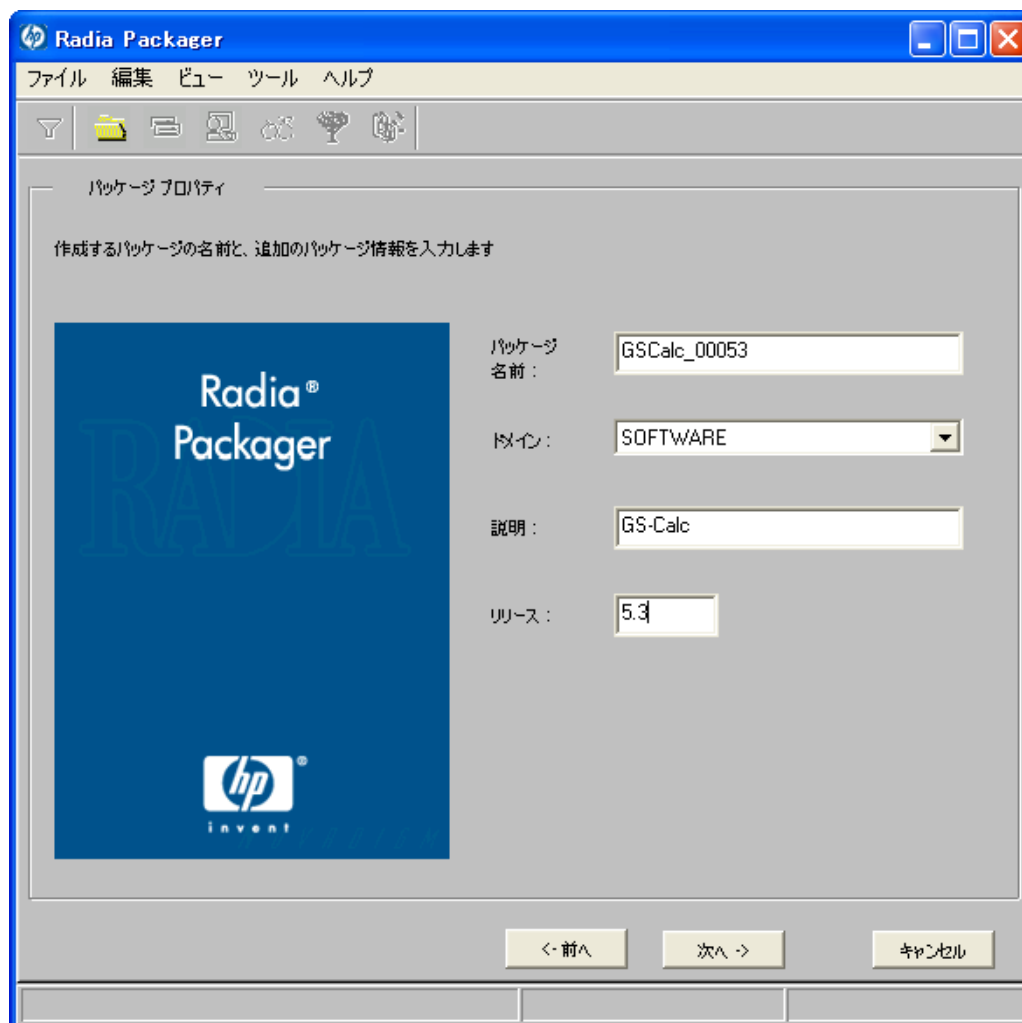


図 4.31 ~ [パッケージ プロパティ] ウィンドウ (コンポーネント選択モード)

■ 【パッケージ名】

パッケージ名を入力します。これは、Radia データベースで **PACKAGE** クラス インスタンス名となるものです。現在の組織の命名規則に従って命名してください。名前にスペースを入れることはできません。

注意

識別子が一意になるように命名規則を策定することができます。Radia Packager は、この識別子を基にデータ オブジェクトとファイル名を生成します。
詳細については、「付録 A: 命名規則」を参照してください。

■ 【ドメイン】

インスタンスを格納するドメインを選択します。Radia データベースを固有のドメインでカスタマイズした場合を除いて、通常は **SOFTWARE** ドメインです。

■ 【説明】

パッケージの説明を入力します。

■ 【リリース】

ソフトウェアのリリース番号を入力します。

この **GS-Calc** の例では、170 ページの図 4.31 に示すとおり、パッケージ名に「**GSCalc_00053**」、説明に「**GS-Calc**」、リリース番号に「**5.3**」と指定しています。

注意

現在のセッション情報は、コンピュータ上の **SystemDrive:\Program Files\Novadigm\LIB\ZPAKSESS.EDM** に格納されます。Radia Client Explorer を使用すると、ZPAKSESS.EDM を参照することができます。

172 ページの図 4.32 には、ZPAKSESS.EDM の例が示されています。

現在のパッケージ化セッションを終了し、再開しない場合は、ZPAKSESS.EDM を削除することができます。Radia System Explorer を使用して、Radia データベースから **PACKAGE** インスタンスを削除することもできます。

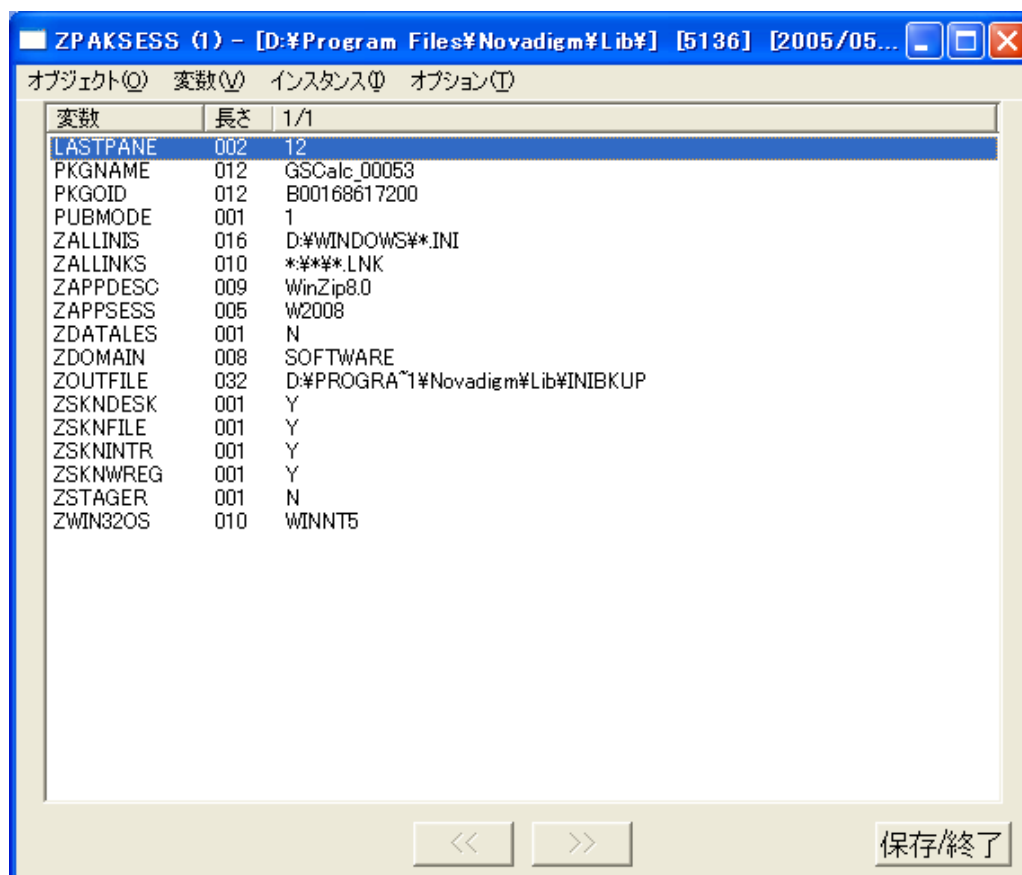


図 4.32 ~ ZPAKSESS.EDM、現在のセッション情報 (コンポーネント選択モード)

[次へ] をクリックして [システムの設定] ウィンドウに進みます。

手順 4: 必須のシステム設定を設定する

[システムの設定] ウィンドウを使用すると、特定の条件を満たしたコンピュータにのみパッケージを配布することができます。配布条件は、コンピュータのオペレーティング システム、RAM、プロセッサ速度を基に指定します。どのオプションも選択しなかった場合は、サービスにアクセス可能なすべてのサブスクリバがパッケージを利用することができます。

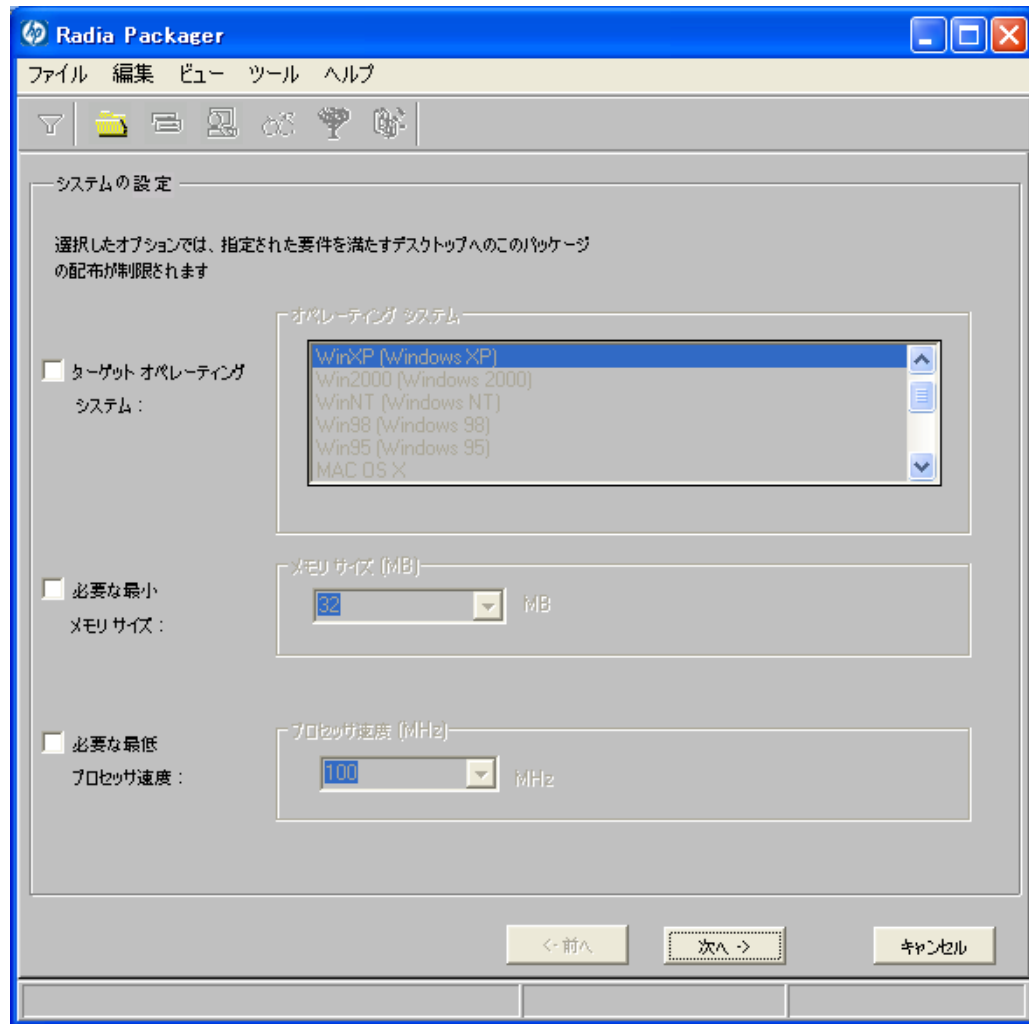


図 4.33 ~ [システムの設定] ウィンドウ (コンポーネント選択モード)

■ **[ターゲット オペレーティング システム]**

このチェック ボックスをオンにすると、**[オペレーティング システム]** ボックスが使用可能になります。このパッケージに必要な 1 つまたは複数のオペレーティング システムを選択してください。

- 選択するオペレーティング システムが一覧内で連続している場合は、キーボードの **Shift** キーを押しながらクリックします。
- 選択するオペレーティング システムが一覧内で連続していない場合は、キーボードの **Ctrl** キーを押しながらクリックします。オペレーティング システムを選択しなかった場合は、すべてのオペレーティング システムのサブスクライバがパッケージを利用することができます。

■ **[必要な最小メモリ サイズ]**

このチェック ボックスをオンにすると、**[メモリ サイズ (MB)]** ボックスが使用可能になります。このパッケージで最低限必要な **RAM** サイズを選択してください。

■ **[必要な最低プロセッサ速度]**

このチェック ボックスをオンにすると、**[プロセッサ]** ボックスが使用可能になります。このパッケージで最低限必要なプロセッサ速度を選択してください。

[次へ] をクリックして **[配布可能日時]** ウィンドウに進みます。

手順 5: 日付と時刻の制約を設定する

[配布可能日時] ウィンドウを使用すると、パッケージを配布可能にする日付と時刻が指定できます。日付と時刻は、**Radia Configuration Server** を実行しているコンピュータのシステム クロックを基にします。日付と時刻の制約を指定しない場合、**Radia** データベースに転送させて配布用に設定すると、パッケージはすぐに使用可能になります。**Radia System Explorer** を使用すると、このパッケージを **Radia** データベースに転送させた後でも設定を変更することができます。

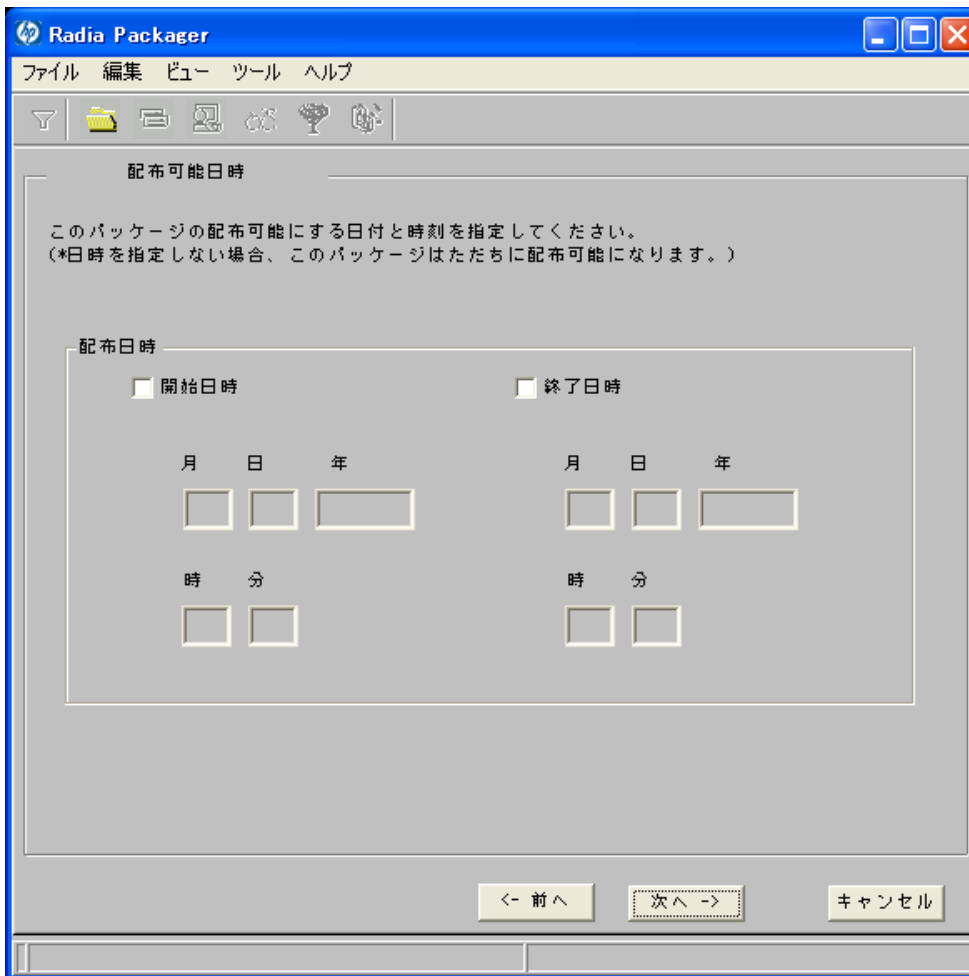


図 4.34 ~ [配布可能日時] ウィンドウ (コンポーネント選択モード)

■ **【開始日時】**

このチェック ボックスをオンにすると、指定した日付と時刻より *前*には配布できなくなります。
[月]、[日]、[年]、[時]、および [分] の各テキスト ボックスで日付と時刻を指定します。

■ **【終了日時】**

このチェック ボックスをオンにすると、指定した日付と時刻より *後*には配布できなくなります。
[月]、[日]、[年]、[時]、および [分] の各テキスト ボックスで日付と時刻を指定します。

この GS-Calc の例では、175 ページの図 4.34 に示すとおり、デフォルト設定のままにして、パッケージを Radia データベースに転送させたらすぐに配布することができるようにしています。

[次へ] をクリックして [パブリッシュするファイルを選択してください] ウィンドウに進みます。

手順 6: パッケージ化するファイルを選択する

[パブリッシュするファイルを選択してください] ウィンドウを使用すると、パッケージに含める必要があるすべてのファイル、リンク、ショートカット、およびレジストリ エントリを選択することができます。それらが不明な場合は、インストール モニタ モードの使用を検討してください。

パッケージ化するファイルを選択するには

- 下の図 4.35 の ツリー ビューに表示されるファイル システムを検索し、パッケージに含めるファイルまたはフォルダを選択します。
チェック ボックスをオフにすると、選択が解除されます。

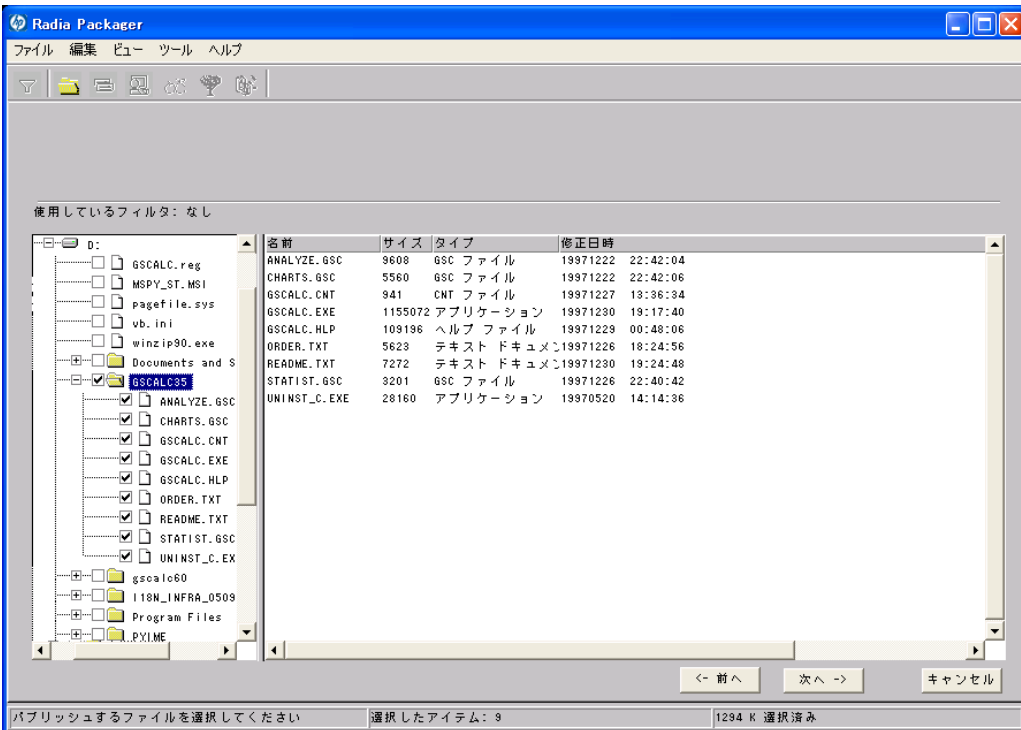


図 4.35 ~ [パブリッシュするファイルを選択してください] ウィンドウ (コンポーネント選択モード)

アプリケーションとコンテンツをパッケージ化する

この GS-Calc の例では、177 ページの図 4.35 に示すとおり、プログラム ファイルが格納されているフォルダ **C:\GS-Calc**、リンクが格納されているフォルダ **C:\Documents and Settings\All Users\Start Menu\Programs\GS-Calc**、以前にエクスポートしたレジストリ エントリを選択しています。**[次へ]** をクリックして **[プロパティとロケーションを設定してください]** ウィンドウに進みます。

警告

パッケージの一部としてバッチ ファイルまたはテキスト ファイルに新しい行を追加した場合、パッケージ化プロセスはその前の行を検索行として使用し、配布時にそれらの変更を適用します。たとえば、同じ REM などの行が 2 つある場合、サービスは、最初の REM の後に自動的に新しい行を追加します。

手順 7: ファイルのプロパティとロケーションを表示する

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウの [ファイル] タブを使用すると、パッケージ内の選択したファイルとフォルダを参照することができます。

選択したファイルとフォルダを表示するには

1. [選択したファイル] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。チェック マークは、ファイルのプロパティが指定済みで、Radia Packager が転送の準備を完了していることを示します。
2. ツリー ビューのファイルをクリックし、リスト ビューにプロパティを表示します。

[検証]、[優先度]、[必須/オプション] など、下の図 4.36 にあるプロパティの一部は、[Radia Packager – グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックス (209 ページの説明を参照) で選択した内容に従ってあらかじめ設定されています。必要に応じてこれらの設定を変更する方法については、181 ページの「手順 8: ファイルのプロパティとロケーションを設定する」で説明します。

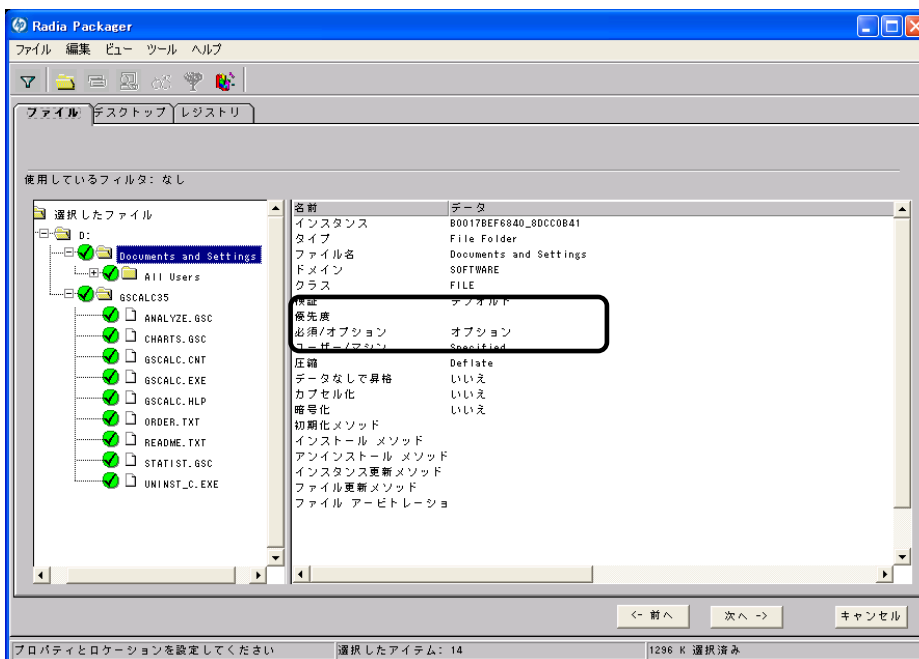




図 4.36 ~ 選択したファイルの表示ウィンドウ (コンポーネント選択モード)

表示されたファイルとフォルダに対してフィルタを実行するには

パッケージに含まれるファイル数が多い場合、フィルタを使用すると、ウィンドウに表示するファイルのタイプを制限することができます。

1. フィルタ ボタン  をクリックし、ツリー ビュー内のファイルに対してフィルタを実行します。
2. [フィルタの設定] ダイアログ ボックスで、ファイル タイプを「.DLL」などの文字列で入力します。フィルタ条件の文字列を含むファイル名またはフォルダ名があると、一致したと見なされます。
3. [OK] をクリックします。

フィルタを削除するには

1. フィルタ ボタン  をクリックし、[フィルタの設定] ダイアログ ボックスを表示します。
2. [クリア] をクリックします。
3. [OK] をクリックします。

[次へ] をクリックして続行します。

この GS-Calc の例では、必要なコンポーネントが選択されていることを確認するために、選択したファイルを展開しています。適用しているフィルタはありません。

手順 8: ファイルのプロパティとロケーションを設定する

[インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスを使用すると、パッケージ内のファイルおよびフォルダのプロパティを変更することができます。ファイルまたはフォルダのプロパティは、Radia データベースの各インスタンスに格納されます。

[Radia Packager - グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスを使用すると、これらのプロパティのデフォルト値を設定することができます。詳細については、209 ページの「デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する」を参照してください。

[インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスにアクセスするには

1. 属性を設定するファイルまたはフォルダを右クリックします。
2. [プロパティを設定] をクリックします。フォルダを選択している場合は、[ディレクトリのみ] または [ディレクトリとファイル] のいずれかをクリックする必要があります。[インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。ダイアログ ボックスには、[クライアント管理]、[データ オプション]、[クライアントの動作]、および [データベース情報] の 4 つのタブがあります。

[クライアント管理] タブ

[クライアント管理] タブを使用すると、パッケージ内の選択したファイルまたはフォルダの検証オプションおよび配信オプションを設定することができます。Radia System Explorer を使用すると、このパッケージを Radia データベースに転送させた後でも設定を変更することができます。

- [検証オプション] では、選択したファイルまたはフォルダに対して Radia Software Manager が実行する検証アクションを指定します。
- [配信オプション] では、ファイルが配布される順序など、配信に関するオプションを指定します。

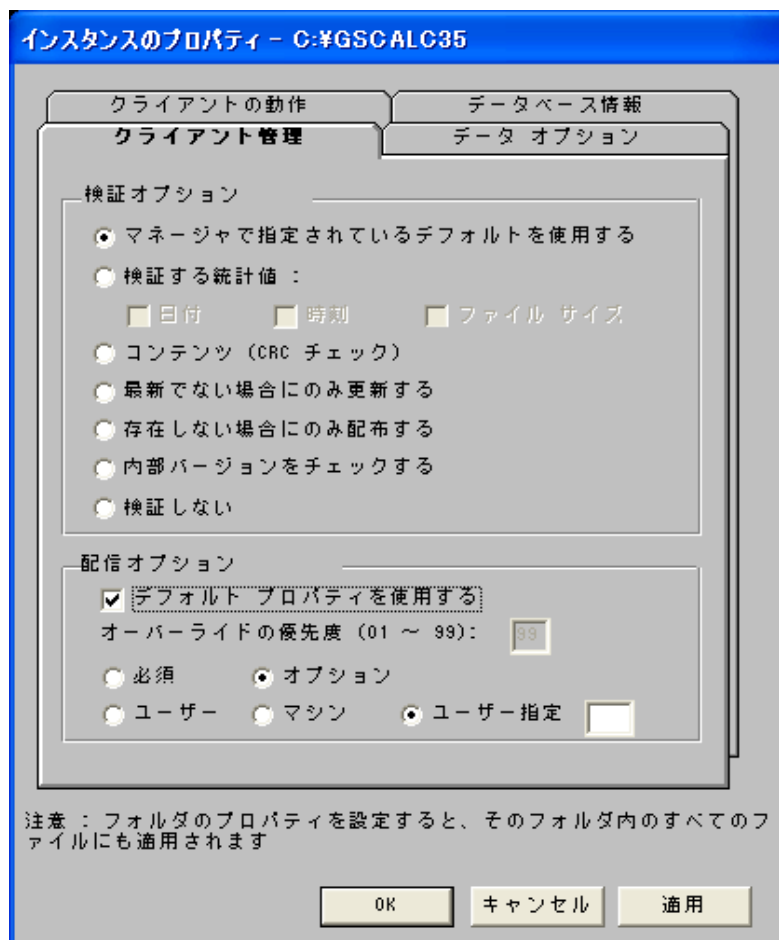


図 4.37 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアント管理] タブ (コンポーネント選択モード)

【検証オプション】

- **【マネージャで指定されているデフォルト検証を使用する】**(デフォルト)
【マネージャで指定されているデフォルトを使用する】(デフォルト)
 このオプションを選択すると、そのファイルまたはフォルダの検証オプションが、Radia データベースの FILE クラスのベース インスタンスから継承されます。
 Radia System Explorer で、FILE クラスのベース インスタンスの ZRSCVRFY 属性を参照すると、デフォルトの検証オプションを確認することができます。
- **【検証する統計値】**
 このオプションを選択すると、クライアントは、自分のコンピュータにあるファイルの統計情報(日付、時刻、ファイル サイズ)をチェックします。ファイルの統計値がクライアント コンピュータのファイルと異なる場合、Radia データベース(または Radia Proxy Server) からファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=D(日付)、ZRSCVRFY=S(ファイル サイズ)、ZRSCVRFY=T(時刻)、または ZRSCVRFY=Y(日付、時刻、およびファイル サイズ)と設定します。
- **【コンテンツ (CRC チェック)】**
 このオプションを選択すると、Radia Application Manager は、クライアント コンピュータにあるファイルの統計値のコンテンツ (CRC) をチェックします。検証する際、ファイルは最初に日付、時刻、およびファイル サイズを基にチェックされます。検証の時間を節約するために、日付、時刻、およびファイル サイズの検証に合格した場合にのみ、CRC がチェックされます。その統計値がクライアント コンピュータの統計値と異なる場合に、Radia Configuration Server(または Radia Proxy Server) はファイルを配布します。このオプションを選択すると、Radia Packager は、CRC を計算し、ZRSCCRC 属性に値を設定します。
- **【最新でない場合にのみ更新する】**
 このオプションを選択すると、そのファイルの日付および時刻のタイムスタンプがクライアント コンピュータのものよりも新しい場合に、Radia データベース (または Radia Proxy Server) からファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=U と設定します。
- **【存在しない場合にのみ配布する】**
 このオプションを選択すると、そのファイルは、クライアント コンピュータに存在しない場合にのみ配布されます。クライアント コンピュータにファイルが既に存在する場合は、統計値が Radia データベースのものとは異なっていても何も実行されません。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=E と設定します。
- **【内部バージョンをチェックする】**
 このオプションを選択すると、クライアント コンピュータにファイルが存在する場合はそのファイルのバージョンと配布されるファイルのバージョンが比較されます。これにより、複数のバージョンが存在する場合でも、適切なファイルが更新されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=V と設定します。この機能で比較されるファイル タイプは、.DLL、.EXE、.OCX、.SYS、.VBX です。

■ **【検証しない】**

このオプションを選択すると、アプリケーションが初めて配布されるときにファイルが配布されます。それ以降は何も実行されません。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCVRFY=N と設定します。

【配信オプション】

■ **【デフォルト プロパティを使用する】**

このチェック ボックスをオンにすると、配信の優先度がデフォルトの **50** になります。この優先度の高さによって、配布の順序が決まります。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCPRI=50 と設定します。

■ **【上書きの優先度】**

1 ~ **99** の値を入力すると、デフォルトの優先度 **50** が上書きされます。最も高い優先度は **1**、最も低い優先度は **99** です。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCPRI=1 と設定します。

以下のオプションは、アプリケーション全体をインストールするのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合にのみ適用されます。

■ **【必須】**

このオプションを選択すると、そのファイルはアプリケーションの必須ファイルになります。

- アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合は、必須ファイルのみが配布されます。
- 必須ファイルを格納するのに十分な容量がない場合、アプリケーションは配布されません。

Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCMO=M と設定します。

■ **【オプション】(デフォルト)**

このオプションを選択すると、ファイルはアプリケーションの必須ファイルではなくなります。

- アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合、オプション ファイルは配布されません。

Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZRSCMO=O と設定します。

以下のオプションは、Windows NT 4.0、2000、Windows Server 2003 など、ログオンで複数のユーザーをサポートしているオペレーティング システムに対してのみ適用されます。

■ **【ユーザー】**

【ユーザー】 を選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクライバにだけファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZCONTEXT=U と設定します。

■ **【マシン】**

【マシン】 を選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。Radia System Explorer でこのオプションを設定する場合は、ZCONTEXT=M と設定します。

■ **【ユーザー指定】**

このオプションは、現時点では利用できません。

この GS-Calc の例では、デフォルトの検証設定および配信設定を使用しています。

[データ オプション] タブ

[データ オプション] タブを使用すると、データ圧縮方法など、配布予定のファイルまたはフォルダに関する詳細を指定することができます。

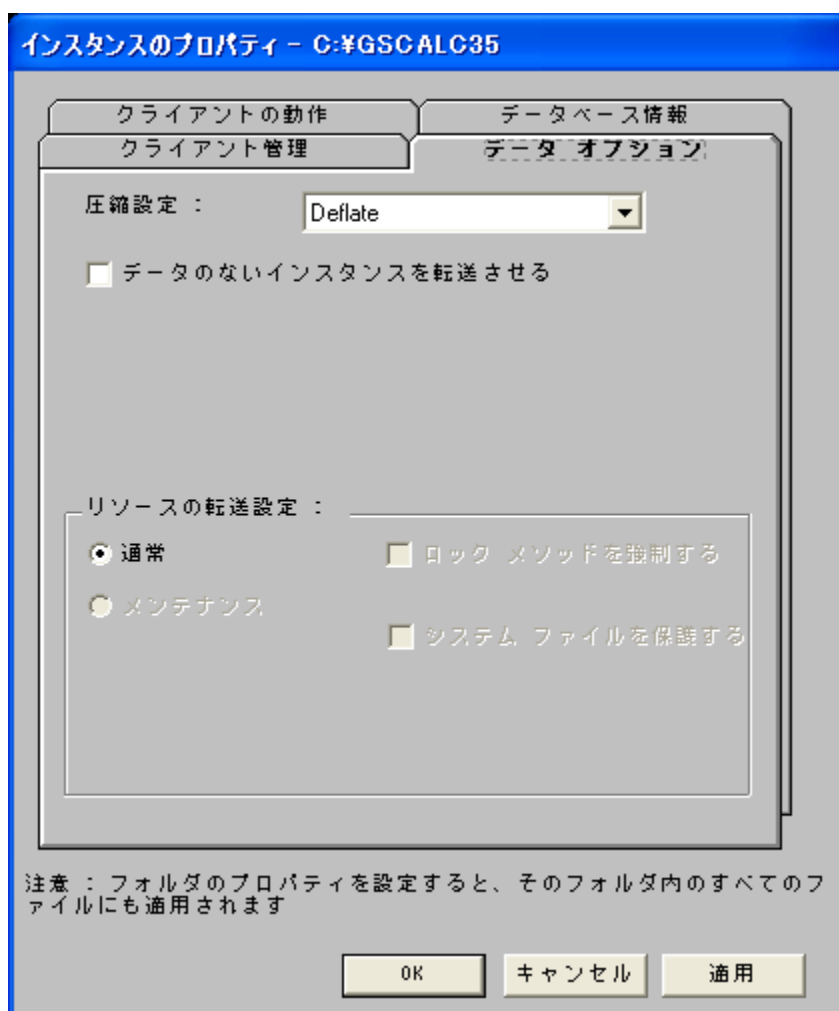


図 4.38 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [データ オプション] タブ (コンポーネント選択モード)

■ **[圧縮設定]**

必要に応じて、選択したファイルを **Radia** データベースに格納する際の圧縮設定を選択します。ファイルを圧縮すると、ファイルの転送時間が短縮され、格納に必要なディスク容量が軽減されます。

- **[deflate]** を選択すると、最も効率的にファイルを圧縮することができます。**[deflate]** は、データを圧縮してファイル サイズを小さくします。
- ファイルが既に圧縮されている場合は、**[なし]** を選択します。パッケージ化するアプリケーションに圧縮ファイルが含まれている場合は、**Radia Packager** でファイルをさらに圧縮しないでください。圧縮すると、ファイルのサイズが大きくなる可能性があります。

■ **[データの無いインスタンスを転送させる]**

このチェック ボックスをオンにすると、選択したファイルがパッケージの一部として **Radia** データベースに送信されなくなります。ファイルを表すインスタンスのみがパッケージに含まれます。データは、圧縮された状態で、コンピュータの **IDMDATA** 内に保存されたままとなります。**IDMDATA** のデフォルト ロケーションは、**SystemDrive:\Program Files\Novadigm\Lib\YData** です。**Radia Staging Server** に接続できる環境で、**Radia** データベースにコピーを格納しない場合は、手動で **Radia Staging Server** にファイルを移動することができます。

[リソースの転送設定]

■ **[普通]**

このオプションを選択すると、そのファイルはアプリケーションの一部として配布されます。

■ **[メンテナンス]**

これは旧バージョンの機能で、バージョン **4.0** では使用されていません。

■ **[ロック メソッドを強制する]**

このチェック ボックスをオンにすると、選択したファイルの配布に対してロック ファイル メソッドが強制的に使用されます。**Radia** がファイルの新しいコピーを配布する際に、クライアント コンピュータでそのファイルが使用中の場合は、通常、ロック ファイル メソッドでファイルが配布されます。必要に応じて、ファイルは解凍され、ローカルのフォルダに格納されます。クライアント接続プロセスが終了すると強制的に再起動され、起動時に適切な場所にファイルが配布されます。

■ **[システム ファイルを保護する] (Windows 2000 および Windows Server 2003 のみ)**

このチェック ボックスをオンにすると、**Windows** のシステム ファイル保護 (**SFP**) が強制されます。最初に、現在の検証オプション (**FILE** クラスにある **ZRSCVRFY** 属性で指定されているオプション) に従ってリソースが検証されます。

- 検証に成功した場合、リソースは要求ステートにあり、これ以上の検証は不要になります。
- 検証に失敗した場合、システム ファイル保護によってファイルが保護されているかどうかをチェックされます。保護されている場合、ファイルは配布されません。

最後にこの属性がチェックされ、**SFP** を強制する設定になっているかどうかを確認されます。

- このチェック ボックスをオンにしている場合、**ZRSCVRFY** 属性は **P** に設定されており、このリソースとサービスの配布は **SFP** 処理が原因で失敗したものとして記録されます。
- **SFP** を強制するように設定していない場合、ファイルは検証に成功したものとして記録されます。

SFP ファイルに対して行われたアクションを説明するために、**ZERROR** インスタンスが作成されます。

この **GS-Calc** の例では、デフォルトのデータ オプションを使用しています。

[クライアントの動作] タブ

[クライアントの動作] タブを使用すると、クライアント コンピュータに対して Radia が実行するメソッド (プログラム) を指定することができます。

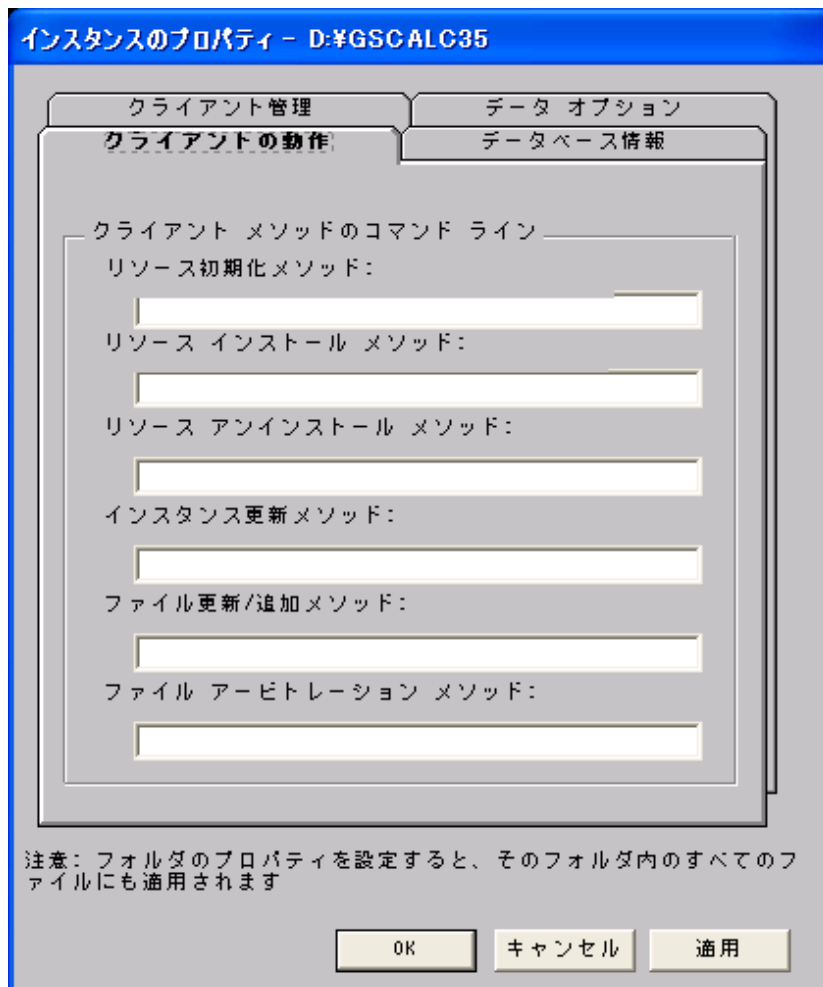


図 4.39 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアントの動作] タブ (コンポーネント選択モード)

このダイアログ ボックスに入力したコマンド ラインは、SOFTWARE ドメインの FILE クラスインスタンスの属性に格納されます。

[クライアント メソッドのコマンドライン]

- [リソース初期化メソッド] (データベース内の属性: ZINIT)
クライアント コンピュータにファイルが格納されたときに実行するメソッドを入力します。
- [リソース インストール メソッド] (データベース内の属性: ZCREATE)
クライアント コンピュータにファイルが格納された後に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、クライアント コンピュータでファイルを使用可能にする処理が要求された場合に使用します。
- [リソース アンインストール メソッド] (データベース内の属性: ZDELETE)
通常、ソフトウェアへのサブスクリプションがキャンセルされると、ファイルは削除されます。共有 DLL ファイルなど、クライアント コンピュータから削除できないファイルの場合は、ソフトウェアのサブスクリプションをキャンセルしたときでも、[リソース アンインストール メソッド] に「**_NONE_**」(アンダースコア付き) と入力する必要があります。
- [インスタンス更新メソッド] (データベース内の属性: ZUPDATE)
ファイルまたはフォルダを配布した後に、クライアント コンピュータでインスタンスが変更されたときに実行するメソッドを入力します。
- [ファイル更新/追加メソッド] (データベース内の属性: ZFILEUPD)
新しいファイルが追加されたとき、またはファイルが更新されたときに実行するメソッドを入力します。このメソッドは、クライアント コンピュータにファイルが配布される直前に実行されます。
- [ファイル アービトレーション メソッド] (データベース内の属性: ARBITRAT)
ファイルを置き換えようとする場合に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、現在クライアント コンピュータに存在するファイルのバージョン情報と、置き換えるファイルのバージョン情報を比較し、どちらを保持するかを判別します。

注意

このフィールドを使用するには、Radia データベースに ARBITRAT メソッドを追加する必要があります。詳細については、HP OpenView Web サイトにある技術文書『ファイル アービトレーション メソッドについて』を参照してください。

この GS-Calc の例では、どのメソッドも指定していません。

[データベース情報] タブ

[データベース情報] タブを使用すると、選択したファイルまたはフォルダのインスタンスを Radia データベースのどこに格納するかを指定することができます。

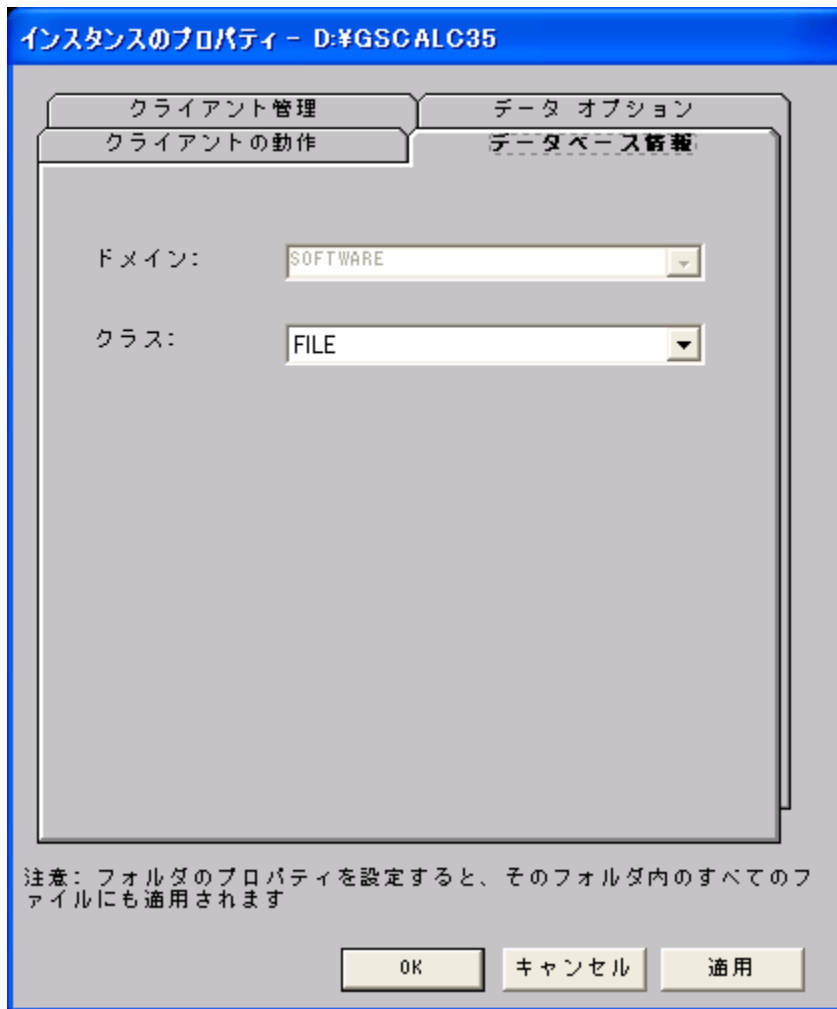


図 4.40 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [データベース情報] タブ (コンポーネント選択モード)

- **【ドメイン】**
インスタンスを格納するドメインを選択します。**Radia** データベースを固有のドメインでカスタマイズした場合を除いて、通常は **SOFTWARE** ドメインを選択します。
- **【クラス】**
選択したファイルのインスタンスを格納するコンポーネント クラスを選択します。
この **GS-Calc** の例では、デフォルトのドメイン設定およびクラス設定を使用しています。
[OK] をクリックして **[プロパティとロケーションを設定してください]** ウィンドウに戻り、**[デスクトップ]** タブをクリックします。

手順 9: デスクトップのプロパティとロケーションを設定する

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウの [デスクトップ] タブを使用すると、パッケージ内の選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示し、それぞれのプロパティを変更することができます。これらのプログラム グループ、リンク、ショートカットはクライアント コンピュータに表示されます。

選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示するには

- [選択したリンク] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。

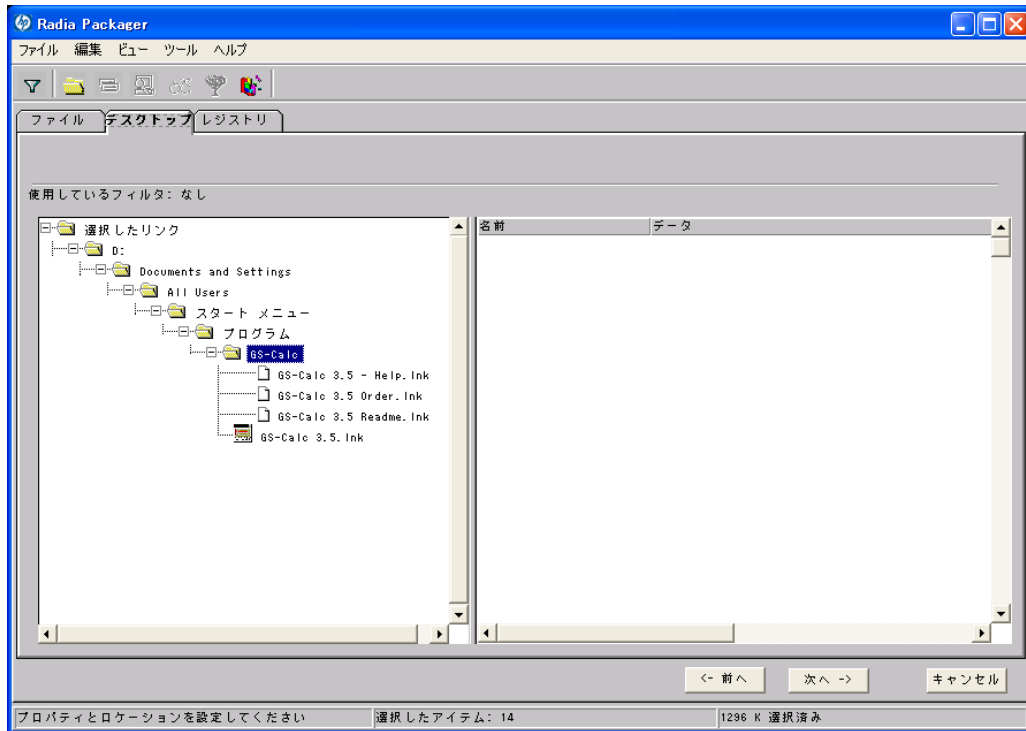


図 4.41 ~ 選択したプログラム グループ、ショートカット、およびリンクの表示 (コンポーネント選択モード)

プログラム グループ、リンク、およびショートカットのプロパティを設定するには

- ツリー ビューでリンクを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。

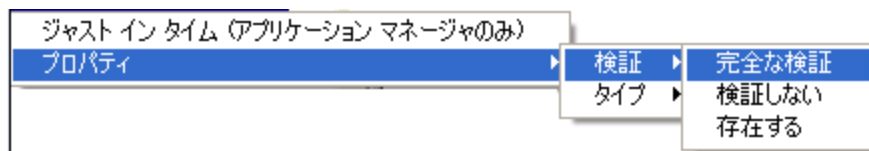


図 4.42 ~ 展開したショートカット メニュー (コンポーネント選択モード)

注意

フォルダまたはリンクを右クリックすると、ツリー ビューのフォルダ内またはリンク内のすべてのリンクに変更が適用されます。

- **[ジャスト イン タイム (アプリケーション マネージャのみ)]**
Radia Application Manager を使用すると、アプリケーションがセルフ メンテナンスを実行するように指定することができます。セルフ メンテナンスとは、アプリケーションを起動するたびに、Radia Configuration Server に自動接続してアプリケーションを検証し、必要に応じて更新または修復することです。
- **[プロパティ]**
[プロパティ] をクリックすると、[検証] および [タイプ] サブメニューが表示されます。

[検証] メニュー コマンド

- **[完全な検証]**
このコマンドを選択すると、リンクは、クライアント コンピュータに既に存在する場合でも、サブスクリバが Radia Configuration Server に接続するたびに配布されます。これにより、破損したリンクまたは変更されたリンクが修復されます。
- **[検証しない]**
最初の配布以降、リンクを検証しない場合は、このコマンドを選択します。リンクを変更または削除した場合でも、リンクは修復されません。
- **[存在する]**
このコマンドを選択すると、リンクは最初の配布時に配布されます。それ以降は、接続したときにクライアント コンピュータにリンクが存在しない場合のみ配布されます。リンクが再配布されるのは、削除された場合のみです。このことから、ユーザーはリンクを変更することができます。

[タイプ] メニュー コマンド

以下のオプションは、Windows 95、98、NT 4.0、2000、Windows Server 2003 など、複数のユーザーをサポートしているオペレーティング システムに対してのみ適用されます。

■ [ユーザー]

このコマンドを選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクリバにだけリンクが配布されます。

■ [マシン]

このコマンドを選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。

この **GS-Calc** の例では、プログラム グループ、リンク、およびショートカットに対してデフォルト設定を使用しています。[レジストリ] タブをクリックします。

手順 10: レジストリのプロパティと値を設定する

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウの [レジストリ] タブを使用すると、アプリケーションが配布される際に変更されたレジストリの内容を確認することができます。また、レジストリ キーの値を変更し、さまざまな配布 オプションを設定することができます。

選択したレジストリを表示するには

- [選択したレジストリ キー] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。

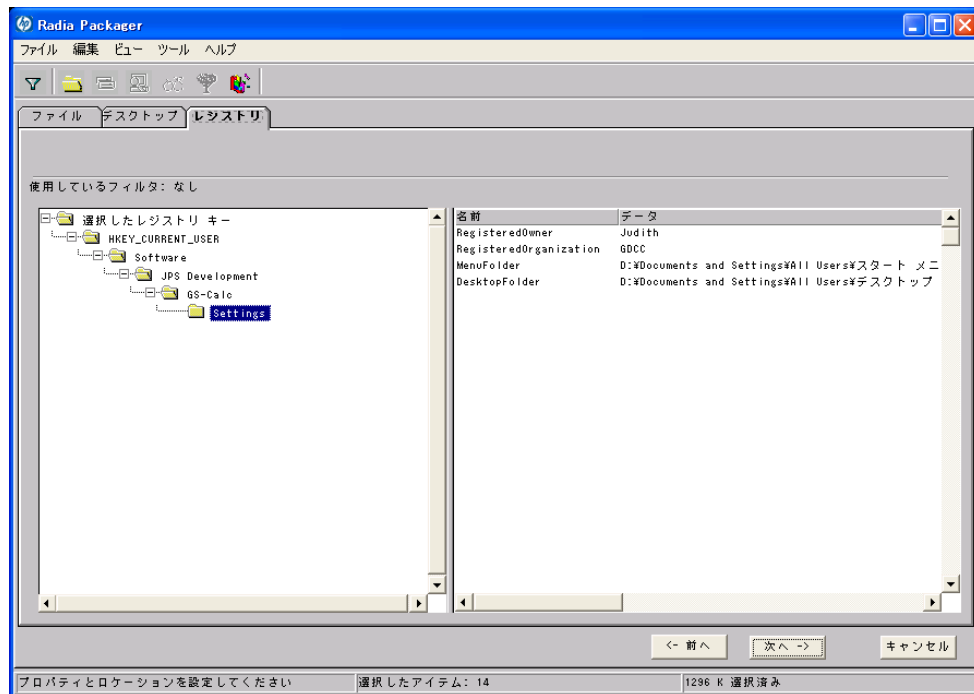


図 4.43 ~ 選択したレジストリ キーの表示 (コンポーネント選択モード)

レジストリ キーの値を編集するには

1. ツリー ビューでレジストリ キーをクリックします。
2. リスト ビューでレジストリ キーをダブルクリックします。
3. [新しい値] ボックスでデータを編集します。
4. [OK] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

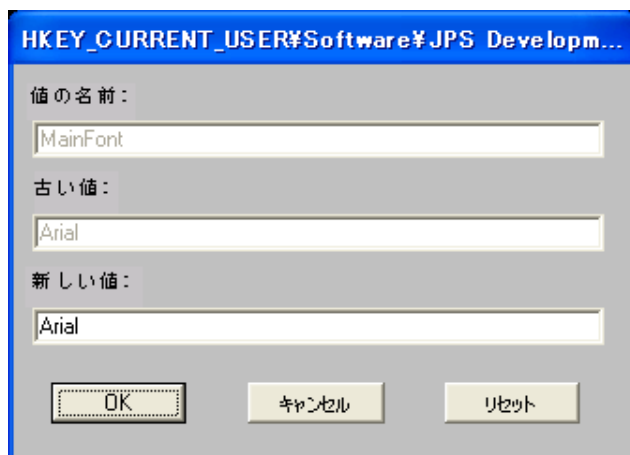


図 4.44 ~ 選択したレジストリ キーの編集 (コンポーネント選択モード)

レジストリ キーを元の値に戻すには

1. リスト ビューでレジストリ キーをダブルクリックします。
2. [リセット] をクリックします。
3. [OK] をクリックして変更を保存し、ダイアログ ボックスを閉じます。

レジストリ キーのプロパティを設定するには

- ツリー ビューでリンクを右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。



図 4.45 ~ 展開したショートカット メニュー (コンポーネント選択モード)

注意

レジストリ キーを右クリックすると、ツリー ビューのレジストリ キーのすべてのキーに変更が適用されます。

- **[アクティブ]**
このコマンドを選択すると、レジストリの変更がパッケージに含まれます。
- **[非アクティブ]**
このコマンドを選択すると、レジストリの変更はパッケージに含まれません。
- **[プロパティ]**
 - ◆ **[無条件/強制]**
このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、クライアント コンピュータに既に存在している場合でも配布されます。このレジストリ キーは、クライアント コンピュータで変更されていても、サブスクリバが **Radia Configuration Server** に接続するたびにパッケージ化された値にリセットされます。この設定は、アプリケーションの動作を保証するために変更してはならないレジストリ キーに使用します。
 - ◆ **[無条件/存在]**
このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、最初の配布の時点か、削除されたときに配布されます。ただし、レジストリ キーの値はリセットされません。この設定がデフォルトです。
 - ◆ **[存在/存在]**
このコマンドを選択すると、レジストリ キーは、クライアント コンピュータに存在しない場合にのみ配布されます。この機能では、レジストリ キーを変更してもかまいません。レジストリ キーは削除された場合にのみ再配布されるので、変更内容は上書きされません。

この GS-Calc の例では、レジストリ キーを **[無条件/存在]** に設定しています。**[次へ]** をクリックして **[ファイルの転送]** ウィンドウに進みます。

手順 11: パッケージを転送させる

[ファイルの転送] ウィンドウを使用すると、Radia データベースにパッケージのインスタンスを作成することができます。

転送させるファイルを表示するには

- [転送させるファイル] を右クリックし、[すべてを展開] をクリックします。

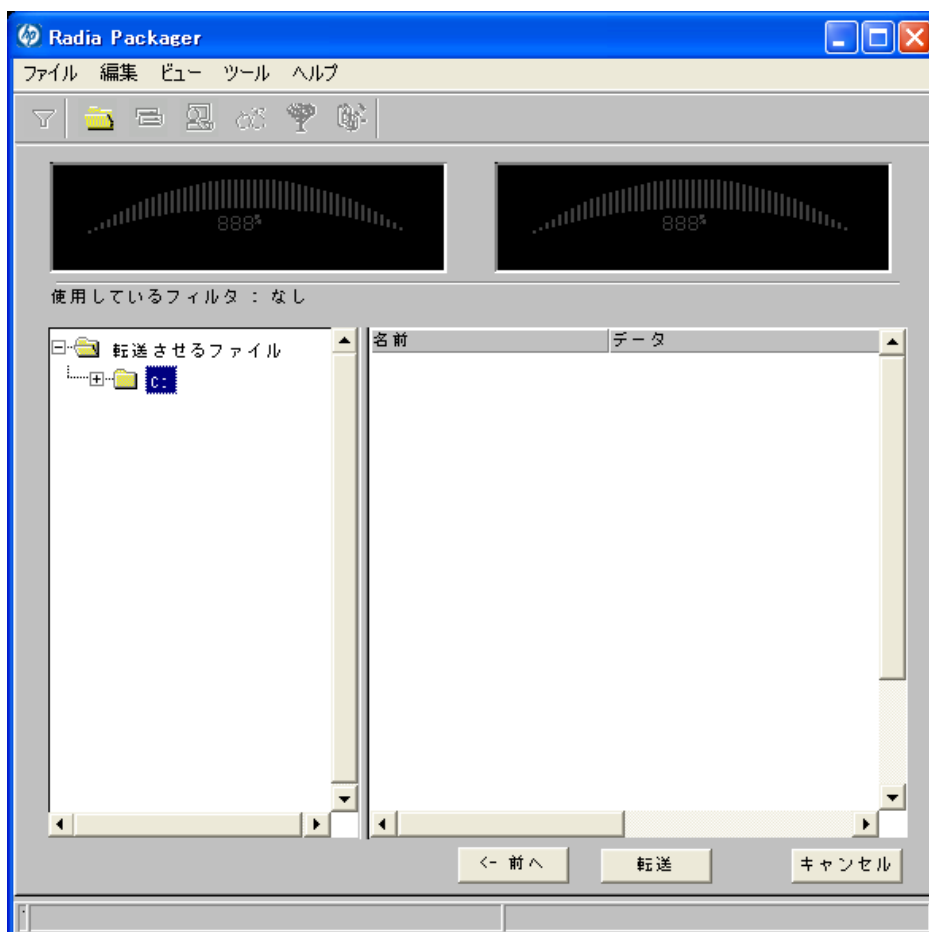


図 4.46 ~ [ファイルの転送] ウィンドウ (コンポーネント選択モード)

注意

選択内容を変更する場合は、目的の設定ウィンドウが表示されるまで **[前へ]** をクリックします。パッケージの設定を変更したら、**[次へ]** をクリックしてこのウィンドウに戻ります。

ツールバーのボタンをクリックして、前の画面に戻ることもできます。

パッケージを転送させるには

1. **[転送]** をクリックします。
2. パッケージが正常に転送されたことを示すメッセージが表示されたら **[OK]** をクリックします。
3. **[完了]** をクリックして **Radia Packager** を終了します。
4. **Radia Packager** の終了を確認するメッセージが表示されたら **[はい]** をクリックします。

この例では、**GS-Calc** を **Radia** データベースに転送させました。次の手順では、**Radia System Explorer** でサービスを作成します。詳細については、199 ページの「サービスを作成する」を参照してください。

Radia Publishing Adapter

Radia Publishing Adapter は、コンポーネント選択モードの代わりに使用するコマンドラインです。Radia Publishing Adapter では、自動化された反復可能なコマンドライン プロセスが提供されます。Radia パッケージを作成してから、配布に備えて Radia データベースに格納するまでの操作をコマンドラインで行います。

Radia Publishing Adapter を使用する利点は、以下のとおりです。

- 複数のドライブやファイル システム上でファイルを検索することができます。
- 任意のマッピングされたドライブやファイル システムからファイルを検索し、パブリッシュすることができます。
- 検索対象のサブディレクトリを制限するように設定することができます。
- ファイル レベルでファイルを含めたり除外したりすることができます。
- ファイルをタイプ別に選択することができます。

さらに、Radia Publishing Adapter を使用すると、ビルド バージョンをパブリッシュしたり、レガシー (PVCS または ClearCase) アダプタから出力したりすることができるだけでなく、内部アプリケーションの頻繁なパッチ適用にも対応することができます。コンテンツの構成要素を改訂する能力には信頼性があり、指定された時刻やあらかじめ設定された間隔で継続的に実行されるように設定できます。RPA は、コマンド プロンプトを呼び出せる任意のスクリプトまたはコード内から簡単に実行できます。

注意

Radia Publishing Adapter は、HP が提供するオプション機能です。詳細については、当社の営業担当にお問い合わせください。

サービスを作成する

Radia Packager でパッケージを作成したら、Radia System Explorer の新規アプリケーション ウィザードを使用してサービスを作成します。サービスとは、Radia によって管理されるコンテンツの基本的な構成単位です。Radia System Explorer では、サービスは Application (ZSERVICE) クラスとして表示されます。

以下の例では、122 ページの「インストール モニタ モードを使用する」で作成した WinZip 8.0 パッケージを使用してサービスを作成します。ターゲット プラットフォームは、Windows 95、98、NT、2000、および Windows Server 2003 です。

新規アプリケーション ウィザードを使用してサービスを作成する

手順 1: Radia System Explorer にアクセスする

Radia System Explorer にアクセスするには

1. [スタート] ボタンをクリックし、[すべてのプログラム] をポイントします。次に、[Radia Administrator Workstation] をポイントし、[Radia System Explorer] をクリックします。
2. [Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスの [ユーザー ID] にユーザー ID、[パスワード] にパスワードを入力します。

注意

出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

3. [OK] をクリックします。

手順 2: パッケージ クラスを検索して指定する

SOFTWARE ドメインの PACKAGE クラスを指定するには

1. **[PRIMARY]** をダブルクリックします。PRIMARY ファイルのドメインが、ツリー ビューおよびリスト ビューのアイコンの下に表示されます。
2. **[SOFTWARE]** をダブルクリックします。SOFTWARE ドメインのクラスが、ツリー ビューおよびリスト ビューのアイコンの下に表示されます。
3. **[Application Packages (PACKAGE)]** をダブルクリックして PACKAGE クラスを開きます。PACKAGE クラスのインスタンスが、ツリー ビューおよびリスト ビューのアイコンの下に表示されます。

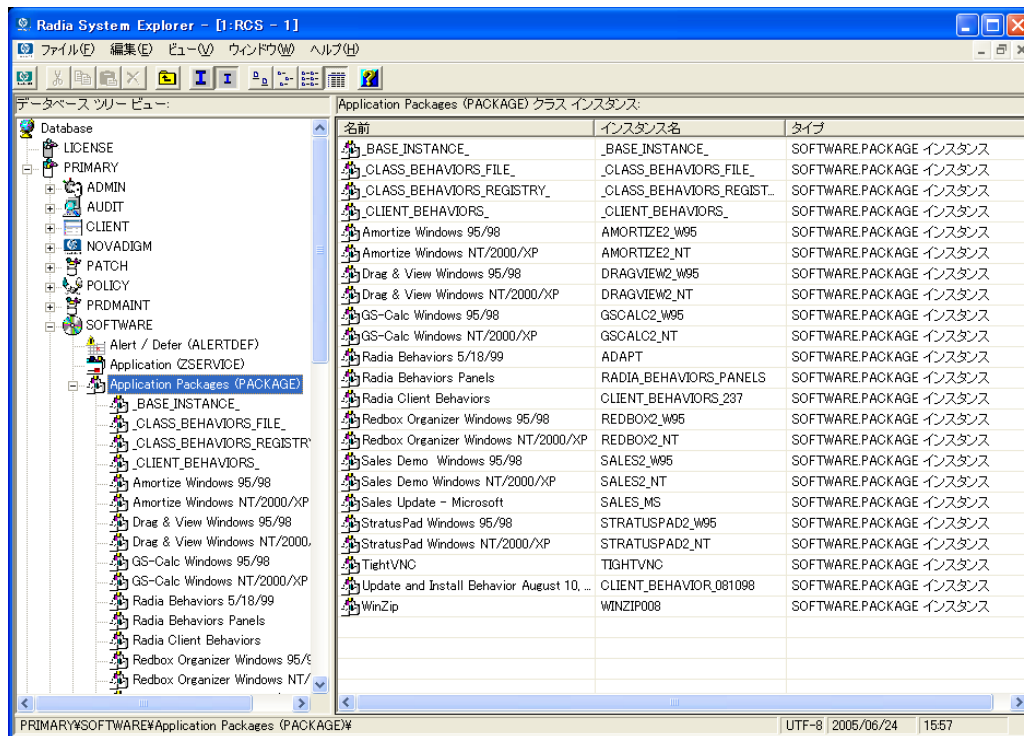


図 4.47 ~ [Application Packages (PACKAGE)] クラス

手順 3: サービスを作成する

新規アプリケーション ウィザードを使用してサービスを作成するには

1. **SOFTWARE** ドメインの **PACKAGE** クラスで、**WinZip** インスタンスを右クリックします。ショートカットメニューが表示されます。

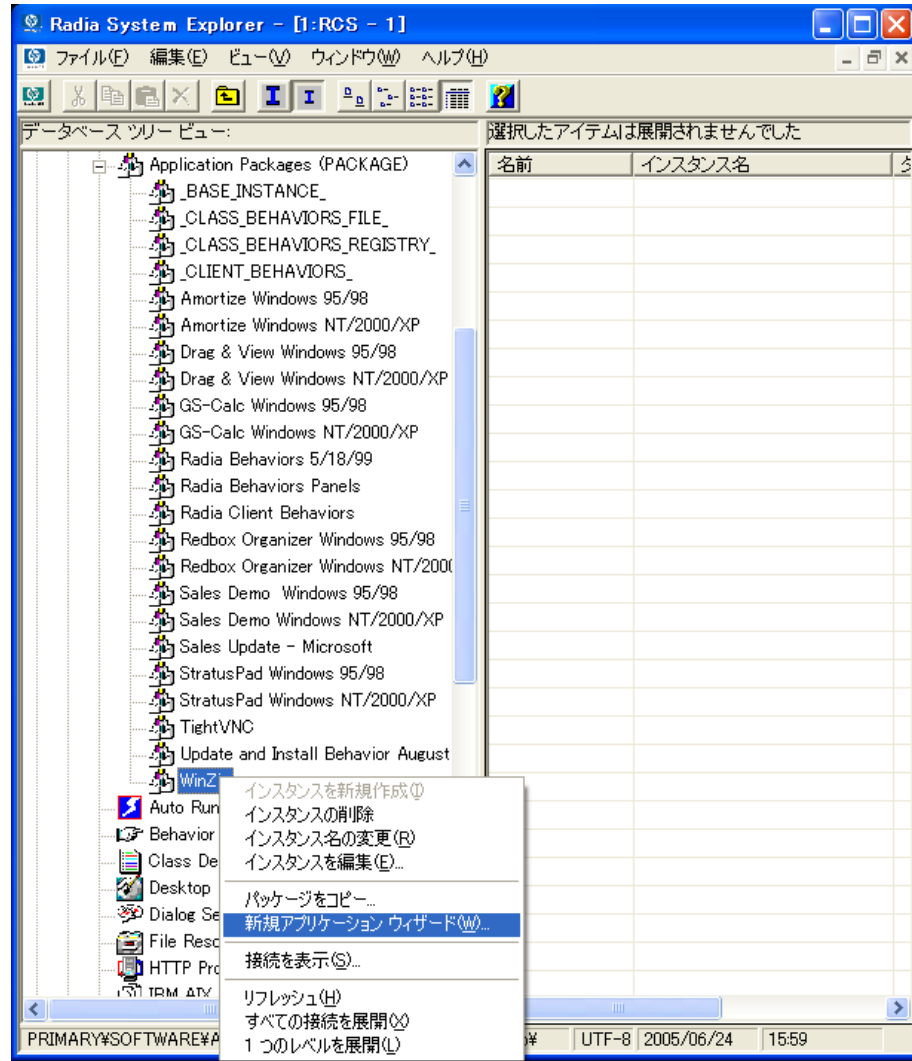


図 4.48 ~ [新規アプリケーション ウィザード] の選択

2. [新規アプリケーション ウィザード] をクリックします。

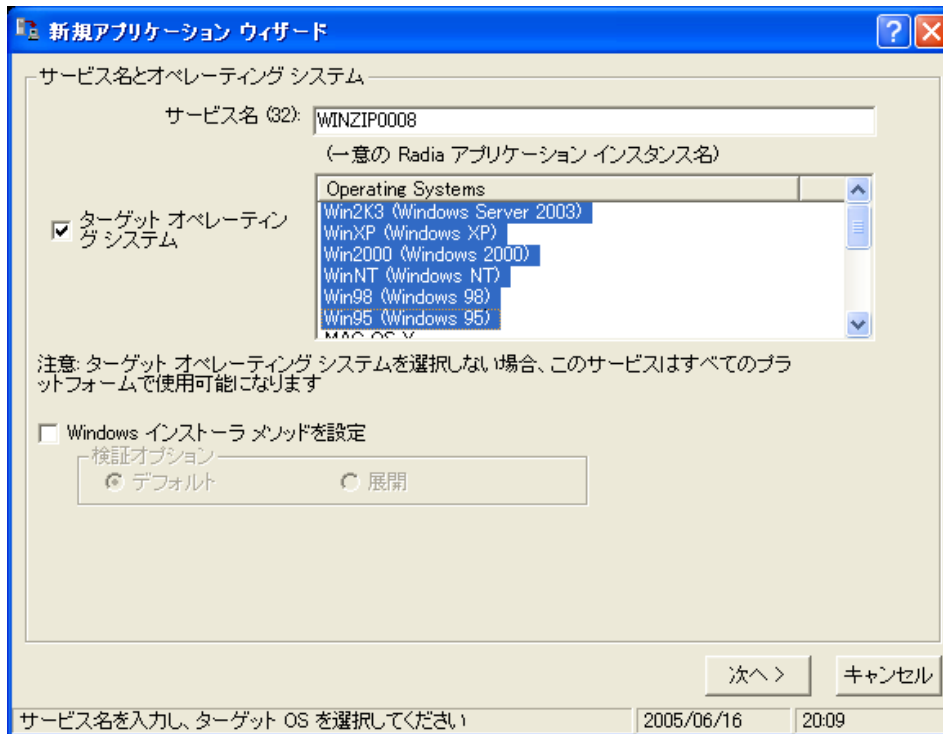


図 4.49 ~ [サービス名を入力し、ターゲット OS を選択してください] ダイアログ ボックス

3. [サービス名 (32)] ボックスに、Application (ZSERVICE) インスタンスとして「WinZip0008」などの名前を入力します。
4. このサービスの対象となるオペレーティング システムを指定する場合は、[ターゲット オペレーティング システム] チェック ボックスをオンにし、目的のオペレーティング システムをクリックします。
[ターゲット オペレーティング システム] チェック ボックスがオフの場合、サービスはすべてのプラットフォームで使用可能です。
5. Windows インストーラに対応しているアプリケーションのサービスを作成する場合は、[Windows インストーラ メソッドを設定] チェック ボックスをオンにする必要があります。ここでは、このチェック ボックスはオフのままにします。

6. [次へ] をクリックして、アプリケーションのターゲット タイプを選択します。

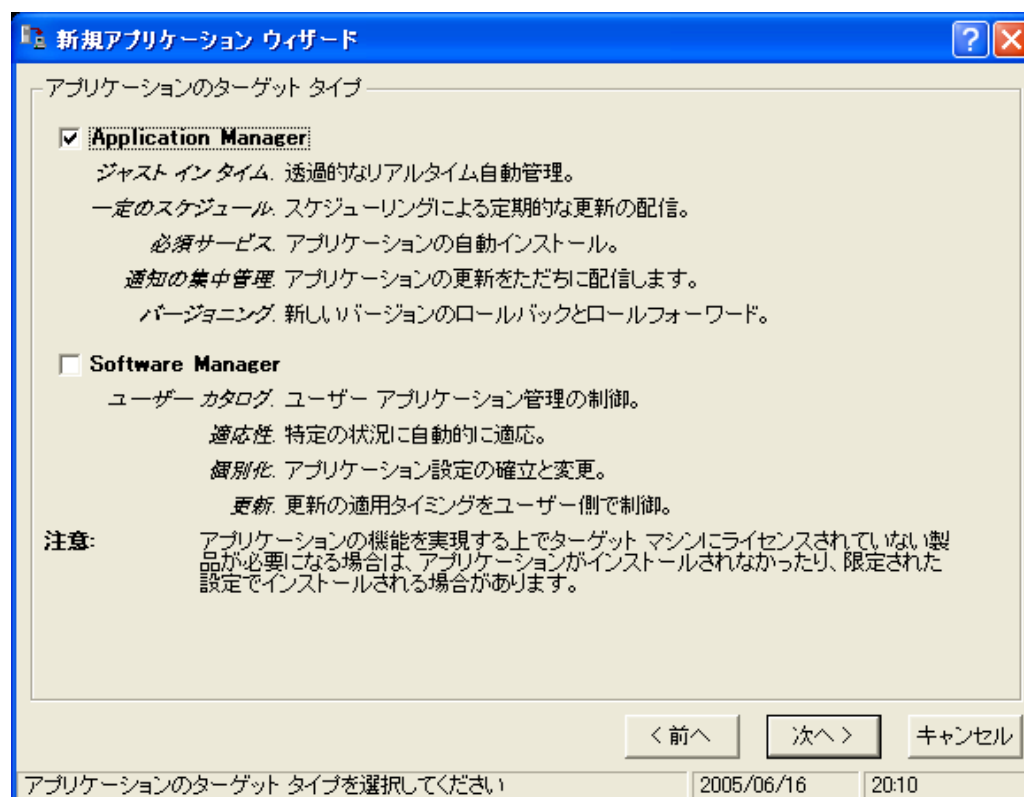


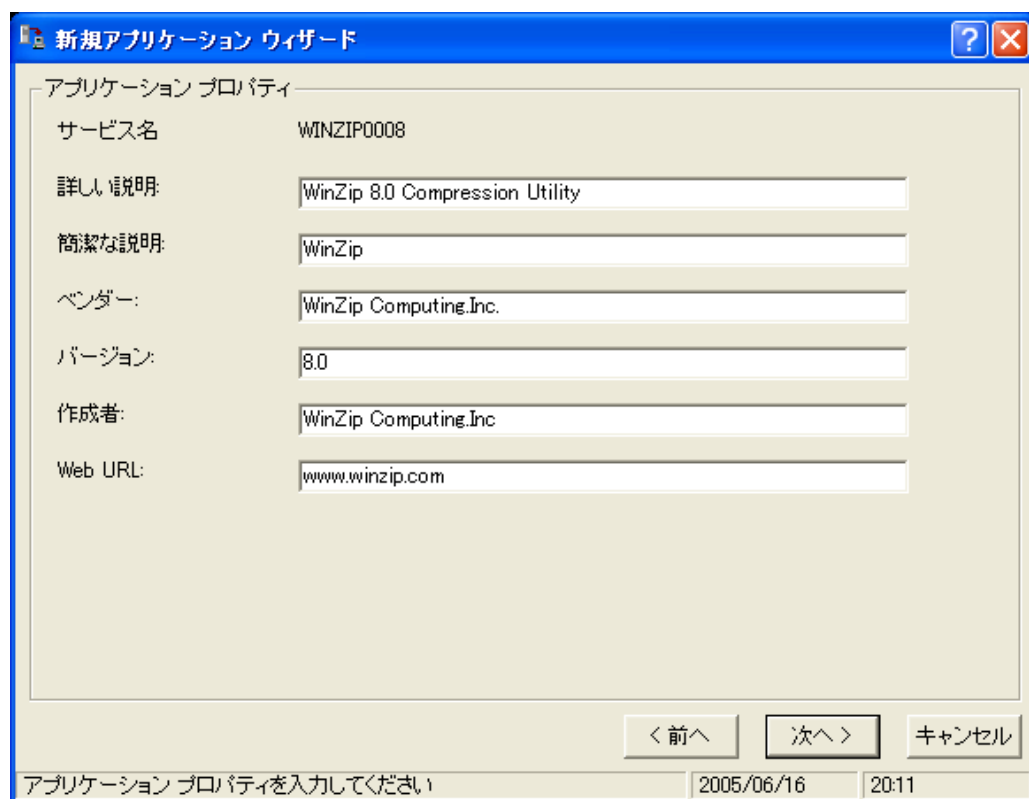
図 4.50 ~ [アプリケーションのターゲット タイプを選択してください] ダイアログ ボックス

7. [Application Manager] チェック ボックスをオンにします。このチェック ボックスをオンにすると、サービスはサブスクリバの必須アプリケーションになります。

注意

Radia Application Manager では、サブスクリバに配布されるアプリケーションは必須でなければなりません。

8. [次へ] をクリックして、アプリケーションのプロパティを入力します。



The screenshot shows a Windows dialog box titled "新規アプリケーション ウィザード" (New Application Wizard). The main area is titled "アプリケーション プロパティ" (Application Properties) and contains several text input fields with the following values:

Property	Value
サービス名 (Service Name)	WINZIP0008
詳しい説明 (Detailed Description)	WinZip 8.0 Compression Utility
簡潔な説明 (Brief Description)	WinZip
ベンダー (Vendor)	WinZip Computing, Inc.
バージョン (Version)	8.0
作成者 (Author)	WinZip Computing, Inc.
Web URL	www.winzip.com

At the bottom of the dialog, there are three buttons: "< 前へ" (Previous), "次へ >" (Next), and "キャンセル" (Cancel). The "次へ >" button is highlighted. Below the buttons, a status bar displays the text "アプリケーション プロパティを入力してください" (Please enter application properties), the date "2005/06/16", and the time "20:11".

図 4.51 ~ [アプリケーション プロパティを入力してください]

9. 上の図 4.51 のテキスト ボックスに、適切な情報を入力します。

10. [次へ] をクリックして、Radia Software Manager のレポート対象となるイベントを選択します。

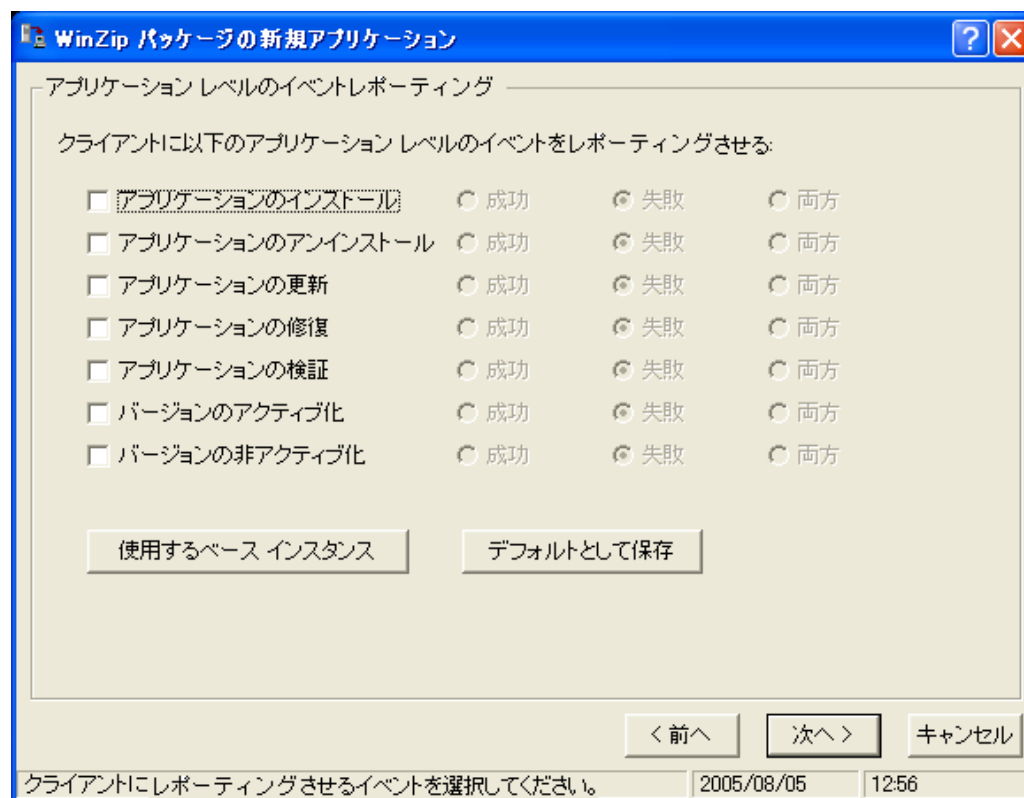


図 4.52 ~ Radia Software Manager のレポート対象となるイベントの選択

11. レポートする各イベントのチェック ボックスをオンにします。次に、適切なオプション ボタンをクリックして、レポートするのはイベントの成功か、失敗か、またはその両方かを指定します。

または

Application (ZSERVICE) のベース インスタンスから ERTYPE 属性と EVENTS 属性の値を継承する場合は、[ベース インスタンスを使用する] をクリックします。イベントレポートは、この 2 つの属性によって制御されます。

12. 現在の設定をデフォルト設定として保存する場合は、[アプリケーション レベルのイベントレポート] の [デフォルトとして保存] をクリックします。

13. [次へ] をクリックして選択内容を参照します。

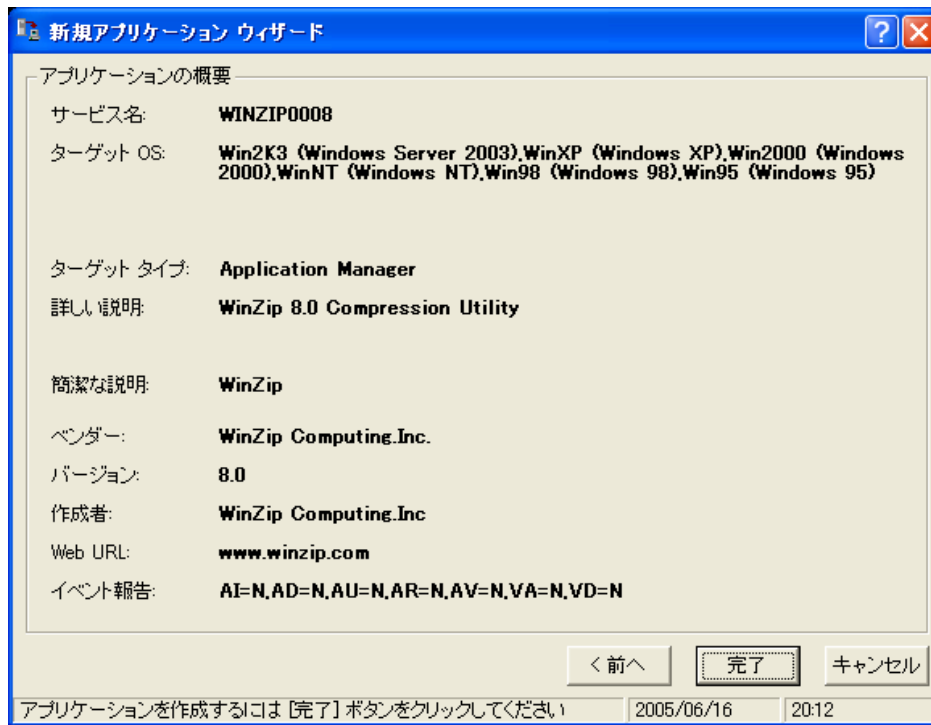


図 4.53 ~ アプリケーション設定の概要

14. [完了] をクリックしてアプリケーション インスタンスを作成します。

15. アプリケーションが追加されたことを示すメッセージが表示されたら、**[OK]** をクリックします。**ZSERVICE** クラスにインスタンスが表示されます。

注意

新規アプリケーション ウィザードで入力した情報を変更する場合は、対応する属性を特定して値を変更してください。

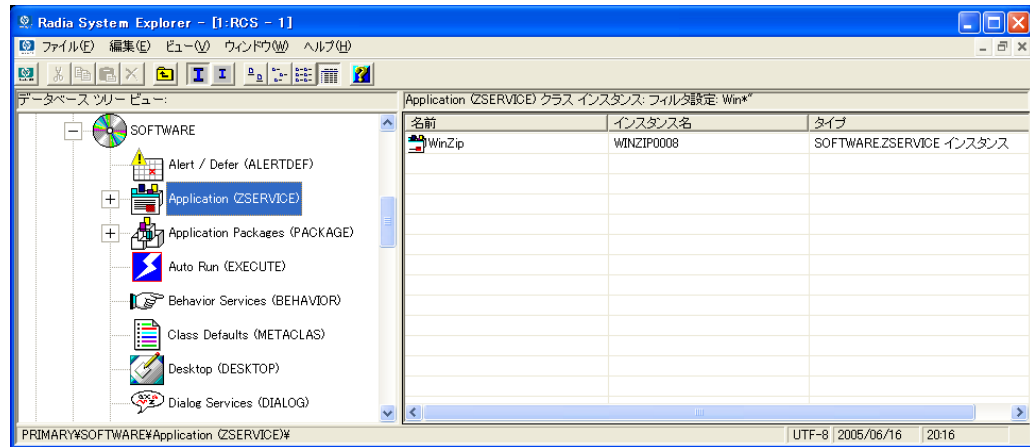


図 4.54 ~ 新しい ZSERVICE インスタンス

これで、配布対象となるサブスライバとアプリケーションを特定するポリシーを設定する準備が整いました。詳細については、223 ページの「第 5 章: エンタイトルメント ポリシーを実装する」を参照してください。

デフォルトのパッケージ化プロパティを設定する

パッケージに含まれるファイルに対して、圧縮設定や検証オプションなどのデフォルト プロパティを設定することができます。デフォルト プロパティの変更内容は、新しい Radia Packager セッションに適用されます。

特定のファイルまたはフォルダのプロパティは、必要に応じて後で [プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウで変更することができます。インストール モニタ モードの場合は 145 ページの、コンポーネント選択モードの場合は 181 ページの手順を参照してください。

Radia System Explorer を使用して、ベース インスタンスのデフォルト プロパティを変更することもできます。または、Radia データベースにパッケージを転送させてから、FILE、REGISTRY、DESKTOP クラスの各インスタンスのプロパティを個別に変更する方法もあります。

Radia Packager にログオンするには

1. [スタート] ボタンをクリックし、[すべてのプログラム] をポイントします。次に、[Radia Administrator Workstation] をポイントし、[Radia Packager] をクリックします。
2. [Radia Packager のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスの [ユーザー ID] にユーザー ID、[パスワード] にパスワードを入力します。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

3. [OK] をクリックします。

[グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスにアクセスするには

- [編集] メニューの [グローバル デフォルトを変更する] をクリックします。[Radia Packager - グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスには、[クライアント管理]、[データ オプション]、および [クライアントの動作] の 3 つのタブがあります。

[クライアント管理] タブ

[クライアント管理] タブを使用すると、パッケージ内のファイルの検証オプションおよび配信オプションを設定することができます。

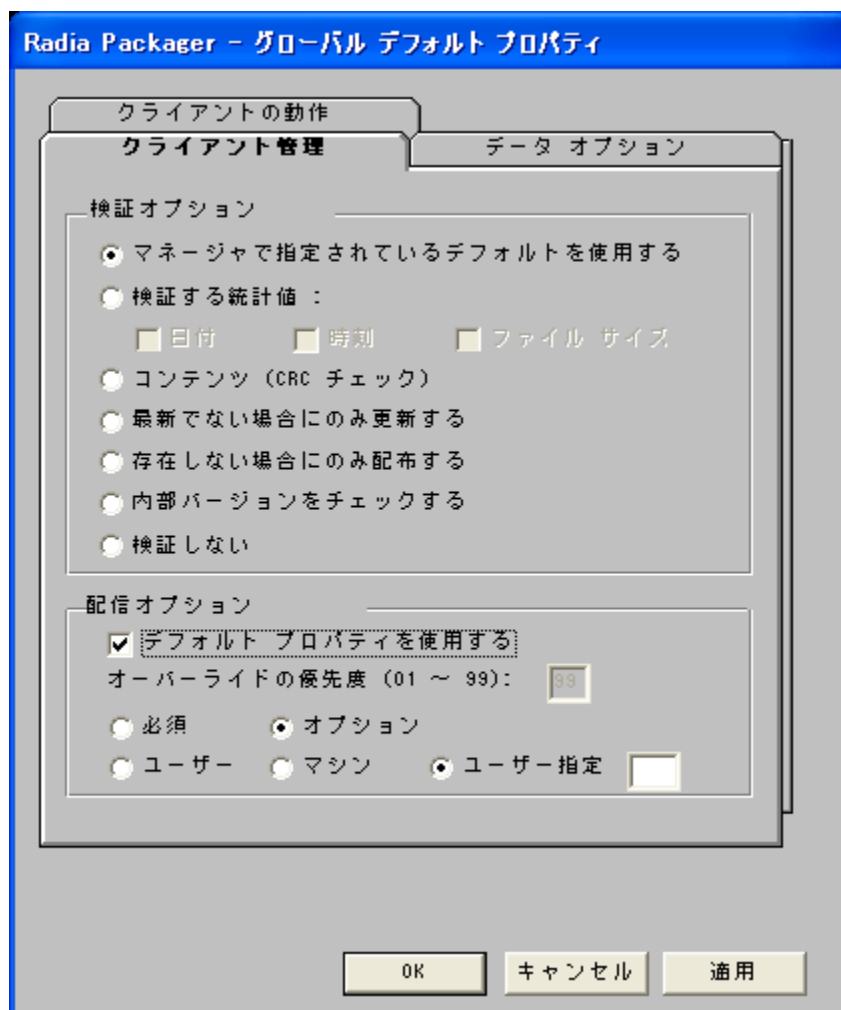


図 4.55 ~ [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアント管理] タブ

[検証オプション]

[検証オプション] では、Radia Software Manager がファイルに対して行うデフォルトの検証アクションを指定します。

表 4.1 ~ [検証オプション]

検証オプション	使用方法	ZRSCVRFY の設定
[マネージャで指定されているデフォルトを使用する]	このオプションを選択すると、Radia データベースにある FILE、REGISTRY、DESKTOP クラスのベース インスタンスから検証オプションを継承します。	ZRSCVRFY=<空白>
[検証する統計値]	このオプションを選択すると、Radia Software Manager は、クライアント コンピュータにあるファイルの選択した統計値 (日付 [D]、時刻 [T]、ファイル サイズ [S]) をチェックします。その統計値がクライアント コンピュータの統計値と異なる場合、Radia データベース(または Radia Proxy Server) はファイルを配布します。	ZRSCVRFY=D ZRSCVRFY=T ZRSCVRFY=S ZRSCVRFY=Y (日付、時刻、およびファイル サイズをすべてチェックする場合)
[コンテンツ (CRC チェック)]	このオプションを選択すると、Radia Software Manager は、クライアント コンピュータにあるファイルの統計値のコンテンツ (CRC) をチェックします。検証する際、ファイルは最初に日付、時刻、およびファイル サイズを基にチェックされます。検証の時間を節約するために、日付、時刻、およびファイル サイズの検証に合格した場合にのみ、CRC がチェックされます。その統計値がクライアント コンピュータの統計値と異なる場合に、Radia Configuration Server (または Radia Proxy Server) はファイルを配布します。このオプションを選択すると、Radia Packager は、CRC を計算し、ZRSCCRC 属性に値を設定します。	ZRSCVRFY=Y

表 4.1 ~ [検証オプション]

検証オプション	使用方法	ZRSCVRFY の設定
[最新でない場合にのみ更新する]	このオプションを選択すると、ファイルの日付および時刻のタイムスタンプがクライアント コンピュータのものよりも新しい場合に、Radia データベース(または Radia Proxy Server) からファイルが配布されます。	ZRSCVRFY=U
[存在しない場合にのみ配布する]	このオプションを選択すると、ファイルは、クライアント コンピュータに存在しない場合にのみ配布されます。クライアント コンピュータにファイルが既に存在する場合は、統計値が Radia データベースのものとなっても何も実行されません。	ZRSCVRFY=E
[内部バージョンをチェックする]	このオプションを選択すると、クライアント コンピュータにファイルが存在する場合はそのファイルのバージョンと配布されるファイルのバージョンが比較されます。これにより、複数のバージョンが存在する場合でも、適切なファイルが更新されます。この機能で比較されるファイル タイプは、.DLL、.EXE、.OCX、.SYS、.VBX です。	ZRSCVRFY =V
[検証しない]	このオプションを選択すると、ソフトウェアが初めて配布されるときにファイルが配布されます。それ以降は何も実行されません。	ZRSCVRFY=N

配信オプション

[配信オプション] では、ファイルが配布される順序など、配信に関するデフォルト オプションを指定します。このダイアログ ボックスで選択した内容は、FILE、REGISTRY、または DESKTOP クラスのベース インスタンスで対応する属性に適用されます。属性の表示と変更には Radia System Explorer を使用します。

表 4.2 ~ [配信オプション]

配信オプション	使用方法	属性の設定
[デフォルト プロパティを使用する]	このチェック ボックスをオンにすると、配信の優先度がデフォルトの 50 になります。この優先度の高さによって、配布の順序が決まります。	ZRSCPRI=50
[上書きの優先度]	1 ~ 99 の値を入力すると、デフォルトの優先度 50 がオーバーライドされます。最も高い優先度は 1、最も低い優先度は 99 です。	ZRSCPRI=1
以下のオプションは、アプリケーション全体をインストールするのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合にのみ適用されます。		
[必須]	このオプションを選択すると、ファイルはソフトウェアの必須ファイルになります。 <ul style="list-style-type: none"> アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合は、必須ファイルのみが配布されます。 必須ファイルを格納するのに十分な容量がない場合、ソフトウェアは配布されません。 	ZRSCMO=M
[オプション] (デフォルト)	このオプションを選択すると、ファイルはソフトウェアの必須ファイルではなくなります。アプリケーション全体を格納するのに十分な容量がクライアント コンピュータにない場合、オプション ファイルは配布されません。	ZRSCMO=O
以下のオプションは、Windows NT 4.0 や 2000 など、複数のユーザーのサインオンをサポートしているオペレーティング システムに対してのみ適用されます。		
[ユーザー]	[ユーザー] を選択すると、アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクリバにだけファイルが配布されます。	ZCONTEXT=U
[マシン]	[マシン] を選択すると、コンピュータのすべてのユーザーにファイルが配布されます。	ZCONTEXT=M
[ユーザー指定]	このオプションは、現時点では利用できません。	将来のバージョンで使用されます。

[データ オプション] タブ

[データ オプション] タブを使用すると、デフォルトのデータ圧縮方法など、配布予定のファイルまたはフォルダに関する詳細を指定することができます。

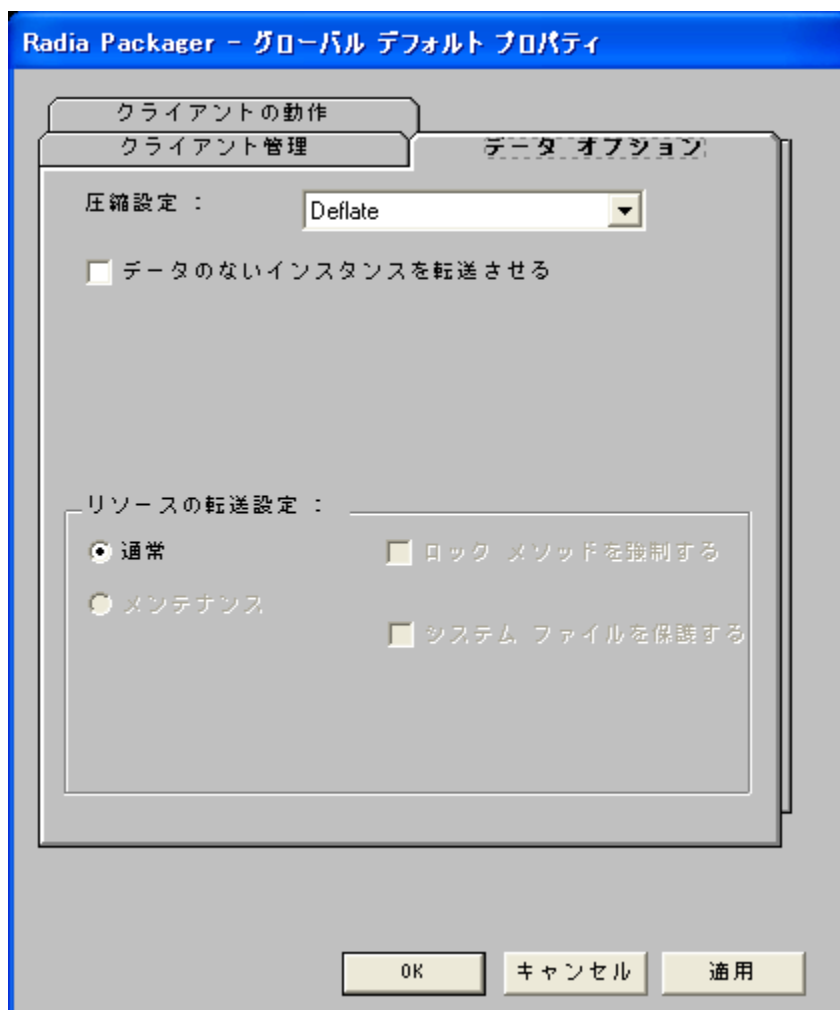


図 4.56 ~ [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスの [データ オプション] タブ

表 4.3 ~ [データ オプション]

データ オプション	使用方法
[圧縮設定]	<p>必要に応じて、Radia データベースにファイルを格納する際の圧縮設定を選択します。ファイルを圧縮すると、ファイルの転送時間が短縮され、格納に必要なディスク容量が軽減されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • [deflate] を選択すると、最も効率的にファイルが圧縮できます。 [deflate] は、データを圧縮してファイル サイズを小さくします。 • ファイルが既に圧縮されている場合は、[なし] を選択します。パッケージ化するアプリケーションに圧縮ファイルが含まれている場合は、Radia Packager でファイルをさらに圧縮しないでください。圧縮すると、ファイルのサイズが大きくなる可能性があります。
[データの無いインスタンスを転送させる]	<p>このチェック ボックスをオンにすると、ファイルがパッケージの一部として Radia データベースに送信されなくなります。ファイルを表すインスタンスのみがパッケージに含まれます。データは、圧縮された状態で、コンピュータの IDMDATA 内に保存されたままとなります。IDMDATA のデフォルト ロケーションは、SystemDrive:\Program Files\Novadigm\Lib\Data です。</p> <p>Radia Staging Server に接続できる環境で、Radia データベースにコピーを格納しない場合は、手動で Radia Staging Server にファイルが移動できます。</p>
[リソースの転送設定]	<ul style="list-style-type: none"> • [普通] このオプションを選択すると、ファイルはアプリケーションの一部として配布されます。これがデフォルト設定です。 • [メンテナンス] これは旧バージョンの機能で、バージョン 4.0 では使用されていません。 • [ロック メソッドを強制する] このチェック ボックスをオンにすると、ファイルの配布に対してロック ファイル メソッドが強制的に使用されます。 <p>Radia がファイルの新しいコピーを配布する際に、クライアント コンピュータでそのファイルが使用中の場合は、通常、ロック ファイル メソッドでファイルが配布されます。</p> <p>必要に応じて、ファイルは解凍され、ローカルのフォルダに格納されます。クライアント接続プロセスが終了すると強制的に再起動され、起動時に適切な場所にファイルが配布されます。</p>

表 4.3 ~ [データ オプション]

データ オプション	使用方法
<ul style="list-style-type: none"> • [システム ファイルを保護する] (Windows 2000 のみ) 	<p>このチェック ボックスをオンにすると、Windows のシステム ファイル保護 (SFP) が強制されます。</p> <p>最初に、現在の検証オプション (FILE クラスにある ZRSCVRFY 属性で指定されているオプション) に従ってリソースが検証されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 検証に成功した場合、リソースは要求ステートにあり、これ以上の検証は不要になります。 • 検証に失敗した場合、システム ファイル保護によってファイルが保護されているかどうかチェックされます。保護されている場合、ファイルは配布されません。 <p>最後にこの属性がチェックされ、SFP を強制する設定になっているかどうか確認されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> • このチェック ボックスをオンにしている場合、ZRSCVRFY 属性は P に設定されており、このリソースとサービスの配布は SFP 処理が原因で失敗したもとして記録されます。 • SFP を強制するように設定していない場合、ファイルは検証に成功したもとして記録されます。 <p>SFP ファイルに対して行われたアクションを説明するために、ZERROR インスタンスが作成されます。</p>

[クライアントの動作] タブ

[クライアントの動作] タブを使用すると、クライアント コンピュータに対して Radia が実行するデフォルト メソッド (プログラム) を指定することができます。

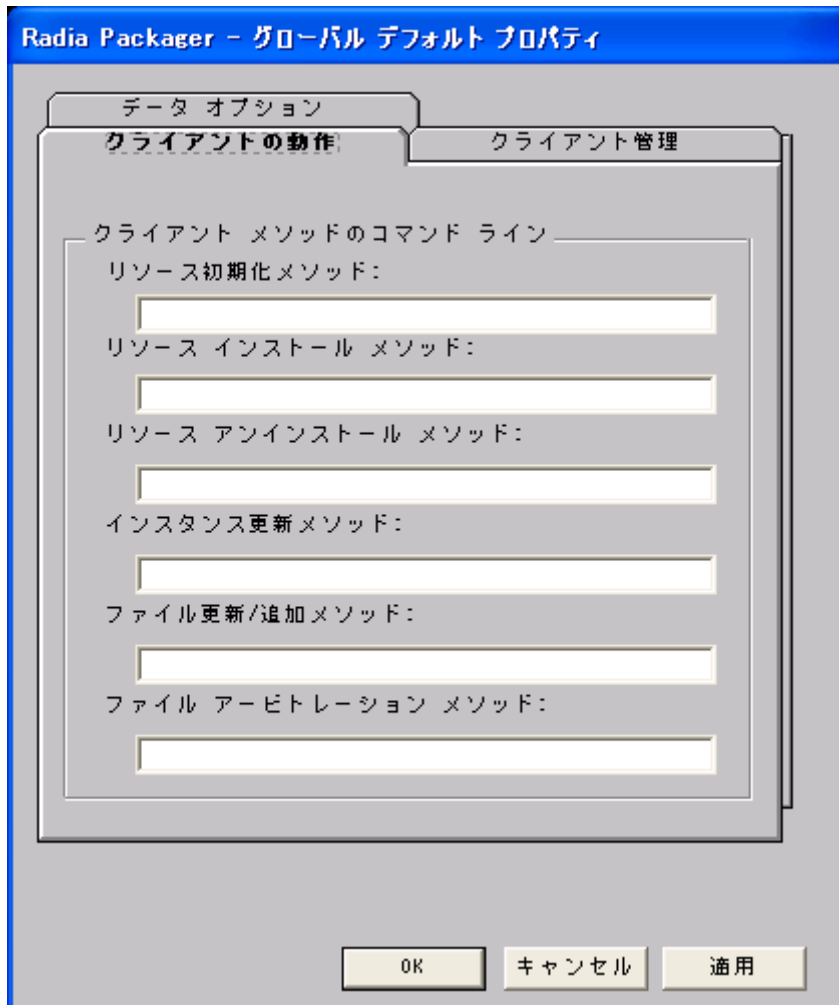


図 4.57 ~ [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアントの動作] タブ

このダイアログ ボックスに入力したコマンド ラインは、SOFTWARE ドメインの FILE クラス インスタンスの属性に格納されます。次の表では、217 ページの図 4.57 ~ [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアントの動作] タブにある [クライアントの動作] タブで指定可能なフィールドについて説明します。

表 4.4 ~ [クライアントの動作]

クライアントの動作	使用方法
[リソース初期化メソッド] (データベース内の属性: ZINIT)	クライアント コンピュータにファイルが格納されたときに実行するメソッドを入力します。
[リソース インストール メソッド] (データベース内の属性: ZCREATE)	クライアント コンピュータにファイルが格納された後に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、クライアント コンピュータでファイルを使用可能にする処理が要求された場合に使用します。
[リソース アンインストール メソッド] (データベース内の属性: ZDELETE)	通常、ソフトウェアへのサブスクリプションがキャンセルされると、ファイルは削除されます。 共有 DLL ファイルなど、クライアント コンピュータから削除できないファイルの場合は、ソフトウェアのサブスクリプションをキャンセルしたときでも、[リソース アンインストール メソッド] に「 _NONE_ 」(アンダースコア付き) と入力する必要があります。
[インスタンス更新メソッド] (データベース内の属性: ZUPDATE)	ファイルを配布してから、クライアント コンピュータでインスタンスが変更されたときに実行するメソッドを入力します。
[ファイル更新/追加メソッド] (データベース内の属性: ZFILEUPD)	新しいファイルが追加されたとき、またはファイルが更新されたときに実行するメソッドを入力します。このメソッドは、クライアント コンピュータにファイルが配布される直前に実行されます。
[ファイル アービトレーション メソッド] (データベース内の属性: ARBITRAT)	ファイルを置き換えようとする場合に実行するメソッドを入力します。このメソッドは、既存のファイルのバージョン情報と、置き換えるファイルのバージョン情報を比較し、どちらを保持するかを判別します。 注意: このテキスト ボックスを使用するには、Radia データベースに ARBITRAT メソッドを追加する必要があります。詳細については、HP OpenView Web サイトにある技術文書『About the File Arbitration Method』を参照してください。

Radia サービス グループ

Radia では、製品のフル インストールやフル オペレーションを実現するため、複数のサービスパッケージを必要とする製品が管理できます。製品が他のサービス パッケージを必要としている場合、または他のサービスに依存している場合は、Radia サービス グループが使用できます。

これには、Windows インストーラでインストールまたは管理されるアプリケーションも含まれます。この場合は、以下のようなケースが考えられます。

- 複数の MSI サービス パッケージを利用している製品。たとえば、MS Office では、他の言語パック サービスが必要となる場合があります。
- MS Office のように、サイズが大きい製品。製品スイートの一部の機能だけをインストールする場合に備えて、いくつかの小さな下位サービスに分割しなければならない場合があります。

Radia Software Manager のユーザー インターフェイスには、マスター サービスのみが表示されます。

Radia サービス グループの作成方法については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

サービスの最適化

サービスの最適化 は、バイト レベルの差異計算機能とパッチの生成機能を使用して、元のデータを再作成します。パッチを使用すると、バグ修正、機能付加、および追加情報を反映してデータをアップグレードすることができます。パッチは、欠陥のあるプログラムの修正やソフトウェア アップグレードの実行に最低限必要なバイト数で提供されます。データよりもサイズが少ないので、CPU のオーバーヘッドが同じ場合でもネットワークのバンド幅を節約することができます。

Radia Configuration Server の仕様に従った適切な署名属性がコンポーネント クラスに指定されている場合は、Radia Packager によって作成されるコンポーネントに対して、バイト レベルの差異計算によるパッチを適用することができます。

注意

- ・ パッチは、署名があるコンポーネントに対してのみ作成可能です。初期設定では、MD5 のみがサポートされています。
- ・ バイト レベルの差異計算によるパッチ生成を有効にするために、パッチの対象となるコンポーネントは、同じロケーション (コンピュータ) からパッケージ化する必要があります。この機能では、インスタンス名のサフィックスにある 8 バイトの CRC が格納されます。

詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

Windows のシステム ファイル保護

Radia では、Windows インストーラなどのパッケージ化されたコンテンツに対して、システム ファイル保護 (SFP) を強制します。SFP で保護されたファイルがパッケージに含まれる場合は、そのファイルの配布を保留し、SFP の競合を管理者にレポートします。

最初に、現在の検証オプション (FILE クラスにある ZRSCVRFY 属性で指定されているオプション) に従ってリソースが検証されます。

- 検証に成功した場合、リソースは要求ステートにあり、これ以上の検証は不要になります。
- 検証に失敗した場合、システム ファイル保護によってファイルが保護されているかどうかをチェックされます。保護されている場合、ファイルは配布されません。

最後に、SFP を強制する設定になっているかどうかチェックされます。SFP を強制するには、Radia Packager でファイルを選択し、[インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [データ オプション] タブにある [システム ファイルを保護する] チェック ボックスをオンにします。システム ファイル保護の詳細については、215 ページの表 4.3 を参照してください。[システム ファイルを保護する] チェック ボックスをオンにした場合、ZRSCVRFY 属性は **P** に設定されます。

- SFP を強制するように設定している場合、このリソースとサービスの配布は SFP 処理が原因で失敗したものとして記録されます。
- SFP を強制するように設定していない場合、ファイルは検証に成功したものとして記録されます。

SFP ファイルに対して行われたアクションを説明するために、ZERROR インスタンスが作成されます。システム ファイル保護の詳細については、Microsoft の Web サイトを参照してください。

まとめ

- パッケージ化は、ソフトウェアまたはコンテンツのコンポーネントを特定し、それらのコンポーネントをパッケージにまとめるプロセスです。
- アプリケーションをパッケージ化および設定するには、**Radia Administrator Workstation** をクリーンなコンピュータにインストールします。**Windows NT 4.0** 以降、**Windows 2000**、または **Windows Server 2003** の場合は、**Radia Configuration Server** と同じコンピュータにツールをインストールすることができます。
- アプリケーションを構成するコンポーネントの一部が不明な場合は、インストール モニタ モードでアプリケーションをパッケージ化することができます。**Radia** では、アプリケーションのインストールの前と後にコンピュータをスキャンし、その差分を計算してパッケージを構成します。
- 単純なアプリケーションをパッケージ化する場合、コンポーネント選択モードを使用して、ソフトウェアを構成する各コンポーネントを選択します。
- **Radia Publishing Adapter** は、コンポーネント選択モードの代わりとして機能します。
- アプリケーションをパッケージ化したら、**Radia System Explorer** の新規アプリケーション ウィザードでサービス (**Radia** によって管理されるコンテンツの基本的な構成単位) を作成します。

エンタイトルメント ポリシー を実装する

- 既存のポリシー情報を Radia に統合する方法について理解する。
- Radia の POLICY ドメインについて理解する。
- 単純な環境で使用するためのユーザーを新規作成し、グループに割り当てることができるようになる。
- サービスをグループに接続することができるようになる。

このマニュアルでは、**Radia Software Manager** の標準的な実装を解説します。方法は組織のニーズに合わせて調整することになりますが、**Radia Software Manager** を包括的に理解するためにこのマニュアルに目を通しておくことをお勧めします。この章では、既存のポリシー情報を **Radia** に統合する方法について説明します。また、**POLICY** ドメインについても解説し、ユーザーやグループの作成方法、ユーザーをグループに割り当てる方法、およびサービスをグループに接続する方法についての基礎的な情報も提供します。

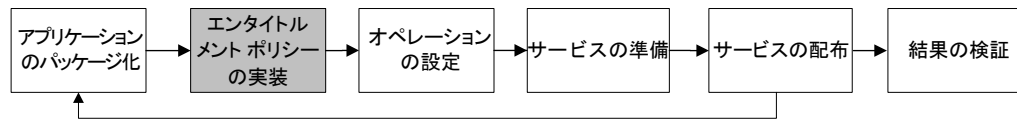


図 5.1 ~ 『Radia Software Manager ガイド』の概要

ポリシー管理と Radia について

組織が大きくなり、組織変更が行われるようになると、だれが、どのソフトウェアが使用できるかを管理する仕事が重要になります。組織のポリシー情報を管理する上で最適な方法を見つけなければなりません。**Radia** を使用すれば、組織内のデジタル資産を適切に管理することができます。デジタル資産の管理に **Radia** を使用する利点の 1 つは、既存のポリシー情報が簡単に **Radia** に統合できる点です。

Radia では、以下のリアルタイム ポリシー情報を使用することができます。

- Active Directory
- NDS
- iPlanet
- ISOCOR
- SQL Server、Oracle、または Sybase
- SQL 92 準拠の (ODBC) データの送信元
- LDAP 準拠のディレクトリ

これまでポリシー管理に使用してきたツールを、そのまま使い続けることができます。また、グループの割り当てを変更した場合でも、デジタル資産のサブスクリプションは最新の状態に保たれます。

既存の外部ポリシー情報にアクセスする

Radia Client が Radia Configuration Server に接続すると、適切なデータの送信元からポリシー情報が取得されます。非常に単純な環境（たとえばテスト用の環境）であれば、Radia データベース内のポリシー情報を検索することができます。既に外部ポリシー ストアが存在する大規模な環境では、Radia でこの既存情報を活用することができます。外部ポリシー情報は、Radia Configuration Server に送り返され、どのユーザー、グループ、コンピュータを対象にどのデジタル資産を管理するかを判別するために使用されます。

注意

Radia Policy Server を使用して既存のポリシーを統合する上での技術的な情報については、HP OpenView Web サイトおよび『Radia Policy Server Guide』を参照してください。

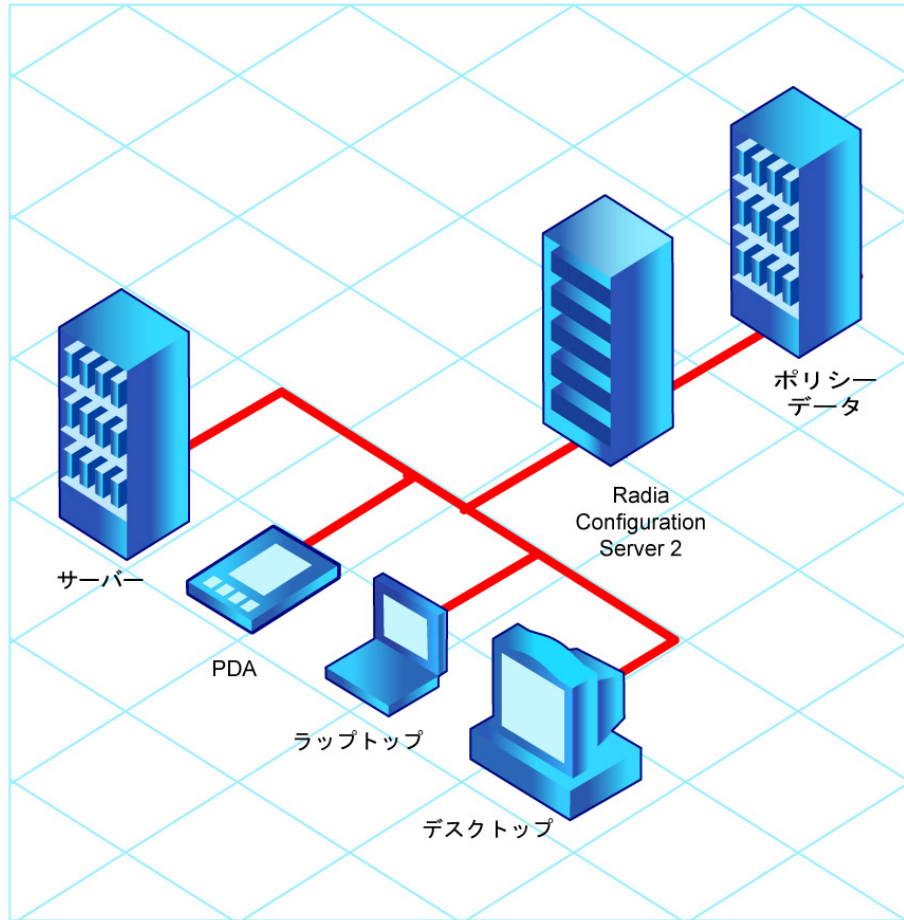


図 5.2 ~ 外部の送信元からのポリシー情報の取得

Radius では、複数の Radius Configuration Server で複数のタイプの外部ポリシー ストアを使用することもできます。この方法は、システム移行などにより、一定の期間にわたって複数の外部ポリシー ストアを結合しなければならない場合には特に便利です。この期間も、必要な数の既存ポリシー ストアを引き続き使用することができます。

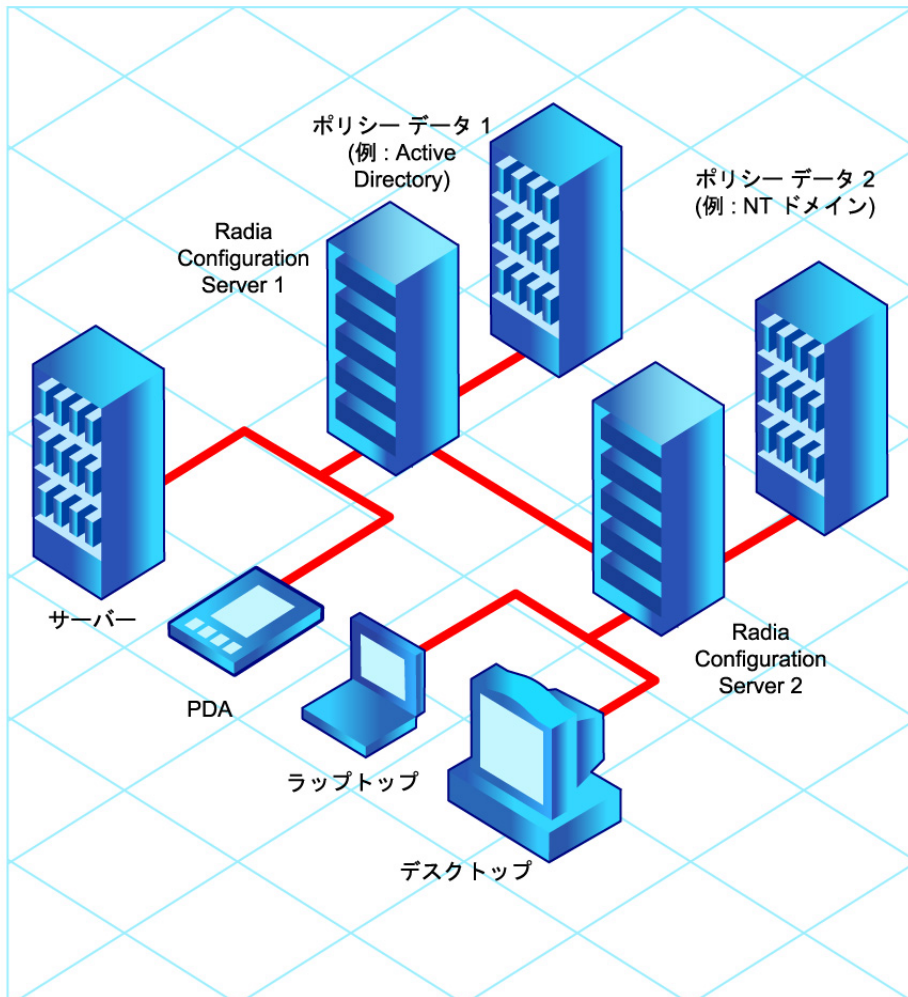


図 5.3 ~ 複数の外部送信元からのポリシー情報の取得

ディレクトリ ベースのエンタイトルメント

(Active Directory、NDS など)

LDAP ベースのディレクトリ サービスや SQL ベースのデータベースを引き続き活用したい場合には、Radia Policy Server の使用をお勧めします。Radia Policy Server は Radia Integration Server (RIS) のプラグインで、管理を目的として、ディレクトリ ツリー内のユーザーやコンピュータにサービスをマッピングする場合などに使用します。Radia Configuration Server を設定することで、クライアントにどのサービスを配布して管理するかを Radia Policy Server にクエリを行って判別することもできます。

重要

Radia Policy Server は、HP が提供するオプション機能です。詳細については、当社の営業担当にお問い合わせください。

また、HP OpenView Web サイトにある *Radia Policy Server* のドキュメントも参照してください。

Radia に既存のポリシーを統合することで、デジタル資産を Radia で管理しつつ引き続き既存のリポジトリからポリシーが管理でき、お使いの環境の総所有コストが大幅に削減できます。

Radia POLICY ドメインについて

NT ドメインなどの外部の送信元のリアルタイム ポリシー情報を使用する場合、Radia でデジタル資産を管理するには、外部ポリシー ストアから Radia データベースの POLICY ドメインへの接続を設定する必要があります。この設定は、使用するポリシー ストアによって異なります。

ここでは、POLICY ドメインの概要について説明します。中規模から大規模な組織のほとんどでは既存のポリシー情報を使用し、ドメインの利用も限定的です。一方、非常に単純な環境であれば、ソフトウェアを配布するための準備段階として、Radia データベースの POLICY ドメインを使用してサブスクリバを論理的なグループにまとめることができます。

ここでは、以下について説明します。

- POLICY ドメインに含まれるクラス
- ユーザーやグループを作成する方法
- ユーザーをグループに割り当てる方法

POLICY ドメインに理解し、Radia でのポリシー情報管理の基本を理解すると、既存のポリシー情報を Radia に統合する方法を学ぶ準備ができたこととなります。これらの基礎知識は、デジタル資産管理のテスト環境を作成する際にも必要となります。

POLICY ドメインにアクセスするには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、**[Radia Administrator Workstation]** をポイントして、**[Radia System Explorer]** をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、**[パスワードの変更]** チェック ボックスをオンにして、**[新しいパスワード]** と **[新しいパスワードの確認]** の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力して、**[OK]** をクリックします。
[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. **[PRIMARY]** をダブルクリックします。

4. [POLICY] をダブルクリックします。

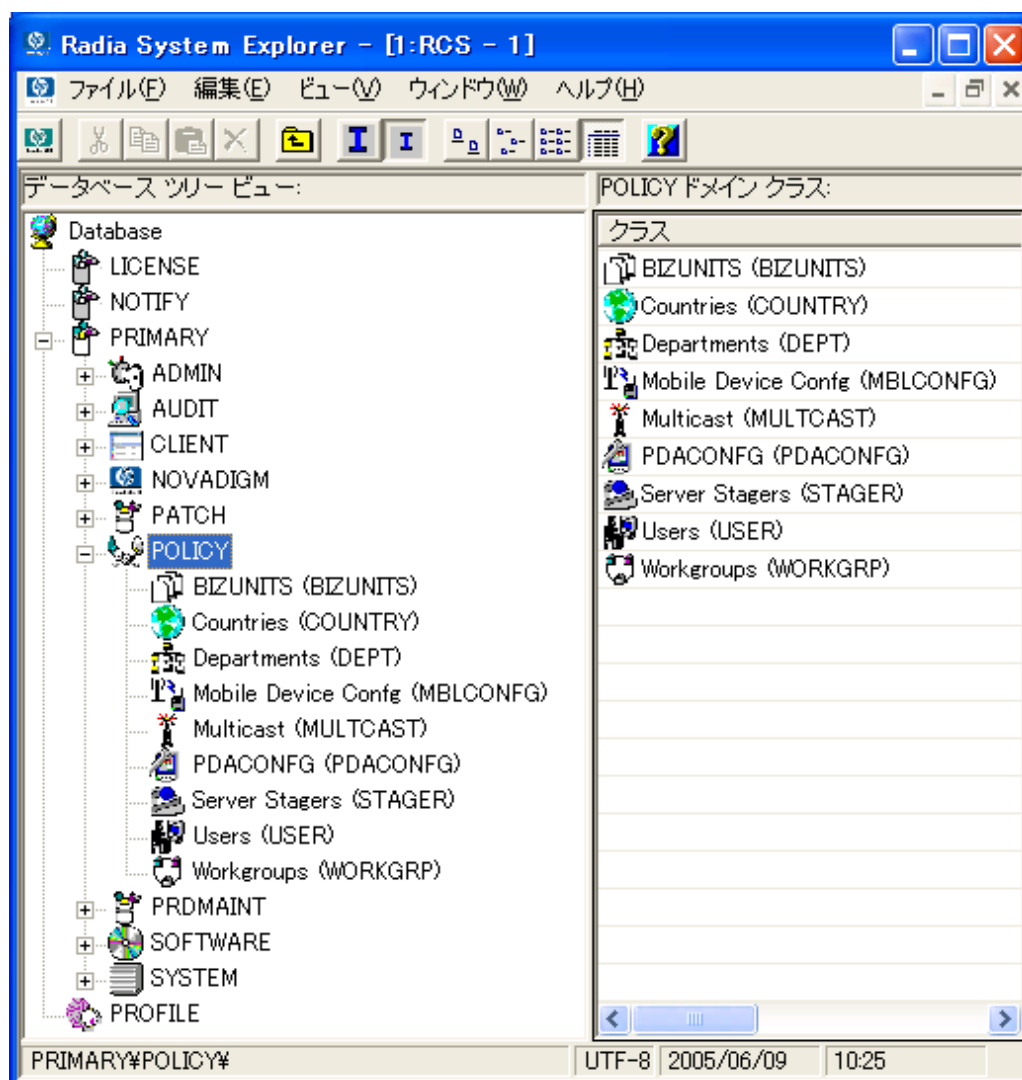


図 5.4 ~ POLICY ドメイン

POLICY ドメインに含まれるクラス

POLICY ドメインには、デフォルト クラスとして Countries (COUNTRY)、Departments (DEPT)、Server Stagers (STAGER)、Users (USER)、および Workgroups (WORKGRP) が含まれています。次の表では、これらのクラスについて説明します。

表 5.1 ~ POLICY ドメインに含まれるクラス

クラス	説明	インスタンスの例
Countries (COUNTRY)	Radia Configuration Server との時刻の同期化に使用します。このクラスには、サービスを割り当てないでください。	フランス、日本、イタリア
Departments (DEPT)	サブスクリバを部門別にグループ化するために使用します。	財務、カスタマー サービス、製造
Mobile Device Config (MBLCONFG)	Radia Mobility Server を使用する場合に、モバイルデバイス設定のパラメータを定義します。	RmmUser
Multicast (MULTICAST)	MULTICAST クラスは、マルチキャストが使用できるようにクライアント コンピュータを設定するために使用します。	MCast1、Mcast2
PDA CONFG (PDA CONFG)	PDA 設定のパラメータを定義します。	PDAUser
Server Stagers (STAGER)	配布ネットワーク内に Radia Proxy Server または Radia Staging Server を定義するために使用します。	CDROM、RPS、RPSUser
Users (USER)	個々のサブスクリバを定義するために使用します。ユーザー名またはコンピュータ名のどちらも使用できます。	William、John Doe、SSampson
Workgroups (WORKGRP)	サブスクリバを機能グループ別にグループ化するために使用します。たとえば、プロジェクト チームが、複数の異なる部門のサブスクリバで構成される場合に使用します。	プロジェクト企画、マネージャ、ABC プロジェクトチーム

組織のニーズに合わせて、POLICY ドメインに他のクラスを追加することもできます。たとえば、保険会社であれば、AGENTS クラスや OFFICES クラスが追加できます。また、銀行であれば、サブスクリバを整理するために BRANCHES クラスや TELLERS クラスを追加することも考えられます。

注意

新しいクラスの作成については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

Radia でユーザーやグループを作成する

Radia で個別のユーザーやグループを作成しなければならない場合があります。たとえば、デジタル資産の配布や管理をテストするためのテスト環境を作成する場合です。単純な環境を作成する場合には、いくつかのユーザーを作成してグループに割り当て、そのグループにサービスを割り当てます。

ここでは、Radia データベースの POLICY ドメインの Users (USER) クラスにユーザーを作成する方法について説明します。ここで説明する手順は、新しい Workgroups (WORKGRP) インスタンスや Departments (DEPT) インスタンスを作成する場合にも使用できます。その場合は、文中のクラス名を適切なクラス名に読み替えてください。

次の例では、Radia System Explorer を使用して、USER クラスに新しいユーザー (SSampson) を作成します。

新しいユーザーを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力して、[OK] をクリックします。
[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. [POLICY] をダブルクリックします。

5. [Users (USER)] を右クリックします。

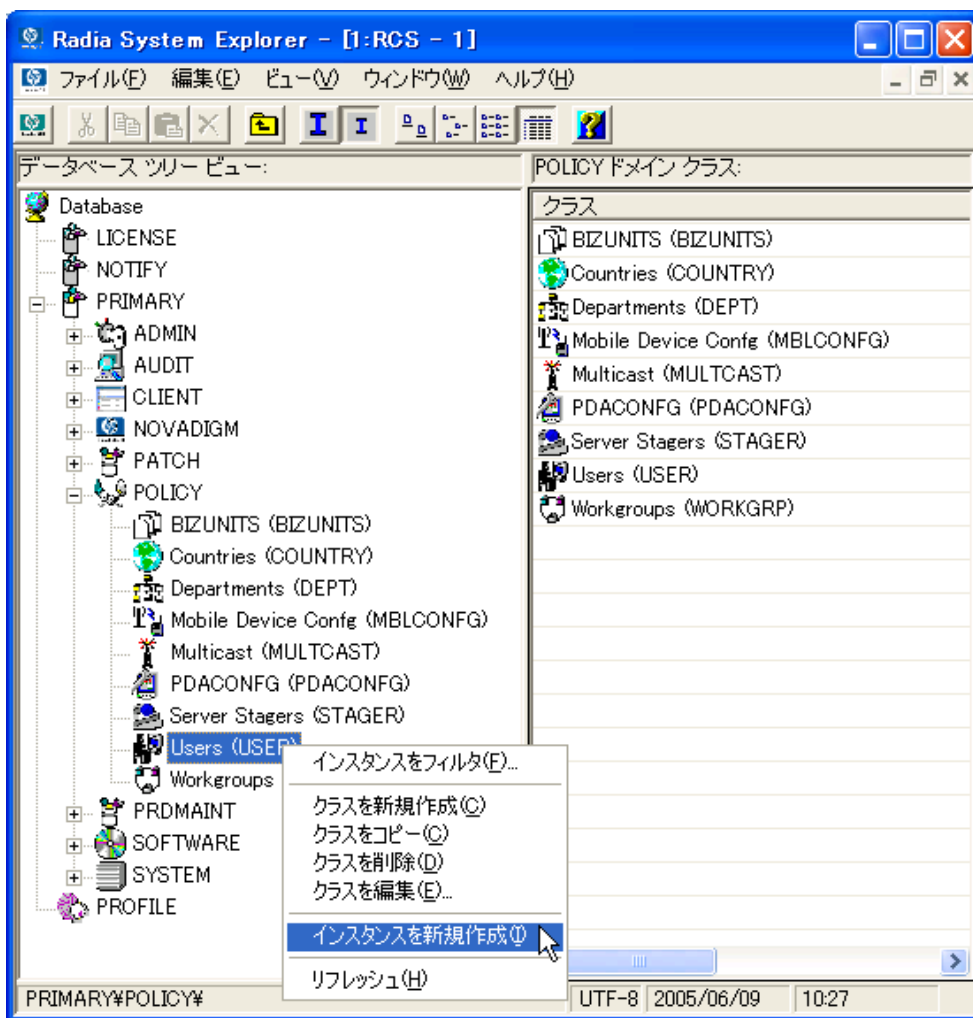


図 5.5 ~ USER クラスのショートカット メニュー

6. [インスタンスを新規作成] をクリックします。
7. [インスタンスの作成] ダイアログ ボックスで、表示名とインスタンス名を入力します (どちらも半角 25 文字以内または全角 12 文字以内)。

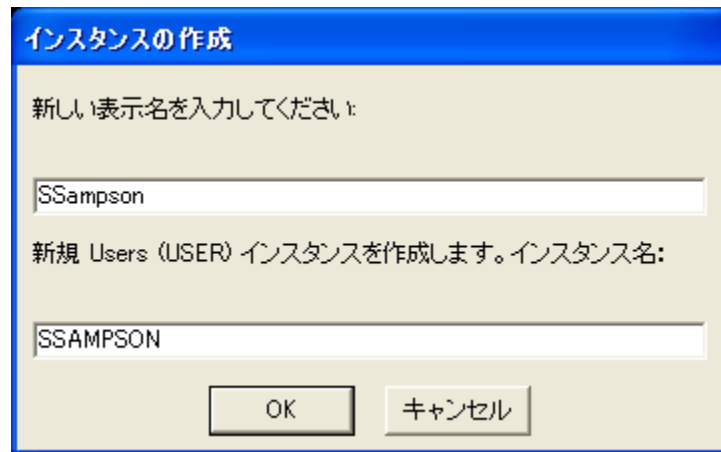


図 5.6 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス

8. [OK] をクリックします。

これで、ユーザー インスタンス SSampson が作成されました。

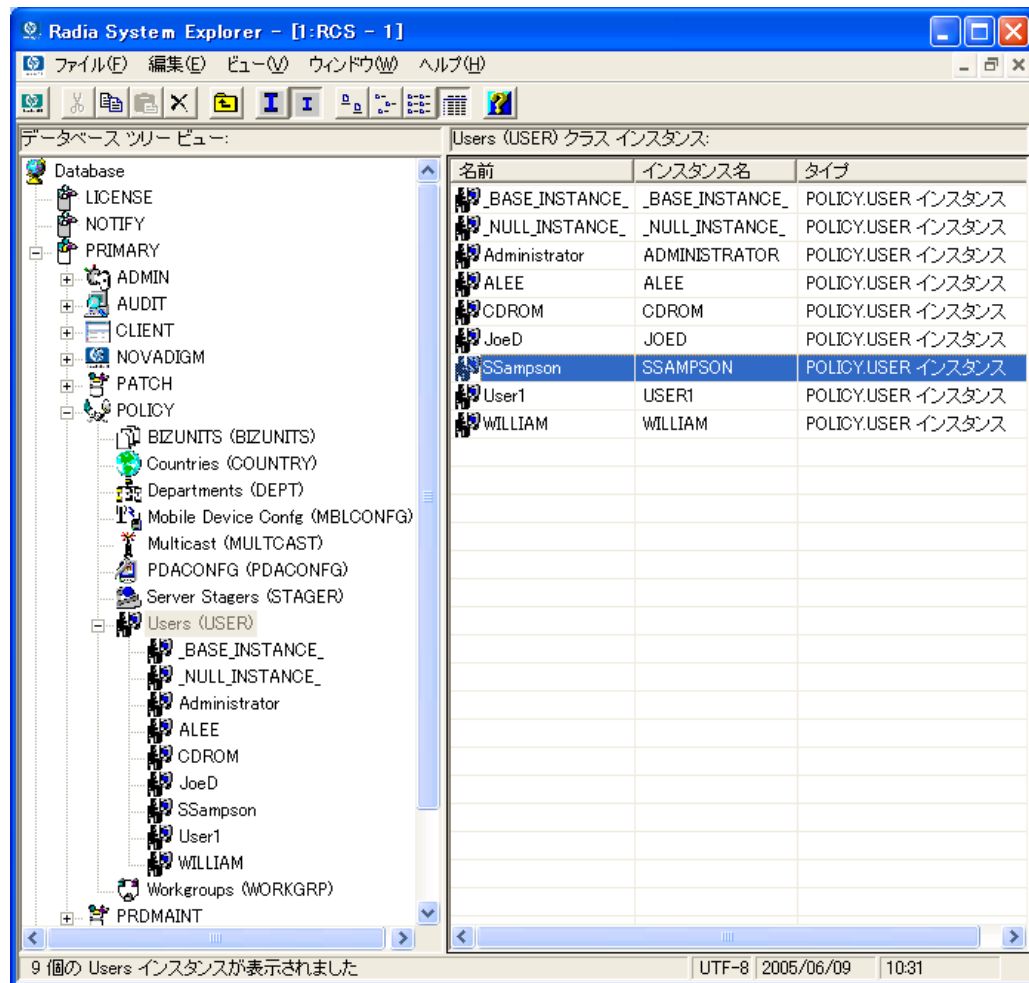


図 5.7 ~ SSampson USER インスタンス

ユーザーをグループに割り当てる

ユーザーをいくつか作成したら、それらを 1 つまたは複数のグループに割り当てることができます。次の例では、**Radia System Explorer** を使用して、ユーザー **SSampson** を **Sales** 部門に割り当てます。

注意

Departments (DEPT) クラスに表示されている Sales インスタンス (243 ページの図 5.13 を参照) は、使用している Radia データベースでは表示されない場合があります。このインスタンス (または他の適切なインスタンス) を追加するには、232 ページの「新しいユーザーを作成するには」の手順に従ってください。ただし、この手順の USER を右クリックする部分では、適切なクラス名 (たとえば Departments (DEPT)) を右クリックしてください。

ユーザーをグループに割り当てるには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[**Radia Administrator Workstation**] をポイントして、[**Radia System Explorer**] をクリックします。
[**Radia System Explorer** のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力して、[OK] をクリックします。
[**Radia System Explorer**] ウィンドウが表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. [POLICY] をダブルクリックします。
5. [Users (USER)] をダブルクリックして、すべてのユーザー インスタンスのリストを表示します。

6. ユーザー インスタンス (この例では SSampson) を右クリックし、[接続を表示] をクリックします。

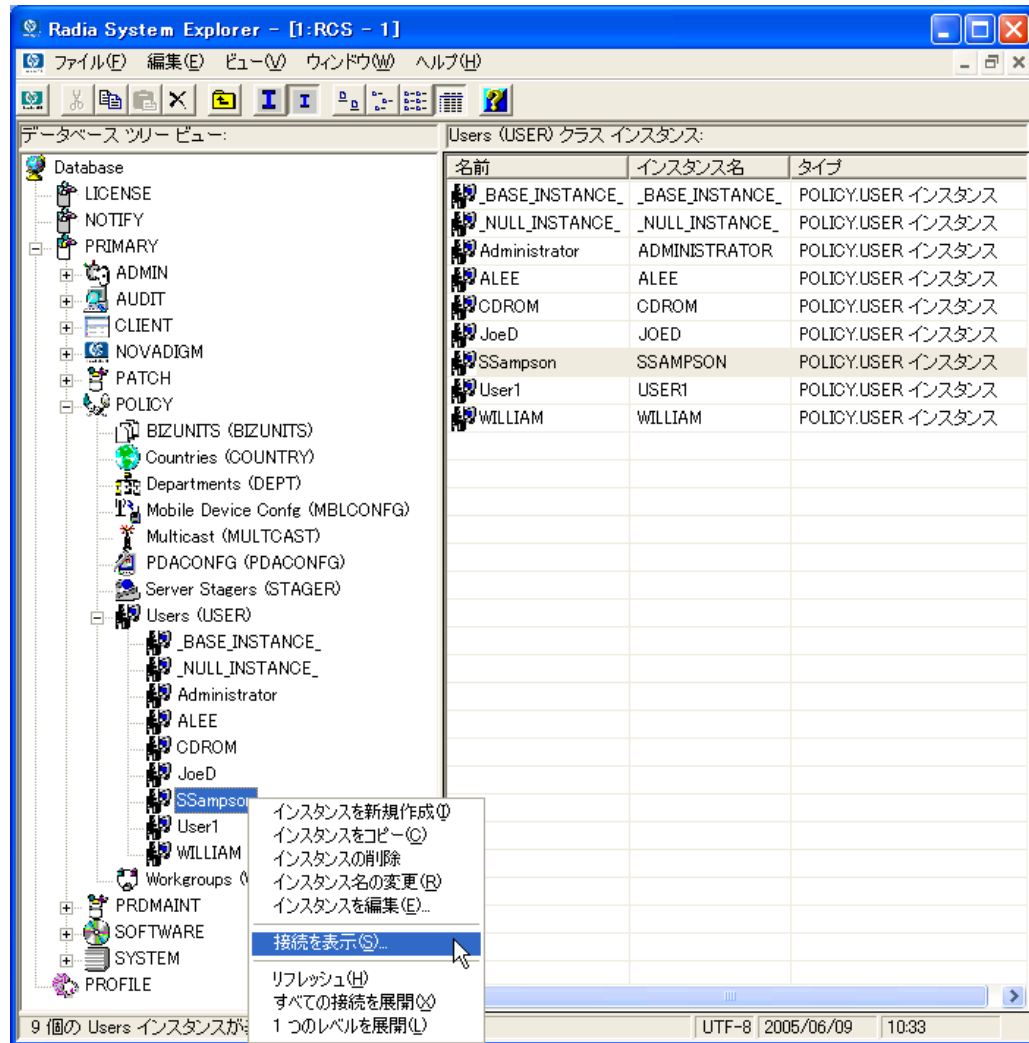


図 5.8 ~ SSampson が接続できるクラスの表示

- [POLICY.USER 接続]** ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスには、選択したインスタンスが接続できるクラスのリストが表示されます。

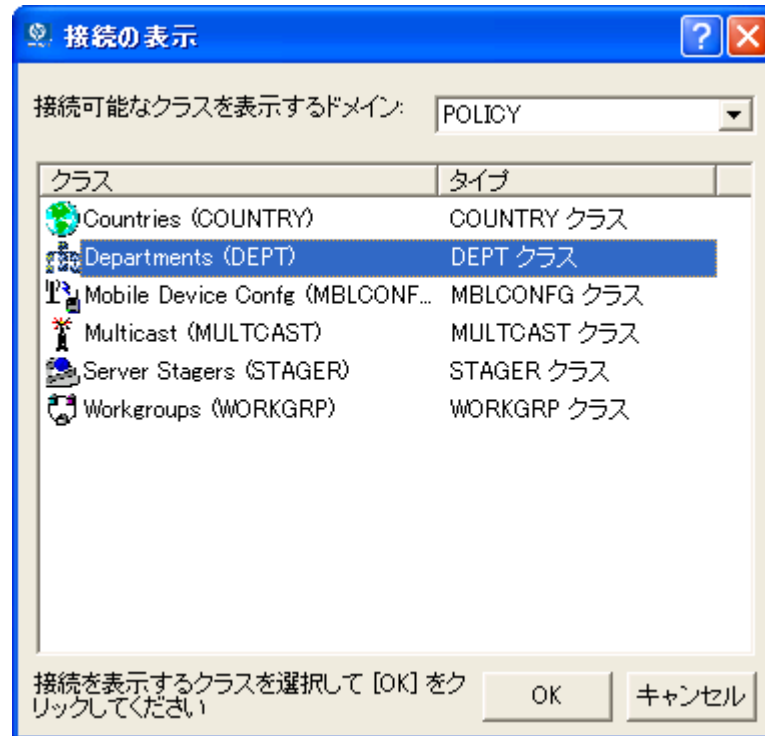


図 5.9 ~ 接続可能なクラスを表示するためのダイアログ ボックス

- [Departments (DEPT)]** をクリックし、**[OK]** をクリックします。
リスト ビューに **DEPT** クラス インスタンスが表示されます。このリストを使用することで、**DEPT** クラスのインスタンスと **USER** クラスのインスタンスが簡単に接続できます。

9. リスト ビューで **Sales** インスタンスをクリックし、適切な **USER** インスタンス (この例では **SSampson**) にドラッグします。カーソルがペーパー クリップの形になったらマウス ボタンを離します。

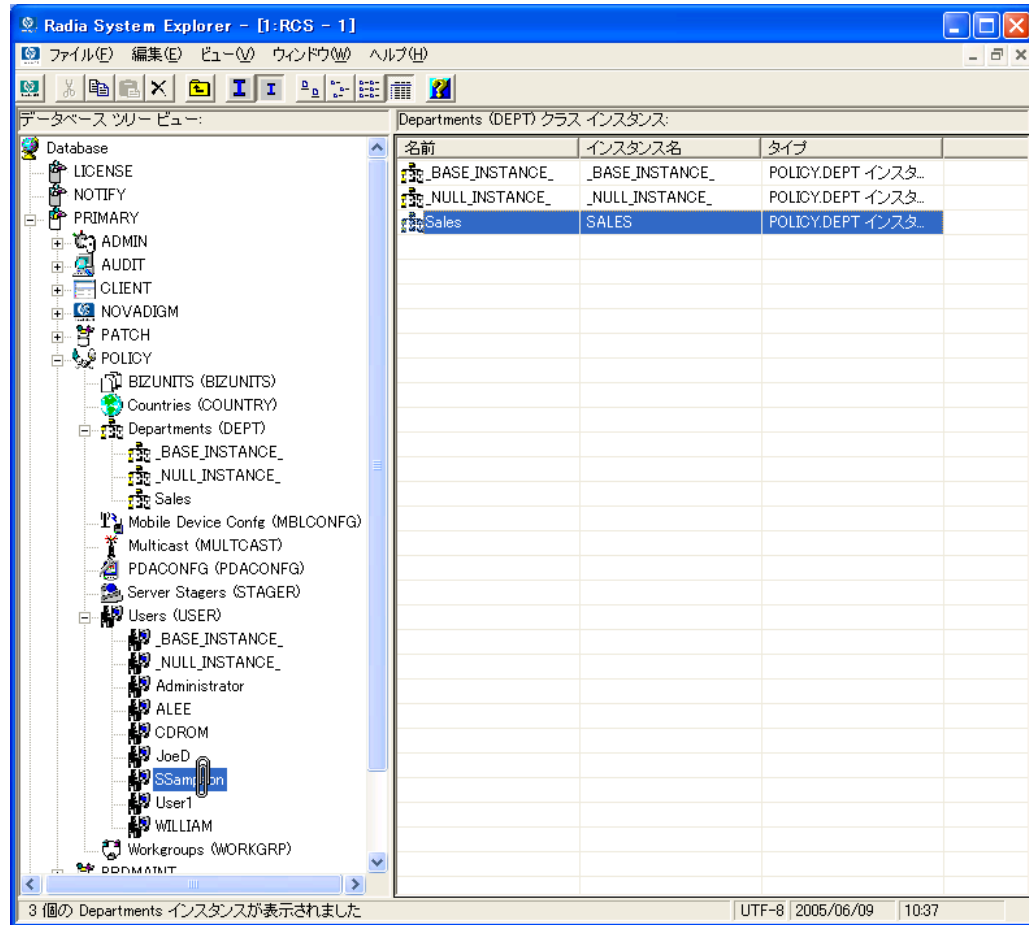


図 5.10 ~ USERS.SSampson を DEPT.Sales に接続

10. [接続属性の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。

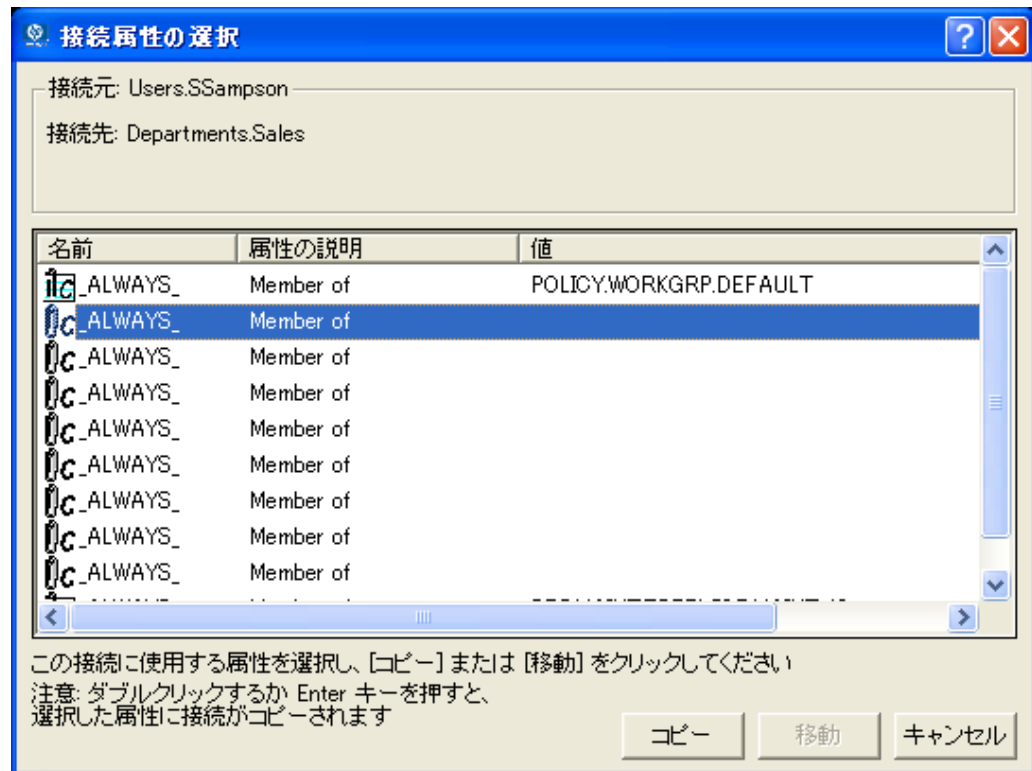


図 5.11 ~ 接続属性の選択

11. **Users.SSampson** から **Department.Sales** への接続を作成するには [コピー] をクリックします。
12. [はい] をクリックして、接続を確定します。

13. [SSampson が Sales に接続されました] という確認メッセージが表示されたら [OK] をクリックします。

SSampson ユーザー インスタンスの下に Sales が表示されます。これで、SSampson が Sales 部門に割り当てられました。

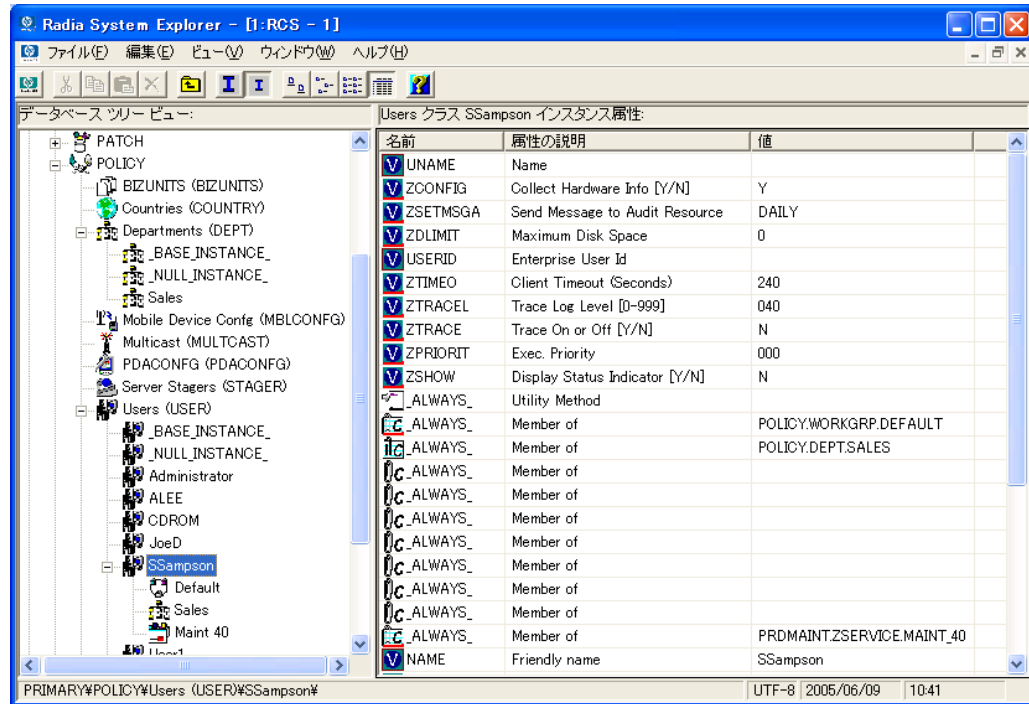


図 5.12 ~ SSampson が Sales 部門インスタンスに接続された状態

グループにサービスを割り当てる

外部ポリシーの送信元を使用する場合も、あるいは Radia でポリシーを管理する場合も、サブスクリバが受信するサービスを定義する必要があります。

注意

Radia Policy Server を使用している場合は、HP OpenView Web サイトにある *Radia Policy Server* のドキュメントを参照してください。

ここでは、Radia で管理するサービスにユーザーやグループを接続する方法について説明します。次の例では、Radia System Explorer を使用して、Sales 部門のすべてのサブスクリバに WinZip アプリケーションを認可します。

WinZip アプリケーションを Sales 部門に接続する

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力して、[OK] をクリックします。[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. [POLICY] をダブルクリックします。

5. [Departments (DEPT)] をダブルクリックして Departments クラスを開きます。

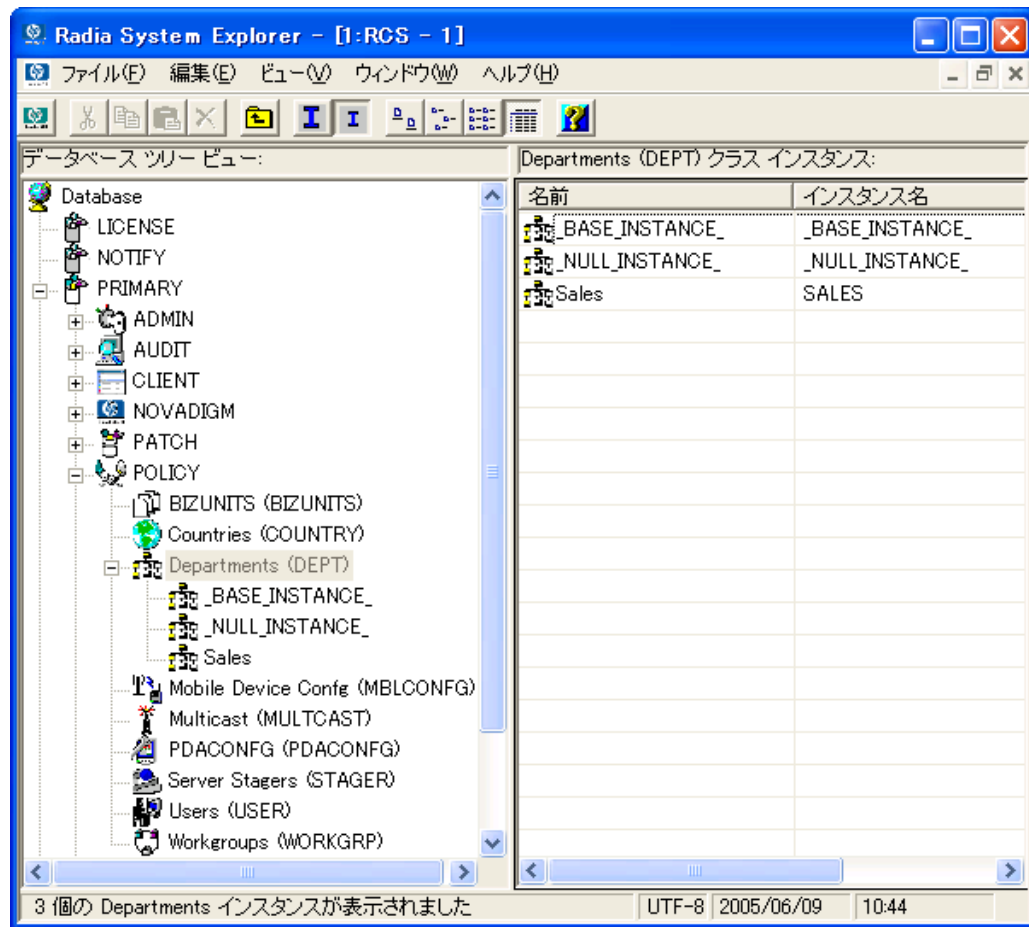


図 5.13 ~ Departments (DEPT) クラス

6. ツリー ビューで Sales インスタンスを右クリックし、[接続を表示] をクリックします。
[POLICY.DEPT 接続] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスには、
選択したインスタンスが接続できるクラスのリストが表示されます。

7. [接続可能なクラスを表示するドメイン] ドロップダウン リストで [SOFTWARE] をクリックします。



図 5.14 ~ [POLICY.DEPT 接続] ダイアログ ボックス

8. [Application (ZSERVICE)] をクリックし、[OK] をクリックします。ZSERVICE クラスのインスタンスがリスト ビューで表示されます。

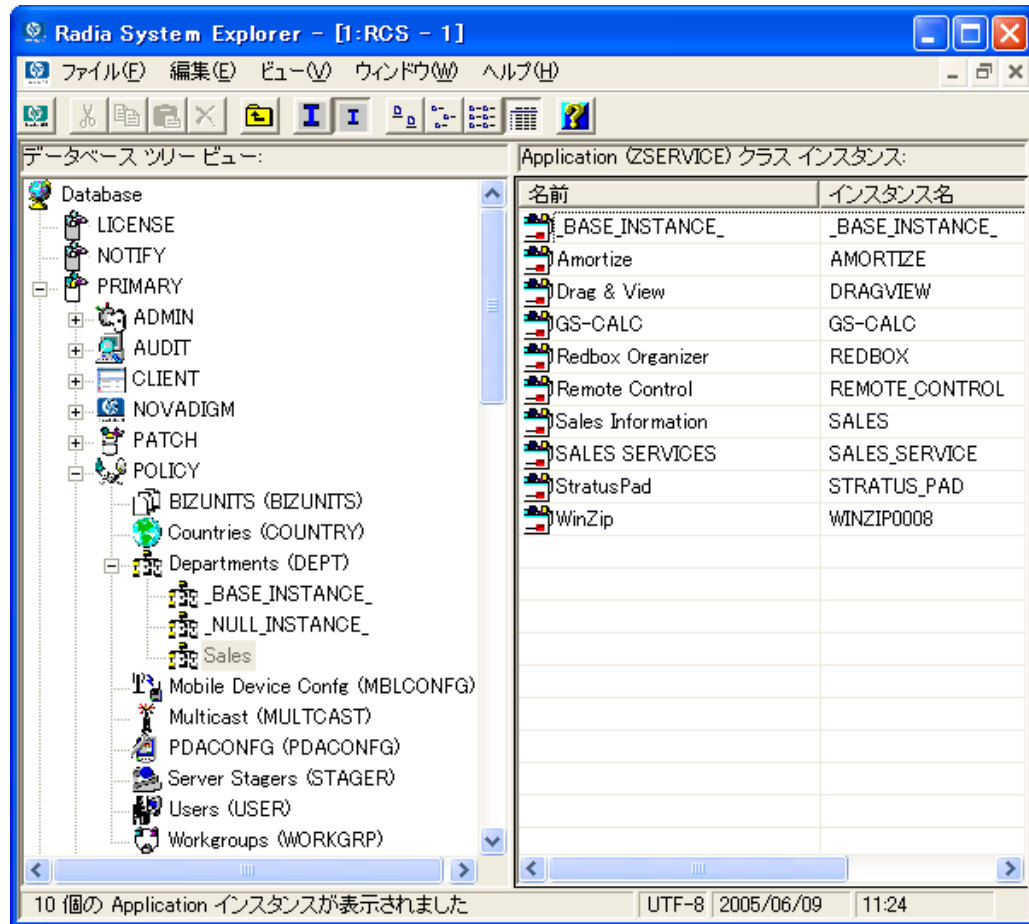


図 5.15 ~ リスト ビューの ZSERVICE クラス インスタンス

- リスト ビューで **WinZip** インスタンスをクリックし、適切な **Departments** インスタンス (この例では **Sales**) にドラッグします。カーソルがペーパー クリップの形になったらマウス ボタンを離します。

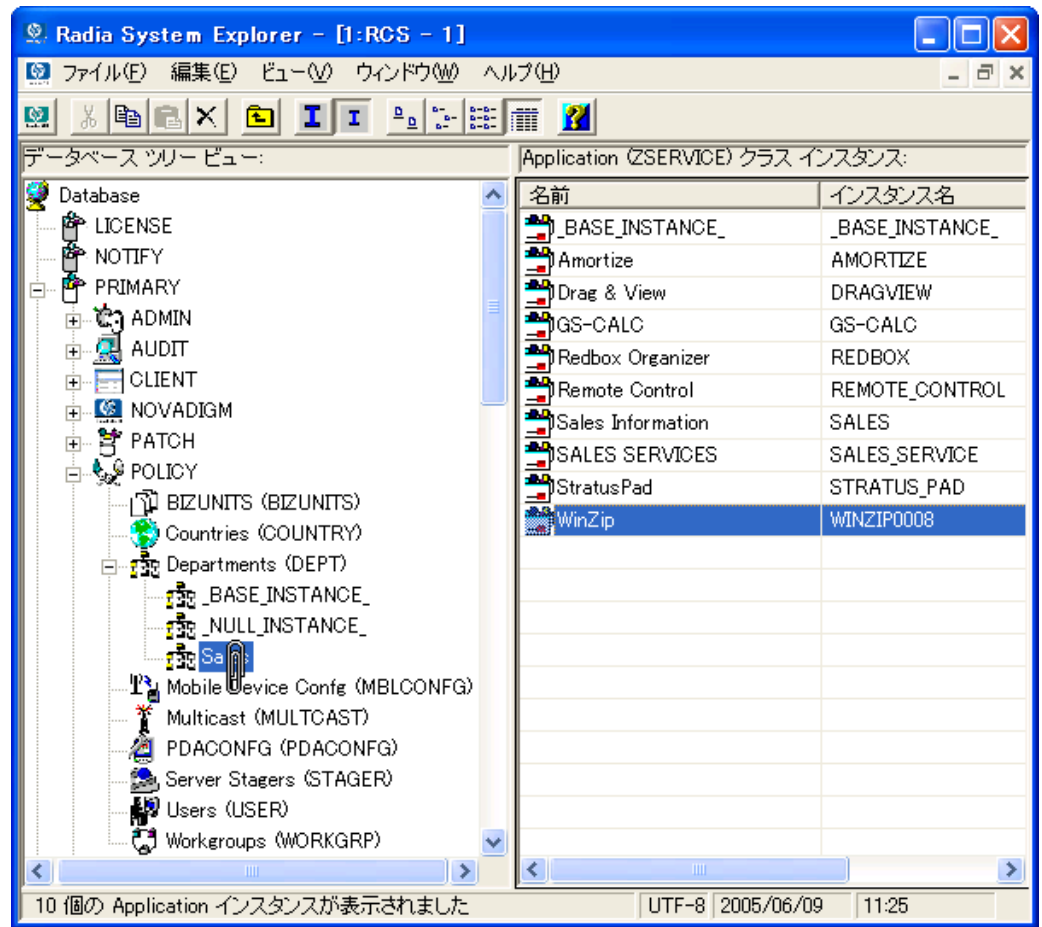


図 5.16 ~ WinZip と Sales の接続

10. [接続属性の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。

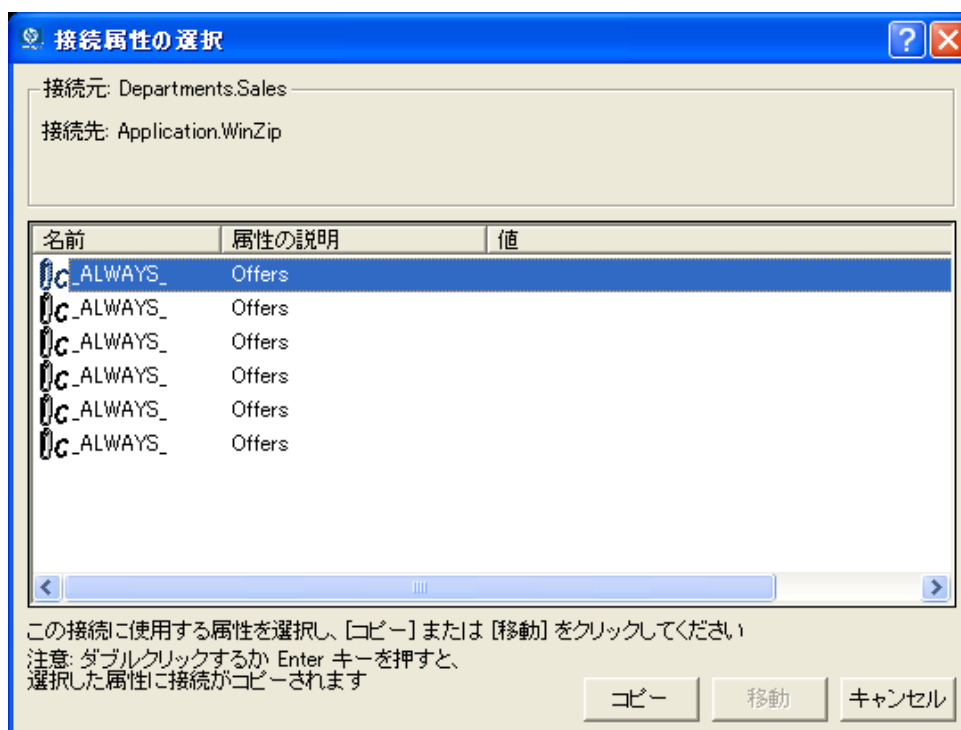


図 5.17 ~ 接続属性の選択

11. **Departments.Sales** から **Application.WinZip** への接続を作成するには [コピー] をクリックします。

12. [はい] をクリックして、接続を確定します。

13. [Sales が WinZip に接続されました。] という確認メッセージが表示されたら [OK] をクリックします。

Sales 部門インスタンスの下に WinZip が表示されます。これで、WinZip アプリケーションの受信が Sales 部門全体に認可できました。

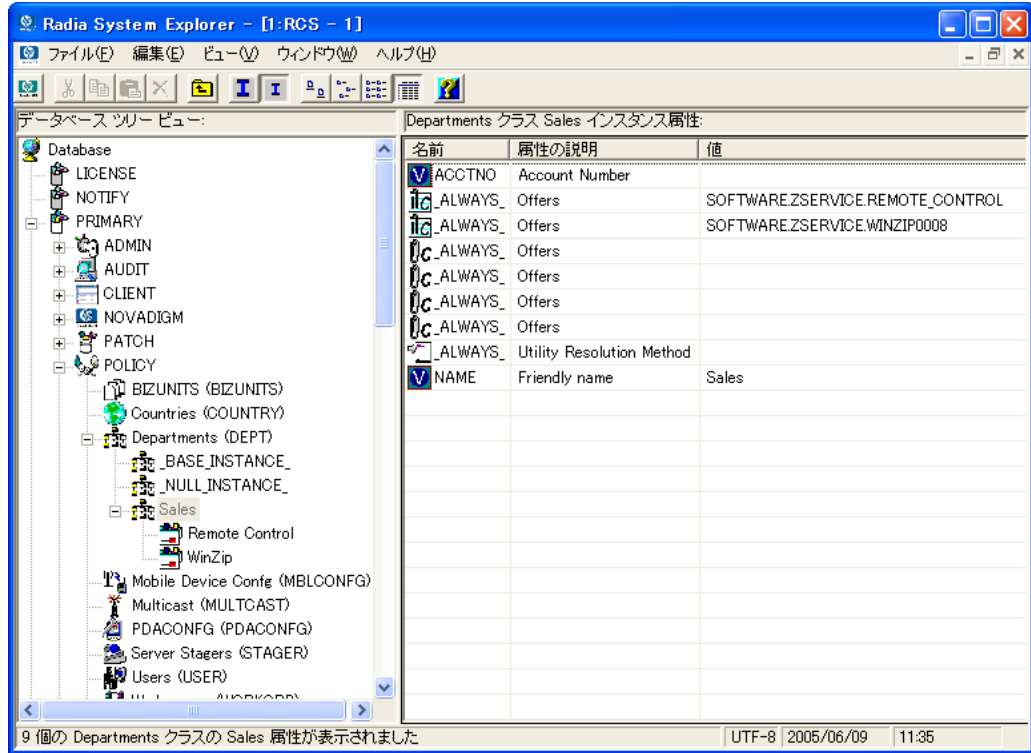


図 5.18 ~ WinZip アプリケーションを Sales 部門に認可した状態

下の図 5.19 では、**Users (USER)** クラスの **SSampson** が **Sales** 部門に割り当てられています。また、**WinZip** アプリケーションは **Sales** 部門全体に認可されています。したがって、**SSampson** が **Sales** 部門に割り当てられている限り、**Radia** は **SSampson** のコンピュータ上の **WinZip** アプリケーションを管理します。

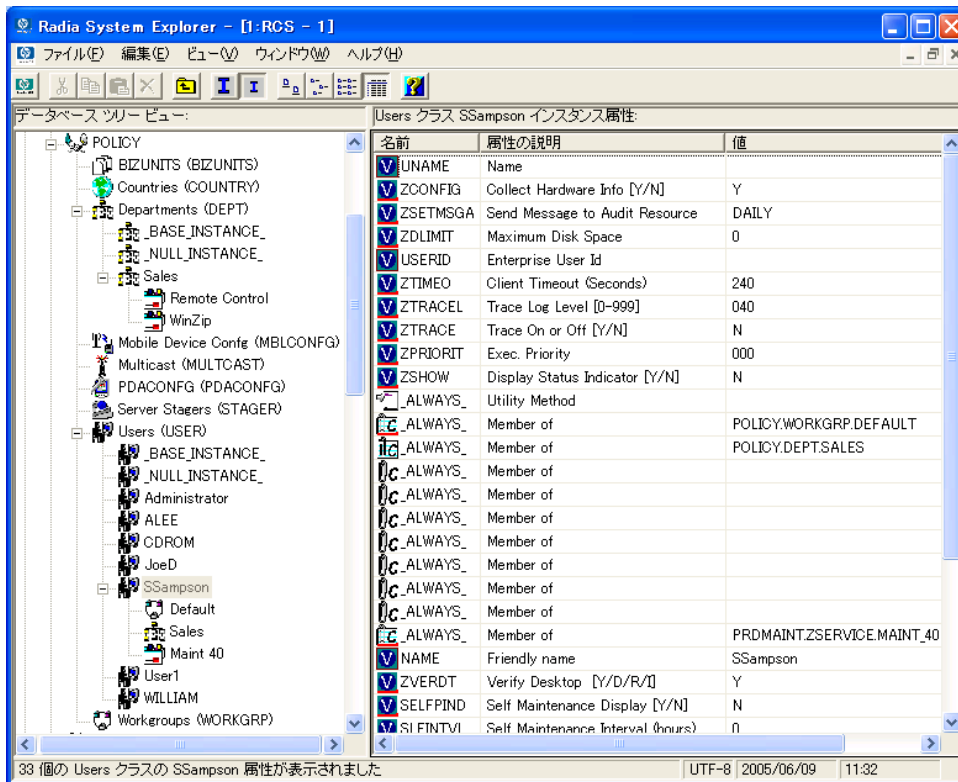


図 5.19 ~ Radia で Sales 部門の WinZip を管理している状態

外部ポリシーストアを使用する場合や、**Radia** でポリシーを管理する場合は、サービスとグループの接続を操作したり、グループにユーザーを追加したり、グループからユーザーを削除したりすることで、各サブスクリバに認可するサービスがすばやく修正できます。

まとめ

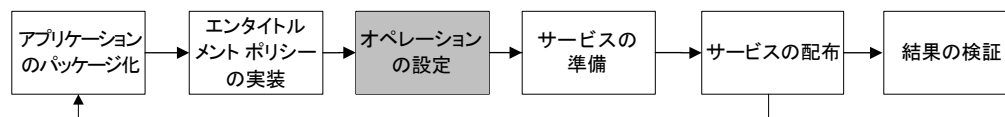
- Radia には、既存のポリシー情報が統合できます。
- Radia の POLICY ドメインを使用すると、サブスクリバが論理的なグループに整理できます。
- 新しいユーザーを作成して、グループに割り当てることができます。
- Radia で管理するサービスは、適切なグループに割り当てます。

クライアント オペレーション プロファイルを設定する

この章は以下を目的としています。

- Radia クライアント オペレーション プロファイルの長所について理解する。
- Radia クライアント オペレーション プロファイルを実装する方法を習得する。
- 簡単な実装例を見る。

このマニュアルでは、**Radia Software Manager** の標準的な実装を解説します。方法は組織のニーズに合わせて調整することになりますが、**Radia Software Manager** を包括的に理解するためにこのマニュアルに目を通しておくことをお勧めします。この章では、**Radia Client** のオペレーションの設定方法について説明します。また、**CLIENT** ドメインについても説明するほか、フェールオーバー機能を実現する方法や設定した基準に基づいてクライアントにサーバーを指定する方法、さらには、トラブルシューティング設定、ハードウェア スキャン設定およびユーザー インターフェイス設定の制御方法についても説明します。



Radia クライアント オペレーション プロファイル

Radia Configuration Server や **Radia Proxy Server** を複数使用している場合や、アプリケーションを管理するファイルをローカルの CD ROM に格納する場合は、**Radia Configuration Server** への接続を行う前に **Radia Client** の再設定が必要になることがあります。この再設定を行う際に **Radia** クライアント オペレーション プロファイルを使用します。**Radia Client** オペレーション プロファイルは、**Radia** オブジェクト指向スキーマに基づく機能で、クライアントの特定の動作をクライアント オブジェクトの属性に従って制御するためのものです。**Radia** クライアント オペレーション プロファイルを使用する利点はさまざまですが、以下にその一部を紹介します。

- **Radia** サーバーのフェールオーバー機能が実現できる。
- ネットワークのロケーションや速度などさまざまな基準に基づいて、使用可能なサーバーを各クライアント コンピュータにダイナミックに割り当てたり、クライアント コンピュータをダイナミックに選択したりすることができる。
- 使用する **Radia Configuration Server** を、機能的な役割 (ロール) に基づいて選択することにより、**Radia Configuration Server** 間での負荷分散が実現できる。
- 詳細な診断機能が利用できる。

注意

クライアント オペレーション プロファイルを使用するには、**Radia Application Manager**、**Radia** データベース共に 3.1 以上のバージョンを使用する必要があります。

CLIENT ドメイン

クライアント オペレーション プロファイルは、Radia データベースの CLIENT ドメインで管理されます。CLIENT ドメインは 6 つのクラスで構成されており、それぞれのクラスには Radia Client コンピュータ オペレーションの各種設定に使用できるサンプル インスタンスが用意されています。たとえば、ZCONFIG オブジェクトに格納されているクライアント コンピュータのネットワーク ロケーションを基に、各クライアント コンピュータに対してアプリケーション データのダウンロード元の優先度を設定したサンプル インスタンスなどがあります。6 つのクラスは次のとおりです。

- **Core Settings (SETTINGS)**

SETTINGS クラスのインスタンスを使用すると、サーバー アクセス プロファイルの使用法の指定、使用するスクリプトの定義、およびその他のグローバル パラメータの設定を行うことができます。

- **Diagnostics (DIAGS)**

このクラスのインスタンスを使用すると、Radia Client に設定されているトレース レベルが書きできます。

- **Hardware Scan Config (RADHWCFG)**

このクラスのインスタンスを使用すると、Radia Client が実行するハードウェア スキャンのタイプが制御できます。

- **Network Location (LOCATION)**

LOCATION クラスを使用すると、ロケーションを基にしてユーザーがサブネットなどのグループに分割できます。

- **RSM UI Preferences(RADUICFG)**

このクラスのインスタンスを使用すると、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの表示が管理できます。

- **Server Access Profile (SAP)**

Server Access Profile (SAP) クラスのインスタンスを使用すると、Radia Configuration Server や Radia 管理対象サービスのデータ アクセス ポイントが定義できます。

推奨事項

以下に挙げるのは、クライアント オペレーション プロファイルを使用する際の推奨事項です。

- クライアント オペレーション プロファイルの実装に際しては専門サービスをご利用ください。
- クライアント オペレーション プロファイルの設定は、手順などを十分に理解した上で行ってください。
- タイプ別およびロール別に見た場合に、いずれのサーバーも単一障害点とならないよう、可能な限り冗長性を確保してください。
- 不明なネットワーク アドレスや新規のネットワーク アドレスには、ベース インスタンスや `null` インスタンスを使用してください。

クライアント オペレーション プロファイルの実装

CLIENT ドメインの各クラスのインスタンスを使用することにより、プロファイルを企業の用途に合わせてカスタマイズすることができます。大きく分けると、実装のプロセスには 5 つの手順があります。

1. 各 Radia サーバーを設定する。
2. サーバー アクセス プロファイルのインスタンスを作成する。
3. サーバー アクセス プロファイルのインスタンスの基準を設定する。
4. サーバー アクセス プロファイルのインスタンスに優先度を設定する。
5. クライアント オペレーション プロファイルを有効にする。

各手順の詳細については、以降の各節で説明します。実装の作業を始めるに先立って、まずはサーバーのタイプとロールについて説明しておきます。

サーバーのタイプおよびロールについて

サーバー アクセス プロファイル (SAP) は、サービスのデータ アクセス ポイントを定義する手段として一般的に用いられるものです。SAP として使用できるのは、**Radia Configuration Server**、**Radia Proxy Server**、または **CD ROM ドライブ**です。**Radia** クライアント オペレーション プロファイルを使用すれば、データ アクセス ポイントを特定したり、その優先度を設定したりする際も、使用するスクリプトを新たにカスタマイズする必要はありません。

実装の作業を開始するにあたり、まずはサーバーのタイプとロールについて理解しておく必要があります。サーバーのタイプとロールはそれぞれ、SAP クラスの **TYPE** 属性および **ROLE** 属性に反映されます。サーバーに設定できるタイプには、**RCS** と **DATA** の 2 種類があります。ただし、**RCS** タイプが設定できるのは **Radia Configuration Server** のみです。**Radia Configuration Server**、**Radia Proxy Server**、および **CD ROM ドライブ**の **TYPE** 属性には **DATA** を設定することができます。**DATA** タイプは、クライアントにとってアプリケーションのダウンロード元となるサーバーにのみ使用されます。

また各 **Radia Configuration Server** には、ロール (つまり、その機能) が設定されます。ロールは SAP クラスの **ROLE** 属性で指定します。設定できるロールは次のとおりです。

- **クライアント オペレーション プロファイル (O)**
このロールを設定した **Radia Configuration Server** を使用すると、クライアント コンピュータのクライアント オペレーション プロファイルが取得できます。
- **サービス解決 (S)**
このロールを設定した **Radia Configuration Server** を使用すると、クライアント コンピュータのサービスが解決できます。
- **クライアント セルフ メンテナンス (M)**
このロールを設定した **Radia Configuration Server** を使用すると、クライアント セルフ メンテナンスが実行できます。
- **レポートिंग (R)**
このロールを設定した **Radia Configuration Server** を使用すると、クライアント コンピュータのレポートिंगオブジェクトが格納できます。レポートिंगオブジェクトは、**Radia** データベースの **PROFILE** ファイルに格納されます。
- **データ ダウンロード (D)**
このロールを設定した **Radia Configuration Server** を使用すると、クライアント コンピュータにアプリケーションデータがダウンロードできます。
- **すべてのロール (A)**
"すべてのロール" を設定した **Radia Configuration Server** は、上記のすべてのロールが実行できます。

Radia Proxy Server および CD ROM に設定できるロールは、データ ダウンロード (D) のみです。Radia Configuration Server には、上記いずれのロールも設定できます。

重要

ファイルをダウンロードする準備ができたクライアントは、まず TYPE 属性が DATA であるサーバーに順次アクセスします。アクセスの順番は、LOCATION クラスで設定されている優先度に従います。TYPE 属性に DATA が設定されていても、ROLE 属性に D が設定されていない場合は、そのサーバーはスキップされ、データのダウンロードには使用されません。

TYPE 属性が DATA であるすべてのサーバーを処理した段階で、まだ必要なファイルがすべてダウンロードできていない場合は、TYPE 属性が RCS であるサーバーに、優先度に従って順次アクセスしていきます。Radia Configuration Server を使用してデータをダウンロードするには、次の 2 つの条件が満たされている必要があります。

- クライアント コンピュータの SETTINGS.RCSDATA 属性が Y に設定されていること。
- Radia Configuration Server の SAP.ROLE 属性が、D または A のいずれかに設定されていること。

手順 1: Radia サーバーの設定

Radia サーバーを確認して、タイプとロールを設定します。タイプは、SAP クラスの TYPE 属性で定義します。またロールは、SAP クラスの ROLE 属性で定義します。Radia サーバーとして使用できるのは、Radia Configuration Server、Radia Proxy Server、または CD ROM です。TYPE 属性が DATA である Radia サーバーのロールには、データ ダウンロード (D) を設定する必要があります。TYPE 属性が RCS である Radia Configuration Server については、設定できるロールにいくつかの選択肢があります。この場合、それぞれの Radia Configuration Server に対して、実行すべきロールを設定する必要があります。

注意

データ ダウンロード以外のロールが設定できるのは Radia Configuration Server のみです。その他の SAP インスタンスについては、データ ダウンロード以外のロールが指定されると無効になります。

手順 2: サーバー アクセス プロファイル (SAP) インスタンスの作成

Radia System Explorer を使用して、サーバー アクセス プロファイルごとに SAP インスタンスを 1 つずつ作成します。SAP クラスの属性については、258 ページの「表 6.1 ~ SAP クラスの属性」にその説明がまとめてあります。Radia データベースには、サーバー アクセス プロファイルのサンプルがタイプごとに用意されています。下の「図 6.2 ~ Radia System Explorer を使用した SAP サンプルの表示」は、それらのサンプルを一覧表示したものです。

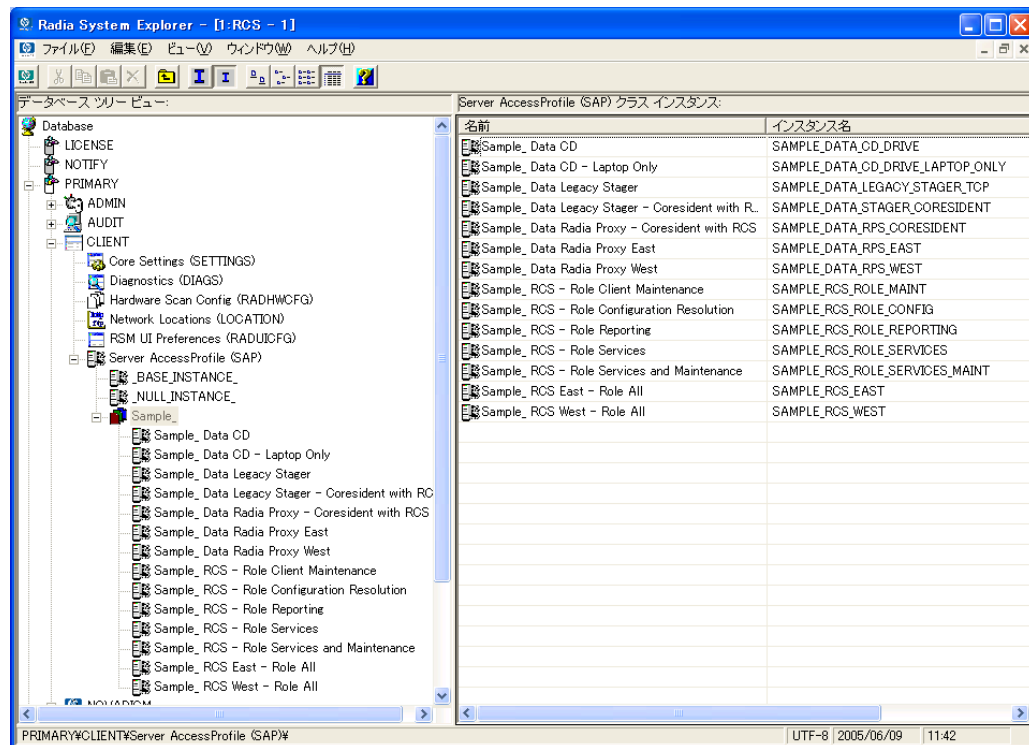


図 6.2 ~ Radia System Explorer を使用した SAP サンプルの表示

Radia System Explorer を使用して、サーバーのタイプおよびロールが、これから作成する SAP インスタンスに最も類似したインスタンスをコピーします。コピーを作成したら、下の「表 6.1 ~ SAP クラスの属性」を参考に、そのコピーの設定を個別の用途に合わせて修正します。

注意

SAP クラスのインスタンスは、**radskman** コマンド ラインで指定される IP よりも優先的に使用されます。

表 6.1 ~ SAP クラスの属性

属性	説明
ZSTOP00n	<p>[Expression Resolution Method]</p> <p>ZSTOP 式を使用すると、一定の条件が満たされている場合にプロセスを中止することができます。たとえば、ラップトップ コンピュータからはこの SAP が使用できないようにすることも可能です。</p>
NAME	<p>[Friendly Name]</p> <p>SAP インスタンスの簡略名を指定します。</p>
TYPE	<p>[Type [RCS /DATA]]</p> <p>Radia サーバーのタイプを指定します。Radia Configuration Server を使用する場合は RCS、Radia Proxy Server または CD ROM の場合は DATA をそれぞれ指定します。</p> <p>どのサーバー アクセス プロファイルにもアクセスできなかったクライアント コンピュータは、デフォルトでは、最後にアクセスした Radia Configuration Server にアクセスします。</p>
URI	<p>[Universal Resource Identifier]</p> <p>Radia Configuration Server または Radia Proxy Server を指定するための URI (Universal Resource Identifier) を作成します。作成例については、261 ページの「表 6.2 ~ URI の具体例」を参照してください。</p>
ROLE	<p>[RCS Role A,O,S,M,R,D]</p> <p>SAP のロールを指定します。複数の属性値を指定する場合は、各値をカンマで区切ります。値が設定されていない場合、または無効な値が設定されている場合は、「すべてのロール」が設定されていると見なされます。設定可能な属性値は、A (すべてのロール)、O (クライアント オペレーション プロファイル)、S (サービス解決)、M (クライアント セルフ メンテナンス)、R (レポートिंग)、および D (データ ダウンロード) です。</p> <p>デフォルト: デフォルトの値は A です。</p> <p>注意: D 以外の属性値が指定できるのは Radia Configuration Server のみです。TYPE 属性が DATA であるサーバーに対して D 以外の値を指定すると、その SAP インスタンスはスキップされます。</p>

表 6.1 ~ SAP クラスの属性

属性	説明
ENABLED	<p>[Enable SAP [Y/N]]</p> <p>この SAP を有効にする (Y) か無効にするか (N) を指定します。値が設定されていない場合、または Y および N 以外の値が設定されている場合、この SAP は有効になります。</p> <p>デフォルト: デフォルトの値は Y です。</p>
TIMEOUT	<p>[Communications Timeout (0-3200)s]</p> <p>タイムアウト時間を秒単位で指定します。ここに設定された値が有効な数値であれば、クライアント タイムアウト (ZMASTER.ZTIMEO) の値が上書きされます。値が設定されていない場合は、既存のクライアント タイムアウト値が使用されます。</p>
PUSHBACK	<p>[Push Back (0-999 retries)]</p> <p>0 に設定すると、クライアントからの接続に対してプッシュ バックを行った Radia Configuration Server は、その時点でスキップされます。プッシュ バックを行った Radia Configuration Server に対して接続の再試行を行う場合は、その回数として 1 から 999 のいずれかの数値を指定します。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は 0 です。</p>
THROTYPE	<p>[Throttle [NONE/ADAPTIVE/RESERVED/]]</p> <p>使用するバンド幅スロットリングのタイプを指定します。ADAPTIVE を指定すると、使用するバンド幅は、ネットワーク上に共存するその他のサービスと同じになります。RESERVED を指定すると、バンド幅を個別に予約することができます。この場合、ネットワーク バンド幅に占める割合が最大になるバンド幅が使用されます。NONE を指定すると、バンド幅スロットリングは行われず、使用できる最大のバンド幅が使用されます。この属性は Windows でのみ有効です。</p> <p>ここに設定された属性値が有効な値であれば、クライアントのバンド幅スロットリングが上書きされます。属性値が設定されていない場合は、クライアント コンピュータ上の既存値が使用されます。</p>
BANDWDTH	<p>[Bandwidth Percentage (1-99)]</p> <p>使用するバンド幅の割合を 1 から 99 までの数値で指定します。値が指定されていない場合、または無効な値を指定した場合は、全バンド幅が使用されます。この属性は Windows でのみ有効です。</p> <p>ここに設定された属性値が有効な値であれば、クライアントのバンド幅設定が上書きされます。属性値が設定されていない場合は、クライアント コンピュータ上の既存値が使用されます。</p>
STREAM	<p>[Enable Streaming [Y/N]]</p> <p>ストリーミングを使用する場合は Y を指定します。ここで設定した属性値は、ZMASTER.ZNORSPNS のクライアント設定を上書きします。</p> <p>デフォルト: デフォルトの値は N です。</p> <p>警告: ネットワーク環境によっては、ストリーミングに対応していないものもあります。この属性に Y を指定する場合は、事前にネットワーク管理者に相談してください。</p>
PROXY	<p>[Internet Proxy URI]</p> <p>この属性の値は変更しないでください。この属性には、クライアントがこの SAP に接続する際に使用するインターネット プロキシ URI が格納されます。インターネット プロキシ URI はクライアントで管理します。</p>

表 6.1 ~ SAP クラスの属性

属性	説明										
PRIORITY (&(LOCATION.SAPPRI))	<p>[Selection Priority] この属性の値は変更しないでください。SAP の優先度は、LOCATION クラスに指定されている優先度の値により決まります。</p>										
PRODUCT	<p>[Product Filter] この SAP インスタンスの使用を許可する Radia Client の製品タイプを指定します。複数のクライアントを指定する場合は、各クライアントをカンマで区切りません。次に示すのは、Radia Client の各製品タイプとそれに対応する識別子です。</p> <table border="0"> <tr> <td>Radia Application Manager:</td> <td>RAM</td> </tr> <tr> <td>Radia Inventory Manager:</td> <td>RIM</td> </tr> <tr> <td>Radia Software Manager:</td> <td>RSM</td> </tr> <tr> <td>Radia OS Manager:</td> <td>ROMS</td> </tr> <tr> <td>Radia Patch Manager:</td> <td>PATCH</td> </tr> </table> <p>フィルタリングの対象とする製品タイプを radskman コマンド ラインから指定する場合は product パラメータを使用します。 たとえば SAP の使用を Radia Application Manager に限定する場合、この属性に RAM を指定することもできますが、radskman コマンド ライン上で product パラメータに RAM を指定することも可能です。 デフォルト: この属性に値が設定されていない場合は、すべての製品タイプに対してこの SAP インスタンスの使用が許可されたこととなります。</p>	Radia Application Manager:	RAM	Radia Inventory Manager:	RIM	Radia Software Manager:	RSM	Radia OS Manager:	ROMS	Radia Patch Manager:	PATCH
Radia Application Manager:	RAM										
Radia Inventory Manager:	RIM										
Radia Software Manager:	RSM										
Radia OS Manager:	ROMS										
Radia Patch Manager:	PATCH										
FILTER	<p>[Filter Expression [Obj.Var = Value]] この属性を使用すると、使用可能なオブジェクトの属性を基に SAP のフィルタリングを行うことができます。たとえば、この SAP を特定のサービスに対してのみ使用する場合は、APPINFO.ZOBJNAME=GS-CALC と指定します。</p> <p>注意: インストール中は、ZSERVICE オブジェクトを使用することができません。その場合は、ZSERVICE オブジェクトの代わりに APPINFO オブジェクトを使用します。APPINFO は、ASERVICE オブジェクトからサービスのインスタンスをコピーしたもので、サービスの LIB ディレクトリに格納されています。</p>										

注意

SAP オブジェクトの使用を上書きする場合は、**radskman** コマンド ラインに RCSURI パラメータを追加してください。RCSURI は、URI (Universal Resource Identifier) と同一のフォーマットにする必要があります。RCSURI パラメータの構文については、261 ページの「表 6.2 ~ URI の具体例」を参照してください。

URI (Universal Resource Identifier) の作成

SAP クラスのインスタンスごとに、サーバー アクセス プロファイル (SAP) の URI (Universal Resource Identifier) を設定する必要があります。RFC 1630 で提案されているフォーマットは次のとおりです。

<スキーム>:<スキーム別フォーマット>

<スキーム> には通常、HTTP や TCP などのネットワーク プロトコルを記述します。また、<スキーム別フォーマット> 内で使用されているスラッシュは、パスの階層を表すためのものです。URI の <スキーム別フォーマット> に次のフォーマットを適用したものが URL (Universal Resource Locator) です。

//<ユーザー>:<パスワード>@<ホスト>:<ポート>/<URL パス>

<URL パス> の部分には、指定したリソースにアクセスする方法の詳細が定義されています。一般には、//<ホスト>:<ポート>/<URL パス> という形式を使用します。URI の指定に関するいくつかの具体例を、下の「表 6.2 ~ URI の具体例」に示します。

表 6.2 ~ URI の具体例

SAP のタイプ	URI 属性および TYPE 属性の設定内容
デフォルト ポート 3464 を使用して TCP/IP 上で動作する Radia Configuration Server	URI = tcp://novarcs:3464 TYPE = RCS
ポート 7800 を使用して TCP/IP 上で動作する Radia Configuration Server	URI = tcp://novarcs:7800 TYPE = RCS
ポート 443 の SSL を使用する Radia Configuration Server	URI = tcps://novarcssl:443 TYPE = RCS
HTTP を使用する Radia Proxy Server	URI = http://novarps:3466 TYPE = DATA
CD ROM	URI = file://&(ZCONFIG.ZHDWCDDR)/DATA/ TYPE = DATA

手順 3: 各 SAP インスタンスの基準の設定

SAP インスタンスを作成したら、次に企業内のネットワークをセグメント化する方法を決める必要があります。たとえば、サブネットに基づいて各クライアント コンピュータに SAP を割り当てるという方法があります。その場合は、**Radia System Explorer** を使用して、サブネットごとにロケーション インスタンスを 1 つずつ作成します。サンプル データベースには、**Sample_Location East**、**Sample_Location West** という 2 つのロケーション インスタンスが用意されています。

各クライアント コンピュータの **ZCONFIG** オブジェクトには、**NETLOC** という属性があります。**ZCONFIG.NETLOC** 変数を使用すると、クライアント コンピュータのサブネットが特定できます。ただし、各ピリオドはアンダースコアに置き換えます。クライアント コンピュータのサブネットを基にロケーション インスタンスの名前を決めれば、それぞれのサブネットに基づいてユーザーを適切な **LOCATION** インスタンスに接続することが容易になります。たとえば、**10.10.10.1** というサブネットがある場合であれば、**10_10_10_0** という名前の **LOCATION** インスタンスを作成します。クライアント コンピュータの **ZCONFIG.NETLOC** 変数を使用して、サブスクリイバを適切なロケーション クラスに接続する方法については、267 ページの「**手順 5: クライアント オペレーション プロファイルの有効化**」で説明します。

手順 4: 各 SAP の優先度の設定 (ロケーション別)

LOCATION クラスのインスタンスを使用し、ロケーション基準に基づいてサーバー アクセス プロファイルの優先度を設定します。下の「[図 6.3 ~ LOCATION インスタンスのサンプルの表示](#)」は、用意されているサンプルの 1 つを表示したものです。サーバー アクセス プロファイルの優先度は、接続先を示す各 SAP インスタンスのすぐ上にある SAPPRI 属性で定義します。数字が小さいほど、優先度は高くなります。下の図では、たとえば、SAP.SAMPLE_RCS_EAST の優先度は 10、SAP.SAMPLE_DATA_RPS_EAST の優先度は 40 となっています。

注意

SAPPRI には、01 から 99 までのいずれかの整数を指定することができます。LOCATION インスタンス内の SAP は、優先度の順に表示する必要はありません。

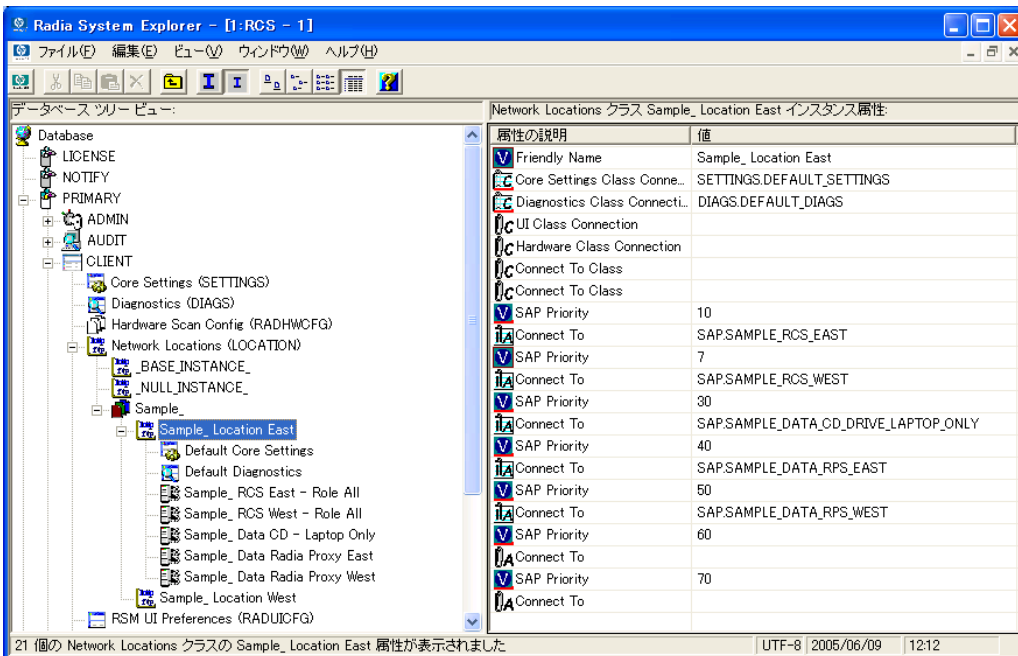


図 6.3 ~ LOCATION インスタンスのサンプルの表示

クライアント オペレーション プロファイルを設定する

「表 6.3 ~ LOCATION クラスの属性」は、LOCATION クラスのインスタンスの各属性とその説明をまとめたものです。たとえば、SAMPLE_RCS_WEST を SAMPLE_RCS_EAST より前に使用できるように、SAMPLE_RCS_WEST の優先度を 7 に上げるとします。そのためには、下の「図 6.4 ~ SAMPLE_RCS_WEST の優先度を高くするための設定変更」のように、SAMPLE_RCS_WEST の SAPPRI を 7 に変更します。

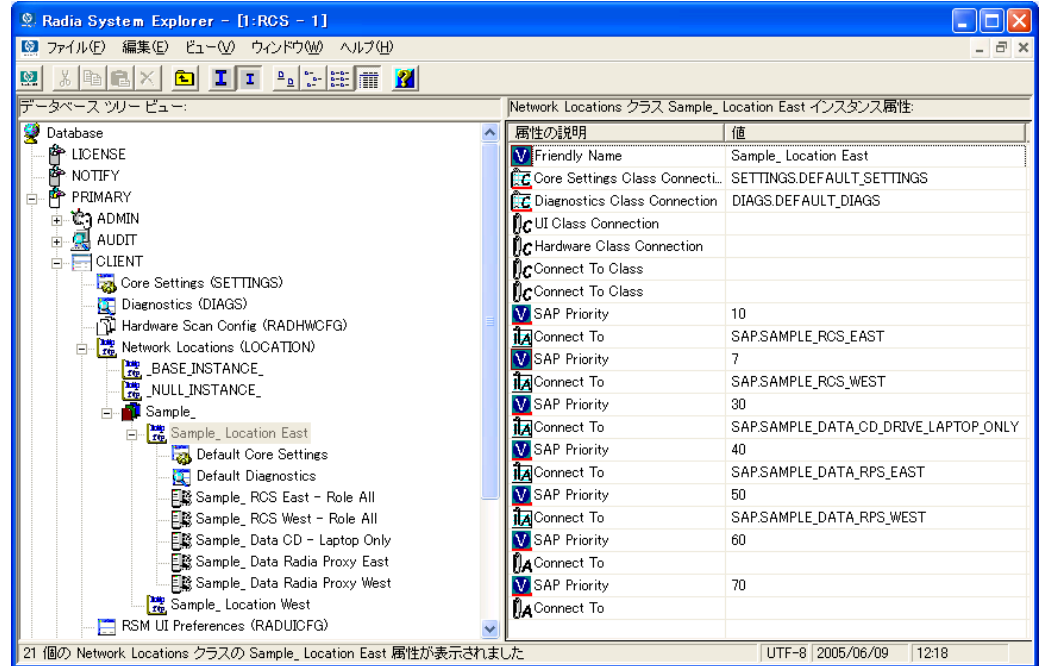


図 6.4 ~ SAMPLE_RCS_WEST の優先度を高くするための設定変更

表 6.3 ~ LOCATION クラスの属性

属性	説明
COPLNAME	[Friendly Name] インスタンスの簡略名を指定します。
ALWAYS	[Core Settings Class Connection] SETTINGS クラスのインスタンスを指定します。 デフォルト: デフォルトの接続は、SETTINGS.DEFAULT_SETTINGS です。
ALWAYS	[Diagnostics Class Connection] DIAGS クラスのインスタンスを指定します。 デフォルト: デフォルトの接続は、DIAGS.DEFAULT_DIAGS です。
ALWAYS	[UI Class Connection] RADUICFG クラスのインスタンスを指定します。
ALWAYS	[Hardware Class Connection] RADHWCFG クラスのインスタンスを指定します。
ALWAYS	[Class Connection] このロケーション インスタンスに接続するクラスのインスタンスを指定します。
SAPPRI	[SAP Priority] この属性の下の _ALWAYS_ クラスが参照する SAP インスタンスの優先度を指定します。 デフォルト: このインスタンスの下で接続先として参照される SAP のデフォルトの優先度は 10 です。
ALWAYS	[Connect to] この属性の上にある SAPPRI で指定された優先度を適用する SAP インスタンスを指定します。この SAP のデフォルトの優先度は 10 です。
SAPPRI	[SAP Priority] この属性の下の _ALWAYS_ クラスが参照する SAP インスタンスの優先度を指定します。 デフォルト: このインスタンスの下で接続先として参照される SAP のデフォルトの優先度は 20 です。
ALWAYS	[Connect to] この属性の上にある SAPPRI で指定された優先度を適用する SAP インスタンスを指定します。この SAP のデフォルトの優先度は 20 です。
SAPPRI	[SAP Priority] この属性の下の _ALWAYS_ クラスが参照する SAP インスタンスの優先度を指定します。 デフォルト: このインスタンスの下で接続先として参照される SAP のデフォルトの優先度は 30 です。
ALWAYS	[Connect to] この属性の上にある SAPPRI で指定された優先度を適用する SAP インスタンスを指定します。この SAP のデフォルトの優先度は 30 です。
SAPPRI	[SAP Priority] この属性の下の _ALWAYS_ クラスが参照する SAP インスタンスの優先度を指定します。 デフォルト: このインスタンスの下で接続先として参照される SAP のデフォルトの優先度は 40 です。

表 6.3 ~ LOCATION クラスの属性

属性	説明
ALWAYS	[Connect to] この属性の上にある SAPPRI で指定された優先度を適用する SAP インスタンスを指定します。この SAP のデフォルトの優先度は 40 です。
SAPPRI	[SAP Priority] この属性の下の _ALWAYS_ クラスが参照する SAP インスタンスの優先度を指定します。 デフォルト: このインスタンスの下で接続先として参照される SAP のデフォルトの優先度は 50 です。
ALWAYS	[Connect to] この属性の上にある SAPPRI で指定された優先度を適用する SAP インスタンスを指定します。この SAP のデフォルトの優先度は 50 です。
SAPPRI	[SAP Priority] この属性の下の _ALWAYS_ クラスが参照する SAP インスタンスの優先度を指定します。 デフォルト: このインスタンスの下で接続先として参照される SAP のデフォルトの優先度は 60 です。
ALWAYS	[Connect to] この属性の上にある SAPPRI で指定された優先度を適用する SAP インスタンスを指定します。この SAP のデフォルトの優先度は 60 です。
SAPPRI	[SAP Priority] この属性の下の _ALWAYS_ クラスが参照する SAP インスタンスの優先度を指定します。 デフォルト: このインスタンスの下で接続先として参照される SAP のデフォルトの優先度は 70 です。
ALWAYS	[Connect to] この属性の上にある SAPPRI で指定された優先度を適用する SAP インスタンスを指定します。この SAP のデフォルトの優先度は 70 です。

手順 5: クライアント オペレーション プロファイルの有効化

この手順は 2 段階に分けることができます。最初に、クライアント オペレーション プロファイルに関連付けられているオブジェクトを解決するために、**Radia Configuration Server** 上にプロセスを作成します。次に、クライアント コンピュータからクライアント オペレーション プロファイルが使用できるようにします。

Radia Configuration Server での有効化

クライアント オペレーション プロファイルを有効にするには、**SYSTEM** ドメインの **Radia Processes (PROCESS)** クラスで **RADSETUP** というインスタンスを新たに作成する必要があります。インスタンスを作成したら、**CLIENT.LOCATION.&(ZCONFIG.ZNETLOC)** へのクラス接続を作成します。この接続により、クライアント コンピュータの **ZCONFIG** オブジェクトにある **ZNETLOC** 属性に基づいて、ユーザーが適切なロケーション インスタンスにマッピングされます。**ZNETLOC** 属性を使用すると、クライアント コンピュータのサブネットが特定できます。ただし、4 つの 10 進数の区切り記号には、ピリオドではなくアンダースコアを使用します。**LOCATION** クラスのインスタンスは、環境内の各サブネットに対応するように定義する必要があります。これは、クライアント オペレーション プロファイルの設定設定を、ネットワーク内のロケーションに基づいてダイナミックに割り当てることを可能にするためです。268 ページの「[図 6.5](#) ~ **SYSTEM.PROCESS.RADSETUP** インスタンスの作成」に例を示します。

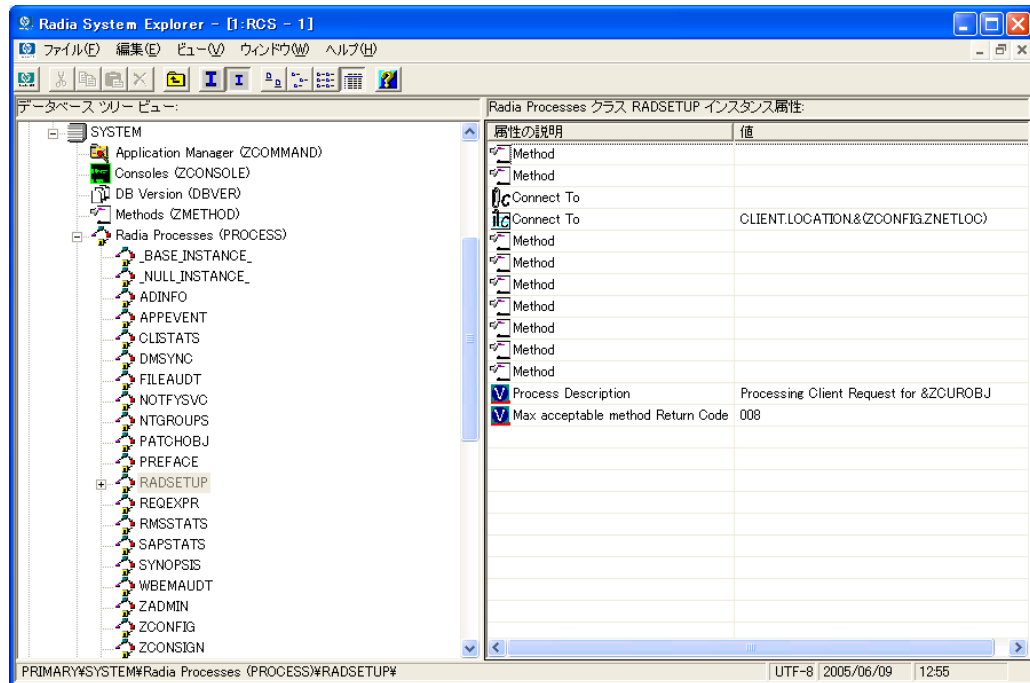


図 6.5 ~ SYSTEM.PROCESS.RADSETUP インスタンスの作成

クライアントでの有効化

Radia の旧バージョンとの下位互換性を維持するため、クライアント コンピュータ上ではクライアント オペレーション プロファイルがデフォルトで無効になっています。クライアント コンピュータ上でクライアント オペレーション プロファイルを有効にするには 3 つの方法があります。対象となる Radia Client が既にインストールされているかどうかによっても有効化の方法は異なります。必要性に応じて最適な方法を選択してください。

Radia Client がまだインストールされていない場合

- `install.ini` をカスタマイズして、COP 変数を RADSETUP オブジェクトに追加します。そのために、まず `install.ini` の **[Objects]** セクションに行を 1 つ追加します。下の図は、**[Objects]** セクションに新しい行を追加したところを示しています。詳細については、46 ページの「`INSTALL.INI` の **[OBJECTS]** セクション」を参照してください。

```
[Objects]
; Set Radia object attribute values
; A value of _NONE_ will set the attribute to blank
;
RADSETUP_COP=Y
;ZMASTER_ZDSTSOCK=
;ZMASTER_ZIPADDR=
;ZMASTER_ZNTFPORT=3465
```

図 6.6 ~ Install.ini の [Objects] セクションへの RADSETUP 行の追加

インストール済みの Radia Client 上でクライアント オペレーション プロファイルを有効にする場合

- **rexx** メソッド (**initmeth.rexx**) を使用して、COP 変数を RADSETUP オブジェクトに追加して設定します。**initmeth.rexx** は、"最初のカatalogをリフレッシュ" が呼び出されるごとに実行され、COP 変数に Y が設定された RADSETUP オブジェクトが作成されて、クライアント オペレーション プロファイルが有効になります。**initmeth.rexx** に追加する行を下の図に示します。更新した **initmeth.rexx** は必ず配布してください。

```
/* Sample INITMETH.REX to Enable the COP */
call edmget('RADSETUP',0)
RADSETUP.COP = 'Y'
call edmset 'RADSETUP'
```

図 6.7 ~ Initmeth.rexx へ追加する行

- **radskman** の COP パラメータを使用して、クライアント オペレーション プロファイルの有効化/無効化を切り替える方法もあります。有効にする場合は、**radskman** のパラメータ リストに COP=Y を追加します。ただしこの方法を用いてクライアント オペレーション プロファイルの有効化/無効化を切り替えることができるのは、特定のクライアント接続に対してのみです。すべてのクライアント接続に対してクライアント オペレーション プロファイルを有効にするには、上記のように **initmeth.rexx** を使用するか、CLIENT.SETTINGS 内に COP という変数を作成して、その値を Y に設定します。どちらの方法でも最終的には、RADSETUP オブジェクト内に COP 属性を作成した上で、その値を Y に設定することになります。一方、有効になっているクライアント オペレーション プロファイルを特定のクライアント接続に対してのみ無効にする必要がある場合は、**radskman** を使用して COP=N を設定します。

CLIENT ドメインのその他のクラス

CLIENT ドメインには、他にもカスタマイズと診断に使用する 2 つのクラスがあります。クライアント接続に使用する独自のスクリプトを作成する場合は、コア設定 (SETTINGS) クラスを使用します。トレース レベルを設定したり、その他の診断ツールを使用したりする場合は、診断 (DIAGS) クラスにある各属性の属性値を変更します。

コア設定 (SETTINGS)

SETTINGS クラスのインスタンスは、サーバー アクセス プロファイルの使用方法を指定する場合、事前設定処理で使用するスクリプトを定義する場合、およびその他のグローバル パラメータを設定する場合に使用します。

注意

SETTINGS クラスと SAP クラスに同じような属性が存在する場合は、SAP クラスの属性が使用されます。

表 6.4 ~ SETTINGS クラスの属性

属性	説明
COPSNAME	[Friendly Name] インスタンスの簡略名を指定します。
SAPPING	[Ping all SAP [Y/N]] クライアントがすべての SAP に対して ping を実行するようにする場合は Y に設定します。EQUISORT が S に設定されている場合、SAPPING を Y に設定する必要があります。接続速度に関する結果が返され、SAPSTATS オブジェクトの SPEED 属性に格納されます。 デフォルト: デフォルト設定は N です。
PUSHBACK	[Push Back (0-999 retries)] 0 に設定すると、クライアントからの接続に対してプッシュ バックを行った Radia Configuration Server は、その時点でスキップされます。プッシュ バックを行った Radia Configuration Server に対して接続の再試行を行う場合は、その回数として 1 から 999 のいずれかの数値を指定します。 デフォルト: デフォルト設定は 0 です。
EQUISORT	[Secondary SAP Priority [R/S]] この属性を R に設定すると、複数の SAP インスタンスが同一の優先度を持つ場合に、使用する SAP インスタンスがランダムに 1 つ選択されます。 S に設定すると、ネットワーク速度が最も高い SAP が選択されます。この属性を S に設定する場合、SAPPING を Y に設定する必要があります。また負荷を分散する場合は、 R に設定します。 デフォルト: デフォルト設定は R です。

表 6.4 ~ SETTINGS クラスの属性

属性	説明
USELSAP	<p>[Use Last SAP [N/Y]]</p> <p>Y に設定すると、このクライアント接続で最後に使用した SAP が、残りすべてのサービス解決にも使用されます。DATA が指定された SAP は、サービスごとに使用されます。N に設定すると、クライアントは、サービスごとに優先度に従って順次 SAP にアクセスすることになります。</p> <p>クライアント接続中、あるサービスがデータのダウンロードを続行するために、より優先度の低い SAP にアクセスする必要があるとします。この場合、残りすべてのサービスも引き続き現在の SAP にアクセスする (USELSAP=Y) のか、それともその次のサービスに対しては、優先度の最も高い DATA SAP に戻ってファイルを検索し (USELSAP=N)、そこから優先度に従って順次 SAP にアクセスしていくのかを決定する必要があります。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は Y です。</p>
RCSDATA	<p>[Download DATA from RCS [Y/N]]</p> <p>Y を指定すると、TYPE に DATA が設定されているすべての SAP にアクセスし終わった時点で、更にダウンロードが必要なデータがある場合、TYPE に RCS が設定されている SAP へのアクセスを開始することができます。クライアント コンピュータで Radia Configuration Server を使用する必要がない場合は、RCSDATA を N に設定します。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は Y です。</p>
ADINFO	<p>[Query Active Directory Info [Y/N]]</p> <p>Y を指定すると、クライアント コンピュータのアクティブ ディレクトリ情報を収集することができます。この情報は、RADSETUP ディレクトリの ADINFO オブジェクトに格納されます。RADSETUP ディレクトリのデフォルトのロケーションは、<System Drive>:¥Program Files¥Novadigm¥Lib¥RADSETUP です。この情報は、すべての解決プロセスにおいて、Radia Configuration Server に送信されます。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は Y です。</p>
ZGRPINFO	<p>[Query NT User Group Info [Y/N]]</p> <p>Y を指定すると、クライアント コンピュータの Windows NT ユーザー グループ情報を収集することができます。この情報は、RADSETUP ディレクトリの NTGROUPS オブジェクトに格納されます。RADSETUP ディレクトリのデフォルトのロケーションは、<System Drive>:¥Program Files¥Novadigm¥Lib¥RADSETUP です。この情報は、すべての解決プロセスにおいて、Radia Configuration Server に送信されます。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は Y です。</p>
LSCRIPT	<p>[Disable Connect on UI Reboot [Y/N]]</p> <p>サービスが即時リブートを実行するように設定されている場合、radskman をログイン スクリプトから起動するには、この属性を Y に設定します。</p> <p>サービスが即時リブートを実行するように設定されている場合、ユーザー ログイン時に radskman をユーザー コンテキストで再起動するには、この属性を N に設定します。</p> <p>つまり、ユーザーから Radia Configuration Server への接続がログイン時に行われるよう設定されている場合は、N に設定します。context=u を使って即時リブートを実行する一方で、ユーザーから Radia Configuration Server への接続を再確立する必要がある場合は、LSCRIPT 属性を Y に設定します。リブートのオプションに関する詳細については、「クライアント コンピュータを再起動する」を参照してください。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は Y です。</p>

表 6.4 ~ SETTINGS クラスの属性

属性	説明
ALWAYS D	<p>[Always Download CFG Objects [Y/N]]</p> <p>Y に設定すると、事前設定オブジェクトが必ずダウンロードされます。これにより、SAP や永続オブジェクトは、内容に変更がない場合でも必ずダウンロードされます。何らかの理由で破損した SAP クライアント オブジェクトは、その要求ステートに影響がない場合でも再ダウンロードされます。さらに、変数の 1 つが置換変数である場合も、要求ステートは変化しませんが、新しい値を持つオブジェクトがダウンロードされます。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は Y です。</p>
ALWAYS S	<p>[Always Upload CFG Objects [Y/N]]</p> <p>Y に設定すると、RADSETUP ディレクトリにあるすべてのオブジェクトが常時 Radia Configuration Server へアップロードされます。RADSETUP ディレクトリのデフォルトのロケーションは、<System Drive>:\Program Files\Novadigm\Lib\RADSETUP です。N に設定すれば、オブジェクトは送信されません。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は Y です。</p>
EXBSETUP	<p>[Pre Config Resolution Script]</p> <p>事前設定処理の前に実行するスクリプトを指定します。このスクリプトは必ず、クライアント コンピュータの IDMSYS ディレクトリに格納します。デフォルトのロケーションは、<System Drive>:\Program Files\Novadigm です。</p> <p>デフォルト: デフォルト設定は PRESETUP.REX です。</p>
EXASETUP	<p>[Pre Config Resolution Script]</p> <p>事前設定処理の後に実行するスクリプトを指定します。このスクリプトは必ず、クライアント コンピュータの IDMSYS ディレクトリに格納します。デフォルトのロケーションは、<System Drive>:\Program Files\Novadigm です。</p>
CMETHOD	<p>[Post Catalog Script]</p> <p>サービス処理の前ではなく、カタログ解決の後に実行できるスクリプトを指定します。</p>
EXBOUTBX	<p>[Pre Outbox Script]</p> <p>アウト ボックス内のオブジェクトが Radia Configuration Server へフラッシュされる前ではなく、サービス処理の後に実行できるスクリプトを指定します。</p>
EXBEXIT	<p>[Post Connection Script]</p> <p>radskman が終了する前に実行するスクリプトを指定します。たとえば、カスタマイズされたリポート プロセスの実行に使用するスクリプトなどは、この属性に指定します。このスクリプトは必ず、クライアント コンピュータの IDMSYS ディレクトリに格納します。デフォルトのロケーションは、<System Drive>:\Program Files\Novadigm です。</p> <p>注意: EXBEXIT 属性を使用するには、クライアント オペレーション プロファイルがクライアント上で有効になっている必要があります。クライアント オペレーション プロファイルが有効になっていないと、EXBEXIT は無視されます。</p>
TIMEOUT	<p>[Communications Timeout (0-3200)s]</p> <p>サーバー アクセス プロファイル (SAP) のタイムアウト時間を秒単位で指定します。ここに設定された値が有効な数値であれば、クライアント タイムアウト (ZMASTER.ZTIMEO) が上書きされます。値が設定されていない場合は、クライアント上に設定されている既存のタイムアウト値が使用されます。</p>

表 6.4 ~ SETTINGS クラスの属性

属性	説明
THROTYPE	<p>[Throttle [RESERVED/ADAPTIVE/NONE/]]</p> <p>使用するバンド幅スロットリングのタイプを指定します。ADAPTIVE を指定すると、使用するバンド幅は、ネットワーク上に共存するその他のサービスと同じになります。RESERVED を指定すると、バンド幅を個別に予約することができます。この場合、ネットワーク バンド幅に占める割合が最大になるバンド幅が使用されます。NONE を指定すると、バンド幅スロットリングは行われず、使用できる最大のバンド幅が使用されます。デフォルトの値は NONE です。この属性は Windows でのみ有効です。</p>
BANDWDTH	<p>[Bandwidth Percentage (1-99)]</p> <p>使用するバンド幅の割合を 1 から 99 までの数値で指定します。値が設定されていない場合、またはこの変数が存在しない場合は、すべてのバンド幅が使用されます。この属性は Windows でのみ有効です。</p>
RADTRAY	<p>[Radtray Command Line Arguments]</p> <p>Radia システム トレイで使用するコマンド ライン引数を設定します。Radia システム トレイを有効にする場合は、先頭の引数に Y を、無効にする場合は N を指定します。Y を指定した場合は、Y の後にカンマを入れ、それに続けてその他のパラメータを指定することができます。指定できるパラメータは次のとおりです。</p> <p>/C Radia システム トレイを、起動と同時にコンソール モードで表示します。</p> <p>/NOCANCEL [キャンセル] ボタンを非表示にします。</p> <p>/NOPAUSE [停止] ボタンを非表示にします。</p> <p>/D トラブルシューティング用のログにデバッグ メッセージを追加します。</p> <p>例: Y, /C /NOPAUSE と指定した場合、Radia システム トレイはコンソール モードで表示され、[停止] ボタンが非表示になります。</p>
USEDEFS	<p>[Use Default SAP [Y/N]]</p> <p>Y を指定すると、必要な ROLE を持つ SAP が見つからない場合、コマンド ラインで設定された Radia Configuration Server がデフォルトとして使用されます。</p>
DEFROLE	<p>[Default SAP ROLE (A,O,S,M,R)]</p> <p>コマンド ラインで指定された Radia Configuration Server に対してロールを指定します。値が指定されていない場合は A (すべてのロール) に設定され、その Radia Configuration Server ではすべてのロールが実行可能となります。</p> <p>注意: DEFROLE を使用するには、USEDEFS を Y に設定する必要があります。</p>
RAD2XUI	<p>[Enable RADUI 2.x]</p> <p>Y を指定すると、旧式の Radia UI ダイアログが表示できます。Radia システム トレイを使用していない場合、または Radia システム トレイ以外の画面にもポップ アップ メッセージを表示させる場合に、この属性を使用します。</p>

表 6.4 ~ SETTINGS クラスの属性

属性	説明
RSTROPT	<p>[Bandwidth Checkpoint Restart]</p> <p>この属性を使用すると、あるファイルに対してチェックポイントの再開を有効にするための条件を、ネットワーク バンド幅の計算結果に基づいて決定することができます。この属性に指定した値は、このクライアント接続でダウンロードされたすべてのファイルに適用されます。この属性に値を指定する場合は、ファイル サイズの下限、ネットワークしきい値、およびファイル サイズの上限を表す数値をカンマで区切って順に並べます。例として、RSTROPT に 100 KB, 86 KB, 10 MB と指定した場合について説明します。最初にクライアントが、ネットワーク バンド幅を計算します。判定は、以下の 2 つの場合に分けて行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ネットワーク バンド幅が 86 KB 未満の場合、対象ファイルのサイズを 100 KB と比較します。ファイル サイズが 100 KB より大きい場合は、そのファイルに対してチェックポイントの再開が有効になります。 ネットワーク バンド幅が 86 KB を超える場合、対象ファイルのサイズを 10 MB と比較します。ファイル サイズが 10 MB より大きい場合は、そのファイルに対してチェックポイントの再開が有効になります。
DISKFREE	<p>[Minimum Free Disk Space Threshold]</p> <p>Radia に対して最低限確保する必要がある未使用ディスク スペースを指定します。この制限を超えるサービスはインストールされません。</p>
REMUNINS	<p>[Allow Remote Notify Uninstall [Y/N]]</p> <p>Y を指定すると、リモート コンピュータからの通知があっても、サービスのアンインストールが行われないようにすることができます。ただし、リモート通知により通常のクライアント接続が開始される場合、ポリシーの変更に伴うアプリケーションのアンインストールは、ここで指定した値に関係なく行うことができます。アンインストール通知には必ず、req="Un-install" という文字列が含まれます。</p>
DETPROXY	<p>[Internet Proxy detection [Y/N]]</p> <p>N に設定すると、クライアント接続を開始する際、その時点で実行中のインターネットプロキシ検出がスキップされます。</p>

表 6.4 ~ SETTINGS クラスの属性

属性	説明
ACTMAINT	<p>[Maintenance Activation [I/D/P]]</p> <p>upgrdmaint は、すべてのメンテナンス アクティビティの処理を行う Radia のメンテナンス モジュールです。upgrdmaint は、メンテナンスの開始直後に、あるいは個々のスケジュールに従って、radskman から起動することができます。</p> <p>注意: メンテナンスを実行する場合は、radskman の mnt パラメータを Y に設定する必要があります。</p> <p>ACTMAINT を I (Immediate) に設定すると、メンテナンス ファイルをダウンロード直後にアクティブ化することができます。Radia Software Manager のサブスクライバには、RSM をアップデートする必要があるという内容のメッセージが表示されます。[OK] ボタンを押すと、Radia Software Manager はいったん終了し、メンテナンス ファイルがインストールされた後、再起動されます。</p> <p>メンテナンス ファイルのアクティブ化を保留するには D に設定します。この場合、メンテナンス ファイルはダウンロードされますが、アクティブ化されません。メンテナンス ファイルをアクティブにするには、タイマーなどの方法を使用して、radskman から req="Self Maintenance" を呼び出すか、upgrdmaint を直接呼び出します。</p> <p>メンテナンスの実行を Radia Software Manager ユーザーの判断に委ねる場合は、P に設定します。この場合、メンテナンスが実行可能であるという内容のメッセージ ボックスが表示されますが、サブスクライバはそれをキャンセルすることができます。その際、メンテナンス ファイルはダウンロードされますが、アクティブ化されません。サブスクライバに対しては、次のメンテナンス チェックの際に、Radia Software Manager インターフェイスによるメッセージが再度表示されます。Radia Application Manager ユーザーから見れば、P と I に違いはありません。</p> <p>デフォルト: I</p>
SENDERPT	<p>[Send Reporting Object [I/D]]</p> <p>D に設定すると、クライアント接続の終了時に行われる Radia Configuration Server への全レポーティングオブジェクトの送信が保留されます。通常、APPEVENT、CLISTATS、ZSVCSTAT といった、各サービスのレポーティングオブジェクトは、作成後すぐ (I) に Radia Configuration Server へ送信されます。しかしそのような場合、Radia Configuration Server への接続の切断と再接続を繰り返し行うことが必要になります。</p> <p>デフォルト: I</p>

Diagnostics (DIAGS)

このクラスを使用すると、Radia Client コンピュータ上にあるトレースのデフォルト設定が上書きできます。また、radstate プログラムの実行に使用するパラメータを設定することもできます。radstate は、Radia Client の現在の状態について概要を把握するための診断モジュールです。radstate の出力情報は、数多くの Radia Client オブジェクトから取得されたデータに基づくものです。radstate に関する詳細については、HP OpenView Web サイトの『Client Diagnostic Utility』を参照してください。

注意

このクラスのインスタンスを使用すると、不具合の修正を行う個々のユーザー、コンピュータ、またはユーザー グループごとにトレース レベルや **radstate** のパラメータを設定することが容易になります。こうした利便性に配慮して、これらの属性がそれぞれの一時クラスに意図的に組み込まれています。

このクラスのインスタンスを使用するには、まず LOCATION クラスの `_BASE_INSTANCE_` にある `_ALWAYS_` 診断クラス接続を `DIAGS.&(ZCONFIG.ZHDWCOMP)` に設定します。次に、トレース レベルを設定する Radia Client コンピュータのコンピュータ名を使って、DIAGS クラスのインスタンスを作成します。そのコンピュータ名が DIAGS クラス内に存在しない場合は、DEFAULT_DIAGS インスタンスの設定が使用されます。

表 6.5 ~ DIAGS クラスの属性

属性	説明
COPDNAME	[Friendly Name] インスタンスの簡略名を指定します。
RADSTATE	[Command String for radstate] この属性に指定したパラメータで radstate が実行されます。 DIAGS クラスのベース インスタンスは VO に設定されます。これにより ZRSTATE オブジェクトおよび ZRSTATES オブジェクトが作成され、 radstate が冗長モードで実行されます。詳細については、 radstate のマニュアルを参照してください。パラメータが指定されないと、 radstate は実行されません。 radstate は、IDMSYS ディレクトリにインストールされている必要があります。指定する必要があるのは radstate のパラメータのみです。 radstate の実行ファイルは指定しません。詳細については、 radstate のマニュアルを参照してください。

表 6.5 ~ DIAGS クラスの属性

属性	説明
ZTRACE	<p>[Communication Tracing [Y/S/N]]</p> <p>N を指定すると、通信バッファのトレースが無効になります。デフォルトでは、トレースは無効です。</p> <p>S を指定すると、通信バッファの要約情報がクライアント ログに取り込まれます。この要約情報には、読み出し/書き込みが行われたレコードの数や処理されたレコードのタイプが含まれています。</p> <p>Y を指定すると、通信バッファの詳細情報がクライアント ログに取り込まれます。クライアント ログ ファイルには、送受信されたすべてのデータが反映されます。</p> <p>警告: ZTRACE に Y を指定すると、サイズの非常に大きなログが生成され、クライアントのパフォーマンスに深刻な影響を与えることがあります。テクニカル サポートからの指示がない限り、ZTRACE に Y を指定しないでください。</p>
ZTRACEL	<p>[Trace level (000/040/999)]</p> <p>トレース レベルを指定します。属性値を指定しない場合は、既存の値を使用します。</p> <p>警告: ZTRACEL に指定する値が大きいと、サイズの非常に大きなログが生成され、クライアントのパフォーマンスに深刻な影響を与えることがあります。テクニカル サポートからの指示がない限り、大きな値は設定しないでください。</p>

ハードウェア スキャン オプション (RADHWCFG)

CLIENT ドメインにある RADHWCFG クラスのインスタンスを使用すると、クライアント デバイス上で実行するハードウェア スキャンのタイプが指定できます。ハードウェア スキャン情報は、ZCONFIG オブジェクトにレポートされます。ハードウェア スキャン オプションを実装するには、RADHWCFG クラスのインスタンスを LOCATION クラスのインスタンスに接続する必要があります。

注意

RADHWCFG クラスを使用するには、クライアント オペレーション プロファイルを有効にする必要があります。RADHWCFG クラスを使用するにあたっては、まずこのクラス内の属性をすべて持つ RADHWCFG オブジェクトを試験的にクライアント デバイス上へ作成します。その上で、各属性に Y や N を指定して、ZCONFIG オブジェクトでの結果を確認することをお勧めします。

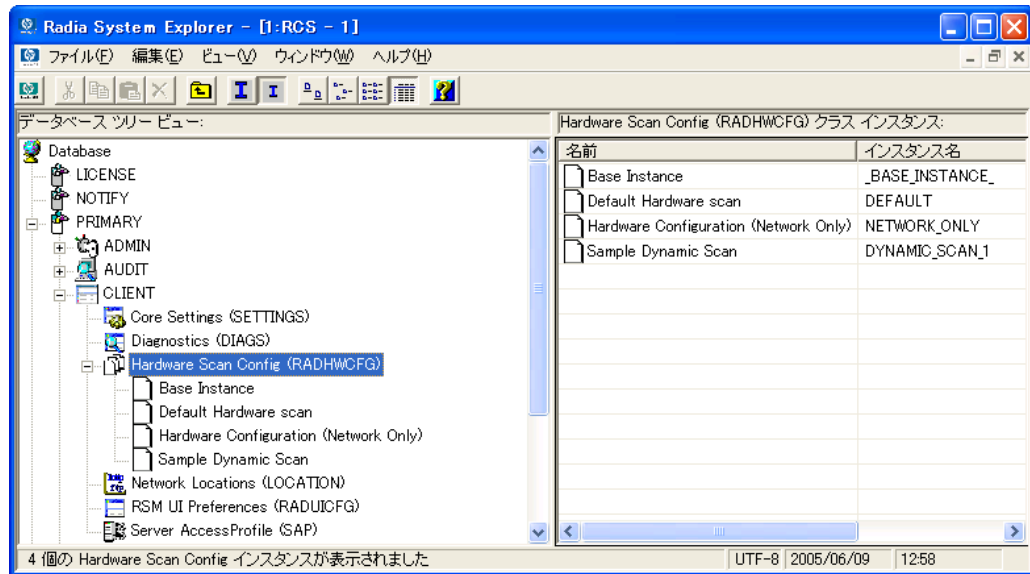


図 6.8 ~ RADHWCFG クラスのサンプル インスタンスの表示

RADHWCFG クラスには、4 つのサンプル インスタンスが用意されています。

- **[Base Instance]**
ベース インスタンスのコピーを作成すれば、それを基にして独自のハードウェア スキャン オプションを作成することができます。
- **[Default Hardware Scan]**
このインスタンスを使用すると、要求頻度の最も高い情報をスキャンすることができます。
- **[Hardware Configuration (Network Only)]**
このインスタンスを使用すると、スキャンの対象をネットワーク情報に限定することができます。
- **[Sample Dynamic Scan]**
このインスタンスは、ダイナミック スキャン変数を使ったスキャンのサンプルです。

下の表は、実行可能な各ハードウェア スキャンの詳細をまとめたものです。スキャン結果として収集可能な ZCONFIG の属性の例も記載されています。

注意

スキャン結果として収集される属性は、ハードウェア設定の内容によって異なります。たとえば、スキャン対象のクライアント デバイスにプリンタが 1 台しか接続されていない場合、ZCONFIG にレポートされるのは ZHDWPA0n 属性のみです。

表 6.6 ~ RADHWCFG クラスの属性

属性	説明
NAME	[Friendly Name] インスタンスの簡略名を指定します。
CPU	[CPU [Y/N]] Y を指定すると、CPU 情報がスキャンできます。 ZCONFIG の属性: ZHDWBIOS、ZHDWCOMP、ZHDWCPU、ZHDWCPUN、ZHDWCPUS、ZHDWFPU、ZHDWXPAG、ZHWCPU01、ZHDFPU01
OS	[OS [Y/N]] Y を指定すると、オペレーティング システム情報がスキャンできます。 ZCONFIG の属性: REBOOTD、REBOOTT、WTSSVR、ZHDWLANG、ZHDWOS、ZHDWOSDB、ZHDWOSOG、ZHDWOSOW、ZHDWSVCP
MEMORY	[Memory [Y/N]] Y を指定すると、メモリ情報がスキャンできます。 ZCONFIG の属性: ZHDWMEM、ZHDWMEMF
HDLOCAL	[Local Drives [Y/N]] Y を指定すると、内部ハード ドライブがスキャンできます。 ZCONFIG の属性: ZHDWCDDR、ZHDWD00、ZHDW00C、ZHDWD00F、ZHDWD00S、ZHDW00T、ZHDWD01、ZHDW01C、ZHDWDF_A、ZHDWDLST、ZHDWDNUM
HDREMOTE	[Remote Drives [Y/N]] Y を指定すると、外部ハード ドライブがスキャンできます。 ZCONFIG の属性: ZHDW00、ZHDWD00C、ZHDWD00F、ZHDW00S、ZHDW00T、ZHDWDLST、ZHDWDNUM
NETWORK	[Network [Y/N]] Y を指定すると、ネットワーク情報がスキャンできます。 ZCONFIG の属性: GATEWY01、IPADDR01、LADAPT01、NETLOC01、SUBNET01、ZGATEWAY、ZHDWIPAD、ZHDWLANA、ZHDWNET1、ZHDWNNET、ZNETLOC、ZSUBNET
PERIPHER	[Peripherals [Y/N]] Y を指定すると、キーボードやマウスなどの周辺機器がスキャンできます。 ZCONFIG の属性: ZHDWKYBD、ZHDWMOUS、ZHDWPPAR、ZHDWPSE、ZHDWVDO、ZHDWVRES
PRINTER	[Printers [Y/N]] Y を指定するとプリンタがスキャンできます。 ZCONFIG の属性: ZHDWPA00、ZHDWPA01、ZHDWPPRN

表 6.6 ~ RADHWCFG クラスの属性

属性	説明
HAL_VER	[HAL Statistics [Y/N]] Y を指定すると HAL (Hardware Abstract Layer) のバージョンがスキャンできます。 ZCONFIG の属性: HALCOMP、HALDATE、HALFNAME、HALFVER、HALINAME、HALLANG、HALPNAME、HALPVER、HALSIZE。
APP_VER	[Application Version [Y/N]] Y を指定すると、MSI (ZHDWVMSI) および IE (ZHDWVIE) の各バージョンがスキャンできます。
WMISCAN	[Use WMI to collect data [Y/N]] Y を指定すると、WMI (Windows Management Instrumentation) を使用したスキャンが実行できます。
DSCAN00n	[Dynamic Scan 00n] Y を指定すると、ダイナミック スキャン変数が使用できます。下の「ダイナミック スキャン」を参照してください。

ダイナミック スキャン

ダイナミック スキャン (DSCAN00n) インスタンスを使用すれば、あらかじめ用意されているスキャン タイプにない独自のスキャン タイプを作成することができます。ダイナミック スキャン インスタンスには、WMI、レジストリ、ファイルの 3 種類があります。ダイナミック スキャンには `VariableName = Type(Parm1, Parm2, ...)` というフォーマットが使用されます。VariableName には、収集した情報をレポートする ZCONFIG の属性、Type には WMI、レジストリ、またはファイルに対応する文字列、各 Parmn には情報のクエリがそれぞれ代入されます。以下に、3 種類のそれぞれについて例を示します。

例 1: WMI

WMI スキャンには、`VariableName = WMI(WQL 文, プロパティ, デフォルト)` というフォーマットが使用されます。WMI を使用してクライアント デバイスのモデルを収集するには、次のような DSCAN000 変数を作成します。

```
HWMODEL=WMI("Select * from Win32_ComputerSystem"; Model; NONE)
```

このスキャンでは、ZCONFIG.HWMODEL という変数が作成され、そこにクライアント デバイスのモデルが格納されます。

例 2: レジストリ

レジストリ キーをスキャンして **Adobe 5.0** のインストールされている場所を特定するには、次のような **DSCAN001** 変数を作成します。

```
ADOBEPTH=REG(HKLM¥SOFTWARE¥Adobe¥Acrobat_Reader¥5.0¥InstallPath)
```

収集された結果は、**ZCONFIG.ADOBEPTH** にレポートイングされます。

注意

「デフォルト」のレジストリ値をスキャンする場合、そのレジストリ キーへのパスの末尾には必ずバックスラッシュを付けるようにします。たとえば、**Installer** キーのデフォルト値を読み込むには、次のように入力します。

```
ADOBEPTH=REG("HKLM¥SOFTWARE¥Adobe¥Acrobat Reader¥6.0¥Installer¥")
```

また **Installer** キーの **Path** 値を読み込むには、次のように入力します。

```
ADOBEPTH=REG("HKLM¥SOFTWARE¥Adobe¥Acrobat Reader¥6.0¥Installer¥Path")
```

例 3: ファイル

ダイナミック ファイル スキャンで収集される情報は、サイズ (**SIZE**)、日付スタンプ (**DATE**)、ファイルバージョン (**FVER**)、製品バージョン (**PVER**)、およびタイム スタンプ (**TIME**) です。また、これらのプロパティを任意に組み合わせてスキャンを実行することもできます。**C:¥temp¥test.exe** というファイルをスキャンするには、次のように **DSCAN002** 変数を作成します。

```
TEST####=FILE(c:¥Temp¥Test.exe;SIZE,DATE,FVER,PVER,TIME)
```

には、対応するファイルのプロパティ名が代入されます。**ZCONFIG** オブジェクトには、スキャンしたファイルのプロパティごとに属性が 1 つ作成されます。この例では、**C:¥temp¥test.exe** ファイルから収集された情報に基づいて、**ZCONFIG.TESTSIZE**、**ZCONFIG.TESTDATE**、**ZCONFIG.TESTFVER**、**ZCONFIG.TESTPVER**、**ZCONFIG.TESTTIME** という 5 つの変数が作成されます。

ユーザー インターフェイス プロパティを設定する (RADUICFG)

RADUICFG クラスを使用すると、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスに関するさまざまな設定を行うことができます。ただし、Radia Software Manager クライアントのライセンスを保有している必要があります。ハードウェア スキャン オプションを実装するには、RADUICFG クラスのインスタンスを LOCATION クラスのインスタンスに接続します。

注意

このクラスを使用するには、ライセンスを取得した上で Radia Software Manager をインストールしておく必要があります。



図 6.9 ~ Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの表示

表 6.7 ~ RADUICFG クラスの属性

属性	説明
PNLOUTBR	[Display Outbar [Y/N]] Y を指定すると Radia バーが表示されます。Radia バーはパネルの左端に配置され、ここからすべてのインターフェイスにアクセスできます。
BNHOME	[Display Home Button [Y/N]] Y を指定すると Radia バー上に [ホーム] ボタンが表示されます。
BNMYSOFT	[Display My Software [Y/N]] Y を指定すると Radia バー上に [ソフトウェア] ボタンが表示されます。
BNPREFER	[Display Preferences [Y/N]] Y を指定すると Radia バー上に [設定] ボタンが表示されます。
BNBNDWTH	[Display Bandwidth [Y/N]] Y を指定すると Radia バー上に [バンド幅] ボタンが表示されます。
BNHISTRY	[Display History [Y/N]] Y を指定すると Radia バー上に [履歴] ボタンが表示されます。
BNSTATUS	[Display Status [Y/N]] Y を指定すると Radia バー上に [ステータス] ボタンが表示されます。
SHWMENUS	[Show Menus [Y/N/U]] U を指定すると、ユーザーがメニュー バーの外観が自由に変更できるようになります。Y を指定するとメニュー バーが使用可能になり、N を指定すると使用できなくなります。またいずれの場合も、メニュー バーの外観をユーザーが変更することはできません。
SHWCATLG	[Show Catalog [Y/N/U]] U を指定すると、ユーザーがカタログ リストの外観が自由に変更できるようになります。Y を指定するとカタログ リストが使用可能になり、N を指定すると使用できなくなります。またいずれの場合も、カタログ リストの外観をユーザーが変更することはできません。
STRTCHNG	[Startup param modifications [Y/N]] Y を指定すると、ユーザーが [設定] の [全般オプション] 内にある起動パラメータが修正できるようになります。N を指定した場合は、ユーザーが起動パラメータを修正することはできません。
STRFILE	[Startup parameter filename] [設定] の [全般オプション] に表示される起動パラメータ ファイルのファイル名を指定します。
STRUPMSG	[Warn if Startup file changes [Y/N]] Y を指定すると、起動パラメータ ファイルの内容が変更された際、ユーザーに対して警告メッセージが表示されます。
ASKOFFL	[Prompt for offline mode [Y/N/U]] U を指定すると、Radia Software Manager をオフラインで使用する際、メッセージを表示するかどうかユーザーが指定できるようになります。Y を指定するとメッセージは表示され、N を指定すると表示されません。またいずれの場合も、ユーザーがメッセージの表示/非表示を指定することはできません。

表 6.7 ~ RADUICFG クラスの属性

属性	説明
BWSTRTUP	[Show BW Control on Startup [A/Y/N]] A に設定すると、バンド幅設定を持つサービスを処理する際、バンド幅設定用の画面が自動的に表示されます。Y に設定すると、処理するサービスがバンド幅設定を持つかどうかにかかわらずバンド幅設定用の画面が表示され、N に設定すると表示されません。
COLORSET	[Colors [SYSTEM/DEFAULT/CUSTOM/USER]] オペレーティング システムの色を使用する場合は SYSTEM、Radia のデフォルトのカラー スキームを使用する場合は DEFAULT を選択します。また、COLORSEL、COLORBAK、COLORBTN、および COLORWK を使用する場合は、CUSTOM を選択します。SYSTEM、DEFAULT、または CUSTOM を選択した場合は、ユーザーが色を変更することはできません。ユーザーが色を変更できるようにするには、USER を選択します。
COLORSEL	[Specify RGB or actual Color Select] 選択領域の色を指定します。指定可能な色については、Microsoft の Web サイトを参照してください。
COLORBAK	[Specify RGB or actual Color Back] インターフェイスの背景色を指定します。指定可能な色については、Microsoft の Web サイトを参照してください。
COLORBTN	[Specify RGB or actual Color Button] ボタンの色を指定します。指定可能な色については、Microsoft の Web サイトを参照してください。
COLORWK	[Specify RGB or actual Color WorkAr] 作業領域の色を指定します。指定可能な色については、Microsoft の Web サイトを参照してください。
STATSTRT	[Status window on startup [Y/N]] Y に設定すると、起動時にステータス ウィンドウが表示されます。
CUSTIMG	[Custom Image File or RSM Banner] カスタム イメージ ファイルまたはバナーを指定します。使用可能なファイル タイプは、JPG/JPEG、GIF、TIF、および BMP です。ピクセル サイズの上限は、縦 60、横 250 が目安です。ファイルのパスが指定されていない場合は、IDMLIB (<System Drive:>%Program Files%Novadigm%Lib) がデフォルトとして指定されます。
CUSTURL	[Custom URL on RSM Banner] サブスクライバが CUSTIMG をクリックした際、クライアント コンピュータのデフォルトのインターネット ブラウザに表示されるページの URL を指定します。
CUSTTEXT	[Custom Hover Text on RSM Banner] クライアント コンピュータにおいて、CUSTOMIMAGE の上にマウス カーソルを重ねた時に表示されるテキストを指定します。
CUSTTITLE	[Custom Title on RSM Banner] Radia Software Manager のタイトル バーに表示するテキストを指定します。

表 6.7 ~ RADUICFG クラスの属性

属性	説明
COLTYPE	[Columns [Forced/Required]] Forced に設定すると、COLNAMES に指定したカラムだけを表示することができます。少なくとも COLNAMES に指定したカラムが表示されれば十分な場合は、Required に設定します。[名前] および [ステータス] は必ず表示されます。
COLNAMES	[Name of Columns (CSV format)] 表示するカラムを指定します。各カラムはカンマで区切ります。
EXPSITEM	[Expand Active Service item [Y/N/U]] U を指定すると、サービス リストのアクティブなアイテムを展開するかどうかをユーザーが指定できるようになります。Y を指定すると、ユーザーはサービス リストのアクティブなアイテムが展開できるようになり、N を指定すると、サービス リストのアクティブなアイテムをユーザーが展開することはできなくなります。
EXPCITEM	[Expand Active Catalog Item [Y/N/U]] U を指定すると、カタログのアクティブなアイテムを展開するかどうかをユーザーが指定できるようになります。Y を指定すると、ユーザーはカタログのアクティブなアイテムを展開することができるようになり、N を指定すると、カタログのアクティブなアイテムをユーザーが展開することはできなくなります。
SHWGRID	[Show Grid Lines [Y/N/U]] U を指定すると、グリッド線の表示/非表示をユーザーが指定できるようになります。Y を指定すると、グリッド線は表示され、N を指定すると非表示になります。
SHWADVOP	[Show Advanced Options [Y/N/U]] U を指定すると、[詳細オプション] の表示/非表示をユーザーが指定できるようになります。Y を指定すると、[ダウンロードのみ] ボタン、[再設定] ボタン、[元に戻す] ボタンなどの [詳細オプション] は表示され、N を指定すると非表示になります。
PROXYUSE	[Use Proxy Server [Y/N/U]] U を指定すると、インターネット プロキシを使用するかどうかをユーザーが指定することができるようになります。Y を指定するとインターネット プロキシは常に使用され、N を指定すると使用されません。またいずれの場合も、ユーザーがインターネット プロキシを使用するかどうかを指定することはできません。
PROXYDSC	[Discover proxy address [Y/N/U]] U を指定すると、インターネット プロキシの検出を行うかどうかをユーザーが指定することができるようになります。Y を指定するとプロキシ検出が行われ、N を指定するとプロキシ検出は行われません。またいずれの場合も、ユーザーがプロキシ検出を行うかどうかを指定することはできません。
PROXYADD	[Proxy Server Address] インターネット プロキシ サーバーのアドレスを指定します。
PROXYPRT	[Proxy server Port] インターネット プロキシ サーバーのポートを指定します。
BTNINST	[Enable Install Button[Y/N]] Y を指定すると [インストール] ボタンが有効になります。
BTNUPTD	[Enable Update Button [Y/N]] Y を指定すると [更新] ボタンが有効になります。

表 6.7 ~ RADUICFG クラスの属性

属性	説明
BTNDWLD	[Enable Download Button [Y/N]] Y を指定すると [ダウンロード] ボタンが有効になります。
BTNRECFG	[Enable Reconfigure Button [Y/N]] Y を指定すると [再設定] ボタンが有効になります。
BTNUNDO	[Enable Undo Button [Y/N]] Y を指定すると [元に戻す] ボタンが有効になります。
BTNVRFY	[Enable Verify Button [Y/N]] Y を指定すると [検証] ボタンが有効になります。
BTNREPR	[Enable Repair Button [Y/N]] Y を指定すると [修復] ボタンが有効になります。
BTNDEL	[Enable Delete Button [Y/N]] Y を指定すると [削除] ボタンが有効になります。
BTNCANCL	[Enable Cancel Button [Y/N]] Y を指定すると [キャンセル] ボタンが有効になります。
BTNPAUSE	[Enable Pause Button [Y/N]] Y を指定すると [停止] ボタンが有効になります。
SHWCOLEX	[Show Expand/Collapse Button [Y/N]] Y を指定すると [インストール] ボタンが表示されます。
SHWINFO	[Show/Hide Extended Info [Y/N]] Y を指定すると、サービス アイテムが展開された際 [Extended Info] ボタンが表示されます。
SHWSCHEV	[Show/Hide Scheduled Event [Y/N]] Y を指定すると、サービス アイテムが展開された際 [Scheduled Event] ボタンが表示されます。このボタンは、時計を図案化したものです。
TMNUTXT0 <i>n</i>	[RadTray Menu Text <i>n</i>] Radia システム トレイのカスタム メニュー アイテムを作成する際に使用します。このメニューは、[Radia システム トレイ] アイコンを右クリックすると表示されます。セパレータ バーを作成する場合、メニュー テキストとして SEPARATOR と入力します。
TCMDTXT0 <i>n</i>	[RadTray Menu Command <i>n</i>] Radia システム トレイのカスタム メニュー アイテムを作成する際に使用します。この属性には、Radia システム トレイ上で TMNUTXT <i>n</i> がクリックされた時に実行するコマンドを指定します。このコマンドは、IDMSYS ディレクトリから実行します。
NAME	[Friendly Name] インスタンスの簡略名を指定します。

クライアント オペレーション プロファイルの例

ここでは簡単な具体例を基にして、実際にクライアント オペレーション プロファイルの設定を行います。クライアント コンピュータを最も適切な Radia Configuration Server に接続することが目標です。ネットワーク アドレスに基づいてクライアント コンピュータを Radia Configuration Server に割り当てる作業は、通常の作業においても必要となります。

想定環境

企業内のネットワークが EAST と WEST という 2 つの地域に分割されている場合を想定します。EAST 地域のクライアント コンピュータはすべて、192.111.111.0 のネットワークに属し、WEST 地域のクライアント コンピュータはすべて 193.111.111.0 のネットワークに属しているとします。さらに、Radia Configuration Server が 2 台存在し、EAST 側のプライマリ Radia サーバーが RCS_EAST、WEST 側のプライマリ Radia サーバーが RCS_WEST だとします。

想定環境を基に設定するには

1. RCS_EAST と RCS_WEST のそれぞれに対してサーバー アクセス プロファイル (SAP) インスタンスを 1 つずつ作成します。下の「[図 6.10 ~ Sample_RCS_East の表示](#)」は、SAMPLE_RCS_EAST を表示したものです。

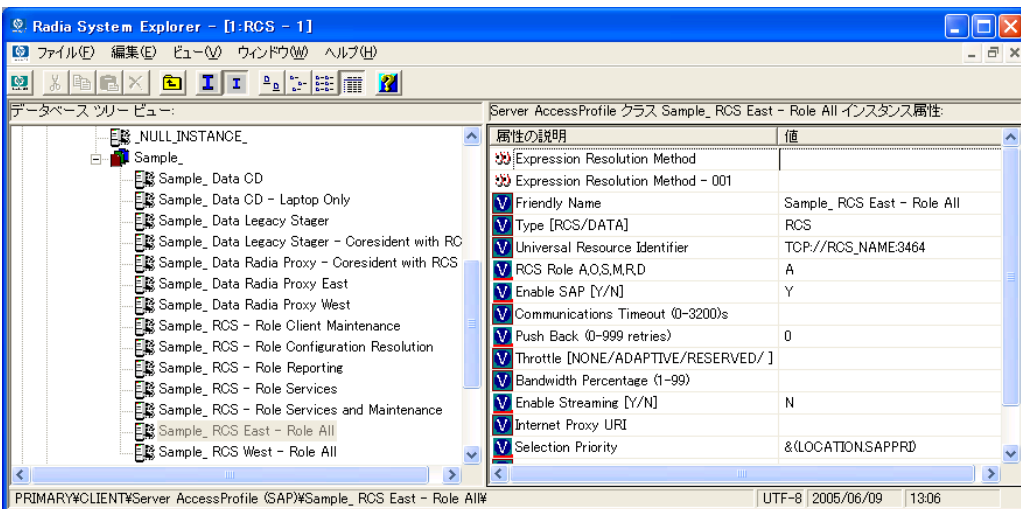


図 6.10 ~ Sample_RCS_East の表示

クライアント オペレーション プロファイルを設定する

Server Access Profile (SAP) クラスでは、TYPE 属性を使用してサーバー タイプ (DATA または RCS) を指定します。この例で設定を行うのは、Radia Configuration Server のみです。したがってどちらのサーバーに対しても、SAP.TYPE を RCS に設定します。

また、各サーバー アクセス プロファイル インスタンスに対して、ロールを設定する必要があります。ここでも便宜上、SAP.ROLE をすべて A に設定します。これにより Radia Configuration Server は、クライアント オペレーション プロファイル、サービス解決、メンテナンス、データダウンロード、レポートिंगのすべてのロールを実行することができます。

必ず値を指定しなければならないのは、URI (Universal Resource Identifier) 属性のみです。それ以外の変数には、必要に応じて値を指定します。

2. EAST と WEST のそれぞれに対して、ロケーション インスタンスを 1 つずつ作成します。

ここでは、192_111_111_0 および 193_111_111_0 という 2 つのロケーション インスタンスを作成し、それぞれに、Sample_Location East、Sample_Location West という簡略名を付けます。下の図には、実際に作成されたインスタンスが表示されています。

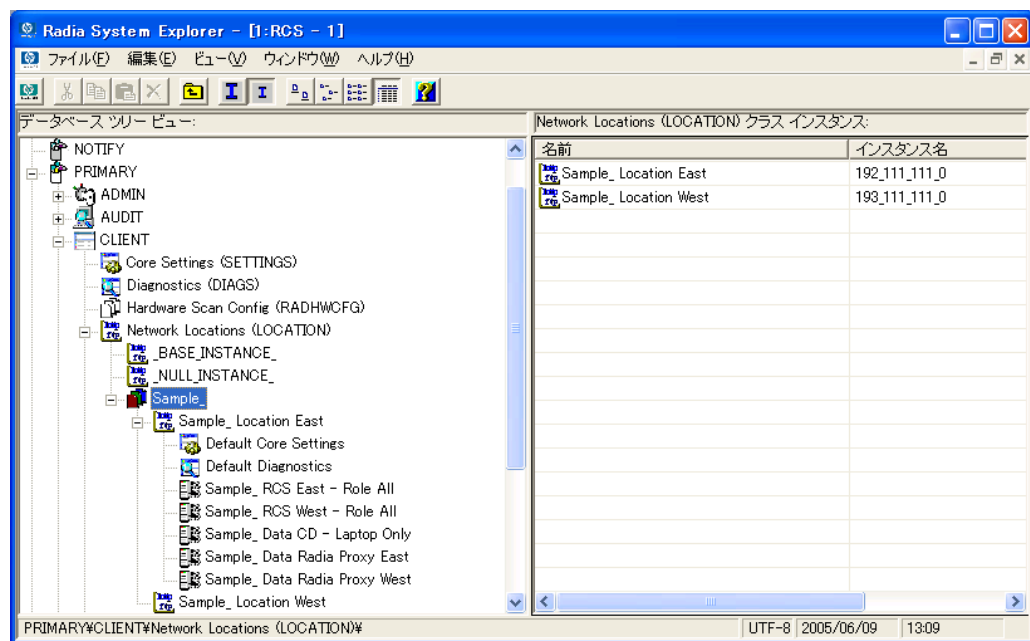


図 6.11 ~ロケーション インスタンス

3. **LOCATION** インスタンスを適切なサーバー アクセス プロファイル (SAP) インスタンスに接続します。
 - **LOCATION.Sample_Location East** インスタンスには、**SAP.Sample_RCS EAST** への接続を定義します。
 - **LOCATION.Sample_Location West** インスタンスには、**SAP.Sample_RCS WEST** への接続を定義します。
4. ここで、次のそれぞれの場合について、**EAST** に属するクライアントの対処方法を検討します。
 - **RCS_EAST** が使用できない場合。対処方法は次のいずれかです。

接続を中止する

または

RCS_WEST への接続を試みる
 - **RCS_EAST** がビジー状態にある (つまり、**Radia Configuration Server** の設定ファイルに定義されているタスク数の上限に達している) 場合。対処方法は次のいずれかです。
 - ◆ 接続が確立されるまで **RCS_EAST** への再試行を繰り返す

または

 - ◆ **RCS_WEST** への接続を試みる

関連概念を理解し、このプロセスに習熟した上で、その他の構成要素をクライアント オペレーション プロファイルに追加する作業に移ります。**TYPE** 属性に **RCS** が指定されたサーバーの設定が完了したら、**TYPE** 属性に **DATA** が指定されたサーバーの設定を行います。さらに、**TYPE** 属性に **RCS** が設定されたサーバーに、それぞれのロールを設定していきます。

まとめ

- クライアント オペレーション プロファイルを使用すると、環境内の冗長性を確保することができます。
- 各サーバーに、それぞれが実行するロールを指定します。
- ネットワーク ロケーションなどの基準に基づいて、クライアント コンピュータを特定のサーバーに割り当てることができます。
- **Radia** データベースやクライアント コンピュータに対してクライアント オペレーション プロファイルを有効にする必要があります。

サービスを準備する

この章は以下を目的としています。

- サービス オプションについて理解する。
- 転送されたパッケージからサービスを作成する方法を習得する。
- クライアント コンピュータを再起動する方法を習得する。
- システム アカウントでサービスをインストールする方法を習得する。
- バージョン化されたアプリケーションの準備に理解する。

サービスを準備する

このマニュアルでは、**Radia Application Manager** の推奨される実装を解説します。方法は組織のニーズに合わせて調整することになりますが、**Radia Application Manager** を包括的に理解するためにこのマニュアルに目を通しておくことをお勧めします。この章では、サービスの準備について説明します。

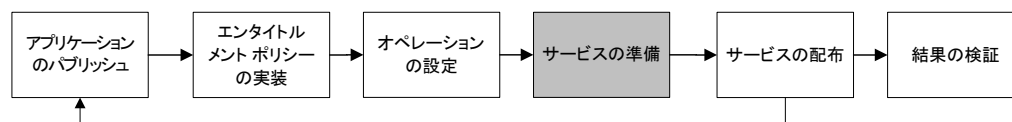


図 7.1 ~ このマニュアルで遂行するタスク

マシン コンテキストおよびユーザー コンテキストでアプリケーションを設定する

企業では、複数のユーザーに対応するようにアプリケーションを設定することが必要な場合や、現在のユーザーに関係なくコンピュータで常に同じアプリケーションが利用できるようにすることが必要な場合があります。マシン コンテキストとユーザー コンテキストでコンポーネントがインストールされる場合、サービスはマルチコンテキストであると見なされます。

注意

この機能は、Radia Application Manager クライアントでのみ利用できます。

マルチコンテキスト サービスのインストールを完了するためには、クライアント コンピュータは **Radia Configuration Server** に 2 回接続する必要があります。1 度はマシン コンポーネントをインストールするため、もう一度はユーザー コンポーネントをインストールするためです。最初にインストールするのは、マシン コンポーネントです。マシン部分が正常に完了しないと、ユーザー コンポーネントはインストールされません。マシン部分は、通知またはタイマーで起動できます。ユーザー部分は、そのユーザーにとってローカルのログオン スクリプト、デスクトップ ショートカット、またはバッチ ファイルに埋め込む必要があります。

マシン インストールまたはユーザー インストール向けにサービスを設定するには、以下の手順を行います。

1. **Radia Publisher** を使用してパッケージ コンポーネントがユーザー コンテキストとマシン コンテキストのどちらでインストールされるのかを指定するか、**Radia System Explorer** を使用してコンポーネントのコンテキストを指定します。
2. **Radia System Explorer** を使用して、システム コンテキストまたはユーザー コンテキストのいずれかで配布されるようにサービスを設定します。
3. **Radia System Explorer** を使用して、サービスの配布方法を設定します。

コンポーネントのコンテキストを設定する (ZCONTEXT)

Radia Publisher を使用すると、マシン コンポーネントとユーザー コンポーネントが別々に選択できます。パブリッシュ プロセスの過程で **Radia Publisher** を使用するか、パブリッシュ プロセスの後に **Radia System Explorer** を使用して、コンポーネントのコンテキストを設定します。

注意

マシン コンテキストとユーザー コンテキストを活用するには、以前にパッケージ化されているアプリケーションをパッケージ化し直す必要があります。

Radia Publisher でコンポーネントのコンテキストを設定するには

1. ファイルまたはディレクトリを右クリックして、**[プロパティを設定]** をクリックします。
[インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスが表示されます。

サービスを準備する

2. [クライアント管理] タブで、コンポーネントの適切なコンテキストを選択します。下の「図 7.1」および 296 ページの「表 7.1」を参照してください。

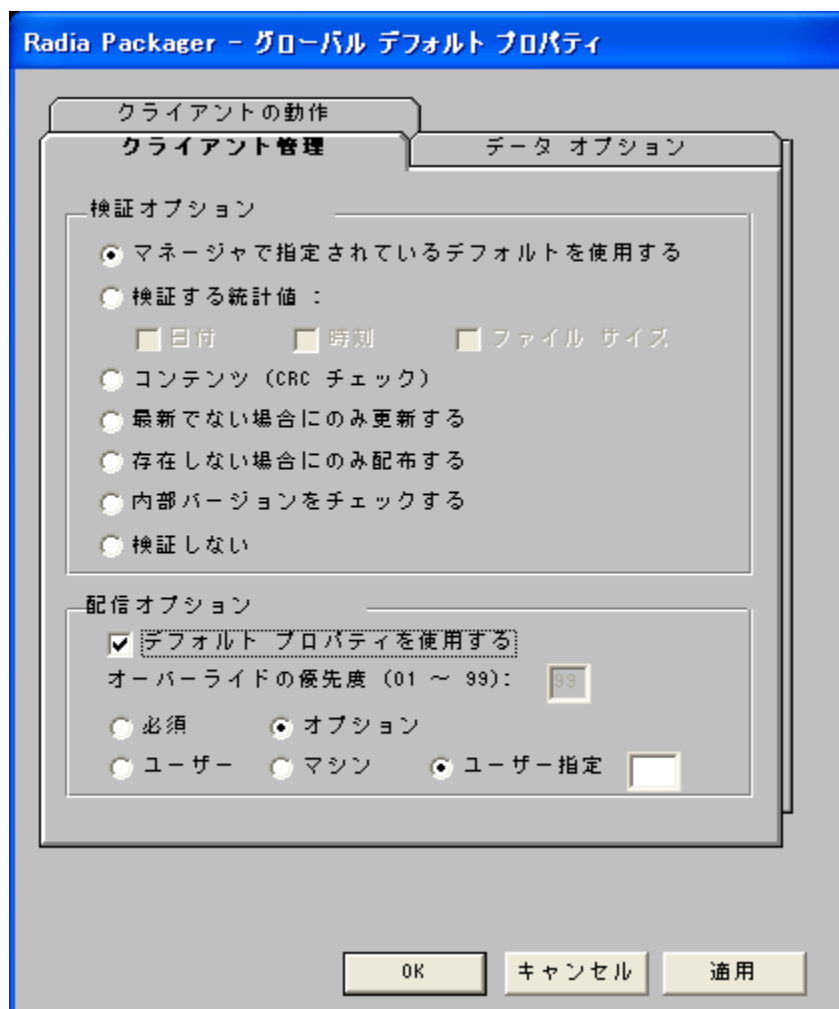


図 7.1 ~ [インスタンスのプロパティ] - [クライアント管理] タブ

パブリッシュ プロセスが既に完了している場合は、Radia System Explorer を使用してコンポーネントのインスタンスの ZCONTEXT 属性を設定してください。

Radia System Explorer でコンテキストを設定するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力して、[OK] をクリックします。
[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. [SOFTWARE] をダブルクリックします。
5. [Application Packages (PACKAGE)] をダブルクリックします。
6. コンポーネントのクラスをダブルクリックします。
7. コンポーネントをダブルクリックします。

サービスを準備する

8. [ZCONTEXT] をダブルクリックします。

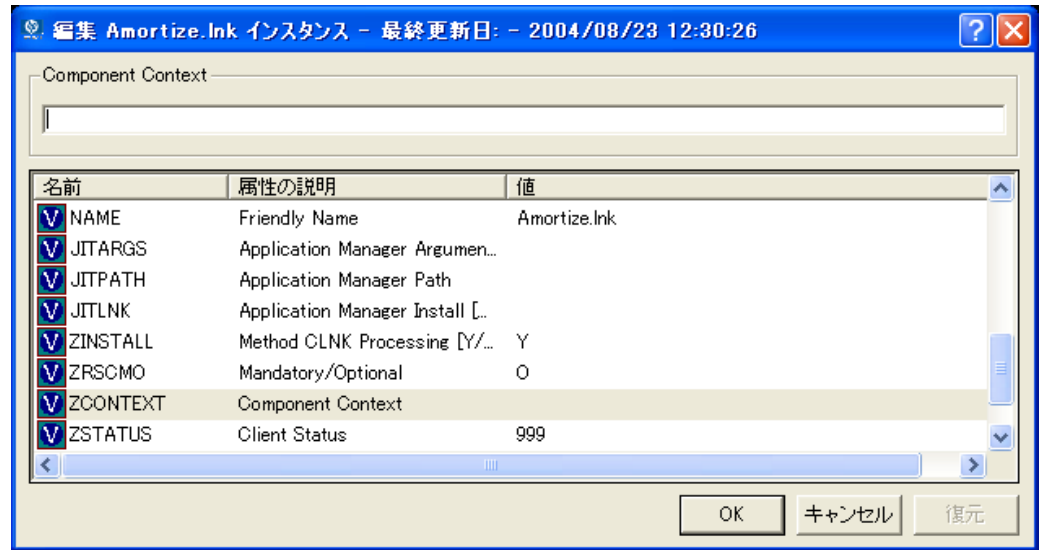


図 7.2 ~ ZCONTEXT 属性の編集

9. 下の「表 7.1」に基づいて適切な値を入力します。

表 7.1 ~ コンポーネント コンテキスト (ZCONTEXT) のオプション	
設定	説明
空白	コンポーネントをコンテキストに依存させない場合は、ZCONTEXT を空白のままにします。このコンポーネントは、マシン接続とユーザー接続の両方でインストールされます。
U	アプリケーションが最初に配布される際にログオンしているサブスクライバにだけこのコンポーネントが配布されるようにする場合は、U を入力します。
M	コンピュータのすべてのユーザーにファイルを配布する場合は、M を入力します。
ユーザー指定	このオプションは、現時点では利用できません。

10. **[OK]** をクリックして、変更を完了します。

11. **[はい]** をクリックして変更を確定し、Radia System Explorer に戻ります。

注意

通常、コンポーネントは、その ZCONTEXT 属性が radskman コマンド ラインのコンテキスト パラメータの値と一致する場合、または ZCONTEXT 属性が空白の場合に処理されます。

これでコンポーネントのコンテキストが設定されたので、アプリケーションの ZSERVICE インスタンスがマシン コンポーネントとユーザー コンポーネントの両方を持つように指定する必要があります。

サービスのモードを設定する (ZSVCMODE)

ZSERVICE クラスの ZSVCMODE 属性は、マシン コンテキストまたはユーザー コンテキストがパッケージの配布と関連するかどうかを決めるために使用します。ZSVCMODE 属性を作成する必要がある場合は、それを ZSERVICE クラスのクラス テンプレートに追加します。ZSVCMODE 属性は、長さ 3 の変数として作成します。その他のデフォルトのプロパティはそのまま使用します。有効な値は、**M**、**U**、**MU**、空白、および **EMU** です。

警告

クラス テンプレートで変更を行う前に、Radia データベースのバックアップを取っておくことをお勧めします。

表 7.2 ~ ZSERVICE クラスの ZSVCMODE の値

値	説明
空白	クライアントがマシン コンテキストとユーザー コンテキストのどちらでログオンしているのかに関係なくコンポーネントをインストールする場合は、空白にします。アプリケーションは、利用可能なコンテキストを使用してのみインストールされます。
EMU	拡張マシン/ユーザー サービス。 クライアント接続がユーザー コンテキストで行われているが、アプリケーションのマシン側がまだインストールされていない場合には、マシン接続が強制されます。マシン接続が正常に完了した後は、ユーザー コンポーネントをインストールするためにユーザー接続が開始されます。 この設定は、ユーザーが Radia Software Manager を使用して管理するオプションのアプリケーションで使用します。

表 7.2 ~ ZSERVICE クラスの ZSVCMODE の値

値	説明
EMU:AD=N	<p>拡張マシン/ユーザー サービス。</p> <p>クライアント接続がユーザー コンテキストで行われているが、アプリケーションのマシン側がまだインストールされていない場合には、マシン接続が強制されます。マシン接続が完了した後は、ユーザー コンポーネントをインストールするためにユーザー接続が開始されます。</p> <p>この設定は、ユーザーが Radia Software Manager を使用して管理する共有コンピュータ上のオプション アプリケーションで使用します。AD=N を追加すると、ユーザーはアプリケーションのマシン コンポーネントを削除することができません。クライアント コンピュータの他のユーザーは、アプリケーションのマシン コンポーネントを依然として必要としている可能性があります。設定できるアプリケーションのイベントは以下のとおりです。</p> <p>AI = アプリケーションのインストール AD = アプリケーションの削除 AU = アプリケーションの更新 AR = アプリケーションの修復 VA = バージョンのアクティブ化 VD = バージョンの非アクティブ化</p> <p>各イベントのデフォルトは Y です。複数のイベントはカンマで区切ります。</p>
M	<p>マシン サービスのみ。</p> <p>サービスにマシン コンポーネントしかない場合は ZSVCMODE を M に設定します。radskman コマンド ラインでコンテキストが u に設定されている場合、このサービスは無視されます。</p>
MU	<p>マシン サービスとユーザー サービス。</p> <p>サービスにマシン コンポーネントとユーザー コンポーネントの両方がある場合は ZSVCMODE を MU に設定します。ユーザー接続では、ユーザー コンポーネントのインストール前にマシン コンポーネントが既にインストールされているかどうかを確認されます。マシン コンポーネントが存在しない場合、ユーザー コンポーネントはインストールされません。</p>

ZSERVICE の ZSVCMODE を設定するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力して、[OK] をクリックします。

3. **[Radia System Explorer]** ウィンドウが表示されます。
4. **[PRIMARY]** をダブルクリックします。
5. **[SOFTWARE]** をダブルクリックします。
6. **[Application (ZSERVICE)]** をダブルクリックします。
7. 適切なサービスをダブルクリックします。
8. リスト ビューで **[ZSVCMODE]** をダブルクリックします。
9. 297 ページの「表 7.2」の値に基づいて適切な値を入力します。
10. **[OK]** をクリックして、変更を完了します。
11. **[はい]** をクリックして変更を確定し、**Radia System Explorer** に戻ります。

Radia Software Manager の拡張マシン/ユーザー サービス

アプリケーションにマシン コンポーネントとユーザー コンポーネントがある場合、**Radia Software Manager** クライアントはクライアント デバイスで詳細な権限がないとマシン コンポーネントが正しくインストールできず、ユーザー コンポーネントはユーザーがログオンしていないとユーザーの設定にアクセスできません。マシン コンポーネントはファイルまたはレジストリ キー、ユーザー コンポーネントはデスクトップ ショートカットである場合があります。コンテキストが **U** に設定されている場合、サブスクリバはアプリケーションのマシン側がインストールできず、ユーザー接続は失敗します。**ZSVCMODE** を **EMU** に設定すると、サブスクリバがインストールするアプリケーションを選択した場合に、マシン コンポーネントが既にインストールされているかどうかをクライアントが確認します。インストールされていない場合、**Radia Software Manager** はそのサービスのマシン コンポーネントのみをインストールし、それからユーザー コンポーネントをインストールします。つまり、マシン コンテキストとユーザー コンテキストで 1 度ずつ、2 回の別々のクライアント接続が実行されるということです。**args.xml** ファイルで **CONTEXT** タグを **U** に設定すると、**EMU** の動作が強制的に行われます。

注意

ZSVCMODE は 3 バイトに変更する必要があるため、**EMU** が選択肢の 1 つでなければなりません。

ZSERVICE.ZSVCMODE を EMU に設定した場合、EMU として設定されているサービスが見つかり、Radia Software Manager クライアントはまずマシン カタログが存在するかどうか、および要求されたサービスがマシン カタログにあるかどうかを確認します。

- サービスが存在し、マシン カタログでインストール済みとされている場合は、そのサービスがユーザー向けにインストールされます。
- サービスがマシン側でインストールされていないが、カタログは同期されている場合、クライアントはまずサービスのマシン側をインストールし、それからサービスのユーザー要素をインストールします。
- (マシン接続が実行されていないために) マシン カタログがない場合、クライアントはマシン カタログを取得し、マシン側でサービスをインストールします。サービスがマシン側で正常にインストールされると、サービスのユーザー側がインストールされます。

マシン/ユーザー サービスを配布する

クライアントは Radia Configuration Server に 2 回接続しないと、ZSVCMODE が MU に設定されているサービスのインストールが完了できません。最初の接続は、マシン コンテキストで行われます。**radskman** コマンド ラインで、パラメータ **context=M** を追加してください。その結果として、デフォルトで **startdir=SYSTEM** が設定されます。これは、タイマーまたは通知コマンドを使用して行います。**radskman** コマンド ラインを作成する方法については、「コマンド ラインを指定する」370 ページの を参照してください。

2 回目の接続では、ユーザー コンポーネントがインストールされます。ユーザーがログオンしている必要があるため、これはログオン スクリプト、バッチ ファイル、またはデスクトップ アイコンで行います。パラメータ **context=U** が追加されている **radskman** コマンド ラインを使用します。ZSVCMODE が MU に設定されている場合、ユーザー コンポーネントはマシン接続が正常に終了している場合のみインストールされます。

Radia サービス グループ

Radia では、製品のフル インストールやフル オペレーションを実現するため、複数のサービス パッケージを必要とする製品を管理することができます。製品が他のサービス パッケージを必要としている場合、または他のサービスに依存している場合は、Radia サービス グループを使用することができます。

これには、パッケージ化された MSI 製品も含まれます。この場合は、以下のようなケースが考えられます。

- 複数の MSI サービス パッケージを利用している製品。たとえば、MS Office では、他の言語パック サービスが必要となる場合があります。
- MS Office のように、サイズが大きい製品。製品スイートの一部の機能だけをインストールする場合に備えて、いくつかの小さな下位サービスに分割しなければならない場合があります。

Radia Software Manager のユーザー インターフェイスには、マスター サービスのみが表示されます。

Radia サービス グループの作成方法については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

システム アカウントでサービスをインストールする (ZSYSACCT)

Windows NT、Windows 2000、または Windows XP が動作するコンピュータでは、システム アカウントとユーザー アカウントのどちらでサービスをインストールするのかを指定することができます。そのためには、Application (ZSERVICE) インスタンスの ZSYSACCT 属性を修正します。この属性は、インストールでシステム アカウントを使用するかどうかをサービス単位で指定します。

表 7.3 ~ ZSERVICE 属性:ZSYSACCT

属性	説明
ZSYSACCT	<p>Y に設定すると、アプリケーションがシステム権限でインストールされます。接続のタイプは無視されます。</p> <p>N に設定するか、空白にすると、現在ログオンしているユーザーの権限でアプリケーションがインストールされます。接続のタイプは無視されます。</p> <p>M に設定すると、現在の接続がマシン コンテキスト (context=m) である場合にアプリケーションがシステム アカウントでインストールされます。</p> <p>U に設定すると、現在の接続がユーザー コンテキスト (context=u) である場合にアプリケーションがシステム アカウントでインストールされます。</p> <p>デフォルト: N</p>

Application インスタンスの ZSYSACCT 属性を編集するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、[ユーザー ID] と [パスワード] の入力を行い、[OK] をクリックします。
[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. [SOFTWARE] をダブルクリックします。
5. [Application (ZSERVICE)] をダブルクリックします。

サービスを準備する

6. [Amortize] などの適切なアプリケーション インスタンスをダブルクリックします。
7. リスト ビューに属性が表示されます。

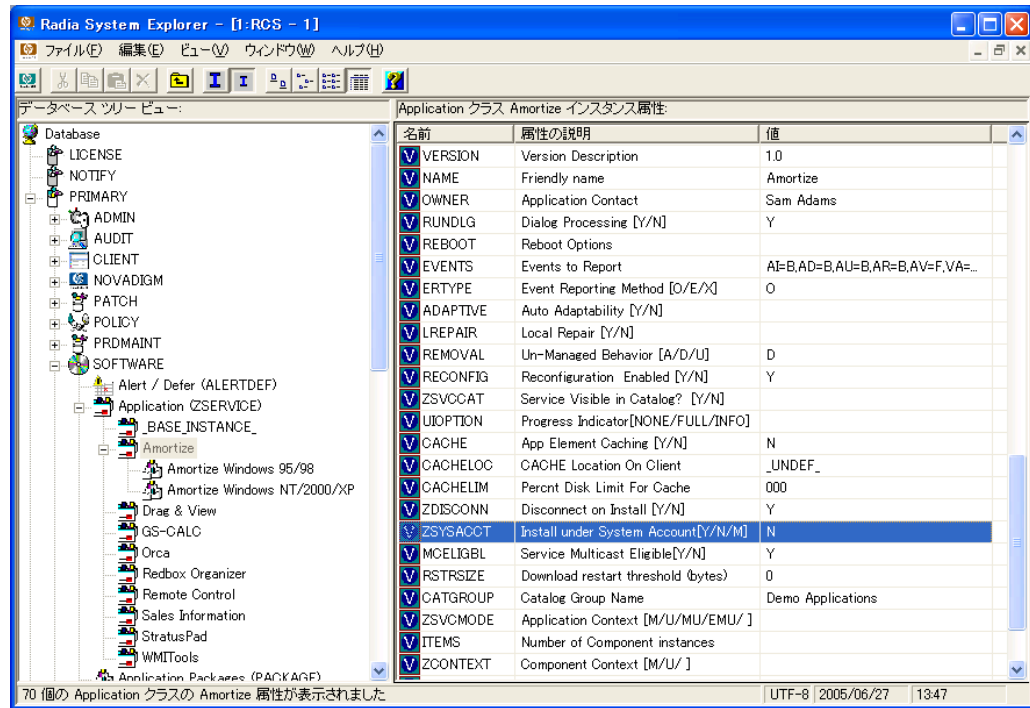


図 7.3 ~ Amortize のインスタンス、ZSYSACCT 属性

8. **[ZSYSACCT]** をダブルクリックします。
[インスタンス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

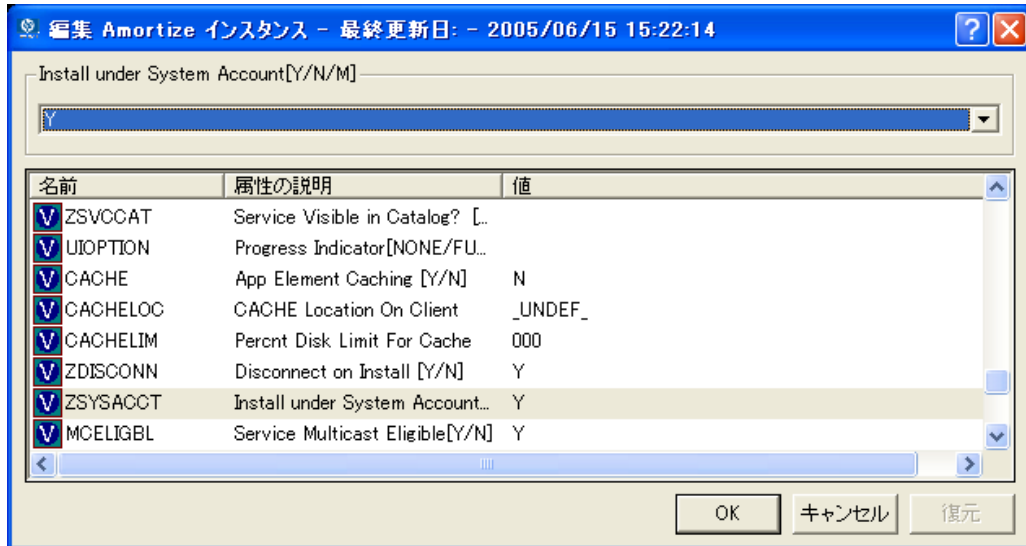


図 7.4 ~ ZSYSACCT 属性が選択されているインスタンス編集ダイアログ ボックス

9. **[Install under System Account]** を選択してシステム権限を使用するか、チェック ボックスをオフにして、ログオンしているユーザーの権限でインストールを行います。
10. **[OK]** をクリックして、[インスタンス編集] ダイアログ ボックスを閉じます。
11. **[はい]** をクリックして、変更を確定します。

ローカルのカタログ処理

ローカルでカタログ処理を行うと、**Radia Configuration Server** のアプリケーション管理に必要なネットワークのバンド幅と接続数が削減されます。タイマーまたは通知コマンドを使用すると、**radskman** コマンド ラインで **context = m** を指定してマシン接続を行うことができます。

注意

アプリケーションの ZSVCMODE 属性が M または MU でないと、この機能は利用できません。

コンピュータに 1 人のユーザーしかいない場合、または 1 台のコンピュータに同じエンタイトルメントの複数のユーザーがいる場合は、ローカルでカタログを処理すれば、サービスのマシン コンポーネントとユーザー コンポーネントの両方で **Radia Configuration Server** に対する接続が 1 度だけで済みます。マシン接続では、必要な設定情報がクライアント コンピュータにダウンロードされ、サービスのマシン コンポーネントとユーザー コンポーネントが圧縮形式でダウンロードされ、マシン コンポーネントがインストールされます。ユーザー接続では、**radskman** コマンド ラインで **cat = m**、**local = y**、および **context = u** を設定します。ユーザー接続が行われると、ユーザーのサービスがマシンのサービス リストに基づいて解決され、既にダウンロードされているリソースが必要に応じて追加、修正、または削除されます。

クライアント コンピュータにエンタイトルメントが異なる複数のユーザーがいる場合は、そのクライアント コンピュータのすべてのユーザーのすべてのサービスのすべてのコンポーネントがダウンロードされるようにマシンごとにポリシーを作成する必要があります。実装については、専門サービスにお問い合わせください。

クライアント コンピュータを再起動する

クライアント コンピュータは、アプリケーション イベントに基づいて再起動することが必要な場合があります。そのためには、**ZSERVICE.REBOOT** 属性でリブート タイプとリブート修飾子を指定します。リブート修飾子では、以下のことができます。

- 警告メッセージのタイプを設定することができます。
- マシン接続かユーザー接続のいずれかでリブートを処理することができます。
- アプリケーション イベントの直後に再起動を行うことができます。

警告

radskman コマンド ラインで **hreboot** パラメータが指定されていない場合、このパラメータはデフォルトでサービス リブートのリクエストを処理する **Y** に設定されます。**hreboot** を **p** に設定すると、クライアント コンピュータはリブートを必要とするサービスがあるかどうかに関係なく電源が切れます。

まず、リブートを必要とするアプリケーション イベントを指定します。表 7.4 ~ リブート イベントとコードでは、発生する可能性のあるすべてのアプリケーション イベントのコードがリストされています。アプリケーション イベント コードを、使用する必要のあるリブート タイプおよびリブート修飾子に設定します。以降の節では、リブートの各タイプとすべてのリブート修飾子を説明します。アプリケーションのインストールや修復に関する警告メッセージなしでアプリケーションのハードリブートを直ちに実行する必要がある場合は、**ZSERVICE.REBOOT** 変数を **AI=HQI, AR=HQI** のように設定します。

注意

リブート属性のパラメータでは、大文字と小文字が区別されません。

表 7.4 ~ リポート イベントとコード ~

アプリケーション イベント	コード	説明
インストール	AI	AI を使用すると、アプリケーションのインストールに際するリポートの動作を指定することができます。デフォルトはリポートなしです。
アンインストール	AD	AD を使用すると、アプリケーションの削除に際するリポートの動作を指定することができます。デフォルトはリポートなしです。
ロック ファイル	AL	AL を使用すると、ロックされたファイルに遭遇したときのリポートの動作を指定することができます。ロック ファイルに遭遇したときのデフォルト動作では、[OK] ボタンだけのハード リポート (HY) が実行されます。
更新	AU	AU を使用すると、アプリケーションの更新に際するリポートの動作を指定することができます。デフォルトはリポートなしです。
修復	AR	AR を使用すると、アプリケーションの修復に際するリポートの動作を指定することができます。デフォルトはリポートなしです。
バージョンのアクティブ化	VA	VA を使用すると、アプリケーションのバージョンのアクティブ化に際するリポートの動作を指定することができます。デフォルトはリポートなしです。

リポートのタイプ

どのアプリケーション イベントでコンピュータをリポートする必要があるのか決まった後は、リポートのタイプを選択する必要があります。Radia は、コンピュータのリポートが必要であることを伝えるメッセージをオペレーティング システムに送信します。リポートには、以下の 3 つのタイプがあります。

- **ハード リポート (H)**
保存されていないファイルが開いているかどうかに関係なく、すべてのアプリケーションが終了します。サブスクリバは、開いて修正されているファイルの保存を促されません。
- **ソフト リポート (S)**
ユーザーは、アプリケーションで未保存のファイルが開いている場合にデータの保存を促されます。アプリケーションでデータが保存されていない場合は、データの保存を求めるアプリケーションのリクエストにユーザーが応えるのを待ってからリポートが行われます。
- **リポートなし (N) (デフォルトのリポート タイプ)**
コンピュータは、指定されたアプリケーション イベントが完了した後に再起動しません。これは、ロック ファイル イベント (AL) を除くすべてのアプリケーション イベントのデフォルト リポート タイプです。AL=N を指定した場合、クライアント コンピュータはロックされたファイルに遭遇したときに [OK] ボタンと [キャンセル] ボタンが表示されるハード リポートを実行しません。アプリケーション イベントで再起動タイプが指定されていない場合、再起動は行われません。

リポート修飾子: 警告メッセージのタイプ

再起動の前にサブスクライバに送信する警告メッセージのタイプを指定することができます。リポートのタイプを指定し、警告メッセージのタイプを指定しない場合は、そのリポート タイプのデフォルトの警告メッセージが表示されます。警告メッセージには、3 つのタイプがあります。警告メッセージは、**Radia Software Manager** および **Radia システム** トレイと一緒に使用される **Radia Application Manager** では自動的に表示されます。警告メッセージを表示したくない場合は、**radskman** コマンド ラインで **ask=N** を指定してください。

- **非表示 (Q)**
リポートのパネルは表示されません。
- **[OK] ボタン (A)**
[OK] ボタンのみの警告メッセージが表示されます。**[OK]** をクリックすると、リポートが開始されます。ユーザーは再起動をキャンセルすることができません。
- **[OK] ボタンと [キャンセル] ボタン (Y)**
[OK] をクリックすると、リポートが開始されます。**[キャンセル]** をクリックすると、リポートが中止されます。

注意

警告メッセージ ボックスのタイムアウト値を指定するには、RTIMEOUT 値を **radskman** コマンド ラインに追加します。Radia Client がリポート プロセスを続行するまでの待機時間を RTIMEOUT に秒数で設定します。

リポート修飾子: マシン オプションとユーザー オプション

Radia Client は、**radskman** コマンド ラインでコンテキスト パラメータを指定することでマシンまたはユーザーとして接続することができます。マシンおよびユーザー リポート修飾子を使用すると、リポートが接続のタイプに基づいて行われるのかどうかを指定することができます。

- **マシン接続でのリポート (空白)**
マシンおよびユーザー リポート修飾子が指定されていない場合は、デフォルトで、**radskman** で **context=m** が指定されているマシン接続、またはコンテキスト パラメータが指定されていない場合でのみリポートが行われます。このデフォルトの動作は、リポートの大多数の要件を満たすはずですが、
- **ユーザー接続のみでのリポート (U)**
radskman で **context=u** が指定されているユーザー接続、またはコンテキスト パラメータが指定されていない場合でのみリポートが行われます。**radskman** で **context=m** が指定されている場合は、リポートは行われません。
- **マシン接続とユーザー接続の両方でのリポート (MU)**
アプリケーションのマシン コンポーネントとユーザー コンポーネントの両方がインストールされている場合にのみリポートが行われます。

リポート修飾子: 即時の再起動

即時を意味する **Immediate** の頭文字 **I** を追加することで、リポートの各タイプを修飾することができます。この修飾子は、現在のサービスを解決した直後にコンピュータを再起動する場合に使用します。サブスクリイバの残りのサービスは、コンピュータが再起動した後に解決されます。**I** を指定したが、リポートのタイプとして **H** または **S** を指定していない場合は、ハード リポートが実行されます。

複数のリポート イベントを指定する

同じクライアント接続にリポート イベントを必要とする 2 つのサービスがある場合は、最も制限的なリポート タイプとリポート パネルが使用されます。最も制限の弱いリポート タイプはリポート なし (**N**)、その次がソフト リポート (**S**)、そして最も制限的なのがハード リポート (**H**) です。最も制限の弱いリポートの警告メッセージでは **[OK]** ボタンと **[キャンセル]** ボタンの両方が表示され (**Y**)、次のメッセージでは **[OK]** ボタンのみが表示され (**A**)、最も制限的なメッセージではまったく何も表示されません (**Q**)。

インストール時に **[OK]** ボタンだけのソフト リポートを必要とするアプリケーションが、サブスクリイバに割り当てられていると仮定します (**AI=SA**)。このサブスクリイバには、**[OK]** ボタンと **[キャンセル]** ボタンの両方が表示されるハード リポートを必要とするアプリケーションも割り当てられています (**AI=HY**)。この場合は、サブスクリイバのすべてのアプリケーション イベントが完了した後に、**[OK]** ボタンのみが表示される (**A**) ハード リポート (**H**) が実行されます。

バージョン化されたアプリケーションを準備する

通常、クライアント コンピュータにアプリケーションを配布すると、そのアプリケーションは直ちにアクティブになります。Radia スケジューラまたは **Radia Notify** を使用する場合がこれに当たります。ただし、バージョン グループを使用すると、サブスクリイバにアプリケーションの新しいバージョンを公開し、配信と同時にアクティブにしたり、あらかじめ設定された時間にアクティブにしたりすることができます。新しいバージョンのインストールが失敗した場合は、自動的に以前のバージョンにロール バックされます。インストールした後で新しいバージョンに問題が発生した場合は、一部またはすべてのサブスクリイバに対し、新しいバージョンを非アクティブにして以前のバージョンにロール バックすることができます。

バージョンを設定すると、圧縮ファイルがクライアント コンピュータに格納され、バージョン化アクションが実行されます。バージョン変更時にデータを転送する必要がないように、ロール フォワードおよびロール バックを完全にローカルで実行することができます。また、一部のみをローカルで実行し、転送するデータを最小限に抑えるように設定することもできます。

バージョン化されたアプリケーションとバージョン化されていないアプリケーション

バージョン化されたアプリケーションとバージョン化されていないアプリケーションは、Radia データベース内で異なる接続モデルに従います。バージョン化されていないアプリケーションでは、1 つのアプリケーション インスタンスが 1 つ以上のパッケージ インスタンスに接続します。

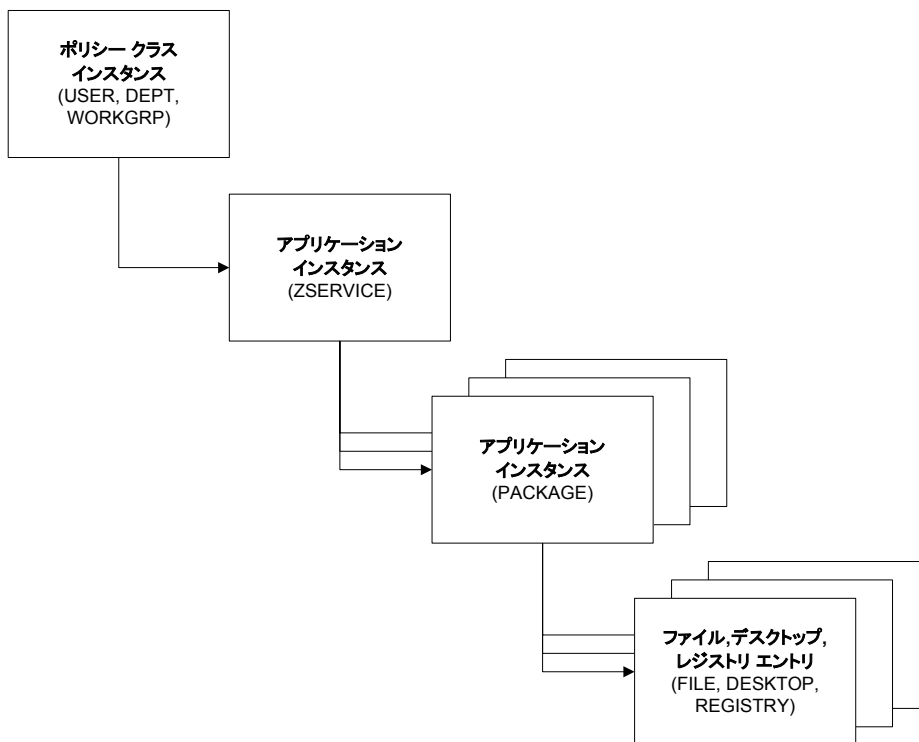


図 7.5 ~ バージョン化されていない配布のモデル

バージョン化されたアプリケーションは、バージョン化されていないアプリケーションとは異なる接続モデルに従います。バージョン化されたアプリケーションでは、Application インスタンス (ZSERVICE) は単独のバージョン グループ (VGROUP) インスタンスに接続します。

注意

複数のバージョン グループを使用する場合、各バージョン グループに対し 1 つのサービスを作成する必要があります。

サービスを準備する

Version Group インスタンスは、1 つ以上の Package インスタンスに接続する 1 つ以上の Version インスタンスに接続します。ソフトウェア アプリケーションの 1 つのバージョンを表す Version インスタンスには、1 つの Radia パッケージが格納されます。各 Radia パッケージは、Radia データベース内で PACKAGE クラスのインスタンスによって表されます。

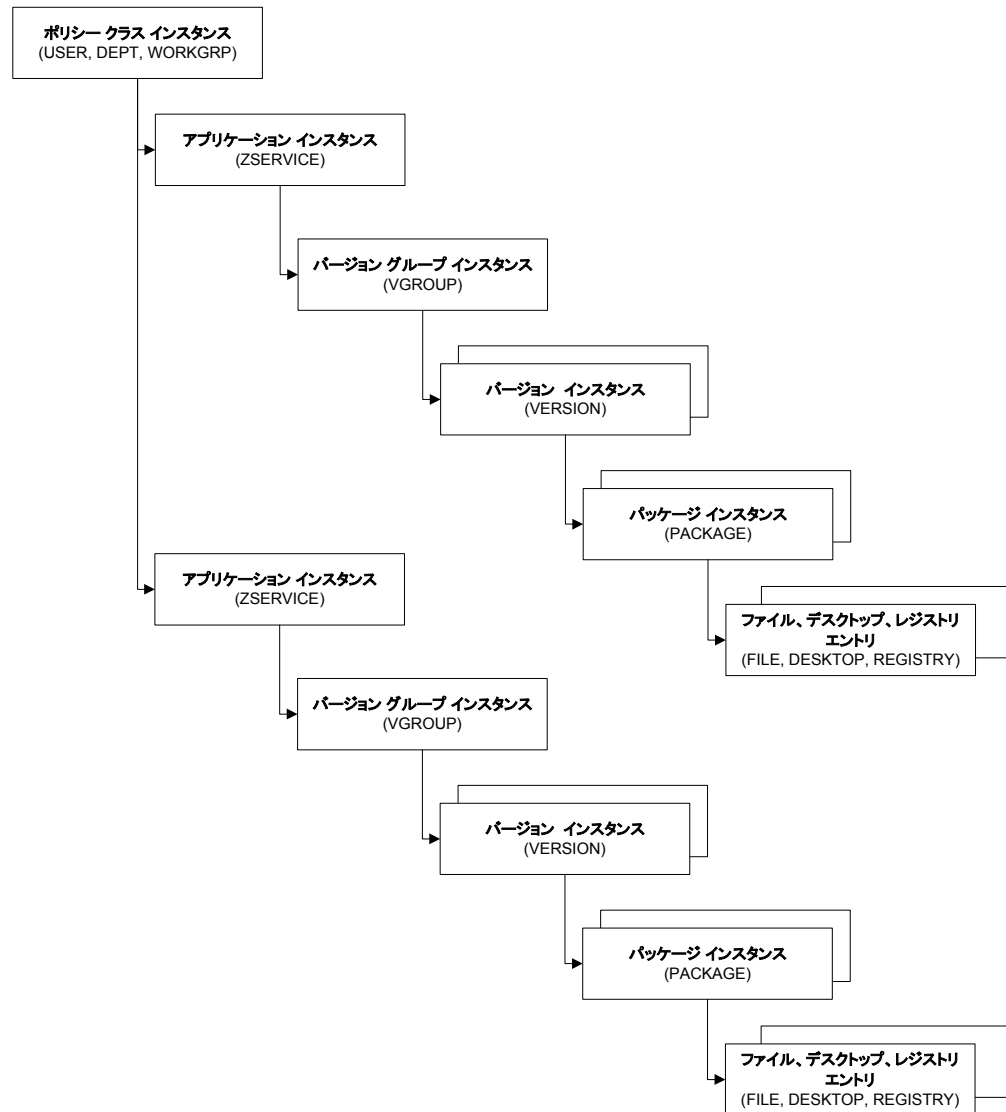


図 7.6 ~ バージョン化された配布のモデル

バージョン化されたアプリケーションを準備するには

1. **Radia Publisher** を使用してアプリケーションをパッケージ化します。
2. **ZSERVICE** クラスを右クリックし、[インスタンスを新規作成] をクリックします。
3. [インスタンスの作成] ダイアログ ボックスで、表示名およびインスタンス名を入力します。
4. **[OK]** をクリックします。

バージョン グループの作成を完了するには、「バージョン グループ エディタ」を参照してください。

バージョン グループ エディタ

Radia System Explorer のバージョン グループ エディタを使用すると、アプリケーションの各バージョンのインスタンスを作成、編集、削除したり、バージョン グループの配布を管理したりすることができます。バージョン グループには、アプリケーションのすべてのバージョンが含まれます。

バージョン化されたアプリケーションを管理するには、**Version Group** クラスにインスタンスを作成します。このクラスは、アプリケーションのバージョンのセットを表します。次に、バージョン グループ エディタを使用して、アプリケーションの各バージョンのインスタンスを作成します。

バージョン グループを作成する

次の例では、Radia System Explorer を使用して **Version Group (VGROUP)** クラスに新しいインスタンスを作成します。

バージョン グループを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、**[Radia Administrator Workstation]** をポイントして、**[Radia System Explorer]** をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、**[パスワードの変更]** チェック ボックスをオンにして、**[新しいパスワード]** と **[新しいパスワードの確認]** の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力して、**[OK]** をクリックします。
[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. **[PRIMARY]** をダブルクリックします。
4. **[SOFTWARE]** をダブルクリックします。

サービスを準備する

5. [Version Group (VGROUP)] を右クリックします。
6. [インスタンスを新規作成] をクリックします。[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
7. [インスタンスの作成] ダイアログ ボックスのテキスト フィールドに、バージョン グループの名前 (**Amortize** など) を入力します。

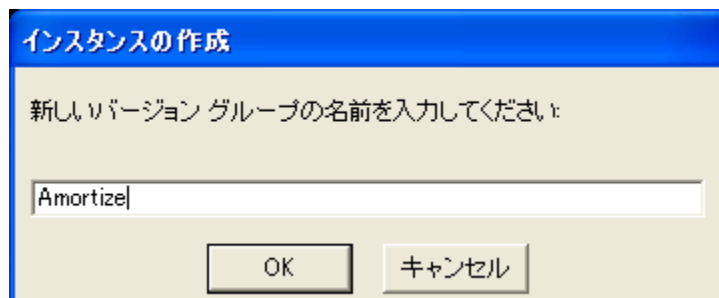


図 7.7 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス

8. [OK] をクリックします。

[バージョン グループを編集しています] ダイアログ ボックスが表示されます。

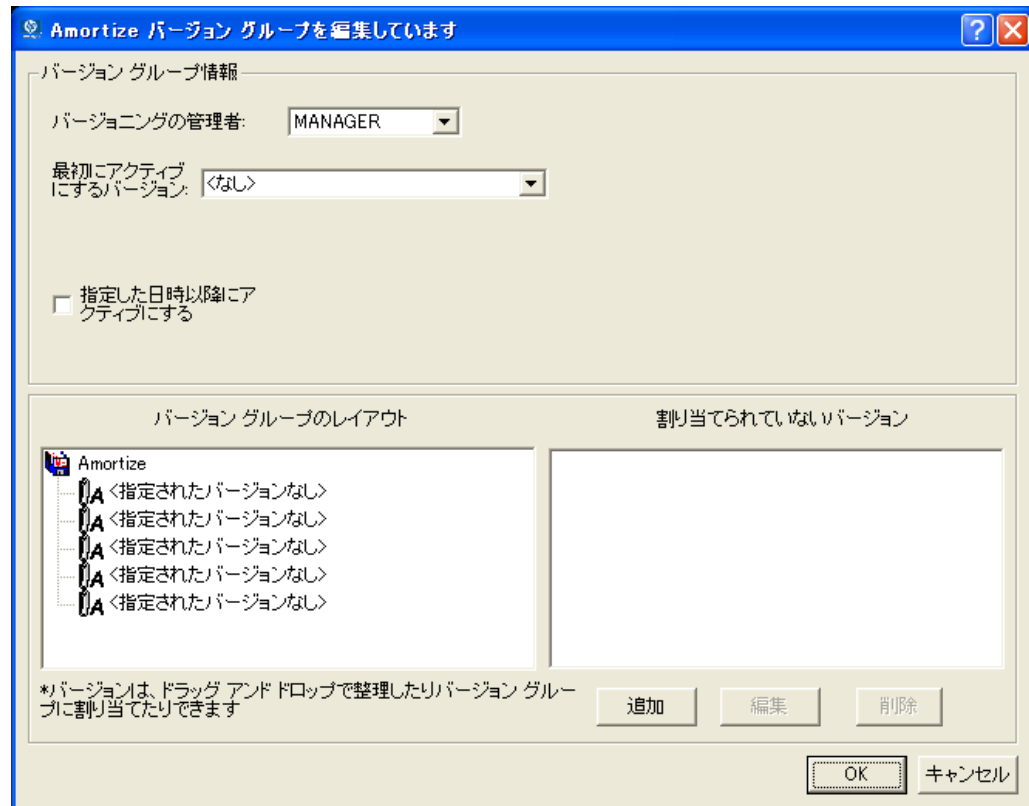


図 7.8 ~ [バージョン グループを編集しています] ダイアログ ボックス

バージョン インスタンスを作成する

Version Group (VGROUP) インスタンスを作成した後で、アプリケーションの各バージョンのインスタンスを作成する方法について説明します。

バージョン インスタンスを作成するには

1. バージョン グループ エディタで [追加] をクリックします。
[バージョンの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. バージョンを識別するサフィックスを入力します。たとえば「**Version 1**」と入力します。
Version インスタンスの名前は **Amortize Version 1** になります。

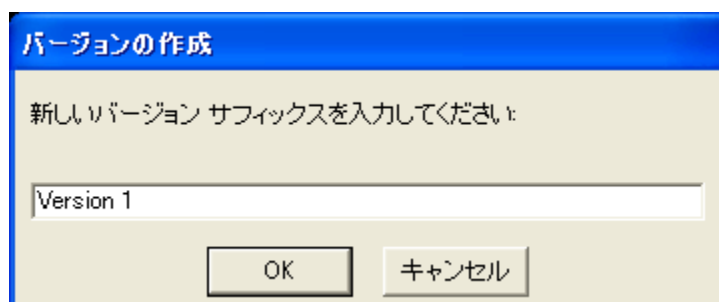


図 7.9 ~ [バージョンの作成] ダイアログ ボックス

3. [OK] をクリックします。
[バージョン エディタ] ダイアログ ボックスが表示されます。

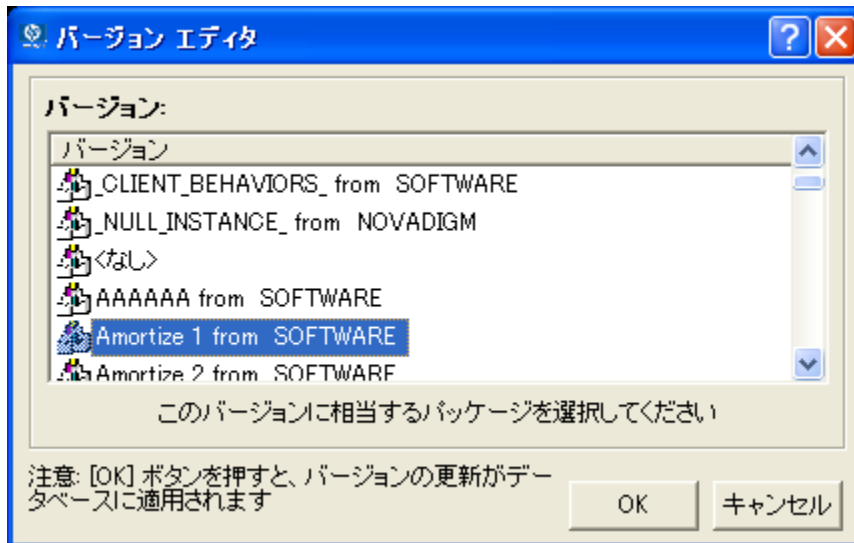


図 7.10 ~ [バージョン エディタ] ダイアログ ボックス

[バージョン エディタ] ダイアログ ボックスに、Radia データベースに格納されている Application Package (PACKAGE) インスタンスのリストが表示されます。このダイアログ ボックスを使用して、新しい Version (VERSION) インスタンスを Application Package (PACKAGE) インスタンスに接続します。この 2 つのインスタンスは 1 対 1 で対応します。

4. 適切な Application Package (PACKAGE) インスタンス (**Amortize1** など) をクリックします。

サービスを準備する

5. **[OK]** をクリックします。
[割り当てられていないバージョン] リストに **Version** インスタンスが表示されます。

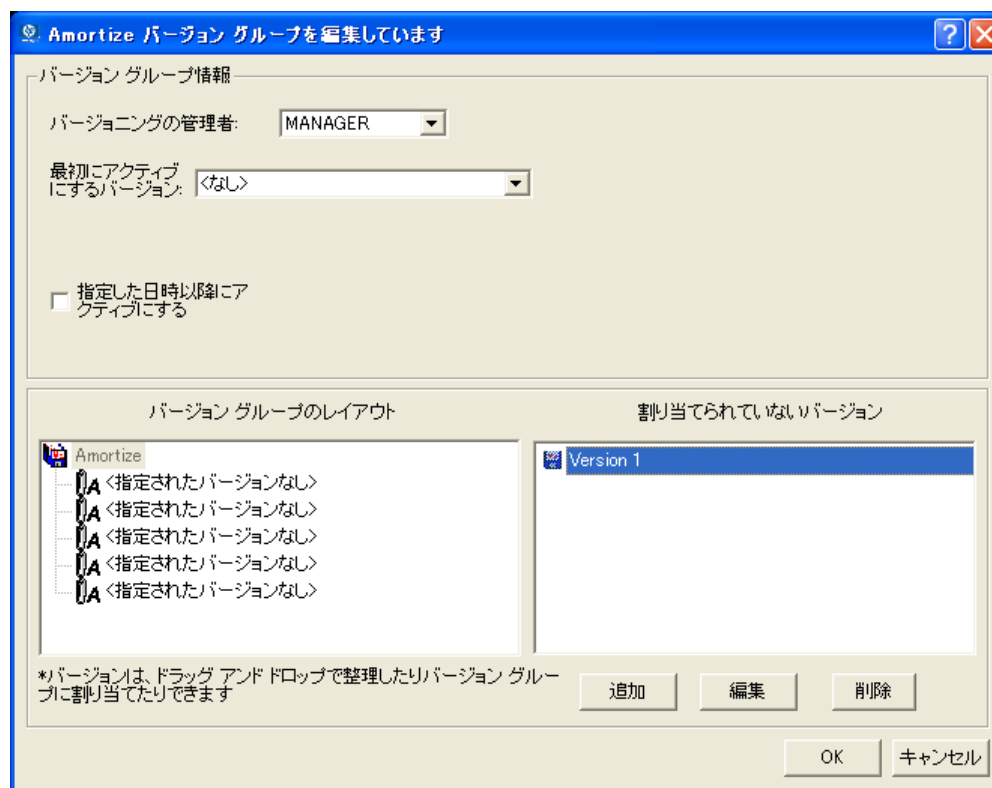


図 7.11 ~ Version 1 インスタンス

このバージョン グループ内でサブスクリバが利用できるアプリケーションの各バージョンに対応する **Version** インスタンスを追加します。

バージョン インスタンスを削除するには

1. [バージョン グループのレイアウト] リストで、削除するバージョンをクリックします。
2. [削除] をクリックします。
[割り当てられていないバージョン] リストに、そのバージョンのインスタンスが表示されます。アイコンは、削除可能な状態を示すグレー表示になります。
インスタンスを復元するには、[割り当てられていないバージョン] リストでインスタンスをクリックし、[削除の取り消し] をクリックします。
バージョン インスタンスは、バージョン グループ エディタを終了するまで削除されません。
3. [OK] をクリックして、バージョン グループ エディタを終了します。

Version インスタンスをバージョン グループに割り当てる

Version インスタンスを作成したら、バージョン グループに割り当てる必要があります。

Version インスタンスをバージョン グループに割り当てるには

- [割り当てられていないバージョン] リストで任意の Version インスタンスをクリックし、[バージョン グループのレイアウト] リストで <指定されたバージョンなし> と表示されている接続の上にドラッグします。

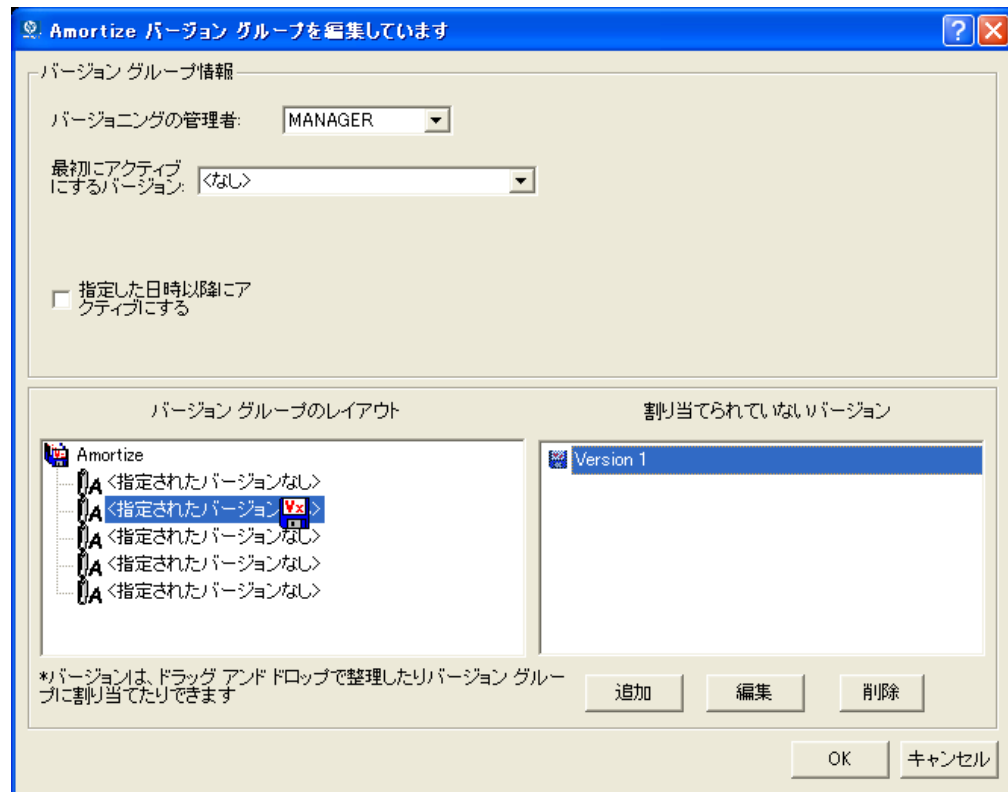


図 7.12 ~ バージョン グループへの Version インスタンスの追加

作成した各 Version インスタンスをバージョン グループに割り当てます。

Version インスタンスの割り当てを解除するには

- [バージョン グループのレイアウト] で、Version インスタンスをクリックして [割り当てられていないバージョン] 領域にドラッグします。マウス ボタンを離します。

バージョン グループの配布の準備をする

Version インスタンスを作成してバージョン グループに割り当てたら、バージョンを配布する方法を指定する準備をします。バージョン グループ エディタの [バージョン グループ情報] 領域を使用して、バージョンの配布を定義します。

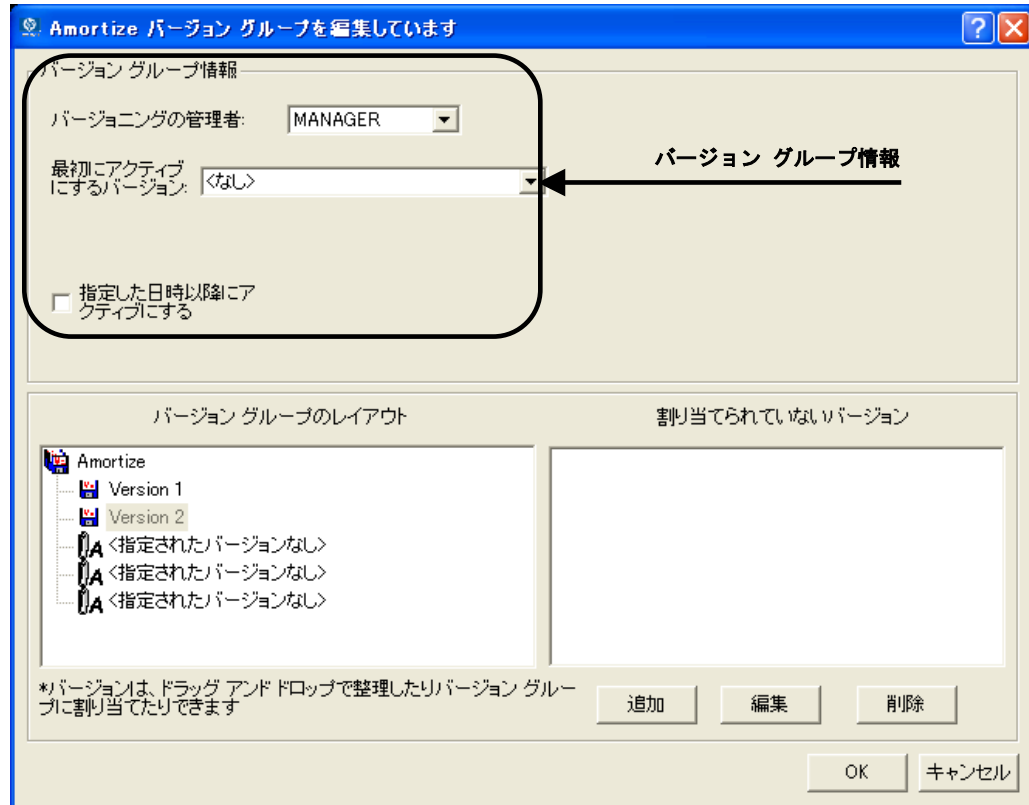


図 7.13 ~ [バージョン グループ情報] 領域

バージョン グループの配布の準備をするには

1. **[バージョンニングの管理者]** ボックスの一覧で、**[MANAGER]** または **[CLIENT]** をクリックします。
 - 配布するバージョンを管理者が管理するには、**[MANAGER]** をクリックします。
 - 配布するバージョンをサブスクリバに管理させるには、**[CLIENT]** をクリックします。この設定は *Radia Software Manager* クライアントでのみ使用します。

注意

バージョンの配布がスケジュールできるのは、Radia Configuration Server でバージョンを管理する場合のみです。したがって、配布をスケジュールするためには、**[バージョンニングの管理者]** ボックスの一覧で **[MANAGER]** を選択する必要があります。

2. **[最初にアクティブにするバージョン]** ボックスの一覧で、サブスクリバが次回 Radia Configuration Server に接続するときにクライアント コンピュータでアクティブにするバージョンをクリックします。**[バージョン グループのレイアウト]** リストに表示されるバージョンから選択可能です。321 ページの図 7.14 のように、選択したバージョンは **[バージョン グループのレイアウト]** リストに太字で表示されます。
3. **[指定した日時以降にアクティブにする]** チェック ボックスをオンにすると、特定の日時までバージョンのアクティブ化を行わないようにするための追加のコントロールにアクセスすることができます。

注意

[バージョンニングの管理者] ボックスの一覧で **[MANAGER]** を選択した場合は、Radia Configuration Server で次のバージョンをアクティブ化する日時がわかるように、必ず **[指定した日時以降にアクティブにする]** チェック ボックスをオンにしてください。

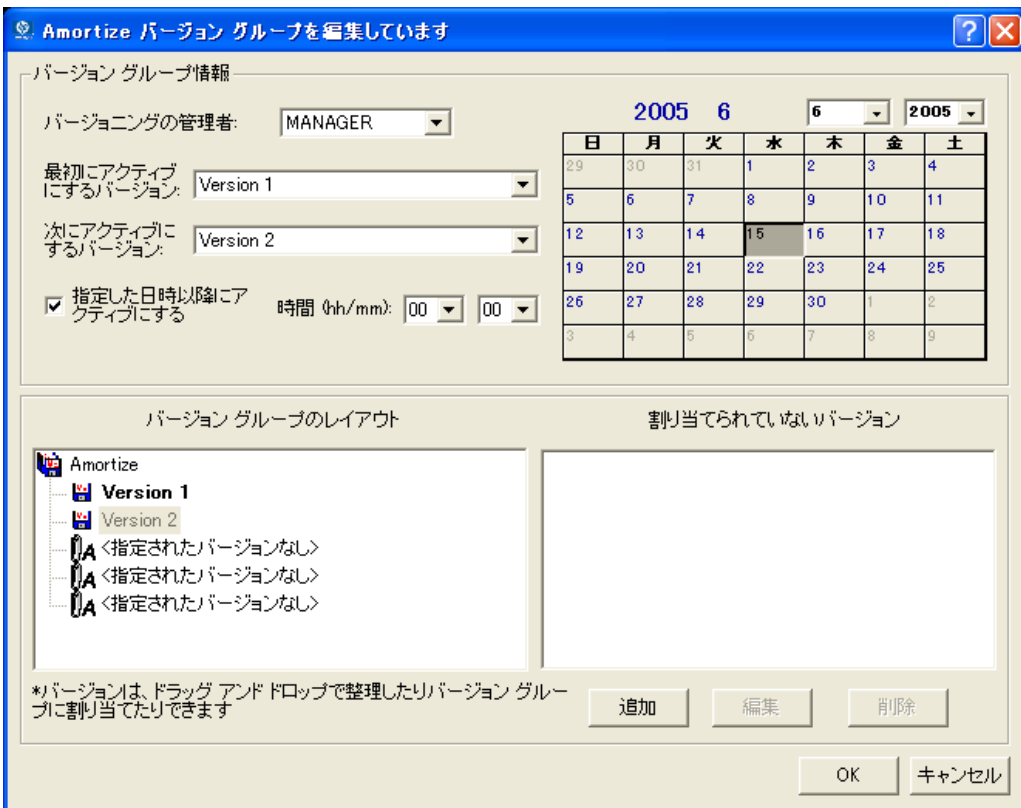


図 7.14 ~ [バージョン グループを編集しています] ダイアログ ボックス

- [次にアクティブにするバージョン] ボックスの一覧で、最初のバージョンの次にアクティブ化するアプリケーションのバージョンをクリックします。
- [時間 (hh/mm)] ボックスの一覧で、バージョンをアクティブ化する時間を選択します。

6. カレンダー コントロールを使用して、次のバージョンの配布の日付を設定します。

警告

時間コントロールおよびカレンダー コントロールを使用してバージョンの配布をスケジュールする場合は、以下の点を考慮します。

- ・ バージョンの配布がスケジュールできるのは、Radia Configuration Server でバージョンを管理する場合のみです。したがって、配布をスケジュールするためには、[バージョンingの管理者] ボックスの一覧で [MANAGER] を選択する必要があります。
- ・ [バージョンingの管理者] ボックスの一覧で [MANAGER] を選択した場合は、Radia Configuration Server で次のバージョンをアクティブ化する日時がわかるように、必ず [指定した日時以降にアクティブにする] チェック ボックスをオンにしてください。

VGROUP インスタンスを削除すると、関連するタイマー インスタンスが削除されます。

7. [OK] をクリックして、バージョン グループ エディタの情報を保存します。
8. [はい] をクリックして、変更を確定します。

Version Group インスタンスが Version Group (VGROUP) クラスに表示されます。次のバージョンのアクティブ化をスケジュールした場合、Scheduling (TIMER) クラスにタイマー インスタンスが作成され、タイマーが自動的にバージョン グループに接続されます。

バージョン グループをサービスに接続するには

1. PRIMARY.SOFTWARE.ZSERVICE を表示します。
2. 適切なサービス (Amortize など) を右クリックします。
3. [接続を表示] をクリックします。
[SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックスが表示されます。
4. [Version Groups (VGROUP)] をクリックします。

5. **[OK]** をクリックします。

Radia System Explorer のリスト ビューに Version Group インスタンスが表示されます。

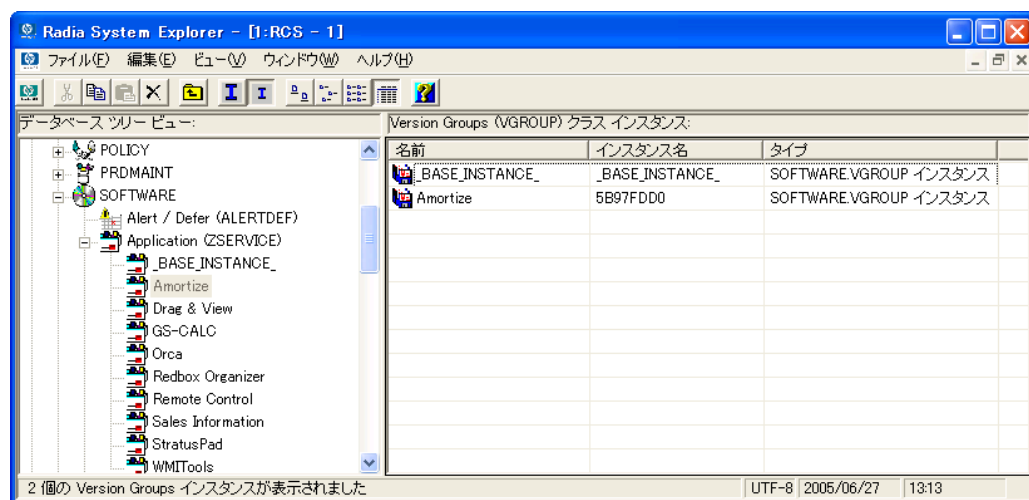


図 7.15 ~リスト ビューに表示された Version Groups

6. リスト ビューの **Amortize** をクリックし、適切な Application (ZSERVICE) インスタンス (**Amortize** など) にドラッグします。カーソルがクリップの形に変わったときに、マウス ボタンを離します。

[接続属性の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。

7. **[コピー]** をクリックします。
8. Amortize サービスへの Amortize バージョン グループの接続を確認するメッセージが表示されたら **[はい]** をクリックします。
9. 確認メッセージが表示されたら **[OK]** をクリックします。

注意

このサービスを配布するサブスクリバの POLICY インスタンスに ZSERVICE を接続してください。

クライアント コンピュータが次回 Radia Configuration Server に接続するときは、アプリケーションの最初のバージョンがアクティブ化され、次のバージョンの圧縮ファイルはクライアント コンピュータに格納されます。

バージョン グループを編集する

バージョン グループおよびそのインスタンスを作成した後に、バージョン グループ エディタに戻って変更を行うことができます。

バージョン グループを編集するには

1. **PRIMARY.SOFTWARE.VGROUP** にある Version Group インスタンスを表示します。
2. 適切な Version Group インスタンスを右クリックします。
3. [バージョン グループ エディタ] をクリックします。
バージョン グループ エディタが表示されます。必要に応じてバージョン グループを編集します。
4. **[OK]** をクリックして、変更を保存します。
または
[キャンセル] をクリックして、変更を保存せずにバージョン グループ エディタを終了します。

Version Group (VGROUP) クラス

Version Group (VGROUP) クラスの各インスタンスは、アプリケーションのバージョンのセットを定義します。このクラスには、Radia System Explorer のバージョン グループ エディタを使用して作成した Versions (VERSION) クラスへの接続が格納されています。

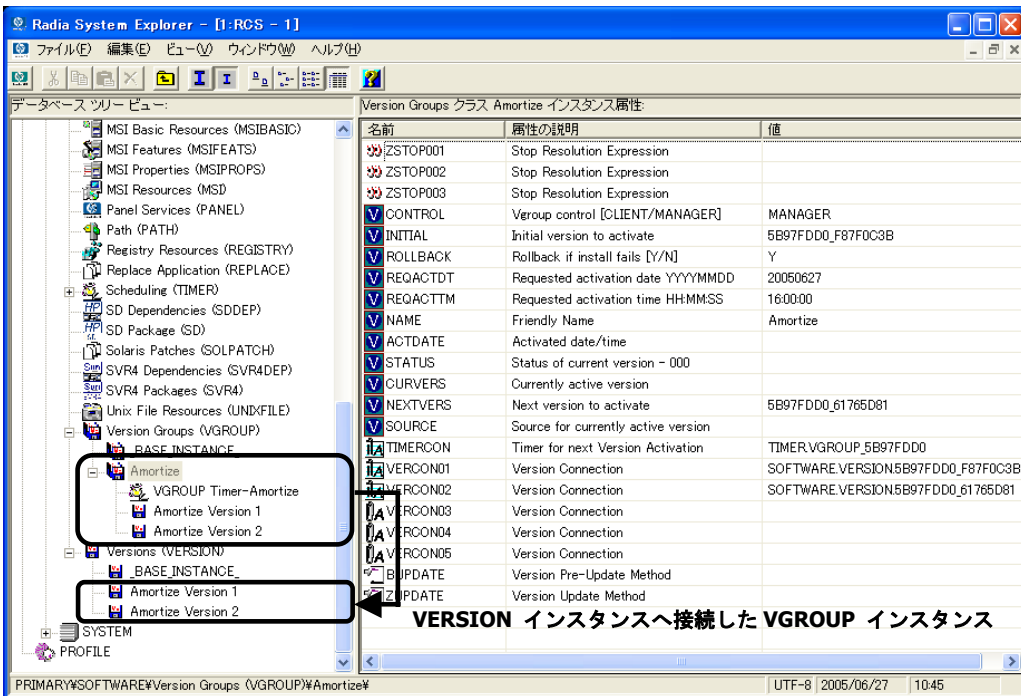


図 7.16 ~ Version Groups (VGROUP) クラス インスタンス

次の表は、Version Group (VGROUP) クラスの各属性を説明しています。

表 7.5 ~ Version Group (VGROUP) クラスの属性

属性	説明
ZSTOP00 <i>n</i>	ZSTOP 属性の式が “true” と評価されると、インスタンスの解決がスキップされます。空白のままの場合、インスタンスはスキップされず、解決処理が続行されます。これは、特定のユーザーのセットにバージョンを割り当てる場合に便利です。この属性を設定するには、Radia System Explorer を使用します。
CONTROL	クライアント コンピュータでアクティブにするバージョンを、Radia administrator (MANAGER) またはサブスライバ (CLIENT) のどちらで管理するかを指定します。このオプションを設定するには、バージョン グループ エディタの [バージョンingの管理者] ドロップダウン リストを使用します。 注意: Radia Application Manager では、Radia administrator によるバージョンのアクティブ化の管理はサポートしていますが、サブスライバによるアクティブ化の管理はサポートしていません。
INITIAL	クライアント コンピュータでアクティブにするバージョンを指定します。このオプションを設定するには、バージョン グループ エディタの [最初にアクティブにするバージョン] ドロップダウン リストを使用します。
ROLLBACK	新しいバージョンの配布に失敗した場合、以前アクティブ化されたバージョンに自動的にロールバックするかどうかを指定します。クライアント コンピュータのディスク容量不足や不適切なパッケージ化、またはメソッドが正常に終了しなかった場合に、新しいバージョンの配布に失敗することがあります。 デフォルトでは、ROLLBACK = y です。
REQACTDT	クライアント コンピュータで、このバージョン グループのバージョンがアクティブ化される最も早い日付を指定します。この属性が空白の場合は、バージョンがクライアント コンピュータに転送されるクライアント接続の最後に、INITIAL 属性で指定されたバージョンがアクティブ化されます。REQACTDT を設定するには、バージョン グループ エディタのカレンダー コントロールを使用します。
REQACTTM	REQACTDT 属性で指定された日付で、バージョン グループのバージョンがクライアント コンピュータでアクティブ化される最も早い時間を指定します。INITIAL 属性で指定されたバージョンが、次のクライアント接続時にアクティブ化されます。REQACTTM を設定するには、バージョン グループ エディタの [時間 (hh/mm)] ドロップダウン リストを使用します。
NAME	VGROUP インスタンスの簡略名を指定します。この属性は、Radia System Explorer を使用してインスタンスを作成するときに設定します。

表 7.5 ~ Version Group (VGROUP) クラスの属性

属性	説明
ACTDATE	Radia Client によってメンテナンスされる、クライアント コンピュータの VGROUP オブジェクトのデータを指定します。この属性には値を入力しないでください。この属性は Radia Client で設定します。
STATUS	Radia Client によってメンテナンスされる、クライアント コンピュータの VGROUP オブジェクトのデータを指定します。この属性には値を入力しないでください。この属性は Radia Client で設定します。
CURVERS	Radia Client によってメンテナンスされる、クライアント コンピュータの VGROUP オブジェクトのデータを指定します。この属性には値を入力しないでください。この属性は Radia Client で設定します。
NEXTVERS	Radia Client によってメンテナンスされる、クライアント コンピュータの VGROUP オブジェクトのデータを指定します。この属性には値を入力しないでください。この属性は Radia Client で設定します。
SOURCE	Radia Client によってメンテナンスされる、クライアント コンピュータの VGROUP オブジェクトのデータを指定します。この属性には値を入力しないでください。この属性は Radia Client で設定します。
TIMERCON	"next version to activate" を指定すると、Radia System Explorer で自動的にタイマーが作成され、この属性にタイマーへの接続が格納されます。
VERCON0 <i>n</i>	バージョン グループの各バージョンへの接続を指定します。各 VERCON0 <i>n</i> 属性は、VERSION クラスの 1 つのインスタンスへの接続を保持します。この属性は、バージョン グループ エディタでバージョン グループにバージョンを割り当てるときに設定します。

Versions (VERSION) クラス

Versions クラスの各インスタンスは、Radia で管理および配布されるアプリケーションの単一のバージョンを定義します。バージョン グループ エディタを使用して Version クラス インスタンスを作成し、バージョン グループに割り当てます。

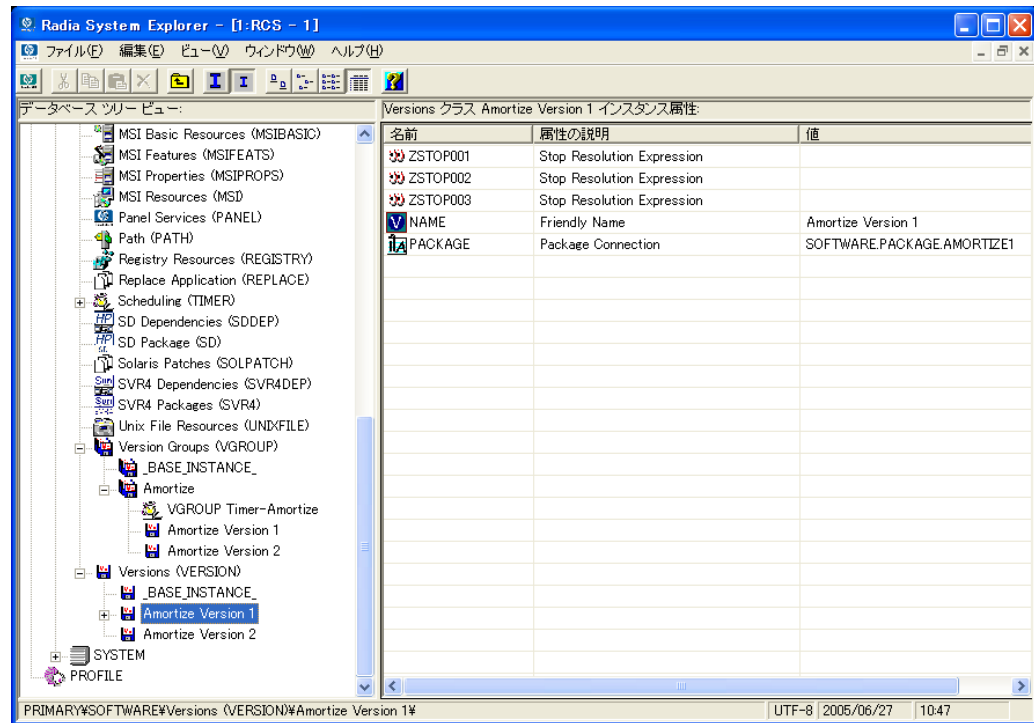


図 7.17 ~ Versions (VERSION) クラス インスタンス

次の表は、Versions (VERSION) クラスの各属性を説明しています。

表 7.6 ~ Versions (VERSION) クラスの属性

属性	説明
ZSTOP00n	ZSTOP 属性の式が “true” と評価されると、インスタンスの解決がスキップされます。空白のままの場合、インスタンスはスキップされず、解決処理が続行されます。これは、特定のユーザーのセットにバージョンを割り当てる場合に便利です。この属性を設定するには、Radia System Explorer を使用します。
NAME	VERSION インスタンスの簡略名を指定します。この属性は、バージョン グループ エディタでインスタンスを作成するときに設定します。
PACKAGE	このバージョン用にパッケージ化されたソフトウェアを表す PACKAGE クラス インスタンスに接続します。

Application (ZSERVICE) の属性

ここでは、Radia System Explorer で Application (ZSERVICE) インスタンスを開くと表示される属性について説明します。それらの属性値の多くは、Radia Administrator Workstation (Radia Publisher や Radia System Explorer の新規アプリケーション ウィザードなど) の使用時に設定します。Radia System Explorer では、SOFTWARE.ZSERVICE クラスのこれらの属性値を変更することもできます。

一部の属性は値を持たなかったり、Radia System Explorer に値が表示されなかったりします。そのような属性は、Radia Client が使用します。たとえば、INSTDATE のような属性はサービスがクライアント コンピュータにインストールされた日付を記録するために使用します。この属性の値は、Radia データベースのそのクライアント コンピュータの PROFILE ファイルに格納されます。

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
ZSTOPn	<p>[Expression Resolution Method] 式の評価が TRUE だと解決が停止されます。 例: WORDPOS(EDMGETV(ZMASTER,ZOS),'WINXP WIN2K NT')=0 この例の式では、クライアント コンピュータのオペレーティング システムが Windows XP、Windows 2000、または Windows NT の <i>どれでもない</i>場合にインスタンスの解決が停止されます。つまり、クライアント コンピュータで Windows XP、Windows 2000、または Windows NT のいずれかが動作していない限り、アプリケーションはインストールされないということです。</p>

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
ZSVNAME	<p>[Service Name/Description] Radia Software Manager のユーザー インターフェイスで表示するサービスの名前。値は、新規アプリケーション ウィザードの Short Description フィールドで初期設定します。</p>
ZSVCTTYP	<p>[Application Target Type [A/S]] Radia Application Manager または Radia Software Manager のどちらの Radia Client を対象にこのアプリケーションがパッケージ化されたのかを示します。値は、新規アプリケーション ウィザードで初期設定します。Radia Application Manager の場合は A、Radia Software Manager の場合は S です。</p>
ZSVCMO	<p>[Mandatory or Optional Service [M/O]] サービスを必須またはオプションとして指定します。この値は、新規アプリケーション ウィザードでアプリケーションのターゲット タイプ (ZSVCTTYP) の設定に基づいて初期設定します。通常、Radia Application Manager を使用する場合は、サービスは M (必須) に設定します。Radia Software Manager を使用する場合は、サービスは通常 O (オプション) に設定します。</p> <p>Radia Application Manager および Radia Software Manager を使用している場合、MO (必須、オプションの順) または OM (オプション、必須の順) が指定できます。最初の文字は、インストール前のアプリケーションの扱い方を示し、2 番目の文字は、インストール後のアプリケーションの扱い方を示しています。たとえば、アプリケーションのインストールを Radia Software Manager サブスクライバのオプションとし、インストール後のアプリケーションのメンテナンスや削除を必須にする場合は、ZSVCMO を OM に設定します。</p> <p>注意: ZSERVICE クラス テンプレートを編集する必要がある場合は、ZSVCMO を OM に設定できます。クラス テンプレート編集の詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。Radia Software Manager で必須アプリケーションを処理するには、args.xml ファイルに "enterprisemanagement=auto" を追加します。</p>
ZSVCPRI	<p>[Service Create Ordering [01-99]] サービスの優先度を設定します。サービスは、その優先度に基づいて作成されます。数字が小さいほど、サービスの優先度は高くなります。ZSVCPRI が 01 に設定されているサービスは優先度が最高で、99 に設定されているサービスは最低の優先度です。</p>
ALWAYS	<p>[Contains] この属性で指定したメソッドは、このインスタンスが解決されるときに無条件で実行されます。</p> <p>例: ZSYSTEM.ZMETHOD.PUTHIST_ZERROR などの有効なメソッド名</p>
ZCREATE	<p>[Service Installation Method] サービスのインストール時に実行されるメソッド。たとえば、ファイルをインストールするために停止されたサービスを開始するコマンドなどです。</p>
ZINIT	<p>[Service Initialization Method] サービスの初期化時に実行されるメソッド。たとえば、サービスによってロックされるかもしれないファイルをインストールする前にサービスを停止するコマンドなどです。</p>
ZDELETE	<p>[Service Delete Method] サービスの削除時に実行されるメソッド。</p>
ZUPDATE	<p>[Service Update Method] サービスの更新時に実行されるメソッド。</p>

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
ZVERIFY	[Service Verify Method] サービスの検証時に実行されるメソッド。
ZREPAIR	[Service Repair Method] サービスの修復時に実行されるメソッド。
PUBDATE	[Published Date of Service] 将来の使用のために予約されています。
UPDDATE	[Upgrade Date (Programmatic)] 将来の使用のために予約されています。
AUTHOR	[Author Name] Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの拡張情報領域に表示されるサービスの作成者の名前。値は、新規アプリケーション ウィザードの Author フィールドで初期設定します。
DESCRIPT	[Application Description] サービス リストのサービスのプロパティとして表示されるサービスの説明。値は、新規アプリケーション ウィザードの Long Description フィールドで初期設定します。
VENDOR	[Vendor Name] Radia Software Manager のユーザー インターフェイスで表示されるサービスのベンダーの名前。値は、新規アプリケーション ウィザードの Vendor フィールドで初期設定します。
URL	[WEB URL Name] サブスクライバがサービスについての詳細情報が入手できる Web ページのアドレス。これは、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスでサービスのプロパティとして表示されます。値は、新規アプリケーション ウィザードの Web URL フィールドで初期設定します。
CATGROUP	[Catalog Group Name] CATGROUP を使用すると、複数のアプリケーションをグループ化することができます。アプリケーションは、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスでグループに基づいて表示することができます。
PRICE	[Price] Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの拡張情報領域でサブスクライバに対して表示されるアプリケーションの価格を入力します。
SCHEDOK	[Update Schedule Locally [Y/N]] <i>Radia Software Manager のみ。</i> Y を指定すると、サブスクライバは更新スケジュールをローカルで変更することができます。N を指定すると、Radia Configuration Server で管理することができます。
VERSION	[Version Description] ソフトウェアのバージョン。これは、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスでサービスのプロパティとして表示されます。値は、新規アプリケーション ウィザードの Version フィールドで初期設定します。

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
NAME	<p>[Friendly Name] この名前は、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスでサービスのプロパティとして表示されます。値は、新規アプリケーション ウィザードの Short Description フィールドで初期設定します。</p>
OWNER	<p>[Application Contact] 将来の使用のために予約されています。</p>
RUNDLG	<p>[Dialog Processing [Y/N]] サービスのインストール時に DIALOG クラスのインスタンスの処理を有効にするかどうかを指定します。有効にする場合は Y、無効にする場合は N を指定します。 デフォルト: N</p>
REBOOT	<p>[Install/Update/Delete/Version Chang] アプリケーション イベントに基づいてクライアント コンピュータを再起動するために使用します。アプリケーション イベントとリポート タイプ、パネル、または接続を組み合わせでアクションを指定します。</p> <p>再起動するイベント: AI = インストール AD = アンインストール AU = 更新 AR = 修復 AV = 検証</p> <p>リポートのタイプ: S = ソフト リポート (タイプ Y パネルのデフォルト) H = ハード リポート (タイプ A パネルのデフォルト) N = 再起動なし</p> <p>パネルのタイプ: Q = パネルなし。 A = [OK] ボタンのみ。 Y = [OK] ボタンと [キャンセル] ボタン。</p> <p>接続のタイプ: 指定なし: マシン接続 (context = m) でリポートが行われます。 U = ユーザー接続 (context = u) でのみリポートが行われます。 MU = サービスのマシン部分とユーザー部分の両方がインストールされている場合にリポートが行われます。 例: AI=S の場合は、アプリケーションのインストール時にソフト リポートが実行されます。</p>

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
EVENTS	<p>[Events to Report] どのイベントでレポートを行うのかを示します。アプリケーション イベントとイベント タイプを組み合わせてイベントを指定します。</p> <p>AI: アプリケーションのインストール AD: アプリケーションのアンインストール AU: アプリケーションの更新 AR: アプリケーションの修復 AV: アプリケーションの検証 VA: バージョンのアクティブ化 VD: バージョンの非アクティブ化</p> <p>レポート内容: S: 成功 F: 失敗 B: 成功と失敗の両方 N: なし</p> <p>デフォルト: AI=B,AD=B,AU=F,AR=N,VA=F,VD=F</p>
ERTYPE	<p>[Event Reporting Method [O/E/X]] この属性を設定すると、APPEVENT オブジェクトを送信することができます。現時点では、オブジェクト (O) 形式しかサポートされていません。</p> <p>デフォルト: O</p>
ADAPTIVE	<p>[Auto Adaptability [Y/N]] インストールされたパッケージが、プラグ アンド プレイ デバイスなどの定期的にモニタしなければならないクライアント設定に依存するかどうかを示します。設定が変更された場合、クライアントは新しいコンポーネントまたは別のコンポーネントを取得するために Radia Configuration Server に再接続する必要があります。有効にする場合は Y、無効にする場合は N を指定します。</p>
LREPAIR	<p>[Local Repair [Y/N]] 壊れたアプリケーションがローカルで修復できるようにします。ファイルの不足でアプリケーションが壊れている場合、(ローカルに保存されている) そのファイルを使用してアプリケーションを修復することができます。有効にする場合は Y、無効にする場合は N を指定します。</p> <p>デフォルト: N</p>

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
REMOVAL	<p>[Un-Managed Behavior [A/D/U]] サービスが削除される際のアプリケーションの管理方法を指定します。 REMOVAL を A (放棄) に設定すると、クライアント上のサービスのオブジェクトが削除されますが、アプリケーション コンポーネントはそのままです。サービスは Radia で管理されなくなります。 REMOVAL を D (削除) に設定すると、サービスのオブジェクトとコンポーネントが削除されます。サービスは Radia によって引き続き管理されます。 REMOVAL を U (非管理) に設定すると、Radia によるサービスの管理が停止されます。オブジェクトもコンポーネントも削除されません。この設定は、エンタイトルメント ポリシーに基づいて削除されるオプションのアプリケーション (ZVSCMO = 0) にのみ適用されます。サブスクライバがオプションのアプリケーションを削除した場合は、REMOVAL の設定に関係なくサービスのオブジェクトが必ず削除されます。 デフォルト: D</p>
RECONFIG	<p>[Reconfiguration Enabled [Y/N]] アプリケーションがインストール後に移動できるかどうかを示します。有効にする場合は Y、無効にする場合は N を指定します。たとえば、アプリケーションを削除したりインストールし直したりする必要なく、C ドライブにインストールされたアプリケーションが D ドライブに移動できるようにします。</p>
ZSVCCAT	<p>[Service Visible in Catalog [Y/N]] Radia Software Manager のカタログでサービスが表示されるのかどうかを指定します。オプションのアプリケーションの場合、デフォルトは Y です。必須アプリケーションの場合、デフォルトは N です。デフォルトを上書きする場合は、有効の Y か無効の N を指定します。</p>
UIOPTION	<p>[Progress Indicator [NONE/FULL/INFO]] サービスのステータス ウィンドウが表示されるのかどうかを指定します。有効な値は次のとおりです。 NONE = インターフェイスは表示されません。 FULL = インターフェイスが表示され、[キャンセル] ボタンを利用することができます。 INFO = キャンセルのできないインターフェイスが表示されます。</p>
CACHE	<p>[App Element Caching [Y/N]] 要素のキャッシングを有効にします。有効にする場合は Y、無効にする場合は N を指定します。 デフォルト: N</p>

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
CACHELOC	<p>[CACHE Location On Client] <i>Windows インストーラ アプリケーションのみ。</i> 製品に必要な圧縮されたアプリケーション ファイルをキャッシュするために使用する、クライアント コンピュータ上のフォルダの位置。 Radia が Windows インストーラをサポートすることにより、フォルダを作成するために PRODGUID 値がこの値に付け加えられます。次に例を示します。 CACHELOC=C:\%progra~1\Novadigm および PRODGUID = 12345_XXXX の場合、キャッシュ フォルダは c:\%progra~1\Novadigm\12345_XXXX\cache になります。 注意: フォルダ %cache は、PRODGUID に自動的に付加されます。Windows インストーラ対応アプリケーションを配布しない場合、ファイルは IDMDATA にキャッシュされます。 デフォルト: _UNDEF_</p>
CACHELIM	<p>[Percnt Disk Limit For Cache] <i>Windows インストーラ アプリケーションのみ。</i> ドライブの使用済み容量の割合として定義されるキャッシュの制限。000 と 100 の間の数値を入力します。使用済み容量の割合がキャッシュの制限を超えると、その製品のキャッシュされているすべてのファイルが削除され、キャッシュ フォルダも削除されます。 これは、すべてのファイルがディスク上にキャッシュされた後にチェックされます。</p>
ZDISCONN	<p>[Disconnect on Install [Y/N]] Radia Configuration Server とのセッションが開いている場合に、クライアントが Radia Configuration Server との接続を切断することができます。 Radia Configuration Server からクライアントの接続を切断するには、Y を指定します。 Radia Configuration Server とクライアントの接続を維持するには、N を指定します。 デフォルト: N</p>
ZSYSACCT	<p>[Install under System Account [Y/N]] システム アカウントとユーザー アカウントのどちらでサービスをインストールするのかを指定します。Y を指定すると、アプリケーションがシステム権限でインストールされます。N を指定すると、ログオンしているユーザーの権限でアプリケーションがインストールされます。 デフォルト: N</p>
MCELIGBL	<p>[Service Multicast Eligible [Y/N]] アプリケーションにマルチキャストの資格があるかどうかを示します。有効にする場合は Y、無効にする場合は N を指定します。 デフォルト: Y</p>
RSTRSIZE	<p>[Download restart threshold (bytes)] 適切な ZSERVICE クラスのインスタンスで RSTRSIZE 属性を使用すると、どのファイルがダウンロードされているデータの量 (バイト単位) に基づくチェックポイントの再開が可能なのかを制御することができます。</p>

表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性

属性	説明
ZSVCMODE	<p>[Application Context [M/U/MU/EMU]]</p> <p>サービスにマシン コンポーネントしかない場合は ZSVCMODE を M に設定します。radskman コマンド ラインでコンテキストが u に設定されている場合、このサービスは無視されます。</p> <p>サービスにユーザー コンポーネントしかない場合は ZSVCMODE を U に設定します。radskman コマンド ラインでコンテキストが u に設定されているか、空白になっている場合は、このサービスがインストールされます。アプリケーションがユーザーのレジストリ変更またはユーザーのデスクトップ ショートカットだけで構成されている場合は、ZSVCMODE を u に設定することが必要な場合があります。</p> <p>サービスにマシン コンポーネントとユーザー コンポーネントの両方がある場合は ZSVCMODE を MU に設定します。ユーザー接続では、ユーザー コンポーネントのインストール前にマシン コンポーネントが既にインストールされているかどうかを確認されます。m に設定されたコンテキストと u に設定されたコンテキストで 1 回ずつ、2 回の radskman 接続を実行する必要があります。</p> <p>ZSVCMODE を EMU に設定すると、クライアント接続がユーザー コンテキストで行われているが、アプリケーションのマシン側がまだインストールされていない場合にマシン接続が強制されます。マシン接続が正常に完了した後は、ユーザー コンポーネントをインストールするためにユーザー接続が開始されます。この設定は、ユーザーが Radia Software Manager を使用して管理するオプションのアプリケーションで使用します。</p> <p>マシンまたはユーザーから独立してインストールできる単一モードでサービスを処理する場合は、ZSVCMODE を空白のままにします。つまり、コンポーネントの ZCONTEXT を無視してサービス全体をインストールするということです。</p>

ZSERVICE の属性をレポートする

ZSERVICE クラスの属性の一部は、計算が行われます。それらの属性はサービスがインストール、検証、アップデート、修復、または削除されたときに更新され、クライアント コンピュータのサービス オブジェクトでレポートされます。それらの属性は、Radia System Explorer を使用して変更しないでください。

表 7.8 ~ 計算される ZSERVICE 属性 – 変更は不可

属性	説明
ZSVCCSTA	<p>[Service Status on Client] サービスのステータス コード。サービスのファイルがなぜ正確に配布できないのかを判断するために使用します。値は、000 ~ 999 の範囲です。</p>
SIZE	<p>[Application Size - Uncompressed] Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの拡張情報領域でサブスクリバに対して表示される、圧縮されていないアプリケーションのサイズ。計算フィールドなので、変更はしないでください。これは、PACKAGE クラスで定義されている SIZE の累積値です。</p>
COMPSIZE	<p>[Application Size - Compressed] Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの拡張情報領域でサブスクリバに対して表示される、圧縮されたアプリケーションのサイズ。計算フィールドなので、変更はしないでください。これは、PACKAGE クラスで定義されている COMPSIZE の累積値です。</p>
ZAVIS	<p>[Available, Verified, Installed, Sync F] Radia Client は、カタログでアプリケーションのさまざまな状態を示すためにこの属性を管理します。4 つの状態は次のとおりです。 Available は、Radia Configuration Server からサービスが利用できるのかどうかを示します。 Verified は、サービスが検証済みかどうかを示します。 Installed は、サービスがインストール済みかどうかを示します。 Synchronized は、インストールされているサービスで Radia Configuration Server からの最新の変更がすべて適用されているかどうかを示します。 それぞれの有効な値は次のとおりです。 Y = はい N = いいえ X = 不明</p>
VERDATE	<p>[Verified Date of Service] クライアント コンピュータ上でアプリケーションが最後にいつ検証されたのかを示します (ローカル時間)。Radia Client がこの属性を管理します。これは、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの拡張情報領域でサブスクリバに対して表示されます。この属性は、レポートを目的に利用することができます。値は、MMM DD,YYYY HH:MM:SS 形式です。 例: Jul 28, 2003 16:10:00</p>

表 7.8 ~ 計算される ZSERVICE 属性 - 変更は不可

属性	説明
UPGDATE	<p>[When Application was Upgrade on De]</p> <p>Radia Client がこの属性を管理します。クライアント コンピュータ上でアプリケーションが最後にいつ更新されたのかを示します (ローカル時間)。この属性は、レポートिंगを目的に利用することができます。値は、MMM DD,YYYY HH:MM:SS 形式です。</p> <p>例: Jul 28, 2003 16:10:00</p>
INSTDATE	<p>[Installed Date]</p> <p>クライアント コンピュータ上でアプリケーションがいつインストールされたのかを示します (ローカル時間)。Radia Client がこの属性を管理します。これは、Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの拡張情報領域でサブスクライバに対して表示されます。この属性は、レポートिंगを目的に利用することができます。値は、MMM DD,YYYY HH:MM:SS 形式です。</p> <p>例: Jul 28, 2003 16:10:00</p>
DELDATE	<p>[Delete Date]</p> <p>クライアント コンピュータ上でアプリケーションがいつ削除されたのかを示します (ローカル時間)。Radia Client がこの属性を管理します。この属性は、レポートिंगを目的に利用することができます。値は、MMM DD,YYYY HH:MM:SS 形式です。</p> <p>例: Jul 28, 2003 16:10:00</p>

まとめ

- ZSVCMODE 属性を使用してサービスの適切なコンテキスト (M、U、MU、または EMU) を設定します。
- サービスがクライアント コンピュータのリブートを必要とする場合は、Application (ZSERVICE) クラスの REBOOT 属性を使用します。
- Application (ZSERVICE) クラスのすべてのサービス オプションを理解します。

サービスを準備する

サービスを配布する

この章は以下を目的としています。

- Radia で使用可能な配布方法について理解する。
- タイマーを使用して、指定した時刻にサービスを配布することができます。
- 通知機能を使用して、アプリケーションをアップデートまたは削除したり、サブスクライバに電子メールを送信したりする方法を習得する。
- バージョン化されたアプリケーションが配布できるようになる。
- Radia が Windows インストーラ アプリケーションをサポートする方法について理解する。

サービスを配布する

このマニュアルでは、**Radia Application Manager** の推奨される実装を解説します。方法は組織のニーズに合わせて調整することになりますが、**Radia Application Manager** を包括的に理解するためにこのマニュアルに目を通しておくことをお勧めします。この章では、サービスの配布について説明します。

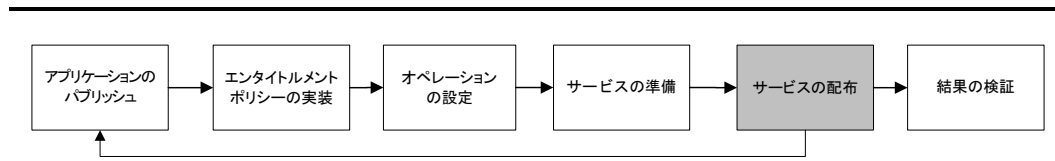


図 8.1 ~ このマニュアルで遂行するタスク

配布方法について

Radia System Explorer でサービスを作成し、アプリケーションの配布対象となるユーザーまたはグループを指定すると、サービスをサブスクライバに配布することができます。

注意

他のシステム管理ソフトウェアを使用した経験があれば、「ジョブ」という用語についておそらく理解しているでしょう。ジョブは、パッケージを配布する場合に使います。ジョブには、実行する一連の手順、ファイルまたはソフトウェアを格納しているパッケージ、ジョブのターゲット、およびジョブを実行するスケジュールが含まれます。

Radia では、ジョブを使用する必要はありません。パッケージの作成から、ターゲットの定義（ユーザーの割り当て）、配布方法の選択に至る各手順は、個別に実行できます。各企業のニーズに従って、1 つのパッケージが複数の配布方法で配布できるので、柔軟に処理を行うことができます。

Radia では、以下の配布方法が使用できます。

■ **スケジューラ**

指定した時間にサービスをインストールしたり、一定の間隔で実行されるコマンド ラインを設定したりします。

■ **通知**

Radia Configuration Server に接続してアプリケーションをインストール、更新、削除するよう 1 つまたは複数のクライアント コンピュータに強制したり、特定のサービスのサブスクリバに電子メールを送信したりします。

注意

ここで言うコンピュータとは、ワークステーションまたはサーバーのことです。

配布方法を選択する前に、以下の点を検討します。

- アプリケーションを特定の時刻に配布する必要がありますか。その場合は、スケジューラを使用します。
- アプリケーションを配布する際に、電子メールでユーザーに通知しますか。その場合は、通知機能を使用します。
- 新しいアプリケーションや更新をインストールしたり、アプリケーションを削除したりしますか。その場合は、通知機能を使用します。
- アプリケーションに複数のバージョンがありますか。その場合は、バージョン グループを使用します。291 ページの「第 7 章: サービスを準備する」を参照してください。

配布をテストする

正常に配布するために、実装をよくテストする必要があります。

- 実際の環境でソフトウェアが配布できるようにする前に、テスト環境でソフトウェアをパブリッシュおよび配布します。
- 対象となるすべてのオペレーティング システムに対して配布をテストします。
- アプリケーションの更新、サブスクリバのデスクトップからのアプリケーションの削除、カスタマイズされたインストールなど、配布の主な機能をすべてテストします。また、ディスク容量や物理メモリの不足、その他の類似した制約を設定し、配布に影響を与える可能性があるさまざまなハードウェア設定をテストします。

接続パラメータ (Radskman)

選択した配布方法に関係なく、**radskman** コマンド ラインを作成する必要があります。一部の配布方法では、このコマンド ラインが自動的に作成されますが、コマンドのオプションについて理解する必要があります。**radskman** を使用すると、以下の処理が実行できます。

- 既存の必須アプリケーションのステータスをすべてチェックします。
- 新しい必須アプリケーションを追加します。
- サブスクリバに割り当てられなくなった必須アプリケーションを削除します。

radskman コマンド ラインは、コマンド プロンプト、スケジューラ (TIMER) インスタンス、通知コマンドのいずれからでも指定できます。稼働環境でこれらの方法のいずれかを使用する前に、選択したコマンド ラインのパラメータをテストする必要があります。パラメータは、以下の 5 つのカテゴリに分類できます。

- コア
- オペレーション
- マシン/ユーザー
- クライアント オペレーション プロファイル
- プロセス

次の表では、**radskman** で使用可能なパラメータについて説明します。**RAM** は **Radia Application Manager**、**RSM** は **Radia Software Manager** を表します。表による説明の後に、通常環境で **radskman** コマンド ラインを使用する場合の例を示します。

コア

コア パラメータは、ほとんどの **radskman** コマンド ラインで使用します。コア パラメータには、**Radia Configuration Server** のロケーションに加え、クライアント コンピュータをポリシー用に識別する方法が含まれます。

表 8.1 ~ radskman のコア パラメータ

パラメータ	説明
cat	<p>セルフメンテナンスを実行し、ログオン パネルを表示して、他のサービスのステータスをチェックする場合は、cat = prompt と設定します。</p> <p>サービスのステータス チェックのみを実行する場合は、cat = y と設定します。</p> <p>ユーザーのサービス リストを解決するためにローカルのマシン カタログを使用する場合は、cat = m (4.0 の機能) と設定します。この設定は context = u の場合に使用します。また、通常は local = y の場合にも使用します。</p> <p>RAM のデフォルト: prompt。</p> <p>RSM のデフォルト: リクエストのタイプによって異なります。</p>
dname	<p>サービスに対する Radia データベースのドメイン名です。ここで指定したドメインがサービス カタログ (ASERVICE.EDM) を格納するディレクトリになります (例: dname=SOFTWARE)。</p> <p>ソフトウェア</p> <p>RAM のデフォルト: SOFTWARE。ただし、preload=y の場合は、RADSTAGE がデフォルトになります。</p> <p>RSM のデフォルト: SOFTWARE。ただし、preload=y の場合は、RADSTAGE がデフォルトになります。</p>
IP	<p>Radia Configuration Server の IP アドレスです (例: IP = 10.10.1.001)。</p> <p>注意: IP アドレスを指定しなかった場合、Radia は、IDMLIB (デフォルトでは、<i>SystemDrive:\Program Files\Novadigm\LIB</i>) 内の ZMASTER オブジェクトで指定した IP アドレスを使用します。</p> <p>RAM のデフォルト: NOVARCS (渡される引数がない場合のみ)。</p> <p>RSM のデフォルト: NOVARCS (渡される引数がない場合のみ)。</p>
mname	<p>Radia Configuration Server の名前です (例: mname=RADSVR01)。</p> <p>RAM のデフォルト: Radia (プレロードの場合は RADSTAGE がデフォルト)。</p> <p>RSM のデフォルト: Radia (プレロードの場合は RADSTAGE がデフォルト)。</p>
port	<p>Radia Configuration Server のポートです。デフォルト ポートは 3464 です。</p> <p>注意: ポートを指定しなかった場合、Radia は、IDMLIB (デフォルトでは、<i>SystemDrive:\Program Files\Novadigm\LIB</i>) 内の ZMASTER オブジェクトで指定したポートを使用します。</p> <p>RAM のデフォルト: 3464。</p> <p>RSM のデフォルト: 3464。</p>
sname	<p>処理するサービスを指定します。サービスを指定しなかった場合は、すべての必須サービスが処理されます。</p>

表 8.1 ~ radskman のコア パラメータ

パラメータ	説明
startdir	<p>IDMLIB の開始ディレクトリを指定します。</p> <p>注意: コマンドラインで uid を設定し、stratdir を設定していない場合、startdir は uid と同じ値になります。コマンドラインで uid を指定している場合は、startdir も指定することをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> コンピュータ名を使用する場合は、startdir = \$MACHINE と設定します。 現在ログオンしているサブスクリバ名を使用する場合は、startdir = \$USER と設定します。 カスタム開始ディレクトリを指定する場合は、stratdir = value (任意の値) と指定します。value にスペースが含まれている場合は、名前全体を二重引用符で囲みます。 <p>RAM のデフォルト: ユーザー コンテキスト (context=u) の場合は \$USER。マシン コンテキスト (context=m) の場合は SYSTEM。</p> <p>RSM のデフォルト: ユーザー コンテキスト (context=u) の場合は \$USER。マシン コンテキスト (context=m) の場合は SYSTEM。Radia Software Manager は、デフォルトではコンテキストを渡しません。</p>
uid	<p>現在のセッションを識別するために使用します。</p> <p>注意: コマンドラインで uid を設定し、stratdir を設定していない場合、startdir は uid と同じ値になります。コマンドラインで uid を指定している場合は、startdir も指定することをお勧めします。</p> <ul style="list-style-type: none"> uid = \$MACHINE は、コンピュータの名前を基に現在のセッションを特定します。 uid = \$USER は、現在ログオンしているユーザーの名前を基に現在のセッションを特定します。 uid=custom (任意の値) は、ユーザーが指定したカスタム値を基に現在のセッションを特定する場合に使用します。 <p>RAM のデフォルト: ユーザー コンテキスト (context=u) の場合は \$USER。マシン コンテキスト (context=m) の場合は SYSTEM。</p> <p>RSM のデフォルト: ユーザー コンテキスト (context=u) の場合は \$USER。マシン コンテキスト (context=m) の場合は SYSTEM。コンテキスト (ユーザー ID) を指定しなかった場合、Radia は、IDMLIB (デフォルトでは、SystemDrive:¥Program Files¥Novadigm¥LIB¥) 内の ZMASTER オブジェクトで指定した LOCALUID を使用します。</p>

オペレーション

オペレーション パラメータは、クライアントがどのように接続するかを操作します。オペレーション パラメータの機能には、コンピュータの再起動処理、ログの指定、サブスクリバの表示オプションなどがあります。

表 8.2 ~ Radskman のオペレーション パラメータ

パラメータ	説明
ask	<p>コンピュータを再起動する前に、サブスクリバに確認メッセージを表示する場合は、ask = y と設定します。これにより、サブスクリバは、コンピュータが再起動する前に、現在の作業を保存してアプリケーションを終了することができます。</p> <p>サブスクリバに確認メッセージを表示せずにコンピュータを再起動する場合は、ask = n と設定します。この設定は、メンテナンス担当者のいないコンピュータに配布する場合に便利です。</p> <p>RAM のデフォルト: Radia システム トレイが実行中の場合は Y。Radia システム トレイが実行中でない場合、またはログオンしているユーザーがいない場合は N。</p> <p>RSM のデフォルト: Y</p>
hreboot	<p>サービスでコンピュータの再起動が要求された場合に、radskman が処理できるようにする場合は、hreboot = y と設定します。コンピュータの電源をオフにする場合は、p に設定します。p に設定した場合は、リポートが特定のサービス向けにどのように設定されているかに関係なく、クライアント コンピュータがシャットダウンします。</p> <p>注意: この設定は handle_reboot を置き換えます。</p> <p>RAM のデフォルト: Y</p> <p>RSM のデフォルト: N</p>
ind	<p>各サービスのステータス インジケータを非表示にする場合は、ind = n と設定します。各サービスのステータス インジケータを表示する場合は、ind = y と設定します。</p> <p>RAM のデフォルト: Y</p> <p>RSM のデフォルト: Y</p>
jobid	<p>jobid を使用すると、このコマンド ラインの送信元について詳細な説明を表示することができます。APPEVENT、IDENTITY、PREFACE、SYNOPSIS が JOBID として表示されます。</p> <p>RAM のデフォルト: USER コンテキストの場合は UserConnect です。SYSTEM コンテキストの場合は SystemConnect です。</p> <p>RSM のデフォルト: USER コンテキストの場合は UserConnect です。SYSTEM コンテキストの場合は SystemConnect です。</p>
log	<p>IDMLOG ディレクトリに格納されるログの名前を指定します。</p>

表 8.2 ~ Radskman のオペレーション パラメータ

パラメータ	説明
logsize	<p>ログ ファイルのサイズをバイト単位で指定します。</p> <p>logsize の値に達すると、バックアップ ファイル (.BAK) が作成されます。デフォルトでは、このファイルは connect.bak です。バックアップ ファイルが既に存在する場合は上書きされます。</p> <p>RAM のデフォルト: 1,000,000 バイト</p> <p>RSM のデフォルト: 1,000,000 バイト</p>
rtimeout	<p>サービスでリポートパネルが要求された場合、クライアント コンピュータをリポートするまでの秒数を指定します。これにより、再起動の前にサブスクライバが作業を保存してアプリケーションを終了することができるようになります。</p>

マシン/ユーザー

マシン/ユーザー パラメータは、マシン コンポーネントおよびユーザー コンポーネントでアプリケーションを使用する場合、または同じクライアント コンピュータに複数のユーザーが存在する場合に使用します。Radia Configuration Server への接続の頻度、ユーザー ログオン パネルの表示、Radia Configuration Server にオブジェクトを送信するタイミングを制御することができます。

表 8.3 ~ Radskman マシン/ユーザー パラメータ

パラメータ	説明
cat	<p>ログオン パネルを表示して、他のサービスのステータスをチェックする場合は、cat = prompt と設定します。</p> <p>サービスのステータス チェックのみを実行する場合は、cat = y と設定します。</p> <p>ユーザーのサービス リストを解決するためにローカルのマシン カタログを使用する場合は、cat = m (4.0 の機能) と設定します。この設定は context = u の場合に使用します。また、通常は local = y の場合にも使用します。</p> <p>RAM のデフォルト: prompt</p> <p>RSM のデフォルト: リクエストのタイプによって異なります。</p>

表 8.3 ~ Radskman マシン/ユーザー パラメータ

パラメータ	説明
context	<p>マシン コンテキストでアプリケーションをインストールする場合は、context = m と設定します。</p> <p>context = m の場合は、以下のデフォルトが想定されています：</p> <pre>uid=\$machine startdir=system cat=prompt ulogon=n</pre> <p>ユーザー コンテキストでアプリケーションをインストールする場合は、context = u と設定します。</p> <p>context = u の場合は、以下のデフォルトが想定されています：</p> <pre>startdir=\$user uid=\$user cat=prompt ulogon=y</pre> <p>RAM のデフォルト: ログオンしているユーザーの場合、コンテキストのデフォルトは U。ログオンしているユーザーがない場合、コンテキストのデフォルトは m。</p> <p>RSM のデフォルト: Radia Software Manager の場合、デフォルト値はありません。すべてのコンポーネントが処理されます。</p>
flushu	<p>local=y と設定しているときに、フィードバックをすぐに取得するために、ローカル接続の終了時にレポートオブジェクトを Radia Configuration Server に送信する場合は、ユーザー接続 (context=u) で flushu=y と接続します。これは、ユーザー接続のデフォルト動作です。</p> <p>local=y と設定しているときに、オブジェクトを Radia Configuration Server に送信しない場合は、ユーザー接続 (context=u) で flushu = n と設定します。ユーザーのオブジェクトは、Radia Configuration Server に送信されるまで増え続けます。</p> <p>マシン コンテキスト (context=m) のときに、すべてのユーザーのレポート オブジェクトを Radia Configuration Server に送信する場合は、flushu=a と設定します。</p> <p>RAM のデフォルト: Y</p> <p>RSM のデフォルト: Y</p>

表 8.3 ~ Radskman マシン/ユーザー パラメータ

パラメータ	説明
local	ローカル クライアント コンピュータからユーザーのサービスのリソースをインストールする場合は、 y に設定します。この設定は context = u の場合にのみ有効で、通常は cat = m と共に使用します。
machfreq	(4.0 の機能) この変数は、クライアント コンピュータをリブートするたびに Radia が実行されないようにする場合に使用します。正数値 <i>n</i> を設定すると、前回のマシン接続から <i>n</i> 時間経った場合にのみマシン接続が実行されます。この値を設定すると、Radia Client は、指定した時間枠内では一度しか実行されないで、シン クライアント コンピュータでの ROM コミット数を軽減することができます。matchfreq を 0 に設定すると、シン クライアントがリブートするたびにマシン接続が実行されます。
ulogon	<i>cat = prompt</i> の場合にのみ使用します。 ログオン パネルを表示しない場合は、 ulogon = n と設定します。 注意: Radia システム トレイを使用している場合は、 ulogon = n と設定します。このパラメータは、Radia ログオン パネルを表示するためのもので、Radia システム トレイではサポートされていません。 RAM のデフォルト: N RSM のデフォルト: Y
userfreq	context = u の場合にのみ使用します。 この変数は、ユーザーがクライアント コンピュータにログインするたびに Radia が実行されないようにする場合に使用します。 0 と設定すると、前回のユーザー接続の後でマシン接続を実行した場合にのみユーザー接続が実行されます。 設定値 <i>n</i> を正数に設定すると、マシン接続が実行された場合、または前回のユーザー接続から <i>n</i> 時間経った場合にのみユーザー接続が実行されます。 userfreq の値を空白にしているか、userfreq の構文自体を入力せず、context = u の場合は、クライアント接続は常にユーザー接続として実行されます。

クライアント オペレーション プロファイル

以下のパラメータは、Radia クライアント オペレーション プロファイルを使用する方法を指定するために使用します。詳細については、このマニュアルの「Radia クライアント オペレーション プロファイル」を参照してください。

表 8.4 ~ Radskman クライアント オペレーション プロファイル パラメータ

パラメータ	説明
cop	<p>(4.0 の機能) 現在のクライアント接続でのみクライアント オペレーション プロファイルの解決を有効にする場合は、Y と設定します。現在のクライアント接続でのみクライアント オペレーション プロファイルの解決を無効にする場合は、N と設定します。</p> <p>RADSEUP オブジェクトが存在する場合、メソッドは実行されず、CLIENT.SETTINGS クラスの設定が使用されます。「メソッド」接続を実行する場合は、M と設定します。つまり、RADSETUP オブジェクトに指定した属性 (EXBSETUP、EXASETUP、EXBEXIT、EXBOUTBX、および CMETHOD など) を使用しますが、クライアント オペレーション プロファイルの解決は実行しません。</p> <p>RAM のデフォルト: N RSM のデフォルト: N</p>
datauri	<p>(4.0 の機能) データ タイプに対して SAP オブジェクトの使用を上書きする場合は、radskman コマンド ラインに datauri を追加してください。datauri は、URI (Universal Resource Identifier) と同一のフォーマットにする必要があります。datauri パラメータの構文については、261 ページの「表 6.2 ~ URI の具体例」を参照してください。</p>
product	<p>(4.0 の機能) SAP.PRODUCT 属性で、SAP を特定の製品専用と指定している場合は、このパラメータでその製品を設定します。たとえば、SAP.PRODUCT が RIM に設定されている場合、radskman コマンド ラインで product=RIM と設定します。複数の製品フィルタを指定する場合は、各製品をカンマで区切ります。</p>
rcsuri	<p>(4.0 の機能) RCS タイプに対して SAP オブジェクトの使用を上書きする場合は、radskman コマンド ラインに rcsuri を追加してください。rcsuri は、URI (Universal Resource Identifier) と同一のフォーマットにする必要があります。rcsuri パラメータの構文については、261 ページの「表 6.2 ~ URI の具体例」を参照してください。</p>

プロセス

プロセス パラメータは、現在のクライアント接続でアプリケーションを修復するか追加するかなど、サービスの処理に関するパラメータです。プロセス パラメータでは、サービスの処理条件の指定、Radia Proxy Server へのアプリケーション データの送信、Radia Client に対する SSL セキュリティの処理なども制御できます。

表 8.5 ~ Radskman プロセス パラメータ

パラメータ	説明
Add	現在のクライアント接続時にアプリケーションをインストールしない場合は、 N と設定します。 RAM のデフォルト: Y RSM のデフォルト: Y
autofix	アプリケーションが壊れているときに自動的に修復する場合は、 autofix = y と設定します。 アプリケーションを自動的に修復しない場合は、 autofix = n と設定します。 RAM のデフォルト: Y RSM のデフォルト: Y
catexp	(4.0 の機能) ZSERVICE クラスの特定の属性に基づいてアプリケーションを処理する場合は、このパラメータを使用します。<attribute name>:<value> の形式で指定します。複数の OR 条件を指定する場合は、スラッシュ (/) で区切ります。たとえば、ZSERVICE.CATGROUP 属性で finance が指定されたアプリケーションのみを処理する場合は、catexp=catgroup:finance と設定します。
del	現在のクライアント接続時にアプリケーションを削除しない場合は、 N と設定します。 RAM のデフォルト: Y RSM のデフォルト: Y
merge	merge をオブジェクト名に設定すると、そのオブジェクトのすべての変数が ZMASTER オブジェクトに格納されます。このパラメータは、Radia Configuration Server に変数を送る場合に指定します。
mnt	(4.0 の機能) 現在の接続で Radia Client のセルフ メンテナンスを処理する場合は、Y と設定します。 注意: mnt を Y に設定しない限り、クライアント セルフ メンテナンスは配布されません。 RAM のデフォルト: N RSM のデフォルト: N
preload	このパラメータは、ステージング サーバーのプレロードに使用します。ファイルのコピー先ディレクトリのロケーションを指定します。別のデータ ディレクトリを指定しない場合は、 preload=y と設定すると、NVD.INI で指定されている IDMDATA ディレクトリが使用されます。
rep	現在のクライアント接続セッションでアプリケーションを修復しない場合は、 N と設定します。 RAM のデフォルト: Y RSM のデフォルト: Y

表 8.5 ~ Radskman プロセス パラメータ

パラメータ	説明
sendcat	クライアント接続の終了時に、クライアント コンピュータの ASERVICE オブジェクトに格納されているサービス リストを Radia Configuration Server に送信する場合は、 y と設定します。これにより、サービス リストに対する追加分析を実行することができます。
sslmgr	Radia Configuration Server のホスト名または IP アドレスを指定します。 注意: セキュアなチャネル (SSL) でクライアント セルフ メンテナンスを実行する場合は、SSL マネージャの IP アドレスの末尾に ::sm というフラグを追加します。
sslport	SSL 接続ポート (通常は 443) を指定します。
upd	現在のクライアント接続セッションでアプリケーションを更新しない場合は、 N と設定します。 RAM のデフォルト: Y RSM のデフォルト: Y
ver	現在のクライアント接続セッションでアプリケーションを検証しない場合は、 N と設定します。 RAM のデフォルト: Y RSM のデフォルト: Y

radskman の例:

以下に、**radskman** の一般的な使用例を示します。

radskman ip=10.10.10.15,port=3464,mname=radia,dname=software,cat=prompt

カタログ (aservice.edm) を停止する最初のカatalog リフレッシュを実行し、セルフ メンテナンスを実行し、Radia Application Manager を使用している場合はユーザー ログオン パネルを非表示にし、すべての必須アプリケーションを処理します。

radskman ip=test.corp.com,port=3464,mname=radia,dname=software,cat=prompt,uid=\$machine,ulogon=n,ind=n

ユーザー ログオン パネルまたは進行状況インジケータ パネルを表示せずに、ユーザー <マシン名> の完全接続をサイレントで実行します。これは、日単位のタイマーで一般的に使用されるコマンドです。**注意:** ip= パラメータは、DNS 名でも IP アドレスでもかまいません。

radskman ip=10.10.10.15,port=3464,mname=radia,dname=software,cat=n,autofix=n

カタログの更新、セルフ メンテナンスの実行、または壊れたアプリケーションの修復なしで必須アプリケーションを検証します。**注意:** このマシンは、cat=n の前に cat=prompt で最初のカatalog リフレッシュを少なくとも一度実行し、カタログを停止する必要があります。

radskman ip=10.10.10.15,port=5004,mname=radia,dname=software,cat=y,sname=WINZIP

サービス名「WINZIP」で単一のアプリケーションをインストールします。カタログの更新のみが実行されます。**注意:** この例では、Radia Configuration Server はカスタム ポート番号を使用しています。

サービスを配布する

radskman ip=10.10.10.15,port=3464,mname=radia,dname=software,cat=prompt,hreboot=Y,ask=Y

すべての必須アプリケーションを処理し、リブート リクエストを処理して、リブート リクエストを確認するメッセージをパネルに表示します。

radskman ip=10.10.10.15,port=3464,uid=STAGER,preload=Y

RADSTAGE のデフォルト ロケーションを使用して、**Radia Staging Server** をサイレントでプレロードします。この構文は多くの場合、**Radia Staging Server** と共存している **Radia Client** に配布される日単位または週単位のタイマーのインスタンスで実行されます。注意: プレロードパラメータは、ユーザー ログオン パネルおよび進行状況インジケータ パネルを自動的に非表示にします。また、メソッド (**ZCREATE**、**ZVERIFY** など) を実行せず、**Radia Configuration Server** での式の評価も行いません。

radskman ip=10.10.10.15,port=3464,uid=STAGER,preload=d:¥stager,ind=Y

D:¥stager のロケーションでステージャをプレロードし、進行状況インジケータ パネルを表示します。注意: **Radia** システム トレイ機能が有効になっている場合は、**Radia** システム トレイで進行状況インジケータがポップアップ表示されます。**Radia** システム トレイが無効になっている場合、進行状況インジケータは別のパネルに表示されます。

radskman context=m

マシン接続を実行します。コンテキストは **m** に指定されており、他のパラメータは渡されていないので、**ip=NOVARCS**、**port=3464**、**uid=\$machine**、**startdir=system**、**cat=prompt**、**ulogon=n**、**mname=Radia**、**dname=software** というデフォルト値が使用されます。

radskman context=u

ユーザー接続を実行します。コンテキストは **u** に指定されており、他のパラメータは渡されていないので、**ip=NOVARCS**、**port=3464**、**uid=\$user**、**startdir=\$user**、**cat=prompt**、**ulogon=y**、**mname=Radia**、**dname=software** というデフォルト値が使用されます。

radskman context=u,userfreq=12

最後のユーザー接続の後にマシン接続が発生し、最後のユーザー接続から少なくとも **12** 時間経っている場合にのみ、ユーザー接続を実行します。

配布方法

以下に、各配布方法の詳細を説明します。それぞれのサブスクリバに合った配布方法を選択してください。1 つのアプリケーションの配信に複数の配布方法を使用することができます。

配布をスケジュールする

Radia スケジューラ サービスを使用すると、指定した時間にサービスを配布することができます。

Radia スケジューラ サービス (radsched) は、**Radia Application Manager** と共にクライアント コンピュータにインストールされます。

Windows NT および **Windows 2000** システムの場合、**Radia スケジューラ**は、自動的に開始するシステム サービスとして実行されます。**Windows 95** および **Windows 98** システムでは、**radsched** へのショートカットが **[スタートアップ]** グループにインストールされます。

注意

Windows 95 または Windows 98 で Radia スケジューラを停止するには、MSCONFIG を実行して **[スタートアップ]** タブをクリックするか、Ctrl + Alt + Del キーを押して、タスクを終了します。[すべてのプログラム] の **[スタートアップ]** に Radia スケジューラが表示されなくなります。

サービスを配布する

サービスの配布をスケジュールするには、Radia Configuration Server の Radia データベースにあるタイマーを設定します。クライアント コンピュータが Radia Configuration Server に接続すると、Radia Configuration Server からクライアント コンピュータにタイマー情報が転送されます。タイマー情報は、ZTIMEQ というオブジェクトの形で転送されます。

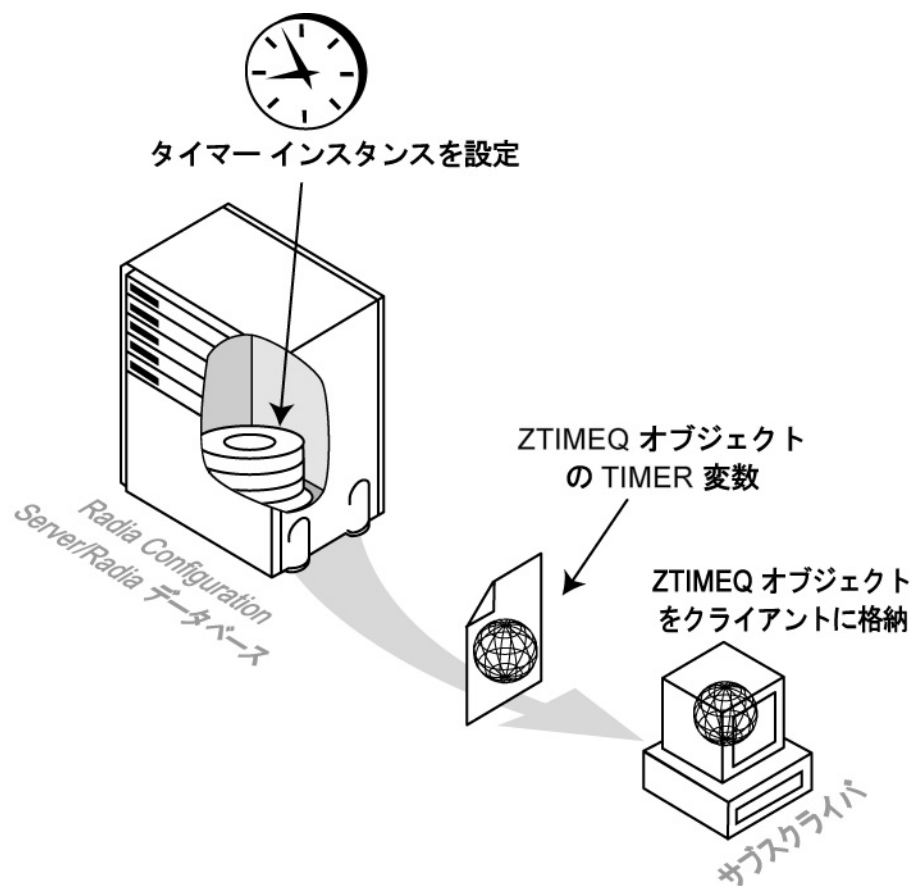


図 8.2 ~ タイマー インスタンスの転送

ここでは、タイマーの作成方法、タイマーの設定方法、および配布対象サービスへの接続方法について説明します。ただし、タイマーを作成および設定する前に、以下の点を検討してください。

- ❑ タイマーの期限を何時に設定しますか。必ずネットワークのトラフィックを考慮に入れて決めてください。
- ❑ 日単位、週単位、時間単位のどの周期でタイマーの期限を設定しますか。
- ❑ タイマーには複数回の期限が必要ですか。たとえば、アプリケーションをインストールするのは 1 回だけですか。それとも、必須アプリケーションの有無を定期的にチェックするタイマーを作成しますか。
- ❑ アプリケーションの起動、インストール、削除、更新のうち、タイマーが期限に達したときにどの処理を実行しますか。

スケジュールによる配布戦略

Radia Application Manager クライアントの実装戦略のうち、推奨できるものとして、スケジュールによる配布という方法があります。この戦略では、**Radia Application Manager** のインストール時に必須アプリケーションの初期セットをインストールし、新しい必須アプリケーションを指定した間隔でチェックするクライアント コンピュータにタイマーを転送します。

ここでは、週単位ですべての必須サービスを更新するサンプル タイマーを作成します。ネットワークの混雑を緩和するために、午後 5 時～午前 7 時の間でランダムに期限が来るようにタイマーを設定します。実際にタイマーを設定する場合は、ここで述べる手順をそれぞれのニーズに合わせてアレンジしてください。

タイマーを作成する

タイマーを作成するには、**Radia System Explorer** を使用して、**SOFTWARE** ドメインに **Scheduling (TIMER)** インスタンスを作成します。

SOFTWARE ドメインに新しいタイマーを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[**Radia Administrator Workstation**] をポイントして、[**Radia System Explorer**] をクリックします。
[**Radia System Explorer** のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
3. [**Radia System Explorer**] ウィンドウが表示されます。
4. [**PRIMARY**] をダブルクリックします。
5. [**SOFTWARE**] をダブルクリックします。

6. [Scheduling (TIMER)] を右クリックします。

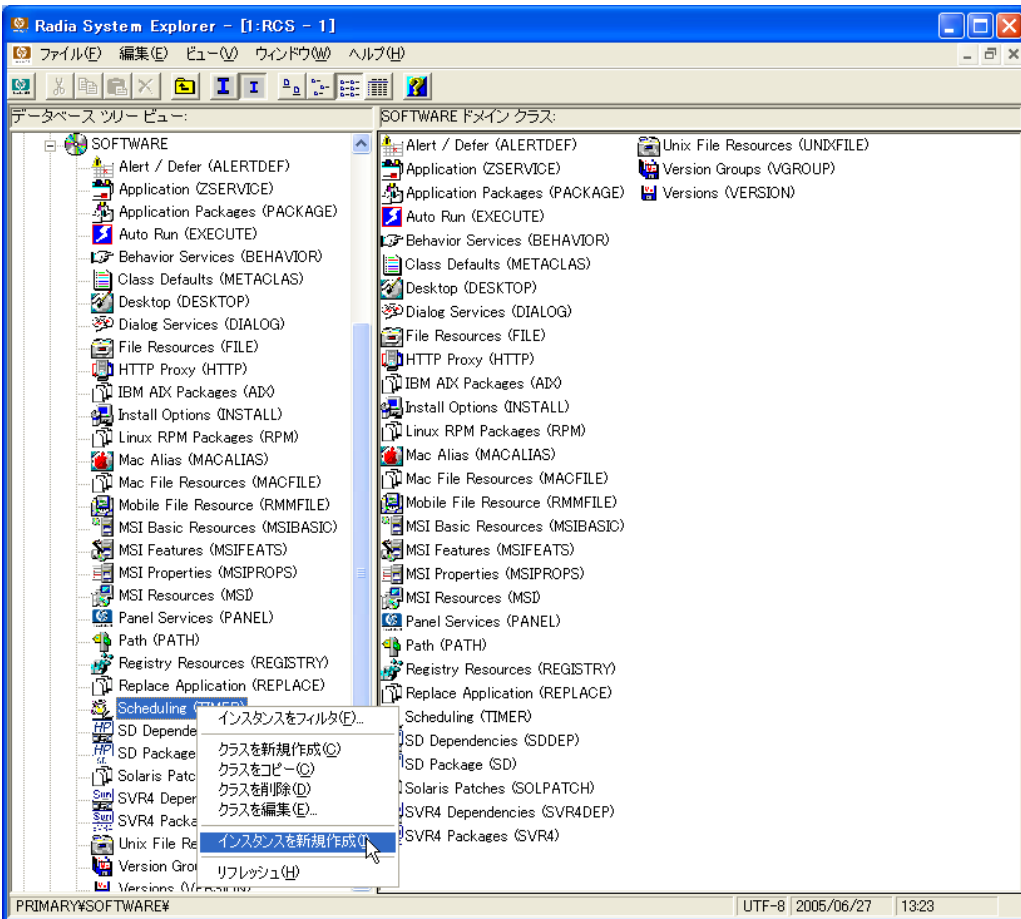


図 8.3 ~ [Scheduling (TIMER)] のショートカット メニュー

7. [インスタンスを新規作成] をクリックします。

サービスを配布する

8. [インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。



図 8.4 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス

9. 新しいタイマー インスタンスの名前 (たとえば、「**Mandatory Apps Timer**」など) を入力します。

10. [OK] をクリックします。

[Scheduling (TIMER)] クラスにタイマー インスタンスが表示されます。

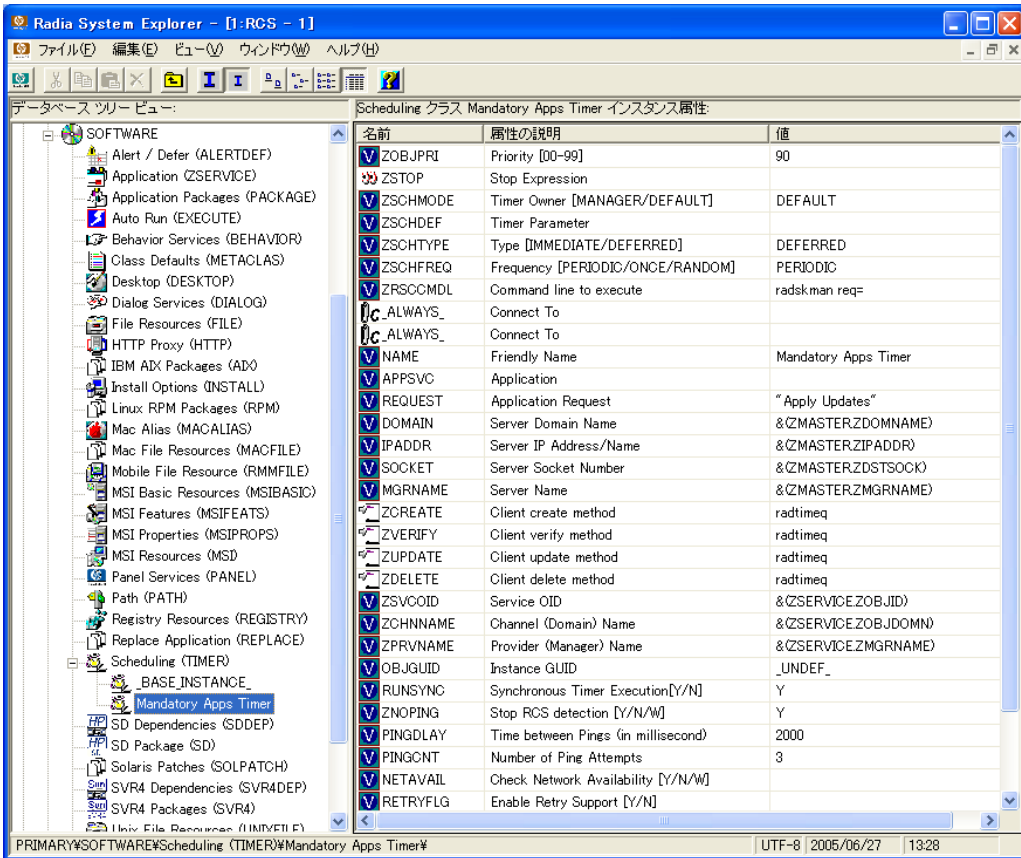


図 8.5 ~ Mandatory Apps Timer が作成された状態

Scheduling (TIMER) クラス属性

タイマー インスタンスの属性には、クライアント コンピュータでタイマーを実行するための情報が格納されます。次の表では、各属性について説明します。

表 8.6 ~ Scheduling (TIMER) の属性

属性	使用方法
<code>_ALWAYS_</code>	他のインスタンスへの接続を格納します。
NAME	現在のインスタンスの簡略名。
NETAVAIL	Y に設定した場合は、タイマー インスタンスを実行する前に、ネットワークが使用できるかどうかをチェックされます。ネットワークが使用できない場合は、ネットワークが使用できるようになるまで、タイマーが開始されるたびにネットワークがチェックされます。 N に設定した場合は、ネットワークが使用できるかどうかをチェックせずに、タイマー インスタンスが実行されます。 W に設定した場合は、タイマー インスタンスを実行する前に、ネットワークが使用できるかどうかをチェックされます。ネットワークが使用できないまま、時間枠の期限に達した場合、タイマーは、次の時間枠まで待ってから、ネットワークが使用できるかどうかを再チェックします。 デフォルトは N です。
PINGDLAY	ZNOPING が N に設定されている場合、PINGDLAY は ping の間隔 (ミリ秒) を指定します。デフォルトは 2000 です。
PINGCNT	ZNOPING が N に設定されている場合、PINGCNT は ping の試行回数を指定します。デフォルトは 3 回です。
RETRYFLG	Y に設定すると、タイマーの終了時間を無視して、RETRYLMT で指定した回数までコマンドが再試行できます。W に設定すると、RETRYLMT で指定した回数までコマンドが再試行できますが、期限を過ぎると再試行は中止されます。N に設定すると、コマンドは再試行されません。注意: 200 以外のリターン コードは成功と見なされ、コマンドの再試行は中止されます。
RETRYINT	コマンドが再試行される間隔 (分) を指定します。この属性を使用する場合は、RETRYFLG を N に設定しないでください。
RETRYLMT	コマンドを再試行する回数を指定します。0 に設定すると、コマンドが成功するまで再試行されます。この属性を使用する場合は、RETRYFLG を N に設定しないでください。

表 8.6 ~ Scheduling (TIMER) の属性

属性	使用方法
RETRYRC	再試行ロジックに適切に対応するリターン コードを指定します。この変数が存在しない場合、またはこの変数に値が設定されていない場合、RETRYRC のデフォルトは 200 になります。リターン コード 200 は、Radia Configuration Server とのネットワーク接続が失敗したために致命的なエラーが発生したことを示します。この属性を設定しており、リターン コード 200 が再試行の対象となっている場合は、必ずリストに 200 を指定してください。
ZNOPING	<p>この属性を使用すると、クライアント コンピュータと Radia Configuration Server との間のネットワーク接続の自動感知を制御することができます。デフォルトは Y です。期限に達したタイマーは、Radia Configuration Server との通信が確立できるかどうかを継続的に評価します。通信が確立されると、タイマーに関連付けられたコマンド ラインが実行されます。コマンド ラインを実行すると、スケジューラ サービスは、タイマーの期限に再び達したかどうかという通常の評価を再開します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • ZNOPING 属性が ZTIMEQ オブジェクトに存在しない場合、スケジューラ サービスは Radia Configuration Server に対して ping を実行しません。 • Radia Configuration Server に対して ping をしないようにスケジューラ サービスを指定する場合は、ZNOPING を Y に設定します。この設定は、モバイル ユーザーの場合に特に役立ちます。 • Radia Configuration Server に対して ping を実行するようにスケジューラ サービスを指定する場合は、ZNOPING を N に設定します。 • Radia Configuration Server に対する ping に成功した場合は、ZRSCCMDL で指定したコマンドが実行されます。また、クライアントの ZTIMEQ オブジェクト内の ZPENDING 属性が N に設定されます。これは、Radia Configuration Server に対してスケジューラ サービスが再び ping を実行する必要はないことを示します。 • Radia Configuration Server に対する ping に失敗した場合、タイマーはそれ以上処理されません。また、ZPENDING 属性の値は Y のままです。これは、次にスケジューラ サービスが実行される場合、Radia Configuration Server に対する ping が再び実行されることを示します。 • ZCHDEF 属性で終了期限を指定する場合は、ZNOPING を W に設定します。これにより、スケジューラ は、Radia Configuration Server に対して ping を実行してから、コマンドを実行します。Radia Configuration Server を使用できない場合、ZPENDING フラグは「W」に設定されます。ZSCHDEF で期限を設定している場合は、その時刻を過ぎると、ZPENDING フラグが N に設定されます。次にスケジュールしている時刻になるまで、スケジューラ はコマンドを実行しません。

表 8.6 ~ Scheduling (TIMER) の属性

属性	使用方法
ZRSCCMDL	<p>タイマーが期限に達したときにクライアント コンピュータで実行するコマンド ラインを指定する場合は、この属性を使用します。</p> <p>radskman を使用すると、Radia が管理する必須アプリケーションが検証され、更新されます。radskman のパラメータ一覧およびコマンド例については、「接続パラメータ (Radskman)」を参照してください。</p>
ZSCHDEF	<p>タイマーの期限を指定する場合は、この属性を使用します。この属性の構文は、タイマーの期限の頻度によって異なります。頻度には、DAILY、HOURLY、INTERVAL、MONTHLY、MONTHDAY、NUMDAY、STARTUP、WEEKDAY、WEEKLY のいずれかを指定します。</p> <p>ZSCHDEF の設定方法については、366 ページの「タイマーの期限を指定する」を参照してください。</p>
ZSCHFREQ	<p>タイマーの期限の頻度を指定する場合は、この属性を使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> タイマーの期限が一度だけ来るように指定する場合は、ZSCHFREQ を ONCE に設定します。 タイマーの期限が定期的に来るように指定する場合は、ZSCHFREQ を PERIODIC に設定します。 タイマーの期限がランダムに来るように指定する場合は、ZSCHFREQ を RANDOM に設定します。 <p>詳細については、368 ページの「指定した期間内の任意の時間帯にアプリケーションを配布する」を参照してください。</p>

表 8.6 ~ Scheduling (TIMER) の属性

属性	使用方法
ZSCHTYPE	<p>ZSCHFREQ = PERIODIC の場合にのみ使用します。</p> <p>ZSCHTYPE を DEFERRED に設定すると、タイマー インスタンスがいつ評価されるかに関係なく、イベントは、初めて発生するときに次のスケジュール時刻まで延期されます。これは、たとえば毎日の午前 4 時 (非ピーク時) にスケジュールされたイベントが、その日のうちにクライアント コンピュータに送信される場合を想定したものです。延期しなかった場合、このイベントは、次の朝まで「待つ」ことなくその日のうちに発生します。</p> <p>例 1:</p> <p>ZSCHDEF = DAILY(&ZSYSYDATE,4:00:00) と指定してタイマーを作成および配布するとします。</p> <p>ZSCHTYPE = IMMEDIATE と設定すると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 4:00:00 より前の場合、インスタンス内のコマンドはその日の 4:00:00 に実行されます。 4:00:00 より後の場合、インスタンス内のコマンドはすぐに実行されます。 <p>ZSCHTYPE = DEFERRED と設定すると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 4:00:00 より前の場合、インスタンス内のコマンドは次の日の 4:00:00 に実行されます。 4:00:00 より後の場合、インスタンス内のコマンドは次の日の 4:00:00 に実行されます。 <p>例 2:</p> <p>ZSCHDEF = WEEKDAY(FRIDAY,4:00:00) と指定してタイマーを作成および配布するとします。</p> <p>ZSCHTYPE = IMMEDIATE と設定すると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 金曜日または金曜日以外の日で、4:00:00 より前の場合、インスタンス内のコマンドは金曜日の 4:00:00 に実行されます。 金曜日で、4:00:00 より後の場合、インスタンス内のコマンドはすぐに実行されます。 <p>ZSCHTYPE = DEFERRED と設定すると、次のようになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> 金曜日または金曜日以外の日で、4:00:00 より前の場合、インスタンス内のコマンドは、次週の金曜日 4:00:00 に実行されます。 金曜日で、4:00:00 より後の場合、インスタンス内のコマンドは、次週の金曜日 4:00:00 に実行されます。
ZSTOP	<p>ZSTOP 属性の式で「true」と評価されると、インスタンスの解決がスキップされます。空白のままの場合、インスタンスは許可され、解決処理が続行されます。これは、どのサブクライアントがタイマーを受信するかについて条件を設定する場合に便利です。</p>
<p>以下の属性の値は、TIMER クラスの BASE INSTANCE で設定されているので、編集できません。</p>	
RUNSYNC	<p>タイマーの同期実行が発生するかどうかを指定します。デフォルトの値は Y です。</p>
ZOBJPRI	<p>クライアント接続時に配布される他の要素に対して、ZTIMEQ オブジェクトを配布する際の優先度を指定します。ZOBJPRI よりも優先度の数値が低い要素は、現在の ZTIMEQ オブジェクトの前に配布されます。90 の場合は、ベース インスタンスから継承されます。</p>
ZSCHMODE	<p>タイマーの所有者を指定します。デフォルトのままにします。</p>

表 8.6 ~ Scheduling (TIMER) の属性

属性	使用方法
ZSVCOID	現在の Scheduling インスタンスの接続先となる Application インスタンスのオブジェクト ID を指定します。値はベース インスタンスから継承されます。
ZCHNNAME	現在の Scheduling インスタンスの接続先となる Application インスタンスを Radia データベース内のドメイン名で指定します。値はベース インスタンスから継承されます。
ZPRVNAME	現在のタイマー インスタンスを受信するサブスクリバの接続先となる Radia Configuration Server の名前です。値はベース インスタンスから継承されます。
ZCREATE	クライアント コンピュータで実行されるスケジューラ作成メソッドです。値はベース インスタンスから継承されます。
ZVERIFY	クライアント コンピュータで実行されるスケジューラ検証メソッドです。値はベース インスタンスから継承されます。
ZUPDATE	クライアント コンピュータで実行されるスケジューラ更新メソッドです。値はベース インスタンスから継承されます。
ZDELETE	クライアント コンピュータで実行されるスケジューラ削除メソッドです。値はベース インスタンスから継承されます。

タイマーを設定する

以上、タイマー インスタンスの各属性について理解したら、次に属性を設定するための構文を見ていきましょう。ここでは、毎週 5:00 PM ~ 7:00 PM の間で、ランダムに必須アプリケーションを配布します。そのプランに対応する値を使用して、サンプル タイマーを設定します。

タイマーの期限を指定する (ZSCHDEF)

ZSCHDEF および ZSCHFREQ を使用すると、タイマーの期限およびその期限の頻度が指定できます。ZSCHDEF はタイマーの期限、ZSCHFREQ は期限の頻度を示します。

タイマーの期限が一度だけ来るように指定する場合 (ZSCHFREQ = ONCE) も、定期的に来るように指定する場合 (ZSCHFREQ = PERIODIC) も、次の表を参照して、ZSCHDEF の値に対応する構文を決めます。

表 8.7 ~ ZSCHDEF 属性の構文

タイプ	構文	タイマーの期限
DAILY	DAILY(&ZSYSDATE,24:00:00)	システム日付の毎日深夜 0:00。
WEEKLY	WEEKLY(&ZSYSDATE,01:00:00)	1 週間ごとの午前 1:00。
WEEKDAY	WEEKDAY(Name of Weekday*,01:00:00)	<i>Name of Weekday*</i> で指定した特定の曜日ごとの午前 1:00。曜日は大文字で指定してください。 * 「 <i>Name of Weekday</i> 」には、「MONDAY」などの曜日の文字列が入ります。
HOURLY	HOURLY(&ZSYSDATE,08:41:00)	システム日付の午前 8:41 から 1 時間ごと。
INTERVAL	INTERVAL(&ZSYSDATE,08:41:00,,30)	システム日付の午前 8:41 から 30 分ごと。 注意: ZSCHFREQ を RANDOM に設定すると、4 種類の引数を INTERVAL で指定できます。3 番目の引数は ZCHFREQ を RANDOM に設定した場合に使用しますが、設定しなかった場合でも、カンマは残しておきます。ZCHFREQ が RANDOM の場合、2 番目の引数ではランダムな間隔の開始時刻、3 番目の引数では終了時刻を設定します。
MONTHDAY	MONTHDAY(<i>Name of Weekday*</i> ,01:00:00,,2)	その月の第 2 週から、 <i>Name of Weekday*</i> で指定した特定の曜日ごとの午前 1:00。曜日は大文字で指定してください。最後の引数を指定しなかった場合は、その月の第 1 週もタイマーの期限の対象になります。 注意: ZSCHFREQ を RANDOM に設定すると、4 種類の引数を MONTHDAY で指定できます。3 番目の引数は ZCHFREQ を RANDOM に設定した場合に使用しますが、設定しなかった場合でも、カンマは残しておきます。ZCHFREQ が RANDOM の場合、2 番目の引数ではランダムな間隔の開始時刻、3 番目の引数では終了時刻を設定します。
MONTHLY	MONTHLY(20040215,01:00)	2004 年 2 月 15 日の午前 1:00 に実行されます。ZCHFREQ が RANDOM の場合は、2 番目の引数でランダムな間隔の開始時刻を指定し、3 番目の引数を追加して終了時刻を設定します。 注意: ほかのスケジュール頻度とは異なり、MONTHLY では、実行された日ではなく、もともとスケジュールされていた日を基に再スケジュールが実行されます。たとえば、ZSCHDEF を MONTHLY(20040116,05:30:00) と設定したにもかかわらず、2004 年 1 月 16 日にクライアント デバイスはオフになっており、1 月 18 日まで実行されなかった場合、新しいスケジュールは、MONTHLY(20040118,05:30:00) ではなく、MONTHLY(20040216,05:30:00) になります。
NUMDAYS	NUMDAYS(20000803,08:00:00,,14)	2000 年 8 月 3 日の午前 8:00 から 2 週間ごと。

表 8.7 ~ ZSCHDEF 属性の構文

タイプ	構文	タイマーの期限
STARTUP	STARTUP	Radia スケジューラがクライアント デバイスで開始されると、ZSCHDEF が STARTUP に設定されているタイマー インスタンスがすべて実行されます。特殊な条件 (NETAVAIL、ZNOPING、および RETRYFLG) がすべてチェックされます。すべての STARTUP インスタンスが実行されると、RADSCHEM は通常のタイマー ループに戻ります。通常のタイマー ループで STARTUP インスタンスが実行されるのは、(NETAVAIL または ZNOPING に失敗したか、RETRYFLAG がオンになっており、リターン コードが起動時の実行で 200 だったために) STARTUP インスタンスで ZPENDING フラグが設定された場合のみです。

指定した期間内の任意の時間帯にアプリケーションを配布する

指定した期間内で、時間を特定せずにアプリケーションを配布することもできます。これによって、配布処理が特定の時間帯に集中しなくなるので、Radia Configuration Server に対する負荷が分散し、ネットワークの混雑が緩和されます。

そのためには、タイマーの期限がランダムに来るように設定してから (ZSCHFREQ = RANDOM)、アプリケーションを配布する時間範囲を ZSCHDEF で指定します。

この場合、ZSCHDEF の構文は次のとおりです。

```
ZSCHDEF =<frequency>(<date>, <from_time>, <to_time>, <limit>)
```

表 8.8 ~ ZSCHFREQ を RANDOM に設定した場合の ZSCHDEF パラメータ

パラメータ	説明
<frequency>	サポートされている頻度の値。DAILY、HOURLY、INTERVAL、NUMDAY、WEEKLY、WEEKDAY のいずれかを指定します。
<date>	イベントを開始する日付。YYYYMMDD の形式で指定します。
<from_time>	ランダム 配布の開始時刻。HH:MM:SS の形式で指定します。
<to_time>	ランダム 配布の終了時刻。HH:MM:SS の形式で指定します。
<limit>	オプション パラメータ。指定した時刻以降に配布は実行されません。HH:MM:SS の形式で指定します。

次の例では、必須アプリケーションを週単位で配布するようにタイマーを設定します。ただし、ネットワークの混雑を避けるために、配布 スケジュールを午後 5:00~7:00 の任意の時間に設定します。

タイマーの期限を指定するには

1. Radia System Explorer のリスト ビューで、タイマー インスタンスの場所を指定し、**[ZSCHFREQ]** をダブルクリックします。
[インスタンス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. **[Frequency]** ボックスの一覧から、**[RANDOM]** をクリックします。
3. **[ZSCHDEF]** をクリックします。
4. **[Timer Parameter]** ボックスで、「**WEEKLY(&ZSYSDATE,17:00:00,19:00:00)**」と入力します。



図 8.6 ~ ZSCHDEF の値の指定

サービスを配布する

5. **[ZSCHTYPE]** をクリックします。
6. **[Type (IMMEDIATE/DEFERRED)]** ボックスの一覧から、**[IMMEDIATE]** をクリックします。
7. タイマー インスタンスの属性の編集を完了したら **[OK]** をクリックし、変更を確認するメッセージが表示されたら **[はい]** をクリックします。
または
8. 編集する次の属性を選択します。

コマンド ラインを指定する (ZRSCMDL)

タイマーが期限に達すると、指定したコマンド ラインがクライアント コンピュータで実行されます。

注意

タイマーの動作を確認する場合は、**SystemDrive:\Notepad.exe** などのコマンド ラインを実行するタイマーを作成するという方法があります。その際、タイマーがすぐに期限に達するように設定してください。それをサービスにアタッチし、サービスを配布します。クライアント コンピュータでタイマーが期限に達すると、メモ帳 (アプリケーション) が起動します。

コマンド ラインを指定するには

1. Radia System Explorer のリスト ビューで、タイマー インスタンスの場所を指定し、**[ZRSCCMDL]** をダブルクリックします。
[インスタンス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。

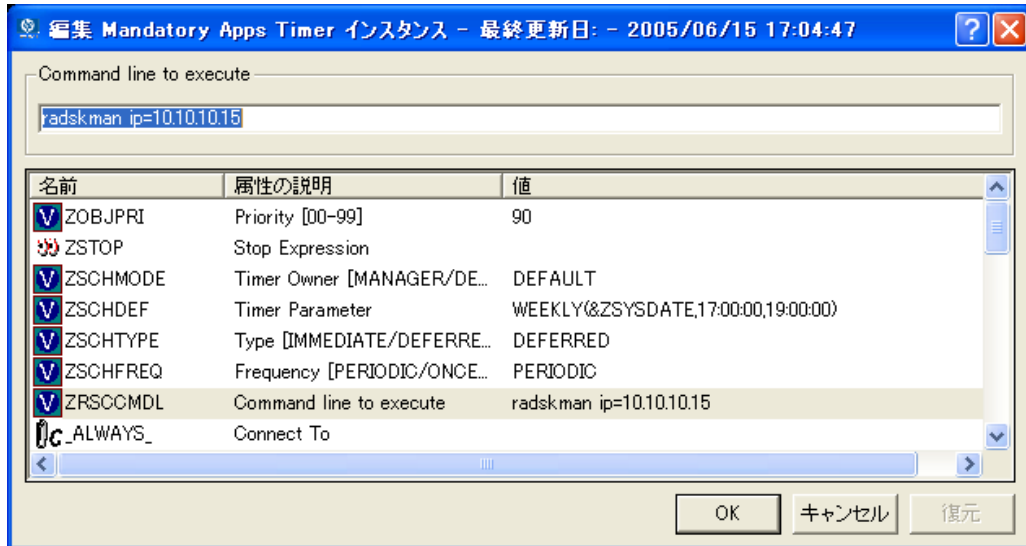


図 8.7 ~ コマンド ラインの指定

2. **[Command line to execute]** ボックスで、必要なプログラムを実行するコマンド ラインを入力します。
3. **[OK]** をクリックします。
4. 変更を確認するメッセージが表示されたら、**[はい]** をクリックします。

この例では、新しい必須アプリケーションを週単位でサブスクリバに配布します。次の手順では、すべての必須サービスを更新し、クライアントのセルフ メンテナンスを実行する方法を示します。

タイマーをサービスに接続する

タイマーを作成したら、それをサービスに接続します。サブスクリイバは、タイマーが接続されているサービスを受信すると、次回 **Radia Configuration Server** にクライアント接続を実行したときに **ZTIMEQ** オブジェクトのタイマー情報を受信します。

ここまでの手順では、必須アプリケーションを配布するタイマーを作成しました。このサンプル タイマーを **GS-Calc** サービスに接続します。次の手順では、すべてのサブスクリイバがこのサービスを受信することを前提にしています。

1. タイマーを **GS-Calc** サービスに接続するには
2. **Radia System Explorer** で、**[PRIMARY]** をダブルクリックします。
3. **[SOFTWARE]** をダブルクリックします。
4. **[Application (ZSERVICE)]** クラスをダブルクリックします。
5. **[GS-CALC]** を右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。

6. [接続を表示] をクリックします。[SOFTWARE.ZSERVICE 接続] ダイアログ ボックスが表示されます。



図 8.8 ~ 接続可能クラスの表示ダイアログ ボックス

7. **[Scheduling (TIMER)]** をクリックし、**[OK]** をクリックします。リスト ビューに **TIMER** クラス インスタンスが表示されます。

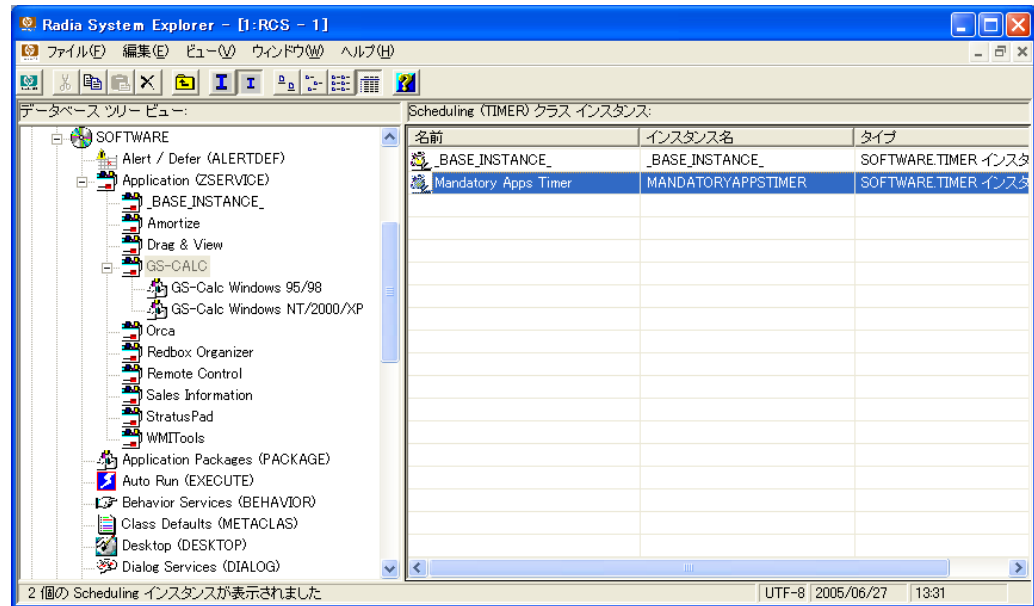


図 8.9 ~ リスト ビューの TIMER クラス インスタンス

8. リスト ビューで **[Mandatory Apps Timer]** をクリックし、適切な **[Application (ZSERVICE)]** インスタンス (この例では **[GS-CALC]**) にドラッグします。カーソルがペーパークリップの形になったらマウス ボタンを離します。**[接続属性の選択]** ダイアログ ボックスが表示されます。
9. **[コピー]** をクリックします。
10. **GS-Calc** サービスを **[Mandatory Apps Timer]** に接続するかどうかを確認するメッセージが表示されたら、**[はい]** をクリックします。
11. **[OK]** をクリックして確認メッセージを閉じます。

タイマーの配布をテストする

クライアント コンピュータが、タイマーの作成後に初めて Radia Configuration Server に接続すると、タイマー情報が ZTIMEQ オブジェクトの形でクライアント コンピュータに転送されます。ZTIMEQ オブジェクトは、IDMROOT ディレクトリ (デフォルトでは、**SystemDrive:¥Program Files¥Novadigm¥Lib**) に格納されます。

ここでは、ZTIMEQ オブジェクトを確認する目的で、クライアント コンピュータを Radia Configuration Server に接続します。テストを行うため、すべての必須サービスを更新し、クライアントのセルフ メンテナンスを実行するコマンド ラインをクライアント コンピュータで実行します。

Radia Configuration Server に接続するには

1. クライアント コンピュータのコマンド プロンプトで、ディレクトリを **SystemDrive:¥Program Files¥Novadigm** に変更します。これは、**radskman** のデフォルト ロケーションです。
2. 次のコマンド ラインを入力します。

```
radskman ip=<manager ip>.port=<mgr_port>
```

radskman および上記のパラメータの詳細については、344 ページの「[接続パラメータ \(Radskman\)](#)」を参照してください。

注意

さらに詳細なテストを行う場合は、コマンド ラインを記述したバッチ ファイルの作成を検討してください。作成したバッチ ファイルはクライアント コンピュータの IDMSYS (デフォルトでは、**SystemDrive:¥Program Files¥Novadigm**) に保存し、クライアント コンピュータのデスクトップにショートカットを作成してください。

3. キーボードの **Enter** キーを押します。クライアント接続が完了したら、クライアント コンピュータの ZTIMEQ オブジェクトが参照できます。

タイマー オブジェクト (ZTIMEQ.EDM) を参照する

クライアント コンピュータの Radia Configuration Server への接続が完了し、ZTIMEQ オブジェクトがクライアント コンピュータに格納されました。Radia Administrator Workstation の一部としてインストールされる Radia Client Explorer を使用すると、ZTIMEQ オブジェクトが表示、変更できます。

注意

タイマーが期限に達すると、クライアント接続時に ZTIMEQ オブジェクトがクライアント コンピュータから削除されます。

TIMER.ZSCHFREQ 属性でタイマーの期限が一度だけ来るように指定した場合、ZTIMEQ オブジェクトは、次のクライアント接続の間でタイマーが最後の期限に達するとすぐに削除されます。TIMER.ZSCHFREQ 属性でタイマーの期限が複数回来るように指定した場合、ZTIMEQ オブジェクトは、次のクライアント接続の間でタイマーが最後の期限に達するとすぐに削除されます。

ZTIMEQ オブジェクトは、Scheduling (TIMER) インスタンスごとに 1 つのインスタンスを Radia データベースに格納します。たとえば、2 つの異なるサービスにそれぞれタイマー インスタンスが関連付けられている場合、ZTIMEQ オブジェクトには 2 つのインスタンスがあります。

クライアント コンピュータの ZTIMEQ オブジェクトを参照するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia Client Explorer] をクリックします。

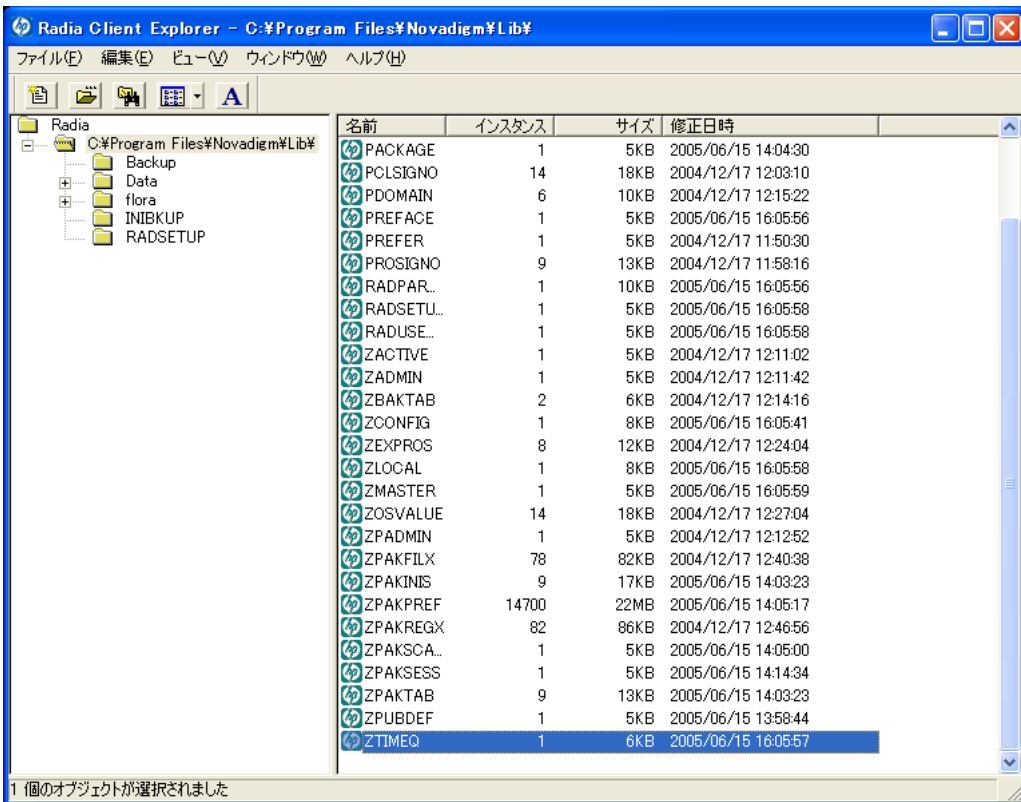


図 8.10 ~ [Radia Client Explorer] でのオブジェクト表示

サービスを配布する

2. [ZTIMEQ] オブジェクトをダブルクリックします。ZTIMEQ オブジェクトが表示されます。

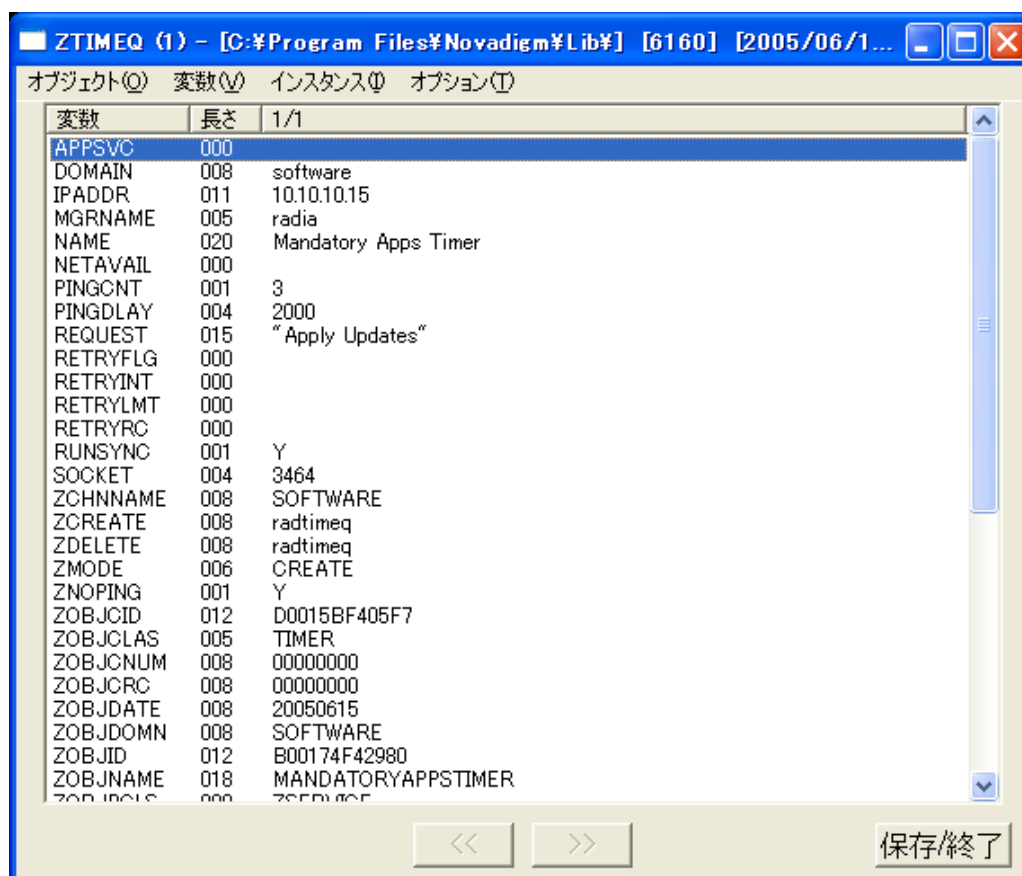


図 8.11 ~ ZTIMEQ オブジェクトのインスタンス

タイマーの動作を実験する

タイマーの動作を実験する場合、クライアント コンピュータにある ZTIMEQ オブジェクトの ZRSCCMDL、ZSCHDEF、ZSCHFREQ、および ZSCHTYPE 属性を変更すると、さまざまな状況で何が起こるかが確認できます。

ZTIMEQ の属性を編集するには

1. 編集する属性をダブルクリックします。
[変数の変更] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. 新しい値を入力します。
3. [保存/終了] をクリックします。

タイマーが期限に達するかどうかを簡単に判別するには、メモ帳などの実行ファイルを実行するように ZRSCCMDL を変更します。タイマーが期限に達すると、メモ帳アプリケーションが起動するので、タイマーが期限に達したことが確認できます。

タイマー ログ

タイマー イベントは、IDMLOG ディレクトリ (デフォルトでは、**SystemDrive:\Program Files\Novadigm\Log**) に格納されている 3 つのログで追跡されます。

次の表では、各タイマー ログについて説明します。

表 8.9 ~ タイマー ログ

ログ ファイル	使用方法
RADSCHED.LOG	スケジューラが最後に期限に達したときの結果を記録します。 スケジューラ radsched は、バックグラウンドで 1 分に 1 回実行され、ZTIMEQ クライアント オブジェクトを検証して、タイマーが期限に達したかどうかを確認します。このログは、最新の期限の情報のみを保持します。
RADSHIST.LOG	タイマー インスタンスが期限に達したためにディスパッチされたすべてのプログラムを記録します。 radsched を最後に開始してから実行されたすべてのアクティビティが保持されます。
RADTIMEQ.LOG	radtimeq メソッドが最後に実行されたときに発生したイベントを記録します。 このメソッドは、タイマーがアタッチされるアプリケーションが作成、更新、検証、または削除されると実行されます。アプリケーションに関連して行われたアクティビティと共に、最後の実行のイベントのみがログに記録されます。

サブスクリバに通知する

Radia Notify を使用すると、1 つまたは複数のクライアント コンピュータに対して、Radia Configuration Server への接続と、アプリケーションのインストール、更新、または削除が強制的に実行できます。Radia Notify サービスは、各クライアント コンピュータのバックグラウンドで実行され、Radia Configuration Server から通知メッセージを受信する場合に備えて待機します。メッセージを受信されると、クライアント コンピュータは Radia Configuration Server に接続し、通知処理によって開始されたアクションを実行します。Radia Notify では、クライアント コンピュータに電子メールを送信することもできます。

注意

Radia Management Portal を使用する場合は、通知タスクが使用できます。詳細については、『Radia Management Portal ガイド』を参照してください。

通知は、以下のいずれかの方法で開始できます。

- **Application (ZSERVICE)** インスタンスのショートカット メニューで [サブスクリバに通知] を選択する。この方法は、アプリケーションの**更新**または**削除**の場合にのみ使用します。通知対象は**既存**のサブスクリバなので、アプリケーションのインストールの場合は使用できません。
- ドラッグ アンド ドロップ通知コマンドを作成する。この方法は、アプリケーションのインストール、更新、削除の場合に使用できます。ドラッグ アンド ドロップ通知には、アプリケーションをクライアント コンピュータにインストールしていない場合でも通知が実行できるという利点があります。

警告

ドラッグ アンド ドロップ通知は、Radia Configuration Server が 1 つしかない環境で使用するための機能です。複数の Radia Configuration Server が動作している環境では、Radia Management Portal の使用を検討してください。詳細については、当社の営業担当にお問い合わせください。

通知を使用する際の要件

通知を使用するには、以下の要件を満たしている必要があります。

- 通知の前に、クライアント コンピュータが **Radia Configuration Server** に接続している。この情報は、**PROFILE** ファイルに記録されています。**PROFILE** ファイルには、クライアント コンピュータのネットワーク アドレスが格納されており、このアドレスが通知に使用されます。

警告

通知機能では、Radia データベースの **PROFILE** ファイルに情報が格納されているサブスクリバにのみ通知を行います。

- **Radia Configuration Server** の設定ファイル **EDMPROF.DAT** が、下の図 8.12 のように適切設定されている。サーバーがインストールされると、この **Radia Configuration Server** 設定ファイル内に、通知に関連する行が作成されます。

```
[MGR_ATTACH_LIST]
ATTACH_LIST_SLOTS = 15
RESTART_LIMIT = 7
VERIFY_INTERVAL = 5
CMD_LINE=(zutilmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zrexmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(ztcpmgr PORT=3464,NAME=tcpmgr_3464) RESTART=YES
CMD_LINE=(znfytmgr NAME=NotifyManager) RESTART=YES ← Notify Manager に必要なコマンドラ
CMD_LINE=(zrtrymgr) RESTART=YES                               イン
```

図 8.12 ~ Radia Configuration Server 設定ファイル (通知機能を使用する場合)

- (ドラッグ アンド ドロップ通知でコマンドを実行する場合) 実行するプログラムが **IDMSYS** ディレクトリ (**SystemDrive:¥Program Files¥Novadigm¥**) に格納されている。
- (サブスクリバへの通知に電子メールを使用する場合) サブスクリバの正しい電子メールアドレスが、**POLICY** ドメイン内の **USER** クラスの **USER** インスタンスの **EMAIL** 属性に格納されている。
- (サブスクリバへの通知に電子メールを使用する場合) **Radia Configuration Server** は電子メールが処理できるよう設定されている。

ZSERVICE インスタンスから通知を開始する

サービスを更新または削除する場合は、**Application (ZSERVICE)** インスタンスのショートカットメニューで通知を開始します。

通知機能では、オーディエンス リスト内のクライアント コンピュータと通信します。**Radia** によってアプリケーションがクライアント コンピュータにインストールされたときに、そのクライアント コンピュータはオーディエンス リストに追加されます。

ZSERVICE インスタンスから通知を開始するには

1. **[GS-CALC]** などの **[Application (ZSERVICE)]** インスタンスを右クリックします。
ショートカット メニューが表示されます。

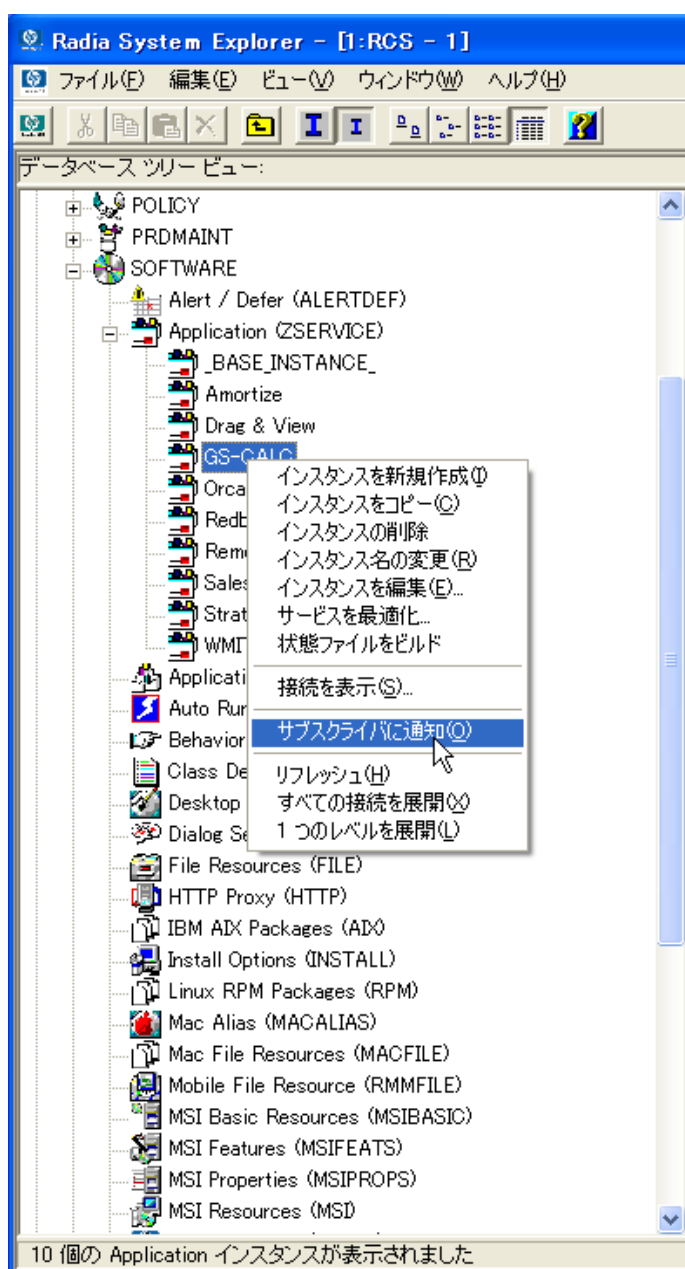


図 8.13 ~ Application (ZSERVICE) インスタンスのショートカット メニュー

2. [サブスクリバに通知] をクリックします。

通知によって、POLICY ドメインからサブスクリバのリストが取得されます。選択したアプリケーションにサブスクリバが存在しない場合は、次のメッセージが表示されます。

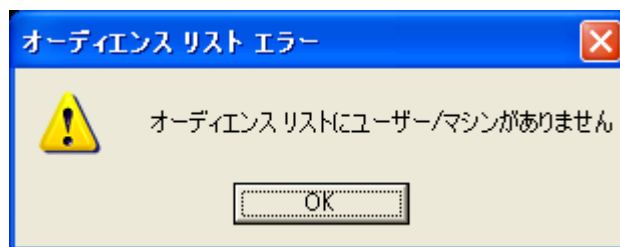


図 8.14 ~ オーディエンス リストにユーザーが指定されていない場合に表示される警告メッセージ

選択したアプリケーションにサブスクリバが存在しない場合は、オーディエンス リストを作成するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

3. オーディエンス リストを作成する場合は、[はい] をクリックします。
[Radia Notify Manager] が表示されます。

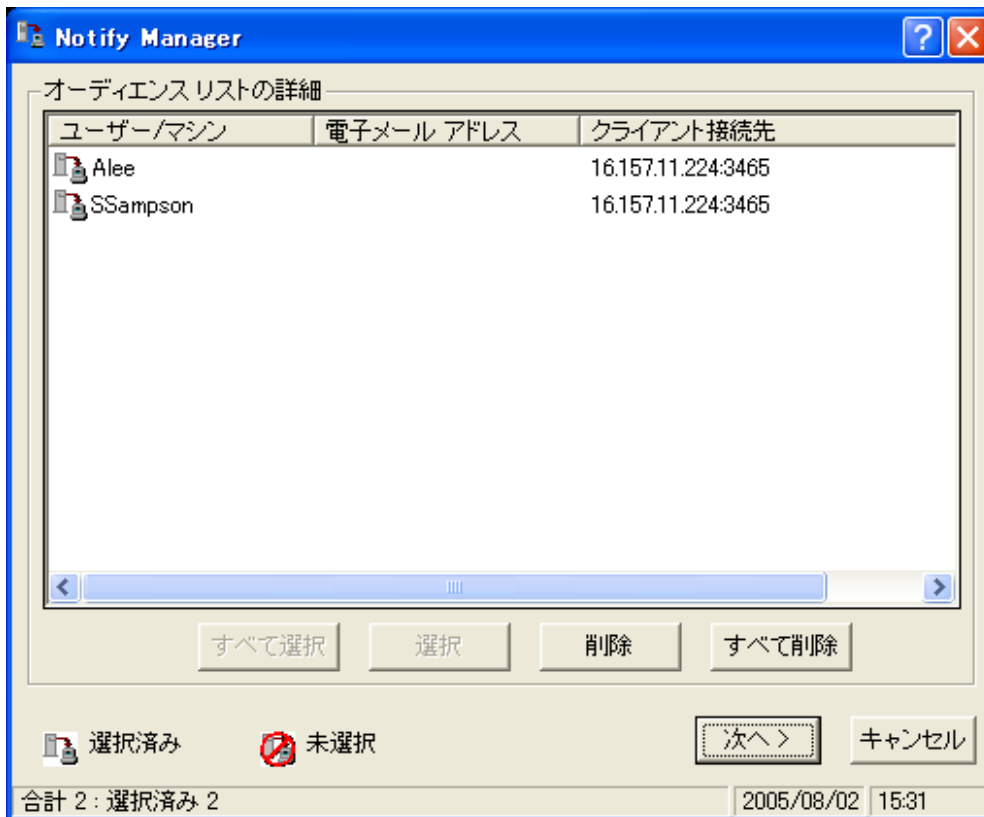


図 8.15 ~ 通知オーディエンス リスト

アプリケーションのサブスクリイバのリストが、[オーディエンス リストの詳細] に表示されます。

- デフォルトでは、すべてのオーディエンスに通知されます。
- 個々のサブスクリイバを選択するには、[すべて削除] をクリックします。次に、適切なサブスクリイバを選択して、[選択] をクリックします。
- 個々のサブスクリイバを削除するには、目的のサブスクリイバを選択して、[削除] をクリックします。

上の図に示すとおり、サブスクリイバの左側にある記号は、そのサブスクリイバが選択されているかどうかを示します。オーディエンス リストのクライアント コンピュータの合計数および選択したクライアント コンピュータの数は、ダイアログ ボックスの左下に表示されます。

4. 通知オーディエンス リストでクライアント コンピュータを選択したら、[次へ] をクリックします。
5. [通知タイプ] をクリックして、オーディエンス リストのすべてのメンバーに対する通知タイプを選択します。

- **[電子メールの送信]**

このオプションをクリックすると、アプリケーションのステータスがサブスクリイバに通知されます。詳細については、『**Radia Software Manager ガイド for Windows**』を参照してください。

ユーザー インスタンスにあるサブスクリイバの電子メール属性 (EMAIL) には、有効なエントリーを格納する必要があります。[件名] ボックスおよび [メッセージ] ボックスに必ず情報を入力してください。

- **[ターゲット マシンのアプリケーションを更新します]**

このオプションをクリックすると、クライアント コンピュータ上のアプリケーションの更新または新規バージョンがインストールされます。

- **[ターゲット マシンのアプリケーションを削除します]**

このオプションをクリックすると、クライアント コンピュータからアプリケーションが削除できます。

通知機能では通常、アプリケーションを削除する際にクライアントの許可を要求しません。そのため、クライアント コンピュータが自動で実行中の場合でも、アプリケーションが削除できます。

アプリケーションの削除にサブスクリバの許可が必要な場合は、[クライアントでの削除を要求] チェック ボックスをオンにします。

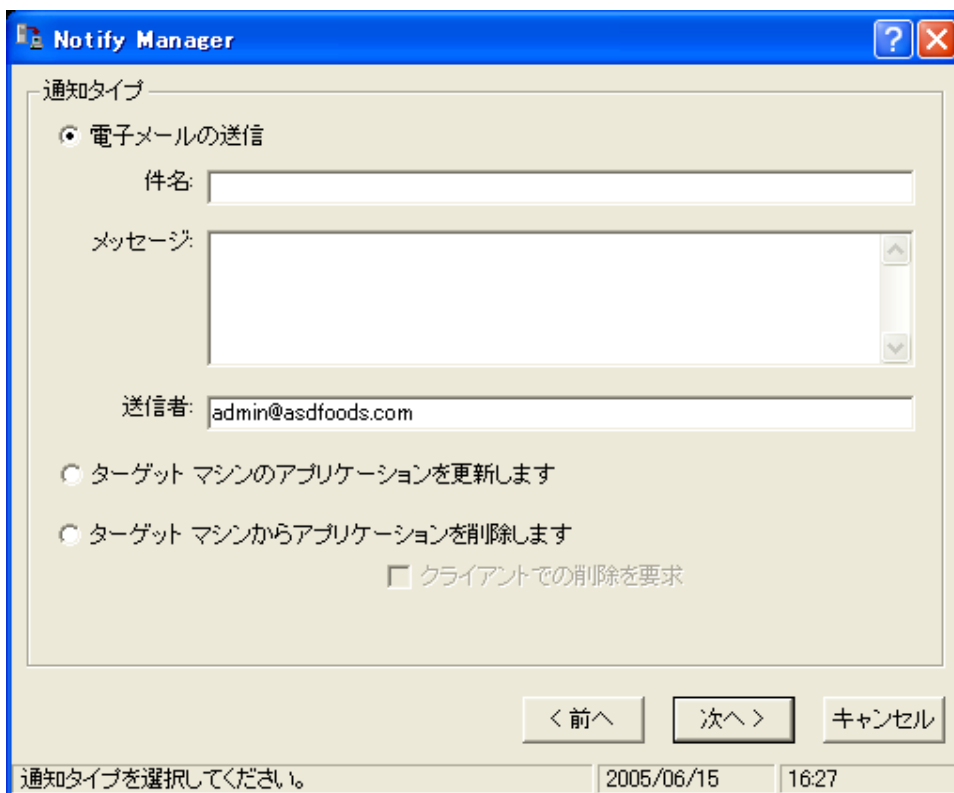


図 8.16 ~ Radia Notify Manager の [通知タイプ]

6. [次へ] をクリックして続行します。

[通知の詳細] ダイアログ ボックスが表示されます。

デフォルトでは、通知がすぐに開始され、Radia データベース内の NOTIFY ファイルにオブジェクトが生成されます。オブジェクト名は、通知アクションの日付と時刻を基に YYYY_MM_DD_HH_MM_SS という形式で作成されます。

このダイアログ ボックスを使用すると、オブジェクトを格納したり、別の日付や時刻まで通知アクションを延期したりするカスタム ドメインを作成することができます。

- Radia データベースの NOTIFY ファイルに格納される新しいドメインを使用する場合は、[カスタム通知ドメインを使用] をオンにして、テキスト ボックスに名前を入力します。
- 通知をスケジュールする場合は、[延期された通知] をオンにして [時間 (hh/mm)] ボックスの一覧から時刻を選択します。



図 8.17 ~ [通知の詳細] ダイアログ ボックス

7. [次へ] をクリックします。
[通知の要約] ダイアログ ボックスが表示されます。



図 8.18 ~ [通知の要約] ダイアログ ボックス

サービスを配布する

8. [完了] をクリックして通知を開始します。
ステータス モニタを今すぐ起動するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

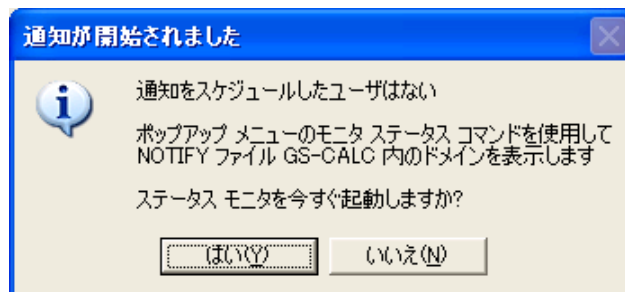


図 8.19 ~ 電子メールによる通知の開始確認メッセージ

9. [はい] をクリックして、通知のステータスを表示します。
ダイアログ ボックスが開き、サブスクリイバ名と通知ステータスが表示されます。

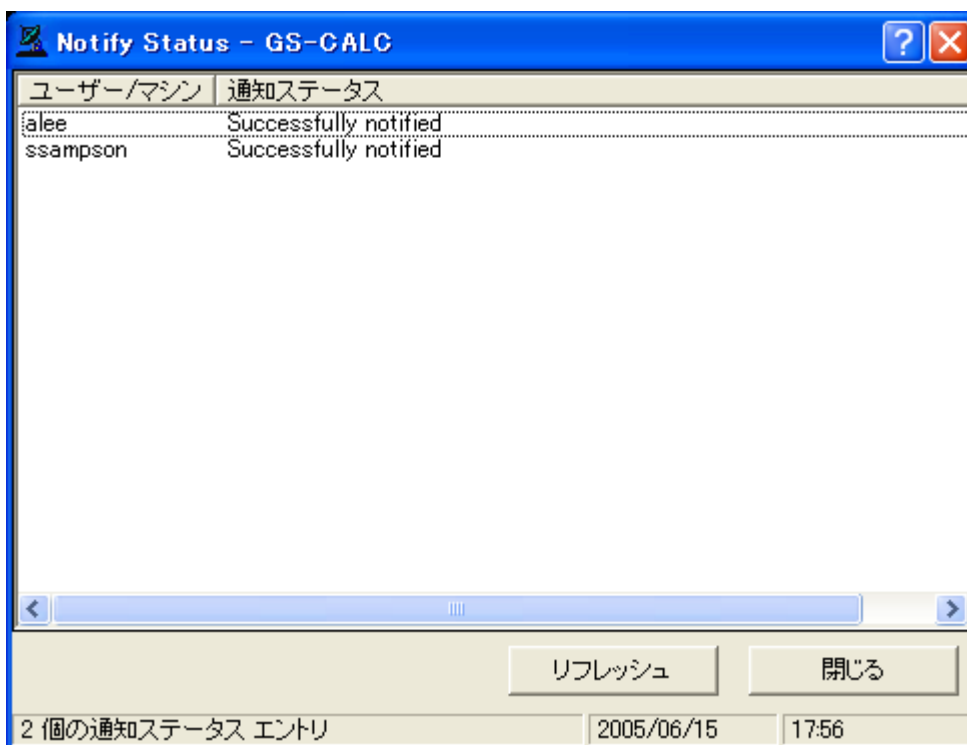


図 8.20 ~ 通知ステータス モニタ ダイアログ ボックス

10. [リフレッシュ] をクリックしてステータス モニタを更新します。
11. 完了したら、[閉じる] をクリックします。

ドラッグ アンド ドロップ通知コマンドを作成する

ドラッグ アンド ドロップ通知コマンドを使用すると、1 つまたは複数のサブスクリイバに対してすぐに通知を開始することができます。ドラッグ アンド ドロップ通知には、アプリケーションをクライアント コンピュータにインストールしていない場合でも通知が実行できるという利点があります。この通知機能を使用すると、ソフトウェアのインストールやすべての必須サービスの更新に加え、クライアント コンピュータでの実行ファイルの起動も可能になります。

ドラッグ アンド ドロップ通知は、通知の前にクライアント コンピュータが **Radia Configuration Server** に接続している場合にのみ有効です。この情報は、**PROFILE** ファイルに記録されています。**PROFILE** ファイルには、クライアント コンピュータのネットワーク アドレスが格納されており、このアドレスが通知に使用されます。

警告

ドラッグ アンド ドロップ通知は、単独の Radia Configuration Server 環境で使用するためのものです。複数の Radia Configuration Server が動作している環境では、Push Manager の使用を検討してください。詳細については、当社の営業担当にお問い合わせください。

次の例では、クライアント コンピュータのすべての必須サービスを更新するコマンドを作成します。

ドラッグ アンド ドロップ通知コマンドを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、**[Radia Administrator Workstation]** をポイントして、**[Radia System Explorer]** をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は **RAD_MAST** です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、**[パスワードの変更]** チェック ボックスをオンにして、**[新しいパスワード]** と **[新しいパスワードの確認]** の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、**[OK]** をクリックします。**[Radia System Explorer]** ウィンドウが表示されます。
3. **[PRIMARY]** をダブルクリックします。
4. **[SYSTEM]** をダブルクリックします。
5. **[Application Manager (ZCOMMAND)]** をダブルクリックします。

6. [必須] インスタンスを右クリックし、[インスタンス名のコピー] をクリックします。
[インスタンス名のコピー] ダイアログ ボックスが表示されます。

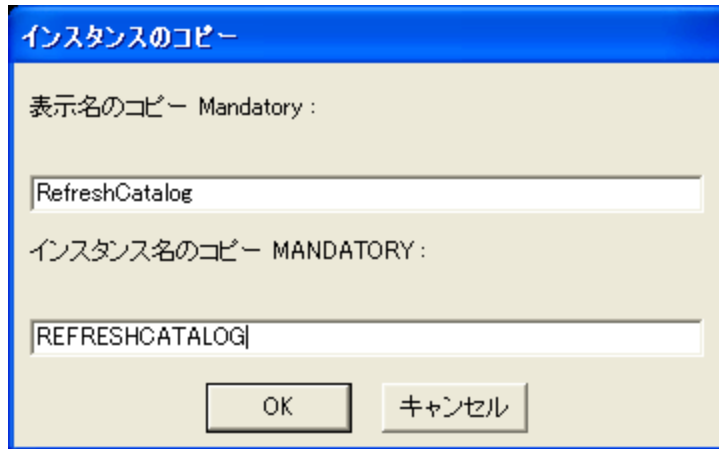


図 8.21 ~ Mandatory インスタンスを RefreshCatalog インスタンスにコピーする場合

7. 対応するテキスト ボックスに、インスタンスの表示名およびインスタンス名を入力します。この例では、インスタンスの名前を「**RefreshCatalog**」としています。
8. [OK] をクリックします。
ZCOMMAND クラス インスタンスの一覧に、[**RefreshCatalog**] インスタンスが表示されます。
9. ツリー ビューで、[**RefreshCatalog**] などのインスタンスをダブルクリックします。
リスト ビューに属性が表示されます。

サービスを配布する

10. [ZCMDPRMS] 属性をダブルクリックします。
[インスタンス編集] ダイアログ ボックスが表示されます。



図 8.22 ~ RefreshCatalog インスタンスの ZCMDPRMS 属性の編集

11. クライアント コンピュータで実行するコマンド ラインを入力します。この例では、次のように入力します。

```
radskman ip=<mgr_ip>,port=<mgr_port>
```

このコマンド ラインは、すべての必須アプリケーションを更新 (既存のアプリケーションの場合) またはインストール (新しいアプリケーションの場合) します。詳細については、370 ページの「コマンド ラインを指定する」を参照してください。

警告

ドラッグ アンド ドロップ通知でコマンドを実行する場合は、実行するプログラムが IDMSYS ディレクトリ (デフォルトでは、**SystemDrive:\Program Files\Novadigm**) に格納されている必要があります。

12. [OK] をクリックします。
13. 変更を確認するメッセージが表示されたら [はい] をクリックします。

14. [POLICY] ドメインから [User]、[Workgroup]、または [Department] インスタンスを選択して、[RefreshCatalog] コマンドにドラッグします。カーソルが杖の形になります。
15. マウス ボタンを離します。
指定したサブスクリイブに通知がすぐに送信され、ZCMDPRMS で指定したコマンド ラインが実行されます。

通知を再試行する

サブスクリイブへの通知に失敗した場合、以下のような原因が考えられます。

- クライアント コンピュータの電源がオフになっている。
- Radia データベースにあるサブスクリイブの電子メール アドレスが間違っている。
- クライアント コンピュータで Radia Notify サービスが実行されていない。
- クライアント コンピュータへのアクセスに、通常の通信チャネルを使用することができない。

通知に失敗すると、NOTIFY ファイルの RETRY ドメインにインスタンスが作成されます。RETRY ドメインは、通知が最初に失敗したときに作成されます。

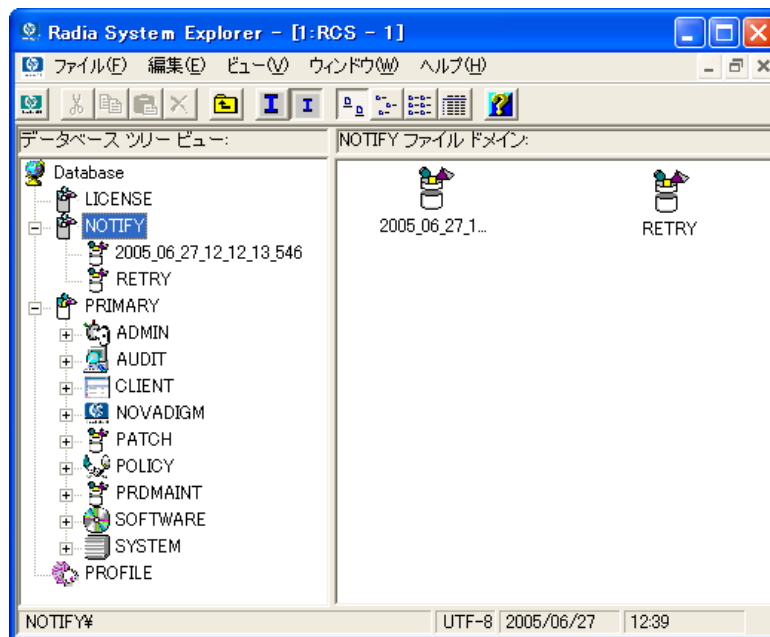


図 8.23 ~ RETRY ドメイン

サービスを配布する

デフォルトでは、失敗した通知処理が自動的に再試行されます。通知を自動的に再試行する場合は、**Radia Configuration Server** の起動時に **Notify Retry Manager (zrtrymgr** モジュール) を開始するよう設定します。この設定は、**Radia Configuration Server** の設定ファイル **EDMPROF.DAT** で行います (下図を参照)。**EDMPROF.DAT** は、**Radia Configuration Server** インストール ディレクトリの **bin** ディレクトリ (デフォルトでは、**C:\Radia\RadiaConfigurationServer\bin**) にあります。

```
[MGR_ATTACH_LIST]
ATTACH_LIST_SLOTS = 15
RESTART_LIMIT = 7
VERIFY_INTERVAL = 5
CMD_LINE=(zutilmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(zrexmgr) RESTART=YES
CMD_LINE=(ztcpmgr PORT=3464,NAME=tcpmgr_3464) RESTART=YES
CMD_LINE=(znfytmgr NAME=NotifyManager) RESTART=YES
CMD_LINE=(zrtrymgr) RESTART=YES
```

← **Retry Manager に必要なライン**

図 8.24 ~ Radia Configuration Server 設定ファイル内に追加された通知の再試行コマンドライン

警告

Radia Configuration Server の設定ファイル EDMPROF.DAT に変更を加えた場合は、Radia Configuration Server サービスを再び開始する必要があります。

Radia Configuration Server の設定ファイルの編集については、『Radia Configuration Server Guide』(旧『Manager Guide』)を参照してください。

Notify Retry Manager では、**EDMPROF.DAT** の **VERIFY_INTERVAL** を基に **NOTIFY** ファイルの **RETRY** ドメインが一定の間隔で検証されます。デフォルトの間隔は 5 分です。**RETRY** ドメインにあるインスタンスごとに **Retry Manager** で通知処理が試行されます。

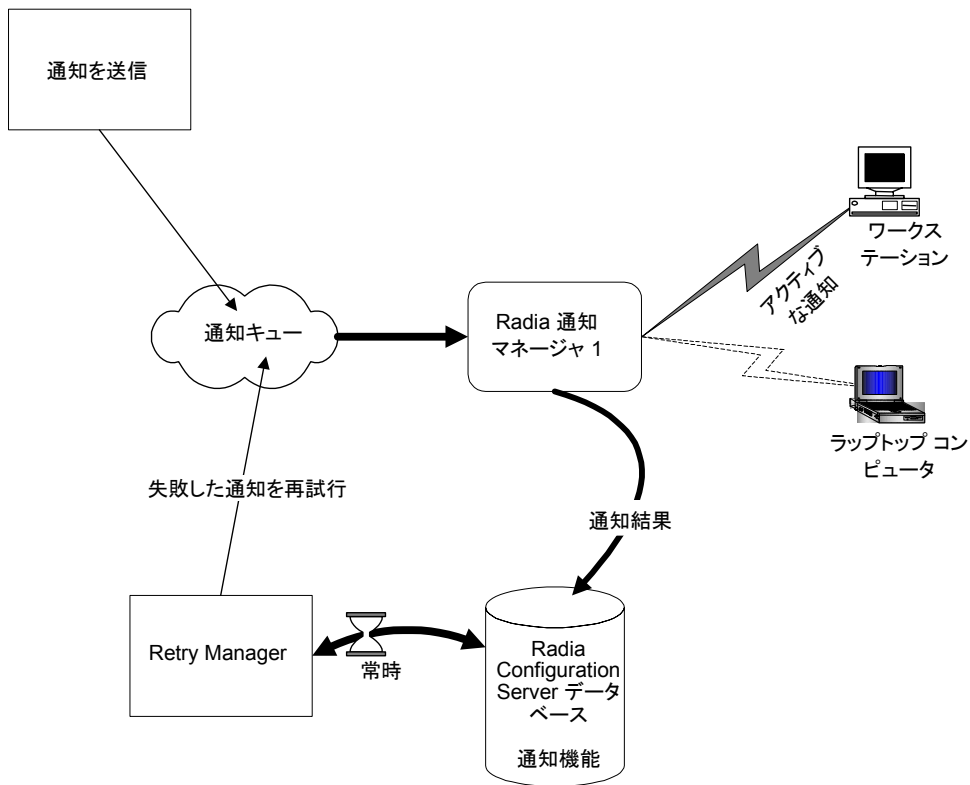


図 8.25 ~ 再試行プロセス

通知の結果を参照する

通知に関する情報は、以下のいずれかの方法で参照することができます。

- Radia System Explorer で NOTIFY ファイルを参照する。
- Radia System Explorer で NOTIFY ファイルからステータス モニタにアクセスする。

通知処理に関する情報は、Radia Configuration Server ログにも記録されています。ログ ファイルは、Radia Configuration Server の LOG ディレクトリ (デフォルトでは、**C:\Radia\ConfiguratonServer\log**) に格納されます。

NOTIFY ファイルのインスタンスを参照する

NOTIFY ファイルは、最初の通知が開始された後に作成されます。通知処理のたびに、Radia データベースの NOTIFY ファイルにオブジェクトが 1 つずつ作成されます。オブジェクト名は、通知アクションの日付と時刻を基に YYYY_MM_DD_HH_MM_SS という形式で作成されます。各オブジェクトには、通知されたサブスクリバごとのインスタンスがあります。各インスタンスには、サブスクリバおよび通知処理に関する重要な情報が格納されます。

NOTIFY ファイルのインスタンスを参照するには

1. Radia System Explorer で、[NOTIFY] をダブルクリックします。

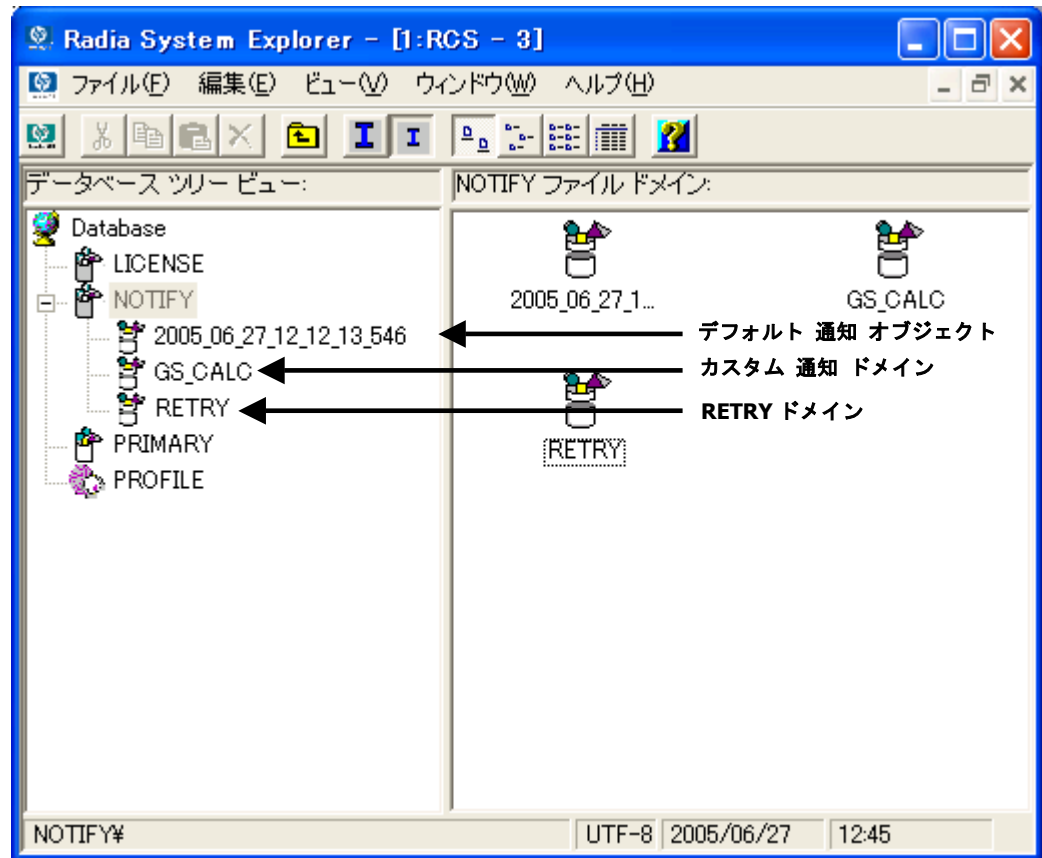


図 8.26 ~ NOTIFY ファイル

上図には、複数のデフォルト **NOTIFY** オブジェクトがあります。各オブジェクトは、単一の通知処理を表します。オブジェクト名は、通知アクションの日付と時刻を基に **YYYY_MM_DD_HH_MM_SS** という形式で作成されます。

カスタム通知ドメイン **REDBOX** も **NOTIFY** オブジェクトです。ただし、この通知には、[通知の詳細] ダイアログ ボックスでカスタム ドメイン名が付けられています。

最後に、**RETRY** ドメインがあります。通知が失敗すると、**NOTIFY** ファイルの **RETRY** ドメインにインスタンスが作成されます。**RETRY** ドメインは、通知が最初に失敗したときに作成されます。

2. 参照する通知オブジェクトをダブルクリックします。

3. [**NOTIFY**] をダブルクリックします。

NOTIFY ファイルは複数のドメインで構成され、それぞれが 1 つの通知処理を表します。ドメイン名は、通知処理が開始された日付と時刻を表す **YYYY_MM_DD_HH_MM_SS** という形式で作成されます。

各 **NOTIFY** ドメインには 1 つの **NOTIFY** クラスがあります。各 **NOTIFY** クラスには、通知されたサブスクライバごとのインスタンスが格納されます。インスタンス名は 8 桁の文字列で、00000001 から順番に、通知されたサブスクライバ数までの値が付けられます。

各インスタンスには、そのサブスクライバを識別する属性、通知処理のタイプ、通知処理の結果が格納されます。

4. リスト ビューで属性を参照します。次の表では、各属性について説明します。

表 8.10 ~ **NOTIFY** インスタンスの属性

属性	説明
ZUSERID	通知されたユーザー (USER)、ワークグループ (WORKGROUP)、または部門 (DEPT)。
ZCIPADDR	クライアント コンピュータの IP アドレス。
EMAIL	サブスクライバの電子メール アドレス (電子メール通知を使用する場合)。
NTFYTYPE	通知のタイプ。たとえば、E の場合は電子メール通知を示します。
NTFYDATE	通知の日付。
NTFYTIME	通知の時刻。
NTFYMSG	「Successfully notified」など、通知のステータスを示すメッセージ。
NTFYRC	通知用に生成されたリターン コード。
NTFYCMDL	通知によって実行されたコマンド ライン。
NTFYSUBJ	送信された電子メールの件名 (電子メール通知を使用する場合)。
LOCALUID	コンピュータに現在ログオンしているサブスクライバのユーザー ID。
NTFYRTIM	通知を実行する時間。

表 8.10 ~ NOTIFY インスタンスの属性

属性	説明
NTFYRNUM	通知を再試行する回数。
NTFYDOMN	現在のインスタンスが格納されているドメインの名前。
NTFYINS	現在のインスタンスの名前。
NTFYPORT	通知用に登録されているポート。
NTFYPWD	通知で使用する暗号化されたパスワード。
NTFYUIINF	通知マネージャから通知処理に渡されたユーザー情報。
NTFYRMAX	通知を再試行する最大回数。
NTFYDLAY	通知の再試行までに待機する秒数。
NTFYMAC	クライアント コンピュータの物理アドレス。Wake-on-LAN サポートで使用されます。
NTFYMASK	Wake-on-LAN サポートで使用するネットワーク マスク。

通知または再試行の結果をステータス モニタで参照する

ステータス モニタを使用すると、すべてのサブスクリバの通知処理または再試行処理の結果を参照することができます。

通知または再試行のステータスを参照するには

1. Radia System Explorer で、[NOTIFY] をダブルクリックします。
2. ステータスを参照する通知ドメインまたは **RETRY** ドメインを右クリックします。

3. [ステータスを削除] をクリックしてステータス情報を削除します。
または
[ステータスを表示] をクリックしてステータス モニタを表示します。



図 8.27 ~ 通知ステータス モニタ

4. ステータスが変更された可能性がある場合は、[リフレッシュ] をクリックします。
または
[閉じる] をクリックしてステータス モニタを閉じます。

Wake-On-LAN クライアントに対するドラッグ アンド ドロップ通知

Radia では、ウェイクアップ パケットを送出し、Wake-On-LAN (WOL) 用に設定されているクライアント コンピュータの電源をリモートでオンにすることができます。

Radia System Explorer を使用すると、ドラッグ アンド ドロップ通知 (*Drag-and-Drop Notify: DDN*) の対象にする WOL クライアント コンピュータを簡単に設定することができます。

注意

Wake-On-LAN クライアントに対してドラッグ アンド ドロップ通知を実行するには、Radia Configuration Server 設定ファイルに 2 つの設定を追加する必要があります。詳細については、『Radia Configuration Server Guide』を参照してください。

DDN を使用してクライアントを割り当てる

ドラッグ アンド ドロップ機能は単純で使いやすく、WOL クライアントを簡単に DDN の対象にすることができます。Radia System Explorer を使用すると、通知インスタンスが USER、WRKGRP、DEPT、および SERVICE に接続できます。

ドラッグ アンド ドロップ機能を使用して WOL 通知用のクライアントを割り当てるには、Radia System Explorer を使用します。Radia System Explorer にアクセスしたら、通知インスタンスを接続対象のインスタンスにドラッグ アンド ドロップするだけで接続が作成できます。ドラッグ アンド ドロップ接続を実行する方法については、『Radia System Explorer's Guide』を参照してください。

Radia System Explorer の手順の概要

クライアント コンピュータのメディア アクセス制御 (MAC: Media Access Control) アドレスおよびサブネット値は、PROFILE ファイルの ZCONFIG オブジェクトでレポーティングする必要があります (ZCONFIG オブジェクト内で、MAC アドレスは LADAPT01、サブネット値は SUBNET01 で示されます)。

ここでは、Radia System Explorer で Radia データベースにアクセスしたときに実行する手順を説明します。

WOL クライアントを DDN 用に設定するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
3. [Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
4. [PRIMARY] をダブルクリックします。
5. [POLICY] ドメインに移動します。
6. [POLICY] ドメイン内で、USER1 などの新しい [USER] インスタンスを作成します。
7. ユーザー ID 「USER1」で、Radia Configuration Server へのクライアント接続を実行します。必要なクライアント情報がデータベースに格納されます。

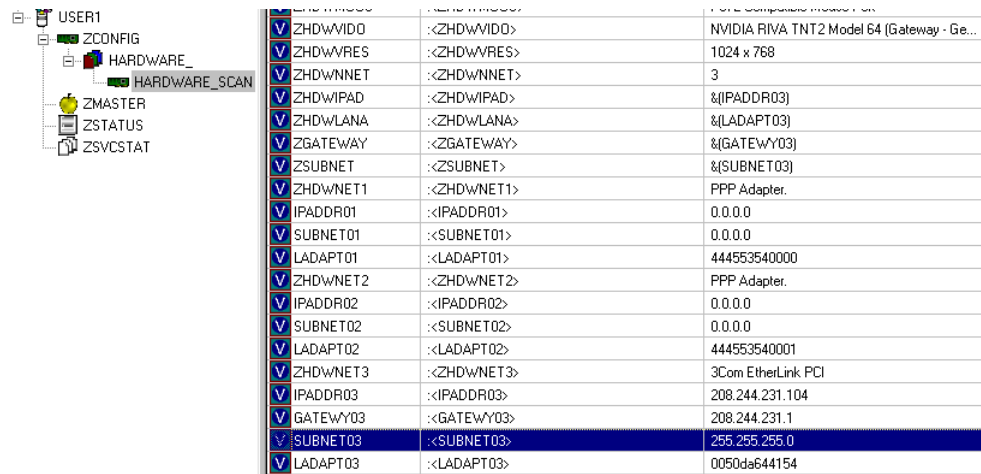
注意

DDN を実行するには、Radia Configuration Server の PROFILE ファイルで、ZCONFIG オブジェクトおよび ZMASTER オブジェクトに加えて、ユーザーが指定されている必要があります。

次に、[HARDWARE_SCAN] の値を検証する必要があります。

サービスを配布する

8. [PROFILE.USER1.ZCONFIG] の下の [HARDWARE_SCAN] オブジェクトを開き、[LADAPT01] 属性と [SUBNET01] 属性が存在するかどうかをチェックします。



ZHDWVIDEO	:<ZHDWVIDEO>	NVIDIA RIVA TNT2 Model 64 (Gateway - Ge...
ZHDWVRES	:<ZHDWVRES>	1024 x 768
ZHDWNET	:<ZHDWNET>	3
ZHDWIPAD	:<ZHDWIPAD>	&(IPADDR03)
ZHDWLANA	:<ZHDWLANA>	&(LADAPT03)
ZGATEWAY	:<ZGATEWAY>	&(GATEWAY03)
ZSUBNET	:<ZSUBNET>	&(SUBNET03)
ZHDWNET1	:<ZHDWNET1>	PPP Adapter.
IPADDR01	:<IPADDR01>	0.0.0.0
SUBNET01	:<SUBNET01>	0.0.0.0
LADAPT01	:<LADAPT01>	444553540000
ZHDWNET2	:<ZHDWNET2>	PPP Adapter.
IPADDR02	:<IPADDR02>	0.0.0.0
SUBNET02	:<SUBNET02>	0.0.0.0
LADAPT02	:<LADAPT02>	444553540001
ZHDWNET3	:<ZHDWNET3>	3Com EtherLink PCI
IPADDR03	:<IPADDR03>	208.244.231.104
GATEWAY03	:<GATEWAY03>	208.244.231.1
SUBNET03	:<SUBNET03>	255.255.255.0
LADAPT03	:<LADAPT03>	0050da644154

図 8.28 ~ サブネット値

注意

WOL 用 DDN を実行して現在のマシンを起動するには、クライアント マシン (USER1) を終了する必要があります。

次に、Radia データベースにドラッグ アンド ドロップ通知用の新しいインスタンスを作成して設定します。

9. Radia System Explorer で、PRIMARY.SYSTEM.ZCOMMAND の下に新しいインスタンス (DDN_WOL など) を作成します。

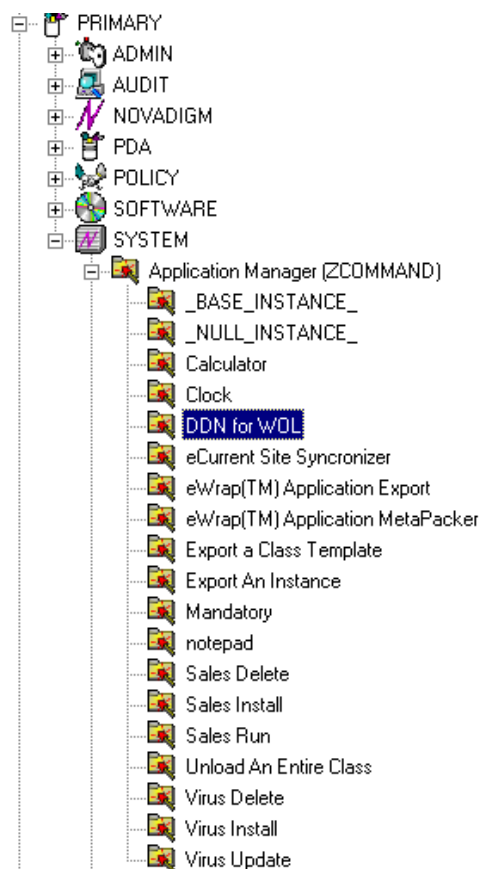


図 8.29 ~ ZCOMMAND インスタンス ([DDN for WOL])

サービスを配布する

10. 以下のパラメータを指定します。

ZCMDPRMS radskman ip=<managerip>, port=<mgr_port>

注意: radskman の詳細については、370 ページの「コマンド ラインを指定する」を参照してください。

ZCMDTYPE EXE

ZCMDNAME NOTIFY

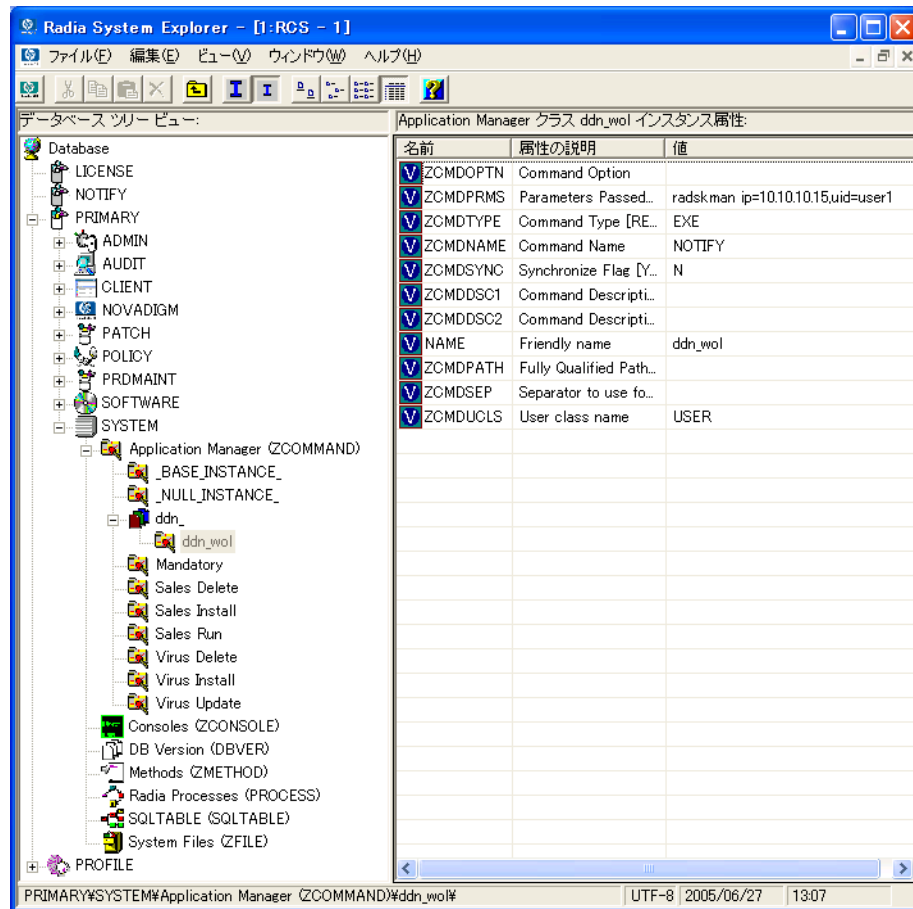


図 8.30 ~ DDN for WOL インスタンスとその属性

11. POLICY.USER1 インスタンスを ZCOMMAND.DDN_WOL インスタンスにドラッグ アンド ドロップして、POLICY.USER1 インスタンスを DDN 用に設定します。

これで、ドラッグ アンド ドロップ通知用に新しい WOL ユーザーが設定されました。

正常に設定されたかどうかを確認するには

クライアント マシンでの確認手順

1. 約 10 分待ってからクライアント ログをチェックします。
2. **C:\¥Program Files¥Novadigm¥Log** にアクセスし、**RADNTFYD.log** をチェックして、以下のエントリの時刻を検証します。各時刻が通知を実行した時刻と一致していれば、設定は有効です。

```

SyncObjFrmDisk   EDM009461 01.254 13:40:30 Total [0001] pools restored (v161)
EDMNTFYD        EDM000001 01.254 13:40:30 Password verification has not been requested
EDMNTFYD        EDM000001 01.254 13:40:30 Path restricted to EDMSYS subdirectory
EDMNTFYD        EDM000001 01.254 13:40:30 Userid verification has been disabled
Pooltab_replace EDM009453 01.254 13:40:30 Pool [C:\¥PROGRAM*1¥NOVADIGM¥LIB¥ZLOCAL.EDM] has
[5] variables and [1] heaps of size [1024] each (v153)
Edm_ObjPtr_Save EDM009443 01.254 13:40:30 Object [ZLOCAL ] being saved (v143)
EDMNTFYD        EDM000001 01.254 13:40:30 UID: user1
EDMNTFYD        EDM000001 01.254 13:40:30 CMD: radskman mame=rad_manager,dname=software,
ip=208.244.231.61,port=3464,startdir=$machine,ulogon=n,hreboot=y
nvd_exec        EDM000512 01.254 13:40:30 Module Information: Rev 1.105 Oct 30 2000
11:18:08
nvd_exec        EDM000010 01.254 13:40:30 NVD_EXEC CALLED: Program [C:\¥PROGRA*1¥NOVADIGM
¥radskman]
PARAMETERS[mname=rad_manager,dname=software,ip=208.244.231.61,port=3464,startdir=$MACHINE,
ulogon=n,hreboot=y]
EDMNTFYD        EDM000001 01.254 13:40:31 Closing socket #44

CloseLogFile    EDM000001 01.254 13:40:31 Closing log file on [Tues Sep 11 13:40:31 2001]

```

図 8.31 ~ RADNTFYD.LOG の抜粋

Radia Configuration Server での確認手順

1. Radia System Explorer で、NOTIFY ドメインを右クリックします。
2. [リフレッシュ] をクリックします。
3. 新しいファイル NOTIFY が作成されているかどうかを確認します。

注意

NOTIFY ファイルは、最初の通知イベントの発生時にのみ作成されます。

4. 通知イベントを検証します。

Radia セルフ メンテナンス

Radia Client のメンテナンスは、テクニカル サポートから入手することができます。メンテナンスには、Radia データベースのインポート デッキが含まれています。PRDMAINT ドメインの PRDMAINT クラスに新しいインスタンスが作成されます。PRODUCT_PLATFORM_RELEASE の組み合わせごとに、PRDMAINT インスタンスが 1 つずつ存在します。これらのインスタンスは、クライアントのプラットフォームおよび現在の製品レベルに基づいて接続されます。メンテナンスをクライアント コンピュータに公開することを決定した後は、ユーザーのエンタイトルメントにサービスを追加することができます。

注意

この製品の以前のバージョンでは、メンテナンス機能は NOVADIGM ドメインに含まれていました。4.x より前のバージョンの Radia Client を使用している場合は、従来と同様、メンテナンス アクティビティに NOVADIGM ドメインを使用します。詳細については、ご使用の Radia Client のバージョンの『Radia Application Manager ガイド』または『Radia Software Manager ガイド』を参照してください。

実際のメンテナンスは同じであるにもかかわらず、オペレーティング システム別に PRDMAINT のバンドルを提供する必要性を最小限に抑えるには、ZMASTER.ZOSTYPE 変数で Windows オペレーティング システムのタイプまたはファミリーを指定します。この変数の有効な値は、"WIN32_NT" (Windows NT、2000、XP、および 2003 に対応) と "WIN_9X" (Windows 98 に対応) です。

使用上の注意

- デフォルトでは、すべてのパッケージが無効になっています。このために、ZSTOP 式が 1 に設定され、配布できないようになっています。一般的な配布を行う場合は、この値を削除します。特定のグループに配布を制限する場合は、ZSTOP 式を使用します。
- 最初の REQUIRES 接続は、想定される hot fix 用に予約されています。これには、直接テクニカル サポートから修正が送られてきたが、その時点では修正またはサービス パックで使用できないものなどが該当します。このパッケージ (_HOTFIX) は、必要な複数の修正または拡張をまとめるために使用され、使用者が管理するものです。2 番目の接続は、ローカルでカスタマイズし、メンテナンスの一部として含めるコード用の接続です。
- メンテナンスの処理方法を指定するには、CLIENT ドメインの SETTINGS クラスの ACTMAINT 属性を使用します。メンテナンスを直ちにダウンロードしてインストールするか (I)、ダウンロードのみを行って後からインストールを行うか (D)、または別の時点でメンテナンスのインストールをユーザーに委ねる (D) かが選択できます。メンテナンスが実行されるのは、radskman の mnt パラメータを Y に設定した場合のみです。詳細については、275 ページの「ACTMAINT」および 352 ページの「mnt」を参照してください。

新しいメンテナンス パックごとに最新の PRDMAINT インスタンスが提供されます。メンテナンスは、すべて適用する必要はありません。

クライアント メンテナンス パッケージを配布するには

1. メンテナンス パッケージは、エクスポート デッキの形式で HP OpenView Web サイトから入手できます。
2. ファイルをダウンロードします。少なくとも xpi ファイルおよび xpr ファイルが必ずあります。
3. Radia Configuration Server のサービスを停止し、Radia Configuration Server の bin ディレクトリにエクスポート ファイルをコピーします。
4. ZEDMAMS ユーティリティを使用して、ファイルをインポートします。このユーティリティの使用法の詳細については、『Radia Configuration Server Guide』を参照してください。

たとえば、MAINT_RAM_40_RC3.XPI と MAINT_RAM_40_RC3.XPR の 2 ファイルを取得した場合、次の 2 つのコマンド ラインを使用します。

```
ZEDMAMS VERB=IMPORT_INSTANCE,FILE= MAINT_RAM_40_RC3.XPI,PREVIEW=NO
ZEDMAMS VERB=IMPORT_RESOURCE,FILE= MAINT_RAM_40_RC3.XPR,PREVIEW=NO
```

注意

さまざまな要因により、コマンド ラインが異なる可能性があります。このユーティリティの使用法の詳細については、『Radia Configuration Server Guide』を参照してください。

5. Radia Configuration Server を再起動します。
6. POLICY ドメインの適切なユーザーにメンテナンス サービスを割り当てます。

注意

クライアント接続プロセスのメンテナンス部分を実行するには、radskman コマンド ラインの mnt パラメータを Y に設定する必要があります。

カタログ処理の過程でクライアントは、最初に PRDMAINT ドメインのすべてのサービスを処理し、アービトレーションを実行して適切なメンテナンスを判別し、メンテナンス ステージング ディレクトリにメンテナンスを配布します。このディレクトリのデフォルトのロケーションは、**c:\Program Files\Novadigm\Maint_** です。

Radia システム トレイ

Radia システム トレイ アイコンを使用すると、サブスクライバは、ステータスや統計情報を確認したり、停止操作やキャンセル操作を行ったりすることができます。Radia システム トレイ アイコンは、リスン モードになっており、Radia Client でユーザーとの対話が必要なときに表示される、ダイアログ ボックスやステータス情報の表示リクエストを受け付けます。

注意

Windows 95 では、Radia システム トレイはサポートされていません。

アイコンは、タスク バーの Radia システム トレイ領域に表示されます。アイコン上にカーソルを合わせると、その時点の Radia Client の動作に応じて、次の 3 つの状態のいずれかが表示されます。

■ アイドル

Radia システム トレイがリスン モードのとき、アイコンはスタティックです。

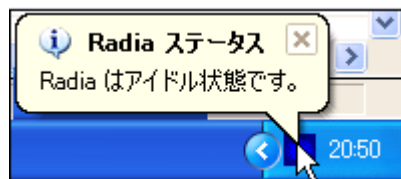


図 8.32 ~ アイドル状態の Radia

■ アクティブ

Radia Client が実行中のとき、またはユーザーの操作が必要なとき、アイコンはアクティブになります。アイコンがアニメーション表示になり、アイコン上にカーソルを合わせると、情報ポップアップが表示されます。ポップアップには、実行中のアクティビティのタイプに関する情報が表示されます。重要な通知が行われた場合は、ポップアップが自動的に表示されます。

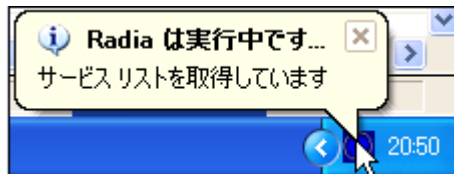


図 8.33 ~ 実行中の Radia

■ コンソール ビュー

コンソール ビューを起動するには、アイコンを右クリックして表示されるショートカットメニューを使用するか、アイコンをダブルクリックします。コンソール ビューが表示されます(下図参照)。



図 8.34 ~ アイコンをダブルクリックして表示される Radia システム トレイ コンソール

コンソール ビューは、次の部分で構成されます。

■ ボタン バー

[停止] ボタン、[キャンセル]、および Radia が実行中のときにアニメーション表示されるロゴがあります。

■ 情報パネル

現在処理中のサービスに関する情報、および完了した処理の割合を示す進行状況バーが表示されます。


■ ステータス領域

転送速度、送信の合計サイズ、受信したバイト数、送信の推定残り時間、送信するファイルの総数、受信したファイルの数、処理されたサービスの数など、現在の処理に関する統計が表示されます。

■ ステータス メッセージ領域

現在の処理に関するメッセージが表示されます。

■ バンド幅設定

Radia Configuration Server のサービスにバンド幅スロットリングを設定している場合、システムトレイコンソールの  ボタン (バンド幅のトグルボタン) をクリックすると、バンド幅設定用のスライダが表示されます。バンド幅スロットリングの値を変更するには、スライダを左右に調整します。

注意

バンド幅設定用の画面が表示されるのは、バンド幅スロットリングが使用可能な場合 (サービスのスロットリングのタイプを ADAPTIVE または RESERVED に設定した場合) です。また、バンド幅のスライダが表示されるのは、スロットリングのタイプが有効で Application (ZSERVICE) インスタンスの UIOPTION 属性を FULL に設定した場合です。この属性のデフォルト値は FULL です。UIOPTION を INFO に設定すると、クライアントコンピュータで行われているプロセスは表示されますが、すべてのコントロールが無効になり、サブスクリイバは変更操作が実行できないようになります。UIOPTION を NONE に設定すると、ダイアログボックスが表示されなくなります。UIOPTION は、Radia System Explorer で設定します。



図 8.35 ~ システムトレイコンソールによるバンド幅の設定

アプリケーション警告メッセージと延期

Radia System Explorer では、アプリケーションの優先度が高いことをサブスクライバに表示したり、追加のメッセージを表示したりすることができます。優先度（高または普通）を指定するには、Application (ZSERVICE) インスタンスを設定します。感嘆符 (!) は、アプリケーションの優先度が高いことを示します。

Radia システム トレイと共に Radia Software Manager を使用して、優先度の高いサービスを管理している場合、Radia システム トレイのステータス ポップアップに警告メッセージが表示されます。このポップアップは、アイコン上にカーソルの位置を合わせているかどうかに関係なく表示されます。

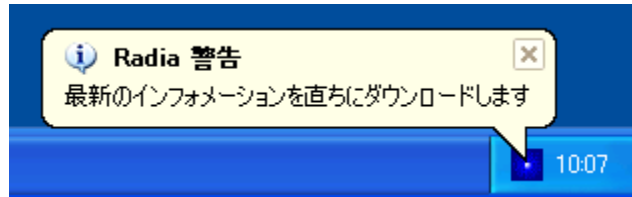


図 8.36 ~ Radia システム トレイに表示される高い優先度のステータス ポップアップ

アプリケーションの配布時に管理者は、ネットワークしきい値、ダウンロードするデータのサイズ、指定した日付の設定、または延期の数に基づいて、延期メッセージを表示することもできます。アプリケーションのデータをクライアント コンピュータにダウンロードする必要がある場合、Radia Software Manager クライアントは、アプリケーションが延期に対応するよう設定されているかどうかをチェックします。設定されている場合、Radia Client は、管理者によって指定されたバンド幅のしきい値の設定に基づいて、現在のバンド幅設定をチェックします。現在のネットワーク速度が Network Threshold (DT) の値より小さくなると、配布を延期するかどうかをサブスクライバに確認する延期メッセージが表示されます。管理者は、アプリケーションの延期回数、アプリケーションの延期期限の日付、または警告対象の最小バイト数を設定することができます。延期の数または日付に達すると、延期メッセージは表示されずにアプリケーションがインストールまたは更新されます。データのサイズが最小バイト数より小さい場合、警告パネルは表示されません。

アプリケーションが延期に対応するよう設定されており、以下の要件をすべて満たしている場合に、延期のダイアログ ボックスが表示されます。

- 現在のオペレーション（インストール、更新、インストールと更新の両方）について、Alert Mode (DM) が設定されている。
- 現在のネットワーク速度が Network Threshold Speed (DT) 未満である。
- ZSERVICE インスタンスの UIOPTION 属性が NONE に設定されていない。
- ダウンロードするデータのサイズが、管理者によって指定された最小バイト数 (DBT) より大きく、最大バイト数 (DAT) より小さい。

サービスを配布する

- 延期の日付を指定した場合、Allow Install Deferral up to (DI) または Allow Update Deferral up to (DU) の日付に達している。
または
- Number of deferrals allowed (DN) に達している。

これらの要件を満たし、Radia Software Manager を使用している場合、次のダイアログ ボックスが表示されます。

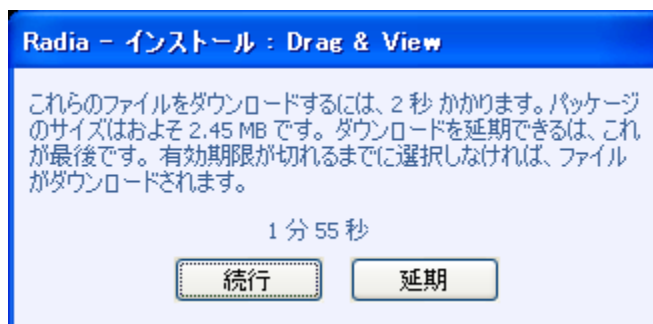


図 8.37 ~ Radia Software Manager の延期の警告表示

サブスクライバは、アクションを延期するか続行するかを選択することができます。

注意

タイムアウト値を超えた場合、DA 属性 (Action on Timeout Cont/Defer) で指定したアクションが実行されます。

アプリケーション警告または延期を実装するには、Alert/Defer (ALERTDEF) クラスのインスタンスを作成し、そのインスタンスを適切な Application (ZSERVICE) インスタンスに接続します。

警告メッセージまたは延期インスタンスを作成する

Radia データベースの SOFTWARE ドメインに Alert/Defer (ALERTDEF) クラスを追加して、アプリケーション警告を設定します。警告を設定するには、Alert/Defer (ALERTDEF) クラスのインスタンスを作成する必要があります。

Alert/Defer (ALERTDEF) クラスのインスタンスを作成するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。[Radia System Explorer] のセキュリティ情報 ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. [SOFTWARE] をダブルクリックします。
5. [Alert/Defer (ALERTDEF)] を右クリックします。ショートカット メニューが表示されます。

6. [インスタンスを新規作成] をクリックします。[インスタンスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

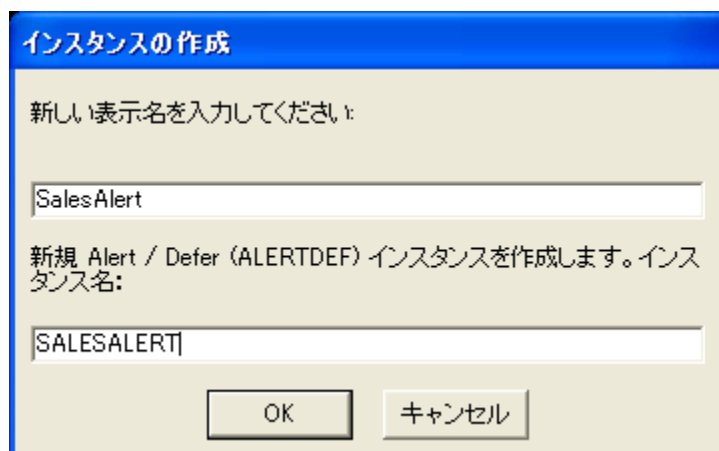


図 8.38 ~ インスタンスの新規作成

7. 新しいインスタンスの名前を入力します。この例では、**SalesAlert** という名前のインスタンスを作成します。
8. [OK] をクリックします。
これで、新しいインスタンスが作成されました。

警告メッセージまたは延期を設定する

作成したインスタンスは、警告用に設定する必要があります。Alert/Deferral (ALERTDEF) クラスには、"Dial Up Sample Defer" と "LAN Sample Defer" の 2 つのサンプル インスタンスが用意されています。

Alert/Deferral (ALERTDEF) インスタンスを設定するには

1. Radia System Explorer を使用して、編集する Alert/Defer (ALERTDEF) インスタンスに移動します。
2. インスタンスをダブルクリックします。この例では、**SalesAlert** インスタンスを編集します。

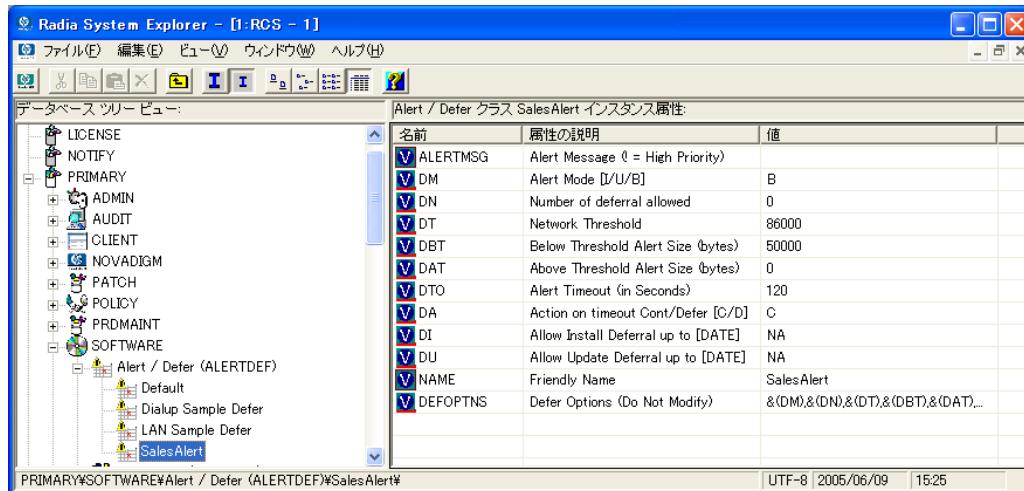


図 8.39 ~ 編集対象のインスタンスをダブルクリック

3. 編集する変数をダブルクリックします。このクラスの属性については、下の「表 8.11 ~ ALERTDEF クラスの変数」を参照してください。

表 8.11 ~ ALERTDEF クラスの変数

変数	説明	デフォルト値
ALERTMSG	Alert Message "サービスの警告メッセージ" の前の感嘆符 (!) は、メッセージの優先度が高いことを示します。	
DM	Alert Mode [I/U/B] インストールを行う場合は、 I に設定します。 更新を行う場合は、 U に設定します。 インストールまたは更新を行う場合は、 B に設定します。	B
DN	Number of deferral allowed DA (延期アクション) で指定したアクションが実行される前に、許容される延期の最大数を指定します。	0

表 8.11 ~ ALERTDEF クラスの変数

変数	説明	デフォルト値
DT	Network Threshold ネットワーク バンド幅のしきい値をバイト単位で指定します。延期の要件を満たすには、現在のネットワーク速度がこの値より小さくなければなりません。	86000
DBT	Below Threshold Alert Size (bytes) 延期の要件を満たすには、ダウンロードするファイルのサイズがこの値より大きくなければなりません。	50000
DAT	Above Threshold Alert Size (bytes) 延期の要件を満たすには、ダウンロードするファイルのサイズがこの値より小さくなければなりません。値が 0 の場合、この属性は無視されます。	0
DTO	Alert Timeout (in seconds) 延期警告のダイアログ ボックスを表示する時間を秒単位で指定します。タイムアウトに達した後は、DA 変数 (Action on timeout) で指定したアクションが実行されます。	120
DA	Action on timeout Cont/Defer [C/D] DTO (Alert Timeout) で指定した値までに、サブスクライバが延期警告ダイアログ ボックスに回答しなかった場合、指定のアクションを続行するには C を指定します。指定のアクションを延期するには D を指定します。	C
DI	Allow Install Deferral up to [DATE] この日付以降は、インストールを延期するオプションが使用できなくなります。アプリケーションはインストールされます。日付は、YYYYMMDD の形式で指定します。	NA
DU	Allow Update Deferral up to [DATE] この日付以降は、アプリケーションの更新を延期するオプションが使用できなくなります。アプリケーションは更新されます。日付は、YYYYMMDD の形式で指定します。	NA
Name	Friendly Name インスタンスの簡略名を指定します。	Default
DEFOPTNS	Defer Options (Do not Modify) この属性は、このクラスの他の属性の値を解決するために使用されます。この属性の値は変更しないでください。	&(DM),&(DN),&(DT), &(DBT),&(DAT),&(DTO), &(DA),&(DI),&(DU)

この例では、優先度の高い警告メッセージを追加します。そのために、まずリスト ビューで **ALERTMSG** 変数をダブルクリックします。

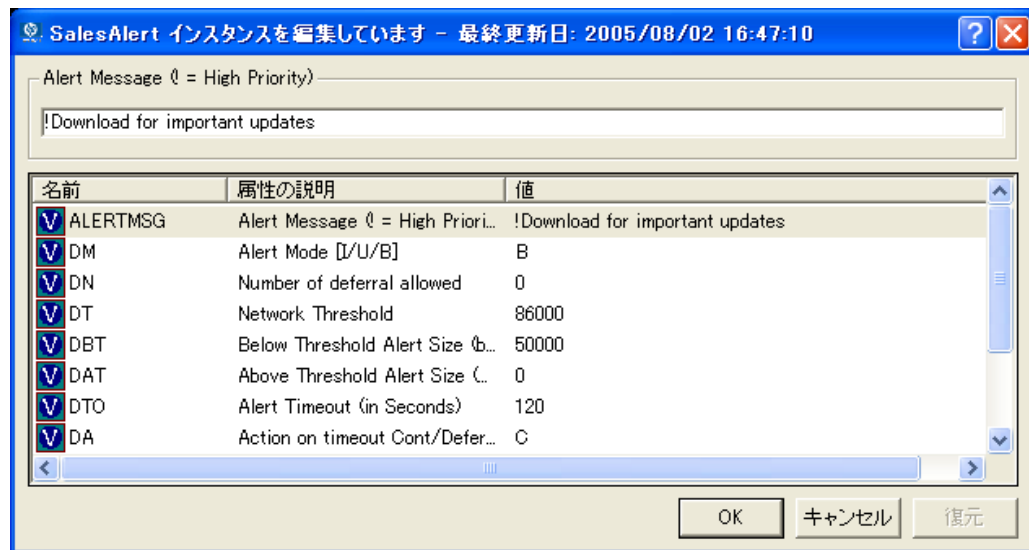


図 8.40 ~ SalesAlert インスタンスの編集

4. 表示するメッセージを入力します。
5. 次の属性をクリックして、適切な値を入力します。
6. 属性の編集が終了したら、[OK] をクリックします。[インスタンスの編集の確認] ダイアログボックスが表示されます。
7. [はい] をクリックして、変更を確定します。

Alert/Defer (ALERTDEF) インスタンスが変更されます。

Alert/Defer (ALERTDEF) インスタンスを作成したら、Application (ZSERVICE) インスタンスに Alert/Defer (ALERTDEF) インスタンスを接続する必要があります。これを行うには、Radia System Explorer で Alert/Defer (ALERTDEF) インスタンスをクリックし、適切な Application (ZSERVICE) インスタンスにドラッグします。Radia System Explorer の使用方法の詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

Radia MSI リダイレクタのローカル AIP のサポート

Radia MSI リダイレクタは、特殊なローカルホスト HTTP サーバーです。MSI インストールの過程でファイル リクエストを受け付けて処理します。MSI からの HTTP リクエストを受信すると、Radia MSI リダイレクタは、ローカル キャッシュ (存在する場合) からファイルを取得するか、上位の Radia Configuration Server または Radia Proxy Server にファイルを要求します。このプロセスでは、MSI のインストールで HTTP をサポートしている必要があります。ただし、Microsoft も含め、一部のベンダーの製品のインストールでは HTTP がサポートされなくなりました。HTTP がサポートされていないと、MSI のインストールで Radia MSI リダイレクタから直接ファイルが要求できなくなります。Radia MSI リダイレクタの機能が引き続き活用できるよう、Radia MSI リダイレクタ用に別のモジュールが開発されました。このモジュールでは、ローカル ファイル システム レベルで別のレベルのリダイレクトを追加します。このメソッドを使用する場合は、AIP がローカルであることを MSI に伝え、ファイル システムから直接ファイルを要求します。このリクエストは、Radia MSI リダイレクタに収集および転送され、通常の方法で処理されます。その後、MSI で処理が可能な定義済み "ローカル" AIP にファイルが配置されます。このローカル AIP は、一時的に作成されるものであり、インストールが完了すると削除されます。

この新機能は、Radia リリース 4.0 の Radia MSI リダイレクタに追加されています。この機能には、次の特長があります。

- 柔軟性とパフォーマンスのレベルが向上します。
- 日付/タイム スタンプが適用でき、長いファイル名がサポートできます。
- インストール ポイントとして http をサポートしないカスタム アクションが実行できます。

ローカル アプリケーション インストール ポイントが使用できるようにするには

1. Radia System Explorer で SOFTWARE ドメインの MSI Resources (MSI) クラスに移動します。各 MSI アプリケーションには、MSI インスタンスと IDX インスタンスがあります。
2. MSI インスタンスを右クリックして [インスタンス編集] をクリックします。
3. この機能を有効にするには、[MSIDRIVR] (Use Local AIP [Y/N]) を [Y] に設定します。

注意

データベースに MSIDRIVR がない場合は、"Use Local AIP [Y/N]" の説明と共に、MSIDRIVR をシングルバイトの変数として MSI Resources (MSI) クラスで作成します。クラス テンプレートを変更する前に、データベースをバックアップしておくことをお勧めします。クラス テンプレートの編集の詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

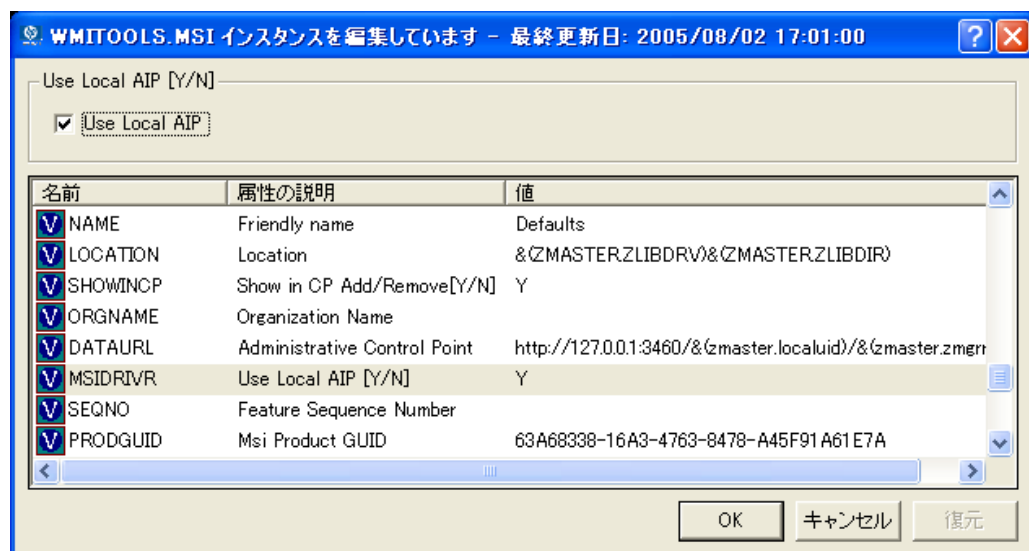


図 8.41 ~ MSIDRIVR を Y に設定

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[はい]** をクリックして、変更を確定します。
6. COP の **SETTINGS.LOCALAIP** 変数を設定して、クライアント デスクトップのローカル AIP フォルダの保存先を指定します (たとえば、**c:\localaip**)。

警告

LOCALAIP は、深いディレクトリ構造の AIP に対応できるように可能な限り短くすることをお勧めします。

インターネット プロキシの検出

インターネット プロキシが使用されている場合、Radia ではインターネット プロキシを検出することができます。インターネット プロキシのアドレスは、クライアント コンピュータの IDMLIB ディレクトリの PROXYINF.EDM に格納されます。IDMLIB のデフォルトのロケーションは、**<System Drive>:\Program Files\Novadigm\Lib** です。検出後、クライアント コンピュータが Radia Configuration Server に接続すると、指定のインターネット プロキシが使用されます。この機能を使用するには、Radia Client でインターネット プロキシが使用および検出できるようにする必要があります。Radia Application Manager を使用している場合は、PROXYINF.EDM クライアント オブジェクトで USEPROXY と DISCOVER をそれぞれ Y に設定します。

Radia Proxy Server について

Radia Proxy Server を使用すると、アプリケーションの配布に必要な作業の一部を Radia Configuration Server から別のサーバー コンピュータに分散して処理することができます。分散処理を行う理由としては、以下のものが考えられます。

- Radia Proxy Server の方が、ネットワーク上でクライアントに近い。
- Radia Configuration Server の負荷を軽減する必要がある。

Radia Proxy Server を使用した場合、配布するソフトウェアは Radia Proxy Server にコピーされます。Radia Proxy Server では、Radia Configuration Server からソフトウェアを取得する必要がない Radia Client にソフトウェアを提供します。Radia Proxy Server を導入するメリットがあるかどうかは、サーバーと Radia サブスクリバ コンピュータごとに個別に評価する必要があります。

詳細については、『Radia Proxy Server Guide』を参照してください。

まとめ

- アプリケーションの配布戦略を慎重にプランしてテストし、サブスクリイバへの最適な配布方法を決める必要があります。
- タイマーを使用すると、指定した時間または間隔でアプリケーションを配布することができます。
- 通知機能を使用すると、**Radia** ですでにインストールされているアプリケーションを更新または削除したり、電子メールでユーザーに更新を通知したりすることができます。
- ドラッグ アンド ドロップ通知コマンドを使用すると、1 つまたは複数のサブスクリイバに対してすぐに通知を開始することができます。ドラッグ アンド ドロップ通知には、アプリケーションをクライアント コンピュータにインストールしていない場合でも通知が実行できるという利点があります。この通知機能を使用すると、ソフトウェアのインストールや必須サービスの更新に加え、クライアント コンピュータ上の実行ファイルの起動も可能になります。
- バージョン グループ エディタを使用すると、バージョン化されたアプリケーションを管理することができます。
- **Radia** では、**Windows** インストーラ対応アプリケーションがサポートされています。
- 機能セット エディタを使用すると、**MSI** パッケージのカスタマイズを制御することができます。
- サブスクリイバに配布する前に、安全な環境で配布をテストします。
- **Radia Configuration Server** のネットワーク トラフィックや作業負荷を軽減する方法として、**Radia Proxy Server** の使用を検討します。

サービスを配布する

Radia Client のディレクトリと オブジェクト

この章は以下を目的としています。

- Radia Client のディレクトリ構造を理解する。
- Radia Client のコア オブジェクトに理解する。
- クライアント オブジェクトの格納場所を理解する。

Radia Client のディレクトリとオブジェクト

方法は組織のニーズに合わせて調整することになりますが、**Radia Software Manager** を包括的に理解するためにこのマニュアルに目を通しておくことをお勧めします。この章では、**Radia Client** のコア オブジェクトについて説明します。

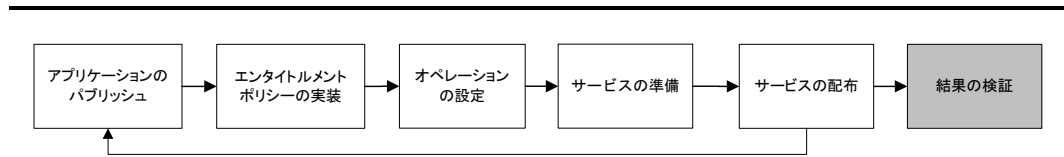


図 9.1 ~ このマニュアルで遂行するタスク

Radia Client のディレクトリ構造

下の図は、Radia Software Manager のインストール、クライアントから Radia Configuration Server への強制的なシステム (マシン) 接続、および必須アプリケーションのインストールが行われた後の Radia Software Manager クライアント コンピュータ上のディレクトリ構造の例です。

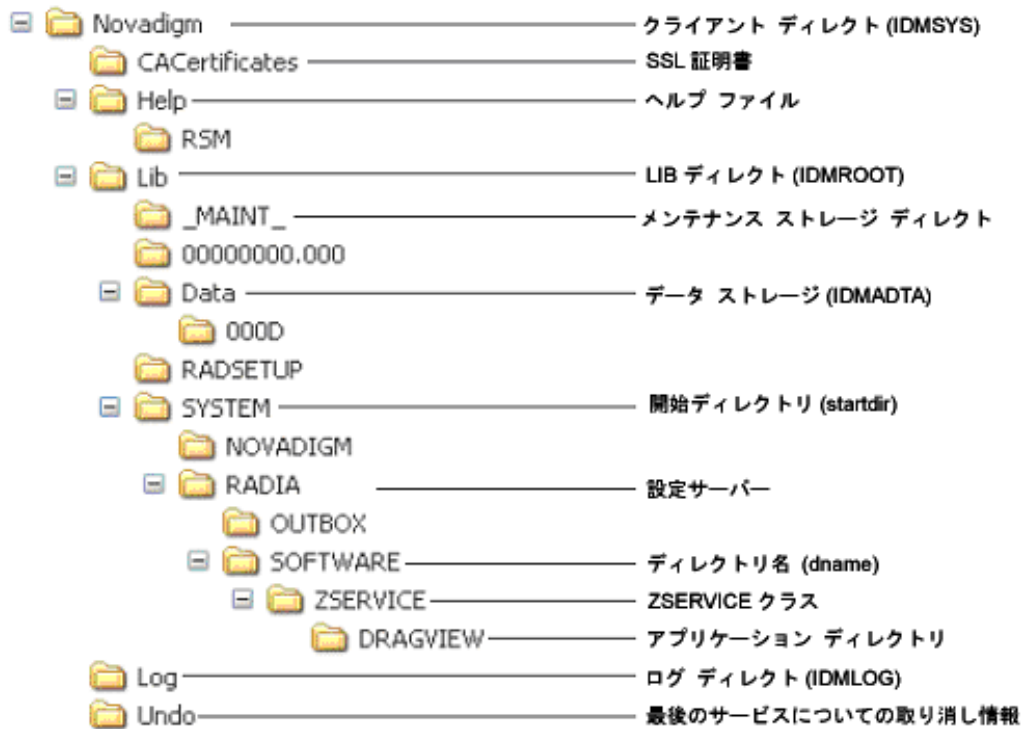


図 9.2 ~ クライアントのディレクトリ ツリーの表示

注意

ここで言うコンピュータとは、ワークステーションまたはサーバーのことです。

Radia Software Manager のディレクトリ

Radia Software Manager for Windows の初期設定は、クライアント コンピュータ上の NVD.INI ファイルの [NOVAEDM] セクションにあります。NVD.INI はデフォルトで IDMLIB ディレクトリに配置され、この場所はレジストリ キー HKLM¥Software¥Novadigm¥Radia¥Settings¥Inipath に格納されます。

表 9.1 ~ NOVAEDM のパラメータ

パラメータ	説明
IDMDATA	Radia がソフトウェアをインストールすると、Radia Client は Radia Configuration Server から受信した圧縮ファイルを一時的にこのフォルダに格納します。 ファイルが解凍されてクライアント コンピュータにインストールされると、圧縮ファイルは削除されます。 デフォルト: <i>SystemDrive</i> : ¥Program Files¥Novadigm¥Lib¥Data¥
IDMLIB	現在管理されているサービスのオブジェクトを格納するダイナミック ディレクトリ。 デフォルト: <i>SystemDrive</i> : ¥Program Files¥Novadigm¥Lib¥
IDMSYS	.EXE ファイルや .DLL ファイルなどの Radia Client の実行ファイルを格納します。 デフォルト: <i>SystemDrive</i> : ¥Program Files¥Novadigm¥
IDMROOT	IDMLIB のベース ディレクトリ。これはスタティック パスです。 デフォルト: <i>SystemDrive</i> : ¥Program Files¥Novadigm¥Lib¥
IDMLOG	Radia Client のログを格納します。 デフォルト: <i>SystemDrive</i> : ¥Program Files¥Novadigm¥Log¥

Radia Client のオブジェクトについて

クライアント コンピュータが Radia Configuration Server に接続すると、クライアントと Radia Configuration Server の間で情報が交換されます。この交換のことを *解決* と呼びます。解決の過程で、Radia はサービスのステータスをチェックし、クライアント コンピュータに格納されているオブジェクトからの情報で Radia Configuration Server を更新します。

Radia Client のオブジェクトは、クライアント コンピュータの IDMLIB ディレクトリに格納されます。Radia Software Manager クライアントをインストールして、Radia Configuration Server に接続した後は、Radia Client のオブジェクトを使用して次のような質問に答えることができます。

- クライアント コンピュータのハードウェア設定はどうなっているか。
- サービスは正常にインストールされたか。
- サービスはいつインストールされたのか。
- クライアント コンピュータの名前は何か、最後にログオンしたユーザーはだれか。
- このクライアント コンピュータで考えられるデータの送信元は何か。

クライアント コンピュータに常に複数の Radia オブジェクトがある一方で、現在のクライアント接続のステータスに関する情報を供給する役割を持つオブジェクトのコア グループがあります。

「表 9.2 ~ コア クライアント オブジェクト」下では、それらのコア オブジェクトがリストされています。この表では、オブジェクトが作成または更新されるタイミングについての情報と、オブジェクトの内容についての簡単な説明が示されています。リストの各オブジェクトについてはこの章にそれ専用の節があり、属性をリストする表もあります。クライアント接続ではその他のオブジェクトも作成されますが、ここでは最も一般的に使用されるオブジェクトだけを取り上げます。その他のクライアント オブジェクトについては、HP OpenView Web サイトを参照してください。

表 9.2 ~ コア クライアント オブジェクト

オブジェクト	作成または更新されるタイミング	格納される情報のタイプ
PREFACE	<p>PREFACE は、次のような radskman のプロセスの各段階で Radia Configuration Server に送信されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> クライアント オペレーション プロファイルの解決 クライアント セルフ メンテナンスの解決 カタログの解決 単一サービスの解決 (処理されるサービスによっては複数回行われます。) アウト ボックスのフラッシュ <p>詳細については、「表 9.6 ~ PREFACE オブジェクトの属性」を参照してください。</p>	<p>radskman の各実行についてのコア情報が格納されます。</p>
ZCONFIG	<p>ZCONFIG は、クライアント接続プロセスの開始時に作成されます。</p> <p>詳細については、「表 9.3 ~ ZCONFIG 属性」を参照してください。</p>	<p>クライアント コンピュータの基本的なハードウェア情報 (プロセッサ、オペレーティング システム、ドライブなど) が格納されます。</p>
SAPSTATS	<p>RADCONCT、RADSTGRQ、RADSTGMS などの、サーバー アクセス プロファイル (SAP) にアクセスする必要があるネットワーク モジュールによって更新されます。</p> <p>RADSKMAN は、ジョブの開始時に SAPSTATS オブジェクトを削除します。</p> <p>注意: クライアント オペレーション プロファイルを有効にしないと、このオブジェクトが利用できません。</p> <p>詳細については、「表 9.5 ~ SAPSTATS の属性」を参照してください。</p>	<p>SAPSTATS オブジェクトは、クライアント コンピュータのサーバー アクセス プロファイル (SAP) ごとに 1 つのインスタンスを持ちます。各インスタンスでは、速度、送受信されたファイルの数、SAP のロールなどの各 SAP の情報が要約されます。</p>
SYNOPSIS	<p>このオブジェクトは、クライアント接続の最後に Radia Configuration Server に転送されます。</p> <p>注意: クライアント オペレーション プロファイルを有効にしないと、このオブジェクトが利用できません。</p> <p>詳細については、「表 9.4 ~ SYNOPSIS の属性」を参照してください。</p>	<p>RADSKMAN は、SYNOPSIS オブジェクトにジョブの概要を格納します。その概要では、RADSKMAN コマンドラインのパラメータの一部と、追加、削除、および修復されたファイルとバイトの数がレポートされます。</p>

Radia Client のバージョン

このマニュアルで説明されているオブジェクトの一部は、Radia Client のバージョン 3.1 以上でのみ利用できます。クライアントのバージョンを確認するには、テキスト エディタを使用して IDMLIB ディレクトリにある `connect.log` ファイルを開き、"version" を検索します。オペレーティング システムが Windows の場合は、IDMSYS ディレクトリにある `radskman` の [プロパティ] ダイアログボックスで [バージョン情報] タブを確認することもできます。

Radia Client Explorer を使用してオブジェクトを表示する

Radia Client Explorer は、Radia Administrator Workstation のコンポーネントとしてインストールされます。Radia Client Explorer を使用すると、IDMLIB ディレクトリのオブジェクトを表示することができます。クライアント コンピュータの IDMLIB ディレクトリへのアクセス権があれば、どのオブジェクトでも表示できます。アクセス権がない場合は、場合によっては、手動でオブジェクト ファイルを取得してそれを Radia 管理者のコンピュータに格納する必要があります。

Radia Client Explorer を使用してオブジェクトを表示するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia Client Explorer] をクリックします。
Radia Client Explorer が表示されます。

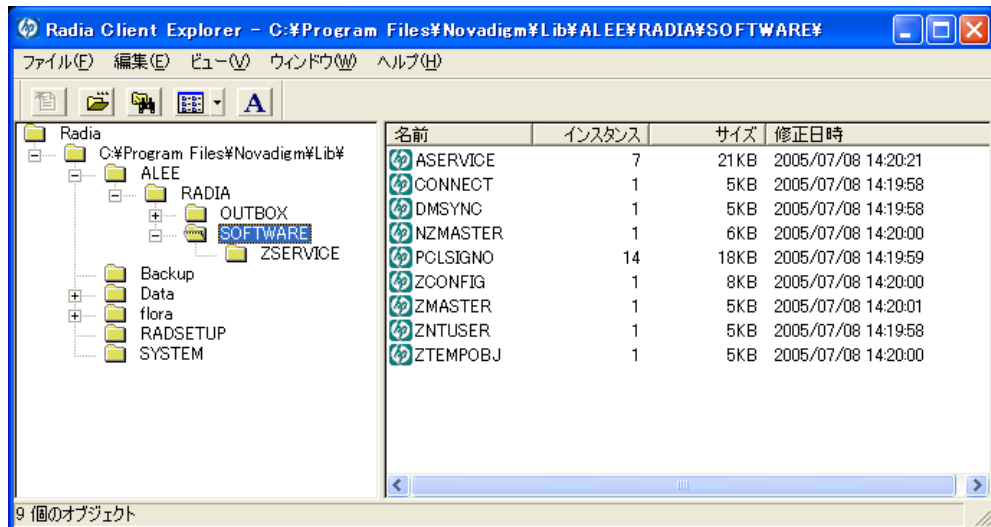


図 9.3 ~ [SOFTWARE] まで展開された Radia Client Explorer

2. 必要に応じて、[ファイル] メニューの [ディレクトリを変更] をクリックして、クライアント コンピュータの IDMLIB ディレクトリ、またはオブジェクトの格納先のディレクトリを表示します。
3. リスト ビューでオブジェクトの名前をダブルクリックします。
選択したオブジェクトが Radia Client Explorer に表示されます。
4. [保存/終了] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。

ハードウェアの設定情報 (ZCONFIG)

ZCONFIG オブジェクトは、クライアント コンピュータからのハードウェア設定情報を格納します。Radia Client Explorer を使用すると、ZCONFIG オブジェクトが表示できます。次の表は、ZCONFIG の属性をアルファベット順で説明しています。それらの属性は、クライアント コンピュータの設定によって異なる場合があります。

注意

ZCONFIG オブジェクトは、Radia System Explorer で表示できるように自動的に Radia Configuration Server に送信されます。このオブジェクトが Radia Configuration Server に送信されないようにするには、ベース インスタンスで POLICY.USER.ZCONFIG 属性を N に設定します。このように設定すると、すべてのユーザーからの収集が停止します。その場合でも、クライアント コンピュータにオブジェクトは存在します。

表 9.3 ~ ZCONFIG 属性

属性	説明	例
BOOTDRV	ブート ドライブの名前	C:
BOOTDRVI	ブート ドライブのタイプ	IDE
DHCSR0 <i>n</i>	LADAPT0 <i>n</i> アダプタの DHCP サーバーの IP アドレス	10_10_10_6
DHCPSVR	LADAPT0 <i>n</i> アダプタの DHCP サーバーの IP アドレス	
DNSDMN01	LADAPT0 <i>n</i> アダプタのクライアント コンピュータで使用されるドメイン名	
DNSDOMN	現在使用されているドメイン名	
DNSHM01	LADAPT0 <i>n</i> アダプタのクライアント コンピュータで使用されるドメイン名	
DNSHOSTN	現在使用されているホスト名	
GATEWY01	ネットワーク アダプタ 1 のゲートウェイ アドレス	10.1.1.1
HALCOMP	HAL.DLL の会社名	Microsoft Corporation
HALDATE	HAL.DLL の日付と時刻	20010817 19:00:00
HALFNAME	HAL.DLL の元の名前	Halacpi.dll
HALFVER	HAL.DLL の内部バージョン	5.1.2600.0 (xpclient.010817-1148)
HALINAME	HAL.DLL 名前	Halacpi.dll

表 9.3 ~ ZCONFIG 属性

属性	説明	例
HALLANG	HAL.DLL の言語	English (United States)
HALPNAME	HAL.DLL の製品名	Microsoft® Windows® Operating System
HALPVER	HAL.DLL の製品バージョン	5.1.2600.0
HALSIZE	HAL.DLL のサイズ	78464
IPADDR01	ネットワーク アダプタ 1 の IP アドレス	10.1.1.32
LADAPT01	LAN アダプタ 1	00C04F6D76B4
REBOOTD	リブートの日付	20010126
REBOOTT	リブートの時刻	13:12:30
SCANTYPE	ハードウェア スキャンのタイプ	WMI
SUBNET01	LADAPT01 のサブネット マスク	255.255.255.0
ZGATEWAY	ゲートウェイ アドレス	&(GATEWY01)
ZHDWBIOS	BIOS のタイプ	07/27/98 Phoenix ROM BIOS PLUS Version 1.10 A02
ZHDWCDDR	CD-ROM ドライブのドライブ名	H:
ZHDWCOMP	コンピュータ名	ALEE
ZHDWCPU	CPU のタイプ	GenuineIntel
ZHDWCPUN	CPU の数	1
ZHDWCPUS	現在の CPU の速度	350MHz
ZHDWCTYP	コンピュータのタイプ (デスクトップまたはラップトップ)	LAPTOP
ZHDWD00	ドライブ 00 のドライブ名	C:
ZHDWD00C	ドライブ 00 のドライブの分類	Fixed
ZHDWD00F	ドライブ 00 の現在の空き容量	321,093,632
ZHDWD00S	ドライブ 00 のファイル システム	FAT
ZHDWD00T	ドライブ 00 のドライブの分類	2,146,467,840
ZHDWD01	ドライブ 01 のドライブ名	D:
ZHDWD01C	ドライブ 01 のドライブの分類	Fixed
ZHDWD01F	ドライブ 01 の現在の空き容量	1,116,372,992
ZHDWD01S	ドライブ 01 のファイル システム	FAT
ZHDWD01T	ドライブ 01 のドライブの分類	2,146,467,840
ZHDWDF_A	フロッピー ドライブ A の情報	3.5, 1.44MB, 512 bytes/sector
ZHDWDLST	割り当てられているドライブ名のリスト	A, C, D

表 9.3 ~ ZCONFIG 属性

属性	説明	例
ZHDWDNUM	割り当てられているドライブ名の数	3
ZHDWFPU	現在の FPU のタイプ	x86 Family 6 Model 5 Stepping 2
ZHDWIPAD	IP アドレス	&(IPADDR01)
ZHDWKYBD	キーボードのタイプ	IBM enhanced (101- or 102-key); Number of function keys = 12
ZHDWLANA	LAN アダプタ	&(LADAPT01)
ZHDWLANG	言語	English (United States)
ZHDWMEM	物理メモリ (RAM) の総量	133,619,712
ZHDWMEMF	メモリ (RAM) の現在の総空き容量	66,543,616
ZHDWMOUS	マウス (ポインティング デバイス) のタイプ	mmps2
ZHDWNET1	ネットワーク アダプタ 1 の情報	3Com Fast EtherLink XL 10/100Mb TX Ethernet NIC (3C905B-TX)
ZHDWNNET	ネットワーク アダプタの数	1
ZHDWOS	オペレーティング システムとバージョン	Windows_NT 4.0 [Build 1381]
ZHDWOSCL	オペレーティング システムの分類 (ワークステーションまたはサーバー)	Workstation
ZHDWOSDB	オペレーティング システムのビルド	1381
ZHDWOSOG	オペレーティング システムの組織	ASD Foods, Inc.
ZHDWOSOW	オペレーティング システムの所有者	Anna Lee
ZHDWPA00	プリンタ 00 の情報	¥¥ASD ¥ACCOUNTING on Port: ¥¥ASD¥ACCOUNTING Driver:HP LaserJet 4 Plus
ZHDWPA01	プリンタ 01 の情報	Apple LaserWriter Pro 810 on Port:LPT1:Driver:Apple LaserWriter Pro 810
ZHDWPPAR	パラレル ポートの数	1
ZHDWPPRN	利用可能なプリンタの数	2
ZHDWPSER	シリアル ポートの数	2
ZHDWSVCP	適用されているサービス パック	Service Pack 4
ZHDWVIDEO	ビデオのタイプ	ATI Technologies Inc. 3D RAGE PRO
ZHDWXPAG	ページ サイズ	4096 bytes
ZHWCPU01	第 1 CPU のタイプ	GenuineIntel
ZHWFPU01	第 1 FPU のタイプ	x86 Family 6 Model 5 Stepping 2
ZHDWVIE	Microsoft Internet Explorer のバージョン	6.0.2600.0000
ZHDWVMSI	MSI のバージョン	2.0.2600.0

表 9.3 ~ ZCONFIG 属性

属性	説明	例
ZHDWVRES	ビデオの解像度	800x600
ZMODEM	モデムがあるかどうか	Y
ZOBJRRC	解像度のリターン コード	000
ZOBJRSTY	解像度のタイプ	C
ZUSERID	ユーザー ID またはコンピュータ名	ALEE

クライアント オペレーション プロファイルの概要 (SYNOPSIS)

SYNOPSIS オブジェクトは、クライアント オペレーション プロファイルを使用してクライアント上で作成されます。SYNOPSIS オブジェクトは、最新のクライアント接続に関する要約情報を保持します。SYNOPSIS オブジェクトを使用すると、クライアント接続プロセスの成功と失敗を確認することができます。クライアント オペレーション プロファイルの実装の詳細については、251 ページの「第 6 章: クライアント オペレーション プロファイルを設定する」を参照してください。

表 9.4 ~ SYNOPSIS の属性

属性	説明
STARTIME	ISO8601 時間形式の開始時刻、1997-08-15T11:12:00-0400 など
ENDTIME	ISO8601 時間形式の終了時刻
EXITCODE	ジョブからの終了コード
ERRORMSG	『Radia Management Applications Messages and Codes Guide』で説明されている EXITCODE に対応するテキスト メッセージ
PRIORAPP	このジョブが開始される前のサービス リストにあったアプリケーションの総数 (インストールされているかどうかは関係ない)
PRIORINS	このジョブが開始される前のサービス リストにあったインストール済みアプリケーションの総数
PRIORERR	このジョブが開始される前にサービス リストにあったエラーのあるアプリケーションの総数
CURRAPP	ジョブが完了した後にサービス リストにあるアプリケーションの数
CURRINS	サービス リストにあるインストール済みアプリケーションの数
UPDNUM	サービス リストで見つかった更新の数
UPDSKIP	スキップされた更新の数
UPDDONE	処理された更新の数
UPDFAIL	失敗した更新の数

表 9.4 ~ SYNOPSIS の属性

属性	説明
ADDNUM	サービス リストで見つかった新しいアプリケーションの数
ADDSKIP	スキップされたインストールの数 (おそらくはオプション アプリケーション)
ADDDONE	処理されたインストールの数
ADDFAIL	失敗したインストールの数
DELNUM	サービス リストで見つかった削除の数
DELSKIP	スキップされた削除の数
DELDONE	処理された削除の数
DELFAIL	失敗した削除の数
VERNUM	検証されたアプリケーションの数
VERSKIP	スキップされた検証の数
VERDONE	処理された検証の数
VERFAIL	失敗した検証の数
REPNUM	修復されたアプリケーションの数
REPSKIP	スキップされた修復の数
REPDONE	処理された修復の数
REPFAIL	失敗した修復の数
CREFRESH	カタログのリフレッシュ (Y/N)
JOBID	通知によってコマンド ラインに渡された Jobid
ZUSERID	このジョブの Userid
ZCONTEXT	このジョブのコンテキスト (M はマシン、U はユーザー)
MACHNAME	このジョブが実行された起点のクライアント コンピュータのマシン名
USEREXEC	ジョブを実行したユーザー
CMDLINE	このジョブの実行に使用されたコマンド ライン パラメータ

サービス アクセス プロファイルのステータス (SAPSTATS)

SAPSTATS オブジェクトはクライアント オペレーション プロファイルを使用してクライアント上で作成され、Radia Client からサーバー アクセス プロファイル (SAP) のステータスと使用状況の統計をレポートするために使用します。SAPSTATS オブジェクトは、Radia Configuration Server データベースの SAP クラスで定義されているすべての変数を、使用状況に関連する以下の変数と一緒に保持します。SAP クラスの詳細については、251 ページの「第 6 章: クライアント オペレーション プロファイルを設定する」を参照してください。

表 9.5 ~ SAPSTATS の属性

属性	説明
BANDWIDTH	使用するバンド幅の割合 (1 ~ 99)
BYTERCVD	受信したバイト数
BYTESENT	送信されたバイト数
ENABLED	この SAP が有効かどうかを指定します。有効の場合は Y、無効の場合は N。
ERRCOUNT	エラー数
FILEMISS	見つからないファイルの数
FILERCVD	受信したファイルの数
FILESENT	送信されたファイルの数
LASTAXSD	最後にアクセスされた日付と時刻 (ISO 形式)
NAME	SAP の簡略名。
OBJRCVD	受信したオブジェクトの数
OBJSEND	送信されたオブジェクトの数
PRIORITY	CLIENT.LOCATION クラスのインスタンスから取得したこの SAP の優先度
PROXY	クライアントが SAP に接続する際に使用するインターネット プロキシ URI。クライアントが管理します。
RETRYINT	SAP の再試行までに待機する秒数。空白にすると、再試行は行われません。
RETRYLIM	この SAP をスキップするまでの、試行の失敗回数 (0 ~ 99)。空白にすると、再試行は行われません。
ROLE	SAP のロール。有効な値は次のとおりです。 O: クライアント オペレーション プロファイル M: セルフ メンテナンス S: サービス D: データ A: 上記ロールのすべて
SPEED	クライアント コンピュータから SAP までの速度 (1 秒あたりのバイト数)

表 9.5 ~ SAPSTATS の属性

属性	説明
STATUS	この SAP のステータス 000 = SAP は正常にアクセスされました 920 = SAP にはアクセスできませんでした 999 = SAP は使用されませんでした
STREAM	ストリーミングが使用されるかどうかを指定します。使用する場合は Y。この設定は、ZMASTER.ZNORSPNS のクライアント設定を上書きします。
THROTYPE	使用されるバンド幅スロットリングのタイプ。有効な値は NONE、ADAPTIVE、および RESERVED です。
TIMEOUT	通信のタイムアウト (秒単位)
TYPE	SAP のタイプ。有効な値は次のとおりです。 RCS - Radia Configuration Server DATA - Radia Proxy Server、Radia Staging Server、または CD-ROM。
URI	SAP の URI (Universal Resource Identifier)

radskman Execution (PREFACE)

PREFACE オブジェクトは、**radskman** の各実行に関する情報を保持します。PREFACE は、次のような **radskman** のプロセスの各段階で Radia Configuration Server に送信されます。

- クライアント オペレーション プロファイルの解決
- クライアント セルフ メンテナンスの解決
- カタログの解決
- 単一サービスの解決 (処理されるサービスによっては複数回行われます。)
- アウト ボックスのフラッシュ

クライアント接続の新しい各段階で、PREFACE オブジェクトは更新されます。PREFACE オブジェクトの変数は、解決とレポートに利用できます。解決については、ZSTOP 式、シンボリック置換、およびメッセージのディスパッチに PREFACE オブジェクトの属性を使用します。レポートについては、MACHNAME、ZUSERID、ZCONTEXT、JOBID、および CTYPE を結合して、クライアント接続を実行したユーザー、接続のタイプ、およびコンテキストを知ることができます。

表 9.6 ~ PREFACE オブジェクトの属性

属性	説明
CMDLINE	現在のクライアント接続で使用された radskman コマンド ラインのパラメータ。
COMPDN	Active Directory 形式のコンピュータの識別名。このフィールドは、システムが Active Directory またはドメイン環境に属していない場合は空白です。Active Directory に対して証明を行わない Windows オペレーティング システムは、これをそのドメイン名およびマシン名として示します。 例: CN=ALEE,CN=Computers,DC=usa,DC=asdfoods,DC=com
CTYPE	Radia Client のタイプ。有効な値は次のとおりです。 RSM Radia Software Manager RAM Radia Application Manager RPS Radia Proxy Server または Radia Staging Server (アプリケーション リソースのプレロード用)
JOBID	この接続でコマンド ラインに指定された jobid (Radia Client 3.0 以上)。
LOCALUID	クライアント コンピュータの IDMROOT 下にある開始ディレクトリ。LOCALUID は、STARTDIR radskman パラメータから派生した値を保持します。たとえば startdir = \$USER の場合、LOCALUID はユーザーの ID を保持します。STARTDIR = SYSTEM の場合は、LOCALUID は 'SYSTEM' を保持します。UID は、ユーザーの ID ではなくユーザーの初期ディレクトリのことです。
MACHNAME	クライアント コンピュータのマシン名。
USEREXEC	現在ログオンしていて、コマンドを実行したユーザー。通知やタイマーの場合は SYSTEM です。ログオン スクリプトの場合は、サブスクリバのネットワークアカウント名になります。
ZCONTEXT	この接続のコンテキスト。有効な値は、M (マシン)、U (ユーザー)、または空白です。
ZDOMNAME	radskman コマンド ラインの DNAME パラメータで指定された Radia データベースのドメイン。DNAME がコマンド ラインで指定されていない場合、デフォルトは SOFTWARE です。
ZMGRNAME	radskman コマンド ラインの MNAME パラメータで指定された Radia Configuration Server の名前。
ZUSERID	ZUSERID フィールドは、クライアントの ZMASTER.ZUSERID にある同じ値を保持します。ほとんどの場合はクライアント コンピュータのマシン名を表しますが、現在のユーザー名や別の値も保持する場合があります。このフィールドの値は、ポリシーの解決やレポートの鍵として使用されることがよくあります。UID radskman パラメータはこの値を設定します。

PROFILE ファイル

ZCONFIG や ZMASTER などの一部のクライアント オブジェクトは、クライアント接続の過程で Radia Configuration Server に送信されます。クライアント コンピュータから受信したオブジェクトは、Radia データベースの PROFILE ファイルに格納されます。PROFILE ファイル内では、各クライアント コンピュータがドメインとして格納されます。デフォルトでは、各クライアント コンピュータは現在ログオンしているサブスクリバによって識別されます。サブスクリバは、コンピュータ名でもユーザー名でもかまいません。

次の表は、PROFILE ファイルに格納されることのあるオブジェクトの一部を説明しています。オブジェクトは、設定によって異なる場合があります。

表 9.7 ~ PROFILE ファイルのオブジェクト

インスタンス	記録された情報
ZCONFIG	クライアント コンピュータの基本的なハードウェア情報 (プロセッサ、オペレーティング システム、ドライブなど) が格納されます。
ZMASTER	Radia Client を実行するために使用される情報 (ユーザー ID やオペレーティング システムなど) が格納されます。
ZSVCSTAT	クライアント コンピュータに正常にインストールされた後のサービスの情報が格納されます。どのユーザーがアプリケーションを持っているのか、そのアプリケーションがいつインストールされたのかの確認など、レポート目的に便利です。サービスごとに 1 つのインスタンスが作成されます。
ZSTATUS	最新のクライアント接続の情報 (クライアント コンピュータとの間で送受信されるオブジェクトの数など) が格納されます。

各ドメインには、クライアント コンピュータから受信したオブジェクトを表す複数のクラスが格納されます。Radia System Explorer を使用すると、PROFILE ファイルを表示することができます。

Radia Inventory Manager を使用してレポートिंगする

Radia Inventory Manager は、ポリシー駆動型のインベントリ管理ツールです。ソフトウェアやハードウェアに関する情報を自動的に検出し、その結果を Web ベースのレポートにまとめます。Radia Inventory Management クライアントは、WBEM (Web-based Enterprise Management) コンシューマです。WBEM は、Distributed Management Task Force によって定義されている情報収集の規格です (DMTF)。WBEM の詳細については、<http://www.dmtf.org> を参照してください。

Radia Inventory Manager は、Radia Inventory Manager サーバー、Radia Inventory Manager クライアントという 2 つの要素で構成されます。Radia Inventory Manager サーバーでは、検出結果を基にした集中管理およびレポートを行うことができます。Radia Inventory Manager クライアントは、クライアント デバイスの設定情報を検出し、その結果を Radia Inventory Manager サーバーにレポートします。結果は、接続アクティビティ中に Radia Configuration Server に送信され、Radia Integration Server に転送されます。オプションとして、ODBC 準拠のデータベースに挿入するためにデータを送信することもできます。Radia Inventory Manager のレポートは、Radia Integration Server または Radia Management Portal から表示できます。

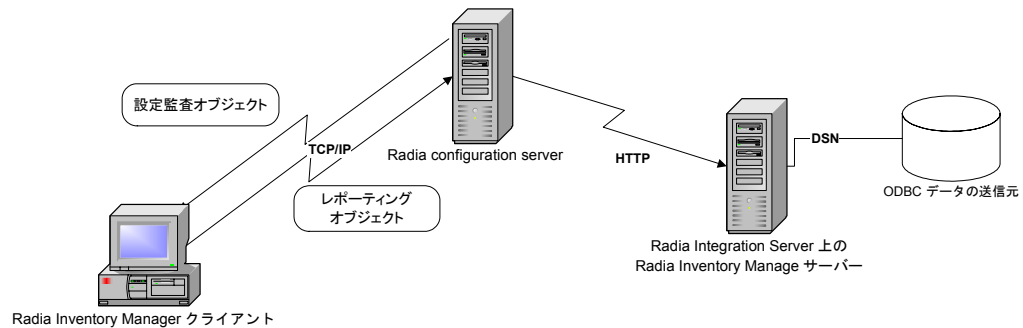


図 9.4 ~ Radia Inventory Manager による ODBC の送信元との通信

Radia Inventory Manager を使用する利点は、以下のとおりです。

- ハードウェア情報を監査します。
- ソフトウェアを監査します (.EXE ファイルなど、特定のファイルまたはクラス ファイルを監査することもできます)。
- クライアント デバイスからファイルを収集します。
- ODBC 準拠のデータベースを介して収集された情報に関するレポートを生成します。
- 個人用携帯型情報端末 (PDA) についてレポートします。

Radia Inventory Manager は、Radia Integration Server のモジュールの 1 つです。Radia Integration Server は Radia Inventory Manager が検出した情報を ODBC 準拠のデータベースに格納して管理し、アクティブ サーバー ページを使用して Radia データベースからのレポートを提供します。WBEM がインストールされているコンピュータ (Windows 2000 など) の場合、Radia Inventory Management クライアントは WBEM ネームスペースに対してクエリを行い、ハードウェア、ファイル システム、レジストリ、サービス、イベント ログなどの情報を返すことができます。WBEM クライアント ソフトウェアは、Windows 95、Windows 98、Windows 98 SE、および Windows NT4 SP4 以降のバージョン向けに Microsoft から提供されています。WBEM がインストールされていないコンピュータの場合、Radia Inventory Manager は Radia Client のオブジェクトを使用してファイル システムやハードウェアに関する情報を生成します。詳細については、『Radia Inventory Manager Guide』を参照してください。詳細については、『Radia Inventory Manager Guide』を参照してください。

重要

Radia Inventory Manager は、HP から入手できる追加機能です。詳細については、営業担当者にご連絡ください。

クライアント ログ

主な 3 つのクライアント モジュール **radskman**、**radpinit**、および **radconct** から 1 つのログが作成されます。このログのデフォルト名は **connect.log** で、そのデフォルトの場所は **<System Drive>:\Program Files\Novadigm\log** です。**connect.log** のサイズが 1 MB に達すると、**connect.bak** という名前で作成されます。

問題の診断では、場合によって、配布のデバッグまたはクライアント コンピュータからの情報の収集のための新しいログに名前を付けることが必要になります。3 つの主なクライアント モジュールはそれぞれ、そのコマンド ラインで **log** パラメータを追加することで特定のログ ファイルを使用するように指定できます。たとえば、日付と時刻に基づいてログに名前を付けることができるかもしれません。そのようにすると、特定の日付に問題が発生した場合に、調査する必要のあるログだけを取り出すことができます。**log** パラメータを **radskman** コマンド ラインに追加すると、次のように特定のログ名を指定することができます。

```
radskman log=notify10012003.log
```

log パラメータの値は、**catalog** および **application** ディレクトリの **ZMASTER** オブジェクトにある **LOGNAME** 属性に格納されます。

診断モジュール (radstate)

radstate は、Radia Client の現状の概要を示すように設計された診断モジュールです。**radstate** の出力情報は、多くの Radia Client オブジェクトから取得したデータに基づいています。

冗長パラメータを使用して **radstate** を実行すると (mode v)、Radia Client 環境に関連する次のような基本的な情報が提供されます。

- 包括的なオブジェクトの統計
- 現在の日付と時刻
- 現在のオペレーティング システム
- IDMSYS、IDMLIB、および IDMLOG ディレクトリの場所
- 環境設定
- エミュレータ設定
- トレース レベル
- タイムアウト設定
- ユーザーおよびサービスが使用するコンポーネントの総数 (インスタンスの総数やバイトの総数を含む) などの、あらゆるサービス ステータス
- Radia のタイマーの情報

radstate を使用すると、いつでも Radia Client の設定を確認することができます。たとえば、各クライアント接続の終了時に **radstate** を実行します。モード オプション **o** で **radstate** を実行すると、**ZRSTATE** オブジェクトと **ZRSTATES** オブジェクトが作成され、それらを必要に応じて Radia Configuration Server に送信することができます。

次の場合には、**radstate** を実行する必要があります。

- Radia Client 固有の情報が必要なとき。
- 一部のファイルが正しく配布されていない疑いがある場合。
- デスクトップの更新が行われていない場合。

radstate を手動で実行すると、クライアントのデスクトップにインストールされているサービスやリソースの現在の状態についての要約スタイルのレポート **radstate.log** が作成されます。

radstate は、次のように、カンマで区切られた適切なパラメータを使用してコマンド ラインから実行します。

```
radstate mode=vo, IDMR00T=C:¥Program Files¥Novadigm¥Lib
```

追加情報を含む技術的なドキュメントについては、HP OpenView Web サイトを参照してください。

まとめ

- **ZCONFIG** オブジェクトは、クライアント コンピュータからのハードウェア設定情報を保持します。
- **Radia Client Explorer** を使用すると、クライアント コンピュータに格納されているオブジェクトを表示することができます。
- **Radia** データベースの **PROFILE** ファイルは、クライアント コンピュータから受信したオブジェクトを保持します。
- **Radia** データベースからレポートを作成するには、**Radia Inventory Manager** の使用を検討してください。



命名規則

ここでは、**Radia** データベースに格納されたソフトウェアを整理するのに役立つ命名規則について説明します。

命名規則

アプリケーションをパブリッシュする際、以下のような要件がサブスクライバごとに異なっている場合があります。

- OS
- ハード ディスクの空き容量
- プロセッサ、メモリなど
- 職務権限などの要因に応じて異なるデータやアプリケーション

こうした要件の違いにより、1 つのアプリケーションのパッケージを複数作成しなければならない場合があります。Radia データベース内のデジタル資産が整理された状態を保つには、命名規則を作成して組織内で使用することをお勧めします。

ここでは、独自の基準を作成するためのベースとして使用できるいくつかの例を紹介します。

情報を分類する

一般には、アンダースコア (_) を含む一意の上位識別子を使用して、Radia データベースの情報を分類することを検討します。Radia System Explorer では、アンダースコア (_) より前の識別子を基にインスタンスがグループ化されます。

注意

上位識別子をアンダースコア (_) なしで使用する場合でも、Radia System Explorer のフィルタリング機能を使用して、その識別子のインスタンスのみを表示することは可能です。

詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。

たとえば、ローンの償却を計算するアプリケーションに Windows 95/98 用と Windows NT/2000 用の 2 つのバージョンがある場合、それぞれ **AMORTIZE_95/98** および **AMORTIZE_NT/2000/XP** と命名することができます (449 ページの図 A.1 を参照)。

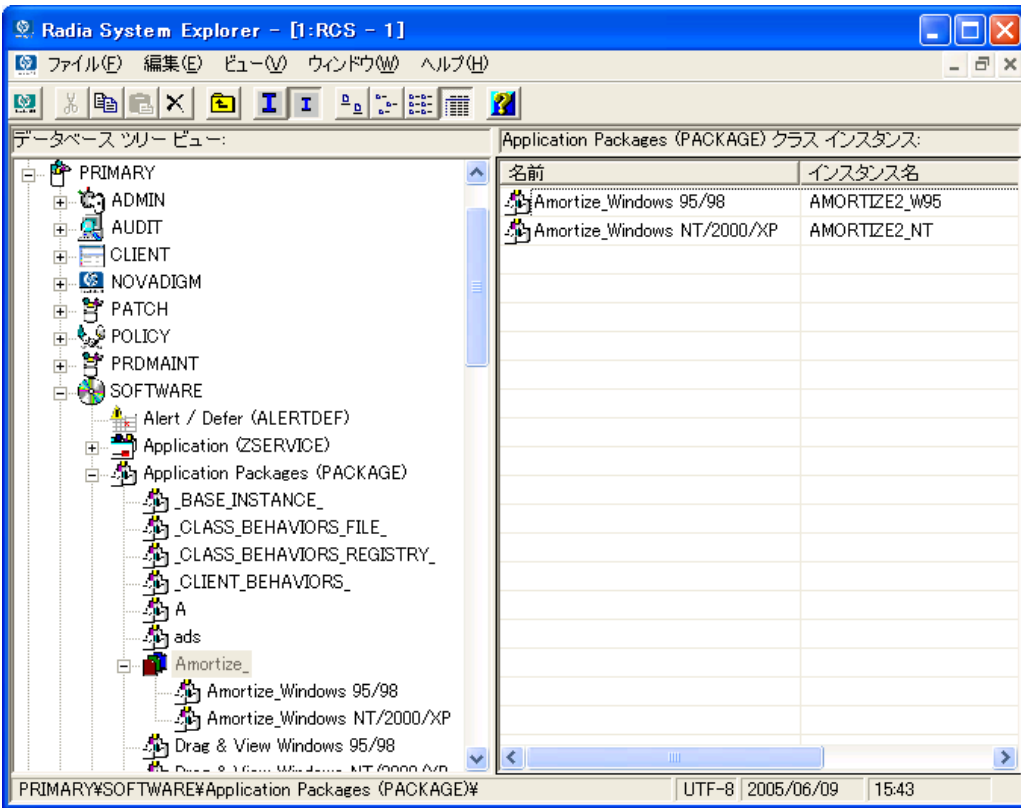


図 A.1 ~ 識別子によるインスタンスのグループ化

POLICY ドメインの命名規則

以下のような基準をベースとし、それを応用することをお勧めします。

表 A.1 ~ USER クラスの命名規則

フォーマット	説明	例
USERID	サブスクライバを識別します。	SJones

ワークグループ内のインスタンスを命名する場合は、サブスクライバが適切にグループ化できる情報を使用します。たとえば、部門と所在地によって組織化されている企業の場合、次のような基準を適用することができます。

表 A.2 ~ WORKGRP クラスの命名規則

フォーマット	説明	例
DIV_LOC_DESC	所有者または割り当て先を定義します。	CTS_CLE_EVERYONE
• DIV	部門を識別します。	CTS (Corporate Technology Services)
• LOC	所在地を識別します。	CLE (クリーブランド)
• DESC	グループの説明を追加します。	EVERYONE (すべてのユーザー)

SOFTWARE ドメインの命名規則

部門と所在地によって組織化されている企業では、次のような基準でデジタル資産を分類することができます。

表 A.3 ~ PACKAGE クラスの命名規則

フォーマット	説明	例
DIV_LOC_APPNAME_VER_OS	アプリケーションを定義します。	CTS_CLE_WINZIP_80_WNT
• DIV	部門を識別します。	CTS (Corporate Technology Services)
• LOC	所在地を識別します。	CLE (クリーブランド)
• APPNAME	アプリケーションを識別します。	WINZIP
• VER	アプリケーションのバージョンを識別します。	80
• OS	アプリケーションが動作している OS を識別します。	WNT

表 A.4 ~ Delivery クラスおよび Auditing クラス*の命名規則

* SOFTWARE ドメインの他のすべてのクラス

フォーマット	説明	例
REG_DIV_LOC_APPNAME_VER_OS	アプリケーションを定義します。	NAM_CTS_CLE_WINZIP
• REG	地域を識別します。	NAM (北米)
• DIV	部門を識別します。	CTS (Corporate Technology Services)
• LOC	所在地を識別します。	CLE (クリーブランド)
• APPNAME	アプリケーションを識別します。	WINZIP

組織に適合した規則を策定するには、ある程度の時間がかかります。しかし、事前に規則を作成し、それをしっかりと Radia 管理者全員に伝えておけば、後々の混乱を防ぐことができます。



Radia のシン クライアント サポート

ここでは、Radia Client でのシン クライアント コンピュータに対するサポートについて説明します。

Radia シン クライアントについて

Radia シン クライアントは、Radia Notify デーモンによってクライアント接続が自動的に開始され、マシンが再起動された後に実行されます。再起動時に実行することで、ディスク オーバーレイがクリアされた状態になり、Radia 接続時に加えられた変更がコミットできるようになります。また、この状態では、外部プロセスからディスク オーバーレイに書き込まれるデータの量も制限されます。オーバーレイ ラインに書き込まれたアクティビティおよびデータの量が減らされる前に、Radia Client でダイアログ ボックスが表示されます。

通知リクエストが有効ならば、マシンが再起動され、クライアント接続が開始されます。クライアントが起動すると、RADWORKP オブジェクトが処理され、RADWORKP で指定したパラメータを基に radskman コマンドが実行されます。シン クライアント コンピュータには限られたソフトウェアしかなく、ユーザーがローカル ドライブを自由に変更することはできないので、Radia Notify デーモンを使用して変更内容をクライアントに通知する方法をお勧めします。また、マシンの再起動とプロセスの開始をタイマーで設定する方法も併用できます。

シン クライアントは、SYSTEM コンテキストで実行されます。radskman がユーザー コンテキストで呼び出された場合は、最初のローカル通知によって、コンピュータが再起動され、RADWORKP オブジェクトを基にプロセスが再び開始されます。

次に、Radia 4.0 クライアントで使用できるシン クライアント向けの機能を示します。

- **MACHFREQ** パラメータ。radskman で使用します。この変数を使用すると、クライアント コンピュータをリブートするたびに Radia が実行されないようにすることができます。正数値 **n** を設定すると、前回のマシン接続から **n** 時間経った場合にのみマシン接続が実行されます。この値を設定すると、Radia Client は、指定した時間枠内には一度しか実行されないので、ROM コミット数が軽減できます。MATCHFREQ を 0 に設定すると、シン クライアントがリブートするたびにマシン接続が実行されます。
- **PRODTYPE** 変数。ZCONFIG オブジェクトで使用します。PRODTYPE では、シン クライアント用に「EmbeddedNT」という値が格納されます。この値はレジストリにあるもので、組み込み OS の設定を識別するために OS で使用されます。この属性は、ZSTOP 式で使用できます。
- **DISKFREE** 変数。RADSETUP オブジェクトで使用できます。この値は、シン クライアントのドライブに対して未使用ディスク容量のサイズを保持する場合に使用します。値の指定方法は、パーセント (1 ~ 100%) またはバイト数 (101 以上) です。ディスク容量の要件については、お使いのオペレーティング システムのドキュメントを参照してください。install.ini ファイルで指定されているデフォルト値は 5 MB です。radskman でこの変数を指定すると、変更をコミットする前に、未使用ディスク容量のサイズ (および場合によってはキャッシュ オーバーレイの使用サイズ) が検証されます。検証されたサイズが許容レベルを下回った場合、エラーが記録され、ROM エラーを防ぐためにコミット/再起動シーケンスがスキップされます。

- **Radia Notify デーモン**。有効なローカルおよびリモートの通知リクエストに対してマシンを再起動します。さらに、Radia Notify デーモンでは、起動時に RADWORDP オブジェクトが処理されます。このオブジェクトは、インストール時に作成する必要があります。RADWORDP には、クライアント接続用の radskman コマンド ライン パラメータ (CMDLINE) が格納されます。
- **[続行] ダイアログ ボックス**。MACHFREQ で指定した時間の後に表示されます。Radia 接続プロセスを続行するかどうかを確認するためのものです (デフォルトでは、5 分経過すると自動的に続行されます)。
- **再起動のタイムアウト**。デフォルトでは、5 分に設定されています。radskman でこの機能を制御するパラメータは RTIMEOUT です。
- **[overlay commit] ダイアログ ボックス**。オペレーティング システムによって ROM ドライブへの変更がコミットされている間、表示されます。シン クライアント マシンによっては、すぐにコミットを行う場合も (ただし、多少時間がかかることもあります)、クイック セットアップを実行し、コンピュータの再起動時に処理を行う場合もあります。

インストール

シン クライアント サポートの機能は、Radia Client に組み込まれています。install.ini ファイルのデフォルト値の一部は、シン クライアント設定に合わせて変更することができます。デフォルトでは、Radia Application Manager クライアントのみがインストールされます。

- シン クライアントで実行される radskman のコマンド ラインを変更します。デフォルトでは、RADWORKP_CMDLINE = MachFreq=1 が指定されています。
- RADSETUP.DISKFREE 変数を変更します。DISKFREE で指定できるディスク容量の値は、パーセント (1 ~ 100%) またはバイト数 (101 以上) です。下の「[図 B.1 ~ install.ini ファイルの変更](#)」のように RADSETUP_DISKFREE = 5120000 と指定するか、RADSETUP_DISKFREE = 2% と指定します。

```
[Objects]
; Set Radia object attribute values
; A value of _NONE_ will set the attribute to blank
;
ZMASTER_ZDSTSOCK=3464
ZMASTER_ZIPADDR=RCS
;ZMASTER_ZNTFPORT=3465
;ZMASTER_ZNTFYSEC=Y
;ZMASTER_ZTIMEO=240
;ZMASTER_ZTRACE=N
;ZMASTER_ZTRACEL=040
;ZMASTER_ZUSERID=
;ZMASTER_ZVRFYUID=N
;
;PROXYINF_USEPROXY=
;PROXYINF_DISCOVER=
;PROXYINF_PROXADDR=
;
RADWORKP_CMDLINE=MachFreq=1
;
```

図 B.1 ~ install.ini ファイルの変更

クライアントがインストールされると、変更がコミットされ、再起動を要求するメッセージが表示されます。



Radia データベースにクラスおよび属性を追加する

Radia データベースのドメインにクラスを追加する手順およびクラスに属性を追加する手順を次に示します。

警告

Radia データベースのバックアップは必ず作成してください。

ドメインにクラスを追加する

Radia データベースに変更を加える場合、少なくとも以下の情報が必要になります。

- クラスを追加するドメインの名前
- 新しいクラスの名前
- 新しいクラスに追加する属性の名前、サイズ、および説明

新しいクラスを追加するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. [PRIMARY] をダブルクリックします。
4. クラスを追加するドメイン名を右クリックします。この例では、POLICY ドメインに新しいクラスを追加します。

5. ショートカット メニューで **[新しいクラス]** をクリックします。
次のダイアログ ボックスが表示されます。



図 C.1 ~ [クラス作成] ダイアログボックス

6. 新しいクラスの名前 (**BIZUNITS** など) を入力し、**[OK]** をクリックします。
新しいクラスの追加時にクラス エディタを開くためのオプションが有効になっている場合は、**[クラス編集]** ダイアログ ボックスが表示されます。クラス エディタを使用すると、新しいクラスの作成時にそのクラスの属性を追加することができます。詳細については、『**Radia System Explorer ガイド**』を参照してください。

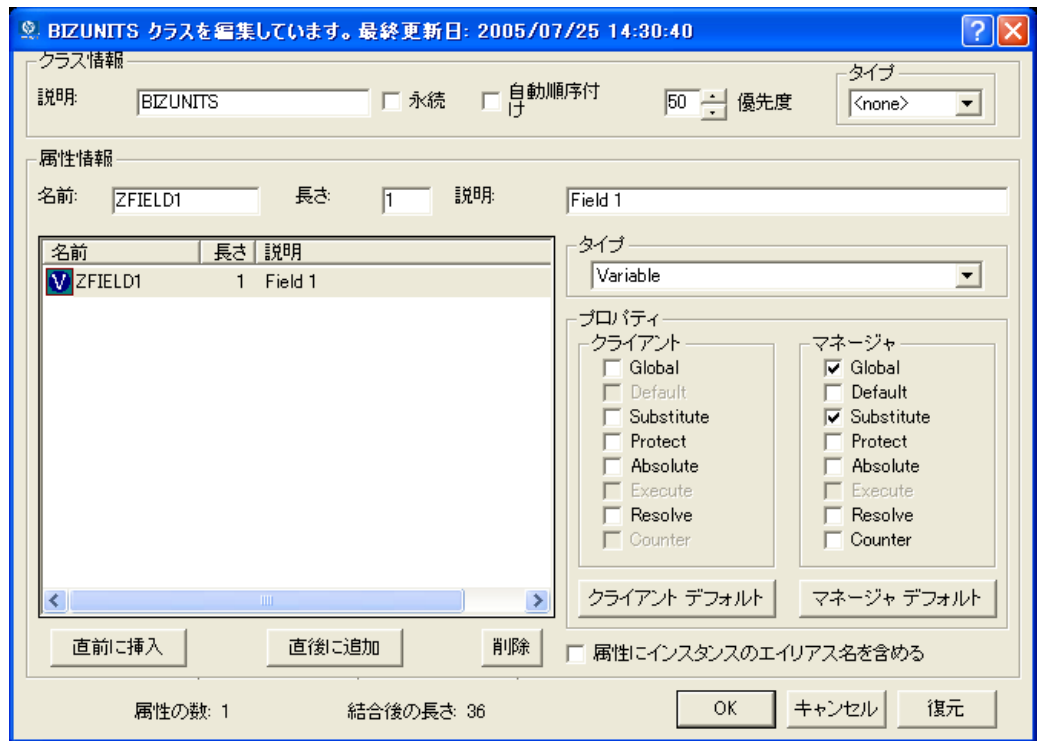


図 C.2 ~ [クラス編集] ダイアログ ボックス

新しいクラスの追加時にクラス エディタを開くためのオプションが有効になっていない場合は、新しいクラスが指定した名前では追加され、クラス エディタは表示されません。

7. 新しいクラスの追加を完了するには、「説明」フィールドを変更して新しいクラスが特定できるようにし、クラスを編集して新しいクラスの要件を反映してから **[OK]** をクリックします。
次のメッセージが表示されます。

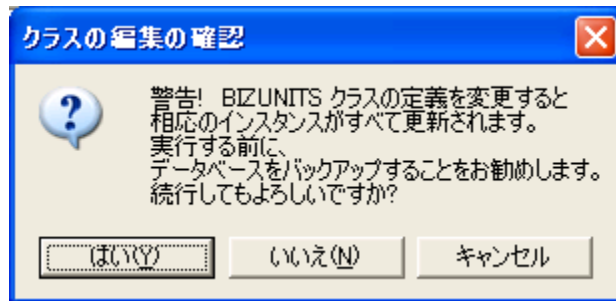


図 C.3 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログボックス

8. **[はい]** をクリックします。
新しいクラスが追加されます。

クラスに属性を追加する

Radia データベースに変更を加える場合、少なくとも以下の情報が必要になります。

- 編集するクラスの名前
- 新しい属性の名前
- 新しい属性の長さ
- 新しい属性の説明

クラス テンプレートに属性を追加するには

1. [スタート] メニューの [すべてのプログラム] をポイントし、[Radia Administrator Workstation] をポイントして、[Radia System Explorer] をクリックします。
[Radia System Explorer のセキュリティ情報] ダイアログ ボックスが表示されます。

注意

出荷時のユーザー ID は RAD_MAST です。パスワードは必要ありません。この設定は、インストールの過程で変更されている場合があります。この設定は、[パスワードの変更] チェック ボックスをオンにして、[新しいパスワード] と [新しいパスワードの確認] の両テキスト ボックスに新しいパスワードを入力しても変更することができます。

2. 必要に応じて、ユーザー ID とパスワードを入力し、[OK] をクリックします。
[Radia System Explorer] ウィンドウが表示されます。
3. 編集するクラスに移動します。たとえば、[PRIMARY.SOFTWARE.ZSERVICE] に移動するとします。

注意

ツリー ビューにクラス名 (ZSERVICE など) が表示されない場合は、[Radia System Explorer] オプションを変更してください。手順は次のとおりです。

[Radia System Explorer] ツール バーの [ビュー] をポイントし、[オプション] をクリックします。[オプション] ダイアログ ボックスで、[一般] タブをクリックし、[説明の横にクラス名を表示] チェック ボックスをオンにします。

4. 編集するクラス (**Application (ZSERVICE)** など) を右クリックします。

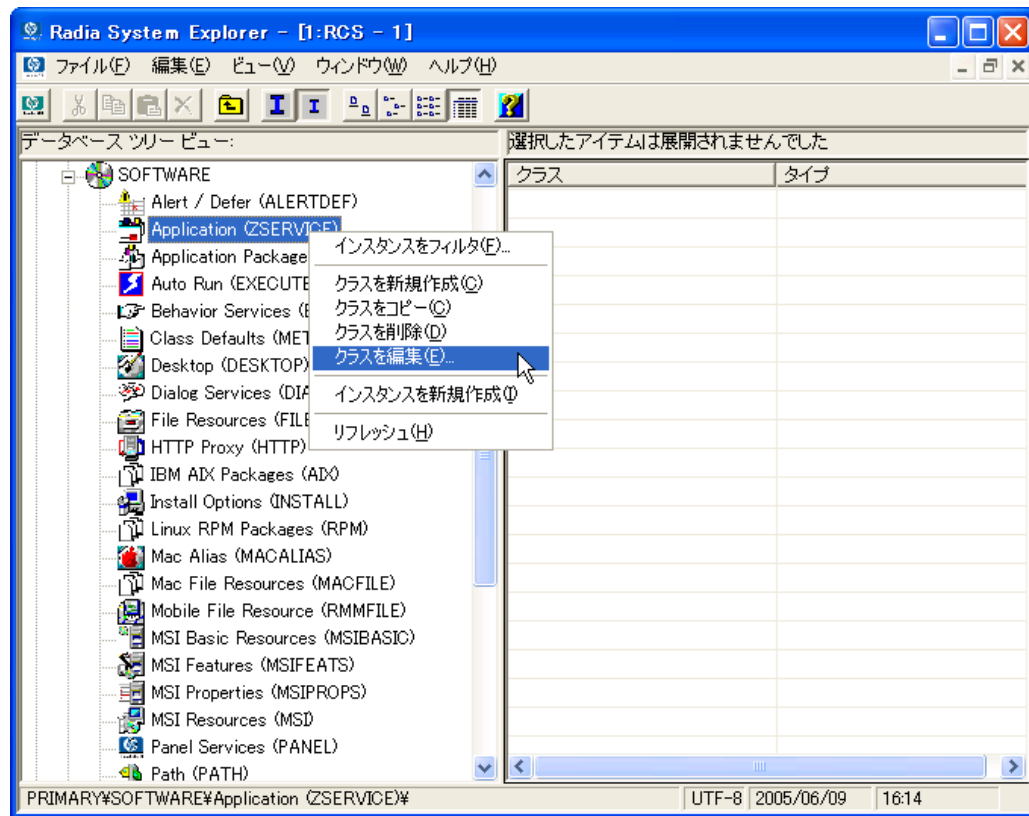


図 C.4 ~ ZSERVICE クラスの編集

5. [クラスを編集] をクリックします。
[クラスを編集] ダイアログ ボックスが表示されます。[クラスを編集] ダイアログ ボックスの詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。
6. 属性リストで、属性を挿入する位置を決めます。

7. 属性リストで、新しい属性を挿入する前後どちらかの属性をクリックします。

注意

[自動順序付け] チェック ボックスがオンになっていない場合、属性は解決時に属性リストの表示順に処理されます。

[自動順序付け] チェック ボックスをオンにした場合は、式、属性、クラス (接続)、メソッドの順に処理されます。

詳細については、『Radia System Explorer ガイド』を参照してください。



図 C.5 ~[クラスの編集] ダイアログ ボックスでの属性の選択

8. 選択した属性の直前に属性を挿入するには、[直前に挿入] をクリックします。
 または
 選択した属性の直後に属性を挿入するには、[直後に追加] をクリックします。
 空の属性が表示されます。



図 C.6 ~ 空の属性

9. 「名前」フィールドに、新しい属性の名前を入力します。
 10. 「長さ」フィールドに、属性の長さを入力します。
 11. 「説明」フィールドに、属性の説明を入力します。

12. [タイプ] ドロップダウン リストで、[属性] をクリックします。



図 C.7 ~ 新しい属性の情報

13. 新しい属性の情報が記述されているドキュメントで [クライアント] プロパティまたは [マネージャ] プロパティが指定されている場合は、適切なチェック ボックスをオンにします。
14. [OK] をクリックします。
15. [はい] をクリックして、クラスの変更内容を確定します。

Application Manager

「Radia Application Manager」を参照してください。

Client Explorer

「*Radia Client Explorer*」を参照してください。

Inventory Manager

「*Radia Inventory Manager*」を参照してください。

null インスタンス

クラスの **null** インスタンスは、そのクラスのインスタンスが存在しない場合に使用します。解決時にクラスの存在しないインスタンスへの接続が試行されると、**null** インスタンスが使用されます。これにより、切断された接続を処理するための解決パスが提供されます。

Radia Application Manager

Radia Application Manager (RADIA_AM.EXE) は、必須サービスを管理する **Radia Client** です。**Radia** 管理者は、**Radia System Explorer** を使用して、**Radia Application Manager** がクライアント コンピュータで管理するサービスを指定します。ユーザー用のインターフェイスはありません。

Radia Client Explorer

Radia Client Explorer は、**Radia Administrator Workstation** と共にインストールされます。ローカル オブジェクトの表示や編集、新しいオブジェクトの作成に使用します。**Radia Client Explorer** を使用すると、ローカル エリア ネットワーク (LAN) で接続されたファイルサーバーや他のコンピュータにあるオブジェクトを表示することができます。

Radia Configuration Server

アクティブ コンポーネント サーバー、マネージャともいいます。

Radia Configuration Server は、クライアント コンピュータにアプリケーションを配布するために使用します。サーバー上で動作し、**Radia** データベースをメンテナンスします。**Radia** データベースには、**Radia Configuration Server** がクライアント コンピュータに配布するデジタル資産を管理するために必要な情報が格納されます。

Radia Inventory Manager

Radia Inventory Manager は、ポリシー駆動型のインベントリ管理ツールです。ソフトウェアやハードウェアに関する情報を自動的に検出し、その結果を **Web** ベースのレポートにまとめます。**Radia Inventory Management** クライアントは、**WBEM (Web-based Enterprise Management)** コンシューマです。

Radia Proxy Server

現在の環境に **Radia Proxy Server** を追加すると、要求されたリソースをクライアント コンピュータに分散して **Radia Configuration Server** への負荷を減らすことができます。**Radia Proxy Server** は複数のデータ キャッシュを保持し、各クライアント コンピュータの要求ステートに必要なリソースをこれらのキャッシュに格納します。

Radia Publisher

Radia Publisher は、データのパッケージを作成して **Radia** データベースに格納する（たとえば転送させる）ために使用します。

Radia Screen Painter

Radia Screen Painter は、**Radia Administrator Workstation** と共にインストールされます。カスタム ダイアログ ボックスを開発するために使用します。

Radia Software Manager

Radia Software Manager (`radia_sm.exe`) は、オプション サービスを管理する **Radia Client** です。**Radia** 管理者は、**Radia System Explorer** を使用して、サブスクライバが使用できるサービスを指定します。

サブスクライバは、**Radia Software Manager** のユーザー インターフェイスを使用して、使用可能なデータをインストールしたり管理したりします。

Radia Staging Server

Radia Staging Server は、**Radia Configuration Server** がインストールされていないコンピュータへのアプリケーションの配布に必要なデータを格納するために使用します。

Radia System Explorer

Radia System Explorer は、Radia Administrator Workstation と共にインストールされます。Radia データベースのコンテンツを操作するために使用します。

Radia スケジューラ

Radia スケジューラ サービス (radsched.exe) は Radia Application Manager と共にインストールされます。このサービスを使用すると、指定した時間にサービスを配布することができます。

Radia データベース

Radia データベースには、クライアント コンピュータ上のデジタル資産を管理するのに必要なすべての情報を格納します。以下のような情報が格納されます。

- Radia で配布するソフトウェアおよびデータ
- Radia の管理対象コンテンツに関する各クライアント コンピュータの "要求ステート"
- どのサブスクリバがどのパッケージをサブスクライブするかを判別するためのポリシー
- Radia 管理者のセキュリティおよびアクセス規則

Radia データベースは、Radia System Explorer を使用して操作します。

Screen Painter

「**Radia Screen Painter**」を参照してください。

Software Manager

「*Radia Software Manager*」を参照してください。

Staging Server

「*Radia Staging Server*」を参照してください。

System Explorer

「**Radia System Explorer**」を参照してください。

WBEM (Web-Based Enterprise Management)

DMTF (Distributed Management Task Force) によるイニシアティブ。エンタープライズ コンピューティング環境で管理情報にアクセスするための標準技術を開発することを目的としています。

WMI (Windows Management Instrumentation)

Microsoft による Windows プラットフォーム用の WBEM (Web-Based Enterprise Management) 実装。WMI により、WBEM の共通情報モデル (CIM) のサポートが提供されます。

ZCONFIG

ZCONFIG オブジェクトは、クライアント コンピュータの基本的なハードウェア情報 (プロセッサ、オペレーティング システム、ドライブなど) を保持します。

ZMASTER

ZMASTER オブジェクトは、**Radia Client** を実行するのに必要なクライアント コンピュータに関する情報 (サブスクリバの ID、クライアント コンピュータの IP アドレスなど) を保持します。

ZSTOP

ZSTOP 式は、インスタンスの解決を一定の基準に従って停止するために使用します。たとえば、**ZSTOP** 式を作成して、特定のオペレーティング システムのクライアント コンピュータにのみ **ZSERVICE** インスタンスを配布することもできます。

ZTIMEQ

クライアントにタイマーが配布されている場合に、**Scheduler (TIMER)** インスタンスの情報に基づいて作成されるオブジェクトです。

アプリケーション

ソフトウェア、データ、サービスともいいます。

アプリケーションは、サブスクリバのコンピュータで **Radia** が管理できるコンテンツのタイプの 1 つです。サブスクリバのコンピュータで管理するデータのパッケージを作成するには、**Radia Publisher** を使用します。

インスタンス

クラス インスタンスともいいます。

インスタンスは、クラスの特定のオカレンスを保持する **Radia** データベースオブジェクトです。リレーショナル データベース テーブルの行、または従来のフラット ファイルのレコードに相当します。インスタンスの属性には、そのクラスの特定のエンティティを表すデータが格納されます。

オーディエンス リスト

オーディエンス リストは、アプリケーションのサブスクリバのリストです。**Radia Notify** で使用します。

オブジェクト

クライアント オブジェクトは、サーバーやハードウェアの設定に関する情報を保持するファイルで、クライアント コンピュータに格納されます。

オプション サービス

オプション サービスは、サブスクライバが **Radia Software Manager** のユーザー インターフェイスを介して使用できるサービスです。サービスをオプション サービスにするには、アプリケーション インスタンスの **ZSVCMO** 変数を **O** に設定します。

解決

解決は、**Radia Configuration Server** がサービス リクエストへの応答として 1 ユニットの作業を完了したときに発生します。この作業ユニットは、**Radia** データベースのコンテンツと、サービス リクエスト自体に含まれるパラメータによって定義されます。

つまり、**Radia** がどのように動作するかは、**Radia** データベースに格納されている情報と、**Radia** がアクションを実行するためのリクエストに付随する情報に依存するということです。

たとえば、**Radia Client** 接続が **Radia Configuration Server** にオブジェクトを送信することでサービス リクエストをサブミットしたとします。この場合、**Radia Configuration Server** は各リクエストへの応答時に解決を実行します。サービス リクエストのプロセスを制御するパラメータは、入力オブジェクト内にあります。

管理インストール ポイント (AIP)

管理制御ポイント (ACP) ともいいます。

AIP は、Windows インストーラ対応アプリケーションのセットアップの実行に必要なすべてのファイルを保持するサーバー共有ディレクトリ構造またはローカル ディレクトリ構造です。

クライアント

クライアント コンピュータで動作する **Radia Client (Radia Application Manager** または **Radia Software Manager)**。 **Radia Client** は、**Radia Configuration Server** と通信してクライアント コンピュータの要求ステートについての情報を受信し、この情報をクライアント コンピュータの実際の状態と比較します。その後、実際の状態が要求ステートに一致するために必要な調整を行います。

クライアント オブジェクト

クライアント オブジェクトは、サーバーやハードウェアの設定に関する情報を保持するファイルで、クライアント コンピュータに格納されます。

クライアント コンピュータ

クライアント コンピュータは、**Radia Client** ソフトウェアがインストールされているコンピュータです。

クラス

「インスタンス」を参照してください。

クラス インスタンス

「インスタンス」を参照してください。

クラス接続変数

クラス接続変数は、クライアント接続プロセスにおいて、クライアントの配布モデルの解決に使用するパスを特定します。これは解決プロセスの分岐処理の 1 つです。

クラス接続変数の名前が `_ALWAYS_`、`INCLUDES`、または `REQUIRES` である場合や、属性の名前がシステム メッセージの現在の値に一致する場合は、クラス接続が解決され、クラス接続変数によって特定されたターゲット インスタンスが引き続き解決に使用されます。

クリーンなコンピュータ

クリーンなコンピュータは、オペレーティング システムをインストールしただけで、変更がまったく加えられていないコンピュータです。

コンポーネント クラス

コンポーネント クラスは、コンポーネントクラス インスタンスによって特定されたコンテンツの構成アイテム (ファイル、レジストリ エントリ、リンク、アイコンなど) の特定に使用するクラスです。通常、このクラスのインスタンスには、配布可能なデータ (`FILE`、`REGISTRY`、`DESKTOP` など) が関連付けられています。

クラス タイプを "Component" に設定するには、Radia System Explorer のクラス エディタを使用します。

サービス

必須サービスは、クライアント コンピュータで必要となるサービスです。サービスを必須サービスにするには、アプリケーション インスタンスの `ZSVCMO` 変数を `M` に設定します。

サブスクライバ

サブスクライバとは、Radia の管理対象アプリケーションをクライアント コンピュータで使用する人のことです。

式変数

式変数は、解決時に実行される 1 行の REXX コマンドを保持します。ZSTOP という属性の式変数が "true" と評価されると、現在のインスタンスの解決が終了します。解決は、式変数を含むインスタンスを呼び出した変数の後続の変数と共に、呼び出し側のインスタンスに引き継がれます。

システム ファイル保護 (SFP)

システム ファイル保護は、保護されているシステム ファイルが置き換えられるのを防ぐしくみです。保護されているファイルをプログラムが置き換えたり移動したりしようとする時、ファイルのデジタル署名がチェックされ、ファイルが有効かどうかを判別されます。

転送

Radia Publisher で作成したパッケージを転送させると、そのパッケージが Radia データベースに格納されます。

シンボリック置換

Radia データベース インスタンスやクライアント オブジェクトは、値を格納した変数から構成されます。変数の値には、別の変数の値を参照するための指定を含めることができます。シンボリック置換を使用すると、解決プロセスの間に 1 つ目の変数の参照を 2 つ目の変数の値で置換することができます。

シンボリック置換で処理する参照は、先頭のアンパサンドを使用して指定します。

たとえば、Radia データベースの SYSTEM.PROCESS.ZMASTER インスタンスの `_ALWAYS_` 接続変数に、値として `POLICY.USER.&(ZMASTER.ZUSERID)` が格納されているとします。参照 `&(ZMASTER.ZUSERID)` は、ZMASTER オブジェクトの ZUSERID 変数を参照しています。この変数には、サブスクリバが Radia Software Management の Web ページにアクセスしたときに、Radia Client で [Radia log-on] ダイアログ ボックスに入力したユーザー ID が格納されます。ユーザーがユーザー ID として「JDOE」と入力した場合、`_ALWAYS_` 接続変数の実際の値は、シンボリック置換によって `POLICY.USER.JDOE` になります。

この置換は恒久的なものではありません。たとえば、Radia データベース内の値は変更されません。置換された値は、現在の解決プロセスのために Radia データベースインスタンスから派生したインスタンス オブジェクトの値にのみ格納されます。

かっこが必要になるのは、参照が修飾されている (たとえばピリオドを含む) 場合のみです。参照が修飾されていない場合は、かっこを付けるかどうかはオプションです。

以下に、シンボリック置換の正しい指定例を示します。

```
&(ZMASTER.ZUSERID)
```

```
&(ZUSERID)
```

```
&ZUSERID
```

次の例は不正な指定方法です。

```
&ZMASTER.ZUSERID
```

シンボル

シンボルは、グローバル メモリ内の変数の名前です。アンパサンドで始まります。

スケジューラ

「Radia スケジューラ」を参照してください。

セッション

セッションは、Radia Publisher でのパッケージ化の実行を識別するためのものです。1 つのセッションが完了すると、1 つの Radia パッケージが作成されます。

設定クラス

設定クラスは、コンポーネント クラスのインスタンスをグループ化することによって、サブスクリバのコンピュータで管理するコンテンツを特定します。通常、設定クラスのインスタンスには配布可能なデータは関連付けられません。このインスタンスは、別の設定クラスのインスタンスを経由するなどして、1 つまたは複数のコンポーネント クラスのインスタンスに接続されます。設定クラスとしては、ZSERVICE、PACKAGE、VGROUP、VERSION などがあります。クラス タイプを "Configuration" に設定するには、Radia System Explorer のクラス エディタを使用します。

属性

フィールド、属性、プロパティともいいます。

属性は、クラスに含まれる記述的なデータ アイテムです。クラス テンプレートには、クラスを構成する各属性の定義 (名前、データ タイプ、説明、長さなど) が含まれています。クラス インスタンスには属性のセットが含まれ、各属性には値が格納されます。

属性プロパティ

属性プロパティは、Radia Configuration Server およびクライアント コンピュータで属性を処理する方法を制御します。クラス テンプレートに定義された各属性には、Radia Configuration Server プロパティのセットとクライアント プロパティのセットが含まれています。

タイマー

「スケジューラ」を参照してください。

通知

通知を使用すると、Radia Configuration Server に接続してアプリケーションをインストール、更新、削除するよう 1 つまたは複数のクライアント コンピュータに強制したり、特定のサービスのサブスクリバに電子メールを送信したりすることができます。

ドメイン

ドメインは、Radia データベース内の各ファイルを論理的に仕切って、類似するクラスをグループにまとめます。

ドメインとしては、POLICY ドメイン、SOFTWARE ドメイン、SYSTEM ドメインなどがあります。

- POLICY ドメインには、ユーザーを個別に特定したり、他のユーザーのグループとの関連付けを基にユーザーを特定したりするためのクラスが含まれます。
- SOFTWARE ドメインには、アプリケーションの定義や配布に必要なクラスが含まれます。Radia 管理者は、ほとんどの作業を PRIMARY ファイルの POLICY ドメインと SOFTWARE ドメインで行います。
- SYSTEM ドメインには、管理制御およびプロセス制御の定義を保持するクラスが含まれます。

バージョン グループ

バージョン グループは、Radia で配布および管理するアプリケーションの 1 つまたは複数のバージョンを集めたものです。バージョン グループを使用すると、サブスクリイバにアプリケーションの新しいバージョンを公開し、配信と同時にアクティブにしたり、あらかじめ設定された時間にアクティブにしたりすることができます。

バイト レベルの差異計算

バイト レベルの差異計算は、リソースの更新や訂正を含んだパッチをパブリッシュするプロセスです。パッチは、Radia データベース内のリソースの既存コピーと現在パブリッシュされているリソースとの差異として計算されます。

パッケージ

パッケージは、個別のユニットとしてパブリッシュされたデータです。

パブリッシュ

関連するデータのセットが、Radia で管理できる単一のユニットにバンドルすること。

必須サービス

必須サービスは、クライアント コンピュータで必要となるサービスです。サービスを必須サービスにするには、アプリケーション インスタンスの **ZSVCMO** 変数を **M** に設定します。

ファイル

ファイルは、類似するドメインをグループ化したものです。Radia データベースの階層では最上位に位置します。

ファイルの一例が **PRIMARY** ファイルです。

PRIMARY ファイルは、配布モデルの定義やメンテナンスに使用します。このファイルは、Radia Configuration Server にあらかじめ設定されているファイルの 1 つで、Radia の初回インストール時にインストールされます。ファイルとしては、他にも **NOTIFY** ファイルや **PROFILE** ファイルがあります。Radia 管理者は、ほとんどの作業を **PRIMARY** ファイルで行います。

ベース インスタンス

ベース インスタンスは、クラスを構成する属性のデフォルト値を保持します。クラスに新しいインスタンスを作成すると、ベース インスタンスに指定したデフォルト値が新しいインスタンスの属性に継承されます。

変数

クラス接続変数は、クライアント接続プロセスにおいて、クライアントの配布モデルの解決に使用するパスを特定します。これは解決プロセスの分岐処理の 1 つです。

クラス接続変数の名前が `_ALWAYS_`、`INCLUDES`、または `REQUIRES` である場合や、属性の名前がシステム メッセージの現在の値に一致する場合は、クラス接続が解決され、クラス接続変数によって特定されたターゲット インスタンスが引き続き解決に使用されます。

ポリシー

ポリシーは、どのサブスクリバ (またはコンピュータ) がどのソフトウェアにアクセスできるかを判別するために使用します。POLICY ドメインのクラス インスタンスはユーザーを特定します。POLICY クラス インスタンスへの接続によって、それらのサブスクリバ用に管理すべきコンテンツを特定します。

マネージャ

「*Radia Configuration Server*」を参照してください。

メソッド

メソッドは、呼び出されたコンテキストにおいて意味のある機能を実行するプログラムです。

メソッドは、REXX で記述するか、メソッドを呼び出したプラットフォームで有効に動作する実行可能ファイルが生成できる言語で記述します。REXX メソッドは、HP 提供の REXX ランタイム環境で解釈されます。

クライアント メソッドはクライアント コンピュータで実行され、Radia Configuration Server メソッドは Radia Configuration Server コンピュータで実行されます。

メソッド変数

メソッド変数は、解決プロセスの一部として実行するメソッド (プログラム) を特定します。

Radia Configuration Server メソッドには、SYSTEM ドメインの PROCESS クラスのインスタンスへの参照が含まれています。この参照により、実行するメソッドとそのメソッドに渡すパラメータを特定します。Radia Configuration Server メソッドは、.exe であれば Radia Configuration Server の BIN サブフォルダに、REXX メソッドであればマネージャの REXX サブフォルダに格納されます。

クライアント メソッドには、クライアント コンピュータで実行するメソッドの名前が含まれています。クライアント メソッドを実行するメソッド変数の名前により、メソッドを実行すべきイベント (ソフトウェアのインストール、ソフトウェアの削除など) を特定します。クライアント メソッドは、クライアント コンピュータの IDMSYS ロケーションに格納されます。

メンテナンス担当者のいない

メンテナンス担当者のいないコンピュータとは、現時点で人が使用していないコンピュータを指します。

要求ステート

要求ステートは、Radia が特定のコンピュータで管理するコンテンツを具現化します。Radia データベースには、各クライアント コンピュータの要求ステートを表すモデルが格納されています。この要求ステートモデルは、Radia System Explorer を使用して作成および管理します。

リソース

ファイルともいいます。

リソースは、パッケージにバンドルされる単一のコンポーネントです。リソースの例としては、ファイル、デスクトップ リンク、レジストリ キーのセットなどがあります。

利用中

利用中のコンピュータとは、ユーザーがログオンして使用しているコンピュータを指します。

リスト



図 1.1 ~ 配布モデルの構成要素	22
図 1.2 ~ このマニュアルで遂行するタスク	28
図 2.1 ~ Radia Client のインストール プロセス	35
図 2.2 ~ args.xml のサンプル	42
図 2.3 ~ ログオン スクリプトのサンプル	51
図 2.4 ~ [ようこそ] ウィンドウ	53
図 2.5 ~ ライセンス契約の表示画面	54
図 2.6 ~ [保存先フォルダ] ウィンドウ	55
図 2.7 ~ [ユーザーの設定] ウィンドウ	56
図 2.8 ~ [Radia Configuration Server] ウィンドウ	57
図 2.9 ~ [機能の選択] ウィンドウ	58
図 2.10 ~ 機能セットのインストール オプション	59
図 2.11 ~ [DotNet の設定] メッセージ	60
図 2.12 ~ [.NET のインストール] ウィンドウ	61
図 2.13 ~ [アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウ	62
図 2.14 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	63
図 2.15 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ	65
図 2.16 ~ [Radia Client のアンインストール] ウィンドウ	66
図 2.17 ~ アンインストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	67
図 2.18 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ	70
図 2.19 ~ [アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウ	71
図 2.20 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	72
図 2.21 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ	74

図 2.22 ~ [機能の選択] ウィンドウ	75
図 2.23 ~ [アプリケーションを変更する準備ができました] ウィンドウ	76
図 2.24 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	77
図 2.25 ~ プレインストール スクリプトのサンプル	79
図 2.26 ~ ポストインストール スクリプトの REXX コードのサンプル	81
図 3.1 ~ [ようこそ] ウィンドウ	86
図 3.2 ~ ライセンス契約の表示画面	87
図 3.3 ~ [保存先フォルダ] ウィンドウ	88
図 3.4 ~ [Radia Configuration Server] ウィンドウ	89
図 3.5 ~ [機能の選択] ウィンドウ	90
図 3.6 ~ 機能セットのインストール オプション	91
図 3.7 ~ [アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウ	92
図 3.8 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	93
図 3.9 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ	97
図 3.10 ~ [Radia Administrator Workstation のアンインストール] ウィンドウ	98
図 3.11 ~ アンインストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	99
図 3.12 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ	102
図 3.13 ~ [アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウ	103
図 3.14 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	104
図 3.15 ~ [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ	106
図 3.16 ~ [機能の選択] ウィンドウ	107
図 3.17 ~ [アプリケーションを変更する準備ができました] ウィンドウ	108
図 3.18 ~ インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ	109
図 4.1 ~ 『Radia Software Manager ガイド』の概要	114
図 4.2 ~ Radia パッケージ/パブリッシュ オプション	115
図 4.3 ~ デジタル資産のパッケージ化	117
図 4.4 ~ [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ (インストール モニタ モード)	125
図 4.5 ~ [パッケージ プロパティ] ウィンドウ (インストール モニタ モード)	127
図 4.6 ~ ZPAKSESS.EDM、現在のセッション情報 (インストール モニタ モード)	129
図 4.7 ~ [システムの設定] ウィンドウ (インストール モニタ モード)	130
図 4.8 ~ [配布可能日時] ウィンドウ (インストール モニタ モード)	132
図 4.9 ~ [パッケージ オプションを設定してください: スキャン対象] ウィンドウ (インストール モニタ モード)	134

図 4.10 ~ [スキャン対象: スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウ (インストール モニタ モード).....	136
図 4.11 ~ [インストール前] ウィンドウ (インストール モニタ モード).....	138
図 4.12 ~ ソフトウェア インストール時のメッセージ (インストール モニタ モード).....	139
図 4.13 ~ システム トレイ内の [Packager] アイコン(インストール モニタ モード).....	139
図 4.14 ~ [インストール後] ウィンドウ (インストール モニタ モード).....	141
図 4.15 ~ 要約ウィンドウ (インストール モニタ モード).....	143
図 4.16 ~ 選択したファイルの表示 (インストール モニタ モード).....	144
図 4.17 ~ ファイル プロパティの設定 (インストール モニタ モード).....	145
図 4.18 ~ フォルダ プロパティの設定 (インストール モニタ モード).....	145
図 4.19 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアント管理] タブ (インストール モニタ モード).....	146
図 4.20 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [データ オプション] タブ (インストール モニタ モード).....	149
図 4.21 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアントの動作] タブ (インストール モニタ モード).....	152
図 4.22 ~ 更新されたファイルの表示 (インストール モニタ モード).....	154
図 4.23 ~ [テキスト ファイル データの上書き] ダイアログ ボックス (インストール モニタ モード).....	155
図 4.24 ~ 選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットの表示 (インストール モニタ モード).....	157
図 4.25 ~ 展開したショートカット メニュー (インストール モニタ モード).....	158
図 4.26 ~ 選択したレジストリ キーの表示 (インストール モニタ モード).....	160
図 4.27 ~ [新しい値] ボックス (インストール モニタ モード).....	161
図 4.28 ~ レジストリ キーのプロパティの設定 (インストール モニタ モード).....	162
図 4.29 ~ [ファイルの転送] ウィンドウ (インストール モニタ モード).....	164
図 4.30 ~ [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ (コンポーネント選択モード).....	168
図 4.31 ~ [パッケージ プロパティ] ウィンドウ (コンポーネント選択モード).....	170
図 4.32 ~ ZPAKSESS.EDM、現在のセッション情報 (コンポーネント選択モード).....	172
図 4.33 ~ [システムの設定] ウィンドウ (コンポーネント選択モード).....	173
図 4.34 ~ [配布可能日時] ウィンドウ (コンポーネント選択モード).....	175
図 4.35 ~ [パブリッシュするファイルを選択してください] ウィンドウ (コンポーネント選択モード).....	177
図 4.36 ~ 選択したファイルの表示ウィンドウ (コンポーネント選択モード).....	179

図 4.37 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアント管理] タブ (コンポーネント選択モード).....	182
図 4.38 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [データ オプション] タブ (コンポーネント選択モード).....	185
図 4.39 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアントの動作] タブ (コンポーネント選択モード).....	187
図 4.40 ~ [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスの [データベース情報] タブ (コンポーネント選択モード).....	189
図 4.41 ~ 選択したプログラム グループ、ショートカット、およびリンクの表示 (コンポーネント選択モード).....	191
図 4.42 ~ 展開したショートカット メニュー (コンポーネント選択モード).....	192
図 4.43 ~ 選択したレジストリ キーの表示 (コンポーネント選択モード).....	194
図 4.44 ~ 選択したレジストリ キーの編集 (コンポーネント選択モード).....	195
図 4.45 ~ 展開したショートカット メニュー (コンポーネント選択モード).....	196
図 4.46 ~ [ファイルの転送] ウィンドウ (コンポーネント選択モード).....	197
図 4.47 ~ [Application Packages (PACKAGE)] クラス.....	201
図 4.48 ~ [新規アプリケーション ウィザード] の選択.....	202
図 4.49 ~ [サービス名を入力し、ターゲット OS を選択してください] ダイアログ ボックス.....	203
図 4.50 ~ [アプリケーションのターゲット タイプを選択してください] ダイアログ ボックス.....	204
図 4.51 ~ [アプリケーション プロパティを入力してください].....	205
図 4.52 ~ Radia Software Manager のレポート対象となるイベントの選択.....	206
図 4.53 ~ アプリケーション設定の概要.....	207
図 4.54 ~ 新しい ZSERVICE インスタンス.....	208
図 4.55 ~ [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアント管理] タブ.....	210
図 4.56 ~ [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスの [データ オプション] タブ.....	214
図 4.57 ~ [グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスの [クライアントの動作] タブ.....	217
図 5.1 ~ 『Radia Software Manager ガイド』の概要.....	224
図 5.2 ~ 外部の送信元からのポリシー情報の取得.....	226
図 5.3 ~ 複数の外部送信元からのポリシー情報の取得.....	227
図 5.4 ~ POLICY ドメイン.....	230
図 5.5 ~ USER クラスのショートカット メニュー.....	233
図 5.6 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス.....	234
図 5.7 ~ SSampson USER インスタンス.....	235

図 5.8 ~ SSampson が接続できるクラスの表示.....	237
図 5.9 ~ 接続可能なクラスを表示するためのダイアログ ボックス.....	238
図 5.10 ~ USERS.SSampson を DEPT.Sales に接続.....	239
図 5.11 ~ 接続属性の選択.....	240
図 5.12 ~ SSampson が Sales 部門インスタンスに接続された状態.....	241
図 5.13 ~ Departments (DEPT) クラス.....	243
図 5.14 ~ [POLICY.DEPT 接続] ダイアログ ボックス.....	244
図 5.15 ~ リスト ビューの ZSERVICE クラス インスタンス.....	245
図 5.16 ~ WinZip と Sales の接続.....	246
図 5.17 ~ 接続属性の選択.....	247
図 5.18 ~ WinZip アプリケーションを Sales 部門に認可した状態.....	248
図 5.19 ~ Radia で Sales 部門の WinZip を管理している状態.....	249
図 6.1 ~ 『Radia Software Manager ガイド』の概要.....	252
図 6.2 ~ Radia System Explorer を使用した SAP サンプルの表示.....	257
図 6.3 ~ LOCATION インスタンスのサンプルの表示.....	263
図 6.4 ~ SAMPLE_RCS_WEST の優先度を高くするための設定変更.....	264
図 6.5 ~ SYSTEM.PROCESS.RADSETUP インスタンスの作成.....	268
図 6.6 ~ Install.ini の [Objects] セクションへの RADSETUP 行の追加.....	269
図 6.7 ~ Initmeth.rex へ追加する行.....	269
図 6.8 ~ RADHWCFG クラスのサンプル インスタンスの表示.....	278
図 6.9 ~ Radia Software Manager のユーザー インターフェイスの表示.....	282
図 6.10 ~ Sample_RCS_East の表示.....	287
図 6.11 ~ 接続ロケーション インスタンス.....	288
図 7.1 ~ このマニュアルで遂行するタスク.....	292
図 7.1 ~ [インスタンスのプロパティ]-[クライアント管理] タブ.....	294
図 7.2 ~ ZCONTEXT 属性の編集.....	296
図 7.3 ~ Amortize のインスタンス、ZSYSACCT 属性.....	302
図 7.4 ~ ZSYSACCT 属性が選択されているインスタンス編集ダイアログ ボックス.....	303
図 7.5 ~ バージョン化されていない配布のモデル.....	309
図 7.6 ~ バージョン化された配布のモデル.....	310
図 7.7 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス.....	312
図 7.8 ~ [バージョン グループを編集しています] ダイアログ ボックス.....	313
図 7.9 ~ [バージョンの作成] ダイアログ ボックス.....	314

図 7.10 ~ [バージョン エディタ] ダイアログ ボックス	315
図 7.11 ~ Version 1 インスタンス	316
図 7.12 ~ バージョン グループへの Version インスタンスの追加	318
図 7.13 ~ [バージョン グループ情報] 領域	319
図 7.14 ~ [バージョン グループを編集しています] ダイアログ ボックス	321
図 7.15 ~ リスト ビューに表示された Version Groups	323
図 7.16 ~ Version Groups (VGROUP) クラス インスタンス	325
図 7.17 ~ Versions (VERSION) クラス インスタンス	328
図 8.1 ~ このマニュアルで遂行するタスク	342
図 8.2 ~ タイマー インスタンスの転送	356
図 8.3 ~ [Scheduling (TIMER)] のショートカット メニュー	359
図 8.4 ~ [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス	360
図 8.5 ~ Mandatory Apps Timer が作成された状態	361
図 8.6 ~ ZSCHDEF の値の指定	369
図 8.7 ~ コマンド ラインの指定	371
図 8.8 ~ 接続可能クラスの表示ダイアログ ボックス	373
図 8.9 ~ リスト ビューの TIMER クラス インスタンス	374
図 8.10 ~ [Radia Client Explorer] でのオブジェクト表示	377
図 8.11 ~ ZTIMEQ オブジェクトのインスタンス	378
図 8.12 ~ Radia Configuration Server 設定ファイル (通知機能を使用する場合)	381
図 8.13 ~ Application (ZSERVICE) インスタンスのショートカット メニュー	383
図 8.14 ~ オーディエンス リストにユーザーが指定されていない場合に表示される警告 メッセージ	384
図 8.15 ~ 通知オーディエンス リスト	385
図 8.16 ~ Radia Notify Manager の [通知タイプ]	387
図 8.17 ~ [通知の詳細] ダイアログ ボックス	388
図 8.18 ~ [通知の要約] ダイアログ ボックス	389
図 8.19 ~ 電子メールによる通知の開始確認メッセージ	390
図 8.20 ~ 通知ステータス モニタ ダイアログ ボックス	391
図 8.21 ~ Mandatory インスタンスを RefreshCatalog インスタンスにコピーする場合	393
図 8.22 ~ RefreshCatalog インスタンスの ZCMDPRMS 属性の編集	394
図 8.23 ~ RETRY ドメイン	395
図 8.24 ~ Radia Configuration Server 設定ファイル内に追加された通知の再試行コマンド ライン	396
図 8.25 ~ 再試行プロセス	397

図 8.26 ~ NOTIFY ファイル.....	398
図 8.27 ~ 通知ステータス モニタ.....	401
図 8.28 ~ サブネット値.....	404
図 8.29 ~ ZCOMMAND インスタンス ([DDN for WOL]).....	405
図 8.30 ~ DDN for WOL インスタンスとその属性.....	406
図 8.31 ~ RADNTFYD.LOG の抜粋.....	407
図 8.32 ~ アイドル状態の Radia.....	410
図 8.33 ~ 実行中の Radia.....	410
図 8.34 ~ アイコンをダブルクリックして表示される Radia システム トレイ コンソール.....	411
図 8.35 ~ システム トレイ コンソールによるバンド幅の設定.....	412
図 8.36 ~ Radia システム トレイに表示される高い優先度のステータス ポップアップ.....	413
図 8.37 ~ Radia Software Manager の延期の警告表示.....	414
図 8.38 ~ インスタンスの新規作成.....	416
図 8.39 ~ 編集対象のインスタンスをダブルクリック.....	417
図 8.40 ~ SalesAlert インスタンスの編集.....	419
図 8.41 ~ MSIDRIVR を Y に設定.....	421
図 9.1 ~ このマニュアルで遂行するタスク.....	426
図 9.2 ~ クライアントのディレクトリ ツリーの表示.....	427
図 9.3 ~ [SOFTWARE] まで展開された Radia Client Explorer.....	432
図 9.4 ~ Radia Inventory Manager による ODBC の送信元との通信.....	442
図 A.1 ~ 識別子によるインスタンスのグループ化.....	449
図 B.1 ~ install.ini ファイルの変更.....	456
図 C.1 ~ [クラスの作成] ダイアログボックス.....	459
図 C.2 ~ [クラス編集] ダイアログ ボックス.....	460
図 C.3 ~ [クラスの編集の確認] ダイアログボックス.....	461
図 C.4 ~ ZSERVICE クラスの編集.....	463
図 C.5 ~ [クラスの編集] ダイアログ ボックスでの属性の選択.....	464
図 C.6 ~ 空の属性.....	465
図 C.7 ~ 新しい属性の情報.....	466

表

表 P.1 ~ スタイル.....	9
表 P.2 ~ 用法.....	9
表 P.3 ~ 用語 *	10
表 1.1 ~ Radia データベースの構造.....	23
表 2.1 ~ INSTALL.INI のサンプル.....	36
表 2.2 ~ INSTALL.INI の [PROPERTIES] セクション.....	38
表 2.3 ~ INSTALL.INI の [ARGS] セクション.....	43
表 2.4 ~ INSTALL.INI の [OBJECTS] セクション.....	46
表 2.5 ~ Radia Client の機能状態引数.....	49
表 2.6 ~ コマンド ライン引数.....	50
表 2.7 ~ Radia Client の機能の設定.....	59
表 2.8 ~ Radia Client の機能状態引数.....	78
表 3.1 ~ Radia Administrator Workstation の機能の設定.....	91
表 3.2 ~ Radia Administrator Workstation の機能状態引数.....	94
表 3.3 ~ コマンド ライン引数.....	95
表 4.1 ~ [検証オプション].....	211
表 4.2 ~ [配信オプション].....	213
表 4.3 ~ [データ オプション].....	215
表 4.4 ~ [クライアントの動作].....	218
表 5.1 ~ POLICY ドメインに含まれるクラス.....	231
表 6.1 ~ SAP クラスの属性.....	258
表 6.2 ~ URI の具体例.....	261
表 6.3 ~ LOCATION クラスの属性.....	265
表 6.4 ~ SETTINGS クラスの属性.....	270
表 6.5 ~ DIAGS クラスの属性.....	276
表 6.6 ~ RADHWCFG クラスの属性.....	279
表 6.7 ~ RADUICFG クラスの属性.....	283
表 7.1 ~ コンポーネント コンテキスト (ZCONTEXT) のオプション.....	296
表 7.2 ~ ZSERVICE クラスの ZSVCMODE の値.....	297
表 7.3 ~ ZSERVICE 属性:ZSYSACCT.....	301
表 7.4 ~ リポート イベントとコード ~	306

表 7.5 ~ Version Group (VGROUP) クラスの属性	326
表 7.6 ~ Versions (VERSION) クラスの属性	329
表 7.7 ~ 変更可能な SOFTWARE.ZSERVICE の属性	329
表 7.8 ~ 計算される ZSERVICE 属性 - 変更は不可	337
表 8.1 ~ radskman のコア パラメータ	345
表 8.2 ~ Radsksman のオペレーション パラメータ	347
表 8.3 ~ Radsksman マシン/ユーザー パラメータ	348
表 8.4 ~ Radsksman クライアント オペレーション プロファイル パラメータ	351
表 8.5 ~ Radsksman プロセス パラメータ	352
表 8.6 ~ Scheduling (TIMER) の属性	362
表 8.7 ~ ZSCHDEF 属性の構文	367
表 8.8 ~ ZSCHFREQ を RANDOM に設定した場合の ZSCHDEF パラメータ	368
表 8.9 ~ タイマー ログ	379
表 8.10 ~ NOTIFY インスタンスの属性	399
表 8.11 ~ ALERTDEF クラスの変数	417
表 9.1 ~ NOVAEDM のパラメータ	428
表 9.2 ~ コア クライアント オブジェクト	430
表 9.3 ~ ZCONFIG 属性	433
表 9.4 ~ SYNOPSIS の属性	436
表 9.5 ~ SAPSTATS の属性	438
表 9.6 ~ PREFACE オブジェクトの属性	440
表 9.7 ~ PROFILE ファイルのオブジェクト	441
表 A.1 ~ USER クラスの命名規則	450
表 A.2 ~ WORKGRP クラスの命名規則	450
表 A.3 ~ PACKAGE クラスの命名規則	451
表 A.4 ~ Delivery クラスおよび Auditing クラス*の命名規則	451

手順

インストール ウィザードを使用して Radia Client をインストールするには	52
インストール ウィザードを使用して Radia Client を削除するには	65
コマンド ラインを使用して Radia Client を削除するには	68
インストール ウィザードを使用して Radia Client を修復するには	69
コマンド ラインを使用して Radia Client を修復するには	73
インストール ウィザードを使用して Radia Client のインストールを変更するには	74
コマンド ラインを使用して Radia Client のインストールを変更するには	78
オブジェクトのプロパティ設定または属性を上書きするには	80
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation をインストールするには	86
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を削除するには	97
コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を削除するには	100
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation を修復するには	101
コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation を修復するには	105
インストール ウィザードを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを 変更するには	106
コマンド ラインを使用して Radia Administrator Workstation のインストールを変更するには	110
スキャン対象ファイルを追加するには	135
スキャン対象ファイルを削除するには	135
スキャンするドライブを設定するには	137
インストール前のスキャンを開始するには	138
ソフトウェアをインストールするには	139
インストール後のスキャンを開始するには	142
選択したファイルとフォルダを表示するには	144
ファイルのプロパティを編集するには	145
制御ファイル内の行を編集するには	155
値を上書き機能を使用するには	156
テキスト行を復元するには	156
選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示するには	157
プログラム グループ、リンク、およびショートカットのプロパティを設定するには	158
選択したレジストリを表示するには	160
レジストリ キーの値を編集するには	161

レジストリ キーを元の値に戻すには.....	161
レジストリ キーのプロパティを設定するには.....	162
転送させるファイルを表示するには.....	164
パッケージを転送させるには.....	165
パッケージ化するファイルを選択するには.....	177
選択したファイルとフォルダを表示するには.....	179
表示されたファイルとフォルダに対してフィルタを実行するには.....	180
フィルタを削除するには.....	180
[インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックスにアクセスするには.....	181
選択したプログラム グループ、リンク、およびショートカットを表示するには.....	191
プログラム グループ、リンク、およびショートカットのプロパティを設定するには.....	192
選択したレジストリを表示するには.....	194
レジストリ キーの値を編集するには.....	195
レジストリ キーを元の値に戻すには.....	195
レジストリ キーのプロパティを設定するには.....	196
転送させるファイルを表示するには.....	197
パッケージを転送させるには.....	198
Radia System Explorer にアクセスするには.....	200
SOFTWARE ドメインの PACKAGE クラスを指定するには.....	201
新規アプリケーション ウィザードを使用してサービスを作成するには.....	202
Radia Packager にログオンするには.....	209
[グローバル デフォルト プロパティ] ダイアログ ボックスにアクセスするには.....	209
POLICY ドメインにアクセスするには.....	229
新しいユーザーを作成するには.....	232
ユーザーをグループに割り当てるには.....	236
WinZip アプリケーションを Sales 部門に接続する.....	242
想定環境を基に設定するには.....	287
Radia Publisher でコンポーネントのコンテキストを設定するには.....	293
Radia System Explorer でコンテキストを設定するには.....	295
ZSERVICE の ZSVCMODE を設定するには.....	298
Application インスタンスの ZSYSACCT 属性を編集するには.....	301
バージョン化されたアプリケーションを準備するには.....	311
バージョン グループを作成するには.....	311

バージョン インスタンスを作成するには	314
バージョン インスタンスを削除するには	317
Version インスタンスをバージョン グループに割り当てるには	318
Version インスタンスの割り当てを解除するには	318
バージョン グループの配布の準備をするには	320
バージョン グループをサービスに接続するには	322
バージョン グループを編集するには	324
SOFTWARE ドメインに新しいタイマーを作成するには	358
タイマーの期限を指定するには	369
コマンド ラインを指定するには	371
Radia Configuration Server に接続するには	375
クライアント コンピュータの ZTIMEQ オブジェクトを参照するには	377
ZTIMEQ の属性を編集するには	379
ZSERVICE インスタンスから通知を開始するには	382
ドラッグ アンド ドロップ通知コマンドを作成するには	392
NOTIFY ファイルのインスタンスを参照するには	398
通知または再試行のステータスを参照するには	400
WOL クライアントを DDN 用に設定するには	403
正常に設定されたかどうかを確認するには	407
クライアント メンテナンス パッケージを配布するには	409
Alert/Defer (ALERTDEF) クラスのインスタンスを作成するには	415
Alert/Deferral (ALERTDEF) インスタンスを設定するには	417
ローカル アプリケーション インストール ポイントが使用できるようにするには	420
Radia Client Explorer を使用してオブジェクトを表示するには	432
新しいクラスを追加するには	458
クラス テンプレートに属性を追加するには	462

\$

\$MACHINE, 44, 46, 346

\$USER, 44, 46, 346

:

::SM スイッチ, 45

A

above threshold alert size, 418

ACP, 「AIP」を参照

ACTDATE 属性, 327

Action on timeout, 418

action on timeout Cont/Defer, 418

Active Directory, 440

ACTMAINT 属性, 275

ADAPTIVE スロットリング, 259, 273

ADAPTIVE 属性, 333

ADDDONE 属性, 437

ADDFAIL 属性, 437

ADDLOCAL 引数, 38, 49, 78, 94

ADDNUM 属性, 437

ADDSKIP 属性, 437

ADDSOURCE 引数, 94

ADINFO オブジェクト, 271

ADINFO 属性, 271

ADMIN ドメイン, 24

ADVERTISE 引数, 94

AIP, 33, 84

alert messages, 417

alert mode, 413, 417

alert timeout, 418

Alert/Defer クラス, 414

ALERTDEF インスタンス, 419

作成, 415

設定, 417

ALERTDEF クラス, 415

変数, 417

ALERTMSG 変数, 417, 419

allow install deferral, 414, 418

[Allow Remote Notify Uninstall], 274

allow update deferral, 418

[Always Download CFG Objects], 272

[Always Upload CFG Objects], 272

ALWAYS 属性, 265, 362

ALWAYS 属性, 330

ALWAYS_ 属性, 272

ALWAYSS 属性, 272

[App Element Caching], 334

APP_VER 属性, 280

APPEVENT オブジェクト, 275

[Application Contact], 332

[Application Context], 336

[Application Description], 331

Application Manager, 「Radia Application Manager」
を参照

Application Packages インスタンス、説明, 116

[Application Size - Compressed], 337

[Application Size - Uncompressed], 337

[Application Target Type [A/S]], 330

[Application Version], 280
 ARBITRAT 属性, 153, 188, 218
 args.xml, 34, 42, 45
 サンプル, 42
 args.xml ファイル, 299
 ARPNOREMOVE 引数, 39
 askconfirm 引数, 43
 ASKOFFL 属性, 283
 ask パラメータ, 347
 ASYCFILT.DLL, 123
 AUDIT ドメイン, 24
 [Author Name], 331
 AUTHOR 属性, 331
 [Auto Adaptability], 333
 Available サービス, 337

B

BANDWIDTH 属性, 259, 273, 438
 [Bandwidth Checkpoint Restart], 274
 [Bandwidth Percentage], 259, 273
 base instance, 278
 below threshold alert size, 418
 BNBNDWTH 属性, 283
 BNHISTORY 属性, 283
 BNHOME 属性, 283
 BNMYSOFT 属性, 283
 BNPREFER 属性, 283
 BNSTATUS 属性, 283
 BOOTDRVI 属性, 433
 BOOTDRV 属性, 433
 BTNCANCL 属性, 286
 BTNDEL 属性, 286
 BTNDWLD 属性, 286
 BTNINST 属性, 285
 BTNPAUSE 属性, 286
 BTNRECFG 属性, 286
 BTNREPR 属性, 286
 BTNUNDO 属性, 286
 BTNUPDT 属性, 285
 BTNVRFY 属性, 286

BWSTRTUP 属性, 284
 BYTERCVD 属性, 438
 BYTESENT 属性, 438

C

cacert.pem, 45
 [CACHE Location On Client], 335
 CACHELIM 属性, 335
 CACHELOC 属性, 335
 CACHE 属性, 334
 [Catalog Group Name], 331
 CATALOG 属性, 331
 cat パラメータ, 345, 348
 channelname 引数, 43
 [Class Connection], 265
 Client Explorer, 「Radia Client Explorer」を参照
 クライアント オブジェクト、定義, 470
 クライアント オペレーション プロファイル
 EXBEXIT, 272
 実装, 254
 例, 287
 ロール, 255
 クライアント コンピュータ、定義, 471
 クライアント セルフ メンテナンス ロール, 255
 クライアントのセルフ メンテナンス サービス, 372
 [クライアント メソッドのコマンド ライン], 153
 CLIENT ドメイン, 253
 RADHWCFG クラス, 277
 CLISTATS オブジェクト, 275
 CMDLINE 属性, 437, 440
 CMDLINE パラメータ, 455
 CMETHOD 属性, 272
 COLNAMES 属性, 285
 COLORBAK 属性, 284
 COLORBTN 属性, 284
 [Colors [SYSTEM/DEFAULT/CUSTOM/USER]], 284
 COLORSEL 属性, 284
 COLORSET 属性, 284
 COLORWK 属性, 284
 COLTYPE 属性, 285

[Columns [Forced/Required]], 285
 COMCAT.DLL, 123
 COMCTL32.OCX, 123
 COMDLG32.OCX, 123
 [Command String for radstate], 276
 [Communication Tracing], 277
 [Communications Timeout], 259, 272
 COMPDN 属性, 440
 COMPSIZE 属性, 337
 connect.bak, 44
 connect.log, 443
 connect.log ファイル, 431
 context パラメータ, 349
 CONTROL 属性, 326
 COPDNAME 属性, 276
 COPLNAME 属性, 265
 COPSNAME 属性, 270
 cop パラメータ, 351
 COP パラメータ, 269
 [Core Settings Class Connection], 265
 Core Settings クラス, 253
 COUNTRY クラス, 231
 CPU 属性, 279
 CREFRESH 属性, 437
 CTYPE 属性, 440
 CURRAPP 属性, 436
 CURRINS 属性, 436
 CURVERS 属性, 327
 CUSTIMG 属性, 284
 CUSTOM, 44, 46
 [Custom Hover Text on RSM Banner], 284
 [Custom Image File or RSM Banner], 284
 [Custom Title on RSM Banner], 284
 [Custom URL on RSM Banner], 284
 CUSTTEXT 属性, 284
 CUSTTITLE 属性, 284
 CUSTURL 属性, 284

D

datauri パラメータ, 351
 DAT 変数, 418

DA 変数, 418
 DBT 変数, 418
 DDN, 「ドラッグ アンド ドロップ通知」を参照
 Default Hardware Scan, 278
 [Default SAP ROLE], 273
 defer options, 418
 deferrals

- install, 418
- number allowed, 417
- update, 418

 DEFERRED, 365
 [deflate] (圧縮設定), 186
 DEFOPTNS 変数, 418
 DEFROLE 属性, 273
 DELDATE 属性, 338
 DELDONE 属性, 437
 [Delete Date], 338
 DELFAIL 属性, 437
 DELNUM 属性, 437
 DELSKIP 属性, 437
 DEPT クラス, 231
 DESCRIPT 属性, 331
 Desktop インスタンス、説明, 116
 DETPROXY 属性, 274
 DHCP, 「ダイナミック ホスト設定 プロトコル」を参照
 DHCPSPR0n 属性, 433
 DHCPSVR 属性, 433
 [Diagnostics Class Connection], 265
 Diagnostics クラス, 253, 276
 DIAGS クラス, 253, 265, 276

- 属性, 276

 [Dialog Processing], 332
 DIALOG クラス, 332
 [Disable Connect on UI Reboot], 271
 [Disconnect on Install], 335
 [Discover proxy address], 285
 DISCOVER 属性, 47
 DISKFREE 属性, 274
 DISKFREE 変数, 454
 [Display Bandwidth], 283
 [Display History], 283

[Display Home Button], 283
 [Display My Software], 283
 [Display Outbar], 283
 [Display Preferences], 283
 [Display Status], 283
 Distributed Management Task Force, 442
 DI 変数, 418
 DMTF, 「Distributed Management Task Force」を参照
 DM 変数, 417
 dname パラメータ, 345
 DNAME パラメータ, 440
 DNSDMN01 属性, 433
 DNSDOMN 属性, 433
 DNSHNM01 属性, 433
 DNSHOSTN 属性, 433
 DN 変数, 417
 [DotNet の設定] メッセージ, 60
 [Download DATA from RCS], 271
 [Download restart threshold], 335
 DSCAN00n 属性, 280
 DTO 変数, 418
 DT 変数, 418
 DU 変数, 418
 [Dynamic Scan 00n], 280

E

EMAIL 属性, 381, 399
 EmbeddedNT, 454
 [Enable Cancel Button], 286
 [Enable Delete Button], 286
 [Enable Download Button], 286
 [Enable Install Button], 285
 [Enable Pause Button], 286
 [Enable RADUI 2.x], 273
 [Enable Reconfigure Button], 286
 [Enable Repair Button], 286
 [Enable SAP], 259
 [Enable Streaming], 259
 [Enable Undo Button], 286
 [Enable Update Button], 285
 [Enable Verify Button], 286

ENABLED 属性, 259, 438
 ENDTIME 属性, 436
 enterprisemanagement 引数, 43
 EQUISORT 属性, 270
 ERRCOUNT, 438
 ERRORMSG 属性, 436
 ERTYPE 属性, 333
 [Event Reporting Method], 333
 EVENTS 属性, 333
 EXASETUP 属性, 272
 EXBEXIT 属性, 272
 EXBOUTBX 属性, 272
 EXBSETUP 属性, 272
 EXITCODE 属性, 436
 [Expand Active Catalog Item], 285
 [Expand Active Service item], 285
 EXPCITEM 属性, 285
 [Expression Resolution Method], 258, 329
 EXPSITEM 属性, 285
 [Extended Info] ボタン, 286

F

File Resources、説明, 116
 FILEMISS 属性, 438
 FILERCV D 属性, 438
 FILESENT 属性, 438
 FILE インスタンス、説明, 116
 [Filter Expression [Obj.Var = Value]], 260
 FILTER 属性, 260
 flushu パラメータ, 349
 Forced カラム, 285
 friendly name, 418
 [Friendly Name], 332

G

GATEWY01 属性, 279, 433

H

[HAL Statistics], 280
 HAL_VER 属性, 280

HALCOMP 属性, 280, 433
 HALDATE 属性, 280, 433
 HALFNAME 属性, 280, 433
 HALFVER 属性, 280, 433
 HALINAME 属性, 280, 433
 HALLANG 属性, 280, 434
 HALPNAME 属性, 280, 434
 HALPVER 属性, 280, 434
 HALSIZE 属性, 280, 434
 [Hardware Class Connection], 265
 Hardware Configuration, 278
 Hardware Scan Config クラス, 253
 HARDWARE_SCAN オブジェクト, 404
 HDLOCAL 属性, 279
 HDREMOTE 属性, 279
 hreboot パラメータ, 305, 347
 HTTP オブジェクト転送, 44

I

identification 引数, 44, 56
 IDMDATA ディレクトリ
 ロケーション, 215
 IDMDATA パラメータ, 428
 IDMLIB ディレクトリ, 40, 42, 422, 428, 431
 開始, 46
 IDMLIB パラメータ, 428
 IDMLOG, 44
 IDMLOG パラメータ, 428
 IDMROOT ディレクトリ, 375
 IDMROOT パラメータ, 428
 IDMSYS ディレクトリ, 41, 272
 IDMSYS パラメータ, 428
 IMMEDIATE, 365
 ind パラメータ, 347
 INITIAL 属性, 326
 initmeth.rex メソッド, 269
 install deferral, 418
 [Install under System Account], 335
 install.ini, 268
 INSTALL.INI, 34, 42, 50

ARGS セクション, 42
 OBJECTS セクション, 46
 PROPERTIES セクション, 38, 45
 準備, 36
 INSTALL.INI の ARGS セクション, 42
 INSTALL.INI の OBJECTS セクション, 46
 INSTALL.INI の PROPERTIES セクション, 38, 45
 INSTALLDIR 引数, 39, 55
 [Installed Date], 338
 Installed サービス, 337
 INSTDATE 属性, 338
 INSTMSI.EXE, 33
 INSTMSIW.EXE, 33
 [Internet Proxy detection], 274
 [Internet Proxy URI], 259
 Inventory Manager, 「Radia Inventory Manager」を参照
 IPADDR01 属性, 279, 434
 IP パラメータ, 345

J

JOBID, 440
 JOBID 属性, 437
 jobid パラメータ, 347

L

LADAPT01 属性, 279, 434
 LASTAXSD 属性, 438
 LICENSE ファイル, 24
 [Local Drives], 279
 [Local Repair], 333
 LOCALUID 属性, 346, 399, 440
 local パラメータ, 350
 LOCATION インスタンス
 サンプル, 263
 LOCATION クラス, 253, 263, 267
 属性, 265
 LOGNAME 属性, 443
 logonpanel 引数, 44
 logsize パラメータ, 348
 logsize 引数, 44

log パラメータ, 347
 log 引数, 44
 LREPAIR 属性, 333
 LSCRIPT 属性, 271

M

MAC, 「メディア アクセス制御」を参照
 MACHFREQ, 455
 machfreq パラメータ, 350
 MACHFREQ パラメータ, 454
 MACHNAME 属性, 437, 440
 [Maintenance Activation], 275
 managerurl 引数, 44
 Mandatory Apps Timer, 374
 [Mandatory or Optional Service [M/O]], 330
 MCELIGBL 属性, 335
 MEMORY 属性, 279
 [Minimum Free Disk Space Threshold], 274
 mname パラメータ, 345
 MNAME パラメータ, 440
 MS Windows インストーラ, 32, 84
 MSCONFIG, 355
 MSI 2.0 インストール プログラム, 32
 MSIDRIVR, 420
 MSIEEXEC, 73, 105
 MSVBVM50.DLL, 123

N

[Name of Columns (CSV format)], 285
 NAME 属性, 258, 279, 286, 326, 329, 332, 362, 438
 Name 変数, 418
 .NET, 60
 インストール, 60
 .NET Framework セットアップ ウィザード, 63
 .NET が検出不可, 60
 [.NET のインストール] ウィンドウ, 61
 .NET ベータ, 62
 .NET ランタイム, 32, 40
 .NET をインストール済み, 60
 NETLOC01 属性, 279
 NETLOC 属性, 262

Network Location クラス, 253
 network threshold, 418
 network threshold speed, 413
 NETWORK 属性, 279
 NEXTVERS 属性, 327
 Notify Retry Manager, 396
 NOTIFY クラス, 399
 NOTIFY の属性, 399
 NOTIFY ファイル, 398
 説明, 25
 ファイル構造, 399
 NOVAEDM のパラメータ, 428
 NTFYCMDL 属性, 399
 NTFYDATE 属性, 399
 NTFYDOMN 属性, 400
 NTFYINS 属性, 400
 NTFYMSG 属性, 399
 NTFYPORT 属性, 400
 NTFYPWD 属性, 400
 NTFYRC 属性, 399
 NTFYRNUM 属性, 400
 NTFYRTIM 属性, 399
 NTFYSUBJ 属性, 399
 NTFYTIME 属性, 399
 NTFYTYPE 属性, 399
 NTFYUINF 属性, 400
 NTYFYDLAY 属性, 400
 NTYFYMAC 属性, 400
 NTYFYMASK 属性, 400
 NTYFYRMAX 属性, 400
 null インスタンス、定義, 467
 NVD.INI, 44
 NVD.INI ファイル
 場所, 428
 NVD.INI ファイルの NOVAEDM セクション, 428
 NVDARG, 80
 NVDARGIDENTIFICATION, 80
 NVDENABLEIP 引数, 39, 45
 NVDENABLEPROXY 引数, 40
 NVDENABLESHORTCUT 引数, 40

NVDENABLEUSER 引数, 39
 NVDINSTALLCLIENTEXPLORER, 94
 NVDINSTALLPACKAGER, 94
 NVDINSTALLPATCH, 49
 NVDINSTALLPUBLISHER, 94
 NVDINSTALLRAM, 38, 49
 NVDINSTALLRIM, 38, 49
 NVDINSTALLROM, 49
 NVDINSTALLRSM, 38, 49
 NVDINSTALLSCREENPAINTER, 94
 NVDINSTALLSYSTEMEXPLORER, 94
 NVDMAINTDIR 引数, 41
 NVDOBJ, 80
 NVDPOSTCAPATH 引数, 42, 80
 NVDPRECAPATH 引数, 42, 79
 NVDSHORTCUT 引数, 40, 57

O

OBJRCVD 属性, 438
 OBJSEND 属性, 438
 OLEAUT32.DLL, 123
 OLEPRO32.DLL, 123
 OS 属性, 279
 [overlay commit] ダイアログ ボックス, 455
 OWNER 属性, 332

P

PACKAGE インスタンス、説明, 116
 PACKAGE クラス インスタンス, 128, 171
 PACKAGE 属性, 329
 PATCH クラス, 24
 PATCH ドメイン, 24
 Path インスタンス、説明, 116
 [Percent Disk Limit For Cache], 335
 PERIODIC, 365
 PERIPHER 属性, 279
 [Ping all SAP], 270
 PINGCNT 属性, 362
 PINGDLAY 属性, 362
 PNLOUTBR 属性, 283
 POLICY ドメイン, 24

アクセス, 229
 デフォルト クラス, 231
 COUNTRY, 231
 DEPT, 231
 port パラメータ, 345
 [Post Catalog Script], 272
 [Pre Config Resolution Script], 272
 [Post Connection Script], 272
 PRDMAINT ドメイン, 24
 [Pre Config Resolution Script], 272
 [Pre Outbox Script], 272
 PREFACE オブジェクト, 430, 439
 属性, 440
 [Price], 331
 PRICE 属性, 331
 PRIMARY ファイル
 ADMIN ドメイン, 24
 AUDIT ドメイン, 24
 PATCH ドメイン, 24
 POLICY ドメイン, 24
 PRDMAINT ドメイン, 24
 SOFTWARE ドメイン, 24
 SYSTEM ドメイン, 24
 説明, 24
 PRINTER 属性, 279
 PRIORAPP 属性, 436
 PRIORERR 属性, 436
 PRIORINS 属性, 436
 PRIORITY 属性, 260, 438
 PROCESS クラス, 267
 PRODTYPE 変数, 454
 [Product Filter], 260
 PRODUCT 属性, 260
 product パラメータ, 351
 PROFILE ファイル, 441
 オブジェクト, 441
 説明, 25
 [Progress Indicator], 334
 [Prompt for offline mode], 283
 providername 引数, 44
 PROXADDR 属性, 47

[Proxy Server Address], 285
 [Proxy server Port], 285
 PROXYADD 属性, 285
 PROXYDSC 属性, 285
 PROXYINF.EDM, 422
 PROXYINF オブジェクト, 40
 PROXYPRT 属性, 285
 PROXYUSE 属性, 285
 PROXY 属性, 259, 438
 PUBDATE 属性, 331
 [Published Date of Service], 331
 Publisher, 「Radia Publisher を参照」
 [Push Back], 259, 270
 Push Manager, 392
 PUSHBACK 属性, 259, 270

Q

[Query Active Directory Info], 271
 [Query NT User Group Info], 271

R

RAD2XUI 属性, 273
 radadmin, 124
 RADADMIN40.MSI, 85, 95
 radconct モジュール, 443
 RADHWCFG クラス, 253, 265, 277
 属性, 279
 Radia Administrator Workstation
 [アンインストール] ウィンドウ, 98
 インストール
 インストール ウィザード, 86
 コマンド ライン, 94
 コマンド ライン引数, 95
 インストール ウィザード, 86
 インストールの変更
 インストール ウィザード, 105
 コマンド ライン, 110
 インストール プログラム, 84
 機能状態引数, 94
 機能の設定, 91
 削除

 インストール ウィザード, 97
 コマンド ライン, 100
 修復
 インストール ウィザード, 101
 コマンド ライン, 105
 Radia Administrator Tools, 「Radia Administrator Workstation」を参照
 Radia Administrator Workstation
 システム要件, 84
 Radia Application Manager, 27
 説明, 467
 ディレクトリ構造, 427
 Radia Client
 [アンインストール] ウィンドウ, 66
 インストール, 52
 コマンド ライン, 48
 ログオン スクリプト, 51
 インストールのコマンド ライン, 50
 インストールの変更
 インストール ウィザード, 74
 コマンド ライン, 78
 インストール プログラム, 32
 削除
 インストール ウィザード, 65
 コマンド ライン, 68
 システム要件, 32
 修復
 インストール ウィザード, 69
 コマンド ライン, 73
 Radia Client Explorer, 376
 説明, 26, 467
 Radia Client インストール ウィザード
 [保存先 フォルダ] ウィンドウ, 55
 Radia Client インストール ウィザード, 52
 [.NET のインストール] ウィンドウ, 61
 Radia Configuration Server, 57
 [機能の選択] ウィンドウ, 58
 [ユーザーの設定] ウィンドウ, 56
 [よろこそ] ウィンドウ, 53
 Radia Client のバージョン, 431
 Radia Client インストール ウィザード

- [アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウ, 62
- インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ, 63
- Radia Configuration Server、定義, 25, 468
- [Radia Configuration Server] ウィンドウ, 57
- Radia Inventory Manager, 27
 - サーバーの説明, 442
 - 説明, 468
 - 利点, 442
- Radia Management Portal、説明, 26
- Radia Notify デーモン, 455
- Radia Policy Manager, 228
- Radia Proxy Server, 422
 - 説明, 26, 468
- Radia Publisher
 - 説明, 26, 468
 - ログオン
 - インストール モニタ モード, 124
 - コンポーネント選択モード, 167
 - デフォルト プロパティの設定, 209
- Radia Publishing Adapter, 199
- Radia Screen Painter、説明, 27, 468, 469
- Radia Software Manager, 27
 - 説明, 468, 469
- Radia Staging Server、説明, 468, 469
- Radia System Explorer、説明, 26, 469
- Radia クライアント オペレーション プロファイル, 5
- Radia クライアント オペレーション プロファイル, 47, 252, 351
- [Radia システム トレイ] アイコン, 286
- RADIA.MSI, 50
- radia_am.exe, 467
- RADIA40.MSI, 34, 38, 73
- Radia Client
 - 機能の設定, 59
- radiadmin40.msi, 105
- Radia Processes クラス, 267
- Radia インフラストラクチャ、コンポーネント, 25
- Radia 管理アプリケーション, 27
- Radia システム トレイ, 273, 410
- Radia シン クライアント, 454
- Radia スケジューラ, 355
 - 説明, 469, 473
- Radia データベース
 - インスタンス、説明, 23
 - クラス、説明, 23
 - コンテンツ, 23
 - 説明, 469
 - ゼロからのクラスの追加, 459
 - 属性、説明, 23
 - 属性の追加, 457
 - ファイル、説明, 23
- RADNTFYD.log, 407
- radpinit モジュール, 443
- radsched, 355, 379
- RADSETUP インスタンス, 267
- RADSETUP オブジェクト, 268, 269, 454
- RADSETUP ディレクトリ, 271
- radskman, 443
 - COP パラメータ, 269, 351
 - オペレーション パラメータ, 347
 - コア パラメータ, 345
 - デフォルト ロケーション, 375
 - マシン/ユーザー パラメータ, 348
- radskman コマンド ライン, 344
- radstate, 444
 - command string, 276
- RADSTATE 属性, 276
- radstate プログラム, 276
- radtimeq, 379
- [Radtray Command Line Arguments], 273
- [RadTray Menu Command n], 286
- [RadTray Menu Text n], 286
- RADTRAY 属性, 273
- RADUICFG クラス, 253, 265, 282
 - 属性, 283
- RADWORKP オブジェクト, 454
- [RCS Role], 258
- RCSDATA 属性, 271
- resuri パラメータ, 351
- REBOOTD 属性, 279, 434

- REBOOTT 属性, 279, 434
 REBOOT 属性, 332
 [Reconfiguration Enabled], 334
 RECONFIG 属性, 334
 redirect タグ, 45
 redirect 引数, 45
 Registry Resources インスタンス、説明, 116
 REGISTRY インスタンス、説明, 116
 [Remote Drives], 279
 REMOVAL 属性, 334
 REMOVE 引数, 49, 68, 78, 94
 REMUNINS 属性, 274
 REPDONE 属性, 437
 REPFail 属性, 437
 REPNUM 属性, 437
 REPSKIP 属性, 437
 REQACTDT 属性, 326
 REQACTTM 属性, 326
 Required カラム, 285
 RESERVED スロットリング, 259, 273
 resolutionmanager 引数, 45, 58
 resolutionport 引数, 45, 58
 RETRYINT 属性, 438
 RETRYLIM 属性, 438
 ROLE 属性, 255, 256, 258, 438
 ROLLBACK 属性, 326
 RPA, 「Radia Publishing Adapter」を参照
 RSM UI Preferences クラス, 253
 RSTROPT 属性, 274
 RSTRSIZE 属性, 335
 rtimeout パラメータ, 348
 RTIMEOUT パラメータ, 455
 RUNDLG 属性, 332
 RUNSYNC 属性, 365
- S**
- Sample Dynamic Scan, 278
 [SAP Priority], 265, 266
 SAPPING 属性, 270
 SAPPRI 属性, 263, 265, 266
 SAPSTATS オブジェクト, 430, 438
 属性, 438
 SAP インスタンス
 基準の設定, 262
 優先度の設定, 263
 SAP クラス, 253, 255
 TYPE 属性, 256
 属性, 258
 SCANTYPE attribut, 434
 SCHEDOK 属性, 331
 [Scheduled Event] ボタン, 286
 Scheduling の変数, 362
 Screen Painter, 「Radia Screen Painter」を参照
 [Secondary SAP Priority], 270
 [Selection Priority], 260
 [Send Reporting Object], 275
 SENDRPT 属性, 275
 Server Access Profile クラス, 253, 255
 [Service Create Ordering], 330
 [Service Delete Method], 330
 [Service Initialization Method], 330
 [Service Installation Method], 330
 [Service Multicast Eligible], 335
 [Service Name/Description], 330
 [Service Repair Method], 331
 [Service Status on Client], 337
 [Service Update Method], 330
 [Service Verify Method], 331
 [Service Visible in Catalog], 334
 SETTINGS クラス, 253, 270
 属性, 270
 setup.exe, 33, 84
 ロケーション, 50
 SFP, 「システム ファイル保護」を参照
 [Show Advanced Options], 285
 [Show BW Control on Startup], 284
 [Show Catalog], 283
 [Show Expand/Collapse Button], 286
 [Show Grid Lines], 285
 [Show Menus], 283
 [Show/Hide Extended Info], 286

[Show/Hide Scheduled Event], 286
 SHWADVOP 属性, 285
 SHWCATLG 属性, 283
 SHWCOLEX 属性, 286
 SHWGRID 属性, 285
 SHWINFO 属性, 286
 SHWMENUS 属性, 283
 SHWSCHEV 属性, 286
 SIZE 属性, 337
 sname パラメータ, 345
 Software Manager, 「Radia Software Manager」を参照
 SOFTWARE.ZSERVICE の属性, 329
 SOFTWARE ドメイン, 24
 SOURCE 属性, 327
 [Specify RGB or actual Color], 284
 SPEED 属性, 438
 sslmanager 引数, 45
 sslport 引数, 45
 startdir パラメータ, 346
 startdir 引数, 46
 STARTDIR フォルダ, 44
 STARTIME 属性, 436
 [Startup param modifications], 283
 [Startup parameter filename], 283
 STATSTRT, 284
 [Status window on startup], 284
 STATUS 属性, 327, 439
 STDOLE2.TLB, 123
 STREAM 属性, 259, 439
 STRTCHNG 属性, 283
 STRTFILE 属性, 283
 STRUPMSG 属性, 283
 SUBNET01 属性, 279, 434
 Synchronized サービス, 337
 SYNOPSIS オブジェクト, 430, 436
 属性, 436
 System Explorer, 「Radia System Explorer」を参照
 SYSTEM ドメイン, 24, 267

T

TCMDTXT0 n 属性, 286
 threshold alert size
 above, 418
 below, 418
 Throttle [RESERVED/ADAPTIVE/NONE/], 273
 Throttle 属性, 259
 THROTYPE 属性, 259, 273, 439
 timeout action, 418
 TIMEOUT 属性, 259, 272, 439
 [Timer Parameter] ボックス, 369
 TIMERCON 属性, 327
 TIMER の変数, 7, 362
 TMNUTXT0 n 属性, 286
 [Trace level], 277
 [Type [RCS /DATA]], 258
 TYPE=DATA, 256
 TYPE=RCS, 256
 TYPE 属性, 255, 258, 439

U

[UI Class Connection], 265
 uid パラメータ, 346
 UIOPTION 属性, 46, 334, 412
 UI ダイアログ, 273
 ulogon パラメータ, 350
 Universal Resource Identifier, See URI
 [Un-Managed Behavior], 334
 update deferral, 418
 [Update Schedule Locally], 331
 UPDDDATE 属性, 331
 UPDDONE 属性, 436
 UPDFAIL 属性, 436
 UPDNUM 属性, 436
 UPDSKIP 属性, 436
 UPGDATE 属性, 338
 [Upgrade Date (Programmatic)], 331
 upgrdmaint, 275
 URI, 258
 具体例, 261

作成, 261
 URI 属性, 258, 439
 URL 属性, 331
 [Use Default SAP], 273
 [Use Last SAP], 271
 [Use Proxy Server], 285
 [Use WMI to collect data], 280
 USEDEFS 属性, 273
 USELSAP 属性, 271
 USEPROXY 属性, 47
 USEREXEC 属性, 437, 440
 userfreq パラメータ, 350
 USER クラス, 232

V

[Vendor Name], 331
 VENDOR 属性, 331
 VERCON0*n* 属性, 327
 VERDATE 属性, 337
 VERDONE 属性, 437
 VERFAIL, 437
 [Verified Date of Service], 337
 Verified サービス, 337
 VERIFY_INTERVAL, 396
 VERNUM 属性, 437
 [Version Description], 331
 VERSION 属性, 331
 VERSKIP, 437
 VGROUP インスタンス, 309, 322
 作成, 311

W

Wake-On-LAN、ドラッグ アンド ドロップ通知用の設定
 , 403
 [Warn if Startup file change], 283
 WBEM (Web-Based Enterprise Management)、定義、
 469
 WBEM ネームスペース, 443
 [WEB URL Name], 331
 Windows インストーラ, 32, 84
 インストール プログラム, 32

[Windows インストーラ メソッドを設定], 203
 Windows インストーラ AIP、作成, 95
 Windows インストーラ ログ, 50
 作成, 95
 WMISCAN 属性, 280
 WMI (Windows Management Instrumentation)、定義、
 469
 WMI インストール プログラム, 32
 WOL, 「Wake-On-LAN」を参照
 WTSSVR 属性, 279

X

XML タグ, 43

Z

ZAVIS 属性, 337
 ZCHNNAME 属性, 366
 ZCIPADDR 属性, 399
 ZCMDNAME パラメータ, 406
 ZCMDPRMS 属性, 394, 395
 ZCMDPRMS パラメータ, 406
 ZCMDTYPE パラメータ, 406
 ZCOMMAND, 392
 ZCONFIG オブジェクト, 262, 267, 402, 430, 433, 441
 属性, 433
 定義, 470
 ZCONFIG の属性, 279
 ZCONTEXT オプション, 296
 ZCONTEXT 属性, 148, 184, 213, 294, 297, 437, 440
 ZCREATE 属性, 153, 188, 218, 330, 366
 ZDELETE 属性, 153, 188, 218, 330, 366
 ZDISCONN 属性, 335
 ZDOMNAME 属性, 440
 ZDSTSOCK 属性, 46, 80
 ZERROR インスタンス, 151, 186, 220
 システム ファイル保護, 216
 ZFILEUPD 属性, 153, 188, 218
 ZGATEWAY 属性, 279, 434
 ZGRPINFO 属性, 271
 ZHDFPU01 属性, 279

- ZHDW00C 属性, 279
ZHDW00S 属性, 279
ZHDW00T 属性, 279
ZHDW00 属性, 279
ZHDW01C 属性, 279
ZHDWBIOS 属性, 279, 434
ZHDWCDDR 属性, 279, 434
ZHDWCOMP 属性, 279, 434
ZHDWCPUN 属性, 279, 434
ZHDWCPUS 属性, 279, 434
ZHDWCPU 属性, 279, 434
ZHDWCTYP 属性, 434
ZHDWD00C 属性, 279, 434
ZHDWD00F 属性, 279, 434
ZHDWD00S 属性, 279, 434
ZHDWD00T 属性, 434
ZHDWD00 属性, 279, 434
ZHDWD01C 属性, 434
ZHDWD01F 属性, 434
ZHDWD01S 属性, 434
ZHDWD01T 属性, 434
ZHDWD01 属性, 279, 434
ZHDWDF_A 属性, 279, 434
ZHDWDLST 属性, 279, 434
ZHDWDLST 属性, 279
ZHDWDNUM 属性, 279, 435
ZHDWFPU 属性, 279, 435
ZHDWIPAD 属性, 279, 435
ZHDWKYBD 属性, 279, 435
ZHDWLANA 属性, 279, 435
ZHDWLANG 属性, 279, 435
ZHDWMEMF 属性, 279, 435
ZHDWMEM 属性, 279, 435
ZHDWMOUS 属性, 279, 435
ZHDWNET1 属性, 279, 435
ZHDWNNET 属性, 279, 435
ZHDWOSCL 属性, 435
ZHDWOSDB 属性, 279, 435
ZHDWOSOG 属性, 279, 435
ZHDWOSOW 属性, 279, 435
ZHDWOS 属性, 279, 435
ZHDWPA00 属性, 279, 435
ZHDWPA01 属性, 279, 435
ZHDWPPAR 属性, 279, 435
ZHDWPPRN 属性, 279, 435
ZHDWPSE 属性, 279, 435
ZHDWSVCP 属性, 279, 435
ZHDWVIDO 属性, 279, 435
ZHDWVIE 属性, 280, 435
ZHDWVMSI 属性, 280, 435
ZHDWVRES 属性, 279, 436
ZHDWXPAG 属性, 279, 435
ZHWCPU01 属性, 279, 435
ZHWFPU01 属性, 435
ZINIT 属性, 153, 218, 330
ZINIT 変数, 188
ZIPADDR 属性, 46
ZMASTER.EDM, 51
ZMASTER オブジェクト, 51, 441
 定義, 470
ZMGRNAME 属性, 440
ZMODEM 属性, 436
ZNETLOC 属性, 267, 279
ZNOPING 属性, 363
ZNRSPNS, 259
ZNTFPORT 属性, 46
ZNTFYSEC 属性, 46
ZOBJPRI 属性, 365
ZOBJRRC 属性, 436
ZOBJRSTY 属性, 436
ZPAKSESS.EDM, 172
 サンプル, 129
ZPENDING 属性, 363
ZPRVNAME 属性, 366
ZREPAIR 属性, 331
ZRSCCMDL 属性, 363, 364, 370, 379
ZRSCMO 属性, 148, 184, 213
ZRSCPRI 属性, 148, 184, 213
ZRSCVRFY 属性, 147, 151, 183, 186, 216, 220
 設定, 211

ZRSTATES オブジェクト, 276
 ZRSTATE オブジェクト, 276
 zrtrymgr モジュール, 396
 ZSCHDEF 属性, 364, 366
 ZSCHFREQ 属性, 364, 366
 ZSCHMODE 属性, 365
 ZSCHTYPE 属性, 365
 ZSERVICE.REBOOT 属性, 305
 ZSERVICE クラス, 297
 属性, 337
 ZSERVICE 属性, 329
 ZSYSACCT, 301
 ZSTATUS オブジェクト, 441
 ZSTOP00n 属性, 258, 326, 329
 ZSTOPnnn 属性, 329
 ZSTOP 式, 258
 ZSTOP 属性, 365
 ZSUBNET 属性, 279
 ZSVCCAT 属性, 334
 ZSVCCSTA 属性, 337
 ZSVCMODE 属性, 297, 304, 336
 値, 297
 設定, 298
 ZSVCMO 属性, 330
 ZSVCNAME 属性, 330
 ZSVCOID 属性, 366
 ZSVCPRI 属性, 330
 ZSVCSTAT オブジェクト, 275, 441
 ZSVCTTYP 属性, 330
 ZSYSACCT 属性, 301, 335
 編集, 301
 ZTIMEO 属性, 47
 ZTIMEQ オブジェクト, 356, 363, 372, 375
 属性の編集, 379
 定義, 470
 配布の優先度, 365
 表示, 377
 ZTRACEL 属性, 47, 277
 ZTRACE 属性, 47, 277
 ZUPDATE 属性, 153, 188, 218, 330, 366

ZUSERID 属性, 47, 399, 436, 437, 440
 ZVERIFY 属性, 331, 366
 ZVRFYUID 属性, 47

あ

[アクティブ] オプション
 制御ファイル, 155
 ファイル, 145
 レジストリ キー, 162, 196
 [値を上書き]、制御ファイル, 155
 [deflate] (圧縮設定), 215
 [圧縮] (圧縮設定), 150
 [圧縮設定]
 [deflate], 186, 215
 [圧縮], 150
 インストール モニタ モード, 150
 グローバル デフォルト, 215
 コンポーネント選択モード, 186
 [なし], 150, 186, 215
 アプリケーション
 定義, 470
 配布, 342
 アプリケーション警告, 414
 アプリケーションの延期, 414
 アプリケーションの配布, 342
 [アプリケーションのメンテナンス] ウィンドウ
 削除
 Radia Administrator Workstation, 97
 Radia Client, 65
 修復
 Radia Administrator Workstation, 102
 Radia Client, 70
 変更
 Radia Administrator Workstation, 106
 Radia Client, 74
 [アプリケーションをインストールする準備ができました] ウィンドウ
 Radia Administrator Workstation, 92
 Radia Client, 62
 [アプリケーションを修復する準備ができました] ウィンドウ

Radia Administrator Workstation, 103
 Radia Client, 71
 [アプリケーションを変更する準備ができました] ウィンドウ
 Radia Administrator Workstation, 108
 Radia Client, 76
 アンインストール アプリケーション イベント, 306
 [アンインストール] ウィンドウ
 Radia Administrator Workstation, 98
 Radia Client, 66

い

[インスタンス更新メソッド]
 インストール モニタ モード, 153
 [グローバル デフォルト プロパティ], 218
 コンポーネント選択モード, 188
 [インスタンスの作成] ダイアログ ボックス, 234
 [インスタンスのプロパティ]
 [クライアントの動作]
 [インスタンス更新メソッド], 153, 188, 218
 [ファイル アービトレーション メソッド], 153, 188, 218
 [ファイル更新/追加メソッド], 153, 188, 218
 [リソース アンインストール メソッド], 153, 218
 リソースあんいんとーめそつど, 188
 [リソース インストール メソッド], 153, 188, 218
 [リソース初期化メソッド], 153, 188, 218
 [検証オプション]
 [検証しない], 147, 184, 212
 [検証する統計値], 147, 183, 211
 [コンテンツ (CRC チェック)], 147, 183, 211
 [最新でない場合にのみ更新する], 147, 183, 212
 [存在しない場合にのみ配布する], 147, 183, 212
 [内部バージョンをチェックする], 147, 183, 212
 [マネージャで指定されているデフォルトを使用する], 147, 183, 211
 [データ オプション]
 [圧縮設定], 150, 186, 215
 [deflate], 186, 215
 [圧縮], 150
 [なし], 150, 186, 215
 [データの無いインスタンスを転送させる], 150, 186, 215
 [リソースの転送設定], 150, 186, 215
 [システム ファイルを保護する], 151, 186, 216
 [普通], 150, 186, 215
 [メンテナンス], 150, 186
 [ロック メソッドを強制する], 186, 215
 [配信オプション]
 [上書きの優先度], 148, 184, 213
 [オプション], 148, 184, 213
 [デフォルト プロパティを使用する], 148, 184, 213
 [必須], 148, 184, 213
 [マシン], 148, 184, 213
 [ユーザー], 148, 184, 213
 [ユーザー指定], 148, 184, 213
 インスタンスのプロパティ
 データ オプション
 [リソースの転送設定]
 [ロック メソッドを強制する], 150
 [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックス, 145, 220
 インストール モニタ モード
 [クライアントの動作] タブ, 152
 [クライアント管理] タブ, 146
 [データ オプション] タブ, 149
 コンポーネント選択モード, 181
 [クライアントの動作] タブ, 187
 [クライアント管理] タブ, 182
 [データ オプション] タブ, 185
 [データベース情報] タブ, 189
 開く, 181
 [インスタンスの編集の確認] ダイアログ ボックス, 419
 インストール
 Radia Administrator Workstation
 インストール ウィザード, 86
 コマンド ライン, 94
 Radia Client
 インストール ウィザード, 52
 コマンド ライン, 48
 ログオン スクリプト, 51
 インストール モニタ モードによるソフトウェアのインストール, 139

索引

インストール アプリケーション イベント, 306
インストール ウィザード
インストール
 Radia Administrator Workstation, 86
 Radia Client, 52
削除
 Radia Administrator Workstation, 97
 Radia Client, 65
修復
 Radia Administrator Workstation, 101
 Radia Client, 69
変更
 Radia Administrator Workstation, 105
 Radia Client, 74
インストールが正常に完了したことを示すウィンドウ, 63
[インストール後] ウィンドウ, 141
インストール プログラム
 Radia Administrator Workstation, 84
 Radia Client, 32
[インストール] ボタン, 285, 286
[インストール前] ウィンドウ, 138
インストール モニタ モード
 [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックス
 [クライアントの動作] タブ, 152
 [クライアント管理] タブ, 146
 [データ オプション] タブ, 149
 [インストール後] ウィンドウ, 141
概要, 122
更新されたファイル, 154
[システムの設定] ウィンドウ, 130
[スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウ, 136
説明, 116
前提条件, 122
ソフトウェアのインストール, 139
[配布可能日時] ウィンドウ, 132
[パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ, 125
[パッケージ プロパティ] ウィンドウ, 127
[ファイルの転送] ウィンドウ, 163
[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウ, 145

 [デスクトップ] タブ, 157
 [ファイル] タブ, 144
 [レジストリ] タブ, 160
要約ウィンドウ, 143
インターネット プロキシの検出, 422
インフラストラクチャ、自己管理, 20

う

[上書きの優先度] (ファイルの配信オプション)
インストール モニタ モード, 148
グローバル デフォルト, 213
コンポーネント選択モード, 184

え

永続オブジェクト, 272
エクスポートの範囲、[選択された部分], 166
延期, 413
 アプリケーション, 414
延期アクション, 417

お

オーディエンス リスト, 382
 作成, 385
 定義, 470
[オーディエンス リストの詳細], 385
オブジェクト
 プロパティ設定の上書き, 80
オブジェクト指向テクノロジー, 20
オプション サービス、定義, 471
[オプション] (ファイルの配信オプション)
 インストール モニタ モード, 148
 グローバル デフォルト, 213
 コンポーネント選択モード, 184
[オペレーティング システム] ボックス, 131

か

解決、定義, 429, 471
拡張マシン/ユーザー サービス, 298
カスタマー サポート, 4
カタログ処理、ローカル, 304

[完全な検証] (デスクトップ アイテムのオプション)

インストール モニタ モード, 158

コンポーネント選択モード, 192

管理アプリケーション, 27

管理インストール ポイント, 「AIP」を参照

管理制御ポイント, 「AIP」を参照

き

機能状態引数

Radia Administrator Workstation, 94

Radia Client, 49, 78

機能セットのインストール オプション

Radia Administrator Workstation, 91

Radia Client, 59

機能の設定

Radia Administrator Workstation, 91

Radia Client のインストール, 59

[機能の選択] ウィンドウ

Radia Administrator Workstation, 90, 107

Radia Client, 75

Radia Client, 58

[キャンセル] ボタン, 286

く

[クライアントの動作]

[インスタンス更新メソッド], 153, 188, 218

[ファイル アービトレーション メソッド], 153, 188, 218

[ファイル更新/追加メソッド], 153, 188, 218

[リソース アンインストール メソッド], 153, 188, 218

[リソース インストール メソッド], 153, 188, 218

[リソース初期化メソッド], 153, 188, 218

[クライアントの動作] タブ

インストール モニタ モード, 152

[グローバル デフォルト プロパティ], 217

コンポーネント選択モード, 187

クライアント, 「Radia 管理アプリケーション」を参照

クライアント オブジェクト, 定義, 471

クライアント オペレーション プロファイル, 252, 255

有効化, 268

[クライアント管理] タブ

インストール モニタ モード, 146

[グローバル デフォルト プロパティ], 210

[検証オプション], 147, 183, 211

コンポーネント選択モード, 182, 184

[配信オプション], 148, 184, 213

クライアント, 定義, 471

クライアント オペレーション プロファイル

有効化, 267

[クライアント メソッドのコマンド ライン], 188

クライアント ログ, 443

クラス

説明, 23

ゼロから追加する方法, 459

追加, 458

定義, 471

クラス接続変数, 定義, 472, 476

クラス テンプレート, 属性の追加, 462

クラスの追加, 458

クリーンなコンピュータ, 定義, 84, 472

クリーンなマシン, 定義, 472

グループ

サービスへの接続, 242

作成, 232

グローバル デフォルト, 変更, 209

[グローバル デフォルト プロパティ]

[クライアントの動作] タブ, 217

[クライアント管理] タブ, 210

[検証オプション], 211

ダイアログ ボックス, 209

[データ オプション] タブ, 214

[配信オプション], 213

け

警告メッセージ, 413

[検証オプション]

[完全な検証], 158

[検証しない], 147, 158, 184, 212

[検証する統計値], 147, 183, 211

[コンテンツ (CRC チェック)], 147, 183, 211

[最新でない場合にのみ更新する], 147, 183, 212

- [存在しない場合にのみ配布する], 147, 183, 212
- [存在する], 158
- [内部バージョンをチェックする], 147, 183, 212
- [マネージャで指定されているデフォルトを使用する], 147, 183, 211
- [検証しない] (デスクトップ アイテムのオプション)
 - インストール モニタ モード, 158
 - コンポーネント選択モード, 192
- [検証しない] (ファイルの検証オプション)
 - インストール モニタ モード, 147
 - グローバル デフォルト, 212
 - コンポーネント選択モード, 184
- [検証する統計値]
 - インストール モニタ モード, 147
 - グローバル デフォルト, 211
 - コンポーネント選択モード, 183
- [検証] ボタン, 286
- [検証] メニュー コマンド
 - インストール モニタ モード, 158
 - コンポーネント選択モード, 192

こ

- コア設定クラス, 270
- 更新アプリケーション イベント, 306
- 更新されたファイル、インストール モニタ モード, 154
- コマンド ライン
 - インストール
 - Radia Administrator Workstation, 94
 - Radia Client, 48
 - サイレント インストール, 52
 - 削除
 - Radia Administrator Workstation, 100
 - Radia Client, 68
 - 修復
 - Radia Administrator Workstation, 105
 - Radia Client, 73
 - 変更
 - Radia Administrator Workstation のインストール, 110
 - Radia Client のインストール, 78
- コマンド ライン引数

- Radia Administrator Workstation のインストール, 95
- Radia Client のインストール, 50
- コンソールの情報パネル, 411
- コンソールのステータス メッセージ領域, 411
- コンソールのステータス領域, 411
- コンソールのバンド幅設定, 412
- コンソールのボタン バー, 411
- コンテキストの設定, 293
- [コンテンツ (CRC チェック)]
 - インストール モニタ モード, 147
 - グローバル デフォルト, 211
 - コンポーネント選択モード, 183
- コンポーネント クラス、定義, 472
- コンポーネント選択モード
 - [インスタンスのプロパティ] ダイアログ ボックス, 181
 - [クライアントの動作] タブ, 187
 - [クライアント管理] タブ, 182
 - [データ オプション] タブ, 185
 - [データベース情報] タブ, 189
- 概要, 165
- [システムの設定] ウィンドウ, 173
- 説明, 116
- 前提条件, 166
- [配布可能日時] ウィンドウ, 175
- [パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ, 168
- [パッケージ プロパティ] ウィンドウ, 170
- [パブリッシュするファイルを選択してください] ウィンドウ, 177
- パブリッシュの手順, 166
- [ファイルの転送] ウィンドウ, 197
- [プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウ, 181
- [デスクトップ] タブ, 191
- [ファイル] タブ, 179, 181
- [レジストリ] タブ, 194

さ

- サーバー アクセス プロファイル, 257, 270
- サービス
 - グループへの接続, 242

- 最適化, 219
 - 作成, 199
 - パーミッション, 301
 - 配布, 300
 - サービス解決ロール, 255
 - サービス グループ, 219, 300
 - サービスの最適化, 219
 - [サービス名を入力し、ターゲット OS を選択してください] ダイアログ ボックス, 203
 - 差異計算, 219
 - 再試行のステータス, 400
 - 最初にカタログをリフレッシュ, 269
 - [最新でない場合にのみ更新する]
 - インストール モニタ モード, 147
 - グローバル デフォルト, 212
 - コンポーネント選択モード, 183
 - [再設定] ボタン, 286
 - サイレント インストール, 50, 95
 - コマンド ライン, 52
 - 削除
 - Radia Administrator Workstation
 - インストール ウィザード, 97
 - コマンド ライン, 100
 - Radia Client
 - インストール ウィザード, 65
 - コマンド ライン, 68
 - [削除] オプション, 39, 65, 97
 - [削除] ボタン, 286
 - サブスクライバ
 - 通知, 380
 - 定義, 472
- ## し
- 式変数、定義, 472
 - 自己管理インフラストラクチャ, 20
 - [システムの設定] ウィンドウ
 - インストール モニタ モード
 - [ターゲット オペレーティング システム], 131
 - [システムの設定] ウィンドウ
 - インストール モニタ モード, 130
 - [必要な最低プロセッサ速度], 131
 - [必要な最小メモリ サイズ], 131
 - コンポーネント選択モード, 173
 - [ターゲット オペレーティング システム], 174
 - [必要な最低プロセッサ速度], 174
 - [必要な最小メモリ サイズ], 174
 - システム トレイのアイドル状態, 410
 - システム トレイのアクティブ状態, 410
 - システム トレイのコンソール ビュー, 411
 - 情報パネル, 411
 - ステータス メッセージ領域, 411
 - ステータス領域, 411
 - バンド幅設定, 412
 - ボタン バー, 411
 - システム ファイル保護, 220
 - ZERROR インスタンス, 216
 - インストール モニタ モード, 151
 - グローバル デフォルト, 216
 - コンポーネント選択モード, 186
 - 転送時の強制保護, 151
 - システム ファイル保護
 - 定義, 472
 - [システム ファイルを保護する], 220
 - インストール モニタ モード, 151
 - グローバル デフォルト, 216
 - コンポーネント選択モード, 186
 - ファイルのバブリッシュ時, 151, 186
 - システム要件
 - Radia Administrator Workstation, 84
 - Radia Client のインストール, 32
 - [自動順序付け] チェック ボックス, 464
 - [ジャスト イン タイム], 158, 192
 - 修復
 - Radia Administrator Workstation
 - インストール ウィザード, 101
 - コマンド ライン, 105
 - Radia Client
 - インストール ウィザード, 69
 - コマンド ライン, 73
 - 修復アプリケーション イベント, 306

索引

[修復] オプション, 70, 102

[修復] ボタン, 286

冗長パラメータ, 444

ジョブ

定義, 342

シン クライアント, 454

新規アプリケーション ウィザード, 203

サービスの作成, 200

進行状況バー、表示, 95

シンボリック置換、定義, 473

シンボル、定義, 473

す

スキャン

スキャン対象の特定, 134

ファイル システム, 136

ファイルの削除, 135

ファイルの追加, 135

[スキャンするディレクトリ] ボックス, 137

[スキャンするドライブを設定してください] ウィンドウ,
136

[スキャンするファイル コンテンツ] ボックスの一覧, 135

[スキャン対象] ウィンドウ, 134, 136

スクリプト

プレインストール, 79

ポストインストール, 80

スケジューラ, 343

スケジュール 配布, 357

すべてのロール, 255

せ

制御ファイル、編集, 155

セッション、定義, 473

[セッション タイプ]

インストール モニタ モード, 126

コンポーネント選択モード, 169

接続可能クラスの表示ダイアログ ボックス, 373

[接続属性の選択] ダイアログ ボックス, 240, 247

設定 クラス、定義, 474

[選択された部分]、エクスポートの範囲, 166

[選択したファイル]、表示, 179

[選択したリンク], 157

表示, 191

[選択したレジストリ キー], 160, 194

そ

属性

クラス テンプレートへの追加, 462

定義, 23, 474

データベースへの追加, 457

ソフトウェア、配布, 342

ソフト リポート, 306

[存在しない場合にのみ配布する]

インストール モニタ モード, 147

グローバル デフォルト, 212

コンポーネント選択モード, 183

[存在する] (デスクトップ アイテムのオプション)

インストール モニタ モード, 158

コンポーネント選択モード, 192

[存在/存在] オプション, 162, 196

た

[ターゲット オペレーティング システム]

インストール モニタ モード, 131

[ターゲット オペレーティング システム]

コンポーネント選択モード, 174

新規アプリケーション ウィザード, 203

ターゲット ディレクトリ, 85, 95

ダイナミック スキャン インスタンス, 280

ダイナミック ホスト設定 プロトコル, 123

[タイプ] メニュー コマンド

インストール モニタ モード, 159

コンポーネント選択モード, 193

タイマー

テスト, 379

タイマー

期限, 369

作成, 358

ショートカット メニュー, 359

設定, 368

セルフ メンテナンス, 372
 トラブルシューティング, 375
 配布のテスト, 375
 ログ, 379
 ロケーション, 379
 タイマー、定義, 474
 [ダウンロード] ボタン, 286

ち

チェックポイントの再開, 274

つ

通知, 343, 380
 オーディエンス リスト、作成, 385
 開始, 382
 再試行コマンド ライン, 396
 再試行のステータス, 400
 説明, 380
 定義, 474
 要件, 381
 [通知タイプ], 386
 [通知の詳細] ダイアログ ボックス, 388, 399
 [通知の要約] ダイアログ ボックス, 389

て

[停止] ボタン, 286
 [データ オプション]
 [圧縮設定], 150, 186, 215
 [データの無いインスタンスを転送させる], 150, 186, 215
 [リソースの転送設定], 150, 186, 215
 [システム ファイルを保護する], 151, 186, 216
 [普通], 150, 186, 215
 [メンテナンス], 150, 186
 [ロック メソッドを強制する], 186, 215
 データ オプション
 [リソースの転送設定]
 [ロック メソッドを強制する], 150
 [データ オプション] タブ, 220
 インストール モニタ モード, 149

 [グローバル デフォルト プロパティ], 214
 コンポーネント選択モード, 185
 データ ダウンロード ロール, 255, 256
 [データの無いインスタンスを転送させる]
 インストール モニタ モード, 150
 グローバル デフォルト, 215
 [コンポーネント選択モード], 186
 データベース、「Radia データベース」を参照
 [データベース情報] タブ, 189
 テクニカル サポート, 4
 デジタル資産、パブリッシュ, 117
 [デスクトップ] タブ
 インストール モニタ モード, 157
 コンポーネント選択モード, 191
 デフォルト プロパティ、設定, 209
 [デフォルト プロパティを使用する] (ファイルの配信オプション)
 インストール モニタ モード, 148
 コンポーネント選択モード, 184
 [デフォルト プロパティを使用する] (ファイルの配信オプション)
 グローバル デフォルト, 213
 転送
 説明, 116
 定義, 473
 転送時に作成されるインスタンス, 116
 [転送させるファイル], 197

と

ドメイン、定義, 23, 474
 ドラッグ アンド ドロップ通知, 380
 Wake-On-LAN, 402
 作成, 392

な

[内部バージョンをチェックする]
 インストール モニタ モード, 147
 グローバル デフォルト, 212
 コンポーネント選択モード, 183
 [なし] (圧縮設定), 150, 186, 215

は

[バージョン エディタ] ダイアログ ボックス, 315

バージョン インスタンス

削除, 317

作成, 314

バージョン グループへの割り当て, 318

バージョン化されたアプリケーション、準備, 311

バージョン化モデル, 310

バージョン グループ, 309

サービスへの接続, 322

作成, 311

定義, 475

配布の準備, 319

編集, 324

バージョン グループ エディタ, 311

[バージョン グループを編集しています] ダイアログ ボックス, 313, 321

バージョンのアクティブ化アプリケーション イベント, 306

ハードウェア スキャン オプション, 277

ハード リポート, 306

[配信オプション]

[上書きの優先度], 148, 184, 213

[オプション], 148, 184, 213

[デフォルト プロパティを使用する], 148, 184, 213

[必須], 148, 184, 213

[マシン], 148, 159, 184, 213

[ユーザー], 148, 159, 184, 213

[ユーザー指定], 148, 184, 213

バイト レベルの差異計算, 219

定義, 475

パッチ生成, 219

配布

テスト, 343

[配布可能日時] ウィンドウ

インストール モニタ モード

[開始日時] チェック ボックス, 133

[終了日時] チェック ボックス, 133

コンポーネント選択モード, 175

[開始日時] チェック ボックス, 176

[終了日時] チェック ボックス, 176

[配布可能日時] ウィンドウ

インストール モニタ モード, 132

配布先、定義, 21

配布戦略、スケジュール, 357

配布の方法

バージョン化モデル, 310

配布方法

スケジューラ, 343, 355

通知, 343, 380

配布モデル

コンポーネント, 22

定義, 21

配布元、定義, 21

パッケージ

定義, 22, 475

転送, 165, 198

[パッケージ セッションを開きます] ウィンドウ

コンポーネント選択モード, 168

パッケージ、定義, 116

[パッケージ オプションを設定してください] ウィンドウ, 134

[パッケージ セッションを開く] ウィンドウ

インストール モニタ モード, 125

パッケージの転送, 165, 473

[パッケージ プロパティ] ウィンドウ

インストール モニタ モード, 127

コンポーネント選択モード, 170

[説明]

インストール モニタ モード, 128

コンポーネント選択モード, 171

[ドメイン]

インストール モニタ モード, 128

コンポーネント選択モード, 171

[パッケージ名]

インストール モニタ モード, 128

コンポーネント選択モード, 171

[リリース]

インストール モニタ モード, 128

コンポーネント選択モード, 171

バッチ、説明, 219

パブリッシュ

インストール モニタ モード

概要, 122

説明, 116

コンポーネント選択モード

概要, 165

説明, 116

定義, 116

パブリッシュ、定義, 475

[パブリッシュするファイルを選択してください] ウィンドウ

コンポーネント選択モード, 177

バンド幅スロットリング, 273, 412

ひ

[非アクティブ] オプション

制御ファイル, 155

ファイル, 145

レジストリ キー, 162, 196

日付と時刻の制約, 132

必須アプリケーション, 427

必須サービス、定義, 472, 475

[必須] (ファイルの配信オプション)

コンポーネント選択モード, 184

[必須] (ファイルの配信オプション)

インストール モニタ モード, 148

グローバル デフォルト, 213

[必要ディスク容量], 60, 91

[必要な最低プロセッサ速度]

インストール モニタ モード, 131

コンポーネント選択モード, 174

[必要な最小メモリ サイズ]

インストール モニタ モード, 131

コンポーネント選択モード, 174

[開く対象]

[新しいセッション], 126, 169

インストール モニタ モード, 126

コンポーネント選択モード, 169

[セッション ID], 126, 169

[セッションを終了しています], 126, 169

[説明], 126, 169

ふ

ファイル

定義, 23, 475

デフォルト プロパティの設定, 209

プロパティの編集, 145

[ファイル アービトレーション メソッド]

インストール モニタ モード, 153

[グローバル デフォルト プロパティ], 218

コンポーネント選択モード, 188

[ファイル更新/追加メソッド]

インストール モニタ モード, 153

[グローバル デフォルト プロパティ], 218

コンポーネント選択モード, 188

[ファイル] タブ

インストール モニタ モード, 145

インストール モニタ モード, 144

コンポーネント選択モード, 179, 181

[ファイルのコンテンツを比較する] チェック ボックス, 135

[ファイルの転送] ウィンドウ

インストール モニタ モード, 163

コンポーネント選択モード, 197

ファイルのフィルタ, 180

フィルタ、削除, 180

複数のリポート イベント, 308

[普通] (データ オプション)

インストール モニタ モード, 150

グローバル デフォルト, 215

コンポーネント選択モード, 186

ブレインストール スクリプト, 34, 42, 79

ブレインストール スクリプトのサンプル, 79

[プロパティ] オプション、レジストリ キー, 162

[プロパティとロケーションを設定してください] ウィンドウ

インストール モニタ モード

[デスクトップ] タブ, 157

[ファイル] タブ, 144, 145

索引

[レジストリ] タブ, 160
コンポーネント選択モード, 181
[デスクトップ] タブ, 191
[ファイル] タブ, 179, 181
[レジストリ] タブ, 194
[プロパティを設定]
コンポーネント選択モード, 181
[プロパティを設定] オプション
インストール モニタ モード, 145



ベース インスタンス
定義, 470, 475
変更
Radia Administrator Workstation のインストール
インストール ウィザード, 105
コマンド ライン, 110
Radia Client のインストール
インストール ウィザード, 74
コマンド ライン, 78
[変更] オプション, 74, 106

ほ

ポストインストール スクリプト, 34, 42, 80
サンプル, 81
[保存先フォルダ] ウィンドウ, 55, 88
ポリシー、定義, 476

ま

マシン コンテキストとユーザー コンテキスト, 292
マシン設定, 296
[マシン] (配信オプション)
デスクトップ アイテム
インストール モニタ モード, 159
コンポーネント選択モード, 193
ファイル
インストール モニタ モード, 148
グローバル デフォルト, 213
コンポーネント選択モード, 184
マネージャ, 「Radia Configuration Server」を参照

[マネージャで指定されているデフォルトを使用する]
インストール モニタ モード, 147, 183
グローバル デフォルト, 211
こんぽーねんとせんたくもーど, 183

む

[無条件/強制] オプション, 162, 196
[無条件/存在] オプション, 162, 196

め

命名規則, 447
POLICY ドメイン, 450
USER クラス, 450
WORKGRP クラス, 450
SOFTWARE ドメイン, 451
Auditing クラス, 451
Delivery クラス, 451
PACKAGE クラス, 451
メソッド、定義, 476
メソッド変数、定義, 476
メディア アクセス制御, 402
メンテナンス担当者のいないコンピュータ
定義, 476
[メンテナンス] (データ オプション)
インストール モニタ モード, 150
グローバル デフォルト, 215
コンポーネント選択モード, 186
メンテナンス ファイル
転送, 150, 186

も

[元に戻す] ボタン, 286

ゆ

ユーザー
グループへの割り当て, 236
作成, 232
ユーザー指定の設定, 296
[ユーザー指定] (ファイルの配信オプション)
インストール モニタ モード, 148

グローバル デフォルト, 213
 コンポーネント選択モード, 184
 ユーザー設定, 296
 [ユーザーの設定] ウィンドウ, 44, 56
 [ユーザー] (配信オプション)
 デスクトップ アイテム
 インストール モニタ モード, 159
 コンポーネント選択モード, 193
 ファイル
 インストール モニタ モード, 148
 グローバル デフォルト, 213
 コンポーネント選択モード, 184
 優先度の高いステータス ポップアップ, 413

よ

要求ステート、定義, 477

り

リソース、定義, 477
 [リソース アンインストール メソッド]
 インストール モニタ モード, 153
 [グローバル デフォルト プロパティ], 218
 りそーすあんいんすとーるめそつど
 [コンポーネント選択モード], 188
 [リソース インストール メソッド]
 インストール モニタ モード, 153
 [グローバル デフォルト プロパティ], 218
 コンポーネント選択モード, 188
 [リソース初期化メソッド]
 インストール モニタ モード, 153
 [グローバル デフォルト プロパティ], 218
 コンポーネント選択モード, 188
 [リソースの転送設定]
 インストール モニタ モード, 150
 グローバル デフォルト, 215
 コンポーネント選択モード, 186
 [システム ファイルを保護する], 151, 186, 216
 [普通], 150, 186, 215
 [メンテナンス], 150, 186

[ロック メソッドを強制する], 150, 186, 215
 リポート
 イベント, 305, 306
 修飾子, 305, 307
 タイプ, 305, 306
 複数のイベント, 308
 リポート修飾子, 308
 リポートなし, 306
 利用中のコンピュータ、定義, 477

れ

レジストリ
 値の復元, 161, 195
 値の編集, 161, 195
 表示, 160, 194
 プロパティの設定, 162, 196
 レジストリ エントリ、エクスポート, 166
 [レジストリ] タブ
 インストール モニタ モード, 160
 コンポーネント選択モード, 194
 [レジストリ] チェック ボックス, 135
 レポートインテグレーション, 255

ろ

ローカル AIP、有効化, 420
 ローカルのカタログ処理, 304
 ログ、タイマー, 379
 ログオン スクリプト
 Radia Client のインストール, 51
 サンプル コード, 51
 ロケーション インスタンス, 262
 ロック ファイル アプリケーション イベント, 306
 ロック ファイル メソッド, 150, 186
 [ロック メソッドを強制する]
 インストール モニタ モード, 150
 グローバル デフォルト, 215
 [コンポーネント選択モード], 186
 コンポーネント選択モード, 186

